ハヤテのごとく！ ～another combat butler～

バロックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハヤテのごとく！　～ａｎｏｔｈｅｒ　ｃｏｍｂａｔ　ｂｕｔｌｅｒ～

【Ｎコード】
Ｎ９２５５Ｋ

【作者名】
バロックス

【あらすじ】
少年執事とお嬢様は一人の男と出会う
これは彼が中心になったりならなかったり……
そんなアバウトな物語

ぷろろーぐ（前書き）

勢いで書きます。　初投稿なので駄文になってます　スイマセン

原作の崩壊が起きるかもしれないので嫌な方は即バックでお願いします

ぷろろーぐ

皆さん、知っているだろうか　東京練馬区に存在するお金持ちの屋敷を……

知っているだろうか、ひょんなことからその屋敷のお嬢様に仕えることになった
少年執事のことを……

お嬢様と執事はちょっぴり天然さんでちょっぴり勘違いしていて

それでも深い絆で結ばれているのです。

そしてそんな彼らの前に執事と呼べるか分からない、異常で奇っ怪な執事が一人……

彼の名前は……

まだない。あるにはあるがここで教えることはできない

彼について知りたいのなら、この物語を読んであなたが目撃するのだ

第1話　～タイトルはない。ってコレがタイトルだ～（前書き）

とりあえず本編に……書いてみてやっぱり難しい。

色々努力してみますが……

第1話　～タイトルはない。ってコレがタイトルだ～

1月8日

まだ年始の慌ただしさと冬の寒さが漂う東京の街の中。

その道を歩く二人の男女。

「なぜ私が買い物をしなくてはならんのだ」

そう文句を呟くのは金髪のツインテールが目立つ小柄な少女。

「えっと、一応ですけど僕の買い出しに一緒について行くと言ったのはお嬢様だった気がするんですが……」

水色の短髪の少年が買い物袋を片手に苦笑いを浮かべる。

彼の名は綾崎ハヤテ。　昨年のクリスマス、親から渡された一億五千万の借金に進退極まった彼は営利誘拐を思いつく。

そして誘拐しようとして声をかけたのが三千院ナギだった。　その時に掛けた言葉は

「君が欲しいんだ！！」

（人質として）

これがいけなかった

コレを聞いた年若いナギお嬢様は……

「わ、分かったよ……その代わり、浮気はダメだからな！！」
愛の告白として受け取ってしまったのである。
その後ナギが別の誘拐犯に誘拐されてしまい、それをハヤテが救出。
そのお礼として彼は三千院家の執事として雇われることに
「お前、私の執事をやらないか？」
そして様々な困難に巻き込まれながらもそれを乗り越えたナギはハヤテに絶大な信頼を寄せている。
そして現在に戻る
「だいたい、こんな距離を歩くなんてめんどいこと限りないし、疲れるだけではないか」
ダルそうに話すナギは仕方なく歩いているように見える。
（しかし、マリアさんもなぜお嬢様と一緒に買い物に行かせるなんて）
心の中でハヤテは呟く。　元々マリアが言い出したことだった。
今日の朝、三千院家屋敷。
「買い物ですか？」

ハヤテがそう聞く相手はメイド服を着た女性。

「はい。今日の夕飯の買い出しです」

彼女の名前は三千院家に仕えるメイドのマリア。

「できれば、ナギも連れて行ってくれませんか？」

持っている箒で楽しげに掃き、ハヤテに話す。

「いいですけど、でも来てくれますかね？　」

ハヤテはうーんと唸る。ナギはお嬢様で昔の不登校、現代で言う引きこもりの気があるのだ。しかし当人に話すと……

「もちろん行くぞハヤテ！」

とナギは目を輝かさせて承諾した。

（これでハヤテ君とナギの仲が近づいてくれれば……）

と思うマリア。　これは決して遊んでいるのではなくナギがハヤテに好意を寄せているからだ。

しかしハヤテはナギを命の恩人としか考えておらず、恋愛対象には入っていない。

だからこそ二人の間には大きな爆弾がある。　その爆弾処理をマリアは行っているわけだが

（もしナギとハヤテ君が付き合えば……）
これで解消出来るものなら簡単だがそれは同時にロリコン（幼女性愛者）への目覚めの可能性があるのだ。
（そうならないことを願いますが……）

時間は戻り、そんな思惑があるとは知らないハヤテは
「ではお嬢様、今から必要なものを買うのでちょっと待ってて下さい」
マリアの思惑通りとはいかずナギを置いていく始末。
（むぅ……ハヤテめ、せっかく二人だけの買い物だというのに）
すぐ近くにある店の中でハヤテが品物を選ぶのを見ながらふてくされた感じに思うナギ。
とそして……
「なにかないだろうか……」

楽しいことはないだろうかとナギはフラフラと歩き出してしまった。

「お嬢様、終わりましたよ。　帰りますかー」

ハヤテが戻ってきて時にはナギの姿はもうなかった。

「お、お嬢様ー！」

東京の空にハヤテの声が響く。　こうしてナギはハヤテとはぐれてしまったのである。

ーそして同時刻。

「出ていけやこのボケェェェ！！

どこかのラーメン屋から男の怒鳴り声も響き渡っていた。

第1話　～タイトルはない。ってコレがタイトルだ～（後書き）

どうでした？　とりあえず主要キャラを出してみましたが、なかなか上手くキャラを引き出していない気がします。
でも最初で最後のこの小説。
続けていきたいです。

次回ようやくオリキャラ登場です。

第２話　～所持金５００円。ポジティブに考えれば自分はエコしてる～（前書き

ようやく二回目です。　意外と短いですが許して下さい。　今回はハヤテやナギは出ずに、オリキャラの登場です。

第2話　～所持金５００円。ポジティブに考えれば自分はエコしてる～

皆さん知っているだろうか、世の中には想像を越えたお金持ちが存在することを。

知っているだろうか、ひょんなことから出会うことになった不幸な少年とお金持ちのお嬢様の話を……

しかし、その二人は今回は出ない。これまでにないもう一人の少年と出会うまで……

ここは東京練馬区のどこかにある街。
年始の忙しさ目立つ今日この頃

「出てけやこのボケェェェ！！」

東京の寒空に男の怒号が響き渡る。　それと同時にラーメン屋から一人の少年が吹き飛ぶ形で放り出された。

「痛ェーなコノクソジジィィ！！　いきなり出てけったぁどういう事だ！」

中から放り出された黒髪、短髪の少年は体を起こして声を上げる。

「どういう事もそういう事もねぇんだよ！！　ラーメンの修行に失敗した奴はつまみ出すって約束しただろーが！！！！」

店から出てきたのは白髪の老人だ。　そのラーメン屋の店長と思われる人物は眉間にシワを寄せ、額に青筋をうかべている。

「〝1ヶ月で俺が認めたら雇ってやる〟ってのが約束だろーが！　まだ一週間すら経ってねーよ！！」

少年は今にも飛びかかってきそうな勢いで老人に近づくが、老人は怯まず返す。

「そうとも、だがテメーの作ったラーメンは……何だコレはよォォォ！！　黒いぞコレ！？ソバじゃねーんだぞ！？　客から苦情と救急車の電話でイッパイだァァァ！！」

その少年の目の前に彼が作ったラーメンを差し出す。　ラーメンの麺は黒く、スープは何故か紫色だった。

しかし少年は冷静に

「オイ、ジジィ違ェーよ。　それはアートだ。　俺の伝説的な技術故の色合いだぞ」

「口で言ってる割に鼻つまんでんじゃねーぞガキ。　だから4日で辞めさせてやるんだよ」

店長は服のポケットから何かを出すと少年の目の前に落とす。
チャリーンと寂しい音が響く。
「ナニ…コレ？」
少年は目を細めて落ちた何かを見つめる。
「何も一人で記憶喪失のお前を無一文で追い出すわけにはいかねぇ。
４日間の給料だ。　分かるな？　俺の慈悲よ」
店長は煙草に火をつけてくわえる。
少年は拳プルプル震わせて叫んだ。
「五百円じゃねェェェかァァ！！　記憶喪失で住む所も名前もねぇ奴に五百円でどう暮らしてけってんダァァァ！！」
その怒号にすかさず店長も反応する。
「知るかボケェェェ！！　こっちは慈善事業じゃねーんだよ！！
これ以上ここに居座んなら営業妨害で警察につまみ出すぞクソガキィィィ！！」
「チクショオォォォ！！　覚えてろジジィ！　もし俺が死んだら三途の川にやってきたアンタを沈めてやるからなァァァ！！」
少年は希望のないお金を握ると猛ダッシュでその場を離れていっ

た……

事実、ここに記憶喪失で名無しの少年の無職生活が始まったのであった。

第２話　～所持金５００円。ポジティブに考えれば自分はエコしてる～（後書き）

駄文だったと思いますが許して下さい。　一応設定で彼は記憶喪失で名前がわからないので途中まで少年扱いされます。

次回はそんな彼のラーメン屋に入ってから追い出されるまでの経緯をおおざっぱに明かします。

第3話　～変な名前は気にしたら負け～（前書き）

なかなかキャラとの会話が難しい……

今回も名前は出てきませんが見てくると嬉しいです。

第3話　～変な名前は気にしたら負け～

―我が輩は少年である。　名前はまだ無い。

前回の話から彼は記憶喪失である。　自分の名前は勿論のこと、両親、ラーメン屋で雇われるまでの記憶も覚えていない。

ことの始まりは九十九里浜を散歩していたラーメン屋の店主が浜に打ち上げられている少年を保護したことから始まり……まぁそんな事はあとからやっても言いが少し省いて……

一週間の生活の後、ラーメン修行の話を聞かされ、成功すれば寝床を確保できたのだが……

彼の料理は常人よりも一線を越えており、それ故に1ヶ月の予定が4日という事になったのだ。

彼は今、絶望的な状況にある。

「あ゛ー、５００円じゃ一日持たねえぞ」

店を出たのが昼過ぎだったが今はもう空は紅色に染まりつつある。

「あのジジィめ、これでどう生きてきゃあいいんだ。　今時５００円なんて１０００円より儚ェーよ。俺あんま使わないもん。絶対１０００円より溜め込むクチだから」

手のひらの５００を見つめながら歩く。

「５００円あれば１０円ガム５０個買えるって意味ねぇか……ん？」

ふと軽快な音楽が聞こえる方に顔を向ける。

その時だ。彼の闘争心をたぎらせるものが見えたのは

少年が見たのは電化製品店に売られている大きなテレビだった。

が、気になったのテレビの内容である

～夕方の東京ニュース～

「今日午前未明○○区で誘拐事件が発生しました。　誘拐事件の現場に聞いてみましょう。結野アナ、結野アナ」

「はい、犯人は黒いリムジンの二人組、未遂事件となりましたが未だ逃走中とのことです」

それ以上の内容を少年は聞くまでもなかった。　「誘拐」と二文字が聞ければ後はどうでも良かった。

―誘拐。オイ、誘拐。二文字の裏にあるこの魅力はなんだ？　一獲千金とか出来ちまうのかコレ？　　億とか貰えたらハーゲンダッツいくつ買えんだコレ？

少年は理解した。　これをやり切ればまさにキャッチザドリーム。
ドリームザキャッチ。

しかし心のサイレンに少年は思いとどまる

―誘拐は犯罪です。

そうだよオイ、捕まったら最後、出所しても前科持ちの人間を雇ってくれるだろうか……

―誘拐は犯罪です。

仮にも俺、メインだぞ？　メインはこんなことしていいのか？

―誘拐は犯罪です。

なんか変な声がするな……

―誘拐は犯罪です。

つーかそろそろ止めない？　イライラしてきた……

―誘拐は犯罪ｒｙ

「うるせぇぇぇえ！！」

頭のなかのサイレンをシャウトする

「男は度胸！　挑戦心をいつも持てってジジィもいってた。　だったら話は早い。そこらの店で軍手とロープを……」

適当な理由で自分のする事を正当化するのは止めましょう。

そしてロープ、軍手を揃えたわけだ。

端から見れば変人に見えるかもしれないがその瞳は確固たる決意が見えた。　そんな少年の手にはヤキソバパンが握られている。

「このヤキソバパンは聖なる作戦、聖戦に勝つための景気付け品で……」

―結局ジジィみたく小さい店でコツコツやっててもどうにも出来ねぇこともあるじゃねぇか。

追い出されたラーメン屋のことを考えながらヤキソバパンを口に運ぼうとするが

ふと目に映った光景に手の動きを止める。

「うっ、ぐす……」

「おいおい泣くなよ」

少年の視線の先には泣いている男の子とその子を泣きやませようとする少女が見えた。

「どうしたどうしたぁ、自分より弱そうな奴虐めてお前はジャイ○ンか？」

一旦自分の目的を忘れて少年は少女に問いかける。

「なんだお前は、別に私が泣かした訳ではないのだぞって誰がジャイ○ンだ！！　私には三千院ナギと言う名前があるのだ！！」

金髪ツインテールの少女ナギは目をつり上げて少年に反論するが少年は続ける。

「いかんよ君、ジャイアニズムかざしてっと最終的にス○夫みたいな奴しか友達ができなくなるぞ」

「お前は少し人の話を聞けよ！！」ナギは少年に突っ込む。　そして男の子の頭を撫でるが泣き止まない。

「親と離れてしまったらしいのだ。　親が安物求めている間にはぐれてしまったらしい」

その言葉を聞き少年は頭を掻きながらため息をつき、

「虐めじゃなかったのか……」

「だからそうだと―」

ナギが言い終わる前に少年は泣いてる子にヤキソバパンを差し出した。

「の〇太……」

「いや、お前名前知らないだろ」

ナギは突っ込むが少年は続ける。

「男の子は簡単に泣いちゃいけねぇのよ。　ホレ、このヤキソバパンやるから母ちゃんと思って食え」

「お前パンを母親に見立てるなんて無理あるだろ。　最後なんて母親食えって言ってるもんだし……」

なんだかんだでヤキソバパンを食べた男の子は笑顔になり泣き止んだ。

その後、母親も戻ってきて仲良く帰っていった。

「まったく……もう少しマシな言い方はできないのかお前は？」

親子が去っていくのを眺めながらナギは言う。

「バカヤロー、男ってのは物心ついたらテメーでテメーを育てていくもんだ。　最終的には自分が変わるしかねぇんだよ」

少年はナギの言葉を素っ気なく返す。

「そんな理不尽なこと言われても分からん……ハヤテとは大違いだ」

今この場には居ない人物を思い呟くナギ。

「なに？　ハヤオがどうしたって？」

「何でもない。　お前名前は？」

少年に突っ込むのも疲れたのかナギは少年の名前を聞いてきた。
当然、少年には名前は無い。
少年はふと考え込み「……エドワードとでも名乗っておこう」
勿論偽名である。　ナギは変な名前だなといった感じで少年を見ると

「ふむ。　ではエドワードよ私は帰る。　さらばだ」

帰るといっても今のナギには付き人のハヤテが居ない。　どうしてこうなったかは第1話を参照。
ナギが去って行ったのを見ると少年は自分のしたことに気づき手を顔に当てて呟いた。

「アレ？　なんで俺大事な食料あげちゃたの？」

頑張れエドワード（仮）

第３話　～変な名前は気にしたら負け～（後書き）

遂に名前がでましたがあれは偽名です。　多分次になれば明らかになるかと思います。　ナギはどんな奴だったかなって書いてる時に思い、自分の構成力の無さにｏｒｚ

それでも目を通してくれた方には涙が出てきそうです。　成長していきたいと思いますので意見や感想お待ちしています。

第４話～納得いかない名前なら即改名～（前書き）

やっと名前出ました。　さんざん引っ張っておいてこれかよ！って思うかもしれません。　なんせセンスないんで……書くの疲れた。パソコン欲しい…

第４話～納得いかない名前なら即改名～

―どうしてこうなった

前回のあらすじ。　誘拐するためのヤキソバパンをあげた所から。

その後のこと、テンションが一気に下がってしまった少年はただひたすら歩いていた。

「人間ってのはなんでかなぁ……ガキの涙はもう無理。最終兵器だよアレ」

少年はため息を交じらせながら自分の行動を悔やんでいた。

既に辺りは暗く、日は沈みかけている。

「どうしてこうなっちまったかなぁ……」

なんてことを言っていると、目先に自転車を停止させてうーんと唸らさせている女性がいた。

「どうしたんです―」

声に反応した女性を見た瞬間、少年は声詰まらせた。

「えっと、自転車が動かなくなってしまって……」

気品溢れるその声と顔立ちはあのかの聖母マリアかもしれないと少年が思ったほどだ。

実際の聖母マリアがこんな姿だっかはさて置き。

一瞬の間を置き、女性の自転車を身をかがめて見る。　動かなくなった原因はチェーンが外れていたからだった。

「あらあら、この間買い直したばかりなのに…」

とチェーンに手を掛けようとした時、少年の手が女性の手を掴んだ。

「待ってください。素手なんかで触ったらあなたの手が汚いオイルで汚れてしまいます！！」

目をキリッとさせて少年は言う。　反対に女性は突然のことに顔を少し赤くしていた。

「ちょっと俺に任せてください」

と言うと少年はポケットから誘拐に使う筈だった軍手を取り出しチェーンを修理。

「これで良し……と」

（まさか誘

拐に使う軍手が役立つとは）
少年はオイルによって真っ黒になった軍手を見て思った。
「ありがとうございます。　手を汚してまで……」

女性は申し訳なさそうに言うが少年はとんでもないていった表情で
「大丈夫ですよ、俺に修理させたら大したモンっすよ」
と目を輝かせて言った。
「親切にどうも、私マリアと言います」

一礼された後に向けられたのは輝かしい笑顔だった。
（こ、これは！？）
突如少年は雷に打たれたかのように硬直した。
（この痛みはなんだ？　まさか恋？　いや違う！）

少年はその一文字を全力で否定する。
（俺は今まで何をしようとしてた。そう誘拐だ。　俺のしようとした罪がこの人の笑顔が俺に悟っている！　懺悔せよと悔い改めなさいと）

「あのぅ……」
「ハッ！！　何でしょう？」
マリアが手を目の前で振っているのが見えるとすぐに我にかえる。

「私じつは人を探しているんですが」

「どんな人ですか？　記憶力に自信はありませんが特徴を言って下さい」

自慢するべきではないことを目を輝かせていう少年。

「女の子なんですけど、金髪ツインテールで背が低い我が儘な子なんですが……」

マリアは淡々と述べる。　少年はその特徴が完璧に一致する人物がすぐ浮かんだ。

（アイツだ…夕方会ったアイツだ絶対そうだ！）

「あー知ってます。見ました俺」

「本当ですか！？　買い物に行って迷子になったと聞いたので屋敷から出てきたんですが今頃迎えの人も行ってる筈です…どこでですか？」

しかし会ったというのも昼の話。　あれから数時間経っているから当然言っても意味がない。

「えーと、実はそれは―」

その時だった。　猛スピードで黒い車が側を通り過ぎて行く。

「ん？」

通り過ぎていく瞬間、後部座席にナギがガムテープされているのが見えた。

「今のですかね？　と言うかアレですね？　迎えのにしてはガムテープされてましたね。　なにアレ、ドメスティックバイオレンス？」

その隣でマリアは

「いけない！　またあの子誘拐されてます！」すっかり慌ててしまっていた。　ってか一回だけじゃないんですねと少年は思っていた。

「ちょっと借りますよっと」

少年は自転車に跨りマリアに言う。

「無理です！　相手は車ですよ」

そう言えばそうだったな…と思ったが

「大事な人ですよね。　それに……」

少年は言い掛けたが心の中で続ける。　（俺は過ちを犯そうとしていた。　人の大事なモノを奪うということを……今からでも変わってやる！俺をチェンジ！！）

目を見開き一気にペダルに力を込め、一度ウィリー状態になるよう自転車を起こした。

「ライデ○ングデュエル！　ア○セラレーション！！」

前輪を地面に叩きつけると雄叫びをあげて駆け出して言った。

「どうしましょうか……」

一人取り残されたマリアは唖然としていた。

猛スピードで走る車内の中、ナギの口に張られていたガムテープが強引に剥がされる。

「ふぎっ！　貴様ら、もっと丁重に扱わんか馬鹿ども！」

剥がされたガムテープの痛みに口の辺りがヒリヒリするが両腕が縛られているため口でしか反撃できない。

目の前にはマスクした運転手の男。　助手席にはベレー帽を被った男。

「なぁ、本当にコイツが三千院ナギなのか？」

と運転手が助手席の男に言う。
「間違いない。　金髪ツインテールで年がら年中不機嫌そうな顔……どれも三千院ナギの特徴と一致する」
「おいこら、何の話をしている？　遺産目当てか？」
自分の特徴を言われ腹を立てたナギが問いかける。
「少し勘違いされているなこのレディは…」
振り返って答えたのはベレー帽を被った男。顔はロシア系のような顔立ちだった。　帽子の男は続ける。
「私達はアナタを誘拐しろというのを頼まれただけですよ、前金を貰ってね」
男はフッと笑うが若干馬鹿にされたナギはすぐ睨み返す。
「貴様ら、私を誘拐して　タダで済むと思うなよ！　ハヤテが黙ってないからな！」
「ハヤテ？」という名前を聞いて男は笑い出した。
「面白い！　来れるならきてみろ。　返り討ちだ」
「あのさぁ」

と言うのは運転手の男。

「このお約束な展開な所悪いけどさぁ」

「なんだ」

帽子の男は不思議そうに聞く。

「オレちゃんとマスクしてんじゃん。　何でアンタベレー帽なの？　顔割れるよ？　どこのオセロット気分ですか？　」

運転手に言われた帽子の男はふぅ、とため息をつき一言。

「オセロットじゃない、バルトだ！」

「本名名乗んなァァァァ！！　余計に顔割れるだろうがァァァ！！　何でちょいキャラに名前があるんだァァァ！！」

「うるさい奴だな。　お前には無いのか？」

バルトは男に聞き返す。　男は頷き、

「俺は―」

とその時、ドゴッと車の屋根から何かが乗っかる音がした。

「ほら、来たぞ」

ナギが不敵に笑う。男たちは顔を濁らせる。

するとフロントガラスからひょっこりと水色の髪をした少年が顔を出してきた。

「お嬢様！　綾崎ハヤテ、ただいま参上！！」

当然聞こえてはいないがナギが安心するには充分だった。
「どうだ！　ハヤテが来てくれたからにはもう貴様らは逃げられんぞ！　大人しく観念しろ！」
既に勝ち誇っているナギだがバルトは運転手に静かに指示する。
「振り落とせ」
運転手は急激にハンドルを右左に切り始めた。　当然のごとくハヤテは振り落とされないために車にしがみつく。
「速度は１００キロはでてるな…そんなんでハンドル切ったら危険だ！」
「私は狙った獲物は逃がさない」
バルトは不敵に笑いながら車の動きに揺らされる。
ナギは必死耐えながらバルトに怒鳴る。
「や、やめろ！　ハヤテに何かあったらどうするつもりだ！　許さないぞ！」
しかし、バルトはひたたかに返した。
「フッフッフッ……　身に降りかかる火の粉は振り払わなければならな…おえっ、ヤバい酔ってきた……」
「テメーはちゃんとセリフ言えェェェェェ！！！」
運転手がバルトに激しく突っ込む。
ナギはナギでこいつらバカなのかという視線を向けていた。

「お嬢様は絶対に助け出しますよ！」
執事として主を守ることはハヤテに課せられた最大の使命。　たとえそこに危険があってもあの日誓った約束はハヤテは守らなければならない。
―僕が君を守るよ
そう言ったからには有言実行。　しかし、しがみついていた手から握力が無くなっていくのを感じた。
それでもハヤテは諦めない。

「まだまだぁ！」
無理にでも手に力を込めしがみつく。　そして顔前方に見据えると見たこと無い人物が映った。

「エドワード？」
ナギは遠くからよく見えるわけではないが体格と髪で判断した。
「さ、さすがに車は無理だった……げ、原チャかバイクあればよ、よかったが…　法律破ったらまずいと思って、先回りさせてもらった…ぜ」
息を切らしながら言うのはまさしくあのエドワードと名乗った少年だった。

「エドワードなんて変な名前つけるんじゃねぇな。　名前なんざなくても、真っ直ぐ生きてれば本当の自分を見つけられるかもな」

自分に言い聞かせるように少年は呟く。
「エドワードは俺が罪を犯そうとした名。　これからはパピヨー」

その名が名乗られることは無かった。
誘拐犯の車が少年を派手に跳ね飛ばしたのだ。

「あ゛あ゛あ゛あ゛！！
ひいちまったよちょっとォォォ！！　どーすんだよコレ！？」

運転手はパニックになるがバルトは冷静に返す。

「いいか、車は急に止まれない。　取りあえず落ち着いてタイムマシンを探せ」
「お前が落ち着けェェェェ！！　なんでドア開けて逃げようとしてんだァァァァ！！」
「貴様ら、エドワードになんてことを！！」

車の中はかなりのパニック状態だった。
一方で少年は

（ヤバい、死にそう）
慣れない浮遊感を味わっていた。
（死ぬかコレ？　死ぬのか俺？　）

数十メートル先にぶっ飛ばされながらもまだ考えごとをしている。

（名前無しのまま死ぬのか、まぁ、バチが当たったんだよな）

諦めたかのように瞳を閉じた時、頭の中に一つ映像が映画のように流れてきた。

―この子にはどんな名前を付けようか

（誰だ？）

―そうねぇ、マイケル、ルドルフとかは？

―待てよ。　さすがにセンスがない、学校じゃ呼びやすいけど社会に出た時の事を考えろ

頭の中に浮かんだのは一組の男女だ。　男の方は黒髪で女性の方は栗色の長髪をしていた。

そして少年の視点で言えること

（なんで顔が見えない）

二人の顔は墨で塗りつぶされたようになっていた。

（これが俺の親？）

―あなたのような男の子に育ってほしいわ…でも料理ダメよ。　あなたの料理はもう劇物だから

―お前なんで前半褒めて後半叩くのいっつも……お前のように心の芯がしっかり
してれば俺は文句は言わない

―あら？　じゃあこんなのはどう？……ってのは

―じゃあって、俺の言葉と関連性ゼロじゃん

―いいじゃない決まりね！　今日からこの子は……

「そんな……」
ハヤテは目を疑った。　車にひかれた少年が態勢を整えてフロントガラスにしがみついているのを見て

「ギャアアアア！！！」
「……」
運転手は血がとめどなく流れている少年を見て絶叫している。
バルトは声に出さなくても顔は青ざめていた。

「逃がすと思ったかぁ？」
血を流しながら不敵に笑う姿はまさに恐怖の対象だった。　そして少年は大きく息を吸い、力一杯叫んだ。

「テメーらみてぇな子悪党はなぁ！　この善立　テルがぁ！　成敗

してやるぜコノヤロォォォォ！！」

―その少年の名を善立　テル（よしだて　てる）。

―善の心を奮い立たせ、道を照らす者。

第４話～納得いかない名前なら即改名～（後書き）

がっかりだよって思いませんでした？　スイマセン。でもこんな感じでいきます。　初めて長く書いたんですが６ページ書いただけでこんなに疲れるとは思いませんでした。　それでも６ページ以上書いてる人もいるんだと自分の力の無さを実感

私の現実でもそうです。　だから精進していきたいと思います。

第5話～悪魔よりも恐いように見えるのはきっと血のせい～（前書き）

なんとか書けました。　一応前回の続きです。　どういう風に原作キャラと絡んでいけるか悩んでいる今日この頃、楽しんでみてほしいです。

第5話～悪魔よりも恐いように見えるのはきっと血のせい～

―猛スピードで走る車の上。　少年は悪魔のような笑みを浮かべて呟く。

「逃がすと思ったかぁ？」

―その男の名、善立　テル。

「テメーらみてぇな子悪党はなぁ！　この善立　テルがぁ！成敗してやるぜコノヤロォォォ！！」

―善の心を奮い立たせ、道を照らす者。

「あわばばばば……どうするんだ…ってオメーは何してんだァァァ！！」

運転手の男が目の前の悪魔から目を逸らすようにバルトを見るとバルトはドアを開けて逃げようとしていた。

「いやぁ、すまんがピザ食べたくなったから逃げるわ、冷ましたら勿体無い……あばよ！！」

バルトはそう言い残すと助手席の扉から身を丸めるように態勢

をとり、車から飛び出した。

「コノヤロォォォ！！　ふざけんなァァァ！！　一人でピザ食ってんじゃ―」

その一瞬、男は前方のテルに目をやる。　男はテルが右腕を振りかざしているのが見えた拳にはロープが拳を保護するように巻かれている。

「うらァァァァ！！」

気合いの掛け声と共にテルはフロントガラスに拳を叩き込んだ。

ものの見事にガラスは砕け、ガラスを貫通した拳は男の顔をも捉えた。

ガラスに穴が空いたのを確認したテルは拳で穴を広げ、フロントガラスの半分を空けると運転手の胸ぐらを掴む。

「オイ、早く車止めろよ誘拐犯……アレ？　止まってるのは運転手じゃねぇか」

運転手を少し乱暴に揺らすが運転手は白目をむいて失神していた。

「うぉい！　なに運転手の息の根を止めているのだ！」

運転手が失神しているのを見てナギが猛然と叫ぶ。

「オイオイ、別に殺してねぇよジャ〇アン」

「誰がジャ〇アンだ馬鹿者！　ナギだ！！　三千院ナギ！！　いい加減覚えろ！！」

二回も名前を間違えられたナギはテルに突っ込む。

「ツッコミは生きが良くなきゃな」

「なんの話をしている！」

「あの～二人とも大丈夫ですか？」

「うぉ！　ハヤテ！」

ナギが見ると助手席の開いたドアから首を出しているハヤテだった。

「よっと……」

ハヤテは軽々とドアから侵入し後部座席に移った。

ハヤテはそのままナギを抱える状態に入るがそれを見たテルが口

笛を短く吹く。

「お前、大胆だなぁ……」

「そ、そうだぞハヤテ……いくら非常時だからといってもコレは……」

コレというのはハヤテがナギをお姫様抱っこをしていることだ。

「そんな事言っている場合ですか！？　早くアナタも！！」

二人の言葉を振り払い、ハヤテは後部座席のドアを開け、テルと脱出をしようとしたが、

「うん？」

突然の事であった。さっきから失神していた男はハンドルに手を掛けたままでテルが手を放した弾みで大きくハンドルが切られてしまった。

車は傾きになり重量を支えきれず横転する。

「くっ！……」

ハヤテはナギを守るため、さっきよりも力を強めて抱きかかえる。

来るべき衝撃から守るためだ。

―しかし

「あれ？」

一瞬の浮遊感。　なぜかハヤテとナギは車から放り出される形で脱出していた。

ハヤテは数メートル上から激しく横転して電柱に激突する車を確認した。

「っと……」

態勢を整え、コンクリートの道路の上に鮮やかに着地を決めた。

「大丈夫ですか？　お嬢様」

ハヤテは真っ先にナギの安全を確認。

「う、うむ。　ハヤテのおかげでな」

「僕だけじゃ大変でした……あの人のお陰ですよ」

ハヤテはナギを降ろすと助けてくれた人物を探す。

「まさか、まだ車の中にいるのでは！？」

横転した車は危険だ。激突は以ての外、　この後のことから連想するものにハヤテは嫌な感じを覚えた。

「ま、まずい！！」

すぐさまハヤテは車の方を向くが

その瞬間、大気を奮わせるほどの爆発が起こった。

衝撃までもがこちらにも伝わる。　原因は横転した車がオイルを垂らしたことだった。

「お、おいハヤテ！　この展開は一体なんだ！？」

「シリアス事故は死亡フラグですが…ってなに言ってるんですか！早く助けないと！」

今は談義している暇ではない。　一刻も早く助けようと車に近づこうとした。

「私も行くぞ―」

ナギが車に行こうとしたとき、炎の中から一人の男の姿。

テルだった。　しかし一人ではなく大人一人を背中に乗せていた。

その足取りは軽い。

そして運転手を地面に降ろし、スタスタとナギに近付く。

「お……お前、平気なのか？」

ナギがこう聞くのも当然だ。　テルは顔面から血を止めどなく流し、車の爆発にも巻き込まれた。　心配しないほうがおかしい。

しかしテルは一方で右手で手刀を作り

「てい」

とチョップをナギの頭に振り下ろす。

「い、痛！」

パコッという軽い音がした。　テルとしては手加減したつもりなのだろうがそれでもって痛かったのかナギは頭を抑える。

「まったく、簡単に誘拐なんざされやがって」

「な、なに！？」

テルの言葉にナギは抑えていた手を外してテルに向き直るがテルは続ける。

「一度だけじゃなく何回もあるそうじゃねぇか、不用心だったんじゃねぇのか？　犯罪大国日本なめんなよ、ちっちぇの」

「ちっちゃいは余計だー！」

「お嬢様、どうどう」

ハヤテがナギを落ち着かせようとするがナギの怒りは収まらない。

「別に頼んでもいないのだ！」

「まぁ、そんな事を言わずに……お礼をしなくてはいけませんね」

ハヤテは改めてテルと向き直る。　テルは少し考えると口を開いた。

「そうだなぁ、だったら俺の新しい寝床と働き場所探してくれ、今一人身で悲しいことにも放浪の身だ」

（この人僕と同じことを……）

心の中でハヤテはあの日、クリスマスの日を思い出していた。

偶然な事に、テルが言ったのはクリスマスの日にハヤテがナギに言ったのことと同じだった。

「お嬢様……この人を三千院家で雇いませんか？」

「なんだと？」

ナギはハヤテの一言に驚かずにはいられない。

「この人にも何か理由が……僕と同じくらいで放浪してしまうほどの理由が」

「しかしハヤテ、全く知らない赤の他人を……」

ナギは少し戸惑うがハヤテはすかさず続ける。

「その赤の他人の僕を拾ってくれたのはお嬢様ですよね」

「うう……」

一瞬ナギはたじろいてしまう。　確かにナギは赤の他人であるハヤテを拾った。　しかしそれは恩人であるハヤテに好意を寄せている事からもきているが、今お願いをしているのはその恩人であるハヤテだ。

「わかった。　恩人に礼をしないのでは三千院家の名が泣くからな。　たが私が雇うからにはしっかり働いてもらうぞ！　いいな！！」

腕を組ながら憤然と言い放ったナギだが

「返事がないな……」

ナギが不思議に思ったのかそれを見てハヤテがテルの顔を見たとき、慌てて声をあげた。

「お嬢様！　この人、気絶してますよ！！」

ハヤテが驚くには理由がある。　それはテルの状態だ。　仁王立ちの状態で腕を組んで目を見開いたまま気絶していたのである。

「べ、弁慶だ！　弁慶がいるぞ！」

「そんな事より早く屋敷に行きましょう！　早く、この人が天国に行く前に！！」

その後、彼は三千院家の医療ヘリにより運ばれた。

―こうして、運命は動き出す

一方その頃マリアは

「あの〜、私は歩いて帰らなければならないのでしょうか……」

自転車を無くしたため、徒歩で屋敷にむかっていた。

第5話～悪魔よりも恐いように見えるのはきっと血のせい～（後書き）

ようやく主要キャラと話ができました。　引っ張りすぎた感じがしますが分割した結果です。

そういえば銀魂　紅桜編やってますね。　見てきます。

第6話～人生の転機は意外なことで訪れる～（前書き）

銀魂　紅桜編見てきました。　ヤバい……鳥肌もんです。　見て損はないと思います。

まぁ、そんな事は置いといて、本編楽しんで下さい。

第6話～人生の転機は意外なことで訪れる～

―アレ？　なんだコレ、空が真っ赤だ

薄れていく意識の中、テルの瞳に映ったのは赤色に染まった空。

―アレ？　真っ赤なのは俺じゃねーか

―アレ？　なんで俺こんなことになったんだっけ

―アレ？　　コレってなんかどっかで……

第6話～人生の転機は意外なことで訪れる～

「……」

テルの視界に入った光景は天井だった。

「こりゃあいったい……」

身を起こしてみるとふかふかで高級そうなベッドの上にいることが分かった。

さらに驚くことは今いる部屋だ。装飾は西洋風、シャンデリア、ここ日本かよって言うツッコミをいれてもおかしくない状況だった。

「幻の大地って本当にあったんだなぁ」

「なにをバカなことを言っている、ちなみにお前の姿はちゃんと見えているぞ」

「うおっ！？」

いつの間にか居たナギにテルは驚き、そしてナギを目を細めてじっと見つめる。

「な、なんだよ……」

テルの視線が嫌だったのか、ナギは一歩下がる。

テルはうーんと考えると顎に手を当て口を開く。

「……誰だっけ？」

ゴスッとテルの顔面にナギの拳がめり込んだ。

怒りの鉄拳をくらわせたナギは顔は静かに……だが拳はプルプルと震えている。

「お前、仏の顔も三度までっていう言葉を知ってるか？」

「どこが仏だ？　天の邪鬼の間違いじゃねーのか？」

テルの一言にナギの怒りは最大値に達した。

「お嬢様、紅茶をお持ちしましたってどうしたんですか？」

しばらくしてハヤテがティーセットを持って部屋に入ってきた。

ハヤテが見たのはナギによってボロ雑巾と化したテルの姿があった。

「鉄拳制裁だ！！」

憤然と言い放つとナギは椅子にドカッと座り込んだ。　そしてハヤテの淹れてくれた紅茶を飲む。

「ふぅ……」

紅茶を飲んで少し落ち着いたのか、ナギの顔に笑顔が戻る。

ハヤテはボロ雑巾と化しているテルに話しかける。

「大丈夫ですか？　すいません。　お嬢様はなにかと手加減を知りませんので……」

「な、何を言うかハヤテ！　私は手加減がちゃんとできるぞ！！」

「いや、あの…お嬢様、現にここに力尽きた人がいるんですけど」

「あ〝ー痛ェなオイ、つかお前誰？」

ベッドに突っ伏していたテルがムクりと顔を上げダルそうに喋る。

「いや、そんな死んだ魚のような目をしないでください。　答える気が無くなるっていうか……」

困った顔のハヤテだが切り替えて話すことに

「えーと、僕はこの三千院家で執事をやらしてもらっている綾崎ハヤテです」

「えっ？　なに？　ヒツジのハヤオ？」

「いや、違います。　シツジのハヤテです」

「バカなのかコイツは……」

テルの変なボケにナギはもうツッコミを入れるのもめんどくさくなってきた。

もう一回殴るかと考えていると、樫の扉が静かに開かれ入ってくる人物がいた。　マリアである。

徒歩で帰っていたので少し遅れたのだ。

「すいません遅れました。　電話の人はしっかり生きてたんですね」

「あ、あなたは……」

テルはマリアを見るや否や慌てた反応を見せる。

「マリアさんですね、奇遇ですね　二度目ですね」

「ちょっと待て！
なんでマリアの時だけ態度がこうも違うのだ！！」

キリッとした目で言うテルだがナギはキャラの変わりように突っ込まずにはいられない。

しかしテル続ける。

「なる程。　このちっさいのがこの屋敷の主でお二人が使用人ということですね……ヤハリソウイウコトカ」

「ソウイウコトカってなんで説明してないのに分かるのだ？　というより何故にオンドゥル？」

一人で納得しているテルに対してナギは再び殴ろうかと思ったが話が進まなさそうなので無視して自ら話を切り出す。

「まぁ、そんな事はもうどうでも良い……ところでお前、住み込みの仕事を探してるそうだな」

「まぁ、そうだけどよ」

頭を掻きながら呟くテル。　ナギは続ける。

「だったらここで私の執事をやらないか？」

「へ？」

一瞬間の抜けた声を出してしまうテル。

執事とはハヤテのように屋敷の使用人の長、主人に甘いものを供えたりする人達の事である。

「本来、この屋敷の使用人は少ない方が良いのだがハヤテがどうしてもと言うのでな、私は不　本　意なのだが」

最後を強調するナギだが、テルは別のこと考えていた。

（ここで暮らすという事はマリアさんと一つ屋根の下ということ……イヤ、待て！　俺は下衆な事をするためにこの人と会ったんじゃない！　今度はこの人のために恩返しを……）

何か決意したかのようにマリアを見たテルは呟いた。

「やってやろうじゃねぇか……」

フッと笑みを浮かべるテル。　そしてベッドの上で立ち上がり高々と拳を突き上げた。

「この善立　テル、今日からこの三千院家の執事として働いてやろうじゃねぇか！！」

「あ、テルさん！　急に激しく動くと……」

ハヤテが慌ててテルを止めようとしたがその瞬間

ズキン！
「ギャース！！」
「うーむ、バカにこの仕事は務まるのか？」とナギ。
「まぁ、面白そうだから良いんじゃないですか？」
とマリアは楽しげな顔をする。
すると顔を歪ませながらテルは身を起こした。
「ではまず面接からお願いしようか」
「そんなものあるわけ無いだろうが！！」
三千院家にナギのツッコミが木霊した。
こうして、異常で奇っ怪な執事が誕生したのである。

一方。
「ふむ……作戦が失敗してしまったか……」

どこか市街地の民家の屋根の上。立っているのはベレー帽でロシア系の男、バルトだ。　ピザを片手に

「いかんなぁ～これではまたボスにどやされるな……あっ、ヤベ、電話だ」

バルトは右手の携帯を開いた。

「あーボス？　失敗しました。んじゃ失礼」

「いや、あの、バルトさん、漠然としていてよく分からないのですが……」

中から聞こえるのは女性の声だ。　バルトはピザを食べながら

「あーピザうまいっす、ムシャ…　ボスの所にも一枚送りますか？」

「人の話を聞きなさい！そしてなんと行儀の悪い……また情報が入り次第に連絡します。それまで待機を……」

「ハイハイ、んでボス、何がいいですか？　マルゲリータ？　トマチョビーノ？」

その瞬間、何かが潰されたようにグシャっという音が聞こえ電話が途絶えた。

バルトはピザを食べながら一人呟く。

「またあの人電話壊したな。　素手で電話潰すとかどういう握力してんだか……」

携帯をしまうと最後のピザを口に運びニヤリと笑った。

「あの男、面白いな……」

頭に浮かべるのは勿論テルだ。　跳ねられても車にしがみつき、燃え盛る車から運転手を救助するあのタフさ。

いずれまた会う事になるだろう。　そんな事を考えていると下の窓が開いた音がし、大声が響いた。

「アンタァ！　泥棒よォォォ！！」

「泥棒じゃない、バルトだ！！　ヤバ、また名前言っちゃったよ」

バルトはそう言うと屋根から下るように助走をつけ、他の屋根に飛び移った。

夜月に映えるその移動する姿はまさしく忍者のようだったという。

「忍者じゃない、バルトだ！！」

―こうして物語は始まるのだ。

―まだ見ぬ脅威が暗躍するなか

―過去と未来を巻き込んだ戦いが始まる。

「―ってお嬢様、こんな内容でしたっけ　『ハヤテのごとく！』は……」

「あるわけ無いだろ！？　誰だこんなのを書いた奴は！！」

第6話～人生の転機は意外なことで訪れる～（後書き）

最後は苦しかったです。　どう終わらせるか　　最後のアレですが別に超時空的な戦いはありません……今は

第7話～一流の執事への道も掃除から～（前書き）

どうもバロックスです。　思ってたよりも文字書けませんでした。
集中力が……短いかもしれませんが楽しんでください。
今更かもしれませんが主人公の名前、善立は（よしだて）　と読みます。　決して（ぜんりつ）ではありません。

第7話～一流の執事への道も掃除から～

「この善立　テル！　三千院家の執事として働いてやろうじゃねぇか！！」

そうテルが宣言した翌日。　執事としての第一日が始まった。

―現在朝の五時。

「テルさん朝ですよ、起きて下さい」

ハヤテはベッドに転がるテルを起こしていた。

「がぁぉ、ごぉぉ……」

だが、テルは豪快ないびきをかいて起きる気配が無い。

仕方なくハヤテは窓のカーテンを開けた。　眩い光がテルの顔面に当てられる。

「ん、くわぁ……なんだよ、かあちゃん今日は日曜だぜェ、ったくおっちょこちょいなんだから～」

「いつから僕はテルさんのお母さんになったんですか？」

眠そうな瞳はまるで死んだ魚のよう。　目をゴシゴシと擦りなが

らテルはあくびした。

「今日から執事としての仕事が始まるんですよ、　そんなんでどうするんですか？」

ハヤテはふぅとため息をつく。　テルは頭を掻きながら眠そうに言った。

「俺朝弱いの。　朝だと頭のなかスッカラカン」

（大丈夫かなぁ、この人……）

ハヤテは早朝不安に駆られていた。　こんなにもダラシがなさそうな人が執事としてやっていけるのかと。

―場所は変わり屋敷の一室。

「どうですかテル君？　」

笑顔でそう聞くのはマリアだ。

「最高にピッタリですよマリアさん」

テルは今、自分の姿を鏡で見ていた。

黒いスーツに似た服はハヤテと同じ執事服である。

「これはマリアさんが仕立てたんですか？」

テルがマリアに聞く。　マリアは笑顔で頷き

「はい、でも大体ハヤテ君と同じくらいだったので」

テルとハヤテの身長は大体同じで特に変える所はなかった。

マリアはやがて話を切り出した。

「では今日から執事の仕事が始まりますがやってもらう事は……」

と取り出したのは一枚の紙。　テルはマリアから紙を受けとり、顔をしかめた。

「これは？」

「この屋敷の見取り図です。　今日はまず掃除から」

「あの～マリアさん？　掃除ってこの屋敷全部ですか？」

淡々と述べるマリアにテルが顔をひきつらせながら聞く。

マリアは笑顔で
「はい♪」
と言った。
「いや、でもこの屋敷って部屋が数百とかあるんですけど……」

「やってくれますよね？」

マリアの屈託のない何かを期待している笑顔を見たテルは

「よっしゃあァァァ！　掃除だろうが何だろうがきやがれってんだ
コノヤロォォォ！！」

威勢良く叫んだテルはダッシュで扉を開けて、出て行った。

そして善立　テルの多忙な一日が始まる。

「しかし、この屋敷はどうなってんだ？」

あれから数分、テルは屋敷のなかを歩いていた。

「部屋の多さときたらなんだコレ？　数え切れないし、プ〇ステ部屋とド〇キャス部屋に専用部屋までありやがる」

テルは渡された見取り図を見て、改めてナギが金持ちだと思い知らされた。

「だが―」

紙をポケットに突っ込み、瞳をキリッとさせる。

「ここで働かなければ俺に明日は無い！　ラーメン屋の時みたくいかないぞ！　　レディィゴォォォ！」

そう言うとテルは掃除を開始した。

しかしこれがとんでもないことになることを彼は知らない。

「で？　実際のところハヤテ君はどうしてテル君を助けようと思ったんですか？」

「なんですか急に……」

時間は戻り、テルが部屋を出て行ったあと、マリアはハヤテに質

問していた。

テルが勢いよく出て行ったので樫の木でできた扉が開けられたままである。

「だって屋敷にはそんなに使用人は必要ないのに……まさかハヤテ君、男についに手を出すようになったんですか！？」

「ち、違いますよ！　有りもしないことを言わないで下さい！」

ハヤテは慌ててマリアの言葉を否定する。　ちなみにナギはまだ爆睡中。

「僕はなんかテルさんが似たような境遇にあったからですし、お嬢様も誘拐しようとした僕をこうして雇ってくれたんです。　そう思うとほっとけなくて……」

「分からなくもないですが……」

（ナギがハヤテ君を雇ったのはナギがあなたに好意を寄せているからなんですが……）

心の中でマリアは呟いた。　そして何か思い出したかのようにマリアは口を開く。

「そういえば、ハヤテ君はテル君に掃除の仕方を教えましたか？」

「そういえば……」

「大丈夫でしょうか？　テル君は前の店を辞めさせられたのは料理と家事のあまりのひどさときいたんですが……」

しかし、二人とも実際にテルのカオスっぷりを見てはいないのでそこまで心配はしていない。　だから

「だ、大丈夫じゃないですか？　いくらなんでも……」

「高級品の扱いも知らないだろうし、何よりあの性格ですから……」

「う～ん……」

年がら年中ダルそうに死んだ魚の目をしている男だ。　本人はいざとなったら輝くと言っているが

「そう考えるとやっぱ心配ですね……」

さっきとは全く逆の意見になったハヤテ。　それだけ不安要素は思ってたより多いのだ。

「ぼ、僕ちょっと見てきます！」

そう言うとハヤテは扉を開け、テルの元へ走っていった。

「なんか嫌な予感しかしませんね……」

一人になったマリアは雲行きの怪しさを感じていた。

（そうならないことを願いますが……）

そんなことを願ったがいやな予感は的中してしまうのである。

第7話～一流の執事への道も掃除から～（後書き）

現在バスに揺られながら帰省中。　　だから揺られながら執筆してました。

内容は薄めです。分割しますから、次でまとまるか分かりませんが……

次回はテル君初仕事ですが大体皆さん予想はつくと思います。その中で面白くなるようにするつもりです。

第８話～物事には何でもやり方がある～（前書き）

更新遅くなってしまいました。　スイマセン。　なかなか時間が見つからずに経ってみれば８日目。　地道にやっていく事の大切さをこういう事で改めて思い知らされた今日この頃です。　前回の続き……テル君の初仕事です。

第8話～物事には何でもやり方がある～

「どうしてこうなった……」

顔をひきつらせながらながら小さく呟いているのはハヤテだ。

ここは三千院家の一室。　テルの掃除を心配したハヤテだったが……

（マリアさん、どうやら遅かったみたいです……）

ハヤテは目の前の惨状を見て辺りを見渡した。

高級品のカーペットはどんな洗剤を使ったのかは知らないが白い固形物が付いており、ハリネズミの背中みたいに逆立っていた。

絵画は床に落ちており、その他の壷は割れてはいないが本来の壷の色ではなかった。

（この壷って確か青色の花が描かれていたのに……なんで紫色？）

これは予想以上だ。とハヤテは考え、すぐさまその部屋を飛び出した。

「テルさぁぁぁぁん！　何処ですかぁぁぁぁ！」

もはや色々とカオスだ。　このカオスがこれ以上拡大する前にテルは止めること、それがハヤテの使命だと直感した。

一方そのカオスの源はというと。

「ふぅ。　掃除って素晴らしいな……」

輝かしい笑顔をしながら箒掃除をしていた。

「やっぱ、綺麗にするってのはいいよね～　同時に心も綺麗になっていくみたいな……」

どうやら自分のやっていた掃除が当たり前だと思っているらしい。

「テルさぁぁぁぁん！！」

「ん？　どうしたハヤテ、タンスの角に小指でもぶつけたか？」

テルは息を切らしているハヤテを見る。　ハヤテはテルの目の前に手に持っている何かを差し出す。

「何だコレ？」

ハヤテが持っているものは銅の色をした塊だった。

「テルさん、これは屋敷にあったコ〇ン像なんですが……どうやって手入れしたんですか？」

ハヤテはテルに恐る恐る聞いた。　ハヤテの手にある銅像だったものは頭らしき部分が半分以上ドロリと溶けていたのである。

「えーっと、まず汚れを落とすために拭いたんだ」

テルは顎に手を当てて思い出しながら話す。

「……何で拭いたんですか？」

「ヤスリで……」

「それじゃキズだらけですよ！！」

「え、何？違うの？削れば新しい面が出てきて綺麗になると思ったんだけどよォ」

テルにとって銅像は固いからそれなりに削れるもので拭くことがベストだと思ったらしい。

「でもこれだけじゃこんな風になりませんよ。　後は何をしたんですか？」

「えーっと、拭いてたらキズができたから溶解液使って新しい面を作りだそうと……」

「もうそれ掃除じゃないです！！　掃除に溶解液使うってどんな掃除の仕方ですか！？」

―ダメだこの人、早くなんとかしないと……

ということを頭の中に浮かべるハヤテ。　それほどテルのカオスっぷりが身に染みて分かったのだ。

「やはりそうなってしまいましたか……」

場所は変わり三千院家屋敷内。　テルとハヤテがマリアにテルのカオスストーリーを話していた。

マリアは苦笑いで聞いていた。

「この屋敷にはそんなに高級品があるんですか？」

テルがマリアに聞く。

「そんなにというか全部です。　この銅像で数十万、あの植物で数百万、この壷だけで数千万……」

「あ、もういいです」

淡々とマリアが述べていく金額にテルはすぐさま話をストップさせる。

「あの部屋とか直すの大変だったんですから……」

ハヤテはふぅとため息をつく。　先ほどのカオス部屋は全てハヤテが修復した。　しかしハヤテでもかなり労力を有した。

「フッフッフ……俺は細かい作業が苦手だからな」

（（大丈夫かなこの人……））

自慢するべきではない事を平然と言うテルにマリアとハヤテはそう思った。

「いや、でも次からは何とかなりますよ。　焦らずいきましょう」

「そうだな、ここでやっていくには最低限覚えておかなきゃならんことがあるし……俺も今から心を入れ替えていくわ」

ハヤテのこれから『じっくりやっていこう作戦』にテルも仕方なくだが同意。

（先輩と後輩みたいですね……同年で同じ仕事やっている人は少ないからハヤテ君も楽しそうですわ）

二人を見ながらマリアは心の中で呟いた。

実際ハヤテのように執事をやっているものは少ない。

特に同い年で同じ屋敷でやっているいわば同僚仲間である。

今の所の男友達もレンタルビデオ店の店長とかそのくらいか

—なんにせよ友達ができるのは良いことだ。　とマリアは安堵の笑みを浮かべた。

—しかし、その笑みも数分後には崩れることになる。

「……」

ここは三千院家の食堂。　マリアとハヤテは現在のテルの行動に愕然としていた。

「……」

ナギに関しては額に青筋を浮かべいる。

「ヤベ、このベーコンうまっ、クセになるわ」

言っておこう彼、善立　テルが食べているのは自分の食事ではない。　ましてやマリアやハヤテのでもない。

―全てナギの昼食である。

「おい、テル」

「あん？」

テルはパン食べながら体から怒気のオーラを放つナギを見た。

テルとしては何故ナギがそうなってるか分からなかったのでパンを食べながら続けた。

「どーも、昨日配属されました三千院家の執事、善立　テルです。お嬢様、何か不備でもございましたか」

「不備はお前の頭だァァァ！！！」

ナギの怒号と共にハンマーが豪快にテルの顔面を捉えた。

衝撃でテルは乗っていた椅子ごと吹っ飛ばされた。

「イタタタッ！　鼻折れたァ！　今絶対鼻折れたァ！」

吹っ飛ばされた時に後頭部も打ったのか鼻と後頭部をテルは抑えながら床を転がった。

「さぁて、このアホはどうしてやろうか……」

ナギがハンマーを持ち替えたりしている。　テルは鼻を押さえながら

「どうしてやろうかってもうやってるじゃねーか！！　俺はまだ朝、なんも食わないで昼を迎えたんだよ！！　人間1日一回以上は食事しなきゃいけねーんだぞ！！」

「誰が決めたそんな事！　1日何も食わずとも生きていけるぞ！！」

「お嬢様！　それはダメな考え方です！！」

二人の間にハヤテが割って入る。　これまでのナギを見てきているのでそんな自堕落な生活は送らないと思っているが起きてきたのは昼だ。

その内、夜に起きてくるということもあり得る。

お互いが少し落ち着いたのを見て、ハヤテが話を切り出す。

「テルさん、主と使用人は一緒に食事はしないんです」

「な、なんじゃそりぁぁぁぁ！！」

テルは太陽に吠える位驚いた感じで叫んだ。　ナギは未だに目をつり上げている。

―無論、彼がこうなるのも無理はない。　昨日配属されたばかりということもあるが何より彼は頑丈さを取ればそこらの一般人と変わらない。

―当然、執事などという貴族絡みの世界との縁は全く無いのだ。

ちなみにハヤテとマリアはナギが食べ終わった後に食べている。

「私も堪忍袋の緒が切れた！！　お前なんぞクビにしてくれるわァァァ！！」

「ちょっと待てェェェ！　権力横行にも程があるぞォォォ！！　どこのお嬢様だコノヤロォォォ！！」

「実際に私がお嬢様だ！！」

「そうだった……世も末だなオイ」

「カーペットは汚すわ、銅像は溶かすわ、カオスな掃除にも程がある。　お前にこの仕事が務まらない理由がこれ以上あるか！！」

ナギは指ビシッとテルに指した。

「く、お嬢様権力に物を言わせやがって……」

核心突かれてしまってテルは反論する事もできない。

だがナギの攻撃はまだ続く。

「三千院家の使用人は完璧でなければならない！　お前は掃除すら出来ていない！　故にここで働いていく資格は無いのだ！」

「ぐぼおぉぁぁぁ！！」

ナギの言葉にトドメを刺され、テルのライフはゼロになった。
膝ばかりか床に手をつけて顔を下げてしまっている。

「さぁ、出て行くがいい」

もはや一方的なワンサイドゲーム。　遊○王で言うならライフゼロからの追加攻撃だ。

ここに無惨にも一人の少年の生活が閉ざされようとしていた。

第8話～物事には何でもやり方がある～（後書き）

もうちょっとカオスにできなかったかなぁと思ったんですが今やりすぎるとこれからやるのにネタに困りそうなのでこれ位にしました。

次回、テルの新生活はたった1日で終わってしまうのか！？

感想や意見を首を長くしてお待ちしています。

第9話～人間必死になれば何でもできるか？それは分からない～（前書き）

最近執筆する時間短く、間隔が結構空いてます。　読んでくれている方々にはとても感謝しています！

第9話～人間必死になれば何でもできるか？それは分からない～

「さぁ、出て行くがいい」

三千院家の主であるナギからの命令。　今ここに一人の新生活が終わろうとしていたが……

「待ちなさい、ナギ」

突如声を掛ける人物がいた。　マリアである。

「な、なんだマリア、お前はこんな奴の肩を持つのか！？」

ナギとしてはマリアが自分の意見に反論する事に驚いている。

「なんでもかんでも簡単に決めるものではありませんよ。　初めてだし、誰しもが出来る仕事じゃありませんわ」

「ならどうしろと？　このまま奴を執事にしたら三千院家の名が泣くし、帝のジジイにも笑われる」

腕を組ながらマリアに言うナギ。　いかにテルにとって初めてでも三千院家側としては三千院家の執事は完璧でなければならないという理念が存在する。　というのをナギだったか執事長が言っていた気がする。

「簡単です、テストをしましょう♪」

「テストですか？」

楽しげに言うマリアにハヤテが尋ねる。

「ええ、落ちたら失格、チャンスは一度きりの当に断崖絶壁の執事テストです」

―執事テストとは決してロボットと　戦ったり試練の塔に行って敵を倒してくるとかそんなんじゃなくてただ純粋に執事の能力を試すテストである。

「まぁ、今回はあのカオスな掃除をどうにかしなければいけないので試験内容としては掃除ですね」

「というか、執事ってロボと戦ったりするんすか？」

「まぁテル君、それは置いといて……ナギ？　どうですか？」

テルの質問をはぐらかすとマリアはナギに聞く。　ナギはうーんと考えると

「うむ。　確かにそれならコイツも簡単に諦めがつくだろう。それに私は追い詰められた鼠がどうなるのか見てみたい」

「オイこら、人を実験台にすんな」

「とにかくこれがラストチャンスだ！　お前が明日執事になれるかどうかはこの私が見定める！！」

その後昼からはテルの明日のテストの為の勉強が始まった。
やり方としては屋敷の掃除の仕方や高級品の手入れの仕方をハヤテから教わるというものだ。

ハヤテがアドバイスしては意味がないのでは？　と思われるがそうではない。
やり方さえ聞いてメモすれば後は当日メモの通りにすれば簡単だが当日はカンペ無しだ。　そして何より

「テルさん、これは銀製なのでシルバーパウダーを使って磨きます」

「ほぅ」

「こちらの銅像は真鍮ブラシで汚れを落とした後、薄い洗剤で洗浄して水気を取ってワックスで仕上げを」

「ほ―」

「カーペットはウール製のキリムですのでお湯を使わず、冷水に頭髪用洗剤と塩を加えて、色落ちしないよう軽く……ってテルさん？」

「……んほ？」

「……今寝てましたね？」

「いんや、寝てない」

そう言うテルだが目をゴシゴシとこすり、大きな欠伸をしていた。
その証拠に

「ヨダレ出てますよ……」

「違う、汗だ」

「口から出る汗なんて聞いたことありませんよ！　やっぱり寝てたんじゃないですか――！」

とまぁ、こんな感じでテルが面倒事を嫌う訳である。

ハヤテとしてはナギ以上に手を焼く存在だと考えていた。
やってみれば予想通りだ。

元々、この屋敷に来たハヤテは掃除を昔から体験していたこともあり難なくこなしていたので困った事は特にない。

あるとすればナギのとばっちりをくらうぐらいか。

ハヤテなりには考えたつもりだ。　テルの性格を考慮して分かりやすく掃除を教えたのだが

「いいかハヤテ。
人間の脳は記憶出来る事に限界がある。
オーバーロード。　これを解決する事が人類進化の第一歩なんだよ」

と訳の分からない事を言っている。
ハヤテはため息をつくと

「いいんですか？　このままじゃ本当にクビになりますよ？　お嬢様はやることが半端じゃないですから」

実際これは嘘ではない、ハヤテはナギに出て行けと言われたり、ロボットやトラの戦闘、ナギに一億五千万で売られたりと既に体験済み。

なのにこの男、善立　テルは頭を掻きながらまだ欠伸をしている。
本当に呑気だ。そんな事を思いながらハヤテは続けた。

「ここを追い出されたら屋敷との関わりがなくなるんですよ？」

その瞬間、テルの動きが止まる。　関わりが無くなる。　それは三千院家関係者には二度と会えないという事だ。

（つまりソレはマリアさんと会えなくなるって事なのか！？）

額に汗を浮かべるテル。　理由はどうであれ、というかかなり不可解だがテルの誘拐を止めさせて更生させたのはマリアだ。　マリアは全く知らないが

―ここからは善立　テルの妄想にはいる。

「……ついにクビになってしまったか」

最後のチャンスをも無駄にしてしまい屋敷を追い出されてしまったテル。

三千院家の門の前に一人たたずむが、寂しいばかりに1月の寒風が駆け抜ける。

何も言わず門を後にしようとしたその時。

「お待ちなさい」

振り返るとそこにはマリアがいた……その姿は翼がはえており、天使の姿そのものだった。

「ま、マリアさん？」

マリアがどうして浮いているのか分からないがテルを見下ろし、後光がマリアを際立たせている。

しかしマリアは悲しげな瞳で

「ああ、あなたは諦めてしまったのですね……」

「どういう事ですか！？」

「あなたは確かに一度は心を入れ替え新たな人生を歩みました。あなたが諦めなかったからです。しかしあなたは今回、掃除ひとつを諦めてしまった」

「そ、そんな！」

もはや画面真っ白状態のように言葉が出ないテルだが、マリアは最後にトドメの言葉。

「あなたはゴミムシ以下の存在、救う価値もありません……　地獄に落ちてジャンクになりなさい」

突然手のひらを返したような冷たい口調のマリア。　その時の姿は黒い翼を生やしたどこかのドールさんだったという。

「あの……テルさん？」

「……ハッ！」

放心状態のテルが横を見ると声を掛けているハヤテがいた。

「どうしたんですか？　急にボーっとして……」

「いや、まぁ……」

テルは曖昧な感じで返す。　ハヤテは少し気になったがテルは頭を掻きながら続ける。

「そんな事よりもだ。　勉強だ勉強。　掃除の」

「え！？　テルさんどうしたんですか！？　熱でもあるんですか！？」

失礼な質問だが、突如のテルの変わりようにハヤテは驚かずにはいられなかった。

「ジャンクになりたくはないがここはやはり……」

「（ジャンク？）　やはり？」

「あのナギにナメられたままクビにされるのは天が許しても俺が許さん！！」

「な、なるほど……」（この人も負けず嫌いなのかな？）

そう思わずにはいられないハヤテだった。

第9話～人間必死になれば何でもできるか？それは分からない～（後書き）

なんやかんだで家事は大変です。　一人暮らしやってると身に染みてわかります。　私は別にテルほどではありません。それなりにやってます。　まだまだ下手ですが……　なかなか終わらないなお仕事編。　でも大丈夫です。次でなんとかまとめます。

ご感想、ご意見をいつでもお待ちしております。

第１０話・改～人生やりこめる仕事は一つでも見つけろ～（前書き）

漸く書き直しできた。　待っていたかどうか分かりませんがあの１０話がパワーアップ？して帰ってきました！　若干の違いがあるので前の１０話を覚えている人は違いを見つけみよう。　見つけれた人には冷蔵庫に入ってたバロックスソーセージをあげよう。　って限り無くただのソーセージだよ！

第１０話・改～人生やりこめる仕事は一つでも見つけろ～

カラカラ……

長大な屋敷の廊下にキャスターの音が静かに響く。　キャスター付きの台の上には純銀製のポット、鮮やかな色合いのティーカップ。　それらを運んでいるのはマリアだ。

（さて、テル君の調子はどうですかね……）

マリアは試験を明日に控えたテルの様子を見に来ていた。

屋敷では現在、各々がそれぞれの時間を過ごしている。　学校があるのだが夜までゲーム、漫画と趣味に没頭するナギ。　夜食の片付けや明日の朝食のメニュー作成、その仕込みの準備をするハヤテ。

マリアもまた様子見、疲れているであろうテルの為に紅茶を届けているのであった。

（ここですね……）

マリアはテルが居る部屋の前に到着。　礼儀として扉を叩いて入った。

「失礼しますテル君……調子はどうですか？」

マリアが入ると最初に暗い部屋で執事服を着て一人ブツブツ呟くテルの後ろ姿が見えた。
「あの～テル君」
まだ気付いていないのか、と思ったマリアは再び声を掛けた。
「あ…マリアさん……」
ようやく気付いたのかクルッと振り向く。しかし、その時のテルの顔は酷く痩せ痩けていた。更に死んだ魚のような瞳。暗い部屋がホラー感を引き立てていた。マリアはテルの顔を見て
「キャアアアア！！　ゾンビィィィ！！」
と叫びながら近くにあった箒を振り回した。
「ぐふっ！！」
テルの顔に振り回していた箒が見事クリーンヒット。　あまりの強さにテルはその場に倒れ付した。　それを見たマリアは更に箒でテルをバシバシ連打。
「悪霊退散！悪霊退散！　この！この！」
「あ、痛！　ちょっ！マ、マリアさん！　俺ですよ！　テルです！」
その声を聞き、マリアの箒を叩いていた手がピタリと止まった。
マリアが明かりを点けるとさっきより顔が腫れたテルの姿を確認した。
「て、テル君！？　どうしたんですか？　そんなに顔を腫らして……」
「いや、マリアさんがやったんですケド……」

慌てて心配するマリアにテルは突っ込んだが罪の意識の全く無いマリアをテルはそこまで激しく言わなかった。

「申し訳ありません……余りにも瞳が死んでいてゾンビにそっくりだったので……」

「マリアさんのゾンビの基準は目が死んでるって事だけなんですね……」

「まぁ、取り敢えず頑張っていましたから休憩がてら紅茶でもいかがですか？」

話をそらすマリアはティーセットを運んでくる。　テルの選択は常に一択。

「はい！モチロンです！」

二人は椅子に座ると紅茶を淹れ始めた。　マリアは自分で淹れた紅茶を一口だけ飲む。

「ふぅ……」

と息をついたマリアを見て、テルも紅茶を一口。

ゴクッ

「こ、これは……」

テルは紅茶を飲み驚愕の表情を浮かべた。

「なんと美味な紅茶か！　味の三千世界よォォォ！」

「まぁテル君ったら、ただのレモンティーで大袈裟な」

マリアはクスクス笑いながらテルを見る。

（マリアさんが淹れてくれた紅茶ならどんな物も極上の味です！！）

などとテルは言って見たかったが流石に言えず心の中で呟いた。

「どうですか調子の方は？」

マリアはティーカップを置くと尋ねてきた。

「まぁ、ハヤテの甲斐もあってかなんとかなりそうなならないような……」

「それは随分と微妙な所ですわね……」

「それよりもハヤテには驚きましたよ。　やり方も教え方もやたらと上手いですし、コレってかなりの専門知識が無いと無理なんじゃ……」

実際、ハヤテの知識はかなり精通しているものがある。　ある意味業者よりも上手い。

それを簡単にやってのけるというのは何かあったのだろうか。　それ以前に、１６歳という若さで執事をやっている時点で普通ではない。

「ハヤテ君が借金を抱えているのは知ってますね？」

「ええ、なんか一億五千万とか借金してて、それを返す為に働いてるとか……」

「元々ハヤテ君の借金ではないんですが、ハヤテ君の両親が作った借金をハヤテ君に残して逃げてしまったんですよ。　両親はかなりの遊び人で二人の代わりに年齢を偽ってバイトしてたらしいんですよ。　掃除とかのバイトは確か９歳からやってたって笑顔で言ってましたし……」

「言葉の端々に笑えない苦労が滲み出る奴だなぁ……」

と呆然としながらハヤテの過去を思ったテルだった。

「でもまぁ、昔の苦労があったからこうして自分の仕事を見つけれてるんですね」

ハヤテの過去は謎だらけだ。ナギの誘拐事件の時に見ていたが身体能力の高さはかなりのものである。　あの異常な戦闘力と執事としての能力、どこで身に付けたものか疑問だったが、今の所はあんまり深く追求はしないほうがよさそうだ。

「少なくともハヤテにとってこの仕事、天職ですね」

「天職かもしれませんが昔も今も苦労しぱなっしです……」

マリアは苦笑いを浮かべながら呟いた。

「苦労か……」

「どうしました？テル君……」

突然ぽつり呟いたテルにマリアは聞いた。

「いいえ、考えてみればラーメン屋にいたときもやたら迷惑かけて出てきたなと思って、しかしアレはまずったな～」

テルは顎に手を当ててうーんと続ける。

「ラーメンの麺を黄色粘土代用しようとしたんですね、あの後腹痛で何人か病院行きました」

（それはもう……追い出されて当然ですね……）

もはや、料理がカオスというのが当たり前だが料理に関してはテ

ルは常識が足りないらしい。

「追い出された事には後悔はないんですがね……けど」
とテルは続ける。

「俺はあのラーメンの味、好きだったんですがねぇ」

―ほらよ、腹減ったんなら俺のラーメン食いな。

老人から差し出されたラーメンは普通の醤油ラーメン。　老人は少しめんどそうな顔をしていた。

―旨いだろ？俺のラーメン。　俺の魂が籠もってるからな。

こんな細い麺に魂とか何を言ってるかと思ったが老人は続ける。

―俺達職人はテメェ（自分）の魂を込めて何かを作んだよ。　いつでもどこでも、この命が尽きるまで魂を込め続ける。

そこまで自分の魂を込めるのは何故か？　疑問に思った。

―それは俺の魂を他人に感じてほしいからだっつーの。　俺の魂でたくさんの客に何を与えられるのか。

他人が何かを感じたと実感できるのはいつだ？　作った本人はそ

れが分かるのか？　老人は言った。

―難しいことは分からねえ、けどよ……

―そいつの顔が笑ってて旨いって言わせれたら、俺は充分だと思うぜ。

海で一人のラーメン店主に助けられた少年はまたラーメンを口にした。　今度はただ旨かっただけではなく不思議と笑みがこぼれ、そして何よりも。

身も心も暖かかった。

「まぁ、いつしか会いに行きますよ。　会ってあのジジィの鼻明かしてやります」

あの日交わした約束がある。それを守るためにも今は目の前にある壁を壊さなくては

「なら、明日は頑張ってください……これ位ができなければ三千院家の執事は務まりませんよ？」

その迷い無き表情を見たマリアは安心したのか笑顔で言う。　テルは親指をビシッと立てて、

「任せてください！　マリアさんの為にも明日の試験、必ず合格して見せます！」

（……私のためではないんですけどね……）

苦笑いを浮かべてマリアは部屋を後にした。

（でもラーメン屋に戻ってどうするねでしょうか、まさかこの仕事を辞めてラーメン屋に戻るという事なんでしょうか……）

廊下を歩くマリアは一抹の不安感じる。　廊下には紅茶セットの台のキャスターのカラカラという音が響いていた。

―翌日。

「むぅ……」

廊下を先人をきって歩くのはナギだ。　その後ろにはマリアとハヤ

テがいる。

「どういうことだ……」

ナギの表情が怪しいのは決して体調が悪いとか眠いとかそんな理由ではない。

数々の廊下、部屋の中を確認すると多くの家具が日の光を浴びて輝くほどに手入れされていた。

「キレイになっているではないか！」

ナギは驚きの声を上げる。隣ではハヤテやマリアが部屋の隅々をみていた。

（まぁ、一人でここまでやるとはなかなか……ですがこの細かいところはまだまだですね）

（テルさん、この家具は他のよりも年代物で丁寧な手入れが必要なんですよ！まだまだですね）

（（まだまだですね……））

できる使用人達の評価は厳しい。

しかし、昨日の失敗が嘘かのように掃除はできていた。　カオスな状態から大きな進歩である。　それを見たナギはフンと言った表情で

「まぁ仕方ない、合格点をくれてやる……クビはなしだ。　ところでテルはどうした？」

マリアに聞くとマリア人差し指を立ててしーっと静かにさせた。

「ナギ、あそこよ」

マリアが指をちょんとちょんと指すとその先にはソファに横になっているテルの姿があった。

「ぐおぉ～があぁぁおぉ……」

「両〇勘吉並みのいびきだな……」

「本当ですね、どうして今まで聞こえてこなかったんでしょう？」

ナギとハヤテは呆れながらも言うがナギは後でフッと笑うとテルに近寄り、起こさないように呟いた。

「これでお前も立派な三千院家の執事としての第一歩を踏み出した。

ハヤテよりはまだまだ格下だがな。これからも己の力を高めんと精進するがよい」

腕を組み、静かに言い放つナギ。するとテルが少しピクッと動き

「うんがぁ～」

ゴスッ

いびきと共にナギの頭に寝返りのチョップが直撃した。

「……」

ナギは額に青筋を浮かべる。マリアとハヤテは冷や汗をかきながらオロオロしている。

「貴様に『終わりのない終わり』をくれてやる……」

「お嬢様！レクイエムの発動は止めて下さい！」

ナギが精神体を発動しそうだったのでハヤテが全力で止めに入った。

それを見ていたマリアはクスリと笑い二人に言った。

「その内起きますよ。休ませましょう……」（これからも頑張ってくださいテル君……今はあなたの仕事を頑張って下さい」

「うんがぁ〜」

マリアの心の呟きに一瞬返事したように聞こえたがマリアはそのまま聞き流した。

こうして、ダラダラ執事のクビは免れたのである。

第１０話・改～人生やりこめる仕事は一つでも見つけろ～（後書き）

まぁ、たいしてパワーアップしたか分からなかった１０話・改です。

最近、展開が分かんなくて迷っていたときに、「じゃあ１０話書こうかな」と思ったのがきっかけです。　微妙な完成度だったかもしれませんがどうだったでしょうか？　感想や意見をお待ちしています。

では。

第１０．５話～人間簡単に変われはしない～（前書き）

こんにちは、投稿の間隔が少し空きました。スイマセン。

今回の話は１０話のオマケです。　短いですがどうぞ

第１０．５話～人間簡単に変われはしない～

「ぐおぉごおぉ～」

注意。今回の話はテル君が主役ではありません。

「まぁ、なにはともあれクビが免れて良かったですねマリアさん」

「ええ、まだまだ荒々しい掃除ではありましたがこれから頑張ってもらえればいいですね」

時は１月１０日の朝。　賑やかな朝の光が廊下の窓から差し込む三千院家、マリアとハヤテはナギが学校へ行ったので自分たちの朝食をとるために食堂へと向かっていた。

善立　テルのテストが終わり、一息ついた三千院家の使用人たち。

「なんだかんだでテルさん、これだけできたら普通に料理とかもできそうですね」

ハヤテは目を輝かせながら話すがマリアは顔をしかめて

「いや、掃除ができたからって料理まで上手くなるとは……」

「何を言ってるんですかマリアさん！　テルさんはやればできる子だったんです！　一つの家事ができるようになったという事は、料理の方も上達したに違いありません！」

ハヤテは技術的にテルが成長したので料理の腕も自然と上がったと考えていた。

「はぁ……そういう事になっていればいいのですが」

「はい、レベルアップは宇宙の法則です」

マリアの言葉にハヤテは頷き、食堂の中へと入った。

「……」

いつものようにテーブルが置かれているはずだったが今回は違った光景が目に入った。

キッチンの役割を果たしているこの食堂には数々の食器や道具が置かれているが辺りは食材や道具で散らかっていた。

「こ、これは……」

「なんですかこの惨状は……」

二人は少し考えたが直感的に察した。　明らかにテルの仕業だと。

「テルさんしかいませんよね、お嬢様も学校に行ってますし……」

「ええ、一体何を張り切って作ったんでしょう？　あら、あんな所に何か入ってそうな鍋が……」

マリアが指を示すとそこには鍋フタをして回りにはソースらしきものが飛び散っている鍋があった。

「なんでしょう……あそこだけ異様なオーラを出しているんですが……」

ハヤテは鍋から感じる緑色のオーラに嫌な感じを覚えた。　何故緑色なのかは分からないが……

「マリアさん、中を確認してきます」

「ええっ！！ハヤテ君何言ってるんですか！？　あのオーラ見て下さい。明らかにカオスの詰め合わせですよ！？いくらハヤテ君でも死んでしまいます！！」

ハヤテの自殺とも言える発言にマリアは慌てて引き止めるがハヤテは目をキリッとさせて返した。

「でも、アレを処理しないことにはおちおち僕らは食事をとれません、戦わなければ生き残れないんです！」

ハヤテは意を決して鍋の中を確認する事にした。

「くっ！　なんだこのプレッシャーは……」

ハヤテは鍋へと近づく度に感じる重圧に額から汗を流した。

（一体何を作ったんだろう。　マシな料理であればいいんだけど……）

ハヤテはあの惨状を見ておきながら淡い希望を持つがその希望は一瞬にして吹き飛んだ。

「ん？」

足に何やら固いものがカツンと当たった。　置いてあった物に気付かず、足で蹴ってしまったようだ。

「……」

ハヤテはその蹴った物を見て顔をひきつらせた。　それはよく大工が使ったりするドリルだったのだ。

（一体何を削って料理したんですか！　ドリルで削るほどの食材は屋敷には置いてないのに！）

ハヤテは心の中で突っ込んだがこの程度では終わらない。　次に目に入った物は

（コレはゴム風船？　うわっ！　こっちは洗剤だ！）

コレはヤバいよ、どれぐらいヤバいかっていうとマジでヤバい。とハヤテは鍋の中に潜んでいる魔物を前にした。

「マリアさん！」

「は、はい！」

ハヤテはクルッと振り返ってマリアに言うと親指を立てて続ける。

「後の事は頼みましたよ！」

そう言い放つとハヤテは唾を飲み込み、一気に鍋フタを持ち上げた。

「うおっ！！？」

ハヤテは思わず声わ上げてしまった。　それもそのはず開けた瞬間、緑色の光が放たれたかと思うと更には緑色の煙がハヤテを包んだ。

そしてハヤテはしばらくすると二三歩ふらつきながら下がると

「……」

ドサッと後ろに力無く倒れた。

「えっ！？　ちょ、ハヤテ君！？　ハヤテくうぅぅぅん！！」

まるで死んだかのような表情のハヤテをみてマリアはパニックに陥った。

その数十分後にハヤテは目を覚ましたが何を見たのかは全く覚えていなかった。　むしろハヤテは思い出したくないとマリアに言っていた。

因みにあのモンスター料理は後でＳＰが美味しくいただきました。

何人か昇天しかけたけど……

「ぐおぉごおぉ～」

そんな事が起きているとは知らずテルは爆睡。　全く無責任な男である。

結局、テルの料理の腕は全く治っていなかった。

第１１話～ベタだと思っていてもそれは強力。悪いこととしたなら取りあえず謝ってみる

まず最初に謝罪から入ります。スイマセン。　第１０話のことです。　間違えて削除してしまったため大変迷惑を掛けてしまったと思います。　後々また上げることになります。　ホントスイマセンでした。

謝って始まると気分悪いと思われますがどうぞ読んで下さい。

第１１話～ベタだと思っていてもそれは強力。悪いこととしたなら取りあえず謝ろ

「うんがぁぁごおぉ～」

１月１０日月曜日。　テルが屋敷にやって来て３日目となった。
無事テストに合格し、案の定疲れ果てて豪快な寝息をたてるテル。　しかし……

―彼が寝ている間にも世界の時間は普通に回り続ける。

「は―。それにしてもお嬢が学校に行って留守だと、屋敷の中も静かだね～」

三千院家の広大な庭。その飾られた岩の上から気の抜けた声が発せられる。

ちなみに喋っているのは人ではない。

「最初のセリフをトラが喋るなよ。　新規の読者が混乱するだろ？」

ハヤテは箒をもちながら人語を話している生物に不快な言葉を掛ける。

「久々の……いや、

この小説だと初登場だってのにつれないねぇ～借金執事は……」

悠長に人語を話すこの動物は三千院家のナギのペットのタマ。外見からして完璧虎であり、尚且つ人語を理解する。

ちなみに、このタマが人語を話すのを知っているのはハヤテだけである。

「ていうか、お前は学校はいいのかよ？
ここに来る前は一応、高校一年生だったんだろ？」

「う゛…そりゃそうだけど……」

タマに学校の事を指摘されたじろくハヤテ。ハヤテは頬を掻きながら

「借金返済のために４０年ここでお嬢様の執事をする僕が……今更学校なんて……」

ハヤテがこの屋敷で働いて返す一億五千万の借金返済の期間は４０年。ハヤテは学校よりも手一杯の執事の仕事が優先と考えていた。

「分かってねぇなぁ～借金執事は……」

タマは空を見上げてため息をつくとそのまま葉っぱをくわえながら続ける。

「いいか？学校ってのはな、別に勉強するためだけに行くわけじゃねーんだよ。友と語らい泣き、笑い……そうやって生涯の宝物を作り上げていくんだよ。思い出っていう宝をな……」

「それは分かるがトラに言われたくない」

ハヤテはまともな事を言うタマに素っ気なく返す。

「身もフタもない奴だねぇまったく……」

タマは薄く笑った。ハヤテはハヤテで何様だといった表情。

「ハヤテくーん。　ハヤテ君どこですかー。」

突如、一人と一匹の耳に聞き慣れた声が聞こえた。マリアである。
　こちらに向かって来ているのが見えたタマは慌ててその場を去った。

「ああハヤテ君、こんな所にいましたか？」

タマが去り、今いるのはハヤテとマリアだけださっきも言ったようにタマが喋れるのを知っているのはハヤテぐらいである。

「はい。　えっと……どうかしましたかマリアさん」

ハヤテはマリアに聞くがマリアは少しとまどいながら

「いやその……ハヤテ君にちょっとお聞きたいのですが……」

「へ？ケータイ電話ですか？そーいえば持ってないですね」

「そうですか、やはり持ってませんか……」

「ええ、今時の変身ヒーローもケータイで変身する時代ですからね、ないと不便ですよね」

「まぁ別に変身しなくていいんですけど……」

マリアはそう返すとハヤテに長財布を差し出した。

「不便なのは確かなので……お金は出しますから、今からちょっと買ってきていただけませんか？」

「ええっ！？　い…いいんですか？」

ハヤテは渡された財布に驚く。　高級感を漂わせる革財布だ。

「ですがその……」

マリアはニコリと笑いながら

「出会い系とかそういういかがわしいサイトを見るには使わないでほしいというか……」

「つっ！！　使いませんよ！！　そんな事には！！」

マリアの言葉をハヤテは全力で否定する。

「でも分かりました！！　さっそくケータイ買ってきます！！」

「あ、それとハヤテ君……」

樫の木でできた扉に手を掛けた時、マリアがハヤテを呼び止めた。

「はい？」

「いえ、最近ちょっとお疲れ気味のようですから、今日はお休みで良いので、街をぶらついてはいかがですか？」

「え？」

一瞬、間の抜けたような声を出していることにハヤテは気づかなかった。

マリアが述べた事はつまり、今日はもう執事の仕事をしなくても良いということだ。

「……僕なにか不味いことしました？」

ハヤテは恐る恐るマリアの表情を伺う。　ハヤテは自分が執事の仕事で何か不手際を起こしたと思っていた。

「いや違いますよ！　……だって最近、ロボと戦ったり、ナギの学校で色々あっただろうし……何よりハヤテ君、テル君の料理を見てからなんか疲れてそうなので」

マリアの言葉にハヤテはあまり思い出したくない思いだった。

「ま、まぁ少しやつれた感が……」

「詳しくは１０．５話を読んでください♪」

「誰に言ってるんですかマリアさん？」

「そんな事よりハヤテ君、ケータイを買って来てください。後でテル君にも買いに行かせるので」

（あれ？　誤魔化された？）

マリアの言葉にハヤテは心の中で呟く。

結局、ハヤテは気持ちを切り替えて屋敷から街へと出掛けた。

（さてと、私も仕事に行くところですがその前に……）

ふと自分のメイド服の臭いを嗅ぐ。実はテルの激臭がまだ残っているのだ。

（仕方ありませんね……一度着替えてから仕事に行きますか）

月曜日とは平日の始まりである。　学校があるものの仕事があるもの、これは三千院家も例外は無い。

その一方で。

「うんがぁぁごおぉ～」

三千院家の一室。テルが大きい寝息を立てている。

「んがっ！」

静まり返った部屋の中でテルは大きく寝返りを打ち、床に派手に落ちた。

「ふぁ～あ、よく寝た……」

頭をボリボリ掻きながら口がいっぱいになるほど大きな欠伸する。朝のエネルギーである朝食を取ってないせいか頭の回転が遅く感じた。

（ん？　なんか忘れているような……）

頭のなかで何かが引っかかっている。　大事な事があった筈なのだ。約数分、ボーっとしているとようやく頭覚めてきたのか

「俺の試験はどうなったァァァ！」

ガバッと起き上がり、即座にテルは部屋を飛び出した。

廊下を駆けて行くその速さはまるで加速装置の付いた島村ジョー。

彼が向かうのはある人物の部屋だ。

（ゼェ…ゼェ…ここかァァァ！）

息を切らしながら扉の取ってに手を掛ける。 テルが疲れているのは屋敷の中で迷ったためだ。 真っ直ぐ来たつもりなのだが

「マリアさァァァん！」

力一杯扉を開く。 テルの目の中にはマリアがいた。 いたのだが……

「……」

テルの目に映ったマリアは着替えようと服に手を掛けている時だった。 若干首から肩の白い肌が露わになっていた。

マリアは先ほど、部屋に戻り、テルの作ったカオス料理の臭いが気

になった為着替えをしていたのだ。

「……」

二人はまるで鉄の塊、ア〇トロンをかけたのごとく硬直。　しかしやがてテルが口を開いた。

「こんにちわ、サンタクロースだよ～（裏声）」

その瞬間、マリアは近くにあったコナン像を掴みオーバースローでテルに向けて投擲。茂野吾郎も顔負けのジャイロボールと化したコナン像は放物線を描く事無く、テルの顔面にガツンと直径２０センチ位の鉄塊が直撃した。

「ぐほっ！」

コナン像の威力に圧倒されテルは床を転がる。　マリアは顔を真っ赤にさせてどこからかリモコンを取り出し、赤いボタンを押した。

ゴゥン…ゴゥン

「あ？」

突如、真上から聞こえる機械音にテルは上を見上げる。　そこにはテルよりも遥かに大きい鉄の塊が吊されていた。

「三千院家はいつからカラクリ屋敷に？」

そんな事お構いなしに吊されていた塊がテルを目掛け落下した。

「ギャアアアア！！」

その時三千院家を揺るがす轟音が叫び声と共に響いた。

―そして少し落ち着いた後。

「いや、あのホント…スンマセンでした」

頭に巨大なタンコブを作り、鼻から血を出しているテルはマリアの前で正座をしながらひたすら謝罪。

「俺もその…久しぶりの登場だったんでちょっと調子乗ってましたスンマセンでした」

マリアはニコニコ笑いながら一本の脇差しを取り出し

「テル君、ゴメンで済むならこの世に警察と切腹なんて存在しませんわ」

白刃をテルに見せ付けた。　笑顔の下で激しい怒りが感じられる。

「あの…合格とか全く知らなかったんで、取り敢えずジャンクにするのは止めてくれませんか？」

「いや、ジャンクってなんですか？」

マリアはテルに突っ込みながらも白刃を鞘に納め、フゥと溜め息をつく。

「まぁそれはそうとして、テル君はケータイ持ってないですよね？」

「まあ、多分……」　（あれ、あんま怒ってない？）

テルは曖昧ながら返した。ケータイは記憶を無くした後には所持してはおらず、むしろ今まで持っていたのかさえ怪しい。

「俺が発見されたのが九十九里浜だったんで持っていたとしても海の中ですかね～」

「ああ、ありましたねそんな設定が」

マリアはそのまま続ける。

「やっぱり不便ですから今から買って来てくれませんか？　ハヤテ君も行きましたし……」

マリアはそう言うと封筒ん ら取り出しテルに渡した。

「いいんですか？」

「はい。　後今日はもう午後からお休みで宜しいので」

テルの言葉にマリアは笑顔で返す。　それはテルにとって逆に怖かった。

「いや、あの……マリアさ―」

「何ですかテル君？　別に怒ってませんよ～？」

「いや、その―」

「大丈夫ですよ、ホントに怒　って　ま　せ　ん　か　ら♪」

「……」

怒りのオーラが全身から発せられているのを感じたテルはもう駄目だといった感じで顔をひきつらせて

「スンマセンでしたァァァァァ！！！」

「あ、ちょっと……」

逃げるかのように部屋を飛び出したテルを呼び止めようとしたがテルは風のように消えた。

「少しやりすぎましか……」

一人残された部屋の中でコホンと咳をしてマリアは一人呟いた。

（全く、ハヤテ君といいテル君も……何故私はこんな扱いが……）

最近のマリアは扱いについて悩んでいた。　ハヤテに入浴を見られたり今度はテルとロクなことがない。　必死に謝っているテルに対してあの仕打ちには少し大人気なさを感じた。　まだ１７歳だが

—そんなこと知らずにテルは

「やっちまったよ、俺死にたいんだけどいいかな？」

私服一人街を歩くテルはあらんことを呟いていた。

（だが、やってしまったものは仕方無い、目の奉養になってしまった事も事実！）

目をキリッとさせてとんでも無い事を言うテル。

歩くの止め、見上げるは電化製品店。　ケータイを買う場所だ。

（失った信頼は後々取り戻す！なんか買って帰ろう！）

意外と執事は前向きだった。　それでマリアの機嫌が治るのはまた別だが。　しかもそれはマリアの金である。

第11話～ベタだと思っていてもそれは強力。悪いことしたなら取りあえず謝ろう

更新がなかなか進まない。他の人は1日更新してる人だっているのに……パソコン？高いっす、ムリッス。　バイト？　働く暇がないっす。　だからケータイで頑張ろう。時間掛かってもいいからやり切ろう。

ケータイでも使い慣れれば速くできる人もいるのですが……要するに自分が未熟って事で。

そんでもって今回の話。　ついに原作に介入していく訳ですが話がぶっ壊れない程度にやるつもりです。色んなキャラとの邂逅編に突入していく感じです。

意見や感想をいつでもお待ちしています。

第１２話～休日の過ごし方はよく考えて過ごせ～（前書き）

ちょっといつもより早めの投稿。　別に暇人とかではなくなんとか時間を使って書いてます。　え？勉強しろ？　サーセン……

では１月１０日のハヤテのごとくイン、テルバージョン始まります。
前から始まってますけど

第１２話～休日の過ごし方はよく考えて過ごせ～

クラウス「前回のあらすじはァ！！」

マリア「テル君がケータイを買いに行きましたとさ♪」

クラウス「マ、マリア！　セリフを取るな！　ただでさえ出番が少ないというのに！！」

マリア「あらクラウスさん、この小説でも第１２話でようやく登場ですね。　でも大丈夫、きっとこれから出番を貰えますわ♪」

クラウス「ほ、本当か？」

マリア「はい、まぁ本編に絡ませる予定はないかもしれませんけど……」

クラウス「な、なんだとォォォォォ！！」

第１２話～休日の過ごし方はよく考えて過ごせ～

―数時間後。電化製品店のスライドドアからテルが肩を落とした状態で出てきた。

「最近のケータイはちょっと色々プランありすぎだろ……」

彼の疲れの原因はケータイのプランにあった。　人よりもこういうのには少し疎いらしく数時間掛けてようやく買ったのだ。

「要は機械系がダメだったってことだよな……まぁそれより」

テルはポケットから先ほど買ったケータイを取り出し画面を開いた。

「カメラ付きってのは分かった。　だが画素ってなんだっけ？」

ＣＣＤや半導体をするアレです。

「いやよく分かんねぇよ！ってか作者もうろ覚えかよ！」

一人文章に突っ込みを入れるテルだが明らかにも一人言のため、周りから少しキツい視線を当てられた。

「ん？」

テルが見たのは画面のアドレスの登録件数だ。

「え？　なに？　今アドレス１０００人も登録できんの？」

１０００という数に惹かれたテルは自分のクリアレッドのケータイをいじくる。　しかし改めて考えてみると

（アレ？　俺登録できんの一人もいねぇじゃん……）

テルはガクッと肩を落とした。　あの不幸なハヤテでさえも学校に通っていた時代があり、友達も少なからず居ただろう。

しかし、テルは友達はおろか学校に行っていた記憶もなく、ハッキリ言って友達の顔や遊んだことを知らないテルにとってかなりキツい状況である。

（いや待て、ポジティブに考えてみよう……ケータイはメールしたり遊んだりして楽しむ為のじゃなくて電話をするための物だ！　ってアレ？　アドレスや番号なきゃ連絡もできねぇじゃねぇか……）

とぼとぼと重い足取りで家電製品店を後にした。

（そういえば朝と昼のメシを食ってないな）

数分歩いてテルはかなりの空腹感を感じていた。　考えてみれば昨日の朝と夜、そして今日の朝と昼は見事にご飯を抜かしていた。

育ち盛りの１６歳には胃袋が限界だった。

（どこかで食うか？　ジジィのラーメンに行ってもいいが……）

テルは追い出されたラーメン屋を思い出し、その方角を見つめる。

今は昼時だから結構混んでいることだろう。

「……めんどいからいいや」

色々考えた結果、そう呟くとラーメン屋の方角とは逆に歩き出し、更にラーメン屋から離れていった。

何分歩いただろうか、もう昼は過ぎただろうテルの胃袋は限界だった。

「ヤバい、もうムリ……死にたいんだけど」

もういっそのこと楽にしてくれという感じで目を泳がせ、足取りをフラフラとさせている。

「大体、ハヤテと全く会わなかったじゃねぇか、アイツどこほっつき歩いてんだよ？　なぁ、オジサン」

「いや、知らねーよ」

テルに突然と話し掛けられたサラリーマンはナンダこいつはといった感じで返すがテルは続ける。

「いや、別にアイツが心配じゃねーんだけどさ、アイツはどっちかというとツッコミじゃん？　ボケもいけるけどさ。ツッコミがいなきゃこの小説成立しねーんだけど……」

「だから知らねーっってんだろーが！　見ず知らずのサラリーマンにそういう事聞いてる時点で成立してねーんだよ！」

「今度アイツにメシ奢らせるか……」

「って聞いてねーし……」

サラリーマンの話をスルーしてテルただひたすらに歩きつづけた。

その後サラリーマンが会社に遅れてしまったのはまた別の話。

「ん？」

ふと立ち止まる。
空腹感とハヤテに何を奢らせるか考えていたからかテルはそれが自分の目に映るまで気付かなかった。

白い壁でできた巨大な施設にその施設の前に広がるグランド。そして侵入を許さないという金網が張られている。

「ここは……学…校か…」

その校門や風景を見てテルはボーっとしながら呟いた。

―都立潮見高校。

綾崎　ハヤテが執事になる前に過去に通っていた高校である。

（学校……か。俺もちゃんと学校に行っていたのだろうか？）

一応テルもハヤテと同じく１６歳で、普通に考えればお互い学校に通っている。

「そして満喫するんだよなスクールライフを……体育祭、学園祭、修学旅行、気になるあの子は隣の席、放課後スーパー告白タイム……ん？」

テルは言葉を止める。それは校門の所に男女が数人いたからだ。

「あれは……ハヤテか？」

中の一人に見知った顔がいること確認したテルは即近くの木に登って観察を続けた。

よく見るとハヤテは少女に腕を掴んでいた。　少女は恐らく、この学校の生徒だろう。

「なんでハヤテはこんな所に……」

テルはポケットから飴玉を取り出し、口の中に放る。空腹でも我慢していたが最早そんな事はどうでもいい。

何故ハヤテがこんな所にいるかは原作をご覧下さい。

そして次の瞬間、少女は衝撃の一言を口にした。

「綾崎君が好きです！！」

「あ？」

ガリッとテルは口にしていた飴玉を噛み砕いた。

（あ、あの野郎ォォォ！　何か知らんが告白されてやがるゥゥゥ！）

目を瞳孔を開き気味にしてなぜかそこでラブコメが展開されているのを眺めるテル。

キャンデーを取り出し、口に加える。　一体いくつ持っているのかそれは分からない

「……だから……付き合ってくれませんか？」

バキンッ

（あ゛あ゛あ゛あ゛ぁ！！ストレートすぎる！　だがァ！　そこに痺れる憧れるゥゥゥ！！）

テルは歯でキャンデーを噛み砕くきながら、視線を向けた。憧れと殺意の視線を

（……　今何か殺気が……）

突如、ハヤテの体に悪寒が走った。　しかしその殺気は吹き飛んだ。目の前の女の子に声を掛けられて

「綾崎君……」

「え……あ……その……」

ハヤテは顔を真っ赤にさせて口ごもる。　もちろん、告白した女子高生も顔が真っ赤だ。

そして木に居る悪魔はそんなことを

（さぁ言えハヤテ！　オゥケェでもイエスでも言ってみろォォォォ！　言ったら死刑だァァァ！！）

真っ赤とは程遠いブラックな感情を抱いていた。

しかし、テルの予想とは裏腹に

「その……ご……ごめん」

（断っただとォォォ！？　人生最後かもしれないその可能性を捨てたというのかァァァ！）

もはやテルは驚かざるを得ない。　更にハヤテは続ける。

「実は僕……二次元にしか興味ないんだ」

その瞬間、周囲の空気が冷たくなった。　もちろんテルの周囲も

「と言うのは冗談で、今は放っていけない人が―」

「あ……あ……綾崎君のバカ―！！」

ハヤテが言うよりも早く、女子高生の平手打ちがハヤテの顔面を捉えた。

「げふっ！」

強烈な一撃によりハヤテは地面に倒れ付す。

「やっちまったな……」

テルは地面に倒れているハヤテを見ながら呟いた。

「ああいう断り方をした方がカッコイイと思ったんだろーが、お笑い漫画のキャラはカッコ良く振られたりしないのだ」

怒りながらハヤテの所を去っていく女子高生を見ながら呟くがテルには腑に落ちない点があった。

（アレは簡単に言えばただはぐらかしたって感じだ。　アイツ……他に誰か好きな奴いんのか？）

ボキッ

「ん？　なに今の効果音」

テルはアレっといった感じに襲われる。　何故か体が重力に従い

落下していた。

大変迷惑な話だが要はテルが登っていた木の枝がへし折れたのだ。

「え、ちょっ、ま――」

ドスン！　とテルはそのまま垂直に頭から落下した。

「アレ？宗谷君、今何か音が聞こえなかった？」

「いや、別に？　空耳じゃね？」

実際彼らの後ろにテルがいるのだが気づかれなかった。

（おい待て、なんで俺に不幸のスキルが……）

テルは二人の会話を聞きながら自分の意識が遠のいていくのを感じた。

第１２話～休日の過ごし方はよく考えて過ごせ～（後書き）

コレは少しグダグダになったかもしれません。　一応直したんですけど……１０話の方はもう少し後になります。パワーアップして上げたいと思うので頑張りたいと思います。

しつこいようですが意見や感想を宜しくお願いします。

第13話～食事と睡眠を邪魔される。コレ一番腹立つコンチクショウ～

「はぁ……」

ここは負け犬公園。名前に疑問を感じている人もいるだろうが気にしないで頂きたい。　そのベンチに一人の少女がため息をついていた。

（どうしてあんな事しちゃったんだろう……）

彼女の名は西沢　歩。公立　潮見高校の生徒でハヤテの元クラスメート。　今彼女は自責と後悔の念で深く落ち込んでいた。

（いきなり殴っちゃったんだ……もう私、嫌われてるかも）

夕方だというのに昼間の出来事を思い出す。　上ではカラスが馬鹿にするよう鳴いていた。

歩はハヤテに嫌われたと思いがちだが、ハヤテ本人はそんな事は思っていない。　が、歩が知っている筈もなかった。

（大好きな人なのに、あんな事したら、もう仲直りも……諦めるしかないのかな）

ただひたすらに時間だけが過ぎていく。　想いを告げた時にはぐらかされた事に腹を立てて平手打ち。自分はなんという過ちをしたのか。

ふと夕日を見つめる。　紅く滲む光がやけにまぶしかった。

（帰ろう……）

と歩がベンチを立った時三人の男が現れた。

「ＨＥＹ、お嬢さん何してるのォ？」

若干間延びした声で声を掛ける男はグラサンでアフロの奇抜なスタイル。

一方はピアスをしたモヒカンとスキンヘッド。いずれにせよガラの悪い人達には変わりない。

「なんか浮かない顔してるねェ、俺達と一緒に遊ばないかい？」

（うわ〜　もう有り得ない位、ベッタベタな展開だよ）

流石の歩も危機を感じる。　これはお誘いだ。了承したら最後、この小説が電撃終了してしまうくらいマズい事に巻き込まれそうだったからだ。

「ええっと……私帰らないといけないんで……失礼しまぁ〜す」

トトトと二人の横を通り過ぎようとしたがモヒカンに行く手を阻

まれた。

「つれないなァ、ちょっとだけだって」

モヒカンとアフロはニヒルな笑みを浮かべて迫ってくる。　もはや逃げ出せる状況じゃなかった。

二人の手が歩に近づく。

（どうしよ～このままだと私、知らない所に連れ去られて×××な事されるんじゃないのかな？）

歩は涙目になりながら恐怖を感じる。　一瞬、頭の中には笑顔のハヤテが浮かんでいた。

（だ、誰か助けて！）

歩の必死の願い。　しかし考えてみてもこの公園には自分と不良達しかいない。　あるとしても自販機とゴミ箱、ダンボール。　救いを求めても望みは薄かった。

男が歩の肩に手を掛けようとした時

「オイ」

「あん？」

突如、モヒカンは後ろから声を掛けられ、振り向いた。

「へ？」

一瞬、間の抜けた声。戸惑うのも当然だった。なぜなら、振り向くと筒状のゴミ箱を振りかざす男の姿が目に入ったからだ。

そんな疑問もわずか一瞬である。次の瞬間には男はゴミ箱を力一杯に振り下ろしていた。

ドゴッ　という効果音。男の体半分まで綺麗に収まるようゴミ箱が被され、モヒカンは体を棒にして倒れた。

被された時の衝撃が強かった為かモヒカンは気絶してしまっていた。

「よ、よっちゃあぁぁぁん！　お、お前、なんだよ？」

慌ててスキンヘッドの男がモヒカンに駆け寄り、男を睨んだ。

その男は黒い短髪、死んだ魚のような瞳、ダルそうに頭を掻く仕草をするのは一人しかいない。

「ギャーギャーギャーギャーやかましんだよコノヤロー。　おちおち寝てもいられねぇじゃねーか」

善立　テル　その人である。

「なんですかァ？　もしかしてこの子の彼氏ですかァ？」

アフロがポケットに手を突っ込み、挑発的な口調で尋ねる。　歩は彼氏という言葉に

「かかか彼氏！？」

顔を真っ赤にさせ、手をブンブン振り回した。

「オイオイ、バカ言うんじゃねーよ。　俺はそのジミーとは全く関係ねぇ」

テルはぶっきらぼうに返した。

「いや、あの、私ジミーじゃないです」

歩はテルに突っ込んだ。　アフロは笑いながらテルと向き合う。

「なになに～関係無いんだったら邪魔しないでくれるマジで。　これからこの子とランデブーするところなんだけどさぁ」

その言葉を聞き、今度はテルが微笑を浮かべて口を開いた。

「あ？　とんでもねぇ所にランデブーする気じゃねーのか？　お前、この原作何だと思ってんだ？　そんな事してみろ、このレーベル潰してぇのかコノヤロー」

さらにテルは指を示して続ける。

「大体、今時ランデブーなんて古ィーんだよ、どうせならメガドライブだろうが」

「いや、メガドライブの意味が分かんねえよ！　上級版なのかソレ？」

アフロはテルに突っ込んだ後、ニヤニヤとしながらテルに言う。

「邪魔するんなら痛い目に遭うよマジで一人で勝てると思ってんのマジで」

アフロとスキンヘッドは気持ち悪い笑みを浮かべてテルと向き合う。　ただならぬ雰囲気を歩は感じていた。

（あわわわ……どうしよどうしよ、警察呼ばなきゃ！）

歩は状況を監視しつつポケットの携帯電話に手を伸ばした。

だが、歩はその時見逃さなかった。

テルが薄く笑ったのを

「まぁ一人ならなぁ……」

そう呟いた後、テルは後ろを見て大声で叫んだ。

「オッサァァァン！　ソフトクリーム３つ入りまァァァす！！」

「合点承知！」

テルの後方からイキのきいた声がした。　歩が目を凝らしてみると見たことのあるソフトクリーム屋の山車と老人だった。

「ヘイヘイヘイ！！」

老人は軽快なリズムを口ずさみながら３つのソフトクリームを投擲。

一本は山なりに二本はテルに向けて真っ直ぐ投げられた。

テルは二つのソフトクリームを掴むとそれぞれ不良達の顔目掛け

「そおぉぉぉい！！」

気合いの掛け声のもと、思いっきりぶちまけ、アインクローで二人の顔を鷲掴みし、そのまま地面に後頭部から激突させた。

そして最後に山なりに投げられたソフトクリームをテルは掴み取る。

（す、スゴい……）

歩はソフトクリームを食べるテルを見ながら感嘆していた。　テルはゆっくりと近寄りアフロの男の胸倉を掴む。

「オイ、ちょっと腹減ってんだけどマジで。ここらで優しく奢ってくれる心優しいお兄さん達はいないかなぁ」

テルは額に青筋を浮かべながらソフトクリームでドロドロ顔のアフロの体をガクガクと揺らす。　男は悲鳴をあげながら

「ヒィィィイ！　奢ります！　奢ります！　っていうか奢らせて下さいお願いします！！」

（恐喝事件だ……ある意味この人の方が危ないかのかな？）

歩はテルに疑問の眼差しを送ったがそこは命の恩人。　礼をいわない訳にはいかない。

「あの……助けてくれてありがとう」

「ああ、気にすんなよ。　最近のガキは全くなってねぇ」
「いや、君も大体私と同じくらいだよね？」
歩はテルに突っ込んだ。　だが歩には疑問が残っていた。
「あの……さっきは一体どこから来たのかな？全く姿が見えなかったんだけど……」
「ああアレね」
歩の言葉にテルは頭を掻きながら説明する。
「イヤ、ちょうどダンボール箱を見たら被りたくなって、どうせやることもなにも無いからジッとしてたら寝ちゃって、そしたらうるさい声が聞こえたっていうか……」
（不審者だァァァ！この人不審者だよ神様ァァァ！！）
「ま、まずはなんでダンボールを被ってたのかな？」
「何故ってお前、アレだよ、ダンボール箱を見たら被りたくなるだろーが」
「イヤイヤ、ないない」

テルの言葉に歩は手を横に振り即答。

（マズいんじゃないかな？　結構危なそうな人だし、サッサと帰るのが上策！！）

「なぁオイ」

歩はそそっと帰ろうとしたときである。テルが呼び止めた。

「近くのファミレス行かねーか？　どんだけ食ってもこいつらが奢ってやるってよ」

「……」（イヤイヤ落ち着け、西沢　歩！　罠だよ罠。　そんな手に私がのるとでも―）

「行きます！　絶対行きます！マジ行きます！」

歩はのった。瞳を星のように輝かせながら

続く。

第１４話～遠く輝くは誰かの星～

クラウス「　今回ばかりは言わせてもらうぞ！　前回のあらすじはァ！」

マリア「テル君がファミレスへ入ったとさ♪」

クラウス「だ、だからマリア！　私のセリフを取るな！　出番がなくなるだろう！」

マリア「嫌ですわクラウスさん。　こうしてあらすじを説明に出ているじゃないですか？」

クラウス「そのあらすじを説明する役をお前が奪っているのではないか？」

マリア「安心して下さい。　ここはクラウスさんの領域ですから……私がいない時は思う存分喋ってくれてもいいんですよ」

クラウス「そ、そうなのか？」

マリア「ええ、ただ本編での出番は減るだけですから♪」

クラウス「なんだとォォォォォ！？」

第１４話～遠く輝くは誰かの星～

「……」

ここはファミレス店内、窓際の席。　歩とテルは心優しい不良三人組の奢り（若干テルによる恐喝）でファミレスに来た。

「ん？　どうした？　食わねえのか？」

テルは手に持っていたスプーンを止め、さほど食事が進んでいない歩に声を掛ける。

「いや……ただよくそんなに食べられるね」

歩が食事が進んでいなかったのは別に調子が悪かったとかそういうのではない。　ただテルの食欲があまりにも旺盛な為、唖然としていたからだ。　テルはオムライスを食べる手を止めない。

「いいか？　男はこれ位食べなきゃ明日のエネルギーが足りなくなっちまうんだよ。　あと俺の胃袋は宇宙だから……そこに食べ物がある限り俺は食べ続ける」

「随分と昔のネタをやるね……分かる人いるのかな？」

歩はグラスに注がれたジュースをストローでかき混ぜた。　実際、歩も食べる事は決して嫌いな訳ではない。　食に興味があるだ

けだ。

大食らいではない。

だが歩からしてテルの食欲は凄まじかった。　店内に入ってから数分位の間にオムライス、スパゲティ、カレー、チャーハンを平らげており、今は二杯目のオムライスを食している。

「金の事は気にすんなって、心優しい三人が奢ってくれるってよ……な？」

とテルは後ろの席に正座している三人組に視線を向ける。

「ひっ！は、はい！！」

三人組は涙目で返答する。ちなみに三人は円椅子に正座しているので足に円角が食い込んで痛い。

「イヤ、奢りじゃなくて君が恐喝したんじゃ……」

歩はテルに疑問の言葉を掛けるがテルはイヤイヤ違うぜと言った感じで続ける。

「いいかジミー。　この殺伐とした世の中、感謝されて快くお礼してくれる人はいねぇのよ。　遠慮なんかしたらそれでこそ失礼だろうが」

「どんな持論？　後さりげなくジミーって言ったのは気のせいかな

？」

歩はムッとしたのかテルに向ける目を細める。　が当の本人はオムライスをガツガツと食べている最早聞く気ゼロだ。

「ちょっ！？　聞いているのかな？」

歩としてはかなりイラついている。　テルは食べながら

「あーあ、聞いてる聞いてるって、アレだよお前、俺はオムライスは半熟派だからここのオムライスはイマイチだと思う」

「全然聞いてないじゃん！」

お構いなしに食べるテルに歩は少し怒りを感じた。　食べる事しか頭に無いのかと言った表情である。

「はぁ……」

ため息が思わずこぼれた。　1日に色々ありすぎたのか疲れを感じる。　ふと窓の外を見ているとテルが気になったのか口をひらいた。

「そういえば、お前さっきから冴えん顔してんな」

「え……」

てっきりまた変な事を言うのかと思ったがまともな事だったので驚いた。

（私……顔に出やすいのかな？」

心辺りはある。　恐らくは今日、偶然再会した想い人に形として振られた事

その人を殴ってしまった事。

「……」

あまり思い出したくなかった。　できればこのまま忘れていたかった位だ。

「何かあったのか？」

テルは目を細めて歩に話しかける。　歩は少し気落ちした感じで呟く。

「別に……初対面の人に話しても仕方ないから……」

「何か後悔にまみれた顔してっからさ、話せば楽になる事もあるかもしれないぜ？」

テルは歩に促す。もうテルは食べるのを止めていた。

歩の中では様々な想いが巡っていた。　実際は辛い。　心が張り裂けてしまいそうなくらいに

「実は……好きな人を殴っちゃったんです」

気付けば口は開いていた。

本来、好きな人という単語で顔を真っ赤にしてしまうだろう。　いつもの歩なら。

しかし今はハヤテを殴ってしまったという大きな後悔と罪悪感が強い。

「片思いで……なかなか話した事なかったけど今日想いをつげて、断らて……」

―ああ、一体何を言っているのだろうか

しきりに歩は思う。何を話しても何も解決しないのに

―もう戻ることはできないのに

いっそのことここで諦めるべきだろう。　そうすればこの苦しみから解放されるだろうか。

「でも、もういいんです。　諦めるしかないから……何かはぐらかされた感じだったけど……切り替えも大事ってことで―」

「最低なヤツだなそいつは」
歩の言葉はテルによって遮られた。
「え？」
歩はキョトンとした表情。　テルは小馬鹿口調で続ける。
「だってよ。そいつはお前のせっかくの想いを無駄にして適当な理由であしらったんだろ？　最低じゃねーか」
「そんな……」
歩の中で何かが沸き起こる。　怒りだ。　ついでに言うと歯がゆい。
（この人は何も知らないくせに……）
どうして初対面の人がハヤテの事を語れるか
「だったら殴られて当然」
「止めて！！」
歩は気付けば既に口が開いていた。
「ハヤテ君は……そんな人じゃない！　すごく優しいし、誰よりも頑張ってた！　私も助けられた事もあった！　君は何も知らないで

しょ！！」

歩はハッとした。　気付けば立ち上がっていた事に、周りは人は居なかったが突如恥ずかしさが襲ってきて、歩は静かに座った。しばらくしてテルが口を静かに開いた。

「充分じゃねぇか」

「え？」

「それだけ想ってんなら……ソイツの事を分かってるなら……諦めるには早いだろ？」

意外にもテルがさっきとは違う雰囲気で話すのに歩も戸惑った。

「でも、私は殴っちゃって……」

「理由があったんじゃねぇのか？　人に言えない理由が……誰にだって知られたくねぇモンが一つや二つあるもんだ。　殴ったのは仕方ねぇ後で誤りゃいい」

（無茶苦茶だ……）と思う歩にテルは続ける。

「悪いことじゃねぇだろ。　一直線の想いってのは人間、一人の人間を想い続ける事は難しいもんだ」

歩はその言葉を聞き、思い出す。　ハヤテとの出会いから今に至るまで、この気持ちは変わることはなかった。

改めて確認する。自分はまだハヤテが好きなのだと

「だからよ、その揺るがねぇ気持ち大切にしろや」

「うん……大切にする」

自然と胸に手を当てた。既に笑顔が戻っているのを見たテルは小声で聞こえないくらい呟いた。

「しかし、ハヤテも隅に置けないね～」

「え？　何かな？」

「いんや、なにも」

呟いた事を悟られまいとテルは知らんぷり。そして手を高々と挙げた。

「すいませーん、ビッグチョコレートパフェ３つお願いしまーす」

「てかまだ食べるの！？」

歩の突っ込みが響いた。

その後、テル達は店を出る。外はもう真っ暗だった。
「やべ、遅くなっちまった。　マリアさんに何も買ってねぇ」
テルはダルそうに頭を掻きながら空を見上げた。
「さらばだジミー。　達者でな」
「あ、ちょっと待ってよ！」
「なんだよ……」
テルは歩に呼び止められ振り返る。
「歩だから……」
「あん？」
今度はテルが間の抜けた声。
「ジミーじゃなくて　西沢　歩。　君は？」
テルは真面目に言う歩に対してめんどくさそうに
「通り過がりの善立　テルだ……覚えなくていい」
そう言うと一人肩に手をやり、疲れた感じで歩き出した。

「テル君か……」

歩は夜空を見上げる。　たくさんの星が見えた。　色々なモヤモヤ消えて清々しい気分だ。

（ハヤテ君……私はまだ……）

西沢　歩は諦めない。自分の想いの為に、自分の暗かった道を照らしてくれた人物がそう言ったように

夜空の星は果てしなく輝いていた。

（人の恋沙汰にはあんま関わりたくなかったんだが……どうも俺はとんだお節介やだったらしい……）

ファミレスを後にした夜の帰り道。テルは一人歩きながら自分について考えていた。

（記憶がなくても人間に染み付いた性格はなかなか消えないらしい。だとしたらこの性格、かなり損だな）

若干、疲れがある。１日休日のハズがとんだ残業だ。最もコレは執

事の仕事とは関係ないが。盗み聞きだったが二人の事情からして放って置けなかったのだ。

（まぁ、いいさ……俺はゆらりとぶらりと俺のやり方で生きていくさ）

テルが行くは何の道だろうか

今はまだ何一つ自分の道は見えない

だが、この心のままに生きればその内、道は見つかるはずだ。

（では少し遠い場所へケーキでも買ってくるとするか）

心の中で呟くとテルは星空見上げながら歩き続けた。

―その後、三千院家。

「あらテル君、コレは？」

帰宅後、テルは台所にいるマリアに会いに行き、小さな小箱を手

渡した。

「……ケーキです」

その一言。　するとハヤテが入ってきて、そのケーキ見た途端に目の色を変えた。

「ま、マリアさん！　コレ有名な翠屋のケーキですよ！？　テルさん海鳴市まで行ってきたんですか！？」

「まぁ、お土産がてらに……」

眠たいのか目を細めたままテルは呟く。

「わざわざ遠くまで……ありがとうございます♪」

マリアは今日一番の笑顔をテルに向けた。　テルは眠気も吹っ飛び、心の中でガッツポーズをした。

（イエェェェスッ！！　喜んで貰えてるから多分怒ってないぜ！）

しかしマリアは笑顔で……しかし黒いオーラを出しながらテルに言った。

「まぁ、それで今日の事が許される訳ではないですが」

「うっ！」

「ついでにこのケーキは私のお金で買いましたね？」

「……」

もはや返す言葉もみつからない。誤魔化しきれなかった。

（今日の事って何だろう……）

ハヤテは一人疑問に思っていた。

色々とハプニングにみまわれながらも１月１０日はこうして過ぎていった。

第１４話～遠く輝くは誰かの星～（後書き）

終わってみて読んでみたけどイマイチでした。　心理的描写って難しい。　いかに自分のレベルが低いかわかります。

今回は西沢さんがエピソードの原作第四巻から。　ハヤテを殴ってしまったという罪悪感から顔合わせれないどころか諦めるという事態に。　でも好きな人を殴ってしまえば大切な人を傷つけたという気持ちになるのではないかと……西沢さんでも恋する乙女です。

だからこそ悩んだりするのではないか

長々とスイマセン。　意見や感想お待ちしています。

ハヤテのごとく！　すべらない話（前書き）

こんにちは。　今回はこの小説の初、企画です。　タイトルとかにはあまり突っ込まないで下さい。

文とか構成がアレですけど許して下さい。

ではどうぞ。

ハヤテのごとく！　すべらない話

皆さん、知っているだろうか　東京練馬区に存在するお金持ちの屋敷を……

知っているだろうか、ひょんなことからその屋敷のお嬢様に仕えることになった
少年執事のことを……

お嬢様と執事はちょっぴり天然さんでちょっぴり勘違いしていて

それでも深い絆で結ばれているのです。

そしてそんな彼らの前に執事と呼べるか分からない、異常で奇っ怪な執事が一人……

彼の名前は……

ハヤテ「そんな事はどうでもいいんですが……」

ナギ「おお！　マリア！　ハヤテが長ったらしいオープニングを無視したぞ！」

マリア「ナギ……男の子には色々あるんですよ……」

テル「オイオイ、いっちょ前に反抗期か？止めとけって、お前もいつしか大人になったとき、その時期を死にたくなるほど恥ずかしくなるはずだ」

ハヤテ「マリアさんもテルさんも何言うんですか！？　それにテルさんも同じ子供ですよ？」

テル「バカヤロー。　男は上の方と下の方が立派になれば……」

ハヤテ「イヤ、もういいんで！！　そういうのはいいですから！！……今日はホント、大切な事を言おうとしてたのに」

ナギ「なんなのだハヤテ？」

ハヤテ「聞きたいですか？　お嬢様？」

ナギ「う、うむ……」

テル「なんだよ、勿体ぶらず早く言えや」

ハヤテ「実は……」

一同「「「実は？」」」」

ハヤテ「累計アクセスが一万を越えたんです！！」

テル「……で？」

ハヤテ「え？」

テル「いやだからさ、それだけ？」

ハヤテ「まぁ、それだけです」

テル「ふ～ん、あっそ」

ハヤテ「イヤ、ちょっとテルさん？一万ですよ？ゼロが四桁ですよ？凄くないですか！？」

テル「凄いって言われてもなぁ……そんなんで喜んでんの？」

ハヤテ「だってこの小説を読んでくれた人がそれだけいるって事で……」

テル「甘ェ、甘ェよハヤテ……チョコレートよりも甘ェ」

ハヤテ「どういう事ですか？」

ナギ「それは私が説明してやろう！」

ハヤテ「お嬢様！？……というか、なぜマント？」

ナギ「いや、気分だ気分……では説明するぞ！！」

ハヤテ「はぁ……」

ナギ「この現代社会、数字は確かに物を言う。　だが数字というのはあまりにも現実的だ」

ハヤテ「というと……」

ナギ「うむ。確かにこの小説は一万という数字を叩き出した……当然作者はウキウキする。だが知らなかったのだ。」

ハヤテ「な、何をです？」

ナギ「あれは作者が一万アクセスを突破した後、いろんな小説を見ていた時だ。　ふと一つの小説に目が止まる。　なんて事無い、自分の好きなクロスオーバー系のネット小説だった。　そこで彼は知

ったのだ……作者自身が井の中の蛙だと言うことを」

作者「アレ？この人、たった3話で一万いってるよ……俺12話掛かったのに……アレ？　もう十万突破？　アレ？最新の話のタイトルに百万突破って書いてるぞ？　」

ナギ「言い表せない虚無感を感じてしまっただろう。　明らかに面白い文とストーリー、いかに自分が下か思い知らされた訳だ」

ハヤテ「そ、そんな……」

テル「だがよ……」

ハヤテ「テルさん……」

テル「作者自身も考えてみたのさ、確かに自分は下だ。　文とストーリーの構成とかがイマイチだと……だがそんなバカでも一つだけ負けてねぇモンがある」

ハヤテ「そ、それは？」

テル「意地だ。　俺もこんな風になりたい、これ位面白いストーリー書きたい。　ってな」

ナギ「そうだ。　作者は遥か雲の上の存在の人達から情熱と夢を貰ったのだ」

テル「取り敢えず今は色んな事を生かそうと必死になってやんなきゃいけない状況だって事だ」

マリア「私達も頑張ってこの小説を盛り上げていきましょうよ」

ハヤテ「そうですね……頑張りましょう！！」

テル「まぁ、そんなこんなでだ。一応突破したわけだし、この場を設けて色んな事をやろうじゃないか」

ハヤテ「あ、意見交換ですね……」

テル「いや、ここでは色んな暴露話をしようと思う。　作者の都合、裏設定、これからについてとか……」

ハヤテ「誰が得するんですか？それを聞いて」

テル「ハヤテにしてはキツいセリフだな……まぁ、読んでくれている人達により良くこの小説を理解して欲しいと思っての事だ」

マリア「まぁ読んでくれてる人達がそれを望んでいるかですが……」

ハヤテ「ていうか今更ですけどなんか作風が変じゃないですか？」

テル「ああそうだ。　この小説が雑談に走った時には小説の体系がガラリと変わり、セリフオンリーになる。　時間を掛けず話を作れるし、無駄を省き、作者も疲れず執筆可能……かなり地球に優しいエコじゃん？」

ハヤテ「テルさん、地球関係無いです」

テル「では始めるか」

ハヤテ「無視ですか？」

ナギ「まぁ最初は少しだけでこのバカテルについてだな……」

テル「おいナギ、バカとはなんだバカとは……」

ナギ「善立　テル。　１６歳。性別は男。作者がめんどくさい執事を頭に思い描いた結果、どこかのジャンプ漫画の主人公に似た性格になってしまった。彼の作る料理はまず誰もが近付けない領域であり恐らく父親譲りであると考えられる。両親は行方不明。　記憶喪失であるがなぜ記憶喪失になったかは不明。車に跳ねられてもまぁ大丈夫。作者もテルにはこれからどんどん酷い目に遭ってもらう予定。戦闘力は不明。てか戦う予定があるのかすら不明」

テル「なんだコリャ、アンノウンだらけじゃん」

ハヤテ「でもそういえばありましたね。　記憶喪失の設定が」

テル「そうなんだよ。　俺もこの話いつやるのか全く分かんねぇんだよな」

マリア「粗方決まっていればいいのですが作者はたまに勢いで書いてしまうので完成度がグダグダにならないことを祈りましょう」

ハヤテ「まぁそうですけど、２ヶ月掛けて３日程しか経っていないというのは大変ですね。次は１１日ですか……何の話でしたっけ？」

テル「どっかの誰かさんが今更入試するって話だよ」

ハヤテ「もう何の話かは大体分かりましたね」

テル「ああ、だが安心しろ。　この１１日に俺はあまり関わらない」

ハヤテ「ええっ！？　なんでですか！？」

テル「あん？　だってこの話、ほとんど誰かさんがメインじゃねぇか？　なんか色々嫌な目に逢いそうだし、俺はひっそりと飴玉でも食ってるんだよ」

ハヤテ「なんで飴玉なんですか！？」

マリア「あらあらテル君、仕事サボる気ですか？」

テル「いえ！　サボリませんよ！　むしろ働かせて頂きます！！主に！　世界平和の為に！！」

ナギ「なぜマリアの時はキャラが変わるのだ？」

ハヤテ「そこら辺の事もやりたかったんですけど時間が……」

ナギ「何！？　結局、少ししか分からなかったではないか！！」

マリア「もうグダグダですね……」

ハヤテ「またいつかやりますよ。　その頃は大分話は進んでるかもしれないですし……」

テル「イヤ実際分かんないよ？　それまでこの小説続いているか分かんねぇし……」

ハヤテ「ちょっと、不吉なこと言わないで下さい！！」

マリア「ではテル君、締めて下さい」

ハヤテ「不吉な事言わせたまま終わらせないで下さい！」

テル「えー、読者の方々、いつも読んでくれてありがとう！　みんなの期待に応えられるかわからないけど、一生懸命に、バカだけど芯を真っ直ぐに、この小説書いていきたいと思います。　色々な意見とか感想お待ちしています。これからも宜しくお願いします。

作者より」

ハヤテ「結局最後は作者の言葉で締めたよ！」

テル「次回に続く！！」

ハヤテのごとく！　すべらない話（後書き）

なんかグダグダですね。　結局話したのはテルの少しのプロフィール。　しかも不完全。　これからの展開とか色々語りたかったのに上手く出来ませんでした。　点数付けるなら赤点クラスかも……

でもこういう話も上手くやって面白く出来るようにしたいと思います。

儚い道だけど目指すなら止まらずにひたすら歩き続けていきたいと思います。　燃え尽きない程度に。

第１５話～夏を制する者は受験を制する？嘘だね、だってオレ制せれなかったも

―１月１１日。

（は～、それにしても昨日は西沢さんには悪いことしたな～）

屋敷の前の門で封筒を貫ったハヤテは心の中で溜め息混じりに呟いていた。

（でも今は女の子と付き合う資格ないし……でももう少し断り方が……でもああいう時、どうしたらいいのかなんて分からないし……）

屋敷の扉を開け、赤いカーペットが敷かれた階段を上がっていく。

実際、何故あんな断り方をしたのかは自分でもよく分からなかった。

しかし、歩の告白を受けた時にハヤテの中で気になる事があった。

（でもなんであの時……お嬢さまの顔が……）

ハヤテには脳裏に涙を浮かべ、悲しみの表情を浮かべるナギの姿が気になって仕方なかった。

（もしかして僕は……お嬢さまの事……）

その次の言葉を考える事は無かった。

「お嬢さま、お届けものが―」

ハヤテはナギがいる部屋の扉を静かに開ける。先程届いた封筒だ。

「おお、ありがと。　とりあえず封を開けてくれ」

どこからか声がする。ソファーからだ。見るとナギがふんぞり返って漫画を掲げて見ていた。１３歳の体には不釣り合いなソファーにはナギが横になってもまだスペースが余る。　はっきり言って姿勢が悪い。

「お嬢さま。　お嬢さまも女の子なんですから……そういう本の読み方は止めて下さい」

「お？……おお」

ハヤテは見てられずナギを起こして姿勢良く漫画を読むよう促す。

ナギは訳がわからずただ頷いた。

（妹の事が心配な兄の気分はこんな感じなんだろうな……これじゃ当分恋人なんて……）

お嬢さまだけで手一杯だ。　とハヤテは気を取り直してナギに質問した。

「ところでこれ何ですか？白皇学院からの書類みたいですけど……」

「ん〜？」
ナギは漫画を読みながら軽く返した。
「ああ、編入手続きの書類だろ？　お前の」
「ああ、僕の―」

「ええ！？　僕のってなんですか！？　僕のって！！」

一瞬の間があって、ハヤテはようやくナギの発言に対し大きな反応を見せた。

「だからお前が白皇に編入するための書類だよ」

「いやいや聞いてませんよそんなの！？」

「うん今、初めて言ったからな」

それは数日前。テルがハヤテ達と出会う前の話だ。　ナギに弁当を届けるために超名門校・白皇学院に向かったハヤテだが不審者と間違われ、色々あったのだ。

「で…！でも僕、前の学校退学になってますよ」

昨日ハヤテは久しぶりに母校へと顔をだしたのたが、既に両親が学費の残りを奪い、ハヤテを退学扱いにしてしまったのだ。

「ああ、とっくに知ってるよ。　そっちの資料も取り寄せたからな」

「僕、退学になってるの昨日初めて知ったんですけど……」

「ああ、そうなの……」

ナギは平然と呟くがハヤテは全く自分は知らなかったのにナギがとっくに知っていたことに驚いていた。　やはり金持ち、情報網もかなりのものである。

「で、でも！学費はどうするんですか？　白皇の学費なんて僕、払う自信はありませんよ？」

白皇は超名門校だ。そうなれば学費も当然高い。ハヤテにはそれを払う経済力はおろか、借金が億単位とあるのだ。

「何を言っているのだ。　そんなの私が出すに決まっているではないか」

ナギはまたしても平然に返した。　お金持ちならではの考えだろうか。

「で！！　でも！！」

「も～なんだよ～」

ハヤテの言葉を遮り、ナギは漫画を閉じてハヤテを不機嫌そうに見た。

「私と一緒に、学校行きたくないのかよ」

「……」

―僕がもう一度学校に

ハヤテはナギの言葉に胸から溢れるようなものを感じた。　自分の荒んだ学校生活。　バイトと、はっきり言って良いものとは言えなかった。　そんな自分が再び学校に行ける機会ができるかもしれないのだ。

ハヤテは今、正直に、ナギに深く感謝の言葉で一杯であった。

「あ…あ……あ…ありが――お嬢――――」

気付けばハヤテは涙を流していることに気づいた。　何故だろうか、込み上げくるものが多すぎて上手く言葉が話せない。

そしてそんな泣いているハヤテを見たナギは突如のことで驚いた。

「わ――っ！！　何、泣いているのだ！！」

「だって……だって……」

ハヤテはぐすりながら呟く。　ナギがなんとかしようと考えていると扉にマリアがいることに気づいた。

「……何、泣かせているんですか？」
マリアにしてもイマイチ状況が読み取れなかったようで、ぱっと見で主人が執事を虐める、そんないけない事を思ったのだろう。

「いやいや！！　私は何もしていないぞ！！」
ナギは全力で否定するがここでまたややこしい人物が

「あん？　何やってんのお前ら……」
黒髪、死んだ魚のような瞳をした男。　善立　テルだ。

テルはナギの前で体を震わして泣いているハヤテの姿を見て、顎に手を当てて考える仕草を見せて続ける。

「オイオイ、いくら何でもまだ早いだろお前らには……」

「こら、なんの話だ」
ナギがテルに言うがテルは続ける。

「最近の若者は乱れてるって聞いてるけど、戦国乱世並みの乱れ方じゃねぇか。　一応コレ全年齢版なんだからよ。　テルさんは認めません！　絶対に！！」

「人の話を聞けェェェェェェェ！！」

ナギのツッコミと共にテルの顔面にメガトンパンチがグシャっとめり込んだ。
暫くして……

「あのなぁナギ、ツッコミってば声あげて殴ればイイって訳じゃねんだよ」

顔面から鼻血が出ているのをテルはティッシュで抑える。　ナギは不機嫌に返した。

「人の話を聞かないお前が悪い」

「お前、全ての人間のツッコミがそんなのになってみろ、病院行き一杯だよ？　ツッコミの世界が崩壊だよ！」

「お前を今崩壊させてやるわァァァ！！」
ナギがハンマーを構えて今にも殴りかかろうとしたがマリアにより収められた。

「でもこの書類を見る限り、試験を受けなければいけないかもしれませんね」

マリアが書類片手に呟く。

「ハヤテが受験か……ま、頑張れや」

テルがハヤテの肩をポンと叩く。　他人ごとなのは確かだが、ハヤテはテルに聞く。

「テルさんはいいんですか？」
「なにが？」

「学校ですよ。　通っていたんじゃないんですか？」

ハヤテの言葉にテルは頬を掻きながら

「通うも何も……俺は学校に行っていたのかすら覚えてねぇの。どうしようも無いだろうが」

「なら、僕と編入手続きして……」
ハヤテが言うがテルはふぅと言った感じで

「手続き書類はお前一人のだろ？」
確かにそうだ。この書類はハヤテ一人の物。　一枚の書類で二人の受験は不可能。　テルはそのまま続ける。

「俺はいいって、学校は多分疲れるし、ダルいし、執事の仕事と併用してなんて死んじまうだろうが」

これは嘘ではなく、テルが来て最初の頃よりポカが少なくなったのは確かだが疲労は溜まりに溜まる。そこに学校、この二つをやりこ

なすのは至難の業だ。　本人としてはダルい方が本当の理由かもしれないが

「だからお前は頑張って受かってこい。ま、頭の方はわかんねぇが……おっと仕事に戻らねば」

テルはそういうと扉を開けて出て行った。

テルが居なくなった部屋で三人は少し黙っていたがハヤテが口を開いた。

「お嬢さま」

「な、なんだハヤテ……」

ナギはいつになく真剣なハヤテに驚く。

「実はお願いが―」

「あ～さぶ、さぶ」

現在夕方４時過ぎ、冷めきった風がテルの体に浴びせられる。

「はぁ、こんな寒空に買い物に行かせるとは……マリアさんも人が悪い」

めったにマリアに対して愚痴を言わないテルだが、それほどに寒かった。

「まぁ、このコートのお陰でかなり暖かいけど」

テルが着ているのは高級なコートで有名なカシミアというコート。
これはある国に住む羊の皮から作られたもので物によれば数百万はくだらない。

事の始まりは数時間前。

「買い物ですか？」
「ええ」

三千院家の長大な廊下、箒を持ったテルとマリアが会話していた。

「ハヤテ君の試験が明日なので買い出しが出来なくなっているんですよ」

「試験が明日って、素人がいきなり訓練無しにロケット乗って宇宙行くくらい無謀じゃないですか」

「まぁ、こんな時にどうとでもしてしまうのもハヤテ君ですし、とりあえず紅茶を買ってきて下さい。　あとこれも……」

マリアはテルにコートを差し出す。テルは不思議そうにそのコートを着た。　寸法はバッチリだ。

「なんですかコレ？」

「三千院家の使いとして行くときはこのコートを着て行って下さい」

「……このコート高級そうですね」

「まぁ、テル君よく分かりましたね」

「そりゃあ手触りが……」

テルはコートの生地を手で触る。滑らかかつフワフワした生地だ。

「いいんですか？こんな高そうなコート……」

「嫌ですわテル君。　高そうなではなく高いんですよ♪」

「……」

テルは言葉が出ない。　マリアは曖昧ではなくハッキリと、高い、

と明言した。

更にマリアは続ける。

「それが百着くらいあればハヤテ君の借金が余裕で返済できるので、決して汚さないで下さいね♪」

「イ、イエッサ〜」

そのマリアが浮かべた笑顔が逆に怖かったという。

そして現在に至る。

「こんな百万する物身に付けていたら汚れ一つ付けられねぇな……」

言われた店まっしぐらに道を歩く。

「まぁ、ハヤテじゃねぇし俺は見事汚れ無しで帰還してやろうじゃないの」

ゲラゲラ笑いながらテルは道を軽快な足取りで歩いていった。　その笑い顔からしてこれから何も起こらないというのを感じさせた。

だが彼は知らなかった。

彼にとって今日1日、一番不幸な時間が迫っていることを

第１５話～夏を制する者は受験を制する？嘘だね、だってオレ制せれなかったもの

まぁ、始まった話です。最初はハヤテが受験するという話でテルはそれに関わらず、お買い物に行くという話です。なんか展開読めるかもしれませんがそこは了承を……

ハヤテがナギに何をお願いしたかは大体分かると思います。

第１６話～触らぬ神に祟り無し～（前書き）

遂にトラブルメーカーのあの人登場！
テル君、頑張れ！

第１６話～触らぬ神に祟り無し～

テルが紅茶を買いに出掛けている同時刻―。

「お嬢さま！？」

このセリフには何人か聞き覚えがあるだろうが決してナギの事では無い。

ここは東京のどこかにある屋敷。　外見は和風で昔の武士が住んでいそうな作り。かなり金が掛かっているのが分かる。良質な庭石や松の木、美しい鯉が泳ぐ池がある広大な日本庭園が広がっている。静かで騒音とは無縁そうなその屋敷は何故だか今日はいつも以上に騒がしかった。

「おい、伊澄お嬢さまはいたか！？」

「いや、こちらにはいらっしゃらない」

「くっ……！　また見失ったか！！」

その和風の家には少し合わない黒スーツの男が屋敷を駆け回っていた。

「くそ！　この前はスイスとかお出掛けなどで迷子になっていると言うのに……」

「だからあれほど目を離すなと……！！」

男達が躍起になって探しているのはどうやらこの屋敷に住む令嬢ら

しい。　となれば彼らはその令嬢の使用人、ボディガードだろう。

「おーいお前たち！！」

一人の男が手に紙切れ一枚を持ち、走ってきた。

「いたか！？」

「いや……それよりもお嬢さまの部屋にまた恐ろしい手紙が……」

男は紙切れを仲間に渡した。

「なになに？」

男はその文章を見た瞬間、血相を変えた。　手紙には達筆で三行ほどの内容が書かれていた。

～ナギちゃんの家にお届け物があるので　遊びに行きます。　夕飯までには戻ります。　～　　伊澄

「……」

暫く男達は文を見つめていた。やがて全員で顔を見合わせて　叫んだ。

「なんてこったい！　一人で出掛けてしまったのか！？」

「蝶々とかを追っかけてそのまま迷子になってしまう人だからな……」

「ここだけの話、先日、三千院のお嬢さまは誘拐されそうになったと聞く……」

最後の男の一言に全員が顔を曇らせた。

「さ、探せェェェ！　迷子とか誘拐される前に探し出せェェェェ！！」

「もし、誘拐されそうになっていたらその犯人をフルボッコにしてやるのだァァァ！」

「♪～♪」

テルは柄にもなく、鼻歌交じらせて歩いていた。　高級コートを羽織っているため、汚してはいけないというプレッシャーがあったが、自分はハヤテではない。　不幸な事が起こるというのは1ミクロンも感じていないだろう。

「♪～♪」

ポケットから棒付きキャンディを取り出し、口に加える。このままスキップでも加えたいくらいの気分だ。

ガチャン！

「♪～♪」

一瞬、何かがつまずいた時の音がしたが空耳だと自分に言い聞か

せる。　だかその直後

「た、大変だ！！」

テルの後ろで驚きふためく声。　振り返るとオッサンがいた。

地面に膝を付けてテルの方に手を伸ばして叫んだ。　そのオッサンの傍らには自転車が横たわり、車輪が空を切って回り続けている。

「ああ！　カシミアについたら絶対落ちないタイプの墨汁が！！」

ふと上を見上げると、空中でバケツが黒い液体を撒き散らしながらテルめがけて飛んできた。

「ふおっ！！」

テルはコートを下からたくしあげてその場からバックステップ。

バケツは派手に地面に打ち付けられ、墨汁は辺りにぶちまけられた。

「オイ、オッサン……お前をこのバケツみたくしてやろうか……」

幸いコートには汚れは一つもついてはいない。　しかし、テルにとってこの数百万するコートを汚すこと、それは自分の首が危ういということを意味していた。

（汚したら確実に殺される……主にマリアさんとかマリアさんとか……）

結局マリアしか言っていないのだが使用人の実権を握っているのはマリアだとテルは思っていた。

執事長というのがちゃんといるのだが

テルはそのまま１８０度方向転換。　気を取り直して歩き始めたが

「ああ！　急にそこで方向転換されると！！　カシミアについたら絶対取れないタイプのセメントが！！」

突如、テルの頭上にセメントの入ったバケツが飛んできた。
説明するとテルの後ろでセメントバケツを運んでいた従業員がテルが急に方向転換したせいで驚いてバケツを放り投げてしまったのだ。

「ふおおお！！」

バックステップでは間に合わない。　テルはコートをたくしあげて右足をハイキック気味に振り上げた。

ハイキックが見事バケツに決まりバケツは近くの店の壁に衝突した。

「何だってんだ一体……」

予測できない危険信号の連続にテルも嫌な予感を感じずにはいられなかった。

（い、急ぐか……）

と不安から逃げるようにその場を離れるテル。　すると今度は

「キャアアア！　大変よォォォ！！」

前方から女性の声。　女性の姿はない、声だけだ。　人混みが広がるがその中を無理やり掻き分ける人物がいた。

「ど、どけェェェェエ！！」

怒号をあげながら走る男はバッグを持ち、片手にはナイフが握られていた。強盗が逃げている途中なのだろう。

「どかねぇとこのカシミアがよく刺さるナイフでブッ刺すぞ　！」

「……」

男はテル目掛けダッシュしてきた。　体をかがめてナイフを構えながら

テルは回避する暇がない、というよりもしない。そろそろうざったくなってきた位だ。

テルは回避動作を取ることなく男に向かって走り出す。

（さっきからさっきから……）

テルは沸き起こっている怒りを溜める事を止めた。　溜める位なら少しでも外に放出する形にしようと考えた。

テルは助走から一気に右足で踏み切る。

「！！」

犯人は向かって飛んできたテルに驚き立ち止まってしまった。

勿論、テルはそれを見たところで止まる訳がない。

「俺の邪魔すんじゃねェェエ！！　コノヤロォォォォ！！」

叫びながら男の顔面にテルの怒りの跳び蹴りがめり込んだ。　男は蹴られた威力に二転三転転がりやがて止まると鼻血を垂らしながら気絶した。

「おお！！　アイツやべえぞ！！」

「全くだぜ！！　勇敢な奴だ！　勇者だ！」

周りから拍手喝采が響く中、テルはダッシュでその場を離れていた。

これ以上変な事に巻き込まれないようにするためである。

「ゼェ…ゼェ……」

人盛りをかわし、テルは走ってきた疲れのためか膝に手を当てていた。

（何故だろうか……カシミアだけの集中攻撃ならまだしも、段々と俺の命に関わるように不幸がグレードアップしてないか？）

前言撤回、今日は鼻歌歌う気分でもスキップする日でもない……厄日だ。

（だが……）

テルは膝から手を離し、体を真っ直ぐにして心の中で呟く。

（この買い物は何が何でもやり遂げたらァ……例え雨が降ろうが槍が降ろうが……）

ドスッ！

「あ？」

後方から何かが地面に突き刺さった音。　また強盗の類かもしれないかとテルが振り向くとそこには長い一本の槍が

「なんで槍？　……へ？」

突き刺さった槍を見て、ふと空に視線を移すと無数の黒い点が見て

取れた。　遠くから見たそれは近付いてくるとハッキリと形が見えてくる。

その見えてきた物にテルは顔青ざめさせてフルスロットルで走り出した。

空から降ってきたもの……それは紛れもなく槍だった。

「ギャアアアアア！！」

ドドドトドドド！！！

襲い掛かる槍はテルを追いかけるように突き刺さる。　一瞬でも気を抜けば串刺しだろう。

「なんでマジで槍が降ってくんだァァァァ！！」

～東京の夕方ニュース～

草野「どうも、草野　ひとし　です。

緊急ニュースですが先ほど今年公開映画、『えいりあんｖｓやくざ』のセット用品を乗せた飛行機の貨物室が爆発するという事故が発生しました」

「う～ん？」
その頃、三千院家ではテーブルを前にナギが漫画を読みながらテレビを見ていた。　ハヤテは現在明日の試験に向けてもう勉強中。

草野「『えいりあんｖｓやくざ』はストーリー上、槍や刀などの武器を使用するためそれを運送していましたが飛行機の事故により一部の荷物が落下しています。　近隣住民の皆様は外出には十分お気を付け下さい。　模造でも高いところから落ちれば十分危険です。
　尚落下場所は東京の……」

「マリアよ……」
「はい？」

ナギは後ろに立ってテレビを見ているマリアに視線を移す。

「なぜだか知らんがよく分からない内にテルが無数の槍に串刺しにされている気がするのだが……」

「まさか♪　ハヤテ君じゃないんですよ？」

「まぁそれもそうか……それより伊澄はどうしたのだ？」
ナギは視線を漫画に向ける。　マリアはそれを聞きながら
「まだ来ていないみたいだな……という事は迷子か……」
最早その言葉が決まって出てくるようにナギは呟いた。

一方テルは

「……」

公園のベンチに横たわり屍と化していた。　公園に逃げこんだのは人気を避けるためである。

「なんで俺に不幸がくるんだ？　触らぬ神に祟り無しって聞くが触ってもねぇのに不幸が向こうからホイホイやって来やがる」

身を起こし、ベンチから立ち上がり公園を去ろうとした。　人気を避けていたとしてもトラブルはどこからやって来るか分からないからだ。

「早く帰って寝てェ……ん？」

頭を掻きながらしんどそうに呟いていた時、テルは公衆電話に立ち尽くしている人物に目が止まった。

「……」

公衆電話の前に立っているのは一人の少女。　この都会、東京という場所では目立つ和服を着た少女だ。

「……」

少女は公衆電話のテレホンカードを入れる口を見つめて袖から一枚の札を取り出した。

「……」

テルは目を細めてマジですか！？　といった感じで少女を見つめていた。

びっしりと梵語が書かれたお札は明らかにカードを入れる口より遥かに大きい。

（ま、まさかと思うが……え？マジで？）

そのまさかで少女はお札をカード口に入れようとした。当然お札は入らない。

「……」

少女はお札が入らないのが分かるとお札をしまい込んで一言。

「この機械は壊れています……」

「壊れてんのはお前の頭だァァァ！」

テルが声を上げる。少女もその声に驚き、テルに振り向いた。

（し、しまった！　思わずツッコンでしまった……）しまったと言わんばかりに声を掛けてしまったと思うテル。　テルは落ち着こう

として少女に話し掛ける。
「そこにはお札じゃなくて専用のカードを入れんだよ」
（……）
少女はテル見るや少しの間を置いて口を開いた。
「大変です……」
「……？」
ゆっくりと喋る少女にテルは疑問を浮かべる。
「知らない人と会話をしてはいけないと友人に言われていたのに……また会話をしています」
「それは悪い事したかもな……ってか一度だけじゃないのかよ」
「でも大丈夫。　その友人は優しいのできっと許してくれます……」
「そうかよ。　んで？見た感じ困ってそうだがどうしたよ？迷子か？」
少女はテルの言葉にゆっくりと返した。
「迷子ではありません。　友人の家を目指していたら道が分からなくなってしまったのです……」
「それを迷子って言うんだよ！　お前ポジティブシンキング　にも程があんだろ！！」

「いいえ……迷子ではありません……」
「意地でも迷子って認めない気だよ！！　コイツ頑固だ！　こんなおっとり顔だけど頑固者だよ！！」

恐らくどんなに迷子であることを指摘しても少女は聞かないだろう。そう思ったテルははぁ、とため息をつきながら呟いた。

「わーったよ……お前を放っておいたら間違って核ミサイルの発射ボタンも顔色一つ変えず押しちまいそうだ。　だから手ぇ貸してやる……」

「……ありがとうございます……」
少女は袖口で口元を隠しながら礼を言った。　テルは続けて聞く。

「お前、名前は？　俺は善立　テル」
そう聞かれた少女はにこりと笑うとこれまたゆっくり口調で言った。

「鷺ノ宮　伊澄です……宜しくお願いします……」

触らぬ神に祟り無しという言葉がある。　これは厄介な事には知らん顔をするのがよいという意味だ。そうすれば厄介事に巻き込まれることは無いからである。

これまではテルは知らん顔しても厄介事に巻き込まれてきた。　これは偶然という事もあるかもしれない。

しかしテルは今回、自らからその厄介事に触れてしまったという事に気付いてはいなかった。

第１７話～ホ〇ミの回復量は５０ぐらい～（前書き）

久しぶりに長く書いた気がします……どうぞ！

第１７話～ホ〇ミの回復量は５０ぐらい～

「鷺ノ宮　伊澄です……宜しくお願いします……」

伊澄は一礼し、にこりと笑顔を見せた。

「ところで……」

「ん？」

テルは笑顔で言う伊澄を見る。

「私はどこに行くのでしょう……」

「いや、さっき友人の家に行くとか言ってなかったっけ？」

第１７話～ホ〇ミの回復量は５０ぐらい～

夕陽が傾いてくる時間帯、テルと伊澄の事態は難航を極めていた。

まさか自分が何のために出掛けていたかすら忘れるとは。

（伊澄……恐ろしい子！）

テルは伊澄の目指す場所を推理する事を考えた。　道案内するに

はまずどんな場所か、そのヒントが必要だ。

するとテルが何かに気付いた。
「ん？　伊澄……そりゃなんだ？」
テルが一点を見るのは伊澄が片手に持つ綺麗な布で包まれた箱。

伊澄は箱を両手で添えてテルに見せながらゆっくり話す。
「これは友人に届ける物で……あ！」

箱を見つめながら話していた伊澄はあることに気づいた。
「そうです……私は友人の家に行くのでした……」
「気付くの遅ッ！！　っていうか最初に俺言ったの聞こえなかったの！？」

突っ込むテルをよそに伊澄は続ける。
「そう……友人にこれを届けるのでした……」

「なるほど……ならその目的が分かったんならなんとかなりそうだぜ」
ここに来てようやく一筋の光が見えてきた。　目的が分かったのなら後はその友人の家に行けばいい話。

テルは伊澄の返事を待つ。　すると伊澄は辺りをキョロキョロと見渡した。
「……」

伊澄は一度間を置いて一言。
「すいません……友人の家はどこにあるのでしょうか？」

「いや、東京じゃないの？　間違っても天空の城みたく空とかにあったら困るんだが……」

テルは頭を抱える。予想はだいたいしてた。どうやら伊澄の天然には天性的な物があるらしい。

「じゃあその家の特徴を教えてくれ。　友人の特徴とかそんなんでも何でもいいから……」

もう破れかぶれだ。　テルはもうどうにでもなれといった表情。最終的には分からなければ交番にでも届けるか、と考えていた。

「えっと……」

と伊澄は話し始めた。

「家は大きくて、友人は私と同じ位で金髪ツインテールの少し我が儘な天の邪鬼みたいな子が……」

「なに？」

その聞き覚えのある言葉にテルは反応した。

「もしかしてよォ伊澄、そこには優秀な執事が居なかったりしないか？」

「まぁ……テル様。よくご存知ですね……」

伊澄は袖口を口元に隠すように当てて驚いた目をしていた。

「知ってるも何も俺は今そのナギの執事をやってんだ。　新米だが

な」

テルの言葉に伊澄は更に驚いた。

「まぁ……あのナギがハヤテ様以外に執事を雇うなんて……」

「ナギとは友達なんだな？」

「ええ、幼なじみです……」

「そうか、ならナギとはいい友達でいてやってくれや」

テルはふっと　笑って言うと伊澄もまた笑顔でコクリと頷いた。

「ええ、勿論です……」

「よし、場所は分かったんだしさっさと行くか！」

「はい……」

テルの言葉に伊澄も頷いた。　やがて歩きだすとテルは気付いたように伊澄に手を伸ばす。

「……え？」

「え？じゃねぇよ。　箱貸せ箱。　持ってやるから」

「はい……ど、どうも……」

若干照れながらも重箱を手渡す。　テルは受け取ると肩を揉みながら

「なぁに、一応執事だからな」
と伊澄に言った。
「……」
「……なんだよ、俺の顔になにか付いてるのか？」
テルは顔をじっと見つめている伊澄に声を掛けた。　すると伊澄は一言。
「どうしてそんなに気分が悪そうなんですか？」
その言葉にテルは疑問に思いながら
「今俺そんなに体調悪そうに見える？」
その言葉に伊澄はコクリと頷いて返事した。

「はい……特に瞳の辺りが……」
「死んでるってか？　死んでるって言いたいのか？　何？嫌味でしょ？　俺に対する嫌味でしょ？」

おっとりとした顔で嫌味もハッキリ言う奴だと思っていた時だった。
公園の出口付近に数台の黒い車が急ブレーキを掛けてズラリと止まった。　その中からゾロゾロと黒服の男達が表れる。
（こいつら……）

目を細めてテルは只ならぬ雰囲気を感じ取ったのか

「オイ伊澄、隠れてろ……」

と静かに命じた。　伊澄は訳が分からずに木の後ろに隠れた。

テルが前方を見据えると数十人の黒服の男達が殺気立った目でテルを睨んでいた。

「おい貴様、伊澄お嬢様はどこだ？」　（なんだこの死んだ魚のような目をした明らかに不審な男は……）

「なんだ？伊澄の知り合いか？」（なんだ？このいかにもヤクザみたいな怪しい奴ら……）

互いに発する言葉の中で様々な疑問がよぎる。　伊澄はというと……

（あら……あの人達は……）

とぽかんとした表情。そう、あの黒服達は伊澄の使用人である。

総出で探すこと数時間。漸く伊澄の所在を突き止めたのだ。

「全く……あの人も毎度の事から、こちらも仕事上大変だと言うのに……」

男の言葉にテルはハッと気づき、理解した。

（コイツらヤクザで人攫いの上に……ロリコンか！！）

テルはその発言と男達の服装、そして今にも殺しに掛かるような目を見てそう判断した。

（だったら話は早い……健全な小説が境界線を越える事はなんとしても防がねば！！）

テルは一つの決意の下に黒服達に言い放つ。

「おいロリコン共」

「誰がロリコンだ！」

男達は否定するがテルは肩を慣らしながら続ける。

「俺は今三千院家御案内のツアー中なんだよ。お前等に道案内は無理だ……どけ、ガイドの時間だ」

テルは言い放つが黒服達はどよめいた。

「何！？　コイツ、三千院家を目指しているぞ！」

「そうか！伊澄お嬢様の次は三千院家の令嬢も攫うという魂胆か！なんと腐った奴……」

「ならば……」

「うん？」

チャキッと男達の腰の辺りから金属の音。腰に帯びていた鞘から研ぎ澄まされた銀色の刃が抜き放たれた。

「このカシミアがよく斬れるタイプの日本刀でたたっ斬ってやるしかないな……」

「……マシで？」

黒服達の構えた日本刀が夕陽に浴びせられて怪しく光る。どうやら取り返しのつかないヤバい状況になってしまった。

（コート云々の問題じゃねぇだろォォォ！　死んじまうだろうが！常識的に考えて！！）

殺気立った目を止めずに刀を構えた黒服達はテルにジリジリ近付いて距離を縮めていく。

（どうすりぁいい……）

徐々に心臓の鼓動が早くなる。　それと同時に後ろに後ずさった。

このままいけば自分は刀に一刀両断され晴れて終了。

バッドエンドしか浮かばず冷や汗を流していた

—その時だった。

—逃げるの？　困っている人を置いて……

一瞬、頭の中に声が響く。　テルが知っている声ではない。

知ってはいないが、何故だか懐かしい声だった。

（車に跳ねられた時に聞いた声じゃない……）

聞こえてくる声は清廉な女性の声。だがそれは母の声とはほど遠いものだった。

―目の前に困っている人がいたら迷わず手を差し出しなさい。

（誰なんだよ……）

頭に残る言葉にテルは忌々しく感じた。

ふと我に帰ると数十人の黒服達が見えた。

新たな謎が浮かぶ。両親以外にいる人物。

（いきなり聞こえてきたと思ったら訳のわかんねえ事ばかり思い出しやがって……だが）

不思議と顔にニヤリとした笑み。　その言葉は女が言うには余りにも臭かった。　しかし、どこか力強さを感じさせるその言葉はまるで背中を後押しするように前向いて歩けよと勇気付けられるようにテルの失っていた『何か』を思い出させるように

「オイこらロリコン共」
ドンと構えてテルは仁王立ちの状態で黒服達に言い放つ。
「コイツを攫いたいなら、この俺をどうにかしてからにしな……だが簡単にはいかんぜ？」
腕を組み、数十人の黒服達を前にしてもテルは表情を崩さない。
先ほどの動揺は無かったかのように。　それは黒服達もテルの豹変に戸惑っていた。
（なんだ？この男……この絶対的不利な状況であの余裕……あの余裕は一体どこから……）
「おーい！お嬢様が居たぞ！」
黒服達の一人が高らかに声を上げる。しかしその声はどこか慌てていた。
（な、どこに行きやがったんだアイツ！）
テルは男の言葉にすぐ後ろを振り向いた。しかし、そこには伊澄は居らず変わりに重箱が置かれていた。
「なに！？　どこだ！」
黒服達は一斉に伊澄の所在を尋ねる。　発見したと報告した男は指

を示した。

「「「……」」」

その指差した所に全員がギョッとした。

指差された所は低地でもなければ平地を指している訳でもなかった。

「て、テル様〜〜」

公園の出口のすぐ近く、高らかな場所から伊澄の助けを求める声が響いていた。　現在、伊澄は高層ビル最上階の屋上にいた。

「「「アンタは何してんだァァァァ！！！」」」

公園にいた全員が見事に、息ピッタリに叫んだ。

「オイィィ！　ほんの数ページもしない間に迷子になってんじゃねーよ！　コッチがマジモード入ってたのによ！　お前はアレか！？　加速装置かワープ機能でも付いてんのかァァァ！！」

伊澄の規格外の行動にテルは猛然と突っ込んだ。　当然、伊澄には聞こえてはいないが。

突っ込んでいるテルをよそに黒服達は大慌てである。

「なんという事だ！　伊澄お嬢様が危険な所に！」

「しかもどうやったか知らんが金網の外側に出ているぞ！」

「何人かは早くビルに急げ！」

「もし風に揺られて飛び降りでもしたら……」

「すいませ～ん……気が付いたらこんな所に……でも大丈夫ですよ～」

本人が出来る限り高めに発した声は当然届く訳がない。取りあえず、大丈夫だなと安心していたその矢先。

ビュオォォォ！！と、強いビル風が吹いた。

「あら……」

一瞬にして伊澄の浮かび、気付けば屋上の足場から体が離れてしまっていた。

少しだけ宙に浮いていたがそれも一瞬。　伊澄の体は重量の法則に従い、ビル最上階から落下した。

（は、ハヤテ様……）

一瞬、この場にいない人物を頭に思い描いた。

この時、テルの体は既に動いていた。　黒服達の動きは気にしない。
ただひたすら伊澄の所へと。

「き、貴様！」
黒服達の一人がテルの行動に気付き、日本刀を構えた。
刀が振られる一瞬の間、テルの頭に再びあの声が響く。

―そして……守りなさい。

（ああ、守ってやるよ……）

―　一度手を差し出したなら、自分の魂に賭けてでも守りなさい。

（テメェ（自分）の命尽きるまで！　何度でも！　守ってやらァァァ！）

「でぇい！」

日本刀が真横に振り抜かれた。　業物から成されるその一閃は大抵の物を切り捨てるだろう。

そこに物があったならだが。
「！！」
刹那。　そこにはテルの姿は無い。　一閃の下に刀が振り抜かれる瞬間、テルは男のすぐ上へと飛んでいた。

上に視線を移すと男の目にテルの姿があった。　宙に浮いたテルは黒服達の体を踏み台にして黒服達の包囲網を突破していく。

そして一気に黒服達の乗っていた車の上に飛び乗った。

「逃がさん！」
黒服達は刀の間合いから遠ざかられたと感じると、懐から拳銃を取り出して発砲。

テルは待っていたかのように車の上でしゃがみ込んだ。
そして、車に一発の弾丸が当たり、次の瞬間

ドン！と車は爆発して大破。　しかしテルはその爆発を利用して上へと舞い上がった。

「執事にィ！　不可能はないィィイ！！」
そして落下している伊澄をキャッチ。

「ん……ハヤテ様？」

伊澄は落下してから今まで目を閉じていた。

普通、こんな絶対的危機的な状況で普通の人間ならば救出は出来ない。　出来るとすれば綾崎　ハヤテぐらいだろうか。

ハヤテには何度か助けられた事があった。　だからこそその信頼から伊澄は呟く。　瞼にうやむやに映る人物を思い浮かべながら

「……ハヤテ様？」

しかし、そこに居たのは、自分を救ってくれた人物は

「悪かったな、ハヤテじゃなくて」

善立　テル　その人だった。

「そうだよなぁ……俺みたいな奴なんかよりああいう何でも出来る奴に助けられた方がイイに決まってるよな～」

テルは嫌味たらしく伊澄に言う。

「え、いや、その……」

思わず顔を隠してしまうが明らかに顔が恥ずかしさで真っ赤だった。

「あらあら……ってアレ？」

しかしテルはここであることに気付く。

「この後どうすればいいんだっけ？」

助けたといってもテルは数百メートル高く舞い上がっていたままだった。　当然何時までも上昇していく訳ではない。やがて重力の法則に従い……落ちた。

「うおおおッ！　落ちてるのかコレ！？　落ちてんの！？」

（こうなったら一か八か！！）

テルは片手に伊澄を抱えてコートを脱いで近くにある信号機に狙いを定めた。　どうやって脱いだかは聞かないで欲しい。

「持ってくれよ！俺のカシミアちゃん！」

信号機の三色ランプの部分にコートを巻き付かせる。　運良くコートはしっかり絡まった。

「よっしゃ！さすがは俺のカシミアちゃ―」

しかし、喜びも束の間。　テル達がぶら下がると

ビリビリビリッ！！という音を立てて破れてしまった。

「んなっ！！」

呆気に取られていたテルはすぐさまに下へと落下。

テルのとっさの判断。　伊澄をお姫様抱っこしてコンクリートへ

ドン！

着地。　脚から脳天を貫くかのような激痛がテルを襲う。　伊澄はテルの腕から降りて心配そうに声をかけた。

「て、テル様……あの…大丈夫ですか？」

「あ、安心しろ……俺はどこぞの未来少年より丈夫だ」

テルは前のめりに倒れながらも親指を立てて返した。

「待て！」

着地した地点に黒服達がズラリと横に並ぶ、武器とかを色々構えて

「また来やがったか……」

テルは毒づきながらも身を起こして立ち上がろうとする。が

（やべ、体が……）

脚に力が入らない。体中が悲鳴を上げるほどの激痛。　テルの体

は爆発と落下の際のダメージで限界寸前だった。

（まだまだ……）

ここまで来てテルは不適な笑み浮かべて無理にでも立ち上がろうとした。

が、その時、テルの動きを制するように伊澄が前に出た。

「オイ伊澄！」

「すいません……テル様……もういいんです……」

「馬鹿野郎が！　簡単に諦めんな！　こちとらガイドの方がまだ終わってねぇんだよ！」

身を貫く激痛に耐え、無理にでも体を起こしたテルは必死の形相で叫んだ。テルの姿を見て伊澄は驚いたがゆっくりと話始めた。

「いえ、テル様は誤解しているようですが……この人達は私達の使用人ですよ？」

「……はい？」

テルはキョトンと喋る伊澄に間の抜けた声を上げた。

その後、伊澄の説明により双方の誤解が解けた。
説明を受けた後もテルに納得していなかった使用人が数名いたという。
同時に伊澄もナギと同じ、金持ちのお嬢様だという事も分かった。
そしてもう一つ。
「テル様。じっとしていて下さい……」
「ん？　おお……」
テルは黙って伊澄の言葉通り黙っていると伊澄がテルの頭に手を当てた。すると
「うおっ！！」
突如、テルの全身を緑色の光が包んでいく。そして身体中の痛みや傷が癒えていった。
「お前がホ〇ミを使えるとはな……」
「ナギやハヤテ様には内緒ですよ……」
ニコリと笑うと伊澄はそう言った。
その後は車の中での話となる。ついでに伊澄が三千院家に行く車にテルも乗っけて貰ったのだ。
「つーかお前、こうやって使用人達と車で来れば良かったじゃねーか。そうすれば迷う事も無かったろうし……」
「何を言うんですかテル様……」

テルの言葉に伊澄がゆっくりと反応して返す。

「私がそう何度も迷子になる筈がありませんよ……」

「お前、このお話、最初からもういっぺん見直してみ？」

「それよりも…申し訳ありません……コート……」

「う、まぁな……」

テルは苦い顔をする。　伊澄に体の傷を直してもらったがコートの傷は直す事は出来なかった。

（殺されるかも……な…）

テルの脳裏には薙刀を持った笑顔のマリアがよぎった。

「不幸が起こるわ、不審者に間違われるわ、コートは破れるは……結局、ロクな事が無かったな……」

「そんな事ありませんよ……私はテル様に守ってもらいました……それだけでも充分感謝しています……」

「まぁ、そうかも知れねぇけどよ……いや、待てよ？」

テルは何か思い出したかのように呟くとフッと笑った。

「いや伊澄、俺はもう一つ守ったぜ、大事なモンを……」

伊澄は何の事だか分からずに首を傾げる。　テルはそのまま続けて一言。

「俺が決めた、俺だけのルール（決意）だ……」

「……」

（この人、ハヤテ様とはまた違う……雑だけど決して揺るがない心、そして魂……ハヤテ様とは違った何かを持っている……）

伊澄は思った。　この人のような芯の強い人間になりたい。そうすればみんなの笑顔を守る事ができる。　大切な人達を守る事ができると。

「そういえばその重箱、なに入ってんだ？」

「これは明日試験のハヤテ様に届けるうなぎの蒲焼きです……」

重箱からかすかにうなぎの香がする。テルは重箱を涎を垂らしながら見つめていたといた。
それを見ていた伊澄は笑顔で言った。

「宜しければテル様にもお裾分けしますが……」

その言葉にテルは瞳を輝かせた。

「マジでか！？　センキュー！　ケガの事とうなぎの借りはいつしか返すからな！」

しかし、帰ってきたテルがうなぎをすぐ食べることは出来なかった。
マリアはコートと紅茶を忘れた事を聞くとなかなかテルを屋敷に入れなかったらしい。

屋敷の扉を開けると笑顔で薙刀を構えたマリアが見えたそうな…
…その時の迫力は刀を持った数十の使用人達以上だったという。

第１７話～ホ〇ミの回復量は５０ぐらい～（後書き）

伊澄の話はこれにて終了。　後半どうするか迷いましたがなんか無理やりな感じでしめてしまった感があります。　今回、少しだけテル君の事が分かりましたがまだまだ謎だらけ……話に出てきた女性は決して日傘をさした金髪少女ではありませんのであしからず……では失礼します。

第１８話～血の繋がりよりも大事なものがある～（前書き）

長く書いたとおもいましたね。　実家帰ってパソコン使いました。早い早い！打つのが、つまり打つだけが。　そんな今回はなんかちょっと違ったハヤテのごとく！です。　ちなみに消えた１０話が復活したんで見ていただければ嬉しいです。　色々変わった所もあるんで

第１８話～血の繋がりよりも大事なものがある～

――１２月２９日。　年越し近しのこの時期に九十九里浜を散歩していたら変なのをみつけた。　最初はゴミかと思ったら、よく見るとワカメやらコンブがやたらと巻きついていたガキだった。

――その夜、ガキが目を覚ましやっがった。　俺はラーメン屋の仕事が終わって、そいつを看病していた時だった。

「オッサンだれ？」

――そのガキの第一声。　聞いてみれば自分の名前も記憶も覚えてないらしい。

「腹が減った・・・・・・なんかないのか？」

――ガキのくせに、命の恩人に対してずいぶんな口を聞くガキだった。　俺は仕方なくラーメンを特別に作ってやった。　営業時間外なのによくやるな俺は・・・・・

「ウメェ・・・・・」

――当たり前だ。この道五十年、伊達に麺とばっかにらめっこしてねぇよ。　その日あいつは三杯のラーメンを食いやがった。夜働く俺の身にもなれってんだコノヤロー。

「ごちそうさん・・・・・」

――ガキは楊枝を勝手に取り出し、口の中を掃除してやがった。

このヤロウ、一回ぶん殴ってやるか　って思っていた時だった。

「ありがとよ・・・・・・助けてくれて・・・」

――ガキが礼を言いやがった。　とんだ礼儀知らずな奴だと思っていたが、ガキは続けやがった。

「ラーメン、上手かったぜ・・・・・なんか礼をしなきゃならねぇな・・・」

――その先は・・・・・なんて言ったんだっけな、思い出せねぇや。　年はあんまとりたくねぇモンだ。　その後からだな、急にラーメン屋で働きたいって言い出したのは、もしそれがあいつの言ってた礼だって言うんならあのガキは迷惑だけをかけてねぇじゃねぇか

――とんだ厄介者だったよ。

――――――――――――――――――――

お昼時。多くのサラリーマンや従業員の人間たちが休憩を兼ねて腹の中を満たそうとする時間帯。ここ、ラーメン辰也もそれなりの客が居た。

「お～い辰屋さん、とんこつと醤油ラーメン頼むよ」

「あいよ」

彼の名は辰屋（たつや）　次郎（じろう）。　この「ラーメン辰屋」の店主。　今年で

７０になる。

「そういえば辰屋さん、この前雇っていたあの子供、本当に辞めさせちまったのかい？」

「ああ、追い出してやったよ。　いつまでも不祥事起こされたらたまったもんじゃねぇ・・・」

辰屋は頼まれたラーメンを静かに置くとただ黙って答えた。

「でも大丈夫だったのかい？　あの子、聞けば住む所も何もない身寄りのない子だったんだろ？」

客の言葉を聞きながら辰屋は自分の厨房に戻っていく。　このラーメン屋には元から一人だ。

「・・・・知らねぇよ。　あいつなら大丈夫だろ」

皿を洗う水が静かに流れる。　客の男はそんな辰屋の姿を見て呟いた。

「俺が思うに、あんたとあの子・・・・怒鳴られもしたけど二人が一緒にいるところを見ていれば、なんてこと無い、ただの『親子』に見えたよ・・・・」

「・・・・・・」

店主は黙って、流していた水を止めた。　そして何事もなかったかのようにスープの仕込みに入る。　客の男は続けた。

「辰屋さん、あの子と一緒に居たときのアンタはすげぇいい顔してたよ・・・・」

「ケッ・・・・・散々店の迷惑掛けていっただけじゃねぇか・・・・あのガキが居なけりゃ、店とあんたら客の食中毒被害も無くなるってモンだ。　だから追い出してやったのさ」

忌々しげに吐き捨てる辰屋。　だが客の男はそれを見て静かに言った。

「辰屋さん・・・・俺は知ってるよ。　前からこの店にタチの悪い地上げ屋が来てるって、無茶な立ち退きを要求する連中がよく来るって、他にも付け込まれた借金があって経営も不味いんだって」

「・・・・・・」

「辰屋さん・・・・もしかしてアンタ、それであの子巻き込まないために・・・・」

「そんなんじゃねぇよ・・・・」

客の男の言葉を辰屋は否定した。　そして、心の中で続ける。

（どっちにしろあのガキは戻ってこねぇ・・・・・これで良かったのさ）

第１８話～血の繋がりよりも大事なものがある～

晴天。雲ひとつ無い青空が広がる中、善立　テルは一人歩いていた。
　今回は執事の仕事で外に外出しているわけでも無く、ましてやただサボっているわけでもない。　彼が向かう場所はこの前まで世話になっていたラーメン屋である。

（せっかくマリアさんからもらったお暇だ。　あのジジィめ、店休みだったら只じゃおかねぇぞ）

懐から飴を取り出し、口の中にほおる。

（そういえばそろそろだよな・・・・）

何か思い出したのか、テルは少し歩くスピードを速めた。　そしてその後ろで・・・・・

ササササササササ！　とテルを追う三つの影。

「拙いんじゃないですかマリアさん・・・・」

「なにがですか？」

電柱に隠れていた三人のうちの一人であるハヤテがマリアに聞く。

「だってこれ、れっきとしたストーカー行為ですよ？　今はまだバレてないですけどバレたらどうするんですか？」

「心配するなハヤテ」

そういうのはこの中になぜか参加しているナギだ。

「我々は今一人の執事の秘密に迫る重大な任務についている！　それにこういう風にスニーキングミッションを一度はやってみたかったのだ！お前もそうだろハヤテ！」

「いや、別にそんな事はないですけど」

なにかと理不尽なことをいうナギにハヤテは黙って答えるしかなかった。　ナギはさらに続ける。

「それにあの馬鹿テルだぞ？　そう簡単に気づく奴ではあるまい・・・・」

「でも、ラーメン屋に行ってどうするんでしょうか？　前にはもう一度行くと言っていただけでしたし・・・・目的がわかりませんわ」

マリアは小声で呟く。　大きな声ではテルがこちらに気づいてしまうからだ。

「さぁ・・・・・執事の仕事でも辞めて、また働かせてもらうのではないか？」

「そんな・・・・テルさんが・・・・・」

ナギの言葉にハヤテは言葉を詰まらせる。　同じ仕事仲間として、互いに苦労を分かち合える友が消えてしまうという寂しさからだった。　ナギはそんなハヤテを見て一言。

「だ、ダメだぞハヤテ！　リアルでそれはダメだからな！！」

「あの、お嬢様・・・・・何を誤解しているんですか？」

（本人はどう思ってるのでしょうか・・・・・まさか本当に辞めてしまうのですか？　テル君・・・・・」

ひたすら歩くテルの背中をマリアは黙って見つめていたのだった。

「ふ～、昼時が終わったか・・・・・」

場所はラーメン辰屋に戻る。　お昼時が過ぎ、客足がすっかり途絶えてしまった。

その昔、ラーメン辰屋は特別なサービスなどには拘らず、味一筋のラーメン屋である。　そして多くのサラリーマンや様々な人々の愚痴やその話に付き合ったりと人々に好かれていた店だった。　しかしこの時代。
そう上手くはいかない、あちこちに大きな店が立ち並び、味以外の事に勝負するラーメン屋が現れ始めた。　当然、味一つの取り柄であるラーメン辰屋は置いていかれる。　時代の変化を大きく痛感させられた。

しかし、それでも店の暖簾を下ろさなかったのは五十年間続けてきた自分の仕事に対する誇りと今は亡き妻と子の約束だった。

「今じゃ全く見る影もなしだな・・・・・」

辰屋はがらんとなった店内を見渡して呟く。　過去にはこの時間帯なら少なからずとも客が入ってきたくらいだ。

朝早くから仕込みをし、暖簾を上げ、朝来る人、昼来る人に自分の魂でもあるラーメンを出し、夜は客との愚痴に付き合い、眠る。

この繰り返しだった。

辰屋は一人時代の寂しさを嘆いていた。

「ハツ・・・・五十年間守ってきたこの店はは俺やお前、そして客たちによって守られてきたんだ。　だが、今となっちゃあお前も客も誰も居ない・・・・」

一人、今は亡き妻の名を呟き、その昔の光景を頭の中でフラッシュバックさせていた。　その時である。

「まぁまぁ、簡単に終わっちゃぁ困るんだけどねぇ」

突如、店の中に入ってくる人物。　辰屋はそれを見て「チッ」と舌打ちした。

「店終わらす前に俺たちに金を払ってもらわなきゃなぁ」

びっしりとした黒スーツ。　キザな顔立ちや渋い顔、傷を持つ者、凶悪極まりない男たちが店内にずかずかと入り込んできた。

「誰が店終わらすって言った？　そんな気はサラサラねぇ」

辰屋は強面集団に動じることなく言い放つ。　集団の中の一人が笑いながら返した。

「だったら他人が作った借金でも返してくれや。　それができないんならこの店売り飛ばすっていったなぁ」

「金は返してやる。　だから今日は帰んな・・・・」

辰屋はただ静かに、怒りに耐えながら返した。

「それは無理だわ。　こちらにも限度ってモンがある・・・・」

男たちはさらに店の中へと入っていく。その数は六人。

「それに・・・・もうここらで御開きでもいいじゃないですかい？　こ～んな小っさい店、無くなっても誰もなんとも思いませんわ」

ドカッと椅子に座り、テーブルの上に足を乗っける。店内は今にも何かが起きそうな雰囲気だった。

「な、なんかとんでもない事になってますよマリアさん……」

「ええ、まさかこんな事になっているとは……」

「くっ！マリアよ、あのバカテルはどうしたのだ？何故あいつを追っていた私達がラーメン屋にたどり着いていて、テルの姿が見当たらない！」

ラーメン屋の窓からハヤテ、マリア、ナギはラーメン屋の中の光景

を目の当たりにしていた。
しかし、そこにテルの姿が見当たらない。一番そこにいなくてはならない人物が。
「あのお爺さん、このままだと危険ですよ！助けないと！」
ハヤテがナギに慌ただしく言う。
「確かにそうだな……ハヤテ、いつでも行けるよう準備を―」
（テル君、一体なにをやっているんですか……）
マリアは心の中でテルのやって来るのを願っていた。

「・・・・・とっとと帰れってんだよ、この溝鼠が」
男達が高圧的な態度でひたすら迫るが辰屋は絶対に屈しない。いや、それ以前に彼の怒りは限界のはずだ。客が座るべき席に脚をのっけられる。こうも使われてラーメン屋の店主として黙っていられなかった。
その辰屋の言葉に男もついに痺れを切らしたようで、すたっと椅子から立ち上がると頭をボリボリと掻いた。
「自分の立場をわきまえない奴は痛い目に遭わなきゃ分からんらし

いな」

ドスの聞いた言葉を発すると、首を動かし合図を送る。　すると男たちが前へと歩み寄ってきた。

（ハツよ・・・・五十年間、守ってきたこの店も・・・・どうやらここまでらしい）

辰屋は近づいてくる男達を前に自分の人生の終わりを悟った。

（だがな、俺は最後まで守らせてもらうぜ・・・・それが店主としての最後の仕事だからよ・・・・）

――じゃあなクソガキ・・・・・

この場にいない人間、最後に自分が追い出した少年を思った。

その時である。

「お、オイ！なんだテメェ！」

外のほうから男の声が聞こえた。

「ガキはすっこんでろ――って聞こえねぇのか！？」

男の脅迫じみた静止を無視し店内へ入ってくる。　辰屋はその人物を見て驚愕した。

「て、テメェは……」

死んだ魚のような瞳、気に食わない面。　辰屋が忘れるはずもなかった。

善立　テル　その人である。

「く、クソガキィィィ！　何で来やがったがったァァァ！！」

（なぜ、なんで戻ってきた。　お前には巻き込まれて欲しくねぇんだよ。　こんな老い先短いジジィの為にお前の人生を無駄にさせたくねぇんだよ！）

「……」

テルは男達の間を顔を伏せながら黙って歩く。

「おいテメェ！　誰だごらァ！」

男達がテルに怒号を浴びせるがテルは聞こえてないかのように辰屋の元に歩く。

そしてテルは辰屋の目の前にある椅子に腰掛け、肘をつき、指と指を交差させて辰屋と向き合った。

「よう、クソジジィ。　まだくたばってねぇようだな」

テルはニッと笑うと辰屋に久しぶりの言葉としてはあまり不適切な言葉を言った。

「そういう聞いてる訳じゃねぇんだよ！　何で戻ってきたかって聞いてんだ！」

辰屋の言葉にテルは頭を掻きながら呟いた。

「なぁに、約束を守りに来ただけさ……それよりもラーメン出せ」

「約束ってお前……」

「はい、テルさん。醤油ラーメンです」

「うおっ！？お前、誰だい！」

テルの元に一杯のラーメンが出されり辰屋が見ると横にはハヤテが厨房でラーメンを作っていた。

「て、テル？まさかお前記憶が……」

「馬鹿やろう、まだ戻ってねぇよ。だが……」

驚きの表情の辰屋にテルは続ける。

「自分の名前と俺がやんなきゃならないことを思い出しただけさ」

じっと辰屋はテルを見つめる。外見は変わってはいない。ムカつく。いつでもぶん殴ってやりたい気分だ。だがなんだろうかこの違和感は……

「ってかなんでハヤテがいるんだよ」

今更になって気付いたのか、テルはハヤテを見る。ハヤテは一瞬ドキッとしたが

「い、いやだなぁテルさん、執事には神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わっているんですよ」

「俺はそんなドッキリにしか使えないようなライセンスはいらねー」

「テメェ、いつまでも喋ってんだ！」

テルとハヤテの会話に男の怒号が割り込んでくる。今にも殴り掛かってきそうだ。

「あとなハヤテ、残念だがこのラーメン―」

テルはとことん男を無視する。余りにも無視されたのが限界だったのか、男は遂に殴りかかった。

「無視すんなやテメェ！！」

ガシャン！　と何かが割れる音が響く。　辰屋は目を疑った。　男が殴りかかった時、テルはラーメンを持ち、殴りかかった男の顔面

に丼が割れるほどぶちまけるのを見たのだ。

「……」

男は白目を剥いて気絶している。　そしてテル手を払うと首を慣らしながらハヤテに言った。

「残念ながらハヤテ、そのラーメンは俺が注文したのとは違ェーな。
俺が注文したのはやたらとアホな、なんでも一人で済ましてカッコつけようとしてるバカなジジィのラーメンだ」

「クソガキ……お前ェ……」

「俺が知ってないとでも思ったのか？　あんたの店に客足が減っていたのは単に時代が変わっただけなんかじゃねぇ、コイツらが妨害してたのさ」

テルは男達の方をクイクイっと指した。

「お前、そこまで…なんで……」

そこまで知っていながら、なんで来たのだとその思いで一杯の辰屋にテルは背を向けながら返す。

「約束覚えてっか、このクソジジィ」

約束。恐らく、あの時だろうか？　助けた後にガキが言った言葉。

ようやく思い出したぜ。

「なんかお礼をしなきゃならねぇな」

―たしかアイツはその後に笑いながら言ったんだ。

「この恩は絶対に忘れはしねぇ……あんたのこの先の人生、短いだろうが、どんな事からでも俺が護ってやるよ……」

―そうだ。こう言ったなガキのクセに生意気なこと言ってたっけか。

「こ、この野郎！　テメーら、全員でやっちまえ！」

味方がやられたのを見た男が合図を送ると他の男達が一斉に迫ってきた。

「あのテルさん、どうしますか？　実はラーメン結構作って余って

るんですけど……」

ハヤテがラーメンを両手に構えながら言う。　テルはやれやれといった表情。

「しょうがねぇな……じゃあアッチの不躾なお客様に食べさせるとするか」

「はい！」

ハヤテは頷いて二人はラーメンを構える。

その瞬間、男達の動きが凍り付くように止まった。　男達の視線の先には悪魔のような笑みを浮かべて目を赤くぎらつかせながら男達を見つめるテルとハヤテの姿があった。

その一瞬を見逃さず、二人はラーメンを持って男達の距離を縮めると勢い良く、顔面にぶちまけた。

４人の男達が一気に倒れる。

「よく聞けクソジジィ、確かに俺達は血の繋がりはねぇがよ……そんな目に見えるモンよりでっかくて大事なモンがあるじゃねぇのか？」

「少なくとも……」とテルは付け加えて続ける。

「あのラーメン食った日から、俺はアンタを親父と思ってんだぜ！」

テルは辰屋に向けて大声で叫ぶ。しっかりと耳に聞こえるように、忘れさせないために。

（ガキが……言うようになったじゃねぇか……）

戻ってきた男の成長を辰屋は嬉しく感じていた。

「おーいハヤテ、弾（ラーメン）の心配はするな！　私達が作っているからな！」

辰屋が物思いにふけっているその横でマリアとナギはラーメンを作っていた。主にマリアが作ってナギがなんかラーメンにかけている。

「ってアンタら誰だよ！後俺のラーメンを弾扱いするな！」

「ハヤテ！パス！」

「オイィイ！話聞けこの野郎ォォォ！」

ナギは辰屋の言葉を聞かずにハヤテにパスした。　ハヤテはそれを受け取ると向かってくる男達にぶちまけた。

「ウゲッ！なんでこのラーメンはネバネバしてんだァァァ！」

「熱い！熱いィィイ！　臭ェ！マジィイ！」

男達は顔に苦痛の表情を浮かべながら気絶した。

「ナギ、一体何を入れたんですか？」
マリアは隣で腕を組んでいるナギに恐る恐る聞いた。
「隠し味にちょっとくさやと長芋な……健康的だろ？」
（テル君第二号がここにいますわ……）
マリアはそう思わずにはいられなかった。
「て、テメェら……こんな事してただで済むと思うなよ！」
男のリーダー格が言い放つ。がもはや威厳もなにも無い。
「何言ってんだか……明らかにお前らの営業妨害だろうが。　普通に訴えてやるぞコノヤロー」
テルは男の前に立ち。堂々と返した。　男は一歩下がると悔しげに呟いた。
「テメェ……一体何者ンだ？」
「俺は……そうだな」
「いえいえ、テルさん。『俺』じゃなくて、「僕達』ですよ」

「まぁそうか……俺達は」

ハヤテの一言にテルは言い直して声を揃えて言い放つ。

「「通りすがりのただの執事だ！覚えておけ！」」

言い放った言葉に男はクソっと毒づく。

「おお！　カッコ良すぎるぞハヤテェェェ！！」

ナギは腕を高々と挙げて歓喜の声をあげていた。

「クソっ、だったらこの借金、どうしてくれんだ！払えるもなら払ってみろ！」

男は勝ち誇ったかのように叫ぶ。　確かに営業妨害の方は解決できても実際ある借金は消えてはいないのだ。　コレを解決しない限り、奴らは何度もやってくるだろう。

「だったらその借金、俺が肩代わりしてやる」

「「ハァ！？」」

男と辰屋が間の抜けた声をあげた。

「おいガキ！勝手なこと言ってんじゃねぇ！」

ずかずかと詰め寄る辰屋。　しかし、テルは辰屋に向かって言う。
「俺は約束は護る。　絶対ェ護る。つーか護らせろ」
「バカやろうが……」
（こんな老いぼれなんか知らんぷりしろってのに……お前って奴は）
「バカかお前は？」
辰屋のセリフに続くように割って入る一言。
「ナギ……」
「お前が払えると思っているのかこのバカテル」
「バカじゃねぇし、俺は絶対ェ払うし」
「だったらどっからその金をだすのだ？お前の経済力ではたかが知れてる。　全く何も考えない奴だな」
ナギはふぅとため息をついた。
「放っておけ……」
「だがそんなバカな奴、私は嫌いじゃないぞ。　オイ、そこのハゲ」

ナギはリーダー格の男に言いつける。
「だれがハゲ散らかしただァ！」
男はナギに怒鳴るがナギは表情を崩すことなく続ける。
「その借金、私が肩代わりしてやる。　額を見せろ額を」
男はナギに借用書を見せた。子供が見たら予想もできない額だ。
後悔させてやろうと思ったのだが、ナギは受け取ると紙をパシッと叩き
「なんだこんなものか……マリア！」
パチンと指を鳴らすとアタッシュケースを持ったマリアが前にでてきた。
「どうぞ」
男の前まで歩き、ケースを差し出す。　男が開けると中には札束があった。
「全額返済です♪」
笑顔で言うマリアに男はただ驚くしかなかった。
「お、お前ら何者ンだ？　一瞬であの額用意するとは……」
アタッシュケースを抱えると男はニヤリと笑った。

「わかったよ。　お前ら引き上げるぞ！」
その言葉に仲間は不満と怒号の声をあげた。　その反応に男は頭を掻きながら
「うるせぇな、金返せば大事な客だろうが」
その言葉を最後に男の仲間達は倒れている仲間を起こし、渋々去っていく。
仲間達が帰っていくなかで男は不適な笑みを浮かべる。

（ここまでされて黙ってられるかってんだ！　終わった後でも店に迷惑かけてやる！）

なにがなんでも後悔させてやる。といった表情で店から出て行った。　なんと器量の小さい奴か。
しかし、男達の笑みも束の間だった。　店から出て来た男達はピタリと目の前の光景を見て足を止める。
「な、なんだテメェら……」
男達の目の前にはおびただしい数の人、人、人。怒りの形相で睨む者。　または箒や棒などの武器を持っている者。
先頭の男が口を開いた。
「アンタらか……この店に毎回毎回営業妨害してた奴らは」
「へ？」
間の抜けた声。　それもそうだろう、話し掛けてる男は立派に整っ

た髭にサングラス、プロレスラーな筋肉、体長は二メートル近くあった。　彼から出される威圧感は恐怖に近い。

「このラーメン屋は俺の学生時代の思い出の店よ。潰させるわけにはいかねぇな……」

「俺達みたいなサラリーマンの愚痴をあんなに節介やいて聞いてくれる店主、なかなかいないぜ！」

「俺のランチはここって決まってんだよ！上司の豪華なランチなんかクソ食らえ！ここのラーメンが一番なんだよ！」

「……二度とこの店に近づけねぇようにしなきゃならねぇな」

筋肉質の男が拳の関節をパキパキと鳴らす。

その後はどうなったかは想像はつくだろう。　何があったかを聞くのは野暮というものだ。

「アイツ等はお前が連れてきたのかクソガキ……」

一同が歓喜の雄叫びをあげているなかその光景を見ていた辰屋はテルに尋ねる。

「俺は一人にだけ言ったつもりだったんだがなぁ……」

倒れている椅子を立て直し、テルはドカッと座り溜め息をついた。

「良かったじゃねぇかジィさん。　こんな店でも忘れないでみんな

から好かれていてよ」

「お前……」

「まぁ、そういう事だな。　これで俺が執事としてアンタの店に来るのは……もう終わりだ」

「て、テルさん……そんな……」

まるでもう二度とここに現れないという口振りにハヤテがテルに言うがテルは「ただし……」と付け加えて続けた。

「今度は客として、息子として来てやるよ」

テルの言葉に辰屋は驚く。

「いいのか？　お前はそれで……血の繋がりも無いんだぞ」

「ったく、さっきも言ったけどよ……」

頭を掻きながらもテルは辰屋と向き合った。

「血の繋がりがなんだ？　そんな目に見えるモンより見えないモンの方が俺にとっちゃ大事なんだよ……」

血縁など関係無い。少なくとも、血の繋がりよりも確かな絆がここにはある。　この店を訪れる客達、そして今回来てくれたテル達。絆とは広く、そして深いものだ。

「なら言わせろよ……」

テル達が帰ろうとしていた時、背後から辰屋が呟いた。　その言葉を聞き、テルは背を向けたまま聞く。

「また来いよ……このバカ息子が」

テルはその言葉を聞くと背を向けたまま一言。

「あばよバカ親父。　うめぇラーメン出さなかったら承知しねぇぞ」

そう言い残してテル達はラーメン屋を後にした。

「……」

段々と見えなくなっていくテル達を辰屋は眺めていた。

（ハツ、見てるか？こんな俺を親父って呼ぶバカな奴がいたぞ……血は繋がってねぇが関係無ェって……こんな俺は幸せもんだなぁ……）

辰屋の頬に何かが流れた。とめどなく流れる冷たいが暖かい。

「アレ？　辰屋さん、泣いてるんですか？」

顔を見られたのかサラリーマンが声を掛ける。　辰屋は顔を上に、空を見上げた。
「バカやろ……こりゃ新しいスープだ」
「そりゃあ随分と……しょっぱそうな、嬉しそうなスープだねぇ」
その後はみんなで後片付けをして営業再開。　店主辰屋の顔には今までになかった笑顔が見られるようになったという。

「テル君、本当に良かったんですか？」
夕方の帰り道、マリアがテルに聞いた。
「何がです？」
「あのラーメン屋でまた働かないで執事の仕事をとった事です」
「何を言うかマリア……」
と急にナギが会話の中に入ってくる。
「このバカテルだぞ？　その内ラーメンで死人が出るようになるぞ」
無きにしも非ずの可能性を言うナギにテルは顔をしかめて一言。

「そう言えばなんでみんなついて来たんですかねぇ～？」

その言葉を聞いた瞬間、ナギはテルから離れ、ハヤテの手を掴んだ。

「は、ハヤテ！さっさと帰るぞ！」

「そ、そうですねお嬢様！　僕帰って早く夕食の準備をしなきゃいけませんし」

そい言うとハヤテはナギを抱えて爆走。

「おいコラ！待ちやがれ！」

そう言っている間にもハヤテの姿はどんどん見えなくなっていく。

加速装置でも付けているようだ。

（また……置いてかれました）

マリアは一人自分の扱いについて呟いた。

という事は帰り道はテルとマリアの二人っきりだ。

（テル君はああ言いましたが、自分の本当の親が見つかった時はどうするのでしょうか？）

ふと疑問が浮かぶ。彼の探す両親が見つかったとする。テルはどうするのかラーメン屋の店主を父親と呼んでいられるのか。

マリアは意を決して聞くことにした。

「あの、テル君……」

「なんですか？」

「もし……もしですよ？　両親が見つかって記憶も戻ったらテル君はあの店主さんを父親と呼びますか？」

「……」

テルは空を見上げて少し考えると静かに返した。

「何も……変わりはしませんよ。　もう俺らの間には溝も誤解もありません。喧嘩をすることがあっても記憶が戻っても両親が見つかっても俺はあの人を父親と呼ぶつもりです……あと忘れてもらっては困りますが」

テルは笑みを浮かべるとマリアを見て言った。

「俺にとって、ナギやハヤテ、マリアさんは家族ってことにしてるんで」

「あはは、私はなんでしょうか？」

「いや、マリアさんはお母さんですよ。雰囲気的に……」

その言葉にマリアはピクッと反応した。

「……どういう意味です？」

「いや！あの！別に深い意味はないんですよ？本当に！」

「じゃあなんでそんなに汗ダラダラなんですか？」

「すいまっせーっん！」

「あ、テル君！待ちなさい！」

ダッシュで走るテルをマリアは追いかけた。　追いかけていく中でマリアはある事を思っていた。

（家族……か。　いつしか全て分かる日が来るのでしょうか……）

言い表せない不安感がよぎる。

―家族ですから

テルの言葉が思い出される。　何故だか安心する自分がいた。少なくとも、今だけはこれでいい。　核心に迫るのはまだ先でもいい。

（これから面白くなるんですから……）

不安が消え、これからの日々に期待感が高まった。

第１８話・完

と思っていたのか！！

翌日、ナギの屋敷にて。

「オイ……」

「なんだバカテル」

わなわなと一枚の紙を握りしめるテルはナギに聞く。　この紙を。

否、テル宛てになった借用書を。

「なんで俺名義ィィイ！？しかもナギから借りた事になってる！？」

「なんでって……自分で払うって言っときながら……」

「お前払ったんじゃないのか？」

「いや、お前が余りにもダラケるからさ。マリアが『借金の一つでもあった方が必死こいてやりますよ♪』っていうからさ」

「マリアさぁぁぁん！」

「騒ぐなバカテル。　たったの６０００万だ。私に返せばそれで済むという事にしてある」

「お前は金の感覚が狂ってんだよ！ハヤテより低いからってこんな額見たら夜逃げ所か自殺するわ！！」

「よかったな！借金執事がもう一人増えたぞハヤテ！」

「テルさん……頑張っていきましょう！」

「やめろ！見るな……そんな目で俺を見るなァァァァ！」

こうしてグータラ執事は借金を作ってしまったのである。

第１８話～血の繋がりよりも大事なものがある～（後書き）

一話完結にしたかったんです。今回はなんかちょっと違ったハヤテのごとく！になったと思いました。　書いてる時にハヤテのごとく！ってこんなのだっけ？とか思ったり……でもこういう話はやってみたかったんですよね。　努力して上手くなりたいと思います。

借金ですけど意外な展開があったりします。

ハヤテのごとく！～すべらない話～（前書き）

今回からこの話の正式名称が決定しました！　よく分からない人がいるかもしれませんが温かい目で見てもらえれば幸いです。　あと、後半は明らかにネタです。

ハヤテのごとく！～すべらない話～

ハヤテ「さぁ、久しぶりにやってきました！　『ハヤテのごとく！すべらない話』」

マリア「今回は特別ゲストとして伊澄さんが来てくれました♪」

伊澄「どうも、鷺ノ宮　伊澄です……」

ハヤテ「原作キャラが登場するとこのお茶会もどんどん人が増えていきます」

マリア「これお茶会だったんですね……」

ナギ「う○ねこのようにしていく気なのか？」

ハヤテ「っていうかさっきからテルさんの姿が見当たりませんけど……」

テル「……」

ハヤテ「テルさん、どうして真っ白な灰状態になってるんですか？」

テル「……」

ナギ「へんじがないただのしかばねのようだ」

テル「……」

ハヤテ「動こうともしませんね、どうしてでしょうか？」

ナギ「大方この前作ってしまった借金の事だろう？　マリア！」

マリア「はい♪」

ハヤテ「あの、マリアさん？どうしてテルさん目掛けてハンマーを振りかざしてるんですか？」

マリア「ザオリク！」

ドゴッ！

テル「グホッ！　痛い！　頭が！頭が！頭が割れる！」

マリア「ザオリク！ザオリク！ザオリク！」

ドゴッ！ドゴッ！ドゴッ！

テル「すんません！復活しました！復活しました！」

ナギ「全く、借金などどうでも良いではないか？」

テル「良い訳ねーだろ！　なんで俺が６０００万の借金を払わなき

ゃならないんだよ！」

ナギ「自分の発言には責任を持つことだな、それに借金ならハヤテの方が上だ」

テル「明らかにお前狙ってたろ！？　」

ナギ「狙ってなんかないもんね！　お前が後先考えないで突っ走るから悪いのだこのバカテル！！」

テル「ダァァァ！この野郎！　好き放題言いやがって！　このチビナギがァ！」

ナギ「なんだとぉ！」

ナギ・テル「「ぬぬぬぬぬぬ！」」

マリア「あらあら……」

ハヤテ「見事に火花散らして睨め合ってますね」

伊澄「……」

ハヤテ「伊澄さん、どうしたんですか？」

伊澄「いいえ……ただ、テル様と話しているナギはとても元気に見えるので……」

ハヤテ「そうですか？」

マリア「まぁ、喧嘩するほど仲が良いと言いますし」

ナギ「勘違いするなハヤテ、マリア！コイツは私の悪にして宿敵！こんな奴と仲が言い訳ないだろう！」

テル「オイ……言わせておけば」

ナギ「なんだ？」

マリア「ハイハイ、喧嘩は止めて仲良くしなさい」

ハヤテ（お母さん！？）

テル「まぁ、なんだ……今回はマリアさんに免じて手を引いてやる」

ナギ「ふん！私も仕方なく哀れなお前を許してやろう」

ハヤテ「なんにせよ、丸く収まりましたね。　では本題に入りましょうか」

テル「さて次の展開だが、そろそろ借金の重さに耐えれず自殺を……」

ハヤテ「イヤ、止めてくださいよ！　連載終わりますから！」

テル「冗談。　日にちはハヤテが受験してから数日ってことになってる」

ハヤテ「その日に何が起こるかですね」
ナギ「ここも少しバカテルにとって大きなポイントになりそうだな」
テル「まぁ、実際にその日を見てみなきゃ分からんが……あと、ここで重大な発表が……」

ハヤテ「なんですか？」
テル「この次の次の話は少し長めの小説を作るつもりらしい。　まぁ、作者特有のオリジナルストーリーだ」
伊澄「まぁ、それには私も出るのでしょうか？」
テル「それを言ったら何もかもおしまいだ。　次の話が終わり次第に後書きに次回予告をするつもりだ」

マリア「完成度が心配ですが……」
ナギ「ふむ。当然、私が主役なのだな！」
テル「お～い、夢見るのも大概にしろ～」
ナギ「なんだと？」
テル「勿論、主役は俺だ！」
マリア「テル君？余り調子に乗っていると……あの人が来ますよ？」

テル「あの人？」

？？？「クックックッ……」

ギュピ☆ギュピ☆ギュピ☆

ハヤテ「こ、この特徴的な足跡は、まさか！？」

マリア「本日の最強のゲストですわ♪」

テル「お、お前は……ブロリー！」

ブロリー「クックックッ……貴様ごときが、主役になれるとでも思っていたのか？」

伊澄「まぁ、おもしろい人ですね……」

ハヤテ「って大丈夫なんですか？伏せ字も無しで！偉い人からとんでもない知らせが来そうですよ！」

テル「に、逃げるんだ……」

ハヤテ「うわ！テルさんがあのヘタレ王子に！　ダメですテルさん！逃げては！」

ナギ「ハヤテ……何気にお前は王子の息子役をやってるぞ」

ブロリー「クックックッ……まずはこの小説を荒らすクズ共を血祭りにあげてやる……」

テル「か、勝てる訳がない……」

ハヤテ「小説荒らしに来たのはアナタでしょう！？」

テル「逃げるんだ……」

ハヤテ「テルさん！？」

ブロリー「逃がすものか……」

テル「回り込まれた……」

ブロリー「どこへ行くんだ？」

テル「お、お前と一緒にこの小説を支配する準備だ！」

ナギ「や、止めろバカテル！！　そのセリフは……」

ブロリー「この小説の関連ワードにドラゴン〇ボールがなくてもか？」

テル「ちょっ！お前、今更伏せ字使ったって……」

ブロリー「オオオオオ！！」

テル「うわァァァァァ！」

ハヤテ「て、テルさァァァァん！」

デデーン！

ブロリー「お前達がやらないのなら俺はこの小説を破壊し尽くすだけだぁ！」

マリア「へぇ……」

ブロリー「へぇあ！？」

マリア「できますか？　あなたに……」

ナギ「え？マリア？」（マリアから殺気！？）

ブロリー「嘘です……全て嘘です……ゴメンナサイ」

ギュピ☆ギュピ☆ギュピ☆

ナギ「帰ってった……」

ハヤテ「マリアさん……あなたは一体」

マリア「ただのハウスメイドですよ♪」

ナギ「ちなみに今回はなんでお茶会開いたんだっけ？」

ハヤテ「これからの展開について語るためですよ」

伊澄「あと、二万アクセス突破らしいです……」

ナギ「なんだそれもあったのか……ってか最初にやれよ」

ハヤテのごとく！　～すべらない話～　　完。

テル「なんだ？このオチ……」

ハヤテのごとく！～すべらない話～（後書き）

完璧にネタでした。どうしてもやってみたかったんですよ。　あそこにもしアイツがいたらどうなるのかという期待。　やってみたらやっぱりカオスでした。スイマセン。

私が最近ブロリーを知ったのはある動画サイトで踊ってるブロリーをみたときです。ハマりました。爆笑です。

そしたら今回の話に出てきて、って流れがわかりませんね、全く……

長編なんですが次の話が2、3話あたり掛かるので終わり次第に後書きに次回予告します。

ご意見やご感想をお待ちしています。

第１９話～夢は所詮夢であることに変わりはない。そんなこんなで新章スタート

前回が余りにもカオスだったためにちょっと後悔してます

第１９話～夢は所詮夢であることに変わりはない。そんなこんなで新章スタート

「ギャアアアアア！！」

―朝。　断末魔に近いような叫びを上げながらテルはベッドから飛び起きた。

「夢……か…」

静かな一人部屋の雰囲気を感じて何もなかったという事を実感する。

（なんか……サ〇ヤ人が出てきてなんだかマリアさんが……）

なんかそこから思い出してはいけない気がした。　と言うよりも思い出したくないと言うのが正しいか。

ダルそうに身を起こし、顔を洗う。　時刻は６時。もうハヤテやマリアは起きている頃だろう。

階段を降り、台所に繋がる扉を開ける。

「あ、テルさん。お早うございます」

扉を開けたテルに気付いたハヤテが声をかけた。

「おお……」

「どうしたんですか？　そんな疲れた顔して……」

テルの顔色を見たハヤテが尋ねる。　死んだような瞳がいつもより死んでいたからだ。

「なんでもねぇよ……ただブ〇リーが」

「ブ〇リーですか？」

「あらテル君、どうしたんですか？　早くお仕事を……」

ハヤテの言葉を遮り、マリアが話に入る。　一瞬、マリアの顔を見てテルは顔を引きつらせたがすぐに気を取り直して仕事に移る。

「そうですわ、ハヤテ君。　そろそろ支度を、ここは私とテル君でやりますので」

何かを思い出したマリアはパンっと手を合わせてハヤテに言った。

「いいんですか？　僕だけそういう訳には……」

ハヤテは戸惑いながらマリアに聞くがマリアは構わないと言わんばかりに返す。

「大丈夫ですよ。私が付いていれば酷いご飯はできませんから」

「フッ……俺の料理を朝から食べれば最高にｈｉｇｈになれるのに」
「テル君？　自分で自分の料理を食べてみますか？」
マリアの一言にテルは自身の行動を自粛。
「ハヤテ君、早くナギを起こしてきてください。準備もありますし」
「わ、分かりました」
ハヤテはエプロンを脱ぐと扉を開けてナギの元へ向かった。
「ではテル君、こちらも支度をしますか」
「了解です」

マリアとテルは手際良く準備を進めていく。
（しっかしまぁ、アイツが受かるとはねぇ……）
ここら最近の説明をすると数日前、受験したハヤテだがどうやら受かったらしい。
最初は点数が足りなくて不合格だったのだが、マリアの推薦状を足して合格点を貰ったのだ。
その時は何やらパーティーやってたらしく、不合格の通知を聞いた時のハヤテ失踪事件は誰もが慌てた。

それからと言うもの、ハヤテの表情は輝いている。

「えへへ……」

いや、輝いていると言うかどうやら幸せの余韻に浸っている状態である。

今でも朝食を済ました後にもう学校へ行くだけなのだが、カバンやら何やら見つめている。

よほど学校に行ける事が嬉しいのか。

「おいハヤテ、早く学校行けよ」

テルはカバンを見つめてニコニコ笑っているハヤテに促す。　ハヤテはテルにニコニコとしながら返した。

「あ、テルさん。　実はこれから学校に行くんですよ」

「イヤ、知ってるけど……それはそうとしてナギが待ってるぞ」

テルは扉に立って待っいるナギの方を指した。

「テルさん……」

「なんだよ……」

「白凰が僕の母校なんですよ」

「だーッ！！　お前は一体何なんだよ！　もう何回も通ってんだろうが！！いつまでも一人でふわふわ時間楽しんでんじゃねぇ！！」

「おーいハヤテぇ！何をしているのだ？　早く行くぞ！」

遠くからナギの声。ハヤテは返事をしてナギと共に学校へと向かった。

（アイツ、学校にまた通えるから嬉しいんだろうな……ふぁ～寝み……）

楽しそうに学校へと向かうハヤテを見て、テルは二階の窓から心の中で呟いていた。

何故かは知らないがハヤテと一緒にいるナギも心なしか楽しげな表情をしていた。

普段から引きこもりがちでアウトドアという言葉とは全く縁が無く、学校にはなかなか行きたがらないあのナギが。

（ハヤテといい、ナギといい……一体どうしたっていうんだ？）

テルの疑問は深まるばかりだった。

そして数時間後。　マリアからテルは呼び出されることになった。

「マリアさん。どうしたんですか？　何か問題でも？」

「はい、実はテル君に頼み事が」

マリアはそう言うとテーブルの上に色鮮やかな二つの重箱を置いた。

「これは？」

「ハヤテ君達のお弁当ですよ。どうやら忘れてしまったみたいなんですよね」

ふぅ、と溜め息をつく。　あのミスをなかなかしないハヤテが珍しい事もあるものである。

「まぁ、最近アイツすんごい仕事上の空でしたからね……」

「はい。　よほど嬉しかったんですね、学校に行けるのが……」

テルとマリアはお互いに頷く。　退学させられたり、不幸に見舞われたりとあったのだ。　ハヤテにはこれ位の幸福は致し方ないだろう。

まぁ、結果的にこういうミスが起きてしまってはいるが

「ったく、ハヤテの奴め…仕事と学校のスイッチのＯＮ／ＯＦＦぐらいちゃんとしろっつーの」

「生活のスイッチのＯＮ／ＯＦＦが出来ていないテル君に言われてはハヤテ君もおしまいでしょうか……」

「マリアさん、それは酷いッス」

「テル君、前なんて朝の１１時に起きてきましたね？部活の無い大学生じゃないんですからもっとしっかりしてほしいですね」

「はい……」

テルはマリアのダメ出しにはそれぐらいしか返せなかった。

テルはテーブルの上に置いてある重箱を布に包んで手に持った。

「それじゃあ俺はこの弁当を届けてくればいいんですね？」「ええ……あ、そうだわテル君」

急ぎ足で台所から出ようとしたテルをマリアは呼び止めた。

「白凰はほんとに有名な高校なので、これを機に少し白凰を見学でもしてみてはいかがですか？」

「え？　ああ、はい……」

一瞬マリアが何を言っているのかが分からなかったがテルは了解し台所を後にした。

台所にはぽつんと一人残ったマリア。

（これでテル君も何かしら変化があればいいのですが……）

そう心の中で呟くマリアの手には一枚の封筒が握られていた。

第１９話～夢は所詮夢であることに変わりはない。そんなこんなで新章スタート

新章というかまぁそんな感じのお話がはじまります。　今テスト期間なのに何やってんだ俺ァ……

第２０話～そうだ、学校へ行こう～（前書き）

書いてる内に思ったんですがもう少し長くなりそうです。

第２０話～そうだ、学校へ行こう～

―白皇学院。

前に一度、買い物帰りに大きくそびえ立っている時計塔を見たことがある。

色んな飛び級生やお金持ちの生徒が通う『超』がつくほどの名門校。

そこにナギやハヤテは通っている。　今思うが、ハヤテにとってここは場違いじゃないか？　と考える。

だがまぁここ数日、楽しそうに帰ってくるハヤテを見ているとそうでも無さそうだ。

「しかしまた……大きな所だなぁオイ」

三千院家の執事、善立　テルは普通の高校よりも大きく、デザインの凝った門の前に居る。校門だ。

「我が家の敷地といい勝負をしてるんじゃないか？　イヤどうだろうか……ウチの家の方が上かも……」

率直な感想。テルは上空から見た写真を見たことがないからこんな比べ事をするのである。

三千院家の屋敷の敷地は練馬区の６５％。　だから実際、三千院家の方が大きいかも

「っと、あんまり長話してるとまた不審者に間違われそうだ。　とっとと弁当渡して帰って寝よ」

あんまり興味津々という訳でもなく、テルは眠そうな瞳をシパシパさせた。ちなみに明らかに職務怠慢の台詞があったがこんな事すれば彼はジャンク決定である。

両手に持った弁当を持ち、校門内に入ろうとした。

その時である。

「待ちなさいこの不審者！」

「あん？」

後ろから聞こえた甲高い声に反応し、テルは振り返った。

振り返ると居たのは２０代は越えているであろう水色の髪をした短髪の女性。

「誰が不審者だ。見なさいこの洗練された輝いている瞳を」

「誰が信じるかァァァ！」

テルの一言に女は辞書を取り出してテルの頭を抉るかのように叩き付けた。

スコーンとではなく、ドゴッという音と共にテルは叫んだ。

「痛ぇなこの野郎、出血したらどうすんだ！辞書の角はなァ、上手に使えば立派な凶器なんだよ！」

両手に弁当があるため頭を抑えることは出来ない。　女は辞書を構

えながら返した。

「いいのよアナタ不審者だから、私もう既に辞書でアナタをぶん殴ってるし、『コレで不審者じゃなかったら不味いかな～』と思ってるけどそんな事は関係無いの」

「だって」と付け加えた女は高らかに言い放つ。

「もし本当に不審者だったアナタを取り逃がしたら減るじゃない、私の給料が！」

「だから俺は不審者じゃねぇつーの！　俺のどこ見てそんな事言ってるの！？　教えて！？　ねぇ教えてェェェ！？」

「うっさいわね！その瞳が死んでいるのが何よりの証拠よ！」

「アンタの不審者の基準は目か！　明らかに適当な理由付けてるだけだろうが！」

テルは女に突っ込む。　なんというデタラメな女か。

「そんな事はいいとして、私には教師として生徒を守る義務があるの」

「教師？」

その言葉にテルは反応した。

「アンタ、ここの教師なのか？」

「ええそうよ、当たり前じゃない」

自信を持って言うが果たして、一般人でも自身の給料の為なら構わず殴りに掛かる人物を教師と呼べるのか。

「まぁ、それはいいとして……じゃあここの生徒の三千院　ナギって知ってるか？」

「ナギちゃんを知ってるとはアンタ、何者？」

その教師は少し探るように聞いた。さっきよりも疑り深く。

「俺は三千院　ナギの執事。　善立　テルだ。弁当を忘れたから届けにきたんだよ」

テルは一つの安心感を覚えてた。事情を説明したからには誤解も解けるだろうと。

―しかし。

「アナタ不審者じゃなくて誘拐犯ね！」

「なんでそうなるのォォォ！？」

「だって私そんな死んだ魚のような目した執事絶対見たこと無いもん！　いたら親絶対泣くもん！」

「オイィイ！お前今絶対言っちゃいけない事言ったよ！」

誤解は一向に深まるばかり。　教師は笑いながら

「大丈夫。アナタを仕留めるのにこんな得物は要らないわ」

「ねぇ俺の話聞いてり！？俺の話聞く気ある！？俺の言葉届いてる！？」

テルの言葉など毛頭聞く気もない女教師はパッと辞書から手を放すと更に続ける。

「私が武器を使うのはねボウヤ…むしろ相手を気遣っているという事なのさ」

そう呟くと教師はテルと向き合いテルと同じポーズを取る。

「残念だよボウヤ……奇しくも同じ構えだ」

（なんでス〇ック？）

テルは呆れながら心の中で呟くが近づいていく事が出来なかった。

教師の放つ凶悪極まりないオーラの為である。

お互いに距離を取りながら円を描くように動く。

（このままじゃ近づけな……ん？）

テルはここであることに気付く。二人は今互いの出方を伺いつつ円描くように動いている、つまり現在のテルの位置は必然とそうなるわけで

「お、もう抜けてら」

間合いを取り続けていた結果、見事テルと教師の位置は入れ替わり、校門の中に入る事に成功した。

「あばよエキセントリック教師」

「あ！　ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

叫ぶ教師を無視してもうダッシュで校内へと侵入していくテル。

教師は顔をしかめた。

（い、いけない！このままじゃ不審者の侵入を許したとして私の責任になることは必然的！　そうなれば私の給料が危ない！）

真顔で言うが内容は自身の事しか考えていない。

しかし彼女にとっては死活問題である。今月の給料日の金も毎晩飲みや飲みに明けくれ豪遊した結果、既に財布の中はカップ酒とチーカマしか買えないほど寂しくなっていた。

（一体何故無くなるのかしら……）

注・理由は明白である。

教師はそんな明白な疑問を浮かべながらも指を勢いよく鳴らす。

パチンと音が鳴るとどこからともなく黒服の男達が現れた。

「雪路様。どうなされましたか」

男達の一人が雪路と呼ばれる女に聞いた。

「凶悪極まりない不審者の出現よ！　私の給料……じゃなくて、生徒を守るために不審者を捕まえるわよ！」

もはやテルを普通の一般人と見るとかの前提は存在していない。一方的な判断であった。

「了解しました」

男達は頷くと一瞬にして四方八方に散っていった。

「テル君、大丈夫ですかね～」

場所は変わり三千院家の屋敷。　台所ではいつも通りマリアが掃除をしていた。

（さすがにハヤテ君みたいな不幸体質ではありませんがここちょくちょくトラブルに巻き込まれていますし……心配ですね）

マリアはテルの心配をしていた。　彼がハヤテのようなトラブル体質ではないと分かってはいた。

実際今までの失敗の中で少なくとも彼自身の失敗ではないというのはしっていた。　実際、この前の伊澄の一件は伊澄本人から事情を聞き、そういった類の失敗だったと分かっている。

だからいくらかの失敗の中でも彼に落ち度ないのは知っているのである。

それでも失敗の数は多いが

（ここは以前のハヤテ君の事もありますし、電話しておきましょう）

マリアは携帯を取り出すとテルに電話をした。

すると近くのテーブルの本からバイブ音。

「……」

マリアは本をどける。そこにあったのは案の定、テルの携帯だった。

（テル君、携帯電話は持っていなきゃ携帯電話じゃないじゃないですか！）

もはやマリアは彼の無事を祈るしかなかった。

「さ～て、行きますかな」

白皇学院に潜入したテルはこれからナギ達の元へ行く。

暗雲渦巻く白皇学院。　名門校に現れるグータラ執事は一体何をもたらすか。

波乱万丈奇々怪々、奇想天外ビックリ仰天。　次回もお楽しみに！

「ミッション（任務）スタートだ」

第２１話～潜入の基本は身を何かに潜め、自然と一体になることである～

白昼の白皇学院。生徒達は広場を歩き、それぞれが授業を行う場所へ向かう。

どこの高校にもよく見られる光景。

そこを行く一つの影？

カサカサカサカサカサ……

いや、影ではない。それはスニーキング、潜入の必須アイテム、ダンボール。

彼は今、ダンボールの中に入っている。

「我ながら見事な潜入だ。　ここまで鮮やかに潜入を決めれるのはス〇ークを差し置いて俺しかいまい」

ダンボールの中で不敵な笑みを浮かべる。　だが彼は気づいてはいない。　彼が歩く場所は広場のど真ん中、そこを似つかないダンボールが歩いていれば自然と目が向けられ事に。

（さて、一体どこにいるんだ？　取り敢えず色々探してみるか……）

―白皇は名門校なのでこれを機会に見学してみては？

マリアの言葉が蘇る。　確かにいい機会だが

「こんなヴァ○・ディール並みに広いトコ、どこから見学すればいいか分かりません！」

　このバカデカさ、恐らく初めての人が入ったら確実に迷ってしまうだろう。

テルは人目を避けるために茂みの中へと移動した。

頭に木の棒を付けてカモフラージュを装っているのだが、執事服を着ているためあまり意味は無いかもしれない。

「大丈夫、自然と一体になれ……宇宙は俺の一部であり、俺は宇宙の一部だ」

何かのまじないなのか、テルは謎の呪文を唱え始めた。

身をかがめて低い姿勢で行動をしていく。

テルがものすごいス○ーク気分を堪能していたその時である。

「……だ！」

茂みの奥から一瞬だけ張り上げた声が聞こえた。

「ん？」

テルはその声が気になりその場所へ近づいていく。静かに近くと段々と声の主が見えてきた。

「なんか違うんだよなぁ……」

そう一人呟くのは少年だ。ナギと少し似た身長、毎日不機嫌そうな顔している。

「こんなんじゃ俺の思いは伝えられない、もう一回だ！」

少年はそう言うと一度深呼吸して目を閉じた。

「俺は……橘　ワタルは、伊澄の事がす―」

「どうしたのワタル君……」

「うおっ！？い、伊澄！？」

ワタルが言おうとした言葉が言い切られることはなく、突如現れた伊澄にワタルは激しく動揺した。

（まさかの本人登場かよ）

一人隠れていたテルはその光景を見ていた。

オロオロするワタルを見ていた伊澄は口を開いて聞く。

「それでワタル君……私がどうしたの？」

「へ！？いや、その……」

言葉を詰まらせていたワタルだったが意を決して伊澄と向き合う。

「お、俺はお前の事がす、す……」

「え……」

伊澄は表情の変わったワタルを見て顔が赤くなる。

（さぁ言え少年！お前の思いを告げて見ろ！だが成功したら死刑だァァァ！）

近くの茂みに身を隠していたテルは二人を見守っていた。

「す、す、酢だこ！」

「……」

橘　ワタル。１３歳。一年、いや、何年よりも長く感じた瞬間だったという。

「……ワタル君、私酸っぱいのはどうも……」
「えっ！？　ああそう！分かった！　じゃあ甘い何かだったら用意できるから」
「まぁ、楽しみにしてるわ……」
伊澄はニコリと笑顔を向けてワタルに言うとその場を去っていった。
（……）
ガクッと膝を落とし両手を地面に付ける。
（全く俺はなんていう……）
「ヘタレ君」
「なっ！？」
突如茂みからガサガサと顔を出したテルにワタルは驚いた。
「全く、やっぱり学校てのはこういうのが多々あるもんなんだよ。
気になるあの娘がいれば声も掛けずらい、自身の油断をもたらす……正に愚の骨頂、男子！」
「お前は何様だ！　どんな暗い青春送ってんだよ！って待てよ……

」

ワタルは語るテルに突っ込むがここで一つの疑問に気付く。

「お前、いつから居たんだ？」

ワタルの言葉にテルは顎に手を当てながら答えた。

「え～と、『俺は、橘　ワタルは……』って所から」

「ウオォォオ！」

顔を真っ赤にさせてワタルは叫ぶ。　不覚だ。　見ず知らずの他人に好きな子に告白の練習するところから実行（結果・失敗）にいたるまでを見られてしまった。

橘　ワタル。一生の不覚である。

「まぁまぁ」

テルは落ち込むワタルの肩をポンポンと叩く。

「若いうちは色々やってみるもんだ。　大丈夫、みんなそうやって大人の階段登るのさ」

「ムカつくんだけど、その『ドンマイ』って言ってる輝かしい笑顔がやたらムカつくんだけど！」

憐れみプラス、励ましの笑顔で親指を立てるテルがこの上なくイライラしたワタルだった。

テルは続けて一言。

「まぁ頑張れや平成酢だこヘタレ少年」

カチン。とワタルの中で何かが弾けた。

「うるせぇぇぇえ！！」

ワタルはそこにあった石を手に持ちテルめがけて投擲。

小さい石、中くらいの石が矢継ぎ早にテルに命中。

「オイコラ！　石を投げるな！　当たると痛ェんだぞ！？　いやっ、あの、ちょっ、止めろって！」

それでもワタルは目をつり上げて石を投げるのを止めない。

仕舞いにテルのデコと鼻に石が命中し、テルは顔を抑えながら退散していった。

「ハァハァ……」

逃げていくテルを睨みながら、ワタルは投擲で疲れたのか息を荒くしていた。

「ったく、なんなんだよ……」

―橘　ワタルと善立　テル。　この二人はいずれ思いがけない形で再開することになる。

一方、白皇学院内にあるカフェテリア。

「なにィ！？　弁当を忘れただと！」

「はい……申し訳ありません、お嬢様」

ここカフェテリアで椅子に座る一人の少女、その側に立つ一人の少年、ナギとハヤテだ。

つい先ほどの事、授業の休み時間に自身が弁当を持ってくるのをすっかり忘れていた事に気付いたのだ。

「す、すいません！　僕がしっかりしなかったばっかりに……」

「むぅ……ハヤテでもたまにミスるんだな」

慌てるハヤテにナギは珍しいと言った表情。

「まぁいいさ、誰にだって失敗はある。　幸いここで食べていってもいいんだし……」

『♪～♪』

ナギが言い切る前にどこからともなくメロディーが、ナギの携帯である。

「もしもし、マリアか、どうした？」

「ナギ？　あなたお弁当を忘れていきましたね？」

「私が忘れたのではなく、ハヤテが忘れたのだ」

「普段から自分で持つように心掛けていれば良かったのでは？」

「うぐっ！」

マリアに正論を言われたナギは返そうにも返せない。

マリアは続ける。

「……まぁ、ハヤテ君のせいにするのはよしましょう。　今テル君が二人のお弁当を持ってそちらに向かっています」

「なにィ！？　あいつが？」

マリアの言葉にナギは声を荒げた。

「アイツの作った弁当は食べんぞ！　白皇で食中毒事件を起こす気か？　私はハヤテの弁当以外は認めん！」

マリアはその言葉にピクッと反応し、静かに返した。

「そうですか……なら、私の作ったお弁当は食べなくてもいいですね」

「へっ！？　いや、違うんだマリア、そういう事ではなくてお前が作ったなんて知らなかったから……」

ナギの言葉にマリアは呆れながら返した。

「全く……ちゃんと感謝しなさい。　どこまで嫌ってるんですか」

「だってアイツすぐにバカにするし、いらなくボケるし、私をからかうし……私にとっての悪だ」

（なんという言われようでしょうか）

つくづくテル哀れとマリアは思いながら続ける。

「それはそうと、初めての白皇なのでハヤテ君みたいにトラブルに巻き込まれるかもしれません」

マリアの言葉を聞き、ナギは椅子の背もたれに寄りかかり、片腕を伸ばして背伸びをする。

「いやいや、流石にアイツはハヤテじゃないし、いきなり不審者扱いには……」

ピンポーン

と突然、白皇学院に響く放送の知らせ。

「え～。　現在、敷地内に不審者がいます。　黒髪短髪で若干死んだ魚のような瞳をした奴です。　生徒の皆さんは充分注意して下さい」

ピンポーン

と最後に締めの音がなるとナギは背もたれに寄りかかりながら片腕で目を隠した。

「マリアよ……」

「はい？」

「どうやら手遅れらしい……」

「ええっ！？」

マリアは驚きの声を上げた。

「仕方ない、こっちはなんとかしてみるから。　私はこれから授業がある。　じゃあな」

「わかりました。頼みましたよ、ナギ」

最後に言うとナギは電話を終えた。

（不本意だが少しヒナギクにも協力してもらうか）

「全く、なぜ私がアイツの為に……全く……」

ナギはぶすっと頬を膨らませた。

「お嬢様、どれだけテルさんの事が嫌いなんですか？」

ハヤテが苦笑いしながらもナギに慎重に聞いた。

「海よりも深く、富士の樹海よりも深くだ」

「それをいつまでも貫き通すおつもりですか？」

「無論……死ぬまで」

「それは相当な悪・即・斬っぷりですね……」

テルはこの先大変そうだ。

「チキショオォォォ！　なんだアノふざけた放送はァ！」

当然、この放送を聞いていたテルは怒り心頭である。

「いつでも言ってんじゃん。　これはいざという時にダイヤモンド並みに輝くって……アレ？」

そんな事を呟きながら辺りを見渡しているとテルはひときわ目立つ建物が目に入った。

白皇学院の時計塔である。

「なんだここ……ん？」

テルが時計塔の入り口に近づいた時、立て札があった。何かが書かれている。

『生徒会以外の者の立ち入りを禁ずる』

「ほぅ……」

テルはその文字を見て少し考えるとニヤリと笑いを浮かべた。

「ダメダメそんなんじゃあ、『入るな』って書いてると入りたくなるじゃん？　これは『押すな押すな』は『押せ押せ』っていうノリと一緒よ」

半ば強引に理由を付けて中に入っていく。

そこからは階段があったがちょうどエレベーターがあったのでそれを利用した。　目指すは最上階。

扉が開くとやたら広い場所に出た。

広い場所にはソファーや本棚、食器棚、奥にはテラス、そして社長とかが座りそうな大きな机がある。

――生徒会室『天球の間』そう呼ばれている。

そのテラスから見られる景色は絶景。

学院が見渡せ、遠くの校門までよく見える。　風が優しく吹いた。

頬を撫でるかのような穏やかな風。　今日は晴天の事もあり、気持ちのよい事限りなしだ。

「良いところだ。　ココを俺の昼寝場所にしようか」

「危ないから止めときなさい。落ちたら責任持てないわよ」

「そりゃそうだ……ってアレ？」

聞き覚えのない声がテルの後ろから聞こえた。　テルは後ろを振り向く。

「ゆ、幽霊？」

「失敬な、れっきとした人間よ」

そこに立っていたのはホットピンクの髪を背中まで伸ばした少女。
金色の瞳からは強い意志を感じる。

「今日はいい天気ですな」

テルは考えた。先ほどの放送の事だ。恐らくこの学校は生徒会はジャッ〇メントとかいう組織でテルを捕まえに来た刺客なのだと。

ならば話は簡単。　スルースキルを発動してあたかも何事もなく去る。　これ平和的なやり方。

軽い足取りで少女の横を通り過ぎようとしたとき

「待ちなさい」

ガシッとテルの執事服の襟首が掴まれる。　襟首が掴まれた事により首が締め付けられた。

しかも女だというのに引っ張る力が強い。

「あら？あなたもしかしてナギの言ってた三千院家の執事さん？」

少女は何かに気づいたかのようにテルに聞く。

しかしテルはかすれた声で

「ちょっ……痛い、マジ……死ぬ……」

「あらゴメンなさい」

パッと襟首から手を離すとテルは少し息を荒げた。

「まぁ、そうだが…お前ナギを……知ってんのか？」

「まぁさっき聞いたんだけどね本人から……それにしても」
少女は淡々と答えるとテルの顔を見つめる。　じっと見られていたテルは少女に聞いた。
「お前もその口か……」
「はい？」
「お前もこの瞳を馬鹿にしてんのかァァァ！」
「え、いや、その……」
―私の新しい執事が来ているのだが、どうやらトラブルに巻き込まれてるらしい。　顔はもう死んだ魚のような瞳をしていて、基本グータラとダメな汁でできた人間だから一発で分かるぞ。
ナギの言葉を思い出すとその言葉一つ一つが忠実に再現されていたと感じた少女だった。
「ここは生徒会室だから部外者は立ち入り禁止になってるんだけど」
少女は話題を逸らし、テルに言う。

「そうかい、じゃああの立派な机は」

テルは奥にある大きな机を指差す。

「ええ、アレは生徒会長が座る場所よ」

その言葉を聞くやテルは頭を掻きながら呟く。

「じゃあその会長様が来る前に逃げねぇとな」

「その必要は無いわよ」

テルの呟きに少女は笑いながら言った。　少女は続ける。

「目の前にいるじゃないアナタの」

「え、マジ？」

テルは目を丸くして唖然とした声を出す。　少女は腰に手を当て言った。

「マジも何も……私がこの学校の生徒会長、桂　ヒナギクよ」

グータラ執事は完璧生徒会長との会合を果たす。

第２１話～潜入の基本は身を何かに潜め、自然と一体になることである～（後書

次でなんとか終わりそうです。

第２２話～生徒会長と執事と先生と～（前書き）

ちょっと長くなりましたがこれにて学校潜入編は終了です。
色んな人出すと大変ですね会話が痛恨した回でした。

いよいよ次回からオリジナルストーリー！最後の後書きの予告、ご覧あれです！

第２２話～生徒会長と執事と先生と～

―生徒会長。　それは学校に存在する魔の頂点。　全校生徒を悪の力で取り仕切り悪の行事に勤しむ。いずれ自身が大魔王となるために人々の魂を狙っているとんでもない奴。

「……で良かったんだっけ？」

「全くもって全然違うわよ！　どこの漫画の設定？」

テルのとんだ勘違いにヒナギクはテルに突っ込んだ。

「イヤイヤ、お前らが漫画とか言っちゃダメだって」

「ちょっと、私の話聞いてる？」

「このレーベルの原作だってな……」

「あーっ！　ストップストップ！　身も蓋もない事言わない！」

第２２話～生徒会長と執事と先生と～

「アナタ本当に三千院家の執事？」

ヒナギクが疑いの視線を向ける。テルは失敬なと言った表情で

「そうだとも、善立　テル。　この俺のどこに不安要素がある」

「少なくとも私の知ってる三千院家の執事はいらなくボケに走ることはないわ」

ヒナギクが言っているのはハヤテの事だ。　まぁ出会って数日、あんまり分からないが。

「それで善立君はどうしてここに来たの？」

ヒナギクは話題を変え、テルが白皇学院に来た理由を聞く。

「ああ、そういえばこの弁当届けに来たんだった」

テルはヒナギクに両手にあった重箱を見せつける。　ヒナギクはふーんといった感じで

「一応執事らしい事やっているのね」

少し感心したかのようにテルに言う。　弁当を届けるのが執事らしい仕事かどうかさて置き。

「随分と大きい重箱ね……」

ヒナギクはテルの持つ重箱を見る。　両手の重箱は三段重ねの上物。
それが2つ分。

（ハヤテ君はともかく、ナギは食べきれるのかしら……）
とてもだがナギが食べるには大きすぎるのではないかと考えるヒナギクだった。

「せっかくマリアさんが作ったんだ。今この場で少しつまみたい」

「これマリアさんが作ったの？」

「おおよ、よく知ってんな」

「まぁ知ってるわよ……それよりナギの所に行くんでしょ？案内するわよ」

ヒナギクにそう言われ、テルは首を慣らしながら返した。

「ぜひ案内してくれ社長」

「社長じゃないから、私会長だから」

「あーあ分かった。　行くぞ課長」

「なんで降格させられてるの！？」

そんな会話を終えて二人は生徒会室を出てエレベーターの近くで止まる。

「それよりも善立君、学校は？　執事の仕事と両立してるの？」

ポチっとエレベーターのボタンを押す。　ゴウンゴウンと下からエレベーターが登ってくる音が聞こえる。

「……色々とあり、通っていない」

テルは面倒くさがったのかちゃんと理由を話さなかった。しかしそこはヒナギク。　簡単には引き下がらない。

「どうして？　何か理由があるの？」

「いや、別にこれといっても……」

「だったらちゃんと通いなさいよ、楽しいわよ？」

「お前は先生か！　なんか不登校の生徒を学校に連れていこうとしてる先生みたいだぞ！」

だんだんとエレベーターの音が近くなってくる。　ヒナギクは前を向くと呟いた。

「まぁ教師になるなら絶対になっちゃいけない『反面教師』にはなりたくはないわね……」

「あ？何だって？」

ヒナギクの言葉は聞き取れず、テルは不思議そうな顔をする。

その時、ちょうど扉の向こうで「ちん」と音がした。

到着音と共にテル前を向く。　テルが扉が開くのを待っていた時。

一瞬、殺気が感じられた。

「うおっ！？」

突如だが、何が何だか分からないテル。
ほんの数十センチ、僅かな隙間からだ。テルの頭目掛けて隙間から伸びるのは木刀だ。

テルはその瞬間に頭を少し引いていたので辛うじて眉間に突きつけられる程度ですんだ。

「ふっふっふ……私の初撃を避けるとはね」

不適な笑い声が扉から聞こえる。　エレベーターが完全に開くと中からその人物が現れた。

テルはその人物を見て嫌そうな顔した。

「お前は……エキセントリック教師……」

「見つけたわよ不審者ァ！！」

まるで獲物を見つけ出したかのような歓喜の声。　雪路だ。

「桂ァ、コイツ本当に教師か？」

「ええ、れっきとした教師よ。　あと私のお姉ちゃんの桂　雪路よ」

テルの質問にヒナギクはすらっと答える。　テルは顔を歪ませて返した。

「嘘だドンドコドーン！」

まぁ初見の人は混乱するだろう。髪の色とかそれ以前に性格とかその他諸々で。

「ヒナ、いいところに居たわね！　ソイツは不審者よ！女の敵よ！　捕まえるから手伝いなさい！」

雪路は横にいるヒナギクに気付いたのか身も蓋も無いことを言う。

「ったく、俺をいつまでも不審者扱いする気だコノヤロー」

テルはダルそうに言うが雪路は木刀を構える。

「散々逃げ回っていたらしいけどここは時計塔の最上階。　孤立無援の八方塞がり、逃げ場は無いわよ」

「悪魔で俺の話はスルーか？」

「お姉ちゃん！　この人はただお弁当を届けに来ただけ！」

二人のやりとりを見かねたのかヒナギクが割って入るな。　雪路はそれを見て動揺した。

「なっ！　ひ、ヒナ……どうしてソイツを庇うの？　ハッ！　ま……まさか！」

雪路は拳をワナワナと奮わせて叫んだ。

「不審者ァ！　私の妹に何をしたァァァ！」

「何もしてねェェェエ！」

雪路の叫びを激しく否定する。

「惚けるんじゃないわよ！　あの手この手使ってヒナを！」

「オイィィイ！　ソッチの方に持ってくんじゃねぇ！　何人聞きの悪い事言ってんだァァァ！」

テルは激しく否定するが雪路は聞く耳を持たない。

雪路は怒りの形相に　持っていた木刀の握る力を強めた。

「ヒナ！私が今あなたをその呪縛から解放してあげる！」

雪路はテルの頭目掛けて木刀を振り下ろした。　テルのは避けきれず頭にドゴッと木刀の理不尽な一撃が炸裂する。

「うがっ！」

咄嗟に両手で防ごうとしたがそれは無理だ。　両手には重箱がある。つまりテルには今、両手が使えないという大きなハンデがあった。

「懺悔なさい！」

膝をついているテルに対し、雪路は更に追い討ちをかけようと木刀を振りかぶる。

この時、不思議な現象がテルを襲った。

（なんだ……この既視感）

既視感、それはどこかで見たことあるような感覚。　以前まるでこんな事を体験したことがあるようなないような

「でやァァァア！」

しかし、不幸なことにもその謎の既視感が彼の反応を遅らせてしまった。　避けられはずの一撃を

（やべっ……）

しまったと言わんばかりに顔をしかめるテル。両手は使えない、避けられない、ならば選択は一つ。

一撃を耐えるしかない。

その一撃を耐える決意をしてテルは身構えた。　しかし振り下ろされた一撃はテルに届く事はなく、一本の剣に遮られた。
ガキィという金属音が響き、雪路はその人物を見た。
「ヒナ！？」
「い・い・か・げ・ん・に……」
雪路が見るとそこには目をギラリと開かせているヒナギクがいた。
「しろォォォォォオ！！！」
気合一閃のもと、ヒナギクは雪路の木刀を押し返した。
「何訳の分からないことを言ってるの！？　そんな訳ないでしょうが！！」
ヒナギクは顔を真っ赤にしながら叫ぶ。　雪路は距離を取ると近くにあった鉄の騎士が持っている装飾剣を引き抜いた。
「そう……ヒナ、悪魔で私に刃向かうのね……なら私の相手が妹でも私は容赦しないわよ！」
「さっき私を救うんじゃなかったの！？」

その言葉を一つ紡ぐと二人は一気に近づき剣を交える。

「この前私が負けたのは私の剣が一本だったから！　二本なら負けないわよ！」

激しい斬撃の応酬。　雪路の二本の得物から繰り出される攻撃は一撃一撃が容赦なく、止まることがない、例えるなら止まることをしらない暴風雨。

しかし、その暴風雨を物ともしないかのようにヒナギクは雪路の一撃一撃を剣一本で防いでいた。

そして再び三本の剣がぶつかり合い、鍔迫り合いが始まる。

「じゃあお姉ちゃん、この前、貸した一万円はいつ帰ってくるのかしら？」

クスクスとした笑顔と共に雪路の痛い所を突く言葉が向けられる。

「ズ、ズルいわよヒナ！一度ならず二度までも諭吉を人質にとるなんて！　諭吉が何をしたって言うのよ！」

ヒナギクの言葉を聞いた瞬間、力強かった二本の剣が一瞬弱まったのをヒナギクは見逃さなかった。

「はぁ！」

その瞬間、バキンという鈍い音。　鍔迫り合いを解き、一つのヒナギク気合いの一撃が雪路の木刀に炸裂し、折れた音だ。

「ぬおっ！？」

雪路はたじろぐ、さっきまでの暴風雨の勢いはもう無い。

「まず妹に借金している事を恥ずかしく思いなさい」

ピッと剣を払うヒナギクに雪路はキョトンとした。

「なんで恥ずかしく思うの？」

「普通は思うのよ！」

ヒナギクは一喝し、剣先を雪路に向ける。

「まだやる？　お姉ちゃん」

「むぐぐぐ……」

しかし彼女に降伏の二文字は無い。

「お～い、俺を蚊帳の外にするな～」

テルを一喝見た雪路は目を光らせてテルの重箱を一つ奪い去った。

「オイ！　弁当返せ！」

テルの言葉を聞かず、雪路は一気に生徒会室のテラスまで移動する。

「待ちなさい！お姉ちゃん！」

ヒナギクが睨むが雪路は不敵な笑みを浮かべる。

「さぁヒナ、ここまで来れるかしら高所恐怖症のアナタが！　試練一度とは限らないのよ！」

雪路はテラスの手すりに飛び乗るとヒナギクに言い放つ。

「はい？」

テルは目を丸くしてヒナギクを見る。よく見ると汗を垂らし、体が少し震え、明らかに動揺しているようだった。

「お、お姉ちゃん…私に……同じ手が…通用すると…でも……思って？」

（うわ！メッチャ通用してるよ！　なんだよその負のスキル！）

心の中でテルは激しく突っ込む。　ヒナギクの震えは近づく度に増しているように見えた。

そう、何を隠そう彼女、桂　ヒナギクは極度の高所恐怖症である。

「で……でも！」

ヒナギクは瞳を見開き一歩また踏み出す。

「私は生徒会長　桂　ヒナギク！　この名に恥じないようこんな試練を乗り越えてみせるわ！」

「フッ……」

だんだんと近付いてくるヒナギクを見て、雪路は穏やかな笑みを浮かべた。

「さすがは我が妹、その妹の決意に免じてこの弁当を返すわ」

「マジで？」

「ええマジよ」

「本当！？　お姉ちゃん！」

ヒナギクもその場で止まり、笑顔を浮かべる。

「もちろんよ感謝しなさ―」

その時、非常に迷惑な事に雪路は突風によりバランスを大きく崩してしまった。

「ヌオオォオ！」

雪路は必死にバランスを取ったが、功を結ぶこと無く真後ろに倒れた。

次第に重力が働き、雪路の体が下へ下へと下がっていく。

（やばっ、これヤバいんじゃない！？）

雪路は事の重大さに漸く気付く、しかしその時にはヒナギクの姿も見えなくなっていた。

「お姉ちゃん！」

ヒナギクの悲痛な叫び、この時既に雪路の体は見えなくなっていた。

（ダメ！ダメよ！　もう誰も勝手に居なくならないで！）

テラスの向こうから今にでも這い上がってくる雪路をヒナギクは願

っているだろう。

しかし、雪路は登ってこない。　自然と涙が流れた。

（私を独りにしないで……）

「お嬢さん、あなたが落っとこしたのは何でしょう？」

突然、どこからともなく声が聞こえた。

「1．とんでもなく人の話を聞かないエキセントリック教師。　2．人の頭を問答無用で殴る教師」

ヒナギクは辺りを見渡す。　気付けばテルの姿が見当たらない。

その声はテラスから聞こえた。

テルのギリギリの行動により雪路は落下を免れていた。

テルはテラスの手すりに足を絡ませることなく、足で角度を９０度で床に引っ掛けて雪路の体引っ張っていた。

「正解は……人の話を聞かない妹思いの姉だコノヤロォォォ！！」

気合いを入れて、背筋と腕の力だけで雪路を上へと放り投げる。

「ウハァァァ！」
雪路は宙を舞い、ヒナギクの所まで飛んでいき床に転げ落ちた。
「お姉ちゃん！大丈夫！？」
「いでででで……」
頭から入ったのか雪路は頭をさする平気のようだ。
「全く、釣り上げるこっちの身になってみろよ」
テルがテラスから這い上がりふぅと溜め息をつく。
「アンタ！もう少しやり方はなかったの！？」
先ほどのやり方が気に入らなかったのか雪路は怒りの声をあげる。
「アリャ。変だな、魚が喋ってるよ。　シャーマンが釣れちまったぜ」
「人面魚って言いたいのか、あんまりだろソレ！」
不満言う雪路の頭をヒナギクがポカッと叩いた。

「命の恩人には感謝しなさい」

頭を抑えた雪路はフッと笑い

「さすがは三千院家の執事。いいわ、ナギちゃんの所に案内してあげる」

テルに親指を立てて言い放った。

「コラ、その前に俺を不審者扱いした件を謝れ」

「さ〜て行くわよ！」

完全にスルー。マイペースにもほどがある。

「ごめんねテル君、こういう人だから……あと、お姉ちゃんを助けてくれてありがと」

ヒナギクの言葉にテルは頭をボリボリと掻きながら

「おう……んじゃ弁当届けっか」

「ん？弁当？」

雪路がその言葉に動きを止める。　テルもだ。

「そういえばお姉ちゃん、持ってたお弁当は？」

ヒナギクはまさかと思いながら雪路に聞くが雪路はキリキリと体を動かして顔引きつらせた。

「し、下に……」

そう言って示すのはテラスの向こう側。

「……」

「……」

「「「……」」」

「で？　弁当一つ無に帰してしまったと」

場所は変わり、カフェテリア。　テーブルにはナギとヒナギクが周りにはハヤテとテル、雪路が立ったいる。

「俺のせいじゃない、全てはこのエキセントリック教師のせいだ」
テルは雪路の方をジッと見つめる。

「貴様の執事としての能力がダメダメだと言うことだ」

「いいじゃねぇか幸いもう一個あるんだからさ、どうせ食べきれないだろ」

「ぬ……馬鹿にするな！」

自分があまり食べれない事を馬鹿にされたのが気に障ったのかテルを睨みつける。

「……聞きしに勝る対立っぷりね」

お互いに睨み合うテルとナギを見てヒナギクが呟いた。

「ヒナギクさんアレですよ、喧嘩するほど仲が良いっていう」

「その割にも今にも飛びかかりそうよ、アナタのご主人様」

ナギの顔は怒りの形相でガルルルと狼のような唸りを出していた。

ハヤテは取り敢えず間に入ってナギを落ち着かせた。

「お嬢様、一つでも僕には食べきれない大きさです。　テルさんとも一緒に食べませんか？」

「えー」

ナギは明らかに嫌そうな声をあげる。それに続き、ヒナギクが口を開いた。

「私もここで食べようかしら」

そうヒナギクは言うと自身の弁当を取り出しテーブルの上に置いた。

「なんだヒナギクもか……」

「何だとは何よ、まだ食べてなかったんだし、それにみんなと食べれば楽しいでしょ？」

ヒナギクの言葉にナギはそうだがと思うが、ナギにとってはハヤテと食べたかったというのが強い。

「ヒナ！　そのお弁当、私にも頂戴！」

突然雪路がヒナギクに目を輝かせながら聞いた。

それを聞いたヒナギクはあっさりと返す。

「お姉ちゃん、教師なんだから自分で売店で買えば良いじゃない」

「給料前の私を助けると思って！　もうカップ酒とチーカマしか買えないの」

「私の記憶からだと白皇の給料まで後１０日以上あるわよね」

何故ここまで金銭の消耗が激しいのかは大体分かるヒナギクだった。　仕方なく自身の弁当を分けてあげた。

まぁそこからは昼食タイム。　ナギがピーマン嫌いだの言ったり、テルが食べている弁当から雪路がカマボコを奪い、オカズ争奪戦へともつれ込んだりした。

（なんか家の食卓みたいな賑やかさ）

不思議と騒がしい団欒を眺めていると自然に笑みがこぼれた。

その瞬間、テルの視界が再び既視感に襲われた。

今度はこの団欒から。　まるでこの光景と記憶の光景がダブって見えるように映る。　写真がピンボケしているようにハッキリとは分

からないが。

（俺もちゃんとこうやって誰かとメシを食っていた時があったのか？）

それは友人との時間かもしれない、もしくは家族との時間なのかもしれない。

だがピンボケしている光景と今見ている光景はどちらも賑やかそうだった。

それだけ分かれば充分かもしれない。

今日という日が何度も自身の記憶を引き出すように人の記憶は何かきっかけがあれば突然蘇る事もある。

（学校か……）

今日という日を振り返ってロクな事がなかったが少なくとも退屈はしなかった。　これは記憶ではなく、テル自身が感じた事だ。

そして一つの考えが頭に浮かんだ。　それについて少し考えるとフッと笑う。

（……それもいいかもしれないな）

―下校時間。

なんだかんだでテルはハヤテ達が帰るまで施設を見学していく事になった。　ちゃんと学校側から事情を話し、許可も了解したのである。

今はそれも終わり、三人は帰宅途中。

「あのさ…テル……」

「ん？」

夕日差し掛かる帰り道でナギが突然口を開いた。

だがなかなか喋らない。

「どうしたんだよ……」

テルはなかなか喋らないナギに聞く。　するとナギは顔を背けて言った。

「そ…その……一つ無くしたとはいえ、私達の為に弁当を届けてくれて……あ、ありがと……」

「あ〜？」

テルは口に加えていたキャンディをポロッと落とした。　そして天を見上げてハヤテに駆け寄った。

「なぁハヤテ、急いで帰らないか？　このままだと夕立がやってきそうだ」

「なっ！　どういう意味だ！！」

「そういう意味だ」

テルは素っ気なく返す。ハヤテは苦笑していた。

「普段からそれぐらい素直ならいいのによ〜」

「う、うるさい！うるさい！うるさい！」

テルの言葉をナギは顔を真っ赤にして打ち消すぐらい怒鳴り散らした。

まぁなんにせよなかなか感謝しないナギがこうして自分で感謝することを学んだのだからそれはそれで良かったかもしれないと安堵していたテルだったが。

「まぁ、私はただマリアに言われたことを仕方なく実行しただけだからな」

「お嬢様……」

「あ……」

ハヤテの言葉にナギはしまったと言った表情。

「……」

「まぁ、テル……」

「お前、駄目だ！　全然ッダメだッ！」

「ハヤテ！　逃げるぞ！」

「りょ、了解です！」

怒り心頭のテルから逃げるナギとハヤテ。　テルはそれを追いかけた。

「待てやゴルアアァァァア！」

「ハヤテ……」

テルの猛追から必死に逃げているナギがハヤテに聞く。

「私は珍しくも本当に珍しくもだぞ！今日は面倒くさく騒がしくも感じたが……」

「楽しかったのですか？」

ナギは言葉を見透かされたように驚いたが

「いや、やっぱりつまらなかっさ……」

「僕は……楽しかったですよ」

否定するナギを見てテルは笑いながら答えた。

「待てやゴルアアァァァア！」

この逃走劇。　屋敷まで続いたのである。

「ったくナギの野郎め……」

「まぁいいじゃないですか、何はともあれ感謝していたんですから」

夜の片付けの中、マリアとテルは皿洗いに勤しんでいた。

「イヤ、言わなくていい真実ってのがありますよ」

テルはナギの所業をまだ忘れていないでいた。　それを苦笑いで見たマリアは話題を変える。

「……それよりもテル君、白皇はどうでしたか？」

マリアの言葉にテルは少し手の動きを止めて、ゆっくりと話しだす。

「なんつーか……あの賑やかさ、クセになりそうですわ」

一言では説明出来なかったのかテルは端的に答えた。

「そうですか……」

マリアはそれを聞くと満足したように笑みを浮かべた。

テルは手を動かすのを止めて、マリアと向き合った。

「マリアさ―」

テルが言いかけた時、それはマリアの人差し指によって遮られた。

「分かってますよ……学校に行きたいんですよね」

まるで全て見抜いていたようなマリアの笑顔。　マリアは更に続ける。

「大丈夫です。　テル君にもしっかりと学生生活を楽しむ権利がありますから」

そう言うとテルに一通の封筒を渡す。

「白皇の編入書類です。　ナギやハヤテ君達も了解していますよ」

テルはその封筒を受け取る。

「編入試験、ハヤテ君と同じくハードですけど、やれますよね？
三千院家の執事なら」
テルはその言葉を聞くやニヤリと笑った。
「任せてください。　入学したら白皇に旋風を巻き起こしてやりますよ」

（頑張ってください、今日も、そして…これからも……）

マリアは笑顔で心の中で呟く。　自分も学生だったから分かる。
しかし、マリアは一人飛び級ということもあり誰よりも先に学生生活を若い内に終えてしまった。
本来ならばまだナギやハヤテ達とも通っている年でもある。
だからこそ、仕事だけで終わるのではない、　例え過去に学校に通っていたとしても学生生活という大切な時間はこれからの人生に大きく影響する。　彼が学校に行くことによりどんな事が起こるのか、マリアは期待していた。
普段ちゃらんぽらんとしているが彼には何か人に影響を与える力がある。

（これからが楽しみですね……）

そう思わずにはいられないマリアだった。

「まぁそれはそうとして、学校だけ集中して執事の仕事疎かにしたらタダじゃおきませんよ♪」

そう言うとマリアは笑顔でテルに磨いた包丁を見せ付ける。　研ぎ澄まされた包丁が光に反射し、キランと光った。

「あー……イエッサ～」

―数日後の話となるが、白皇学院に一人の男が奇跡の編入を果たす。

第２２話～生徒会長と執事と先生と～（後書き）

―大切なものはありますか？

それは突然の来訪者。

「アナタがそう……三千院家の執事さんね？」

「え？　はい、そうですけど……」

現れるは決して揺るがない決意を秘めたエメラルドの髪の少女。

「お前、何者だ？」

「三千院　ナギ……いいわよね……アナタは…」

少女の謎の力によりハヤテはナギのもとを離れてしまう。

「ま、待て！　待ってくれハヤテェェェエ！」

「無駄よ、この人はもう私のモノ。　アナタの声は届かない」

愛し焦がれた者の消失に主は心を痛める。

「私達の絆は一体何だったのだ！？　これ位の事で途切れるものだったのか！！」

悲しみ暮れる三千院家。　そこに訪れるもう一人の来訪者。

明かされるは少女の過去、悲しみの世界。　そしてもう一つの決意。

「大事なモン取り返しに行くんだろ？　だったら俺ァは何だってやるぜ？　主殿」

全ては一人の少女の笑顔の為、奪われた者を取り返す為、そして守る為、善立　テルは立ち上がる。

―そして。

「ハヤテ、いつかこうなる事は分かってたんだ」

遂に実現する二人の対決。

「ハヤテ！　そのテルという執事から始末しなさい！」

「……」

少女の意の傀儡と化したハヤテに冷酷な命令。

全ては誰かの笑顔の為に……

善立　テルよ、暗き道を照らす光となれ……

そして遂にアイツが登場！

「待たせたなお嬢」

ハヤテのごとく！～ａｎｏｔｈｅｒ　ｃｏｍｂａｔ　ｂｕｔｌｅｒ～　心変わり突然に

―あなたには大切なものはありますか？

―近日公開。

—予定。

特別編～心変わりは突然に～（前書き）

ここからはオリジナルのストーリー、特別編なので直接的話数には数えません。では、どうぞ！

特別編～心変わりは突然に～

ー深夜、町のはずれの裏道。
そこは昼間はあまり人は寄り付かない場所。　夜も寄り付かない場所。真っ暗な中で不良たちとかがタムロする絶好の場所、なのだが今日は誰も居ない。　きれいさっぱりになる位に

「うう・・・」

その誰も居ないとされる奥の路地に低く弱ったような男の声。

「・・・・・やはり実験体が弱すぎるとあまり効果は期待できませんわね」

低く声を絞り出して倒れている男に近づくのは幼い少女。

「やはり肉体的に安定している方が効果があると言うことでしょうか」

更に少女の後方で一際大きい男が立っていた。　付き人だろうか。

「そういう事かしら・・・・・ならこれは本番で試すしかないでしょうね」

ふぅとため息をついた後、少女はニヤリと笑いながら倒れている男の側を通り過ぎていく。

「・・・・本当に実行なさるのですね？」

突如、付き人は険しい表情をして少女に問い正す。
少女はそれがとてつもなく忌まわしく思ったのか男と向き合う。
「あなたに質問する権利があると思って？　あなた如きが私に質問なんてするんじゃありません時間の無駄ですから・・・・」
それはまるで敵を見るかのような瞳、誰をも信頼しないような瞳。
だがそこには揺ぎ無い決意があると言うことを男は知っている。
「申し訳ありません・・・・お嬢様」
「ふん・・・」
少女は低く頭を垂れる男を見向きもせず歩き出した。　男もその後ろを追っていく。　その場を去っていく中で少女はまたニヤリと笑った。
「見ていなさい、三千院　ナギ・・・」
そう呟くと、男が用意していた車に乗り込みある所へ走っていった。

特別編～心変わりは突然に～

皆さん、知っているだろうか　東京練馬区に存在するお金持ちの屋敷を……

知っているだろうか、ひょんなことからその屋敷のお嬢様に仕えることになった
少年執事のことを……

お嬢様と執事はちょっぴり天然さんでちょっぴり勘違いしていて

それでも深い絆で結ばれているのです。

そしてそんな彼らの前に執事と呼べるか分からない、異常で奇っ怪な執事が一人……

彼の名前は……

「テルさん、何しているんですか？」

早朝。否、既に太陽が真上に上がりきった昼。　三千院家の執事、綾崎　ハヤテは廊下で扉を叩いている人物に声を掛けた。

「おうハヤテ、今ナギを起こしている所だ」

同じ執事服、同じ身長、違うのはその瞳。　無気力かダルい、それが感じられる死んだ魚のような瞳。

同じ三千院家の執事、善立　テルその人である。

「まだ起きてなかったんですね、お嬢様」

「そうだ。　俺はかれこれここで２０分起こしに掛かっているがアイツは一向に起きてこない……」

テルはくあっとあくびをするとハヤテと向き合った。

「後頼むわ」

そう言うとクルっと体を１８０度回転した。　ヒラヒラと手を振りながら歩きだす。

しかし、ハヤテは黙ってはいない。

「ちょっ、ちょっとテルさん！起こさないんですか？」

「あ？　起きない奴はどんなにやっても起きない。　何事にも自然に起きさせる習慣を付けさせなきゃ意味ないだろうが」

テルは頭を掻きながらダルそうに返す。　ナギの生活の悪さは恐ろしい。

今でいう引きこもり、インドアという言葉が代名詞のナギはその生

活から昼に起きてくる事が多い。

「でも、これ以上寝かせるのはちょっとまずいですよ。　ただでさえ朝食を抜いているのに昼まで抜いてしまうのはお嬢様の健康が……」

「バカは一度、身に染みる体験をしなきゃあ己を見直す事はできない……という訳で面倒くさくなったから俺は行く」

「テルさん、明らかに職務怠慢ですよソレ、お給料減っても知りませんよ？　借金あるんですから」

ハヤテの言葉にテルは顔をしかめる。

善立　テルには借金がある。　しかし、そんじょそこらの友達が行ったお金の貸し借りのレベルでは無い。

その額、六千万円也。

ラーメン屋の借金を肩代わりしたナギがテルに仕事をもっと必死になってやって欲しいという願いを込めてテルに借金を作った。

しかし、そんな事を考えず先程のようなセリフを言うためハヤテも困り気味だ。

「仕方ねぇな、一発でナギが起きてくる魔法をみせてやろう」
テルは踵を返してハヤテに言うとナギの部屋の取っ手に手を掛けた。
「ちょっと大丈夫ですか？　いきなり入って……」
「安心しろ、執事には主の部屋に入るときはノックなしで入れると言う特権がある」
「まぁそうですけど……」
本当の事です。
ガチャ。と扉を静かに開ける。　広い部屋の中で大きなベッドではナギがまだ布団を被って寝ている。
「お嬢様、そろそろ起きて下さい」
ハヤテが扉の側で声をかける。　その呼び掛けに反応するように布団がモゴモゴと動いた。
「う～ん、あと8時間……」
「もう夜ですよ……」
いつもの事だがナギを起こすのは至難の業だ。　言えばちゃんと起きてくれるのだがこういう日はハヤテは骨が折れると言う。

「よーしハヤテ、俺に任せろ」

落胆するハヤテにテルが何か前に出る。　ハヤテはテルの持っている物に疑問を抱いた。

「あの、テルさん……なんで拡声器を持ってるんですか？」

ハヤテが聞くがテルは拡声器のボリュームを調節するダイヤルを人差し指で左から一番右へグイッとなぞった。

そして、胸が膨らんばかりに息を吸い込み……

「粉アアァァァ雪イィィィイ！！！」

部屋中に響くは悪魔的殺人ソング。　所々に甲高いノイズが入り、ご近所迷惑こと極まりない。

「ヌアァァァ！？」

ナギはさすがにたまらずベッドから転がり落ちる。

「テルさん！　お嬢様起きましたよ！　テルさん！」

ハヤテはテルに殺人ソング停止を求めるがノイズが響き過ぎてテル

の耳には届かない。

「イエェェェェェア―」

ガツン。　とテルの後頭部に何かが当たり、テルは糸が切れた人形のようにその場で崩れ落ちる。ハヤテが後ろを見ると扉のところにはマリアが立っていた。

笑顔で

「テル君？　余りうるさくすると今度は斧でも投げちゃいますよ？」

「マリアさん、テルさん死にそうです・・・・・」

ハヤテは床でピクピクと体を動かしているテルを見る。　先ほど当たったのはどうやら金槌らしい。

「相変わらずマリアはテルに容赦ないな・・・・」

無理やり起こされたナギが目をゴシゴシさせながら呟く。

「いやですわナギ、こうでもしなきゃ扱えませんよ？」

「いやいや、そんなモノを見るような発言をしないでくれ・・・・・」

（だんだんテルに対してのグレードが上がってきてる気がするが・・・・まぁいいか）

本当に他人事なのでナギは気にせずに顔を洗いに行った。

「さ、私達も早くナギの昼食を作りましょう」
「朝食じゃないのが残念ですがね・・・・」
時刻はすでに昼を回っている。ハヤテは肩をがくりと落とした。
「ではハヤテ君、テル君もちゃんと起こしてきてくださいね」
「あ、さすがにそのまま放置はしないんですね・・・・」
「当たり前です。　彼にはしっかりとここの執事として働いてもらう義務があります。　気絶ぐらいでは休みなどあげませんよ」
（あれ？　気絶させたのはマリアさんだった気がするんですが・・・・）
笑顔で言うマリアにハヤテは心の中で呟いた。

「ごちそうさま・・・・」
ナギの朝食、否。　昼食が無事終わり、ナギが椅子から降りる。その後方にはハヤテとマリア、そしてテルの姿があった。　主人が食事を終えるまで、使用人は食事をすることはできないらしい。
「あー、ようやく終わったか、俺たちも早くメシとしゃれこもうぜ・

・・・」

「そうですね。　今日の昼は僕のオリジナルのスパゲッティでいきますよ」

大きく欠伸をするテルにハヤテは気合の入った表情で返した。
ナギはそれを見て大きく背伸びをする。

「なんだ、お前たちまだ食べてなかったのか」

「オイオイ、お前がちゃんと早く起きてれば俺らも普通に食べれてんだよ」

説教垂れるテルに対してナギはむっとした表情で返す。

「ふん、私には朝はあまり必要ではないぞ。　それに今日は休日ではないか、いいだろう？」

「いや、全然よくねーよ。　休日だろうが平日だろうが、朝食は一日の始まりであり、一日を健全に生き抜くためのそれはそれは大切なエネルギー摂取だろうが」

「と言っているがお前この間、私と同じ時間帯に起きてこなかったか？　執事のくせに・・・・」

「・・・・・・・」

鋭く返すナギに対してテルは体を固まらせて返すことができなかった。

「まったく、よくそんなんで白皇の試験に受かったな・・・」

「・・・・放っておけ」

呆れ顔で言うナギにテルは素っ気無く返した。

ここ数日前、彼、善立　テルは見事に白皇学院の編入試験合格を果たす。
その道は果てしないものだった。　まず学力、これが壊滅的にやばかった。

まぁどれぐらいひどかったかと言うと小テストらしきことを行ったときにその答案を見たときナギやハヤテ、マリアが口を揃えて

「「「マジで？」」」

と言ったほどだ。　そのときはもう皆唖然と言うか、もう無理じゃね？と思わせるほどの表情だったと言う。

まぁそれからはあらゆる方法で勉強にいそしんだ。　まずは基礎を教え、公式、定理、単語をツーマンセル、スリーマンセル方式で教える。　最大の助っ人はナギ、マリア、ヒナギクだったと言うべきだろう。天才たちの甲斐もあり何とか一般レベルまで到達できた。

もちろん、試験にいそしむ彼に睡眠は与えられない。　助っ人たちが帰り、眠った後にもテルには勉強しなければならなかった。　否、そこまで根を詰めなければホント間に合わなかった。　いや、マジで。

「もう不眠不休はこりごりだぞ俺は」

「まぁ良かったじゃないですか。　僕は一応試験に一回落ちたのにテルさんは一発ですよ」

ハヤテが苦労を労うようにテルに言う。

「まぁそれではまぐれと言うこともあるしな。　まだ信用するには足りんぞ、お前のこの屋敷での階級は私、ハヤテ、マリア、タマ、そしてお前なのだ」

ナギは理不尽な階級ピラミッドをテルに説明するがテルには一つの疑問があった。

「・・・・タマって誰だ？」

「ああ、まだ直接紹介していないな。　うちのペットだ。　ほら、お前の後ろに居るぞ」

「にゃ～ん」

テルは名前からして猫を想像したがすこし疑問だった。　なんか猫の鳴き声にしては少々、おっさんっぽい所があるような。

「・・・・・・」

振り返ったテルに目に入ったのは真っ白い猫？　否。　あんな丸っこい特徴的な耳とまだら模様を見たことが無い。　さらに目を引くのはその大きさ。普通の猫は1メートルかもしれないがこいつは明らかにそれ以上。　これはまるで

「トラじゃねぇか！」

「安心しろテル。　これはネコだ」

「いやいや、ネコ何食えばこんなでかくなんだよ。　明らかに人間食えるほどの大きさだろうが！」

「大丈夫ですよテル君、タマは結構なつきやすいですから」

マリアが言う言葉にハヤテが「え？」という顔をする。　テルは納得したように笑顔でタマと向き合う。

「おーお、そうかそうか。　ほれほれ、撫でてやる」

まるでネコとじゃれあうかのようにタマに手を伸ばす。　が、その時。

ガブッ。　と鋭い牙が食い込んだ音。　タマが大きな口を開けてテルの頭に噛み付いたのだ。

「ギャアアアアアア！！！」

「はっはっはっ！　タマ、よほどなついているなぁテルに」

「アレがなついているんですか？明らかにいたぶってますよね！？」

ナギの言葉にハヤテが突っ込むがその間にもテルはタマに噛み付かれたまま振り回されている。

「おい、ちょっ！マジやばいんだけど！　痛い！頭が痛い！　なんか色々と持ってかれそう！」

「そうかぁ～　後で頭痛薬を出してやる」

「違いますよお嬢様！　このままだとテルさん本当に持ってかれそうです！主に魂とか！」

笑顔でなははというナギにハヤテは突っ込む。

「朝から賑やかですねぇ～」

マリアはその光景を見て笑みを浮かべる。　しかし、彼女らは気づかなかった。　これから起こる大きな事件を。

キンコーン

「あら？　お客様でしょうか？」

その時、不意に玄関の鐘が鳴った。

特別編～心変わりは突然に～（後書き）

まぁ、やってはみたんですけど大変ですね。オリジナルの作成って。　頭のなかのイメージを書いても何かが違うってなったりしたので、　一応テルがすでに白皇に入学しているという時間軸です。
なので、色々な原作キャラが出てくるかもしれません。　感想やご意見を何でもいいのでお待ちしております。

～勢いがいい奴ほど大きくミスる～（前書き）

今回は若干、テルがカワイソス

～勢いがいい奴ほど大きくミスる～

キンコーン

「あら、お客様ですわね」

「おかしいな、今日は伊澄もサクも誰も来る予定は無いのだが・・・・」

ナギと頭を悩ませる。今日は特にこれといった用事はない。　友人も学校関係者も誰もここにくるという予定は無いのだ。　その中、テルがボソッと口を開く。

「実はこの前、ハヤテがＡｍ○ｚｏｎでその手の同人誌を予約していたような・・・・」

「ダニィ！？」

「ち、違いますよ！　そんなもの頼んだことはありません！！」

テルの言葉にナギがものすごい剣幕で睨み付けるがそこはハヤテが全力で否定する。

「大体、三千院家ではお嬢様のためにそういった類の物は購入しないようにしているんです。在っただけでダメなんですよ」

「え？そうなの・・・」

ハヤテはその言葉にテルはマジで？といった表情になる。ハヤテは

これに少し疑問に思ったのか改めて聞く。

「テルさん・・・・まさかと思いますけど」

「ダイジョウブダヨ、キミガオモッテルコトナンテゼンゼンナイヨ」

「どうして片言なんですか？」

「・・・・・・」

怪しい。断然怪しい。片言になることもそうだがここで黙り込んでしまうという所が更に怪しい。

「さ～て、お客様のお出迎えだ」

テルはくるっと回りながら玄関に向かって歩き出した。　三人は明らかにじっと疑いの目で見つめていたという。

「まぁハヤテ、取りあえずこの件は後でな。　早く玄関に行こう。私もいく」

「は、はい！わかりました」

ナギの言葉にハヤテは頷くと三人は玄関へと向かっていった。

キンコーン

「いやぁ、しかしさっきは危なかったな。アレで勘付かれたか？アレはもっと分からない所に隠しておこうか・・・・」

鳴り響くチャイムの音を聞きながらテルはブツブツと呟く。

キンコーン

「ったく、うるせぇな・・・・今でてやるよっと」

しつこく何度も鳴るチャイムに苛立ちを覚えながらもテルは階段を駆け下りる。　それを追ってハヤテ達もやって来た。

『♪～♪』

「何かしら・・・・もしもし？」

突如鳴ったマリアの携帯。　マリアはすぐさま携帯を手に取り応対する。　相手を何度かコールするが返ってくるのは掠れた弱った声。

「マリア様・・・侵入者です・・屋敷のＳＰは全員・・・突破・・・・されました・・」

それを最後に電話は途絶えた。すぐさま電話を切り、玄関の方に目を向ける。テルがすでに扉の取っ手に手を掛けていた。

「テル君！開けてはいけません！」

「え？」

「マリア？」

慌てたマリアを近くで見たハヤテとナギはキョトンとし、動くのを

止める。が、テルには聞こえなかったようで

「マリアさんどうしたのかな・・・大丈夫ですよ～マリアさ～ん」

けらけらと笑いながら、テルは取っ手に力を込めて扉を開く。

「ちゃんとお客様には粗相の無いように・・・・」

テルの目に飛び込んできたのは黒。目の前は急に黒で塗りつぶされた。　いや、黒だけじゃない、若干白も混ざっている。

ただ一つだけ疑問に思ったのは、ソイツはなぜ大きく腕を振りかぶっているのか。　ただそれが気になっていてテルは言葉を詰まらせた。　まるでこれから誰かぶん殴るみたいな・・・・

そんな殺気。

その殺気を感じ取ったのかテルは咄嗟に、無意識のうちに扉を閉めていた。しかし、

バキャ！と何かが破壊された音。　拳だ。　ジャンケンでも使われるグーの形。それが扉を破壊する音。

扉はまるで爆破でもされたかのように派手に破壊された。　テルもその扉と一緒に後ろへと吹っ飛ばされる。

砂埃が舞、玄関が見えなくなる。　ハヤテ達は何が起きたのか全く分からなかった。　ハヤテ達から見れば、扉がテルごといきなり吹き飛んだようにしか見えない。

「一体何が・・・」

「イタタタタ・・・・」

ハヤテが吹っ飛ばされた扉の瓦礫に目をやる。テルが扉の瓦礫を押しのけて這い出てきた。

「テルさん、大丈夫ですか！？」

ハヤテが急いでテルの元に駆け寄る。テルは首をブンブン振った。

テルの頭から埃が払われる。

「大丈夫なわけねぇだろ。　見ろ、この辺見ろって、頭にコブあんだろうが」

「その程度で済んでるなら大丈夫そうですね・・・」

テルの意外に元気そうな姿を見て、ハヤテはひとまず安心する。

後ろからはマリアとナギが続いて降りて来る。

「お嬢様、これは一体・・・」

「分からん。だが間違っても親切なお客ではないことは確かだ」

「オイお前ら、少し俺の心配をしろ」

様々な憶測をするハヤテとナギの側でテルが頭をさすりながら呟いた。

「ふむ・・・先ほど殴ったのは綾崎　ハヤテではないな・・・」

立ち込める砂埃から男の声。　だんだんと煙も晴れて、現れたのは黒いタキシードに身を包んだ巨漢。
身長はハヤテやテルがはるかに見上げるほどの大きさ、推定１９０ｃｍ前後に鍛えられた肉体。　白髪の髪がまるで扇のように開いている奇抜な髪形だった。

「テメー・・・人の家の玄関をよく破壊してくれたな」

テルがハヤテたちの前に立ち、目の前の巨漢と向き合う。

「貴方は？」
男は眉を細めてテルに聞く。

「俺は三千院家執事の善立　テルだ」

「ヨシダテ？」

巨漢は首をかしげる。
「ふむ。一体誰だろうか・・・この屋敷には綾崎　ハヤテ以外に執事は居ないはずだが」

「お前、全然執事として認識されてないぞ・・・」
ナギがテルの方を目を細めてジッと睨む。

「なぜだ！この俺が誰にも相手されていない！誰にも覚えられていないと言うことなのかァァァァ！」
テルは頭を抱えて天井に向かって叫んだ。　すると今度は巨漢が口を開く。

「私の要求はただ一つ。　ここの執事、綾崎　ハヤテ出してもらう

ということだ」

「僕・・・ですか？」

突然の指名にハヤテは思わず自身をも指をさす。　巨漢はそのハヤテを見つけるや顔を輝かせた。

「おお、こんな所に居たのですか綾崎　ハヤテ殿！」

巨漢は笑顔でハヤテに近づいてくる。　その顔はまるで子供好きな老人のような顔をしていた。　実際見た感じでは年はかなりいっているものだと推測する。　５０前後だろうか。

「・・・・・」

ハヤテはすぐ目の前に立つ巨漢を見上げる。近くで見るとまた違う迫力が感じられた。　ハヤテは笑顔で立つ巨漢に警戒心を持ち続けた。　これからどんな事を仕掛けてくるかである。

「なに！？」

「あれは・・・・」

ナギとテルは驚いた。　彼のとった行動に、それは初対面の人間同士が行う基本的なコミュニケーションの手段、仲直りのときなどにも用いられる・・・・握手。

「初対面なのでまずここから始めましょう」

巨漢の差し伸べる手にハヤテは少し戸惑う。てっきり至近距離で何をされるかと思えばただの握手だ。

彼に悪意は無い。感じられない。巨漢の行動は悪魔で紳士的だ。
なんでもない、ただ一つ気になるところがあったがハヤテは気にせず巨漢の右手を握る。

「どうも・・・・・」

「ふむ・・・・・」

ハヤテの手を握るや巨漢はまた優しい笑みを浮かべる。それは新しい仲間が増えたように、その仲間を心から歓迎するかのように

「実はハヤテ殿に折り入って頼みがあるのですが・・・・」

「・・・・なんでしょうか？」

綻ぶ笑顔にハヤテはいまだに戸惑いを隠せずいた。　寛大な心。
すべてを許してくれそうな広い心の持ち主。　だが何か納得いかない。

「私と共に来てもらいたいのです・・・」

「え？」

ハヤテは言っている意味が分からず首を傾げる。　だが主であるナギは見逃さなかった。巨漢の口元がニヤリと笑ったのを

「ハヤテ！」

ハヤテは主の声に気づき、我に返る。　急いで彼の手を振り解こうとした。

「ぐっ・・・！」

右手はしっかりととてつもない握力によってハヤテは振りほどけないでいた。　そして次の瞬間。

「オオオオオオ！！」

１６８ｃｍ、５７キロのハヤテが軽々と振り上げられた。片手一本によって。

「！！」

ハヤテは自身の状態に驚く、男はハヤテを背中まで持っていくほど振り上げていた。

その時の光景を、後に善立　テルはこう語っている。

「驚いたさ・・・・いくらハヤテが軽い部類に入るからって人間、あんなに簡単に振り上げられねぇからな」

「その後どうしたかって？　簡単さ、『釣り』でさ、釣り人が竿を思いっきり振るうアレあるだろ？　ルアーを遠くに飛ばすために竿を振りかぶるようにしてスナップ利かせたりするとさぁ、ルアーはメッチャ遠くまで飛ぶんだよ」

ーアレをヒトでやったんだからな・・・・・・

「ダアアアアア！！」

巨漢はハヤテを怒号の元に放り投げた。　物凄い勢いでハヤテは飛ばされる。このままいけば階段なんて使わずに二階にたどり着けるだろう。

「くっ！！」

だが簡単にやられるハヤテではない。　即座に身を翻し、二階の壁に叩きつけられる寸前に両足で壁に着地した。

「ハラショー・・・・」

見事なハヤテの動きに巨漢は感嘆の笑みを浮かべた。ハヤテはすかさず階段を駆け下りる。

「あなた・・・・一体何者なんですか！？」

当然の質問。巨漢は胸に手を当てて答える。

「名乗るほどのものではございません・・・ただ、貴方と同じ執事だと言うことです」

「執事・・・・？」

その巨漢と同じ職業だったということが分かり、ハヤテは再び警戒態勢を取った。　その時である。

「シュトロハイム！」

突如として後ろから女の声が聞こえた。　その瞬間に巨漢が即座に慌てながら振り返る。

「まったく、人間一人連れてくるのにいつまで時間を掛ける気？だからいつまでたっても貴方は使えないのよ」

巨漢以外の一同は目を良く凝らして声の主を見つめた。　目に映ったのは小柄な少女。身長はナギと同等、白いドレスを完璧に着こなしている。　さらに目を引くのは緑の髪・・・いや、そんな単調な色ではないもっと明るく、輝かしい、エメラルドの髪だ。

「お、お嬢様！　今しがたお待ちを・・・・」

「無理よシュトロハイム・・・私が待たされるのが嫌いなのは知ってるでしょう？」

つかつかと少女はシュトロハイムという巨漢に近づき靴で思いっきり足を踏みつけた。　しかも小指の部分を

「ＯＵＣＨＩ！！」

さすがの巨漢も小指を思いっきり踏みつけられることは苦痛のようだ。　少女は足を離すと唖然としているハヤテを見た。

「貴方が三千院家の執事さん？」

「はい、まぁそうですけど・・・」

「俺もいるぞ」

ハヤテの横でテルがボソッと呟く。

「そんなことより、お前ら一体何者だ？　何が目的でここに来た？」

ナギが不機嫌な顔で少女を見つめる。　少女はクスッと笑い、高らかに宣言した。

「私は日野寺家現当主、日野寺　マユミ。　コイツは私の執事のシュトロハイム。　目的は貴方の執事、綾崎　ハヤテを奪いに来たの」

「僕ですか？」

マユミに指差されたハヤテは訳が分からず聞いていた。　そしてマユミもハヤテを見るや不敵な笑みを浮かべる。

「さぁ！綾崎　ハヤテ、覚悟なさい！」

「く・・・！？」

少女の言葉にハヤテは咄嗟に身構える。が次の瞬間。

ガツっと何かが引っかかる音。　マユミは見事足に扉の残骸を文字通り引っ掛けて

ドタッと

コケた。

「「「「「・・・・・・え？」」」」

～勢いがいい奴ほど大きくミスる～（後書き）

勝手に増やしたお嬢様キャラ、日野寺　マユミ。　そしてシュトロハイム。　マユミは大事な所でなかなか締まらないという特性があります。が実はいい子なんですよ？

次回は変に戦闘へ入ります。　結局、テルはカワイソスなことに……

～少女Mの陰謀～（前書き）

なぜかテルが・・・・

～少女Mの陰謀～

前略。ハヤテたちは勢いよく転んだマユミを唖然としながら見つめている。

「・・・ふんっ！」

地面に倒れていたマユミはガバッと起き上がり、体についた埃を払い、顔を真っ赤にさせながらナギを指差した。

「・・・さすがは三千院家、こういうトラップもあるのね」

「いや、お前が勝手に転んだだけだろ？」

ナギは至極当然のように返す。

「お嬢様、大丈夫ですか！？」

マユミの心配をしたシュトロハイムが駆け寄りマユミの体の埃を払い始める。

「ッ！！」

それが不機嫌だったのかどうかは分からないが、マユミは埃を払っているシュトロハイムの腕を振り払った。　その時の彼女の目は鋭く冷たく、敵意を向けるような目だったのをテルは見逃さない。

「申し訳ありません・・・・」

「気安く触るんじゃないッ！！」

頭を深く下げるシュトロハイムにマユミは罵声を浴びせる。　それを見たテルが口を開いた。

「オイオイ・・・随分とそいつに対しては厳しいじゃねぇか。　新手のツンデレか？」

テルの言葉にマユミはいっそう顔を険しくさせる。

「貴方は？」

「俺もここの執事、善立　テルだ」

その言葉を聞くや、マユミはクスクスと笑い始める。

「貴方が三千院家の執事？　なんの冗談？」

「うるせぇなドチビ」

「なっ！誰がドチビだ！」

「否定できねぇだろうが」

今度テルがマユミをあざ笑う。　するとシュトロハイムが猛然と突っ込んできて

「ヌンッ！！」

右拳を思いっきり振り上げテルの真上に振り下ろす。　テルは寸前の所でかわし、地面は拳によりめり込んだ。

「お嬢様を侮辱するのは許さん！！」
目をギラつかせながら拳をゆっくりと床から引き抜く。パラパラと床の破片が落ちた。
「おーおー、こわいこわい・・・」
「今のはお前が悪いと思うぞテル」
テルにため息をつきながら言うのはナギだ。
「ＷＨＹ？なぜ？」
「理由はどうであれ、お前は悩み悩む乙女心を傷つけたのだ」
「そんな豆腐みたいなやわな乙女心だったとはな・・・・」
ナギとマユミには背が一緒だということもあるのか
テルのこの言動には同じく思うところがあったのだろう。
「そんなことより・・・だ。　ハヤテを奪うといったなお前」
腰に手を当て、堂々と構えるマユミを見てナギは聞く。
「ええ」
マユミはただ頷く。
「どういった手段でだ？」

「そうね・・・・」

そう聞くとマユミは背中まで伸びた髪をかきあげた。

「まぁ、お金で買い上げようという合法的手段でいこうと思ってたけど、こちとらそちらとは違って財力はないの」

「人身売買は禁止だぞ」

「ナギ、あなたがそれを言いますか・・・・」

マリアの言葉にナギはぎくっとした顔になる。

「簡単なやり方でいくわよ。　決闘よ！」

「血糖？」

テルが頭にクエスチョンマークを浮かべた。

「なんだテル、お前血糖値きにしてるのか？」

「いや、さすがにこの年でそれは無いと思うがここ最近で甘いもの摂りすぎたかも・・・ああヤベェ、言われたら気になってきた」

「そっちじゃなーいッ！！」

拳をわなわなと振るわせたマユミがテルとナギを怒鳴り散らした。

「あー・・・俺もうダメかも。ここらでいい病院知らない？　今す

ぐにでも行きたいんだけど」

「ええ行きなさい。　そして二度と戻ってこないで・・・・」

どこまでも予想外な展開にマユミは頭を抱えた。　しかし、ため息の後、気を取り直してナギをにらむ。

「貴方の執事と私の執事で戦ってもらうわ」

「ふむ・・・・決闘か。ハヤテなら楽勝だとも」

ナギは勝ち誇った笑みを浮かべる。ハヤテは慌てた。

「お、お嬢様・・・いいんですか？」

「ああ構わない。　本気で相手してやれ」

憤然と言い放つとハヤテは苦笑いする。　これはもう避けて通れる道ではない。ナギの『徹底的に叩きのめせ』という目がハヤテをそうさせた。いや、そうせざるを得ない。

「では始めましょうか・・・・」

主二人が向き合い、にらみ合う。　知らぬ間に熱い火花が散っていた。

「マリアさん・・・・」

「なんですかテル君？」

「今回俺って空気なんですかね？」

「・・・・・・」

テルの呟きにマリアは何も答えなかった。そんな事を言ってる間に決闘が始まる。

「では行きますよ　ハヤテ殿！」

「！！」

ハヤテは驚いた。それは一瞬のことである。シュトロハイムはその体躯以上に機敏な動きでハヤテとの距離を縮めていた。

（速いッ！！）

更に驚きは続く。今度は右腕でストレートでも放つ動作。テイクバック。だがこのテイクバックが異常だ。　コンパクトどころではない。体が目いっぱい開き、右腕は背中につくのではないかその瀬戸際。

（これは・・・避けなくてはならない！！）

背筋を、いや、全身が凍りつくぐらいの殺気がそう判断させた。いくら自身が車とかに轢かれても平気だという自信も吹っ飛ばすかのような一撃と感じ取った。

「ヌン！！」

一つの気合の声が発せられ、異常なテイクバックから繰り出された右拳は振り下ろされた。　殺気を感じ取ったハヤテは本能のままに

その一撃をかわし、拳は床へと直撃した。

「うおっ！！」

拳の直撃の際、まるで巨人が足踏みをしたかのような地響きが屋敷に響いた。　その場に居たナギはその地響きによれよれとバランス取りをした。

「ふふ・・・・さすがはシュトロハイムの破壊の方程式」

「破壊の方程式？」

ナギがマユミの不可解な単語を耳にして怪訝そうな表情をした。

マユミは薄く笑うと説明する。

「シュトロハイムは握力は測定不能、体重１５０キロ、そしてあの体躯から生み出されるスピード・・・・つまり、「握力×体重×スピード」＝破壊力という方程式が彼の戦いなの」

「どこの漫画のヤクザ？」

テルが突っ込むがマユミはさらに続ける。

「頭部なんかに当たったら大変よ」

その言葉にナギの背筋が凍った。

「お、お前！　ハヤテを死なせてしまったら元も子もないだろう！！」

ナギの声が若干震えている。　テルもナギと同じ事を考えている。
確かに、あんな拳が当たったら、重症、最悪死だ。　しかしそれは同時にマユミの目的が達成できなくなることを指している。

だがマユミは冷酷な笑みを浮かべて言った。

「生け捕り目的だけど、保障はできないわよ？彼・・・・・人殺しだから」

その言葉が発せられたときにシュトロハイムの顔が若干ゆがむ。
テルはそれを見ていた。

「オイオイ、そんな奴がよく執事になれたな？」

「・・・・・・」

テルが言うがマユミはその質問に答えることは無かった。

「ハ、ハヤテ・・・・」

ハヤテを見つめて震え声が発せられる。　テルはナギの横顔を見た。　最初とは違い、明らかにハヤテを心配する表情だった。
見せつけられた危険な力。相手は人を殺めた人間。ひょっとしたら加減など気にせずハヤテを・・・・

「大丈夫ですよお嬢様」

その不安はハヤテの一言によって打ち消された。

「僕はお嬢様の執事ですから・・・絶対に負けはしません」

笑顔をハヤテは向けた。　彼女が安心できるほどの笑顔を、何が何でも護る。　そうナギに言い聞かせるような優しい笑顔。　そしてナギはハヤテに言う。

「信じているぞ、ハヤテ！！」

主は笑顔を取り戻していた。　それを見て安心したのか、ハヤテはシュトロハイムと向き合う。

（おお、さっきとはまるで違う瞳だ・・・これは自分のためではない、誰かを護るための・・・そうか、あの主を護るための彼の決意かッ！！）

「僕のお嬢様を悲しませる事は絶対にさせません・・・・」

その瞬間、シュトロハイムが一歩引いていた。気づかぬうちに・・・・なぜ？

ー彼が、自身よりも圧倒的に小さき者に。

ー彼が、自身よりも圧倒的に華奢な体を持つ者に。

ー彼が、自身よりも圧倒的な主を想う心（決意）を宿した瞳を持つ者に。

彼は、シュトロハイムは、綾崎　ハヤテに恐怖していた。

「だが・・・・」

小さく呟くと、シュトロハイムは再び異常なテイクバックを取る。地響きを起こさせるほどの右ストレートだ。

（私もまた・・・・お嬢様のために戦う執事！！）

まっすぐにハヤテの体躯に拳が迫る。　唸るような、何者を破壊する拳が。

その瞬間、善立　テルを驚愕させる出来事が起きた。

彼は後にこう語る。

「いや、実際人じゃないんじゃね？アイツ」

「アイツぜってーオリンピック行けるって、体操とかで」

「え？　なんで体操かって？　ああ、ハンドスプリングって分かるか？　体操クラブにでも行けば小学生でもやってる技。正式名称、前方倒立回転跳び」

「アレってさぁ基本的に跳び箱とかにも応用が利くんだけどさ、イメージはすこし助走して跳び箱の上に両手をそえる、んで勢いを使って前に回転する」

「イメージができなかったらｙＯｕｔｕｂｅでもなんでも見て来い。　んじゃ本題。　あの跳び箱って止まってるじゃん。　例えばさぁ」

ーもしその跳び箱が選手に向かって移動してくるものだとしたら！？

ーもしその跳び箱が車の最高速度をを上回るほどの速さで向かってきたとしたら！？

「・・・・完璧に合わせれるのか、両手を・・・・速すぎてもダメ、遅すぎてもダメ、そんな絶妙なタイミングを助走も無い、立ったままの状態で合わせれるか？」

「できるとしたら、それでこそオリンピックのメダリスト級。　だがそれでも練習は必要だ。　でもなぁ・・・・」

ーアイツなら、ハヤテならできちまうんだよ・・・・・

「！！な、なんと・・・・」

右腕が伸びきる瞬間、シュトロハイムは見ていた。　自身の右腕に両手をそえ、右腕を使い、ハンドスプリンするのを。　右ストレートは空を切った。そして

ハヤテは少しの間だけシュトロハイムの身長よりも高く上がった。

ーな？　そう思っちまうだろ？　でもやばかったのはここからだぜ・・・・

「はあぁぁぁあああ！！」

浮いていたハヤテは大きく体を捻り、自身の右足をシュトロハイムの頭に打ち下ろした。

「ヌゥッ！」

打ち下ろされた蹴りはまるで金属のバットに殴られたかのような重い一撃。　しかし、ここで終わるハヤテではない。

打ち下ろした瞬間、体を一回転させ再び右足を振り下ろした。

ドカッと同じ場所を連続的に当てられ、シュトロハイムは思わず膝を着く。

「なに！？」

シュトロハイムにとって、大きな驚愕。　ハヤテはまた再び体を一回転させて右足を振り下ろそうとしていたのを見た。

「・・・・ハラーショ」

確実に迫る一撃を前にシュトロハイムはこんなときにでも感嘆の言葉を呟いていた。

振り下ろされたハヤテの怒涛の三連撃が決まり、シュトロハイムは真正面から床に激突した。　シュトロハイムは倒れたまま動かない。そのまま気絶してしまったようだ。

「お嬢様を悲しませる人がいるのなら、僕は全力で立ち向かいます。勝負は終わりました・・・・」

「・・・・・・」

目の前に立つハヤテを前にマユミは言葉を発しなかった。　しかし、そこには動揺の様子も特別に慌てた様子でもなかった。

その時の様子を見て、善立　テルは後にこう語る。

ー俺もこん時は思ってたよ、どう見てもハヤテの勝ち。　勝負は終わったかのように見えたんだ。　だが終わってなかったのさアイツ・・・・マユミにとっては

ーそして最後に言わせると、今回俺ぜんぜん目だってなくね？

～少女Mの陰謀～（後書き）

若干、チートハヤテ。　でもナギのためだったらなんでもできそうな気がする。
戦闘の描写なんですけど、難しいですね。　明らかにアレなこの戦闘の描写に対して、感想というか意見を聞きたいのですが思ってることを感想にのせてください。お願いします。

「うふふふ・・・」

それまで表情を変えていなかったマユミが唯一変えた表情。それは笑みだった。

「なにがおかしいのだ？」

ナギが不審に思ったのか、不敵に笑うマユミから一種の不気味さを感じ取った。　笑うのを止めるとマユミは髪を掻き揚げた。

「いや～　ここまで計画通りだとフェアじゃないと思ったんだけど・・・・」

「計画通り、ハヤテにいとも簡単に負けることがお前の計画なのか？」

ナギはマユミの言っていることが理解できなかった。　状況を見れば彼女の提示した条件通り、ハヤテはシュトロハイムを倒した。

明らかについた勝利だ。　しかし、

（おかしい・・・・こいつはまだなんか隠している。　まるでこうなることが予想できていたように）

テルはこの異変に少なからず気づいていた。なにか嫌な予感がする。そう思ったテルはハヤテに声を掛けようとした。　その時である。

「シュトロハァァァイムッ！！」

テルが声を掛けようとした瞬間、マユミが何かを呼び起こすような大声を出した。

「おいハヤテ！！」

テルがその異変に気づきハヤテに声を掛ける。　これは後ろにいるテルたちだからこそ分かる「異変」であり、マユミの目の前にいるハヤテには決して気づかない「異変」だった。

「ガアアアアアア！！」

ハヤテは後ろを振り返り驚愕する。　ハヤテの真後ろで確実に気絶していたシュトロハイムが立ち上がっていた。　その時、ハヤテの反応がほんの少し遅れてしまう。

「しまった！！」

その一瞬を突かれ、シュトロハイムの右腕がハヤテの首にロックを掛けるように絡まり、ハヤテは身動きができなくなった。

「三千院　ナギ・・・・いいわよねぇ貴方は・・・・」

「な、なにがだ！」

まるですべての条件が揃ったかのようにマユミは笑みを浮かべながら喋りだした。

「貴方はもっとも財力を持ち、裕福で、何もかもが与えられたその環境の中に育った」

いきなり何を言い出すかと思えば、とテルは考える。　確かに、ナギは与えられた財力がある。時期的に当主になれればそれでこそ莫大な三千院家の遺産が手に入るのだ。しかし、だからどうした。

「それだけじゃない。　こんな優秀な執事を手に入れ、なおかつ大きな幸せを手に入れている。　言ってみればこのヒトが貴方の大きな支え・・・」

クスクスと笑うように言うとマユミは身動きができないハヤテに近づいた。　ハヤテは少しだけ浮いている自身の視点からマユミを見つめる。

「僕は絶対お嬢様の元から離れない！　連れて行けるもんなら・・・」

「別に私が貴方を連れては行かないわ。　だって・・・・貴方からこちらに来るんだから」

そう言うと、マユミはいつの間にか手に握っていた何かをハヤテに頭めがけて振りかざした。

ポチ。　なんともやわらかそうな音が聞こえた。　シュトロハイムはゆっくりとハヤテを降ろした。

「・・・・・」

ハヤテは何も言わず突っ立っている。　シュトロハイムももうこれ

以上危害を加えるわけでも無く、マユミの後ろへと戻っていった。

「おいハヤテ大丈夫・・・・」

テルがまた何かを言いかけたとき、テルは言葉を失った。　ハヤテの頭にあるものを見て

呆然と突っ立っているハヤテの頭には見慣れないものがあった。

一本だけ伸びたそれは先端に赤い玉が付いていた。見た感じなんかのアンテナのような。　具体的イメージをするとド◯えもんの尻尾がハヤテの頭から生えている。　と言った方が分かりやすいか・・・・・

「あー・・・・・なんか突っ込んだら負けなのかな」

「なんだ、あの昭和をバリバリ感じさせるへんてこ・・・・なんだアレ？」

テルとナギが呟きを入れる。　あまりにも不可解なアタッチメントの出現に驚いたが馬鹿馬鹿しくなてしまう。

「テル」

「了解っと・・・・」

ナギに指示され、テルはハヤテに近寄る。

「おーい、ハヤテ。　いいアタッチメントつけてんじゃねぇか。俺にも分けてくれよ」

ようやく声を掛けられた。　肩に手を掛けて軽く揺さぶってみる。
しかしハヤテは動かない。

（なんか、変だ）

あまりにも不自然だったのでテルはハヤテの顔を覗き込む。

「！！　お前・・・・」

覗いたハヤテの表情にテルは驚いてしまう。　何故だろうか、あれだけ決意に満ちていた瞳には全く生気が宿っていないという状態だったからだ。

「ハヤテ！！」

「なに！？」

テルが声の主に思わず視線をずらしてしまう。

声の主は・・・・マユミだった。　その後、場を震撼させる出来事が起きる。

その声が聞こえたと判断したのか、ハヤテは右肩に乗っていたテルの手を払い、その場で体を一本の軸にし半回転気味に回し蹴りをテルにお見舞いしたのだ。

「ぶっ！！」

当然、不意を突かれたような一撃をテルは避ける事ができず直撃

し、ナギの所まで吹っ飛んだ。

「は、ハヤテ・・・・お前、何をしているのだ？」

「・・・・・・」

ナギの質問にはまるで届いていないかのように何も答えてはくれない。

「今、お前が吹っ飛ばしたのはテルだぞ？　仮にも仲間ではないのか？」

「・・・・・・」

ナギの表情が焦りに変わる。　何故こんな事になっているのか、その思考が追いつかない。ハヤテはナギの命令よりもマユミの命令に従っていた。

「爽快・・・・爽快だわ」

慌てふためくナギを見てマユミが薄く笑う。

「どう？　大切な何かを奪われた気分は・・・・帰るわよハヤテ」

「・・・・・・」

マユミが帰ろうとするとハヤテもまた、その後ろを追っていく。

その瞬間、ナギの胸が急速に締め付けられた。

「待ってくれ・・・・待ってくれハヤテェェェェエ！！」

涙を瞳に浮かべ、大声で、自身の限界までに叫んだ。自分の執事の名を。自分の身を何が何でも護ると言ってくれた大好きなヒトの名を。

「こんな事でいなくなったりしないよな！お前は私の執事だろ！」

それを聞いたマユミは振り返ることなくピタリと立ち止まり、言い放った。

「無駄よ。　このヒトはもう私のモノ・・・・貴方の声は届かない」

そう言い残すとマユミは無造作に丸っこい球体を投げつける。投げつけられた球体は床を転がり勢いよく中から白い煙が出てきた。

「煙幕！！」

テルが軽く舌打ちをするが辺りは明らかに1メートル先まで認識できないほど白煙に包まれていた。

「じゃあね三千院　ナギ。　思い知りなｒｙ・・・・痛い、噛んだ」

若干涙目を浮かべながら口を手で押さえると屋敷の外に用意していた車に乗り込んだ。

「畜生が・・・・・」

煙が完全に晴れるとテルは忌々しげにはき捨てた。　場には既にマユミが居らずシュトロハイムもハヤテも居なかった。

何が起きた。　いつもと変わらない日常だった。　ハズだったのにだ、いきなりぶっ壊していきやがった。

状況を整理しろ、あいつ等がハヤテに何かしたんだ。少なくとも頭に変なのをつける前までは普通だった。　まぁそれよりも・・・・だ。

壊れた玄関を見つめる。　これはマズイ事になった。　取りあえず玄関とか色々やんなければ。色々と問題が山積だ。

（だが一番やっかいな問題は・・・・）

テルが視線をずらすとそこには膝を着き、顔を俯かせいるナギの姿があった。

「ハヤテ・・・・」

そう小さく呟く少女の顔から床に向かってぽつりと滴が数滴、落ちていった。

「一体どうなっちまったんだハヤテの野郎・・・・」

「分かりません。　あの二人が何かをしたのは確かでしょう」

数々の問題もいくらか収拾がつき少し落ち着いた三千院家。　場所はある部屋の一室。

テルとマリアは一種で言う会議をしていた。

議題はもちろん昼間に起きた出来事だ。　まぁまだあれから一時間ほどしか経っていないが

「うーん・・・・あのハヤテ君の頭に付いていたアレ気になりますね・・・・」

「あの野郎、ド〇えもん気分になったつもりか？」

「遠くから見ていても分かりますわ。　恐らく操られているんでしょう」

マリアの言葉にテルは苦笑いを浮かべた。

「操るって・・・・そんなモンまでアリなんですかこの小説・・・・」

「テル君、よく聞いてください」

マリアがいつになく真剣な眼差しを向けた。

「この問題はなんとしても解決しなくてはいけません。　今まではナギが狙われてきましたが、ハヤテ君が直接狙われたのは初めてです」

「遺産目的ですか？」

「いいえ、日野寺家には三千院家の遺産相続にはまったく関係ありません。　そこが一番気になるところなんです」

そうだ、考えても見ればあいつ等には遺産を相続する権利は無い。

ナギを誘拐して身代金を要求するという手段があるが、奴らはそんな誘拐犯を装うことなくハヤテを奪うと言い、堂々ときた。

「ということはハヤテを利用する方法があるということですかね」

それしか考えられないと推測するテル。　コクリとマリアが頷く。

するとマリアが口を開いた。

「それに一番の心配はナギです・・・・今、どうしてます？」

テルは視線を逸らし、頭を掻きながら話し始める。

それは先ほど、廊下を歩いてナギの部屋を通りかかったときだった。　玄関の修理もやっている中でナギが真っ先に部屋へと走っていくのを見た。

「ナギ」

「入ってこないでくれッ！！」

取っ手に手をかける瞬間。ナギの声が聞こえ、テルは手をかけるのを止めてしまった。

「なぁ、テル。　ハヤテはどうしたんだろうな・・・・」

そう呟くナギの声はとても弱弱しかった。　いつもの高く、強い声は聞こえない。

「私はアイツに約束されたんだ。　私を悲しませる奴らから何が何

でも護るみたいな事を・・・」

「ナギ・・・・」

「それから色んなことがあって、私が色々と迷惑掛けたこともあった。　それでもハヤテは助けてくれた・・・・」

ナギにとって、これまでのハヤテとの出来事は二人の大きな信頼、つまり絆だ。

お互いが信じ合い、乗り越えてきたからこそ深い絆がそこにはある。

「だからハヤテが消えた後もハヤテは絶対に帰ってくるって信じていたのだ……」

部屋の中のナギは扉にもたれかかった。

「だがアイツは帰って来ない……私達の『絆』はこの程度のものだったのか！？」

今にも泣き出してしまいそうな声が響く。　仮に今ハヤテが居ればナギはすぐにでも笑顔になるだろうがハヤテいない。

（かと言って俺が代わりにはなれねえ……）

「しばらく一人にしてくれ……」

テルは何も言わない。今は今だけはこうして置くことが一番ではないかと思ったからだ。　２人の会話はそこで終わった。

現在に戻る。

「ナギにとってハヤテ君は大切な人なんですよ」

話を聞いたマリアは小さく笑うとそう言った。

「昔から遺産の事で命を狙われてましたから、最初は気を許せる人があまり居なかったんですよ」

それは初耳のテル。だが幼くても立派な三千院家の跡取り。　その手の奴らから命を狙われるのは当然か。　マリアは更に続ける。

「でもハヤテ君に出会ってから、前よりも明るくなって学校にも行くようになりました。　まぁ今でも休みがちですけど……」

「たしかに……」

テルは苦笑いを浮かべる。　しかし、ハヤテがナギにとって信頼できる存在であり、マリアもまたハヤテを信頼していたのだ。

「だから今度は私達がハヤテ君を助けてあげる番です」

マリアは力強く言った。テルもまた頷いてその場を去ろうとするとマリアが呼び止めた。

「私は日野寺家の場所を調べますがテル君は？」

マリアにそう聞かれ、テルは頬を掻きながら返した。

「俺も情報収集に白皇に」

「今日は休日ですよ？」

マリアがもっともな意見を言うがテルはニヤリと笑ってみせた。

「たぶんこんな休日でも頑張ってるマジメ君がいると思うんで」

そう言うと扉を開け部屋を出て行った。

（さて、なんか引っかかってんだよな……）

頭に浮かぶ疑問と戦いながらテルの足は玄関へと向かう。　玄関の修理は完了していた。

（やれるだけの事をやってみるか……）

バタン！　と勢い良く玄関の扉を開けた。

変に意識して書くとシリアスは難しいと思ってしまう今回。
はたしてシリアスと呼べるのか……　いつでも感想や意見をお待ちしています。

次回は原作キャラ登場です。　大体分かると思いますが……

～好きな単語を喋り捲ってどれか一つ流行らせたい～（前書き）

今回はあの人加えて、あいつ等まで登場。

～好きな単語を喋り捲ってどれか一つ流行らせたい～

前略。　テルは白皇学院に情報収集へとやって来ていた。　これから戦うかもしれない相手の情報を一つでも集めなくてはいけない。
勝負しようにもまずそこからだと考えたからである。

「で？　なんで私のところに来たわけ？」

そう言いながら長大な机に肘をつけ頬杖を突いている少女はこの学院の生徒会長、桂　ヒナギクである。

「偉大なる魔王である生徒会長であるお前なら色んなことが分かりそうだからな」

客席用のソファーにどかっと座りながらテルはリラックス気分だ。

「なんか聞き捨てならない言葉が聞こえたけど……ていうか、今まで突っ込まなかったけど、ここは生徒会の関係者以外入れないって言わなかったっけ？」

「硬いこと言わさんな会長。　情報収集にきてるのだ」

「休日に学校来て仕事している私の身はお構いなしね」

この休日、本来なら家で休んでいるのハズなのに生徒会の仕事によりヒナギクは午前中から仕事をしているのだがそんな大変な中、まさにお構いなしである。

「その情報収集ってなんの情報？」

ため息を一瞬だけつくとヒナギクは手にしていたペンを置いた。
「日野寺家についてなんだが？」
「え？　日野寺家？」
ヒナギクのその反応にテルは内心、当たりを引いたと思った。
「知ってるのか？」
「知ってるけど、日野寺家は医療の方にかなり力をいれていることでかなり有名よ？」
「医療？」
「ええ、後は昔凄かったというかなんというか・・・・・」
「何が凄かったんだよ、お前曖昧じゃね？　お前もしかしてあんまり知らないんじゃ」
だんだんと表現が曖昧になって言っているのが分かるテルは眉を細めた。
「だってそれは昔の話だったから。　今のことは分からないのよ！」
ヒナギクは顔を少し赤くして声を張った。　しかし、どうやら日野寺家には過去と現在では大きな差があるそうだ。
だがまだまだ情報が足りない。　テルはうーんと唸り、頭を掻いた。

「あー・・・・会長は今日から係長に降格だ」

「あなた殴られたいのかしら？」

拳がぶるぶると震えだしているヒナギク。　しかし、少し思うところがあったのかテルに聞いてみる。

「でも日野寺家を調べることに何か意味があるの？」

テルは間違っても昼間の出来事を話してはいけないと感じた。喋ったら絶対こいつは来る。　断っても来る。　そんな面倒くさいことはごめんである。

「まぁ少し調べたいことがあんだよ・・・・だが参ったな」

ヒナギクは理由は分からずとも何か困っていそうだということだけは理解できた。

（まぁ、この前お姉ちゃん助けてくれたお礼もしなきゃならいし）

と思い、ポケットから携帯を取り出した。

「仕方ないけど、あの娘達にたよるかぁ……」

「誰か心当たりでも？」

「そういうのに詳しい友達がいるのよ。今頃、サボって遊んでるだ

ろうけど」

そう言うとヒナギクは携帯の番号を打ち出した。　電話が繋がりヒナギクが話し始めた。

「もしもし私だけど来てくれない？　ちょっと聞きたい事があるんだけど。　どうせどっかでサボってたでしょ？　みんな連れて来なさい」

携帯の通話を終えると背もたれ椅子にドカッともたれかかった。

「まさか……アイツ等よんだのか？」

テルが面倒くさそうに顔をしかめた。

「知りたいんでしょ？　なら文句は言わない」

ガチャン！　とヒナギクが言い終えたと同時に生徒会室の扉が開かれた。

それと同時に強烈な光が差し込んでくる。　あまりのまぶしさにテルとヒナギクは目を隠した。

「うおっ！　まぶし！」

「来るの早いわね・・・・でも来るのにここまで過剰演出する必要あるかしら？」

扉から差し込んでくる光はどうやら自然的なものではなく、人工的なものが使われていた。　そのライトをバックに三人の女子生徒がポーズをとっていた。

「ふっふっふ・・・・待ち続けること四ヶ月、話数にしてなかなか出番をもらえず退屈をすごす日々・・・・」

「そんな私たちにも！」

「ついに出番がやってきた♪」

「「「降臨、満を持して！　我ら、ＴＨＥ！　生徒会役員！！」」」

その瞬間、後ろでどーんと爆発みたいな効果が聞こえ、三人は決まったと言わんばかりの顔だ。

「おー、いらっしゃーい。　んでもって出口はこちらになりまーす」

テルが三人を入ってきた扉へと誘導する。

「そうそう、お邪魔しましたーってなるかァ！」

ややブルーがかかった灰色の少女が怒って戻ってくる。

「我々は４ヶ月も待った！　ようやく出れたと思ったら特別編だぞ

！？　本編に関係ないではないか！！」

「そうだ！　大体、作者も女性キャラ登場させるのがあまりにも遅いのだ！　見ろ現実を！　まだ余っているキャラもいるだろうに」

「みんな～　私達の事、忘れてないよね～！？」

黒髪の少女も自身の不満を訴える。　最後の紫の髪の少女に至っては泣きそうな声だった。

「だが出れたからには」

「私達の見せどころなのだ！」

「なのだ～♪」

　三人は意気揚々としていた。　どうやら出番がなかったことにとても不満だったらしい。

「美希、理沙、泉？　訳の分からない事言ってないで出番が欲しければ仕事をすればいいじゃない。　そうすれば早く出れたかもしれないのに」

ヒナギクが呆れたように言うと美希が反応する。

「ヒナは私達より早く出れたからそんな事が言えるんだ」

「「そうだそうだー！」」

美希の後ろで理沙と泉が腕を伸ばしてはやし立てる。

「あなた達ね……不平不満言うもんじゃないわよ」

ヒナギクが落ち着いた態度で喋る。　その様子を見て、流石は会長だ。　と思っていたテルだったが

「私なんて早いと言っても出れたの２０話過ぎよ！？」

「お前も根に持ってたんかい！　つーか今ここで討論する必要ねーだろ！」

テルの突っ込みにより四人はそれもそう。と思い落ち着きを取り戻す。

「ありがとうテル夫君。　君のおかげで目が覚めた」

「お礼に君には今余っている黄土色の称号を与えよう」

美希と理沙がテルに感謝するように言う。

「そんなスライムにも負けそうな称号はいらん。せめて黒にしろ」
「残念ながら黒は私のものだ」
理沙が自身に親指を立ててテルに返す。
それに続き
「ちなみに私、花菱　美希はブルー！」
「私、瀬川　泉はレッド！」
美希と泉がそれぞれ乗ってくる。　そして再び三人はポーズを取り、
「「「我ら！ＴＨＥ！生徒会役員！」」」
「お前ら少し黙れェェェエ！！」
このままでは話は一向に進まない。　取り敢えず皆の落ち着きを取り戻させた。
ぶっちゃけ、この三人娘はテルにとってとんでもなく苦手な存在だ。　クラスにもいるだろう、なにかと突っかかってくる女子が。
それが×３。

愉快なのは確かだが。

話は戻りようやく本題にはいる。　本格的な情報収集の開始だ。

「日野寺家か？　ああ知ってるとも」

「本当かよ？」

美希がどうやらその事に詳しいらしい。

「一応、政治家の娘だ。　情報収集は得意」

美希は得意顔で言うと更に続けた。

「しかし、そんな事も知らなかったとはテル夫君、あさはかなり……」

「放っておけ……」

「日野寺家は医療の最先端を行く家系。　その活動は国内に留まらず、外国でもその力を発揮している」

要は全世界で医療の力を拡大していったということか。

「はっきり言ってその時の実力だったら三千院家と肩を並べていたくらいだ。　ま、それも過去の話」

「なんだ、過去のことだったのか」

「ああ、日野寺家はある日を境にして急激に力が衰えていった。

それは前当主がいなくなったからだ」
美希が言うにはその前当主がもっとも日野寺家の中で医療に対する情熱と知識をもっていて、よく頭のキレる当主だったとか。　そもそも日野寺家の全盛期を築いたのはその前当主のおかげだと言っても過言ではないらしい。
「前当主は人望も厚かったからな色んな人間が彼を慕っていた。医療に対してはホント熱心だったらしいから紛争地域に直接赴いて戦地の人々を助けていたりもしたのだよ」
そんな前当主がなんでまた急にいなくなったりしたんだ？
「不幸なことにだが、紛争地に赴いていた時に巻き込まれたらしい。紛争地帯で前当主は敵味方関係なく治療に当たっていたがそれを邪魔に思っていた人間が居たらしいのだ」
皮肉なことだ。　助けていたはずなのにその助けた側の人間から邪魔だと思われ、命を奪われるとは。
「それからだよ。　日野寺家が弱体化したのは・・・・・前当主が今まで全部仕切ってやっていたから指示する人間がいなくなったせいで組織はバーラバラ、前当主の一人娘が今継いでいるけどなかなか周りからは若いだのなんだので信頼されていないわけ」
なるほどようやく分かった。　日野寺家の過去と現在。　盛者必衰の理という言葉もあるくらいだからな。
でも一人娘ってまさか
「かわいそうなことに前当主が死んだときにどうやら奥さんも居た

らしいからな。　日野寺家は実質、その一人娘しかない・・・・まだ十三歳だというのに」

おそらく、その一人娘はマユミだろう。だがその過去の、父の栄光を取り戻そうとするのは分かるが果たして、今回の事件となにか繋がりはあったのだろうか。

「なるほど、大体分かった」

なんにせよ分かることも分かり、得れる情報はいろいろと得ることができた。　取りあえず帰るかな。

「そうかそうかテル夫君。　最後に私達生徒会から君へエールを送ろうではないか」

「いらんいらん。　そういうエールは今の病んでる日本に贈ってやれ」

テルの言葉など意にも介さず三人娘はテルに向かって応援団のように美希、理沙、泉の順で

「あさはかなり」

「あさはかなり！」

「あさはかなり～♪」

エールを送った。

「エールじゃねぇよな！？　明らかに俺のことバカにしてるよな！

？」

「ふ・・・・さぁヒナも言うんだ！」

「な、なんで私までやらなきゃいけないのよ！」

美希がヒナギクに言うよう促す。　ヒナギクはやりたくはなさそうだ。

「お前らなんだ、その言葉流行らせたいのか」

その時、テルの携帯が鳴る。　電話の相手はマリアだった。

「もしもし、マリアさん？」

『テル君、情報のほうはどうですか？』

「大体集まったほうですよ。　そっちはどうですか？」

『こちらも大体場所は特定できました。　あとお客様がお見えです。』

客？マリアの言葉に疑問を浮かべたテルだったが、客の名前を聞くなり表情を一変させた。

「分かりました。　すぐ戻ります」

そういい終えると携帯をきる。　三人娘とヒナギクはまだ言うか言わないかでもめている。　わざわざ言うのもめんどくさいので黙って帰ることにした。

「さぁヒナ！　言うんだ！」

「ヒナも気づくはずだ！　この言葉の有能さに！」

「ヒナちゃん、言ってみよ～」

「わ、分かったわよ・・・・・言えばいいんでしょ、言えば」

三人の執拗な説得についにヒナギクも折れてしまい、深呼吸をして小さな声で呟く。

「あ、あさはかなり・・・・・ってアレ？」

当然だが、テルは四人が言い争っているさなかに生徒会室を出ていた。　だれもいない所にヒナギクは深呼吸までしてまで恥ずかしさに耐えながらもおかしなセリフを言わされたのにだ。

「あらら・・・・ヒナを放置するとはテル夫君、なかなか度胸があると見える。　なら、我々もそろそろサボりという名の仕事に・・・・」

「あら？　どこへ行くつもり？」

三人娘が何事も無かったように生徒会室から出ようとしたとき呼び止められ、振り返るとそこには笑顔のヒナギクがいた。

笑顔ではいるのだが負のオーラが大量にあふれてきている。

「さ～て、仕事しましょ仕事♪　今日は仕事を終わらすまで帰さな

いわよ？」

「そ、そんなヒナ！　そんな死人がでるような激務を私達にこなせというのか！？」

美希が必死になって訴えるがヒナギクはそれを絶対に許さない。

「他意はみとめない」

三人娘はヒナギクのオーラに圧倒され、弾圧された。

「ただいまーっと・・・・・」

「おかえりなさい。　テル君」

それからして、テルは屋敷へと戻ってきた。

「お客様は部屋でお待ちしていますわ」

「了解です」

そう頷くと、テルは客が待っているとされる部屋へと入った。

「よう、待たせたな・・・・・・シュトロハイム」

そこに居たのは紛れも無く、昼間にやってきたマユミの執事、シュトロハイムだった。

その後にマリアも来て、よく分からんがテルが椅子に座り、その後ろでマリアがいるという状態で座っているシュトロハイムと向き合った。

「まさかお前から来るとは思わなかった。　お嬢様はどうしたよ？」

なぜか今はマユミとハヤテの姿が見当たらない。　どっかに隠れているのだろうか。

そう思考を巡らせているとシュトロハイムはが口を開いた。

「実は・・・・・今日付けでお嬢様の執事をクビにされました」

「・・・・・・・・・・は？」

ニカッと笑って答えるシュトロハイムに二人は目を丸くした。

「いやぁ『もう綾崎　ハヤテがいるから貴方はもう必要ない』と言われてしまいましてな」

「いやいや、お前無職になっちゃたのになんでそんなに笑ってられるんだよ」

テルが手を小さく振り、突っ込みを入れる。　しかし、これほど主を思っている執事をクビにするとは一体何故だろうか。

「お嬢様の命とあらば致し方ありません。　主の命に執事は従う、ただそれだけなのですから」

テルはふーんと言った表情。　それでも従うって言われてもここまで前向きだとは全世界の無職の人々にはこれぐらいのポジティブ感が必要なのかもしれない。

「お茶です」

「ありがとうございますマリア殿」

シュトロハイムはマリアに出された紅茶をグイッと飲み始める。カップが１９０ｃｍの体格のせいでやたらと小さく見えた。

（でもマリアさんも何も警戒なしで屋敷にあげたんですね）

（ええ。　でも最初見たときは警戒はしましたんですけどなんというか・・・・・雰囲気が）

お互いに目を見合わせて小声で呟く。　確かに、今のシュトロハイムは玄関を破壊したときの迫力は無く、見た感じは執事服を着たただのおじさんに見えたのだ。

「実はこのシュトロハイム、お願いがあってこの度参りました」

紅茶を飲み終えたシュトロハイムは突如として顔色が変わり、真剣な表情で向き合う。

「お嬢様を助け出してほしいのです」

「どういうこったそりゃ」

テルが顔をしかめる。　シュトロハイムは少しだけ俯いた。

「言葉通りです。　人殺しの私にはお嬢様を助けることも笑顔にすることもできません」

ーその人、人殺しだから・・・・・　というマユミの言葉が思い出される。

「お前んとこのお嬢様もそんなこと言っていたな・・・・」

その言葉を聞くと、シュトロハイムは自身の右手を見つめた。

「ええ、実際に私は人を殺しています。それもたくさん・・・・・」

右手を見つめるシュトロハイムにテルは目を細めた。

「話さなければなりません。　私がどうしてマユミお嬢様の執事になったのか。　どうしてお嬢様があそこまで変わってしまったのかを・・・・・」

再びテルたちと向き合うとシュトロハイムはあの日を思い出すかのように語りだした。

ー今から八年前、アルベルト・シュトロハイム四十二歳。

～好きな単語を喋り捲ってどれか一つ流行らせたい～（後書き）

テルは既に三人娘と会っているという設定になっています。　ただ三人娘の性格とかちゃんとこれで合っているか心配です。

次回はいきなり過去へと移ります。

～人との出会いは一期一会～

ー八年前、アルベルト・シュトロハイム四十二歳。

とある国の紛争地帯。

「・・・・・・・」

ふと目を覚ました。見上げるは曇天の空。　自分は地面に仰向けで倒れていたのが分かった。

「ここは・・・・・？」

体を動かそうとしたとき、下腹部に激痛。　よく見ると、体の服は下腹部だけ穴が開いており、その穴からは血がとめどなく流れていた。

ーそうか、思い出した。　私は極秘任務の最中、この紛争地帯にいるある人間を暗殺するために銃弾の嵐をかいくぐっていたところを流れ弾によって撃たれたのだ。

そしてそのまま側にあった低い崖から落ちて意識を失ったのだな。

雨が降ってくる。　ポツポツと砂にまみれた体に雨が当たり、泥へと変わる。

傭兵。それが私の家系だった。　頼まれればどこへでも行き、どんな戦地だろうが荒地だろうが金を積まれれば何でもやる。　生きるためにはやらなければならなかった。

時間がたつ度に意識が遠くなっていくのを感じる。　どうやら血を流しすぎたらしい。　意識を遠ざかれば最期、私の魂は一瞬で刈り取られるだろう。

まずい、本格的に目が霞んできた。　何かが見える・・・・これはなんだ？死の間際にみる最期の光景だというのか・・・・

思えばロクな人生じゃなかった。　生きるためといい、何度も人を殺めてそれを繰り返していく人生。　こんな人生、嫌気がさす。
いっそこのまま楽になってしまおうか・・・・そう思えば自身の人生に区切りをつけれる。

ー早く、この世界から消えよう・・・・そう思っていたときだった。

「おーい、車速く回してくれ！　こっちに倒れている！」

どこからか男の声。　だがこのとき既に私の視力はほぼ全体がぼんやりして見えた。

目を閉じる前に見たのは明るい光だった。

「・・・・・・・」

次に目を覚ましたとき目に映ったのは天井だった。　自身の体は丁寧な包帯が巻かれており、大きなベッドに寝かされていることが感触で分かる。

「気がついたかい？」

ふと聞き覚えのある声がする。　その声は薄れゆく意識の中で聞いた声と同じだった。

「弾丸が体の中に残っていて取り出すのに苦労したよ。　でもあの出血と怪我で生きているなんて、相当体を鍛えていたんだね」

コーヒカップ片手に喋る男は清廉な茶色の髪に整った顔立ちで、白衣に眼鏡という地味なものだった。

「貴方が治療を？」

「おお！　日本語喋れるんだね！　これは驚いた」

シュトロハイムの言葉に男は驚いて見せた。　すると男はカップ片手に近づいてくる。

「僕は日野寺　祐一（ゆういち）。　言ってみれば医者だよ」

シュトロハイムはその名を聞き、驚いた。　日野寺といえば世界をまたに掛ける医療の家系。　全世界でも信頼されている医療の最先端をゆくことで有名だ。

「あら？　起きたのね？」

扉が開かれ、入ってきたのは明るいエメラルドの髪をした女性だ。

「僕の妻の美娑紀（みさき）だよ。ここでは一緒に活動している」

笑顔で迎えてくれた娑紀は同じく、片手にコーヒーを持ち、白衣姿が似合っていた。

「貴方たちが私を治療してくれたのか？」

シュトロハイムがそう聞くとミサキが両手で口を塞ぎ驚いた。

「まぁ、この人日本語が上手よ」

「ミサキ、それさっき僕も同じ反応したよ。　それにしても凄いね、どこで覚えたんだい？」　世界を渡り歩く傭兵は言葉の壁にも挑戦した。　もちろん、情報を得るためでありその中には日本語も含まれていた。　そんなことを正直に言う必要も無かったので

「独学で覚えた」

とその場をごまかしたのだ。　それに二人はまた驚いてみせる。そんなに珍しいのだろうか、日本語を喋る外人は

「・・・・・・」

なにかしらと視線を感じる。　扉のところから・・・・よく見るとそこには小さな少女が顔だけを覗かせてシュトロハイムを見ていた。

「あの子は？」

シュトロハイムが視線をその子に向けると少女は一瞬ビクッとして顔を引っ込めた。

「あの子は真弓(まゆみ)。　僕らの一人娘さ」

祐一がそう言うとマユミはたたたと祐一に駆け寄り白衣の袖をつかんだ。

「倒れているのを発見したのはマユミだよ。　覚えてないのかい？」

覚えていない。恐らく気を失っていたときだろう。

「まだまだ体は動かさないほうがいいよ。　傷は完全に塞がっていないんだから」

ユウイチはそう言うと体を起こして動こうとしているシュトロハイムをとめた。

取りあえず今はそうしていた方が良さそうだ。　体の力を抜き、静かに目を閉じる。　そうするとユウイチ達は部屋から出て行った。

そして、だれも居なくなったのを見て、目を開き自身の目的を思い出す。　そう、彼、日野寺　祐一こそ暗殺を依頼されたターゲットだったのだ。

時が経てば自身の怪我は回復する。　そうなった時が暗殺再開のときだ。今は体を休めよう・・・・・

～そして現代。

「アンタ・・・・傭兵だったんだな」

テルが目を細めて背もたれに寄りかかる。

「驚きましたか？　お嬢様の言っていたことは事実です」
淡々と述べるシュトロハイムにテルが質問する。
「まさかマユミの親父を殺したのは・・・・・」
そういい掛けた時、シュトロハイムが口を開いた。
「続きを話しましょう・・・・」

私は確かにあの時は傭兵として暗殺を画策していました。
「ねぇ、シュトロハイムはどこで何をしていたの？」
出会って数日。　シュトロハイムはベッドの上でマユミと会話していた。　いや会話というよりも尋問に近いか。
マユミはよりによって、何をしていたか、どうしてあそこで倒れていたのかと、正直に答えればこちらの素性がばれる様な事ばかり聞いてくる。　だから会話というより、尋問に近かった。
（まさかユウイチやマユミは私の計画に気づいているのか？）
そんな考えが過ぎったがそれは無いだろう。　こんなあどけない少女がそんなことをするわけが無い。

しかし、この紛争地帯の中でいくらなんでも無用心すぎではないだろうか。　聞けばユウイチ達は争っている人々、関係なく治療に当たっているという。　その中に私のような人間もいて不思議ではないのだが。

いずれにせよ、これは好都合だ。　そのほうが私は動きやすい後何日かすれば戻る。それまで待つんだ。

こうして体の治療に専念していたとき、私は不覚にもマユミに質問してしまった。

「マユミは何かになりたいのとかあるのか？」

「あるよ、お父様とお母様みたいなみたいな優しくてかっこいい医者になりたい！」

やはりそうくるか。

「お父様が言ってるの『人を助けることは素晴らしいことなんだ。お前が人を助け、命を救ったとき、その人が嬉しくなればお前も嬉しくなるんだ』って」

ユウイチよ、理想が高いことは結構だがここにお前を殺そうとしている人間がいるのだぞ。

「もし、その助けた人が悪い人だったら？　恩とかをあだで返す人間だったら？」

つい意地悪な質問をしてしまった。　だがこういう人間がいた時、

その理想を貫いていられるだろうかユウイチは。

「ん～と、まだ「おん」とか「あだ」とか分かんないけどどんなに悪い人も生きれたらうれしいと思う」

「それもユウイチの教えなのか？」

「違うよ。私が思ってるの」

親が理想の高いものを目指していると子も理想が高くなるのだろうか。

「お父様とお母様のすぐ隣でお手伝いすることが私の夢なの！　たくさんの人を助けて、みんな幸せになるの！」

しかし明るく振る舞って夢を語るマユミの姿はどこか寂しげで

「だからあまりお父様とお母様と遊べなくても頑張るの……」

何かと戦っているようだった。

考えてみればまだ五歳。　親とたくさん遊んでいたいだろう。

何を思ったのか私は自分のポケットから一枚の硬貨を取り出した。

「シュトロハイム、それな～に？」

この硬貨はよく任務前にやる占い。　表か裏を当ててやれば失敗することはないという自分が考えたものだ。

だが今回はそんな事には使わない。

「マユミ、このコイン、私がどっちに持ってるか分かるか？」

そう言うと硬貨をコイントス。　やがて目の前に落ちてくる硬貨を両手で素早くわける。　さぁ、どっちだ？

「うーん、右手！」

「残念、左手だ」

マユミはまさかそっちにあるとは思わなかったという顔で

「すごい、すごいよ！　シュトロハイムは魔法使い？」

マユミは目を輝かせていた。

「はは……」

私は苦笑いをした。そこまで面白いものだったろうか？　あまりこういう遊びをやるのは初めてだったのかもしれない。

「ねぇ、もう一回やって？」

何故かその後何度もつき合わされた。　全て当てることは出来なか

ったが。

「……」

どうしたものか……マユミはどうやら疲れ切って寝てしまっていた。

「あら、

マユミったらこんな所で寝ちゃて……」

マユミを見つけたミサキが静かに近付いてくる。

「シュトロハイムさんごめんなさい。　迷惑掛けたかしら……」

「いえいえ、私が一緒に遊んでいただけです」

それを聞くと美娑紀は申し訳なさそうな顔をした。

「この子には申し訳ないと思っているんです。　私達こんな仕事だからあの子と遊ぶ機会ができなくて・・・・久しぶりに遊べて楽しかったんだと思います」

恐らくユウイチもミサキも同じくらい苦しいだろう。

「あの人も気に掛けているんだけど、医療バカだから・・・・でも心はマユミと遊びたいって思ってるはずよ」

ユウイチは医療のことになると周りが見えなくなるのか？

「私達も頑張って時間つくるわ。それまでマユミと遊んであげて？」

そう言うとミサキは寝ているマユミを抱きかかえ自分の部屋へと戻っていった。

子供と遊ぶなんて私は今回が初めてだ。　だからこれからうまくやれる自信はない。　だが私は親と触れ合ったことすらない。　そういうものは私の間には無く、教えられたことといえば傭兵としての在り方。生き方。　人を殺すための技術。　だが・・・・

ーマユミの笑顔をもっと見たいと思っている自分がいる。

なぜだ。　こんな迷いが生じるとは・・・・・

作戦の決行は今日にしよう。　時刻は夜。皆が寝静まった後だ。

情も薄いうちにやっておかなければ心が揺らいでしまいそうだ。

ーそして深夜。

夜こっそりとベッドから降り、自身の持っていたナイフを持ってユウイチの部屋へと近づく。

息を殺せ、気配を悟られるな。　ようやくユウイチの部屋までたどり着いた。

（明かりが漏れている。　まだ起きているのか？）

部屋が少し開いていたのでその隙間から覗くと、ユウイチは大量の本や資料に顔をうずめ、机に突っ伏して眠っていた。

（寝ている。　だがこれは好都合だ・・・・）

今一度、自分のナイフを見つめて部屋に入る前に準備を整える。

「あれ？　シュトロハイム？」

「ま、マユミ・・・・」

真夜中にまさかだがマユミと出会うとは、また出直すか？

ーあの人も心ではマユミと遊びたいって思ってる。

ーお父様とお母様と一緒に遊べなくても頑張るの・・・・

突然、昼間の言葉が蘇る。　相手は命の恩人だ。　それを私は自らの手で殺そうとしてる。

ユウイチが死ねばマユミは、ミサキは悲しむだろう。

ーできるのか？　私に少女の幸せを奪うことが。

ーできるのか？　私に親の心を踏みにじることが。

（できない。　できるわけがない・・・・・）

「リンゴでも食べるか？」

「夜にはあまり食べないけど今日くらいなら・・・・」

なんという間抜けな提案をしているのだろうか自分は。　そのままマユミと台所に直行し、果物ナイフでバスケットにあったリンゴを持って切ろうとしたが。

「むぅ・・・・」

生まれてこの方、果物なんて切ったことが無い。　私はリンゴの皮むきすら手間取っていた。

「シュトロハイム、あまりにも下手だわ。　ちょっと貸して？」

私の切り方のひどさに見かねたのか、マユミが寝ぼけ眼で私の手からナイフとリンゴをとった。

そう言ったマユミの腕は流石で、綺麗にリンゴの皮を剥いていく。

「うまいな・・・・」

私がそう言うとマユミが切り終えたリンゴを渡した。

「シュトロハイムのナイフの持ちかたって危ないわよ？　それじゃ怪我するわよ？」

仕方が無い、今まで果物の切り方なんて知らなかったのだから。

「じゃあ仕方ないから私が正しいナイフの使い方教えてあげるわ、感謝しなさい」

そういうマユミは欠伸をしてリンゴを口に放った。
それからその時間、マユミに数個のリンゴを使って皮むきの練習をされた。　なんの意味があるのだろうか。
「あら、上手くなったじゃないシュトロハイム。　あなた才能あるわよ」
　そう言われて、ようやく気づいた。　これが人を殺さない、ナイフの使い方。　正しいナイフの使い方を教えられた。
ー私にはできない。　彼女の、彼らの幸せを壊すことはできない・・・・
数日後に私は怪我が治り、その祝いで軽いパーティを催された。
その時、ユウイチと酒を飲んでいたときだ。　私は意を決して自分の正体を明かした。
「・・・・そうか」
　しかし、ユウイチは確かに聞いたはずだ私の正体を。　だがあまり驚いていなかった。
「まぁ、慣れているんだよ。　一回だけじゃないからね」
聞けば、過去になんどか襲われた経験もあるらしい。
「今、僕を殺す気は？」

「ない・・・私はお前に助けてもらい、救われた。　マユミの幸せを壊すことはできない」

そうか、と言うとユウイチはグラスの酒を飲み干した。

「確かに僕らの周りは決していい人ばかりじゃない。　それでも僕は人を救いたいんだ。　この身を費やしてでも」

「そうだな。　もともと戦争が引き金で多くの命が奪われている。関係の無いものまでの命がな、それをできる限り救うのがお前の役目だ」

自分のグラスも一気に飲み干そう。　自分の両手を見据える。ユウイチに私は聞いてみた。

「ユウイチよ、私は変われるだろうか」

「変われるさ、お前なら」

「だが、私はこの手で人を殺めることしかできなかった。　できるのか奪うことしかできなかったこの両手で・・・・」

「できるさ」

またしても即答。　ユウイチは笑顔で言った。

「少なくともお前は一人の女の子を笑顔にする方法を知っているじゃないか」

それはマユミのことだろうか。　だが、これから変わるとするならば自分自身と向き合わなければ。

「ユウイチよ私も誰かのために尽くせる人間になりたい」

この時、多分だが生まれて初めて強く思った。だれかを笑顔にしたい。　色んな人を、そしてマユミも。

「シュトロハイム、僕と一緒に働いてみないか？」

「ああ、お前とならどこへでも行けそうだ」

2人でグラスをぶつけると向こうからマユミがやって来た。

「シュトロハイム、シュトロハイムは強いんだよね？　お父様とお母様を守ってあげてね？」

「ああ強いとも、守るさ。　もちろんマユミもな」

マユミの頭に優しく手を置き、笑顔で言った。　できる限り彼女の期待に応えてやりたい。

「えへ、えへへ……」

頭に手を置かれていたマユミはその言葉を聞くと嬉しそうだった。

それから私は今までの職務に区切りをつけ、ユウイチ達の手伝いをするようになった。

私も医療について勉強して多くの患者達を治療する立場になり、人を助ける喜びを知っていった。

不思議だ。今まで人を殺す事しか出来なかった人間が人を助ける事ができるなんて。

私はユウイチと出会う前は死んでいたかもしれない。　今初めて、生きていることを実感している。

ありがとう、ユウイチ。

私は思っていた。　これからもユウイチの下で働いていこう。幸せがいつまで続けばいいのに。

―だがその幸せは長くは続かなかった。

～人との出会いは一期一会～（後書き）

２話構成の過去編なので次で終わります。

かなりシュトロハイム視点が混ざっていました。　スミマセン。

今回の失敗を糧にできればいいと思っています。

～出会いあれば別れあり～（前書き）

過去編もこれでおわりです。　ではどうぞ。

～出会いあれば別れあり～

「日本に帰る？」

「ああ、紛争が収まってきたからね。　明日には帰ろうと思うんだ」

お昼過ぎ。　コテージでシュトロハイムとユウイチは仕事の休憩をしていた。

ここ数ヶ月で紛争は沈静化してきた。　シュトロハイムやユウイチのおかげで負傷者たちはみんな完治していった。　紛争の終わりが近い。　数々の人々を救ってきたシュトロハイムにとって朗報だった。

「財閥にも報告してこれからの方針を決めたい……と思ってたんだけど、本当は別にあるんだ」

ユウイチはキリッとした顔から一変させて笑顔になった。

「戻ったらしばらく日本に留まってマユミやミサキと過ごそうと思ってね」

「なるほど、それは良いことだな」

シュトロハイムの顔も思わずほころんだ。

「今まで仕事しかしてなかったからマユミには寂しい思いをさせて

きたからね。　家族との時間を過ごしたいんだ」

ユウイチは財閥の当主だが父親だ。　彼も家族を支える柱にならなければならない。

（これでマユミに本当の笑顔が戻る……）

今まで仕事の時はシュトロハイムがマユミと遊んだりしていた。
しかしやはり、ユウイチやミサキと過ごす事がマユミにとって最高の幸せだ。

「日本に来ないか？　シュトロハイム。　お前がいれば……」

「いや……」

ユウイチの言葉をシュトロハイムは静かに返す。

「私は十分、人に尽くせた。　人殺しの私がこれ以上付いて行くのはな……」

「お前はもう人殺しじゃない」

「分かっている。　だがこれからマユミに必要なのは私ではなく、お前だ」

正直だと別れてしまうのは悲しい。　だが私は部外者、日野寺家とは本来無関係。

「決意は堅いんだな……」

「ああ、私はお前から色んな物を貰ったよ。　誰かのために尽くせる事、それが他人のだけじゃなく、自分のためにもなったからな……」

自身の両手を見つめる。　人を殺してきた手。　それが今は人を救える手になったのだ。彼らとの出会いは確実にシュトロハイムの『何かを』変えた。

「生きていればまた会えるか？」

「会えるさユウイチ。　こうして私達は会えたんだ……」

人との出会いは本当に一期一会だ。　しかも大切な、自分の人生を変えるほどの出会いは本当に一握りだ。

最後に二人は拳をガツと合わせた。

「まぁゲイシャガール、スキヤキの国行けないのは残念だが……」

「その日本の呼ばれ方古くないかシュトロハイム？」

（今日でユウイチ達とお別れか……）

シュトロハイムは一人最初に自分が寝ていたベッドを見ていた。
明日にでもユウイチが帰ってしまう。　そうなればまた浮浪の旅だ。　数ヶ月だが随分と長かったと思うと感慨にふけっていた。
「あら、シュトロハイムじゃない。　何していたの？」
部屋に入ってきたのはマユミだ。
（そうか、マユミとも別れなくてはならないか……）
分かってはいたが辛い事、しかし自分はマユミにとって最大の選択をした。
「マユミ、私とコイツで勝負しないか？」
そういってポケットから取り出したのは一枚のコイン。　勝負はもちろんコイントスからの見極め。
「いいよ。　やろやろ！」
マユミは顔を輝かせるとシュトロハイムの勝負に乗った。
―結果。
「右手！」

「……驚いたな、当たりだよ」

「わーい！　勝った勝った！」

マユミは両手一杯に高く伸ばして満面の笑みを浮かべていた。

「むぅ、強くなったのだなマユミ……」

「エッヘン、何回やってると思ってるの？」

「まぁそうだな……マユミ、楽しかったぞ」

シュトロハイムはマユミの頭に手を置いた。

「楽しかったのはマユミの方だよ？」

マユミが怪訝そうに聞く。

（そうじゃない。　私はお前と遊んでいて、初めて人と触れ合うことの楽しさを知った。　お前が居たから私は変われた……）

「このコイン欲しいか？マユミ……」

「え、いいの？」

差し出されたコインを見て、マユミは驚きの表情を見せる。
「私達が出会えた記念の証しだ。　私を忘れないでずっと持っていてくれ……」
その今までと違う雰囲気にマユミは顔をしかめた。
「え？　シュトロハイム、なんて急にそんな……別れるようなこと言うの？」
シュトロハイムはしまったといった表情をしたがすぐにいつも通りの顔になり
「そういえばミサキ殿がさっき届いたケーキを食べに行かないか？」
「う、うん」
マユミはシュトロハイムの背中を見つめていた。
「ミサキ殿、先ほど届いたケーキはどこに？」
「ああ、それならテーブルの上にあるわよ？　どうしたの？」
「いや、みんなで食べようかと」

シュトロハイムとマユミは台所に来ていた。　ちょうどそこにはユウイチもいる。

「なんだいシュトロハイム、そんなに甘い物が食べたいのかい？」

「まぁそんな所だ。　みんなで食べようか」

そう言うとシュトロハイムは皿を並べていく。

「あら？ユウイチさん、包丁が見つからないわ」

「何だって？　一緒に探すよ」

そう言うとユウイチは包丁探索に入る。

シュトロハイムは座ると四角い箱を見つめた。

「このケーキはどこから貰ったのですか？」

シュトロハイムが聞くと下扉を調べていたユウイチが頭をぶつけ。

「イタタタ……それ確か退院した患者がきてお礼としてくれたんだ」

「おお、それは嬉しい限りだな」

見返りを求めてはいないがこういうのがあると活動にもやる気がわくと言うものだ。

「ユウイチ、包丁はまだかー？」
「待ってくれ、どこだ？」
ミサキとユウイチが探している中、座っているシュトロハイムの袖が引っ張られた。　マユミである。
「ねぇシュトロハイム……」
「どうしたマユミ、なにかあったのか？」
「このケーキっておいしいの？」
「分からんがおいしいんじゃないか？」
「最近のケーキって『音』がなるのね」
「音？」
その単語にシュトロハイムは顔をしかめた。　シュトロハイムは箱を手に取り、自身の耳に近付ける
よく聞くと一定のリズムで何かがカチコチと鳴っていた。
（これは……？）

嫌な汗が首筋をかける。　箱を恐る恐る開けた。

シュトロハイムは開けた箱の中身を見て絶句した。

　そこには白いクリームの代わりに時計が、生地の代わりに五本の筒、そしてその他の機械と繋がった配線。

―それは人を簡単に殺せる悪魔の兵器。

「どうしたんだいシュトロハイム？」

ユウイチとミサキが不思議そうに寄ってきてしまった。　シュトロハイムはこの危険を大声で叫んだ。

「ユウイチ！爆弾だ！　急いで伏せろ！」　爆弾という単語でユウイチは顔を一変させ、ミサキと一緒に床に倒れるように伏せた。

「マユミ！！」

シュトロハイムはマユミを抱きしめ何者からも守るため、できるだけ爆心地から遠ざかるように伏せた。　そして次の瞬間。

　大地を揺るがすような轟音。同時に空気が一瞬で熱くなり、窓ガラスは全て割れる衝撃が発生する。

「ぐっ！　クソ……」
背中に乗っていた家の木の破片をどかす。
「マユミ！」
抱きしめていたマユミを確かめる。　息はある。　どうやら衝撃で気絶してしまったらしい。
「なんという事だ……」
目に映ってきたのは衝撃で激しく荒れ、燃え盛る炎と黒煙。　一つの爆弾で辺りは一瞬で惨状と化した。
「シュトロハイム……」
奥からかすれた声が聞こえ、マユミを抱え行ってみるとユウイチがいた。
「ユウイチ！」
「シュトロハイム、無事か？」
「ああ、マユミも大丈夫だ」
気絶しているマユミを見て安堵していたユウイチだったがユウイチとミサキは体が巨大な破片が乗っかっていた。

「すぐ助ける！　ウオオオオオッ！！」

マユミをそっと置き、破片を気合いの声と共に持ち上げようとするが少しも持ち上がらない。

「クソッ！」

忌々しげに吐き捨てるが更に不幸が重なる。　屋根が落ちてきたのだ。

「なにッ！？」

落ちてきた屋根は一部だったが人を押しつぶすには十分な大きさであった。

マユミは大丈夫な範囲だがユウイチ達はそうもいかない。　シュトロハイムは身を挺して背中で受け止めた。

「ヌウゥゥゥゥウ！！」

身を挺して防いだのは良かったが屋根の尖った一部の破片がシュトロハイムの肩にズブッと刺さった。

「シュトロハイム！」

「だ、大丈夫かユウイチ……今助けるぞ…！！」

笑顔で背中の破片をどけたがここで体の異変に気づいた。

（左腕が……）

左腕は完全に糸でも切れた人形のように無気力にだらんと動かなかった。

（マズいぞ……）

状況は危険だ。こうしている間にも炎は勢いを増していく。　そしてユウイチ達の上にある破片、両手でも上がらなかったのに片手で上がるわけがない。

「なんのこれしき……」

ここで諦めるわけにはいかない。　無理でも片手でも何が何でも持ち上げる。　自分を助けて生きるという事を教えてくれた恩人を殺す訳にはいかない。

だが無慈悲に、ユウイチ達の動きを封じている破片は上がらなかった。

「うう、ユウイチ……」

炎がまた勢いを増し、煙が呼吸を邪魔する。

（このままでは……）

ユウイチは苦しそうにしながら持ち上げようとしているシュトロハイムを見た。　そのすぐ近くには愛娘のマユミ。

―男は決意する。

「シュトロハイム、僕が言うことをよく聞いてくれ……」

右腕の力を緩めて、シュトロハイムはユウイチの言葉に耳を傾ける。

「マユミを連れて逃げてくれ……僕らは置いて行っていい」

「何を言っているユウイチ！」

突然何を言っているのか、シュトロハイムには分からなかった。分かっていたとしても当然受け入れるわけがない。

「お前が居なくなったら誰がマユミを守る！　お前は父親だろう！　これからマユミと家族一緒に過ごすのではなかったのか！」

「ああ、だがこの状況で、マユミを助けれる人間はお前しかいないんだ」

シュトロハイムは頭を抱える。　膝をつき、悲しむように。

「それに急がなければ、家のガスタンクが爆発する……家から出なければみんなの命はない……」

ガスタンク爆発を危惧したユウイチの判断、それはシュトロハイムにとって悪魔の選択。

「やめろ、止めてくれ！　私にまた人を殺させるのか！？」

「お前は殺さないよ……救うんだ、マユミを」

炎により部屋は崩壊を始める。

「マユミはまだ五歳だ。　ここで死んだらダメだ。　死ねばそこまでだけど、生きていれば未来はある！　マユミが……」

身を焼く激痛に耐えながら左腕を伸ばす。

「マユミの未来をお前が守ってくれないか？」

神を……ここまで憎んだことはなかった。　そこに神がいたら迷わず殺したい。

こんな自分に、小さな命と未来を託すというのか。

「任せてくれ……ユウイチ…」

涙がこぼれ落ちる。　隠すつもりはない。託されたこの思い、守っていかなければならない。　シュトロハイムはユウイチの手を握った。

「ありがとう、マユミに笑顔を……」

握っていた手を離し、マユミを抱きかかえる。　しかしここで

「お父様？　お母様？」

マユミは起きてしまった。　マユミは起こっている事態が飲み込めない。

「シュトロハイム？　なんでお父様とお母様が危ないことに……」

シュトロハイムは無言だったが焦りがあった。　その間にもマユミはシュトロハイムの手から抜けてユウイチ達に近づこうとする。

―マユミの未来を守ってくれ

「え？　何をするのシュトロハイム……」

突如マユミの動きが止まる。　シュトロハイムがマユミの腕をつかんでいた。

「熱いし、早く二人を助けないと死んじゃうじゃないの……」

だがシュトロハイムは無言で再びマユミを抱きかかえる。

たがマユミは　激しく暴れた。

「離して！　離して！　シュトロハイム、お父様とお母様が……」

涙を激しく流し、暴れるマユミを見て、歯ぎしりをする。

悔しさと悲しさの思いで、シュトロハイムは外へと走り出した。

「お父様――！お母様――！」

最後に聞いたのは愛する娘の鳴き声。　ユウイチはシュトロハイムの姿を見て自然と笑みがこぼれた。

「頼んだよ……マユミを……」

気が付くと隣のミサキが手を握っている事に気付いた。

「ミサキ……すまない」

「ユウイチさん、私達は夫婦。　どこまでも一緒にいるわ、でも……」

ミサキは少し残念そうな顔した。

「マユミの色んな姿を見れないのは残念ね……」

「学校に行く姿、部活の姿、卒業式、そして……花嫁姿」

最後のはユウイチも顔を沈めた。　だがミサキは手を強く握る。

「でもシュトロハイムなら……」

「ああ、そうだな……」

二人はお互いに手を握ったまま離さなかった……永遠に。

その後すぐに、爆発が起こった。　シュトロハイムとマユミは衝撃に吹き飛び、前のめりに倒れ込む。

「お父様、お母様……う、うぅ……」

起き上がったマユミはすぐ家へと戻ろうとするが家の惨状を見て、足が止まった。

「マユミ……」

「どうして……」

俯くシュトロハイムにマユミが呟いた。　そして振り返り

「どうして約束守ってくれなかったの！？」

―お父様とお母様を守ってあげてね。

「……」

マユミから向けられた瞳は怒りと悲しみだった。　睨みつけられたシュトロハイムは無言になる。

「どうして……どうしてよぉ……」

睨んでいた瞳は顔を俯かせて見えなくなり、蚊のなくような小さい声で地面の草を握りしめた。

「マユミ、ここにいろ」

そう命じたシュトロハイムは真剣な顔で林の中へと走って行った。

「うぅ…ぐす…うぁ……」

マユミは一人、草を握りしめたままだった。

茂みの奥、三人の男が歩いていた。

「ええ、はい。　任務は完了しました。　これより帰投します」

男が無線を終えた。　この三人は先ほどの爆弾を届けた張本人。

「おい急ぐぞ……」

「「了解」」

リーダー格の言葉に反応すると三人は足を早めた。

辺りは薄暗く、木々にはカラスが何羽も止まっていた。
まるでこれから何かが起こるのを見守るように……

カラスが一声泣いた時、それは起こった。

「貴様、何者だ」

三人の目の前に一人の巨漢が立ちはだかった。

肩には破片が刺さり、右手にはナイフが、口にもナイフがくわえられていた。

「誰だ！」

遠くから見ても感じられる、殺気。　赤い眼光は狩人の目だ。

それはシュトロハイムに違いはなかった。

ナイフを構え、脚に力を込め、一気に駆ける。

男達も銃を構え向かってくるシュトロハイムに発砲した。

カラスが、木々に止まっていた鳥達が一斉に飛びだった。

―マユミの未来を守ってくれ

（ああ、守ってやるとも……）

身を貫いた弾丸の傷の痛みに耐えながらシュトロハイムはマユミの元にたどり着いた。

「私がアナタをお守りします。　例えこの身が砕け、死することがあっても……」

マユミは俯かせていた顔を上げ、涙を拭う。　目は赤かったがその瞳は敵を見る目だった。

（どんなに嫌われてもいい……アナタの側に居続けたい。　そしていつか……）

―いつかあなたにまた笑顔を……

～諦めも肝心だが諦めないことも重要～（前書き）

遅くなってしまいました。スイマセン！

ではどうぞ。

～諦めも肝心だが諦めないことも重要～

―そして時は戻り現代へ

「あれから片腕も動きません。この通り、右腕だけでの生活」

よく見ると左腕は今もだらんとしていた。今まで右腕だけ使っていたのは左腕が使えなかったからだ。

「私はその日を境にマユミお嬢様の執事になりました。　といっても執事の知識もなかったため色々と苦労をしましたが・・・・・」

「おお、俺と同じなんだな・・・・・」

「出来が違いますが・・・・」

マリアがボソッと呟く。

「私の勝手なことですが・・・・お嬢様を救い出してもらえないでしょうか」

頭を下げるシュトロハイム。　あのお嬢様思いの執事であるこの執事が頭を下げるとは思いは強いようだ。

「・・・・人の玄関勝手に壊した揚句、うちの執事さらったり、うちのご主人様泣かせておいて良く言うぜ・・・」

「私も最善を尽くしたんです。　ですがもう・・・・」

「勝手なことほざいてんじゃねぇよ」

テルは静かに呟く、先ほどと違う雰囲気を感じたシュトロハイムは頭を上げた。

「マユミの親父が残した願いを簡単に手を尽くしただ、限界だとかであきらめてんじゃねぇぞ。　親父さんの願い、マユミを笑顔にできるのはお前しかいないんじゃねぇのか」

目を細めるテルは背もたれにかかり、そのまま続ける。

「そいつは俺でもハヤテでもできやしねぇ・・・・お前が今そいつの側に居てやんなくてどうする？」

そう言うと、テルは急に立ち上がりシュトロハイムに背を向ける。

「ま、俺には関係ねぇわけだけど？　とりあえず馬鹿ハヤテを連れ戻さなきゃなんねぇからな。お前のお嬢様はお前がなんとかすること」

頭を掻きながら扉を開ける。　樫の扉が閉まるとその場にいたマリアが口を開いた。

「バカはどちらかというとあの子なんですがねぇ・・・・」

「はぁ・・・・」

シュトロハイムは頷く。

「普段からちゃらんぽらんで起きてくる時間なんてお昼だったりす

るんですけど・・・・」

（それは執事としてどうなんだろうか）

と直感的に思ったシュトロハイムだが敢えて口には出さない。

「でも・・・・やる時はやる子だったりするんですよ♪」

マリアがそう思ったのは今までやってきた結果からの期待。　仮にだが、彼は絶望的な頭脳を持ちながら白皇の試験に合格しているのだ。　なぜか携わったあの行動力。　何をしでかすか全くわからないが、一応期待はしてしまうのだ。

（私が今しなければならないこと・・・・）

シュトロハイムは再び思う。　今自分がしなければならないこと時間が関係を解消してくれるの待つのか、ましてや人に頼るなど以ての外。

シュトロハイムもまた立ち上がった。

「ん？　どうしたタマ？」

廊下を歩いていたテルはナギの部屋の前にいた白い生物、タマを見つけた。

「そうかそうか、お前も主人が心配なんだな・・・・」

テルは噛まれないように静かに近づく。　こんなに獰猛な生き物であるが主を想う事ができる優しいペットだとテルは感じていた。

が、その瞬間。

「気安く話かけんじゃねーよ借金野郎」

ふと声が聞こえた。　奴の、タマの口から。

「お前みたいな奴が俺に話し掛けるなんざ百年早ぇーんだよ」

「……」

テルは目をパチパチさせた。　全国何万人が『虎は喋るか？』というテストを出しても全員がＮＯと答える。

だがそこに居る虎は喋っていた。

「待たせたなお嬢。　あの借金執事に泣かされたってな、俺が付いてる―」

「フオオオァア！」

「ぐおっ！？」

テルは気付けばタマに跳び蹴りを放っていた。己の幻想、『虎は喋らない』という森羅万象の掟を守るため。

「ありえないあり得ないアリエナイ。いやいや、アリエナイ」

「いてーな。　お前調子乗ってんじゃねーぞ」

タマは頭部をさすりながら体を起こす。

「そうかオレが喋れるのは初耳か？　だったらお嬢達にはあんま喋んなよ。　俺の支持率低下になるからな」

「無理だ。　今の日本の政治並みの支持率の低さだからどうすることもできん」

更にテルを驚かせたかったのか目の前のタマは二足歩行になった。

「この小説のマスコット的な能力に惹かれちったか？　いずれ俺はｆｉ○ｍａで爆発的な人気を生み出すだろうよ」

タマはどこからともなく薔薇を取り出して口に加えた。　ちなみにｆｉ○ｍａは『よく動く、キレイ』で有名だ。

「いやいや、『よく動く、キモイ』の部類だな」

「俺をどこぞの球団のコアラと一緒にすんじゃねぇ！……っとそれよりもだ」

タマはナギの部屋の取っ手に手をかけて開けようとした。

「悲しみに沈んでいるお嬢を救えるのは俺しかいねーからな」

器用にドアノブを回し、開けて、部屋に入る。

「お嬢……アレ？」

中を見るとナギの姿が見当たらなかった。　どこかに行ってるのかと思っていたテルだが

（まさかあいつ……）

「テル君、どうしたんですか？」

テルが考えているとマリアとシュトロハイムがやって来た。

「マリアさん、ナギが居ないんです！」

「やはりですか……」

「やはり？」

分かっていたかのようなマリアの台詞にテルは反応する。

「先程ＳＰからの連絡でナギか一人で出掛けたと言う報告を受けました」

「いつも思うんですけど、三千院家のＳＰは何やってるんですか？　こうもナギの外出を許すとは……」

「今屋敷のＳＰはケガ人が多いですから、ナギの行動を把握するのは難しいかと……」

「まぁ誰がやったかは分かるけど……」

テルがシュトロハイムを見るとゴホンと咳をしていた。

「取り敢えずテル君はナギを追っかけてください。　多分ナギは日野寺家の屋敷に行ったと思いますから……」

「アイツ無計画にも程がある……」

「ですので、地図を渡しておきますので宜しくお願いしますよ？」
マリアは手の紙切れをテルの手に押し付けるように渡した。
「……分かりました。　後マリアさん、一つ聞いていいですか？」
「何でしょう？」
マリアは神妙な趣で聞くテルの質問を聞いた。
「喋る虎っていると思います？」
「……」
マリアは一度、テルの額に手を当てて少しだけ残念そうな顔をした。
「ナギを追いかける前に病院に行く事をお勧めします」
「いや！　ちょっ！　そんなミジンコを見るような目で見ないで下さい！」
テルが慌てているその横で不敵な笑みをタマは浮かべていた。

「誤解ですから！　決して頭やっちゃったりはしてませんから！」

「じゃあ私は健闘を祈ってますんで……頭の」

「いや、体を気遣うのは分かりますけどピンポイントに頭とか言わないで下さい！」

テルが必死に弁解するがマリアは聞く耳を持たずといった感じで去って行った。

「なんてこった……俺は遂にマリアさんに『頭やっちゃった』のレッテルを貼らされてしまった……」

床に手と膝を着け、沈んでいると目の前にはシュトロハイムが。

「テル殿、何をしているのですか？　沈んでいる場合ではありませんぞ」

「お前までなんの用でい」

スッと立ち上がるとテルはシュトロハイムに聞いた。

「いえいえ、こんな所で時間を食っている暇はないかと。　早くナ

ギお嬢様の所へ行って下さい。　私も後で行きますので……」

先程とは違う雰囲気を感じたテルは首を傾げる。

「俺に任せるんじゃなかったのかい」

「アナタみたいな人に任せていてはこのシュトロハイム一生の恥。
何よりは私はマユミお嬢様の執事ですから」

ニカッと笑うシュトロハイムはまた何か決意したような瞳をしていた。

それを見たテルは頭を掻きながら背を向け、歩き出す。

「随分な言われようだな、やれやれだぜ……」

「時にテル殿、綾崎
ハヤテに勝つ算段はありますか？」

勝手にしろと言わんばかりに、テルは去ろうとした時に不意にシュトロハイムに呼び止められる。

「……ねぇよ」

答えは単純、ＮＯだ。　頑丈さなら張り合えるが殴り合いはアッチの方が上と言っていい。　今回の最大の敵、綾崎　ハヤテをどうするか。

「でしょうな……ですが真っ向なやり方は避けるべきです」

「と言うと？」

テルが聞くとシュトロハイムは人差し指を立てた。

「あのアンテナをどうにかしましょう。　あのアンテナがハヤテ殿を操っているのは分かっているでしょう……」

「やっぱりそうかよ……」

テルは溜め息をつく。

「アレは脳に電波を送り、人間の体を司る部位の脳を操ります。アンテナをどうにかしなければ勝機はないでしょう」

「じゃあそのアンテナをぶっ壊せばいいんだな？」

「違います」

「違うのかよ！」

テルがずっこけるがシュトロハイムは続ける。

「電波を当てられた人間はアンテナが無くなっても頭に残った電波があれば体を操る事は可能なのです」

「ホワッツ？」

訳が分からんという顔をするテル。シュトロハイムは軽く溜め息をつき

「分かりやすく言うと、私がハヤテ殿にやられた後にすぐ立ち上がって動く事ができました。　あの時私は確実に気絶しています。しかし電波があったから動けたのです。　無意識で」

「なるほど」と、漸く分かった顔のテル。

「じゃあどうすればハヤテは意識を取り戻せる？」

「それは……分からないのです」

「お前……殴っていいか？」

テルは額に青筋を浮かべるのを見たシュトロハイムは慌てて咳払い。

「あ、あれはマユミお嬢様が一人で作られた物です。　私がアンテナについて知っている訳がないでしょう！」

「じゃあどうすんだ？　あのアンテナどうにかしなきゃハヤテは元に戻らないんだろ？」

それを聞くとシュトロハイムは自身の髭を摘んだ。

「実はあのアンテナは不完全なのです。　これは私が屋敷にまだ居た時の話ですが……」

「ふむふむ……」

シュトロハイムから語られる言葉をテルは黙って聞いた。　今は少しでも情報が欲しい。　ハヤテを助ける事ができる情報が

全て聞き終えると、テルは屋敷を自転車で飛び出してナギを追いか

けた。

～諦めも肝心だが諦めないことも重要～（後書き）

２５巻、ようやく買いました。　いまここでいうべきではないかと思いますが。　やはり２５巻と同時発売されたアレもかいました。　見てみると畑先生の原点を見た気がします。　損はなかったですよ！

では感想や意見お待ちしています。

～遠く離れていても大切な事はなかなか忘れない～（前書き）

今回、遂にあの瞬間が！　お楽しみ頂ければ嬉しいです。

～遠く離れていても大切な事はなかなか忘れない～

夜の闇が……

街を覆っていく。

全ての闇を……

覆い隠すように……

だから……

「ここはどこだ？」

とても迷子になりやすい。

「あのマユミとかいう奴の所へ行くにはどうすればよいのだ？」

暗い夜道、ナギは一人日野寺家目指して歩いていた。　が、道が分からないため当然迷子に……

「うぅ……さぶっ！」

華奢な体に凍てつく風が当てられる。　まだまだ季節的には冬み

たいなものだった。

「……熱いおでんが食べたい」

この寒さを打ち消す事ができるのは奴しかいないと思ったナギ。
ちょうどお腹も減ってきた。

しかし周りにはおでんの屋台も無ければ財布も無い。

「このままでは凍え死んでしまうのだ！　くそう、ハヤテの奴め！
私以外の女にホイホイついていきおって！」

不機嫌な表情を浮かべながらそこにあった缶を蹴る。

甲高い音を立てながらアルミ缶はコロコロと転がった。

「まったく、ハヤテはまったく！　私を置いて遠くに行きおって！」

さっきから怒ってばっかりの理由はマユミだ。　ハヤテの事を考えると高笑いをしながら自身を見下ろしているマユミの姿が頭にチラつく。

「オ〜ホッホッホ！」

「ガアアアアッ！」

「何一人で叫んでんのお前？」

不意に後ろから声が掛けられた。　気づいて振り向くと自転車に乗り、一人熱いちくわを食べているテルがいた。

「なんだお前か」

「なんだとはなんだ。　お前探すのに苦労したんだぞ」

「ちくわ食いながらか？」

「いんや、こんにゃくとか、はんぺんとか食ってた」

「真面目に探す気あんのかお前……」

ナギは溜め息混じりに呟くと歩き始めた。

「コラ、待て」

ガシッとナギの頭を掴み、動きが止まった。

「離せバカテル」

「バカはお前だ。　場所も聞かずに一人で出るとは……浅はかなり」

「うるさいぞ」

顔をしかめてテルを睨みつける。

「仕方がないではないか……ハヤテはいないし、頼れる執事はいないし」

「俺は頼れる執事の内に入っていないのね……」

テルは頭をガクッと下げた。

「それに不安なのだ……このままハヤテが私のことなど忘れて遠くに行ってしまうことが……」

テルは表情を見た。　暗く沈んだ顔。　空の星眺めて気を紛らわせていたのが分かった。

「実はな……いい情報がある」

「なんだ？」

テルの言葉にナギが視線をもどす。

「実はな……」

「ハヤテ、ハヤテはいるかしら……」

「はい、お嬢様」

ここはマユミの屋敷、部屋にはマユミとハヤテがいた。

辺りには無数の本棚。　机の上にも無数の本。　医療に力を入れる日野寺家、周りは全て医学に関する本ばかりだ。

「ハヤテ、私の名前は分かるかしら」

自身の意の傀儡と化したハヤテを見据える。　ハヤテは口を開いた。

「……ナギお嬢様でございます」

「！！」

ハヤテの至極当然のような答えにマユミは歯軋りした。

「もう下がっていいわよ……」

ハヤテは言われた通りに部屋から出て行った。

「よほど忠誠心が強いのね。　前の主人が忘れられないのかしら……」

一人部屋に残ったマユミは忌々しげに呟く。

「やっぱり忌々しいわ、三千院ナギ……」

（私の名前をしっかりと呼んでくれるのあの人しかいないのかしら……）

そう呟くマユミの手には一枚のコインが握られていた。

「シュトロハイムの話によれば、ハヤテは一度もマユミの名前を呼ばないでお前の名前を呼び続けているらしい……」

「そんな、なんで……」

テルの言葉にナギは驚いていた。

「忘れるわけねぇだろ。　一緒にいた時間は短くてもその間にあるデケェ絆は、例え操られようが断ち切れやしねぇんだよ」

ナギは思い出す。　短い期間でも自分とハヤテが築いていた絆は固いと。ハヤテが信じているなら自分も信じなければならない。　そして何より

（私にメロメロなハヤテが忘れる訳がないからな！！）

「まぁそんな所だな。　と言うわけで早く乗れ」

テルは自身の自転車を指差した。

「お前まで付いて来るつもりか？」

ナギはムスッとしながら言う。

「大事なモン取り返しに行くんだろ？　そのためだったら俺ァ何だってするぜ？　主殿」

何故だろうかその言葉から感じられた物は安心感だけでなく頼もしさを感じる。

「だから俺を信じろや。　変な事は考えんなよ」

「分かった。　信じてやる……だがその前に」
ナギはテルの持っている物を指差した。

「おでんをよこせ！　腹が減っては戦は出来ぬぅ！」

ナギはテルからこんにゃくやらちくわを貰い食べきると、自転車の後ろに乗った。

「さぁ行くぞ！」

「へいへい……捕まってろよ！　ラ〇ディングデ〇エル・アクラレーション！」

自転車のペダルに力を込め、壊れんばかりに漕ぎ出した。

「んでもって、着いた訳だが……」

ナギが見つめる視線の先には巨大な門だ。　黒い檻のような門の前には黒服二人が立っている。

「打開策はあるかテル？」

ガサガサ

「え？　なに？」

ナギが視線を移すとダンボールを被ろうとしているテルがいた。

「馬鹿かお前はァァァ！」

「ぐへっ！」

ナギはテルの頭に拳を振り下ろす。

「なにすんだよ！　この作戦が信じられれねぇのか？」

「目の前に移動するダンボールがあったら誰だって不自然に思うだろうが！　信じられるものにも限界がある！」

「お前、ダンボールの有用性をなめんなよ？　俺はこのダンボールで白皇に侵入できたんだからな！」

「なる程、だから不審者扱いされたのか……」

頭に手を当てて溜め息をついているナギをよそにテルはさらに大きなダンボールを出した。

「今回は俺とお前が入っても大丈夫なよう、スーパーLサイズを持ってきた」

「……どっから？」

目の前に出されたダンボールは確かに二人が余裕で入れる大きさだ。

しかし、この大きさは逆に不自然。

「よし、じゃあ行くぞ」

「は？　マジで言ってんのか！？」

「つべこべ言わず被れ」

テルは半ば強引に自身とナギにダンボールを被せた。

「うわあああ！　暗い！暗い！」

突如ナギが叫びながらテルの執事服を掴んだ。

「お、おい大丈夫かよ……」

「暗いのはダメなのだ！　どうしてもダメなのだ！」

そう答えるナギは本当に怯えているようで暗いから表情は分からないがブルブルと震えていた。

「ああ、悪い」

と直ぐにダンボールを持ち上げる。　案の定、ナギは涙目だった。

「まさか暗いのが苦手とは……意外だな」

「誰が暗いのが苦手だと言った？」

「いや自分で言ってたじゃん」

ここで強がっていても意味がないがナギは涙目で強がってみせる。なにがあったかは聞かないでおこう。

「しかし参ったな……これじゃ中に入れん」

こりゃ参ったと言わんばかりに頭を掻く。　それを見ていたナギは考えていた。

（私が我慢すればいいのか……）

そうしなければハヤテを助け出す事はできない。　そう思ったナギは決心した。

「テル、さっきの作戦で行ってくれ」

「けどお前、暗いのは苦手なんじゃあ……」

「だが私が我慢すればいいのだ。　そうしなければハヤテを助ける事はできない」

「無茶しなくてもいいんだぞ？」

「くどい……私がやると言ったらやるのだ」

ナギの目はつり上がってテルを睨んでいた。　テルは仕方ないといった感じで溜め息をついて了承した。

「んじゃ、いくぞ」

「う、うむ……」

流石に暗闇が苦手すぎた為、ナギは目を瞑りながらテルの手を握ってダンボールの中にいることにした。

ダンボールはテクテクと歩き、徐々に門に近付いていく。

例え怪しがれても

「なんだ？」

「「……」」

ピタリと動きを止めて静かにすれば

「なんだ、ただのダンボールか……」

と奇跡のスルースキルで流せた。

（すごい、上手くいっているようだな）

目を瞑っているため実感はなかったが前に進めている事が分かった。

（早く、ハヤテをたすけねば！）

想いの強さに足が早足になる。　テルはバランスを崩し

「お、お前押すな押すな！」

「うわっ！？」

ダンボールはゴロンと転がった拍子に取れてしまった。

「誰だ！」

門番の男が気付き、テルとナギの姿が完璧にバレてしまった。

「ま、マズいぞ……」

ナギの言った通り、事態は最悪だ。　ここで人を呼ばれればそく捕まってしまう。

「何者だ？　怪しい奴だな……」

男が不審な人物を見るような目でテル達を見る。

テルはスクッと立ち上がった。

「いや～僕達、今日ピザの注文されたんですけど」

（お前それには無理があるだろうがァァァ！）

心の中でのみ、ナギは激しく突っ込んだ。

見た感じ執事服の人間をピザの宅配に見たてれるだろうか。

「いや、嘘をつくなよ。　ピザ持ってないじゃん。　ピザ屋ならピザ出しなよ」

案の定、無理だった。

「仕方ねぇな……ほらよ」

と手のひらにはいつの間にかピザが二枚あった。

（だからどっから出した！）

ナギはまたしても突っ込む。　男達は驚いたがピザを見て眉をひそめる。

「イヤ、明らかに不味そうなんだけど、ピザが紫になるって何？　紅芋でも使ったの？　人殺せるだろコレ？」

「ああ、殺せるぜ？　死ぬほどの極上の味だ」

「イヤイヤ、ないない」

「取り敢えずここを通す訳にはいかんな」

と二人が門に完全に立ちはだかる。

「だったら……」

とテルは思いっきりピザを構え

「とくと味わいやがれェェェ！！」

男の顔にぶちまけた。　その瞬間、ジュウウウという音がしながら男達は卒倒する。

遂には動かなくなった。

「おお、あまりの美味さに気絶したか……」

「いや、どう見ても変だろ！　明らかに泡吹いてるだろ！？」

「それはあまりの美味さに体が悲鳴をあげてんだよ……ほれ、行くぞ」

「いいのかこれで……」

二人は倒れている見張りを後目に屋敷の扉に辿り着いた。

「さ～て、こっからが本番だぞ」

「この中にハヤテが……」

ナギは自身よりも明らかに大きな扉を見つめる。

「いいか、中に入っても勝手な行動をするなよ？　初めて来る所は迷子になりやすいからな」

「お前は引率の先生か！？」

ナギは突っ込みを入れると扉を開けて中へと侵入。

「アリ？」

中で待っていたのは黒服の集団。

「見事にお出迎えされてるぞ……」

ナギは辺りを見渡して状況を確認する。
すると奥にはマユミとハヤテがいた。

「待っていたわよ三千院ナギ。　あなた達の動きは監視カメラで見させてもらったわよ」

マユミは滑稽なものを見るように笑って見せた。

「やはりバレてたか……」

「当然でしょ？」

ナギに対してマユミは笑って返す。

「……油断したぜ」

横では苦い顔しているテルがいた。

「くそっ！　さ…さすが日野寺家だぜ！　よくぞ俺の変装をみやぶったな！」

「マヌケッ！　一目で分かるわよ！　客観的に自分を見れないのかしら？」

「あ〝あ〝ぁ！　なんだコラァ！　チビがいきがってんじゃねーぞゴラァァァ！」

「ふぅ、ホントに執事なのかしら……」

マユミはテルを見ながら溜め息をついた。

「おい、ハヤテを返してもらうぞ！！」

ナギがマユミを指差して見る。

「ええ返してやるわよ。　私に勝ったらね？」

薄く笑うとマユミは男達を下がらせた。

「付いてきなさい。　決着はそこでつけましょう……」

（三千院ナギから敗北を認めさせなければハヤテは私の物にならないわ）

マユミはハヤテと共に部屋の奥へと消えていった。

「ま、待て！」

ナギはそれを追いかけて中へテルもナギに続いて中へ行く。

「なに企んでやがる……」

そこからはひたすら階段を下に降りていった。　周りには沢山のロウソクが灯されており、完全とは言えないが明るかった。

そして最初にナギが階段を下りきって到着。

「ぬわっ！　暗い！」

そこはロウソクやライトも何もなく、先が見えないほど真っ暗だった。

思わずナギは頭を抱えてしゃがみ込んでしまう。

「うわ、なんだコリャ……」
やっと着いたのはテル。　同じようにあまりの暗さに驚いた。
「早くこんか馬鹿者―ッ！」
「ぶふっ！」
ナギは取り敢えず声のするほうに適当に頭突きを決める。　テルの声が聞こえたと言うことは直撃したようだ。
そして体が地に着く。　テルは不思議な感触を手に感じた。
「ん……砂？」
手にあるそれは形は分からないがサラサラしている事が分かった。
そしてテルが辺りを探っている時、突然光に包まれた。
上からは無数の照明が照らしている。　よく見ると辺りは砂に埋もれており、その砂場から何かが逃げ出さないよう木の塀で囲まれている。
「これは昔の党首が趣味で作った闘技場よ」

向かいの方にいるのはマユミとハヤテだ。

「闘技場？」

暗くなくなった事でナギは復活したのか、マユミを睨みつけるように聞く。

「そうよ。　ここでは数多くの格闘家（グラップラー）達が血と汗、涙を流した場所なの」

「オイ、まんまバキじゃん……」

テルが突っ込んだがマユミは無視。

「貴方には私の執事、ハヤテと戦って貰いましょう。　勝てば私の負けでハヤテをあなたに返すわ」

「なんだと？」

ナギに突きつけられたのはテルとハヤテが戦ってテルが勝利すること。

「あら怖じ気付いたのかしら？」

「ムッ！」

と挑発してくるマユミにナギは簡単に乗ってしまった。

「テル、いけ」

「お前、俺を殺す気か？」

「このままでは私がする前から負けを認めた事になる。　安心しろ、私の思い描いた勝利の方程式は出来上がっている」

「俺は既に蹴り飛ばされる方程式なら出来上がってるけど？」

やる前からこう断言してしまうのは無理はない。

相手はシュトロハイムを倒したハヤテだ。　だがナギは気にする素振りも見せず

「お前は実は戦闘民族だろ？　三回ぐらい変身できるから」

ナギは疑うことのない瞳でテルを見つめた。　テルは横に手を振る。

「いやいや、俺地球人だから。　ギャグでもそんな設定ないって」

それを聞き少しナギは黙ると一言。

「お前はなんだ！　なんの為のオリキャラだ！」

「身も蓋もないことをいうな。　オリキャラ補正にたよるんじゃねぇ」

「そろそろ始めたいんだけど……」

二人が言い争いしているとマユミが苛立ちを見せていた。

（ん？あれは……）

テルが一瞬だけ見た物。　何か四角い箱のような物だ。

（アンテナを起動するためのリモコンか？）

テルは考える。　今できる最善の方法を。　やたら賭けに近いがこれにヤマを張ってみるしかない。

（ナギ耳貸せ……）

（な、なんだ？）

ナギは突然耳打ちしてきたテルに戸惑ったがテルは続ける。

（さっきマユミが明らかに怪しいのを持ってた。　四角い箱だ）

（箱？　）

（ああ、多分リモコンかなんかの類だろ？　アレなんとか奪ってこい）

（アレをどうにかすればハヤテは元に戻るのか？）

（確証はないがやってみる価値はある。　正直ハヤテとまともにやり合ったら命がゴキブリ並みにあっても足りねぇ）

（……分かった。　あの四角い箱だな）

一瞬だけナギにも箱が目に入る。　形は把握した。

（任せたぜ……）

テルはそう言うとナギの頭に手をポンと置いてハヤテと向き合った。

「ようやく準備ができたようね……ハヤテ、いきっ！　……行きなさい」

一度噛むとマユミは静かにハヤテに命じた。　それを聞き、ハヤテはテルと向き合った。

二人の執事は対峙する。周りは不気味な程に静まり返っていた。

「ハヤテ、俺達はいつかこうなると思ってたんだ……」

「……」

テルの言葉にもハヤテは全く反応しない。　マユミは目を細め、高らかに言い放った。

「ハヤテ、そのテルという執事を始末しなさい！」

ゆっくりとハヤテが動き出す。　操られた人形のような動きは真っ直ぐとテルの方へ

「さーてかかってこいよ」

（ま、俺は明らかに時間稼ぎだけどな……ナギ、ハヤテ、お前らの絆は簡単に壊させやしねぇ……）

テルもまたゆっくりとハヤテに近づく。　強き意志を持った瞳はマユミに向けられていた。

例え命燃え尽きようとも、その身が砕け散ろうとも、その身を賭けて、善立　テル、推して参る！

～遠く離れていても大切な事はなかなか忘れない～（後書き）

ついに始まるハヤテ奪還戦。　特別編もついに終盤になりました。
次回はギャグなのか！　シリアスなのか！　ご期待下さい。

すべらない話。　～白と黒、アナタはどっち派？～

テル「え～、今回は特別編をお送りする予定でしたが急遽変更させて貰いました」

ナギ「どうやら作者もヤキが回ったらしくこのような体たらくに」

テル「違う違う。　そんな適当な事言うんじゃない、ちゃんと理由があるから」

ナギ「嘘つけ」

テル「ホントだって、決してちょっと行き詰まったから息抜きしたいなんてこれっぽっちも思ってないから」

ナギ「本当はそっちだろ！」

ヒナギク「そうよ、真面目にやりなさい！」

ナギ「うわ、ヒナギク！　どうしてここに？」

ヒナギク「なによ人をオバケみたいに」

テル「まぁお前初登場だからな、このお茶会」

ヒナギク「お茶会のわりにお茶がないけど……」

テル「気分が出てればいいんだよ気分が」

ナギ「やっぱり適当……」

ヒナギク「そう言えばハヤテ君は？」

テル「状況がアレだからここにはいません」

ナギ「そんな事言ったら私達だって……」

テル「まぁ置いといて色々とあるんだよ、ＰＶが７００００超えたとかその感謝とか」

ヒナギク「あら、もうそんな数字に？　凄いじゃない」

ナギ「いやまだまだヒナギク、やはり１０００００行かなければ立派な作品とは言えない」

ヒナギク「でも最初はホント低かったんでしょ評価？　それが数字に現れてるからいいじゃない」

テル「自分納得じゃ意味ねぇんだよ、最終的に読者を泣かせるくらいやんねぇと」

ナギ「それが今の作者にあるかだ、文章力とか」

ヒナギク「そういえばテル君、必殺技は？」

テル「あ？　なんだよそれ」

ヒナギク「質問にあったじゃない。　テルには必殺技があるのか？
　とか」

テル「ああアレね。　ズバリお答えするとありません」

ナギ「ないのか？　そんなんで三千院家の執事が務まるとでも思っているのか？」

テル「だってこの歳で必殺技叫びながら突っ込んでいったら恥ずかしいじゃん。　というか戦う予定があるか未定だし」

ヒナギク「一応主人公が言うべき台詞ではないわね」

テル「だがギャグで使うかもな。　か○はめ波みたいな」

ナギ「いや無理じゃね？というかお前次戦うじゃん」

テル「あれそうだったっけ？　だが読者の思い描いた事には進まないぞ。　作者は読者の裏をかくからな」

ヒナギク「裏をかけれればの話だけど……」

テル「予想外の展開に持っていければいいんだよ。　なんでもかんでも思い描いた通りにいくと思ったら大間違いだ」

ナギ「それよりヒナギクは不満ではないのか？」

ヒナギク「なにがよ……」

ナギ「だって特別編なのに出番がアレしかないって……人気投票一位の人間が不遇扱い」

テル「そうだ、まるで不遇ポ〇モンのブー〇ターのように……」

ナギ「いやそっちの不遇違うから」

ヒナギク「ちょっと、まるで私が出番求めてるみたいじゃない」

ナギ「いやでも欲しいだろ？　出番……」

ヒナギク「……」

テル「暇だろ？　出たいんなら出たいんと言えばいいのに」

ヒナギク「殴るわよテル君」

テル「おー恐い恐い……ま、最後まで見てもらえれば出てくるかもな」

ナギ「まぁその出現率も野生のヒ〇バス並だけどな」

ヒナギク「どうでもいいけど、さっきからポ〇モンに絡みつけるのは何故なのかしら？」

ナギ「多分だが9月中に新しいの出るからだろ？　ところでヒナギク、お前は白と黒、どっちがいい？」

ヒナギク「どっちでもいいわよ……」

テル「ちなみに俺は黒だ」

ナギ「私は白だな。　黒い竜、カッコイイだろ？」

テル「馬鹿やろう、白い竜の方がカッコイイだろうが！」

ヒナギク「ほんとに心底どうでもいいから話を戻して！」

テル「という訳で全国のポ〇モン好きの偉大なるお前ら」

ナギ「予約した色を感想に添えてくれ。　あと理由も」

ヒナギク「全然話が戻ってないじゃない！　スイマセン！　別に無理して感想に添えて貰わなくてもいいので！」

テル「固いこと言わさんな会長。　せっかくこういう場所を設けたんだから」

ヒナギク「その前にここって何をするところなの？」

テル「最初は今後の展開や意見を考えていたが次第にぐだぐだに……だがそれを払拭するために数々の質問に返事をする事も開始した」

ヒナギク「質問？」

テル「まぁこんな小説でも読んで質問や意見を書いてくれる人もいるわけだ。　その心優しい読者に返信するときにその場で質問に答えるのも芸がないと思ってこういう話の中で答えるわけにしたわけよ」

ヒナギク「私の率直な感想だと、さっきからぐだぐだ感が否めないんだけど……」

テル「初めての事に上手く出来ないのが作者の特徴だ。　許してやってくれ」

ナギ「そんなこんなで時間が近づいて来たぞ」

テル「そうかそうか、んじゃ……」

伊澄「あのぅ～」

テル「おわっ！　伊澄、居たのか」

伊澄「はい……気付いたらこんな所に……」

テル「迷子か……」

ナギ「流石だな……」

伊澄「それよりもテル様、先ほどポ〇モン話が聞こえたのですが……」

テル「おうよ、お前も予約したのか？」

伊澄「はい……カセットタイプで後ろに青いカメさんが載っているのですが……」

テル「伊澄、それ初代ブルー版……」

ヒナギク「それじゃあまた次回！」

ナギ「最後だけ締めたぞ……」

テル「ちゃっかりしてやがる……」

ヒナギク「う、うるさいわよ！」

すべらない話。　～白と黒、アナタはどっち派？～（後書き）

スイマセン。　これからの質問や意見はこんな感じで返していきたいと思います。他にもあったら是非、感想を書いて下さい。

ポケモンの話になってしまいました。　予約しましたよ。　ブラックです。　テルとナギが言っていましたが、ヒナギクのように無理して感想に載せなくてもいいです。　でもそういうのが共感できると、楽しいです。

ちなみに私が選んだ理由は白い竜がカッコイイから、それだけです。

では次回！

～何があっても男には折れてはいけない時がある～（前書き）

ずっとハヤテのターン！

テル「……え？」

～何があっても男には折れてはいけない時がある～

特にプランは決まっていない。　どうやって殴るとか、どうやって近づくとか、どういったタイミングとか、気にし過ぎるだけで損だ。

「どりゃあ！」

最初に繰り出したのは右ストレート。　ハヤテの顔面目掛けて一直線、ここで決まれば楽なのだが

「やっぱり……簡単にはいかなんだわ」

無計画に考えたストレートは空を切った。　ハヤテは寸前でかわし、ゆらりとした勢いで距離を詰める。

ドゴッ！　と、今度はハヤテがお返しと言わんばかりのストレート。見事にテルの顔面を捉えた。

「あ～痛い痛い……ッ！？」

顔を押さえながら数歩後ずさるが痛がっている場合ではない。　矢継ぎ早にハヤテが接近、今度はジャブの嵐。

「お前、絶対ボクシング始めろよ」

「……」

無表情なハヤテは特に気にする事もなく、ジャブ連打。　テルは両腕でガードを固めるがジャブにしてかなりの威力。こじ開けられそうだ。

「何時までも調子こいてんじゃねぇ！」

何度も守りに回っていて苛立ちが募ったのか、テルは数発喰らう覚悟で渾身の前蹴りを浴びせた。

しかしそれは簡単にハヤテに捕まれ動きを封じられる。

「参っちまうな、ソレ結構マジだったんだぜ？」

その瞬間、テルの背筋を凍らせる程の殺気が感じられた。

「……」

ハヤテは無表情でテルの足を掴んだまま、右足を一歩引いていた。

一目瞭然、何をやろうとしているのかが分かる。

だからこそ、確信はなくとも悟ったのだ。

（来る！！　牽制『フェイント』を仕掛けるでもなく、かつ強力な、シュトロハイムを倒したあの蹴りが！！）

額に一筋の汗が流れた時、ハヤテが左足を軸に回転を活かしたミドルキックを繰り出した。

（南無三ッ！！）

ドゴンッ！　と言った轟音。　これが指すは直撃。　テルは中央から一気に闘技場の木の壁に叩きつけられた。

「バカな……」

ナギは青ざめている。　実際のハヤテの蹴りの威力を見て。

――日常茶飯事、人を蹴る事をしている空手家。そんな彼らの「人」が蹴られた時に吹き飛ばされる距離を想像を遥かに超えるだろう。

「あの距離は車に跳ねられた時の距離だぞ？」

闘技場の中央から木の壁まで少なくとも数十メートルはある。　人間が飛ぶ距離にしては危険過ぎる。

「……あーマジ痛ぇなアイツ、手加減無しかよ」

まるで車に跳ねられたかのような衝撃、激痛。

だが、飛ばされた距離に驚いている余裕があるという事はまだ自分が動ける事を確信づける。

そしてなにより、

―あらゆる一撃に耐える体に生んでくれた母……

―あらゆる一撃に耐え、決して折れない心を育んでくれた両親に……

（感謝しなきゃならねぇな……）

顔を覚えてなくても、その魂は確実に自分の中に流れている。　その2人に深く感謝していたテルだった。

（この戦いは悪魔でハヤテを奪還すること。　勝つ必要はない、時間を稼げればいいんだ……頼んだぜ、ナギ！）

テルは身を起こし、ハヤテを見据える。
不敵な笑みを浮かべながらテルは自身の小さな主の顔を浮かべた。

（テルは時間を稼ぐと言ったんだ。　その間にあのリモコンを……）

テルがフルボッコの時間稼ぎをしている間にナギはマユミの所へ向かった。

できるだけ二人のとばっちりを食らわないために避けながら近付く。

（できるだけ不審に思われないように近付かねば……）

マユミは既に目の前にいる。　ハヤテとテルに気を取られているのかナギは気付かれなかった。

（あの箱だな……）

マユミはリモコンらしき物をすぐ近くの場所に置いていた。

（これでハヤテを……）

ひっそりと伸ばした手は箱に届いた。　が次の瞬間。

「何をしているのかしら？」

ガシッと箱にもう一つの手。　マユミの手だった。

「くそう！　離せ！　それは私のだ！」

「何言ってるの！？　私が作ったんだから私の物よ！」

ナギとマユミは箱を巡って引っ張り合う。

「渡せェェェエ！」

「離さなぁぁぁい！」

実力はどっこいどっこい、勝負は動かないように思えたが

「ふんッ！」

「ヌアアアアッ！」

ナギの手から箱がすり抜けていく。　マユミがナギの足を踏んだのだ。

「卑怯だぞ！」

「リモコンを狙って不意打ち仕掛けた人に言われたくないわ」

足を押さえるナギをマユミは睨みつける。

あの箱はリモコンで確かなようだ。

（こいつ自分で言ったからな……）

疑問が確信へと変わった。　後はテルが時間を稼いで貰えれば奪う事ができるが

「そんなに早くケリをつけたいのかしら……」

マユミがニヤリと笑い、箱に付いていたダイヤルらしき物を左から右へ一気に回した。

「地獄を見せてあげる、アナタとあの執事に……」

その視線はテルへと向けられていた。

「なんだ？」

テルは目の前のハヤテの異変に立ち止まった。

ハヤテがピタリと止まり、動かなくってしまったのだ。

「ナギが上手くやりやがったか？」

テルはナギを探すために木の塀を見渡す。

しかし、その時だった。

変な殺気を感じ、ハヤテに視線を戻すとそこにハヤテは居なかった。

ドゴッ！　という音がテルの体から聞こえた。

「ぐっ……なんだ？」

気付けば体は宙に浮いていた。　何も分からず激痛に襲われる。

続けざまに右、左、上、下からそれが全方位から襲ってくる。

「ハヤテの動きが……」

全く持って見えない。　テルに強烈な黒い突風が吹き荒れる。

突風の度にテルを激痛が襲う。

テルは地面の砂に叩きつけられた。

「がはっ……」

腹部、頭部、足部から軋む音。　見上げるとハヤテが立っていた。

「な、なんなのだ？」

ナギは驚きを隠せない。ハヤテの動きがマユミがダイヤルを動かしてから急激に変わった。

「ハヤテに送っている電波を最大に強めたわ。　これでハヤテは更に容赦なく、相手を倒すマシーンになる……」

マユミが笑いながら地面に伏しているテルを見つめる。

「それでこそ徹底的にね……」

マユミは冷酷な表情でナギを見る。　ナギはゾッとした。

「何をする気だ。　テルに……」

「だから、徹底的に痛めつけるって言ったじゃない……ほら」
マユミが指を差す方にナギも視線を向ける。
「ハヤテ……」
ナギは言葉を失った。　ハヤテは地面に倒れているテルに対して蹴りをいれようとしている。
高々と振り上げられた後ろ足はまるでサッカーボールを蹴るような体制。
「クソッタレ、マジかよ……」
咄嗟に両手を交差して衝撃に備える。　ハヤテはそのままテルの顔面にサッカーボール蹴りをお見舞いした。
体がブワッと浮き上がり、激痛と共に浮遊感が気持ち悪く感じた。倒れているのを無理やり起こされた感じがしたからだ。
テルは浮き上がった状態から砂場に着地する。
（ちくしょうめ……やっぱり変身能力とか欲しかったな）
びりびりと痺れる両手はまともに上げる事も難しかった。
（無い物ねだりしても仕方ねぇんだ。　お前は何が何でも止めてやる！）

テルはハヤテに反撃を繰り出す。　愚直だが右拳は真っ直ぐハヤテに向かった。

（届け……）

バキンッ！　と心の中で願うテルに何か音が聞こえた。

いつもと違う鈍い音。

それはテルの右腕からだった。

「う……」

ナギは思わず目を閉じる。　テルの腕はハヤテの肘と膝で力強く挟まれていた。

二の腕を確実に挟む、技名「蹴り脚ハサミ殺し」がテルに炸裂した。

「……痛ェ」

だらんとした右腕は力を込めようとしても、今までにない激痛により動かす事は出来ない。

「……」

意識朦朧とするテルにハヤテは無情にも追撃を仕掛ける。　右回し蹴りが頭に決まり、よろついた所を更にテルの腹部にミドルキック。

「お前、絶対俺に恨みあるだろ……」
まだ倒れないが事態は酷い。　変な汗が体から溢れ、頭部からは出血。

「あらあら可哀想に、馬鹿な主人のせいであんな酷い目に遭って……」

「わ、私のせいだと？」
「そうよ、アナタが私を怒らせたの。　ちゃんとルールに従わなかったアナタが悪いの」

マユミの一言が重い。　心にのしかかる。
「やめてくれ……」

「死ぬんじゃないかしら、あの執事……」

「う……」

すぐに否定したいがハヤテと対峙しているテルを見て言葉を詰まらせた。

体はボロボロの砂まみれ、何度も地面を転がった証拠。
だらんとした右腕、頭部からの出血、何度も打撃を受けた証拠だ。

「もういい……」

蚊の鳴く声で小さく呟く、とても見てられない。

（どうしてそこまで私の為に傷付く……何度も立ち上がるのは何故なのだ？）

「あの執事を助けたいかしら？」

「……」

笑みを浮かべるマユミは続けて言い放つ。

「負けを認めるの。　地べたに這い蹲り、頭を下げ、『わたくしの負けです』と言えばあの執事を助けてやってもいいわよ？」

マユミは笑みを浮かべながら地面を指差す。

「お前……！」

「別にいいのよ無理して言わなくても？　ただ人が一人骸となるだけだから」

マユミがそう言う隣でまたしてもテルがハヤテの蹴りで吹き飛ばされた。

テルは立ち上がるが息づかいは今までより荒い。

「止めてくれテル……このままじゃお前、死んでしまうぞ」

またしてもテルは宙を舞う。　見てられず思わず瞳を逸らした。

「いいのかしら？　死んじゃうわよ？　」

「くっ……ッ！！」

思わず拳を握りしめた。　ナギもまたプライドが高い、簡単に負けを認めない。

マユミはナギのプライドの高さに漬け込み、痛めつけられるテルを見て悩むナギを見て楽しんでいるのだ。

「……分かった」

「あら？　簡単に折れたわね」

「私が負けを認めればいいんだな……」

歯を食いしばり、膝をつく。　本来ならば彼女のプライドがそれを許さない。

しかし、目の前の天秤に掛けられているのはいつも腹が立ち、一日一回は喧嘩する男。

取り返しがつかない事態は起こしたくない。　それが『二度と戻らない物』なら尚更だ。

ナギはその苦しみと悲しみを知っている。

「わ、わたくしの……」
呟くナギを見下ろすマユミは勝ち誇った顔。
「ま――」
言いかけた時だった。
「ゴラァァァ！！　ナギィィィイ！！」
怒鳴り声が響いた。　ナギは声の主を見つめる。　テルだ。
「オメェェェ！　何勝手に諦めてんだァァァ！」
続く怒鳴り声はナギの降伏宣言を中止させた。
（どうして立ち上がる……ボロボロになってもなんで……痛いだろ？　諦めるなら早く諦めろ！　私の為にそこまでするか赤の他人が？）
ナギは心の底から願う。　早く倒れろと。そこまでする必要はないと。
それは言葉になって表れた。
「テル！　もういい諦めろ！　痛いんだろ？　死んでしまうぞ！」
「この腑抜けェェェ！　俺が死ぬか馬鹿野郎ォォォ！　ハヤテを取り返すんじゃなかったのかァァァ！」

ナギは顔を俯かせる。　確かにそうだ。だが誰かが死んでしまう悲しみは二度と味わいたくない。

「お前は赤の他人だろ！？　なんでそこまでする？　私の執事だからか？　それなら今日でクビにしてやるから逃げろ！」

ナギはついにクビ宣言まで使う。　こうでもしなくてはテルは諦めてくれない。

だが

「ふざけんなよ……」

「……」

「俺がお前の為にやるのは、俺がお前の執事だからだけじゃねぇ。ここで俺が折れたら俺の何かが終わっちまうんだよ……」

ナギは顔をしかめた。

「俺はここで折れちまったら終わりなんだよ。　約束果たせない以上に、手からこぼしたら二度と戻らねえような物ができちまったら、命が助かったとしても俺は死ぬんだよ、死んでんのと同じなんだよ……だからな」

テルは歯を食いしばり言い放った。

「俺はテメェ（自分）貫くためにやってんだよ！　お前も最後まで潰れんなよ！」

力強い言葉にナギは流れる涙を拭った。

「バカテル！　早くリモコン奪ってやるからな！」

途端に笑顔に戻り、マユミと向き合った。

「さぁ……よこせ！」

「なっ！？」

マユミは不気味な笑みを浮かべながら近付いてくるナギに後ずさる。

「よこせ！」

「ひっ！」

何故かナギの両手が怪しい動きをしている。　それを見たマユミは恐怖を感じた。

「マユミお嬢様……」

「あ……」

ふと聞こえたのは懐かしい声。その声にマユミは振り返る。

「お前は！！」

マユミはその人物を見て小さく呟く。
シュトロハイムだった。

「シュトロハイム……」

「はい……」
マユミの呟きにシュトロハイムは頷いた。

「何をしに来たの？　アナタと私はもう関係ないのよ？」

マユミの言葉にシュトロハイムは目を細めた。

「お嬢様、もう止めましょう。　こんな事をして、何が手に入るというのですか？」
「あら、いっちょ前に説教？　執事を辞めて口だしできる立場になったのかしら？」シュトロハイムの言葉をマユミは薄く笑って返した。

「簡単に約束を破る人間、人を平気で殺せる人間が私に意見を言わないで？」

「お前！　コイツの事情を知らないで……」

会話に割って来たのはナギだ。

「コイツはお前のために……」

「ええそうよ。　その場所が場所で私しか救えなかったのも知って

いるわ」

「お気づきになられていましたか……」

シュトロハイムは静かに言う。

「当たり前よ。　だからと言ってアナタのお父様とお母様を殺した罪は消えはしないわ……」

シュトロハイムは顔をしかめる。

「お前、我が儘すぎるぞ……」

「なによ……」

間に入って来たのはナギだ。

「お前が何度コイツに痛い目逢わせようと憎み続けた所で死んだ親は戻ってこないんだぞ」

「あ、アナタに……」

マユミは今までより怒りこもった眼をナギに向けたて怒鳴った。

「アナタに何が分かるのよ！　目の前で両親が死んでいくのを黙って見て、一緒に居ることができなくった悲しみが！　子供だから信用できないとかで周りからは一切認めて貰えない、次第に自分も周りが信じられなくなっていくこの苦しみが！」

「わかるさ……」

「……え？」

ナギの返しにマユミはキョトンとする。

「私も幼い頃に親が死んでな。　顔も母のしか覚えておらん……」

ナギは思い出すのは辛そうだが続ける。

「周りも私の遺産目当てだから私も人が信用出来なかった……周りが敵だったよ」

幼いながら命を狙われる日常はナギの心を狭くするものだった。

「だが今は、沢山の奴らがいる。　ハヤテがいて、マリアがいて、馬鹿だけど心配してくるテルがいる……私は色んな奴に支えられてると思ったよ」

「だから忌々しいのよアナタは……ッ！！私にはそんな人は一人もいない……一人も！！」

そう吐き捨てるマユミにナギは一言。

「いるだろ……すぐ近くに」

マユミは何故か、思わずだが振り返る。　そこにはシュトロハイムがいた。

ずっと憎み続けていた男。

けど私の為に涙を流しながら両親との約束を守るために私だけを助

けたのも知っている。

けど、私はそれを許してはいけないんだ。

「シュトロハイム、何をしに来たのかもう一度聞かせて」

その言葉にシュトロハイムはゆっくりと頷いた。

「お嬢様を救いに参りました……」

「もう執事ではないのに？」

そうだ。許してはいけない、そうしなければお父様とお母様の無念がさまよったまま……

「お嬢様に辞めさせられても、私の心はこの身が滅びようとも執事ッ！！」

その強い決意は変えられないのね。　そう私も変えられないの。
もう戻れないと分かってるから、そこまでの仕打ちをした私に

戻る場所なんて在るわけがないから……

「なら、止めてみなさい！」

「なっ！」

ナギは驚く。　マユミは振りかざしていたのはリモコン。

ナギが止めに入るがむなしくもリモコンは地面に叩きつけられ粉々になった。

「正常に解除しなかったからハヤテはあの状態のまま永遠に動き続けるわよ」

「なんだと！」

ナギはマユミに近づき、肩を掴む。マユミは静かに続けた。

「……解除法はあの状態でハヤテを気絶させる事」

「え？　お前、なんで……」

自ら方法を明かすマユミにナギは驚きを隠せなかった。

「知らない……」

そう呟いたマユミだった。

取り敢えずナギはテルに報告する。

「殴りゃあいいのか？」

「まぁそうだが……」

「簡単だ。　それは卵を片手で割るくらい簡単だ」

「いやソレ難しいだろ」
テルは首を鳴らし、左腕をブンブン振り回す。
「テル殿……」
上から何かが降って来たのかと思うと、シュトロハイムだった。
「私も手伝わせてください」
「……構わねえけど、アイツかなりヤバいよ？」
テルが意味ありげに言うがシュトロハイムはニカッと笑って返す。
「二人ならどうですか？　ウインナーを一から作るくらい簡単だと思いますが……」
「肉を詰める所で俺は挫折する」
溜め息をつくと頭を左手で掻いた。　そしてニヤリと表情を変える。
「やるぜシュトロハイム。　最後だからな？」
「当然です。　お嬢様の為にも私は負けませんが」
「いや俺も負けないけど」
「いや私も負けません」
「「……」」

お互いはにらみ合うと視線をハヤテに映して対峙。

ハヤテ奪還戦、その最後の幕が上がる。

～何があっても男には折れてはいけない時がある～（後書き）

前回の感想にポケモンの事も添えて下さった方々、ありがとう御座いました。

無理言って申し訳ありません。　しかし、今月の１８日から廃人になるかもしれません。　そうなったらこの小説が……そんな訳なく、普通にやっていきたいと思います。

次回、奪還戦の方は次でクライマックス。　特別編はあと２話ぐらいかもしれません。

感想や意見、いつでもお待ちしています。

〜一度忘れるとなかなか思い出せないのはきっと誰にもある〜

「いいか？　俺が引き付けてる間になんとかしてハヤテを殴るなりなんなりとして気絶させろ」

「分かりました。　足止め、頼みますよ」

テルとシュトロハイムはハヤテと対峙していた。　作戦の確認である。

シュトロハイムの場合、破壊力抜群のパンチがあるのだがテイクバックが大きすぎるため避けられてしまう。

要するに溜めが長いという事だ。　だがそれでも十分動作は速い、相手のハヤテが速すぎるのだ。

「俺右腕使えないからな、やれる範囲は限られてるからな」

「ご安心を……私はアナタと違い有能ですので」

「何気にヒデぇ事言うねぇ……」

折れた右腕を手で押さえながらテルは吐き捨てるように言った。

自身の力の無さが痛いほど実感させられる。

それはある意味、歯がゆさである。

「さぁ、ハヤテ殿……終わりにしましょ―」

両手を広げ、高らかに言いかけた時だった。
その時、黒い突風が吹いたのである。
ドコンッ！
「ん？」
風が通っていったかと思うと後ろから轟音。
振り返るとシュトロハイムが壁にめり込んでいた。
「オイィィィ！　お前偉そうな事言ってる割には一撃じゃねぇかァァァ！！」
「……」
壁にめり込んだシュトロハイムは物を言わぬ木偶とかしていた。
白目をむいて完全に動かない。
「お前出オチって言葉がお似合いのキャラだわ……」
頭に手を当てて嘆いたテルだが、ハヤテが目の前に現れる。
嫌な汗が流れ出した。
「や、止めないかいハヤテく～ん？　これ以上君の残虐さが表れると全国の男性ファンと女性ファンから嫌われちゃうよ～」

左手でストップを呼び掛けるも、ハヤテは止まる事知らず。　またしても一瞬パッと消えると突然現れ、体にキックが当たった。

「ぐおぉぁ……」

今度蹴られた所は水月。　大体胴体の中心に足のつま先が突き刺さるようにめり込んでいた。

因みに水月、当てられるとマジで痛い。

「……」

ハヤテは無表情で蹴り足を引き離すとまた消えて今度は後方から

「がはっ……」

振り返る時には既にハヤテは見えず、見渡している内に真横から

「ぐ……」

止まらない猛打の嵐。　そう、どんなに一撃が強力でも当たらなければ意味がない。

どんな敵が相手でも疾風の前では無力同然。

「ハァ……ハァ…」

（マジで損な役だな……）

地面に叩きつけられた体を左手を使い、立ち上がろうとする。

今まで一番荒い息遣い。　危険信号赤灯火。　急に車は止まれない。

「……」

ハヤテはまだ動くかとするテルの頭に足を乗っけた。　その上から押し潰さんばかりの力が加えられる。

（マジ……一発殴りてェ……）

屈辱、それ以外の何者でもない。　怒りが体を支配し始めるが、不意にナギの姿が目に映った。

―何かを待っているような瞳。

―今は自分を信じて、必ず勝つと信じている瞳。

ならば主の為に執事ができる事はただ一つ。

諦められっかよ……

「……！！」

ハヤテは自身の右足に圧力を感じる。　目を向けるとテルが左手で掴んでいた。

ハヤテは左手を振り払うと後ろに飛び乗った。

その間にテルは体制を立て直し、立ち上がる。
ふらつきながら立ち上がる体はボロボロだ。出血も酷い、多分次また食らえば落ちる。
ならば賭けるしかない……
（こうなったら玉砕覚悟で……）
そう心で呟いた瞬間だった。
―違っがぁぁぁぁうッッッ！！
「うん？」
突然の声が聞こえた。　聞いた事がある声……
あの時だ。　伊澄を助けに行こうとした時に聞こえた声。
何故だかは分からないが、テルの頭がぼーっとしてきたのを感じた。
その時は時間をも忘れ、
辺りが真っ白になる。

「違っがぁぁぁぁうッッッ！！」

怒鳴り声が聞こえた。　懐かしい声が

目に映るは高い天井。　辺りはだだっ広く、茶色の板が床の上に自分は仰向けになっていた。

「何度言えばわかんのよ？　お前不器用すぎ！　体だけ強くても意味ないんだから！」

自身に向けて罵声を浴びせるのは一人の女性。　顔は分からない。

「理に叶った動きをしなさい？　そうすれば色々な事に対応できるわよ？」

そう言うと女性は近づいて倒れている自分を起こすと自分の頭に手をのせた。

「お前は一度覚えたらなかなか忘れない子だから、記憶が飛んでも忘れはしないかもね」

ポンポンと叩くと女性は続けた。

「それでも忘れたら私か誰かにぶん殴ってもらいなさい？　ショック療法で解決よ」

自分はその時やたらと不平不満を叫んでいた気がする。　主にその女性に対して……

女性は手をまたのせた。
「それが出来ればお前の約束が守れるような力になるかもしれないね」
その時、女性の顔をまた見た。　相変わらず顔は見えないが
「でも無茶はしちゃいけませーん」
笑っているような感じがした。
その手は優しく優しく、頭の上に乗っていたのを覚えている。

「また……」
視界が元に戻る。　ハヤテを見据えるとテルは構えた。
「訳わかんねーこと言いやがって……」
この記憶はなんなのだろうか、聞こえたら理解し難い事ばかりが耳に聞こえてくる。
だがその声を聞く度に背中を押されるような感覚になるのは何故だろう
「理に叶った動き……」

目の前に集中だ。　全身から力を抜き、目を細める。　唾を飲み込むのは痛みを一時しまい込むため

もう眠くなんじゃね？　というくらい力を抜いた。

その時、ハヤテが消えたのが分かる。

（あれ？）

ザシュ！　ザシュ！とハヤテが駆けて突っ込んでくる。　まるで短距離選手のような走り方で

（コッチに来てんのか？）

真っ直ぐ見据えるラインは確実に真っ正面だったがハヤテはギュッと進路変更。

目が自然とハヤテを捉える。

ハヤテは少し速さにアクセントをつけると片足になった。

蹴るのか？　蹴りだな？

目を見開いた瞬間、自然と体は避けていた。

蹴り脚は空を切り、目標の意外な動きに一瞬だけ驚愕する。

「……！！」

ハヤテが気付いた時、テルは既に懐に潜り込んでいた。

「殴り殴ってくれたな……」
額に青筋を浮かべながら左腕を構える。
ハヤテは避けようとするが右足が完全に伸びきってしまっているため戻すには一瞬の時間を要した。
一瞬の時間が完全な隙。
「喰らいやがれ……」
左腕に力を込めると怒り気味に呟く。
「ア〇ソリュート・パ〇ーフォォォォオス！！」
テルの拳はハヤテの顎にアッパーカート気味に打ち上げられた。
ハヤテの体が少しだけ浮かぶが、まだ終わりではない。
一撃で終わらせるにはまだ一撃は軽すぎた。　ハヤテは空中で右足を大きく振り上げ、踵落としを仕掛けようとする。
「……」
ハヤテは見た。　テルの口元がニヤリと笑っているのを
決して追い詰められた人間がする顔ではない。
「なら、本当に重い一撃ならどうだい？」

ハヤテは瞬時に前方に視線を向ける。　殺気を感じた。
その殺気の元はシュトロハイムである。
既にテイクバックが完了している。　溜めは終わっているのだ。
後は撃ち出すのみ。
「……！！」
ハヤテは避けようにも空中では身動きが出来ない。　タイミング的にも遅すぎた。
簡単な理屈だ。
体重×握力×スピード、イコール……
「ヌアアアア！」
破壊力ッ！！
ドゴッ！と顔に拳がめり込んだ。
直撃。　ハヤテの体はまるで垂直に置いて発射されたロケット花火のように飛ばされていった。
壁は轟音を立てて破壊され、塀はぽっこり穴が開いていた。
ハヤテは動かない。

「テメぇ最初っから狙ってやがったな？」
「おやおや、バレていましたか？」
「変な芝居打ちやがって、俺が動き止めてなかったらどうするつもりだったんだよ……」
テルが頭を掻きながら言うとシュトロハイムはニカッと　笑って返した。
「私はアナタならやれると信じていましたので……」
「お前に言われてもな……」
遠くではナギが喜びながらハヤテの方に駆け寄っていくのが見えた。

「終わった……」
マユミは一人、状況を理解すると闘技場から上へと繋がる階段に足をかける。
（さよなら……で、いいのかしら）
一瞬だけシュトロハイムを見るとマユミは笑みを浮かべて今度こそ階段を上って行った。
「あれ？　僕は一体……」

ここでハヤテが漸く目を覚ました。

「ハヤテ！」

「うわっと……お嬢様？」

ナギはハヤテに泣きながら抱きついた。　ハヤテは訳が分からず唸る。

「そうだお嬢様、シュトロハイムさんに僕は何をされたんですか？」

テルはん？と耳を疑う。　どうやらアンテナを付けられてから何も覚えてないらしい。

「という事は散々俺を殴った事も？」

「あれ？　どうしたんですかテルさん？　凄い傷だらけですよ？」

「腕を折ってさらに足蹴にしたことも？」

ゆらゆらと近付くテルにハヤテは普通に笑いながら返す。

「いやぁ、なんだか僕、体が痛いんですよね～特に顔が……」

「一発じゃ足らんわァァァ！」

「グホッ！」

テルはそのままハヤテの上にまたがりマウントポジションを取る。
「おんどれぇぇぇ！　千発ぐらい殴らせろやァァァ！」
「バカテル止めろ！」
ナギがテルを必死に止めに入っているがテルは叫び続ける。
「マユミお嬢様？」
一方シュトロハイムはマユミを探していた。
だが辺りにはマユミの姿は見当たらない。
シュトロハイムはなにか嫌な予感がした。
なにかマズい、とんでもないことが起きようとしている。
執事としての勘がそう告げていて、シュトロハイムは不安感を胸に
闘技場から走り去った。
「ん？」
テルがその異変に気付いて振り返ると走っているシュトロハイムが
目に入った。
「何やってんだアイツ……」
「とう！！」

「ぐはっ！？」

よそ見をしているテルにナギのドロップキックが炸裂した。

テルは地面を転がってナギと喧嘩再開。

しかしテルも嫌な予感を感じていた。

～一度忘れるとなかなか思い出せないのはきっと誰にもある～（後書き）

もうなんか外道ハヤテですね……

今回は久しぶりに記憶の復活。　あの女性がテルにとって大きな関係を持っていたりしますのです。

意外と重要なポジションだったり……

次回、特別編クライマックス！！

～やっぱりいつも通りが一番だわ～（前書き）

さてと、ようやく特別編クライマックス。　マユミは何処へ・・・・・

～やっぱりいつも通りが一番だわ～

「お嬢様ぁぁぁぁ！！　何処ですかぁぁぁぁ！？」

階段を駆け上がり、屋敷中をシュトロハイムは探し回っていた。

「私もここで何年も執事をやっているが相変わらず広い・・・・」

愚痴をこぼしつつもその表情からは焦りが感じられた。　今のマユミは何をするか分かったものではない。　今思えばリモコンを壊した辺りからすぐ気づくべきではなかったか。

（この嫌な予感に気付けないとは・・・・・ん？」

悔やんでいるとシュトロハイムは立ち止まった。　辺りに漂う異臭、いや、どこかで嗅いだ事がある臭いだ。

煙の臭い・・・・・

「ま、まさか・・・・」

シュトロハイムはぞっとする。　顔からは血の気がうせた。　今起ころうとしている事態に対して・・・・

（間に合ってください！！）

その思いを胸にシュトロハイムは二階へと続く階段を駆け上がっていった。

二階、マユミの書斎。　その部屋にはたくさんの医学に関する本と資料が保管されている。　全てはマユミの父、祐一が集めたものだ。

その医学の空間が今、赤い炎を纏い、黒煙で満たされつつある。バチバチと炎は床、カーテン、天井へと伝ってその脅威を拡大させていた。

その中にぽつんと一人立つ少女が居た。　マユミである。

「お父様も、よくここまで集めたものね・・・」

若干、呆れたかのように笑うと煙を少し吸ってしまったのか咳き込んでしまう。

（全ては私がやってしまったこと・・・色んな人たちに迷惑がかかってしまったわ）

マユミは揺らめく炎を見つめ、自身の過ちを思い出す。　多くの無関係な人たちを自身の実験台として発明を作ったこと。　他人の大切なものを奪ったこと。　自身が恨んでいた少女が自分と同じ苦しみと悲しみを抱えていたこと。

（これが私のケジメ・・・お父様、お母様、今すぐそっちに・・・）

瞳を閉じ、激しくうねる炎の中へ身を任せようとしたときだった。

「お嬢様！！」

聞きなれた声に、マユミは一瞬動きを止め、振り返る。　そこにはシュトロハイムが息を切らしているのが目に見えた。

「あら、シュトロハイム早いのね・・・・」

「いや、これでも随分かかりましたとも・・・・それよりも早まったことはしないで下さい！！」

「だから説教しないでよ！　私は取り返しのつかないことしたの！　命をもって償うのが当然でしょ！？」

「謝りましょう！　まだ間に合うはずです！！」

「間に合わない！！　どうしてあなたはいつも私にお節介焼くのよ！？」

「お嬢様の執事なのだから当たり前でしょう！」

その言葉にマユミは歯軋りをした。

「どこまで貴方は馬鹿なの・・・・」

「・・・・・・」

そう言うマユミの表情を見たときシュトロハイムは言葉を詰まらせた。　泣いている、マユミが泣いていた。

「私なんかに構わないで自由に生きればよかったじゃない・・・・

最初はたくさん憎んでたけど段々貴方のしたことが正しく思えてきた・・・・でもそうするとお父様とお母様が浮かばれない・・・・だから今までひどく当たって追い出すようにしたじゃない！！」

これまで何度も執事のことを辞めるようなことを言われてきたシュトロハイムはその真実を知った。　全ては自分のためであったこと、マユミは自分の父と母の十字架を背負って背負って何もかも自分で抱え込んでいたのだ。

「私なんかのために貴方の人生が縛られるようなことはないのよ・・・・」

「違いますぞお嬢様！」

「え？」

シュトロハイムは考える。　お互い、蓄えてきたものがあった。ならば自分も明かすしかないであろう。　ここまできてやっと聞くことができたマユミの本音。

「私はユウイチの意志を受け止め、貴方の執事になることを決めました。　しかし、私は不安だったのです・・・・」

自分の本音、この八年間で自分が思った本音を

「ちゃんと貴方の執事としてやれるかどうか、義務感にとらわれていました。　ユウイチの最期の願い、義務として受け入れ、忠実に使えたいと思ったのです」

荒い息をしまいこみ、シュトロハイムは続けた。

「ですが貴方は以外にも朝起きてくる時間は遅い、嫌いなものは私に気付かないように残すし、それらを注意すると必ず執事を辞めなさいといわれました。　まぁそれらを正すのもまた執事としての使命だったのですが・・・・」

「う・・・・」

悪態を突かれたマユミは涙をぬぐう。

「私も気付いたのです。　これが家庭・・・・ユウイチもこんな思いだったのでしょう。　マユミ様と過ごしていくうちに執事としてではなく、一人の娘・・・・家族と見るようになりました。　私には普通の家庭は分かりませんが、この心は今も変わりません・・・・」

人を殺すことを生業とした人生、その中でシュトロハイムの心は人をいかに殺すか、その技術、心得だけを追求して生きてきた。

しかしそんな自分に新しく生まれたもの。　ユウイチやマユミと過ごして来たことによって人としての心が生まれたのだ。

「使命とかではない、本当の家族のように私は貴方を支えていきたいのです・・・・だからここで命を投げるのは止めて下さい・・・・」

「シュトロハイム・・・・・」

シュトロハイムの本音にマユミは瞳からあふれ出す涙が止まらなかった。　何度拭おうともこの流れる涙はなかなか止まってくれない。

ほんとに信じていいのだ。　この男だけは、家族と思っていいのだ。

「もう一度私の執事になってくれる？　シュトロハイム・・・・・」

その言葉にシュトロハイムは歯茎を見せるほどニカッと笑って見せた。

「なんども申しますが、私はマユミお嬢様の執事ですよ・・・・さぁ戻りましょう」

そう言い、マユミに近づいたシュトロハイムは手を伸ばした。　その時である。

「むっ！？」

突如として二人の間を隔てるかのように天井が落ちてきた。　ガラガラと上から大量の物が落ちてくる。　全て火が燃え移っていた。

「お嬢様ぁぁぁぁ！！」

「私は大丈夫よシュトロハイム・・・・」

叫ぶシュトロハイムに反応する声。　それは瓦礫の中からだった。

奇跡的にマユミの体は押しつぶされるのを避けているが、瓦礫同士の作り出した小さな空間に護られているということは抜け出せないことも表していた。

「クソッ！　どうすれば良いのだ・・・・」

この状況、下手に自身の拳を使えば下敷きになっているマユミの命が危ない。

「ぬぅぅぅぅ！」

シュトロハイムは巨大な瓦礫をどかすために手をかけた。　だが片腕では当然上がる訳が無い。

（これが私の犯した罰なの？）

必死に瓦礫をどかそうとしているシュトロハイムをかすかな隙間から覗きながらマユミは自身の運命を悟った。　このままではシュトロハイムも巻き添えをくらう。

「シュトロハイム、私のことは放っておいて早く逃げなさい！！」

「な、ふざけないで下さい！！」

「ふざけていないわ・・・・マジよ」

フッと笑うとマユミはそう返した。

「その言葉に従うことはできません！！　たとえ執事としても！！」

「私は貴方に生きていてほしいの・・・・私の分まで生きて！！」

「そんな・・・・」

一瞬、シュトロハイムの視界があの光景と重なった。　彼女の父、

ユウイチ達を見殺しにしてしまった自分の無力さを知ってしまったあの日と・・・・

最期にしてマユミが発したのは悲痛な願い。　主としての言葉なのかどうかは分からないが聞き入れるべきなのだろうか。

「いきなさい・・・・早く！！」

マユミは目を閉じた。早く逃げてほしい。　死ぬのは一人で十分。

自分の罪で誰かが犠牲になることはごめんだ。

「誰ができるかァァァ！！」

だが、この男・・・シュトロハイムは諦めようとはせず。

「どうして・・・・」

「お嬢様の犯したことが罪だというのなら、その犯した罪は私の罪と同じなのです！！　かぶった罪ならばお互いで分け合うか、私が全て背負いますとも！！　どこまでも一緒に行きますとも！」

彼女のためにできること。それはただ願いを聞き入れることではない。　一緒に居ることだ。　すこしでも彼女の不安を和らげてあげたい。　そんな想いが彼にはあった。

「もちろんこのシュトロハイム、諦めるつもりは毛頭ありません！！」

強がるシュトロハイムだが状況は芳しくない。　必死にどかそうにも一向に瓦礫が持ち上がる気配が無いのだ。

（このままでは・・・・）

シュトロハイムが焦りを感じたその時である。

「おう、どうした？　火災発生ですかコノヤロー」

勢いを増した炎を駆け抜けて一人の男がやってきた。　テルだ。

「テル殿・・・・」

「なんかしんどそうな顔してな手伝うぜ？」

炎の熱であふれる汗を拭いつつ、テルは左腕を瓦礫にかけた。

「あ、貴方まで！　どうして関係の無い貴方までもが私を助けようとするの！？」

マユミは隙間から叫んだ。　敵である自分を助けるという意味が理解できなかったのだ。

「そんな事言われてもな・・・・うちのお嬢の頼みなんだから仕方ねぇだろ？」

テルはめんどくさそうに答えた。

「三千院ナギが・・・・・？」

「おうよ、火の手が上がっているのが分かったらすぐ俺に『助けに行け』と頼まれてな、ハヤテは消防車呼んで消化活動中だ」

「なんで・・・・貴方たちは」

マユミは呆然としてしまった。　この男だけならず、三千院ナギとその執事までもが自身を助けようとしている。

「うちのお嬢様の願いだったら致し方なしなんでね。　ついでにこの機を境に友達にでもなってくれや、趣味は合わないかもしれないがな」

「それはいい。　私も執事として主の友人が増えることはうれしい限りですな」

シュトロハイムが嬉しそうな声で言った。

「マユミお嬢様、こんなにも私たちの為に動いてくれる人がいるのです。　人生もまだ捨てたものではありませんぞ」

「・・・・うん」

ポツリと呟いたとき、マユミは涙を流しながら笑顔になっていた。
そして顔を隠し、

「ありがとう・・・・」

そう呟いたのだった。

「さーてさっさとコイツをどかさねぇとな・・・」

「全くですな。　お嬢様の窮屈さを考えると急がねば」

二人は同時に動かせる片腕を瓦礫に持ち上げるように手をかける。
テルが口を開いた。
「アンタどいてろって、年寄りなんだからすこし後先考えろって」
「そういう貴方も考えてはいかがでしょう？　腕一本ですよ？」
「アンタも一本しか動かせないだろうが」
「いやいや」
シュトロハイムがそう言うと二人は互いに目を合わせてフッと笑う。

「「二人合わせれば二本だ」」
同時に目を見開き、全身の力を込めて瓦礫を持ち上げる。　瓦礫は一気に持ち上がりマユミの姿がはっきりと見えた。
「シュトロハイム・・・・」
「お嬢様、いきましょう・・・・」
差し伸べられたその手をマユミは何も言わず握った。　笑顔で。

「ちょっと心配して来て見れば・・・・これはどういう事なの？」

日野寺家正門、そこにたたずむ一人の少女がいた。　桂　ヒナギクである。　やっぱりテルの隠し事が気になり自ら調べにきたのであった。

しかし、日野寺家に来てみればどうであろうか、屋敷からは火の手が上がり、消防車が消火活動を行っている。　そして何より

「ここはどこ？　私は誰？」

「く、来るな！　ブルーベリー色のつぶらな瞳をした悪魔が襲ってくるぅぅぅぅ！！！」

正門の目の前にいた門番らしき男二人が変な事を口走っていたのだ。

その原因は誰かさんのピザを食べたことによって起きたことなのだとは彼女は知る由も無い。

「あれ？　ヒナギクさんじゃないですか」

「ハヤテ君！？　何してるのバケツそんなにもって・・・」

ヒナギクが声のするほうに目を向けると大量のバケツを一人で持つハヤテの姿が目に入った。

「消火活動中なんですよ。　といってももうすぐ火も消し止められますが・・・・」

屋敷の方も随分と火が消されてあと少しといったところだ。

「なんだヒナギク来てたのか」

「あら、ナギまで・・・・三千院家が居ると言うことはまさかテル君もここに来てるの？」

ナギの姿にヒナギクは不思議そうな顔をする。

「まぁアイツは今救助活動中だ。　もう少しで戻ってくるだろう・・・・あ、来たぞ」

ナギが屋敷の入り口を見ると中からテル達が出て来たのが分かった。

「ごめんなさい・・・・」

「私からもこの通りです・・・・」

火の手も無くなり、ひと段落した場でマユミとシュトロハイムはナギに向かって頭を下げていた。

「全くだぜ・・・この俺の状態を見ろ。　体は傷だらけ、腕は骨折。賠償金を億まで追求できるぞ」

その瞬間、ナギがテルの右腕を軽く肘うち。　テルは叫びながら地面を転がった。

「たしかに・・・・この私にとてつもなく迷惑をかけた礼はしてもらわなくてな・・・・」

「・・・・・」

近づくナギにマユミは顔を俯かせ、言葉が発せられない。　自分がしたことを考えると悲しくなった。

がしっと肩をつかんだ。　マユミはその瞬間、ビクッと反応し、顔を強張らせる。　ナギが口を開いた。

「お前、ポ〇モンできるか？」

「へ？」

ナギの言葉にマユミは思わず間の抜けた声を上げてしまう。

「私とバトルをしないかといっている。　最近ハヤテが強すぎて困っているのだ。　他にいい対戦相手がいてくれれば私の経験値も大いに稼げるのだが・・・・」

「許してくれるの・・・・？」

その言葉にナギはうーんと唸り、黙って返した。

「まぁ、誰にでもそう想ってしまうこともあるだろう。　間違いもあるだろう。　だが、その間違いを正してくれる奴がいるのだから。私はもうお前のことは許している」

「お前ほんとに十三歳？」

テルが横でボソッと突っ込んだ。

マユミは顔をまた俯かせる。　今度は顔から笑みが生まれていた。

「ポ〇モンバトルがしたいと言ったわね・・・」

「ん？」

マユミは顔を上げた。

「私のユ〇ノオーに勝てるかしら？」

「なんの！　私のカ〇リューが蹴散らしてくれるわ！！」

「いや！お前ポケモン持ってたのかよ！？」

テルが自然と突っ込むとシュトロハイムも割って入ってきた。

「私も持っていますよ。　使い手はケッ〇ング、ちなみに既に新発売される黒と白は予約済みです」

「くそ、出遅れたぜ！！　まだ俺は予約どころか！　ニ〇テンドーD〇すら買っていないッッッ！！」

「話題についていけないわ・・・・」

ヒナギクが一人呟いた。

「ヒナギクさんも始めてはいかがですか？　ピ〇チュウならヒナギクさん気に入るかもしれませんよ？」

「いやいや」

ハヤテの言葉をテルが否定した。

「ヒナギクが好きなのは多分、サルだ。　あのパワーとスピードまさしくコイツそっくり・・・・」

「ふん！！」

その瞬間、テルの頭にヒナギクの鉄拳が炸裂した。　ガツンと音を立てて、テルは地面に倒れる。

「ポ〇モンは分からないけど、とてつもなく不愉快なことを言われたのは分かるわ・・・・」

「ま、そんなこんなでもう帰るぞ。　いくぞハヤテ、テル」

ナギがそう言うとハヤテは帰ろうとしたがここで異変に気付く。

「あれ？　テルさんが起きませんよ？」

「え？」

それに反応するのはヒナギク。

「あれ？　なんか赤い液体がいっぱい出てきて、なんか体がビクンビクン動いていて、なんかこれ以上この文章では表してはいけない

ような程に危険な状態ですよ！！」

「そこまで追い込んだのは誰だか私は知っているが」

「わ、わたし？」

ヒナギクが自身を指差す。

「いや、ほとんどは・・・・・」

「誰ですかお嬢様！？　そんなことをした人は！　僕が成敗しますよ！！」

「「「・・・・・・・」」」

マユミとナギとシュトロハイムは深く、ため息をついていた。　テル、哀れなり。

ドスンッ！

地面に叩きつけられた。　地面というか、正確には床だった。

「いってぇ～」

体中を見るとあざだらけである。　何度も何度も投げられた証拠だろうか。

投げられた？　誰に？　決まっている。

「少し動きが良くなったかと思えばまだまだね・・・・」

自分を投げていたと思われる人物が近づいている。　女性だ。　あの時、夢に出てきたと思われる女性だ。

「どうしたのかしら？　ただ突っ込んでいくだけじゃ意味が無いわよ」

笑いながら挑発するようなセリフを言い放ち、自分の怒りを買う。
また自分はその女性に突っ込んで行った。

「はい、馬鹿の一つ覚え」

女性は一瞬だけ体をずらすと足を引っ掛けて自分の姿勢を崩させる。

前のめりの体制になった自分の足に手をそっと添え、真上に押し上げた。

パァンッ！　と音が響く。　体が一回転し、床に叩きつけられた音だ。

「まったく、こんな安い挑発に乗るなんて・・・・」

仰向けになって倒れていると女性は膝を着いて顔を覗かせた。

「鬼・・・・」

ポツリと嫌味をこめてつぶやいて見せると女性は笑った。

「鬼で結構。　でもこれでも成長したものだわ、関心関心」

女性はパンパンと膝を叩いて見せた。　接し方の態度と言葉からにするにアメとムチが大好きなのだろうか、この人は・・・・

「うふっ・・・・じゃあ今日はここまでにしてお昼にするか」

一瞬だけまた笑い、自分の額に手を乗せた。

やっぱり何回も思ったことだがこの人の手は優しい。　暖かくてどこか安心するような・・・・

（アレ？　なんか誰かに似てる？）

心の中でそんな疑問が浮かんだ。　顔は相変わらず見えないけど面影が何故か見たことがある。

プツンと何かが切れるかのような音がした。　それと同時に真っ暗になっていく・・・・

「・・・・・・」

瞼の裏から目が少しだけ動いた。　どうやら気を失っていたらしい。

あちこち体が痛む、すごい痛みだ。

ここで少し違和感を感じる。　何故だかテルは自分の頭に何かが

乗っかっている気がした。　夢で感じた暖かく優しい手にどこと無く似ている。

「あれ？　マリアさん？　俺って生きてます？」

瞳を開けると額に手のひらを乗せていたのはマリアだった。

「ええ、生きてますよ？　私が死神に見えますか？」

にっこりと笑うとそっと額から手を離した。　この時、テルは夢の中で感じた疑問が解決するかのように

「なるほど・・・・」

と呟いた。

「どうしたんですか？　頭でもやりましたか？」

不思議に思ったマリアがテルにさりげなくひどいことを言いつつ聞いた。

「なんつーか、変な夢見てて・・・・変な鬼の女が俺を投げ飛ばすんですよ。　何回も何回も」

その時の感覚といったら思い出したくも無い。　夢であったとはいえ痛みと感覚が妙にリアルだった。

「知り合いですか？」

「分かんないすよ。　でも夢の中の俺はなんかその人と毎日そういうやり取りとかしてたんですかね？　飯とかも食ってたそうっす」

マリアはへぇといった表情。

「取りあえず、一歩前進という形にすれば良いんじゃないでしょうか？　少しでも記憶らしきものが戻ったんですから」

無理して思い出す必要は無いのだから今はそれで良いかもしれない。
なんにせよ、今回彼がいなかったらナギとハヤテはずっと離れ離れのままだった。　それを繋ぎ止めてくれた、そして今はゲームして遊んでいる日野寺の令嬢との関係を間接的に直したのはテルだ。

（この子にはそういう力があるんでしょうか・・・・）

「まぁ、そういう事なんですかね・・・・あ、あともう一つ」

テルが何かを思い出したかのように続けた。

「その人すンごいマリアさんに似てたんですよね、そっくりとかじゃなくて雰囲気が」

この時、マリアの中で何かが切れる音がしたという。

「テル君？　その女性と私が同じってどういう意味ですか？」

「何って、言葉のとおりですよ」

「へぇ～じゃあ、私はその人と同じ鬼なんですね？」

不気味な笑みを浮かべるマリア。　テルはようやく気付くが時既に遅し。

ただひたすら、テルはその日にマリアに謝り続けたのだという。

ーーーー翌日。

前夜の出来事から一日明け、テル達はいつも通り白皇学院に足を運んでいた。　はっきり言って昨日の今日なので体は疲れていたが

「テルさんどうしたんですか？　そんなに疲れた顔をして・・・・」

「お前はどうなんだよハヤテ・・・・」

テルはケロッとしているハヤテにいささか殺意が芽生えたという。

結局、ハヤテには今回の事件を深く説明することは無かった。

全てはシュトロハイムにやられたということにしてある。　ハヤテが操られていたと言う事は内緒だ。　そうした方が彼の為なのだろう。　本来真面目過ぎるハヤテがこの事を聞いたら辞表を出しかねない。

そう考えたテルの配慮だった。

「しっかし、この解決の仕方はストレスが溜まんな～」

「え？　何がですか？」

ハヤテは何を言っているか分からない表情。　隣にいたナギはため息をつくと口を開いた。

「まぁそんな事より、教室に入らないとホームルーム始まるぞ」

「分かってるって・・・・」

そう言いテル達は教室の中へと入っていく。　中に入るなり突っかかって来た人物たちがいた。　生徒会三人娘である。

「おやおや、テル夫君。　ギプスなんかして授業をサボろうという精神は私たちも歓迎するぞ？」

「あは～☆　テル夫君もサボタージュ♪」

「新手の厨二病か？　舐めるなよテル夫君。　私もその気になれば隠された右腕の力を解放して・・・・」

美希と泉、そして理沙が順に言った。

「どうでもいいけどテル夫って何だよ。　なんか一文字違うだけでネットにいそうじゃねーか」

そんなことを言っていると今度はヒナギクが

「ちょっとさっきの会話聞こえたわよ。　あんた達、サボりもいい加減にしなさい」

「いや待てよ。　その『あんた達』には俺も含んでるのか？」

「違うの？」

「んな訳ないだろうが！　何でこう人の話を聞かない・・・・疲れるだろうが」

「お前が言えた事ではないがな。　全く持ってうるさい連中だな・・・・ハヤテ、席に座るぞ」

「そうですね」

ナギとハヤテは顔を見合わせて席へと向かう。　それと同時に勢い良く教室のドアが開いた。

「ほら～さっさと席に着きなさい、日曜が明けた休み気分が抜けない生徒たちよ」

「おーい雪路先生、顔色悪いぞ。　どうしたんだ？」

「いやぁ～私もちょっと眠くてね、休みだからって夜遅くまで飲んじゃった」

「お姉ちゃんが一番休み気分抜けてないじゃない！！」

ヒナギクの声が教室に響き、少しばかりホームルームに入るのが遅れた。　いつも通りの光景。　ここからまた説教、授業、そして執事の仕事が始まるのだ。

テルは席に着くと動かない右腕を机の下にやり、左腕で頬杖をついてダルそうにその光景を遠い目で眺めて呟いた。

「・・・・眠い」

彼の多忙な一週間がまた始まる。

～やっぱりいつも通りが一番だわ～（後書き）

終わったぁぁぁ！！　長きにしてようやく特別編、終結。　十話以上かかった・・・長引きすぎてちょっと飽きられちゃったかもしれない。

今回初めてこういうのをやって見て反省が多くてもう大変ですね。

まずテンポの悪さ。　もうちょいまとめてみようぜ。

あと心理描写。　難しい・・・・

徹底的に文才の足りないところがありました。　後半なんてすんごいグダグダ感が否めません。

今回出てきたオリキャラはちょっとずつ出していきたいと思います。

次回は寄せられた質問を消化するためにお茶会を開いて、裏話はさんで、日常へ戻ります。

最後まで読んでくださった読者様には深く感謝していますッッッ！！

感想や意見などはいつでもお待ちしておりますッッッ！！

ここらで一回すべらない話（前書き）

なんかちょっと短い話ですが。　楽しんで貰えれば幸いです。

ここらで一回すべらない話

テル「……長かった」

ナギ「長かったな……」

ハヤテ「長かったですね……」

テル「長かった……ッッッ！」

マリア「取り敢えず、始めませんか？」

ハヤテのごとく！　～すべらない話～

テル「ようやく終わった特別編。　なんか脱力感じんな～」

ハヤテ「まぁ、大変でしたしね……」

テル「違うんだよ。　俺が言ってんのは『出来』の問題、まさかここまでかかるとわ作者も思ってなんだわ」

ハヤテ「たしか12話ぐらい使いませんでしたっけ？」

テル「今更終わって言うのもだけどさァ、もうちょいコンパクトにやれなかったかと後悔してんだよな」

ナギ「なんか愚痴りだしたぞ、作者に対して……」

マリア「よほど不満があったんじゃないですか？　殴られ役として」

マユミ「私も不満があるわ！」

ナギ「うわっ！　マユミが化けて出た！」

マユミ「勝手に殺すなッ！」

シュトロハイム「私もおります」

ハヤテ「まだ屋敷に帰ってなかったんですか？」

マユミ「私達の話はもう終わりだけど私は納得いかないから、本編に少しでも絡んでやるんだから！」

テル「何が納得いかねーんだよ、ちゃんとお前らはハッピーエンドを迎えたじゃねーか」

マユミ「そこよ！」

テル「あ？」

マユミ「あんなものハッピーにはほど遠いわ！　ナギとヒロインの座を交代できなきゃ私にハッピーエンドは訪れないッ！」

ナギ「な、なんだと……ッッッ！」

マリア「要するにもっと出番増やせと？」

マユミ「理解が早くて助かるわ、メイドさん」

マリア「マリアです」

ナギ「……なら、どうケリを着けるのだ？」

マユミ「それは……コレよ！」

ハヤテ「そ…それは……ッッッ！」

ナギ「まさか……ッッッ！」

テル「……ポ〇モンじゃねぇかァァァ！」

マユミ「ええそうよ。　ポ〇モンバトル……これほど平等かつ、トラブルゼロの決め方があるかしら？」

ナギ「お前、絶対リベンジに来たろ？」

ハヤテ「リベンジ？」

ナギ「ああ」

―ちょっとした回想をご覧下さい。

マユミ「では私から、行け！　ユ〇ノオー！」
マユミはユ〇ノオーをくりだした！
とつぜんてんこうがかわり、あられがふりはじめた！
ナギ「なら私は……行け！　ト〇キッス！」
ナギはト〇キッスをくりだした！
マユミ「奴はひこうタイプ……もらった、ふぶきで一撃……」
ナギ「エアスラッーシュッ！」
こうかはばつぐんだ！　ユ〇ノオーはひるんだ！
マユミ「ま、まぁ一回ぐらいなら……今度こそ必中ふぶきで……」
ナギ「エアスラッシュ！」
こうかはばつぐんだ！　ユ〇ノオーはひるんだ！
マユミ「に、二回もォォォ！？」
ナギ「エアスラッシュ！　」
こうかはばつぐんだ！　ユ〇ノオーはたおれた！
「ムキィィィッ！　行きなさいユキ〇ノコ！」
（氷タイプの最速ポケモンならコイツを止めてくれるハズ……ッ！）

マユミはユキ○ノコをくりだした！

マユミ「ふふ……今度こそ必中ふぶき……」

ナギ「エアスラッーシュッ！」

マユミ「えっ！？　嘘！？　先手取られた？」

ユキ○ノコはひるんだ！

マユミ「しかもまたひるんだし！」

ナギ「残念だったな！　私のキッスはスカーフだッ！」

マユミ「それでそんなに先手が取られたのか……」

（でもアイツの技の命中率から考えて、当たる確率は低い！私のユ○メノコはゆきがくれ、ひかりのこなもち！　そう簡単には……）

ナギ「エアスラッシュュュウッ！」

ズバッ！きゅうしょにあたった！ユキ○ノコはたおれた！

マユミ「なぜ当たるし！　しかもきゅうしょッ！？とくせい機能しろォォォ！」

マユミ（こうなったら残ったポケモンで先制技のこおりのつぶてで

いくしかない！）

結局、マユミは二体のポケモンを使ってト〇キッスをようやく倒した。

マユミ「ど…どうよ？」

ニタァ

ナギ「まだまだ、真の恐怖はこれからだッ！　行けッ！」

マユミ「……」

はい、ナギが繰り出したのはハ〇サム。　氷タイプの苦手な鋼タイプで攻撃力が高く、鋼タイプの先制技も兼ね備えている。　更に特性のテクニシャンは弱い技の威力が上がります。

こうかばつぐんで先制を取り続け、自分は余裕で氷技を受ける、氷ポケモンパーティーに対して悪魔のようなポケモンです。

ちなみにナギのハ〇サムはこだわりハチマキ、更に攻撃力を上げてます。

ようするにマユミの負け決定です。

マユミ「ガアアアアアアッッッ！！」

―回想終わり。

マユミ「あんな勝負納得できっかァァァ！」

テル「お前の発言からしてポ〇モンバトルは不公平だと言っているように聞こえんだけど気のせいか？」

ナギ「お前がユ〇ノオーで来るなら私は鋼タイプで行くしかないだろ」

テル「そうだ。　相手の発言からでも予測し、パーティーを組む。
　それがポ〇モンバトル。　甘いぞ」

ハヤテ「そ、そこまで言わなくても……」

マユミ「……グズ」

テル「へ？」

マユミ「ごの……ひっく…グズ…」

マユミ「なに泣かせてるんですか？」

テル「いや違いますよ？　俺じゃなくて……」

ナギ「お前、１３歳の少女を……」

テル「オイコラ、罪を俺に被せるな」

ハヤテ「それよりもテルさん、後ろを」

テル「うん？」

シュトロハイム「……」

テル「……」

シュトロハイム「ちょっとこちらへ……」

ハヤテ「なすがままに引き連れられて行きましたよけど……」

マリア「まぁあんな目を向けられたら動けませんよ。　明らかに殺る目でしたから……」

テル「ギャアアアアアッ！」

ハヤテ「マリアさん、断末魔が……」

マリア「聞こえない聞こえない♪」

ドサッ

テル「げ……ゲヒ」

ナギ「もうボロ雑巾だな」

マリア「もう質問コーナーに行きましょう」

テル「そ、そうですね……」

ナギ「ボロボロだな……」

マリア「では最初の質問です。　『テルくんはハヤテの事をどう思っていますか？』」

テル「ハイ、ずばりお答えします。　無駄に培われた執事と戦闘能力。　変に女にモテてしまう所を除けば最高の友達です」

ハヤテ「テルさん、それって誉めてるんですか？」

マリア「ハヤテ君、多分一種の嫉妬ですよ」

テル「あと、少し真面目すぎるのもどうかと思ってる」

ナギ「まぁ……」

マリア「それはそうかも……」

ハヤテ「そうですか？　お嬢様の執事ならこれぐらいでいないと……」

ナギ「それはどういう意味だ？」

テル「もう少しなぁ、フリーダムに生きろよな。　俺を見なさい、執事としての仕事をこなして自由な時間を確保できている。　比率で言うなれば５：５だ」

マリア「私の記憶だと１：９が妥当だと思うんですが……」

ハヤテ「では次の質問です。　テルは大きい胸と小さい胸はどちらが良いですか？　ってコレはまたアレな質問ですね……」

テル「ハイ、ずばりお答えします」

ハヤテ「堂々と答えるんですか！？」

テル「ぶっちゃけた話、俺はどっちの胸も好みだ。　でも強いて言うなら真ん中辺りだな」

マリア「へぇ……」

ナギ「……」

テル「アレ？　マリアさん？　目がゴミを見る目なんですけど……」

マリア「いえいえ、ただここでテル君を軽蔑しただけですので」

テル「仕方ないじゃないですか！？　こういう質問来ちゃったんですから！」

ナギ「黙れ、そして腐れ」

テル「なんだゴラァア！」

ナギ「あぁん！？　やんのかゴラァア！」

ハヤテ「お嬢様もテルさんも喧嘩は止めましょうよ」

マリア「……」

ハヤテ「どうしたんですか？　マリアさん」

マリア「いえ、この最後の質問が気になって……」

ハヤテ「え？　どれですか？　見せて下さい」

ナギ「どれどれ……」

ハヤテ「あー」

ナギ「うーん、ナイナイ」

テル「何がだ？」

ナギ「うん、ナイナイ、有り得ない」

ビリビリ

テル「オイ！　質問便りを破くな！　何の質問だったんだよ！　気になるだろうが！」

ナギ「安心しろ。　お前の思っているほど世界はそんなに酷くないさ」

テル「いや何の話だよ！」

マリア「ではここらで終わらせましょうか？」

ハヤテ「そ、そうですね」

マユミ「あらもう終わりかしら？」

シュトロハイム「左様のようです……帰りますか？」

マユミ「そうね、じゃあ帰りましょ」

マリア「帰って行きましたね……」

ハヤテ「ええ。　本当に仲が良くなりましたね」

ナギ「マユミの奴、手を繋いでるぞ」

テル「なんか忘れられてる気がするけど、質問は？」

マリア・ハヤテ・ナギ「では、また次回！」

テル「何だろうこの気持ち……全くもって理に叶ってないッ！」

―質問

質問です。テル君はハヤテのごとくのキャラで好きになることはありますか？　逆もまた然りです。

ここらで一回すべらない話（後書き）

特別編も終わり、落ち着いた今日この頃。　ようやくポケモン買いました。　今回から漢字表記にできるので楽しめるのが増えたと思います。

しかし漢字表記にすると「きゅうしょにあたった」が「急所に当たった」　になっただけで物凄く状況が重く見えてしまうのは私だけでしょうか？

ちなみに私の友人は3日でチャンピオンになりました。どんだけだよ

私はバッチ六個です。

でも今回のポケモンは、ライバルの名前が固定なのが残念。

期待の一本、ポケットモンスター、ブラック、ホワイト、４８００円で絶賛発売中ッ！

アレ？宣伝になってる？

第２３話～夏も終わるがこちらはまだ春にもなっていません～（前書き）

特別編も終わり、漸く本編が始まります。　久しぶりなのでなんか変な始まり方ですがご了承してください。

第２３話～夏も終わるがこちらはまだ春にもなっていません～

―水。

我々が料理、掃除、補給などに利用されるこの液体は、人間の体内にも流れている。

人間の文明が今日発展してきたのは火、木、大地、水があったからだろう。

水車、ダムによる発電の働き。　水は私達人類にとって掛け替えのないものなのだ。

―しかし、人類の宝とも言える水は時に洪水、土砂災害などで人類に牙をむく。

かくいう、善立　テルの目の前に巨大な津波がやって来ていた。

巨大な波がテルの全身を叩きつけた。　体は意図も簡単に飲み込まれて泳ぐことも叶わない。

そうッ！　人類はその宝を自ら汚し、壊していたのだッ！

（ゴボコバゴボ……）

体がどんどん沈んでいく。　世界は間違ってしまったのだ。　宝は大切にしなければいけないのに、金庫に保管することもしない。

土壌汚染、水質汚染、宝である水が汚されているではないか、人

間の手によって

人類は自然に、偉大なる自然に感謝し、見つめ直さなければならない。

（……ッッッ）

そう感じながらテルは深く、光を灯さない、漆黒の闇へと落ちていった。

「……」

目を覚ますと、テルはガバッと体を起こした。

「おはようございますテル様……」

聞き覚えのある声がしたテルが重たい瞼をこすり向けるとそこには伊澄がいた。

「アレ？　俺は大自然の恐怖を身をもって体験していた気がしたんだけど……」

「どんな体験ですか？」

伊澄が神妙そうに尋ねる。

「いや、スゴいのなんの……これから地球に起こりそうな世界規模の津波が……」

ここであることに気付く。　伊澄がいる事もそうだがよく周りを見ると外なのだ。

あと自分の体もビッチャリと濡れている。

「なんで俺水浸しなの？　嘘だろ……俺もう十六だぞ……？」

「あのぅ、これには訳が……」

「なんだよ……あざ笑うなら笑えよ……俺は地獄に落ちたんだ……」

顔に手を当てて黄昏ているテルに伊澄が口を開いた。

「えっと…何を勘違いしてるか分かりませんが……テル様がなかなか起きてくれないので、冷水を掛けさせて頂きました……」

「なに？　お前オレに恨みでもあんの？」

バケツ片手の伊澄を見てテルはひとまず安心する。

「でもなんでここまでして起こしに来たんだ？　そんなに急ぎのようだったのか？」

改めて疑問に思っていることを伊澄に聞いた。

「えっと…そのぅ……」

伊澄は少しオロオロしながら続けた。
「一緒に来て頂きたい所があるんですが……」
「あン？　こんな夜中にか？」
「はい……」
伊澄はコックリと頷いた。

「んで？　夜中に俺を屋敷から連れさらい、どこに行こうってんだ？」
場所は変わり、伊澄の車に移る。
「実は、白皇学院まで一緒に来てほしいんです……」
「白皇にィ？」
テルは顔を少し歪ませて言う。　なぜこんな時間に学校に行かなくてはならないのか、理由が分からなかったからだ。
「なんで？」
テルがそう聞くと

「それは後々お話します。　了解してくれますか？」
伊澄は突然キリッとさせてテルに言うが
「イヤだ」
「え？」
あっさり断られた。
「イヤ、実際だるいし、つーか俺眠いんだけど。　なんも事情を説明無しで了解しろっていうのは無理だわ」
「えーとその……」
伊澄はなんとか事情を話そうとするがなかなか言葉に出来ず、指を動かしていた。
「大体、俺の事情も考えないでそういう話をするのもどうかと思うよ普通」
「あ…すいません……」
テルの言葉に伊澄はシュンとした表情を見せる。
テルはバツが悪そうに思ったのか頭を少し掻くと
「……しゃあない、誰にだって事情はあらぁ、今回は聞いてやるよ」
「本当ですか？」

伊澄はいつものようにゆっくり話すが口調はどこか明るくなっていた。
それを見てテルは安心しかのように小さく息を吐いた。

夜の学校、白皇学院。
「こ、これは……」
車から降りた伊澄とテルは白皇学院の旧校舎前に来ていた。
テルは旧校舎を見て顔を真っ青にして見ている。　そのただならぬ雰囲気に
「ゴメン、やっぱり無理」
「お待ち下さいテル様……約束が違いますよ……」
クルッとUターンするテルの執事服を伊澄がガシッと掴む。
「イヤイヤ！　おかしいって！　なんだよアレ！？　昼間と明らかに雰囲気が違うだろ！？　明らかに出そうじゃん！？　どこのホーンテッドマンション！？」
テルの言うとおり、旧校舎の雰囲気は昼間と打って変わっていた。
暗い世界が洋風の校舎を恐怖の館へと変化させていた。
「まさか……テル様、幽霊が」

「イヤ、イヤイヤ、イヤ？　違うよ？　別に怖くなんかないよ？　俺が別に幽霊を怖がる訳ないじゃん。　何を言っているんだ伊澄君は」

「テル様……後ろ」

バッ！

「……」

伊澄の言葉にこれまでにない反応速度を見せたテルは素早く車の真下に潜り込んだ。

「……」

伊澄はじーっと見つめる。

「いや、これはな伊澄、ここからムー大陸に行けると思ってな……」

テルは車の真下からゆっくりと辺りを見渡しながら這い出てくる。

「……」

明らかに恐がっている。そう確信した伊澄だった。

「んで？　その仕事ってのはなんだ？」

「えーっと……テル様に手伝って欲しいことがあります」

「ほぅ……」

ゆっくりと言う伊澄をテルは腕を組ながら聞く。

「私の悪霊退治を手伝ってもらいたいのですが……」

「はい？」

悪霊退治？　という単語にテルは目を丸くした。

「この旧校舎にはとても有害な悪霊が住み着いていると聞きました。だからこれからテル様は私のサポートを……」

「ちょッ、た、タンマタンマ！」

テルは不可解な伊澄の発言に話を中断させた。

（幽霊？　マジでいるの？　イヤイヤおかしい。　いくらこの小説がなんでもアリだからってそれはないだろ？）

心のそこからテルは幽霊の存在を否定する。　伊澄はその反応こそが不思議だといった感じで

「ふつーに居ますよ？　幽霊は……」

とテルに言う。

「おかしい、絶対におかしいッ！　伊澄ッ！　それはイカンッ！そんなオカルト紛いの現象を信じちゃイカンッ！　夢を思い出せッ！

お前が望んだ世界はそんなんだったのかァァァァッ！」

テルは伊澄の両肩を掴みブンブン揺らす。　なんとしても幽霊の存在を認めたくないらしい。

（どうしよう……テル様に分かって貰える為には一体どうしたら……）

揺らされる中、伊澄はテルに自身の仕事を理解してもらう方法を探していた。

ハッキリ言ってしまった結果、若干の、イヤ、半端ないほどの衝撃を与えてしまった。　ならばどうするかと考えていた時。

「……テル様、そこを少しどいてくれませんか？」

途端に伊澄の目が細くなり、強張った表情になった。

「なんだ？出たのか？　」

「はい……」

「どこに……」

テルがそう呟いた時、肩にガシッと何かが捕まった。　その瞬間、体が冷気を浴びたように冷えていくのを感じた。

喉を鳴らし、ゆっくりと振り返ると……

「お前の後ろにダアアアア！！」

「ギャアアアア！」

テルの目に映ったのは鉞を構えて今にも振り下ろしそうな男。　物凄い形相でテルに飛びかかった。

「はい……除霊っと……」

伊澄は幽霊の動作に全く動じず、袖から一枚の札を取り出し投げつけた。

ヒラヒラと飛んだ札は幽霊の額に当たるとバチッと音を立てる。

「オオオオオオオオッッッ！」

幽霊は苦痛の表情を浮かべてポンッと音を立てて消えてしまった。

「……」

「信じて貰えますか？」

その光景を眺めて呆然としていたテルに伊澄はニコリと笑いかける。

「……やっぱ帰っていい？」

「ダメですよ？　約束を破る気ですか？」

「約束？」

はて？　という表情を浮かべていたテルだったが、一つの出来事を思い出す。

「アッ――――！」

―サンキューな！　今度なんかお礼しなきゃならねぇな

確か第１７話あたりでそれらしき事を言っていた。

だがっと頭をブンブン振り、改めて否定する。

「だ、だけど伊澄く～ん、テルさんよく分かんないから死んじゃうよ～、さっきみたいなのがいっぱい居たらテルさん間違いなく死んじゃうよ～？」

「マリアさんがテル様をお借りしてもいいですか』と頼んだ所、『どうぞ、寝たまんまですが連れてって下さい♪用事が終わるまで屋敷に帰さなく結構です♪』と言っていました……」

その言葉を聞き、テルは再び硬直した。

最早自身に逃げ道はないらしい。

目の前には幽霊の館、屋敷に帰ればマリアが待っている。

正に前門の虎、後門の狼だ。

「……ハイ、行きます……行くしかないんだろ？」

「はい……ではこちらに……」

二人は旧校舎に向けて歩いていく。　テルは顔の生気がなくなり、白眼をむいてひきつらせていた。

しかし、二人は知らない。

この夜、旧校舎には伊澄とテル達だけの人間がいる訳ではなかった。

「えーっと、取り敢えずお嬢様のノートがある四階にッてアアアアアア！　床が抜けたァァァァ！」

床が抜けて下に落ちていく執事しかり……

「でも、もしかしてケガとかしてるかもしれないし、大丈夫、私オバケとか平気だから。　じゃ、　しっかり勉強しておくのよ？」

床に落ちた執事を心配して旧校舎に飛び込むたくましい生徒会長しかり……

今宵、旧校舎には客がいっぱいだ……色んな意味で……

第２３話～夏も終わるがこちらはまだ春にもなっていません～（後書き）

お気づきかも知れませんが第五巻の３話にオリジナル入れてみました。

旧校舎に来ているのは伊澄と使用人ではなく、伊澄とテルになっています。

ほとんどテルや伊澄サイドになりそうです。

第２４話～レッツゴー鷺ノ宮～（前書き）

夜の旧校舎編第２話です。

光の巫女だけど、自分的には陰陽師の扱いなんですが合ってますかね？　だから今回のタイトルと冒頭がアレなんですが……

ではどうぞ！！！

第２４話～レッツゴー鷺ノ宮～

―あらゆる困難を科学で解決するこの平成の時代。

―人々の閉ざされた心に魑魅魍魎が存在していた。

―科学ではどうしようも出来ない、そんな奇っ怪な輩に立ち向かう、清廉で可憐な少女と胡散臭い男が一人。

―少女は鷺ノ宮　伊澄、男は善立　テル。　人は彼らを陰陽師と呼ぶ。

第２４話～レッツゴー鷺ノ宮～

「悪霊退散…悪霊退散……」

夜の学校、月明かりが少しあると言ってもそれでも十分暗い。

テルと伊澄は悪霊退治の為、廊下を歩いていた。

「……テル様、さっきから何か音楽が」

呟き気味に歌うテルが気になったのか伊澄が一度立ち止まった。

「いや、悪霊退治ならこの方が盛り上がるかと……」

テルは頭を掻きながらなははといった表情だ。

「あまり幽霊を刺激する事は宜しくないかと……短気な幽霊もいますので」

「そ、そうなのか？」

「はい、ほら……すぐ後ろに……」

ゆっくりと頷く伊澄はテルの真後ろを指差す。

「……」

テルが振り返ると三人組の男達の幽霊が完全武装で立っていた。

「フシュウウッッッ」

「ウウウ……ッッッ」

「ルゥゥ……ッッッ」

三人とも奇妙な呻きを上げる。　更には目を完全に見開き、テルに視線をロックオンしていた。

「あの～伊澄君？　やっぱり彼ら……」

「はい……五月蝿くて怒り狂っています……」

そう答えた瞬間、大体お分かりと思うが当然三人の幽霊は襲ってきた。

「アッ――――――！！！」

「悪霊……退散っと……」

両手を挙げて叫んでいるテルをよそに全く動じずにお札を取り出すと三人の幽霊に投げつけた。

「あべしッ！」

「ひでぶッ！」

「カペッ……」

額にお札が張られると三人はだんだん溶け出して霧散していった。

「次行きますよ……」

まるでいつもの事のように終えると伊澄はテルに奥へ行くように促した。

「ゴメン、伊澄……やっぱ帰りたい」

「無理です。　ここで帰ったらテル様が死にます……」

「はい？」

伊澄の『死ぬ』という意味がどういう意味か分からず、テルは目を丸くした。

伊澄が加えて説明を入れる。

「ここで帰ったら悪霊に取り憑かれて死ぬ……という意味です」

「マジで？」

「はい……」

その言葉にテルは何も返せなかった。　というよりも既に諦めに入っているかもしれない。

こんなやり取りが何度か続いている。　テルが叫んでは伊澄が札を投げ、除霊。　テルが叫んでは伊澄が札を投げて除霊。

しかもテルは伊澄の後ろを警戒しながら歩く始末。

本来なら前を歩くのは年上のテルの筈だが、見事なまでに先頭を伊澄に譲っている……なんと情けない。

（しかし……幽霊なんて存在しねぇと思っていたが……）

伊澄の後方を歩きながらテルは目の前で起きている状況を信じつつあった。

幽霊はせいぜい、本や幻覚だと思い、信じてこなかったが現状が現状だ。　受け入れざるを得ない。

「しかし……伊澄」

「はい？」

後ろからテルの声に伊澄がチラッと反応してみせた。

「お前が鷺ノ宮の光の巫女だとか話されてなんとか言われても俺はどうとも思わねえけど……怖くねぇのか？」

「……」

一瞬振り向いたかと思うと伊澄は黙って視線を前に戻した。

「ま、怖くなんかないよな。　あんだけ肝が座ってるなら……」

「どうでしょうか……」

続けるテルの言葉を伊澄が遮った。

「私ってそんなに強く見えますか？」

立ち止まった伊澄は今一度テルといつもの表情で向き合う。

「恐がってないように見えますか？」

「……」

いつもの表情……なのだが、なぜかそうでもないとテルは感じ取った。

その言葉を、深く詮索するべきなのか、しないべきなのか、テルは迷ったという。

だがそんな迷いを抱えている内に

「まぁ、今日は平気ですけど……それでは奥に進みましょう」

「お、おう……」

クルッと伊澄が背を向けて歩き出したのでそんな考えも無駄に終わった。

―そして数分後……

「やっぱり迷子か……」

見渡す場面、誰も居ない事が確認できた。　今ここには伊澄がいない。　案の定、伊澄は迷子になった。

「なぁ神よ……放置プレイだろコレ？」

さっきとは打って変わってこの状況。　侮っていた。　仕事のなかでなら伊澄は仕事人顔負けの集中力で迷子になることはないと思っていたが

訂正。　やっぱり伊澄は伊澄だ。

（それよりも……な……）

テルが頭を掻きながら考えるのはさっきの伊澄の表情。

―怖くないように見えますか？

違う。　怖くない訳がない。　いや、一方的かもしれないが……

仮にもナギと同じ、１３歳の女の子だ。　ただただ普通に今の時間帯なら寝ているはず。

その筈なのに、今こうして夜に闘っているのだ。　鷺ノ宮の光の巫女として……

そういう責任もあるから普通より精神をすり減らす筈だ。

昔からこんな仕事をしていたのかと思うと苛ついた。

軽率な発言だったかも知れない。　何も分からない小さき頃から光の巫女として悪霊と闘っていた。　怖くない筈がない。

テルなら完璧トラウマだ。　それを１３歳の少女がやってのけている。

（光の巫女……か）

他と大きな違い。　同じ１３歳でこの立場の違い。　酷ではないのか？　普通の少女、鷺ノ宮　伊澄がナギと一緒に普通に歩き、普通に学校生活を過ごす日が来るだろうか？

「面倒くせぇ……」

そう呟きを入れた時だった。

「キャアアア――！！」

テルの耳に甲高い声が響いた。　その瞬間、体を震わせて近くの壁に張り付く。

「な、なんだ？」

張り付いたテルは冷や汗を掻きながら驚く。　女性の声に近いものかも知れない。

「伊澄か？」

そう呟いた時には廊下を走り出していた。

伊澄だから除霊に失敗したのかもしれない。こんな状況だ。命の危険だってある。急がなくてはならない。

「なんなのよもうっ！」

廊下を駆ける一人の少女。　ピンクの髪が特徴的で腰にまで十分届いている。

だがその長髪も今は真後ろに流れていた。

ご存知の通り、彼女、桂　ヒナギクである。

彼女もまた、この旧校舎に入り込んでしまった一人。

本来は生徒会三人娘の勉強を見に来たのだが、ハヤテが来ていると聞き、危険なので心配したとのこと。

―大丈夫。私、オバケとか平気だから

と言っていたが、今宵、彼女の世界は一変する。

彼女は見てしまったのだ。　宙に浮く、無数の人魂の姿を。

そんな非科学的な現状を見て、冷静でいられる訳がない。　当然即ダッシュ。

『オバケとか平気だったのでは？』

「あんなの平気な女の子がいるわけないでしょ！！」

『火の玉はプラズマという科学現象だという話ですが？』

「怖いものに理屈なんてないわよ！！」

『それでは最後の質問です』

「へ？」

『さっきからあなたに質問しているのは誰でしょう？』

「……」

（言われてもみれば……）

ヒナギクはさっきから聞こえる声に疑問を抱いた。

そして横を向いたとき、ヒナギクの顔から一気に血の気が引いていく。

カシャンカシャン

「……」

ヒナギクの横で併走するその何かは半分が肌を露わにし、半分が肌より肌自体が無くなり、皮膚が露わになっていた。

人体模型。　夜の怪談話の定番である。

人体模型がヒナギクと併走するという全く持って奇妙な光景。

「キャアアア――！！」

再びヒナギクは悲鳴を上げる。　そのまま壁にもたれ、腰も下ろした。

「あ…あ……」

迫り来る模型に対して、ヒナギクはもう立つことすらままならない。
逃げることも

（誰か…誰か――）

そんな時、恐怖に支配されつつあるヒナギクの脳内にある言葉が響いた。

―言ってくれれば、助けに行きますよ。

それは、最近自身が出会った一人の少年。

「ハ……！！」

その言葉を信じて、名前を叫べば。

「ハヤテく――ん！！」

彼は疾風のように現れるという。

ドガッ！

ヒナギクの前に文字通り、疾風が駆け抜けた。

人体模型に炸裂した蹴りはいとも簡単に人体模型を粉々にする。

綾崎　ハヤテの蹴りだ。

「大丈夫ですか？　ヒナギクさ――――」

ガシッ

「え？ え？ え？　ちょっ、ヒナギクさん……！？」

ハヤテは自分の今の状況に戸惑う。　ハヤテの体にヒナギクがヒシッと抱きついているのだ。

抱きつかれたためハヤテの心臓は急激に上昇する。

上昇、上昇、上昇……

「上……昇ッッッ！」

曲がり角の影からその光景を見ていたテルは持っていた花瓶にヒビが入るほど力を込めた。

（伊澄かと思って来てみればまさかヒナギクが居て、ハヤテが居て？　何故か抱きつかれている？）

両手に力が更に込められた。　花瓶のひび割れが広がっていく。

（あー　やっぱこの前のお茶会のコメント撤回しようかなー、ハヤテはとんでもない野郎であると）

完全にもう妬みしか感じられないこの心情。　流石はハヤテだ。不幸ながらにしてラッキーな野郎である。

「……ん？」

ここである事にテルは気付く。　ハヤテとヒナギクの更に奥の曲がり角で隠れている人影を見つけた。

「この事は絶対に内緒だからね　ハヤテ君」

「はい？　なんの事ですか？」

視点が変わるが今はヒナギクとハヤテ。　ヒナギクの言葉にハヤテは訳が分からず返した。

「だから…その……さっきの……」

「へ？」

言うのをためらっているヒナギクの様子にハヤテはまだ分からない様子。　外ではカラスがギャーギャーと鳴いていた。

「あ、あれですか？」

ハヤテはヒナギクに抱きつかれた事だと推測したがヒナギクは首を振って否定した。

「それもそうなんだけど……」

「え？」

「その前の…後の事も含めて……」

恐らくヒナギクが指しているのは自身が幽霊に驚いて逃げ出し、最終的に幽霊を前に座り込んでしまった事だろう。

「私があんなふうに怖がっていたなんて誰かに言ったら、本気で殴るわよ！」

「まぁさっきも思いっ切り殴られましたが……」

吊り目で迫るヒナギクにハヤテは苦笑いで返す。　実は抱きつかれた際、ヒナギクに理不尽な理由で殴られたのだ。

「でもこんなのに追いかけられて怖がるのは普通ですよ？」

ハヤテは自身の蹴りで粉々になった人体模型を見る。　確かに、動かないだけでも気味が悪いのに走って追いかけられたらテルなら即失神しそうだ。

「関係ないの！」

宥めるハヤテの言葉をヒナギクはまた否定した。

「生徒会長は威厳が大事なの！　威厳が！　ちょっと幽霊を見たからって！」

その言葉を言い終えた後、何故か口ごもった。

「あ、あんな…醜態を……」

ヒナギクにとって生徒会長に必要なのは威厳だという。　生徒を纏めあげるためには大切な物だ。

それを幽霊という、普段信じれない物の前で台無しにされたと思っているのだろう。

「まぁ格好良く無かったかもしれませんね、いつものヒナギクさんに比べたら……」

ビキッ！

そう言うときはどうにかして慰めてやるべきだが、ハヤテは色々と抜けている。　彼の発言は彼女のプライドに少なからずとも半分以上はヒビを入れただろう。

「でも、ここが旧校舎だって分かりましたから、もう用もないし、出ましょうかヒナギクさん」

ハヤテは辺りを見渡しながらヒナギクに促す。　もともとナギのノートを取りに来たのだが、旧校舎はノートのある場所ではなかった

のだ。
しかし
「何を言っているのかしらハヤテ君」
「は？」
ヒナギクの言葉にハヤテは苦笑いしながらも振り向いた。　嫌な予感がしたからだ。
「このままオバケの正体もつかめないまま……かっこ悪いまま……この私が負けっぱなしで帰るなんて…していいと思って？」
その背中から感じるオーラは物凄く怒りを凝縮させた物であると同時に、ヒナギクのなかで何かが燃えているようだった。
「いや…でも僕、お嬢様の忘れたノートを取りに行かないと…」
本当に嫌な予感しかしないハヤテはできるだけオブラートにその状況を回避するように努めた。
だがそれも……
「却下よッ！」
（……）
ハヤテは苦笑いで諦めた。　もはやこうなったヒナギクを止める事

は誰にも叶わない。　自身のプライドの回復のため、とうとうハヤテの拒否権まで奪取された。

「とにかくあんなものを放っておくわけにはいかないわ！！　だからハヤテ君…！！私と一緒にオバケ退治よッ！！」

そう高らかに言い放つと生徒会長こと桂　ヒナギクは夜の旧校舎を突き進んで行った。

「あ、ちょっ…ヒナギクさん！！」

その後ろを急いで追うハヤテ。　やがて二人の姿は暗い世界へと消えていった。

（……）

その二人が消えたのを見計らって角から一人、粉々になった人体模型を拾い上げた。

「このままでは…いけませんね……」

そう呟きを入れるのは伊澄だ。　先ほどからヒナギクとハヤテを追っていたらしい。

「なんとかしてハヤテ様や生徒会長さんにはこの場を立ち去って貰わないと……」

伊澄は首だけの人体模型に向けて一人呟く。

「なんでそんなに立ち去ってもらいたいんだ？」
「それは色々と……まぁ」
伊澄は手に持っていた人体模型を見て驚く。
「術を使っていないのに喋りだしました……これも悪霊でしょうか？」
「いやいや、俺だって、俺……」
「この模型も早めに除霊したほうが良さそうですね……」
伊澄はそう呟くと袖から札を取り出し、罪も無い模型にかざそうとした。
「だからこっちじゃアアアッ！！！」
「！！」
ハッとなって振り返るとそこにはテルがいた。
「……」
だが何を思ったのか、伊澄は暫く見て一言呟いた。
「悪霊？」
ぐにっ！

「ふひっ……」

半ば疑問系の言葉にテルは伊澄の両の頬を軽くつまんだ。

「だ～れ～が幽霊だコラ、この目で判断してんのかコラ」

テルは額に青筋を浮かべて怒り心頭。　やがて伊澄のつまんでいた頬を離す。　伊澄は半分泣き目で頬をさすっていた。

「い、痛いです……」

テルの耳に震えた声が戻ってくる。

「人を見かけで判断するからだ。　後、勝手に迷子になるな」

頭を掻きながらそう言うテルに伊澄はキョトンとした。

「私は迷子になってはいませんよ？」

「どこまで認めたくないんだよッ！？　頑固にもほどが……まぁいいや」

突っ込んでみるテルだがまたこのくだりは長くなりそうなので途中でストップした。

「んで？　立ち去ってもらいたい理由は？」

「え～っとですね……」

伊澄は涙目ながらも事情を説明する。

掻い摘んで説明すると、あの二人にはまず自分の裏業はあまり知られたくはないとの事。そのために人体模型を自分の術で動かし、ヒナギクを追い出そうとしたが。

「そこにハヤテが来てしまったワケか……」

「はい、さすがにハヤテ様は一筋縄ではいきませんでした」

「まぁ、アイツなら幽霊が来ても蹴りで倒すわ」

人体模型の首を持ち上げ、残りのパーツにも目をやる。　これぐらいの威力が込められた蹴りだ。　バラバラの人体模型が全てを物語っている。

「なんか方法はないのか？　あの二人に簡単に帰ってもらう方法は……」

「それで先ほどから私の術でなんとか帰らせようとしたんですが……」

伊澄のいう『怖がらせて帰って貰おう作戦』はとりあえず怖がらせて帰ってもらうという、なんか小学校で使われそうな物だ。　果たして、ハヤテやヒナギクにコレ以上通用するのか……

「実は一つ方法が……」

「お？　なんだ？　言ってみなよ」
テルが人体模型の首を持ちながら聞いた。
「でもこれはちょっと……」
「なんだよ。　喋ってみなきゃ始まらないぜ？」
テルが出し惜しみするように言う伊澄にじれったさを覚えた。　伊澄はテルの方から顔を背けて呟く。
「元々私の都合で無理に来てもらっているテル様に危険な真似はしたくありません……これは私の問題なので……」
伊澄の危険という言葉にテルは少なからず戸惑ったがため息をまた吐き、頭を描いた。
「バ〜カ、そう簡単に帰られっかよ」
「ですが……」
あくまでテルに遠慮しているのか伊澄がまだ戸惑っている。
「俺がいなかったら誰がお前の迷子の回収にいくんだよ」
テルは更に付け加えて続ける。
「それにな……なんでも抱え込んでっと、いつかそれに押しつぶされんぞ。　だから言え、その俺を巻き込んでしまいそうな作戦を。ちなみにお前に拒否権は無い」

「……」

伊澄はこれ以上テルに何を言っても仕方ないと思ったのか、クルッとテルと向き合う。

「分かりました……その方法を教えましょう……」

珍しく伊澄がため息をつく。もう伊澄が折れるしかなかった。

第２４話～レッツゴー鷺ノ宮～（後書き）

なんだかんだこの話で終わらせる筈が、やっぱり３話は掛かってしまいました。　この話はもろ伊澄サイドの話ですから、どうオリジナル混ぜ込むか迷いました。

オリジナル要素ってば難しい。

次で夜の旧校舎編は最後になります。　ご期待……して下さい。

第２５話～幽霊役の人が客にボコられるのは仕方ないと思う～（前書き）

夜の旧校舎編……最後ッ！！

第２５話～幽霊役の人が客にボコられるのは仕方ないと思う～

「……」

善立　テル、１６歳。現在、『とある作戦』に参加中。

伊澄の言っていた、その危険な作戦、テルは恐れずに参加した。

……後悔はしていない……ハズである。

「暑い……」

特に夏だからとか、そういう気温の問題ではなく、純粋に体温が暑い。

善立　テルは白皇学院の旧校舎で異形の姿をしていた。

単刀直入に言おう。

―彼は人体模型になった。

第２５話～幽霊役の人が客にボコられるのは仕方ないと思う～

人体模型になった。　ストレートに言えばそうなる…が端から見れば確実に『どうしてこうなった』と疑問が浮かぶので経緯を説明したい。

―それは数分前。

「俺が人体模型に？」

「はい。　私のさっきの術を遠隔操作で動かしていました。　ですがテル様に人体模型になってもらう事で、よりキレのある動きができます……」

伊澄の言わせれば、遠隔操作は難しいとのこと。　しかし、テルが人体模型になることでテルの意志で人体模型に生き生きとした動きができるとのこと。

（でもコレってさっきの作戦とだいぶカブってる気が……）

そんな疑問をよそに、伊澄は続ける。

「それでは早速人体模型になって貰いましょう……」

そう言い、伊澄は札を取り出してテルにかざした。

「ちょっ、待て！　まだどうやって人体模型になるか方法も聞いてない！　痛いのか！？まさか痛いのか！？」

「……」

「なんとか言えぇぇぇえ！！　何かと不安になるだろうがぁぁぁ！」
何も答えない伊澄にテルが叫んだが伊澄は構わず札に握る力を込めた。
「いーくいっぷ！」
「うおっ！？」
突然伊澄の札が輝きだし、辺りが明るくなった。
カタカタカタ……
「ん？」
テルは何かしら聞こえた方向を見て驚愕する。
「ッッッ！」
見たのは下。　そこにあるのは無数の人体模型のパーツ。　そのパーツが今小刻みに動いていたのだ。
そして次の瞬間。
「うおッ！？」
信じれない事が起こった。　小刻みに動いていたパーツがふわっと浮かんだのだ。

更に。

「え、いや、ちょっと……」

テルは思わず後ずさる。　人体模型のパーツがだんだんとテルに近づいて来ているのだ。

そして……

ガッシーンッ！

「ギャアアアア！　俺の腕がァァァ！」

これまでにないほどの絶叫。　テルの右腕に人体模型の右腕が重なるようにくっ付き、その瞬間、右腕が完全に人体模型の右腕と化した。

ガッシーンッ！

「俺の足ィィィィ！」

今度は左足が人体模型の左足と同化。　テルは更にはパニックに陥る。

「安心して下さいテル様……見た目はその姿でも中身はちゃんとテル様の体ですよ……」

「どういうこった！？」

落ち着かせようと伊澄は説明したがテルは未だに理解不能状態。

伊澄はさらに説明を加えた。

「この術は肉体強化が目的です。　周りの物体を自身の肉体に武装させてテル様はエ〇ォリュダーになるのです……」

「俺はどこの勇者王だ？」

そう言われて見ると覆われた真っ白な硬い物質の下には自分の本当の腕がある感覚が分かる。

伊澄のこの術は体に武装するようなもの。　簡単に言わせれば勇〇王ガ〇ガイガーに出てくるサイボーグのお兄さん。

「確かに……体自体は変化がないんだな」

体が安全だと分かって納得したのかテルは右腕で頭を掻く。　いつものような感覚ではなく硬いのが頭にカツカツと当たっている感覚だ。

「ではどんどんいきますよ……」

「おう、どんとこい」

テルはドンと胸を張ってみせる。　なんやかんやでテルの改造？は進んでいった。

ガッシーンッ！

ガッシーンッ！

ガッシーンッ！

「……なぁ伊澄、コレはどういう事だ？」

「えーっと……」

伊澄も戸惑いを隠せないでいる。

「なんか腕と足が逆な気がする……」

「申し訳ありません」

テルの右腕はちゃんと人体模型の右腕だが左腕は右足がついている。
そうなれば右足は左腕、とまぁ色々と違っていた。

「あと重大なのは頭、なんで頭が後ろむいてんだよ。　俺が真っ暗で何も見えねぇじゃねーか」

テルは反対方向にはまっていた頭を強引に１８０度回転。　ゴキンという音とともに定位置に戻した。

「ついでに言うとボロボロなんだけど、そこんとこ何とかならない？」

よく見ると体は所々ヒビが入っており、頭なんて顔が半分割れている。

「そこはガムテープで補給ということで……」

「いや！　なんでそこだけ現代技術なんだよ！？　鷺ノ宮の術でなんとでもなるだろ！？」

伊澄は突っ込むテルを無視してどこからともなく取り出したガムテープをペタペタと張っていく。

「これでなんとかお願いします……！！」

突然何かに気づいたのか、伊澄は目を細めて袖で口元を隠した。

「誰かが来たようです。　ハヤテ様達でしょう……テル様、頼みます」

そう言うと伊澄はそそそと奥に隠れた。

「オイコラッ！　待てッ！　面倒くさいとかそう言うのじゃないだろうな！？」

そして現在に至る。今はこうしてやって来る二人を待ち伏せだ。

「あの…やっぱり帰りませんか？」

「ダメよ！！　絶対、正体つかんで見せるんだから」

「で…でも、危ないですし……」

「何言ってるの？危ないから退治するんでしょ？」

「む……来たか」

テルも息を潜めた。。　途中、カツカツと硬い音がした。　なんともこの姿では動きにくい。

暗い奥からやって来たのはやはりハヤテとヒナギク。

ハヤテは若干、この状況に戸惑っているがヒナギクは逆だ。　全身から殺気のオーラが溢れている。

しかし、ヒナギクが少しちらっとハヤテを見た。

「だいたいさっきから帰りたがってるけど…せっかく夜の女の子と二人きりなんだから……もう少し嬉しそうな顔してもいいんじゃない？」

（そうだ。　なんせ白皇の生徒会長だ。　なんせ若い男女二人が学校にいるんだ）

遠くで見守るテルの心の声。　実際若い男女はハヤテ達だけでなく、テルや伊澄もだ。

「いや、でもなんかヒナギクさんとはなしていると……お嬢様と話

をしているような気がしてきて……」

「な！！　なに子供扱いしてんのよ！！　私、生徒会長なのよ！！」

（いや、生徒会長をそこで誇示する理由は何だよ）

「ふん！！　まぁいいわよ！！　一人でも退治して見せるんだから！！」

「まぁ一応ご一緒しますけど……」

二人は取り敢えず歩きだす。

（は～　ヒナギクさん、やっぱりお嬢様と同じで……すごい負けず嫌いだなぁ～）

「それにしても…冬だって言うのに、なんか暑いわね～」

周りの気温に耐えきれなくなったのか、ヒナギクは胸元の服をパタパタとさせた。

「！！」

ハヤテはその行動にすぐさま顔を赤らめる。

「ん？」

ヒナギクもハヤテの顔に気付いたのか、急にニヤニヤしだした。

「な～に赤くなってるのハヤテ君？」

「べっ！！　別に赤くなんかなっていませんよ！！」

ハヤテは必死に否定するがその言動からして動揺しているのは分かり易い。

「何よ？　人の事子供扱いしておいて……やっぱり私の事意識してるのかしら？」

なぜだかヒナギクも楽しくなってきたので更に茶化してみる。

「別にヒナギクさんの事なんか、意識してませんよ！！」

カッチーン

何かと気に障る発言にヒナギクの顔が一気につり上がった。

ハヤテは更に続ける。

「だ…だいたい前も言いましたけど…ヒナギクさんは少し無防備すぎます！！」

（無防備もなにも、元からサ○ヤ人より強いじゃん……）

隠れているテルは突っ込んでみるがそれは誰にも聞こえない。

「ヒナギクさんの事、なんとも思っていない僕だからいいようなものの……普通の男の子前では、もう少し恥じらいを持たないと……」

いつの間にかハヤテは説教モード。　黙ってヒナギクは聞いてはいるがまるで自分がアウトオブ眼中かのような言い方に彼女の怒りのバロメータは上がりっぱなしだ。

「そんな軽い事では……何をされたって―」

「いいわよ」

「へ？」

ヒナギクの言葉にハヤテの間の抜けた声。

「ハヤテ君になら……何されても……」

窓から差し込む月の光が二人を照らし出す。　二人の距離は近い。

後ろにいるヒナギクの手がハヤテの執事服の背中に触れた。

細いヒナギクの手がぴとっと止まる。

そんな端から見て危険な展開を迎えている二人だがこちらも危険だ。

「野郎　そんな事を……ッッ！！」

今なら地上最強の生物並と殺気を醸し出すテル。　幽霊は絶対に近寄らないだろう。

あと、そんな事は始まってすらいない。

「―なんて冗談を言うと男の子は真に受けるのかしら？」

「う〝っ！！」

クルッと振り返ってハヤテの目に映ったのはヒナギクのクスっと笑った顔。

ハヤテははめられた。　一手とられたと思わされた。

「ご忠告ありがとう。　今後、注意するわ。　ハヤテ君みたいな男の子には」

膝をつくハヤテを前にヒナギクは勝ち誇った笑みを浮かべる。

（ヒナギクさんの事、お嬢様と同じくらい負けず嫌いだって思っていたけど……）

ハヤテは自身の目測が誤っていたと気づかされる。

（お嬢様以上に負けず嫌いだ……）

「あー！　もう面倒くせぇ！　俺は出るぞ！」

テルはこれ以上待たされるのがいやだったのか、たまらず飛び出した。

「うわっ！　あれさっき僕が倒した人形！！」

「え？　ウソ！？　あ！！　ホントだ！」

ヒナギクとハヤテが若干動揺している様子。

「まったく、動きづれぇな……」

カクカクと近づくテル。　人体模型なので関節が固定されており、動きにくいのだ。

『帰れー！！　人間どもー』

（あれ？これは伊澄の声か？）

自分が喋っていないのに発せられた声は伊澄の声だ。　多分、これも伊澄の術なのだろう。

テルは声に合わせて両手を掲げるポーズを取って威嚇する。

「ひぃ！！」

（お？　意外に効果あり？）

威嚇が効いたのかヒナギクとハヤテが悲鳴に近い声を上げている。

『帰らないとお前たちを……た…食べちゃうぞ！！』

「そうだ帰れ帰れ」

伊澄の声に続き、テルも喋り出した。

「ところでさっきから出ているナレーションみたいなのはなんですか？」

「あと一人なのに声が二つあるのも気になるわ……」

ハヤテとヒナギクもこれにはすぐ気付いた。

『あ、これは…脳に直接話しかけているという描写で……』

「そうだ。　マジ〇ガーZだったかに一人で二つの人格をもつ人間もいたようないないような……」

伊澄とテルは互いにバレないように気をつける。

「へぇ～……てぇ！！」

「ぐほぉ！」

ふーんという顔をしていたヒナギク。　そこから一変、どこからともなく鉄パイプを取り出して不意打ちの一撃を与える。

テルの体が床を転がった。

「不意打ちはズルいぞ……」

「さっきはよくも驚かしてくれたわね！！」

「俺は関係ない……」

「このままじゃすまさないわ！！　覚悟しなさい！」

テルはなんとか体を起こすがヒナギクの一撃が重い。

「でもさっき倒したはずなのに…なんで元に戻ってるんですか？」

『そりゃ頑張って修理を……』

ハヤテが一番疑問に思ったことに伊澄が答える。

「え？　修理？　自分で？　それとも誰かが修理を……？」

「―と！！　とにかく！！　ハヤテ様！」

これ以上詮索されるとまずいと思ったのか伊澄が声を張り上げた。

「ここから早く立ち去って下さ…いや…た…立ち去れ――！！　の…呪うぞ――！！」

伊澄の声に合わせてテルはまたしても威嚇のポーズ。　だが生徒会長には通じなかったようで……

「ふん！！　呪いが怖くて生徒会長は勤まらないのよ！！　さっき受けた屈辱！！　百倍にして返してあげるわ！！」

「だから俺は関係ないって……ん？」

必死にヒナギクの言葉を否定しようとしたとき、テルの視界が歪んだ。

―なんだ？　アレ？なんかコイツ見たことある……

―アレ？　見たことあるって言っても、違う……こんな感じの奴を見たことある……だな

なぜかだが、鉄パイプを構え、鋭い目でこちらを見るヒナギクの姿が誰かと重なって見える。

―誰だろう……

―思い出せない……

「たぁ！！」

「グギャ！」

テルが呆けている間にヒナギクの鉄パイプによる一撃。

『の…呪ってしまいますよ～』

「うるさい！」

「ギャース！」

『お…オバケは怖いから帰った方がいいですよ～』

「あなたを倒したら帰るわよ！！」

「ギャアアアア！！」

攻めるヒナギク、受けて絶叫するテル、頼りない伊澄。　場はもう混戦状態だった。　一方的にヒナギクの攻めだったが。

（ハヤテ……様？）

そんな戦い？　を眺めていたハヤテは一人疑問が浮かんでいた。

（もしかしてこれは本当に立ち去って貰いたいだけの……ただの脅しなんじゃ……？）

「ぐおお……」

（この剣道バカが……こちとらなんもできない無防備な男だぞ！？）

体のパーツにヒビが入ってきた。　中身のテルもダメージがキツい。

（何とかしてあいつ等には帰ってもらわないと……特にコイツ！）

テルは震える足で立ち上がりながらヒナギクを見た。

（コイツが納得するやり方で帰ってもらわねぇと……）

「ヒナギクさん！　そんな恐ろしい化け物、放っておいて帰りましょうよ！！」

「ダメよ！！今度こそ絶対私が倒すんだから！！」

ハヤテが遠くでヒナギクに促すがそこは会長、一歩も引く気はない。

「そんな…『その人形をヒナギクさんがかっこよく倒さないと、僕たちがここを立ち去れない』なんて事言わないで帰りましょうよ！！」

ズキューン！

（ソレだァァァァ！！）

コ○ンが閃いた時にでる効果音と共にテルはすかさず伊澄を見た。

「……」

伊澄はそれがしっかりと聞こえたようで二回ほど頷いて見せた。

簡単な理屈だった。　ヒナギクのプライドの高い人物がこの状況で納得してもらうこと。　それはヒナギクが人体模型を完膚無きまでに倒せば、彼女の面目も立ち、満足して帰ってもらう。

（なにも怖がらせて帰らせる必要は無かったんだな、よーし後は適当にやられて……ってアレ？）

ここでテルはあることに気付いた。　なら、やられる程の一撃を受けるのは誰だ？　自分だ。　そう、テルだ。

（え？　最後までこんな扱いなの？）

バキャ！！

「「へ？」」

そう声を出したのはヒナギクとテルだ。
さっきの砕けたような音は人体模型からだった。

伸びる両手、何故か飛び出している肋骨（テルのではない）、更には腕の数まで増えていた。

明らかにかかってこいやと言っているような物だ。

挑発もいいとこだ。ヒナギクがそれを見て闘志が上がらない筈がない。

（ギャアアアア　伊澄ィィィ！　俺に何か恨みあったかァァァ！！）

「ふん！！　そんな姿を変えたところで……」

ぐるんぐるんと手元で鉄パイプを回転させ、覇気を飛ばすかのように構えると一気に踏み込んだ。

（アア――ッ！　死ぬ――！！　……ん？）

シュウウウ……

背中の部分に何かムズムズするような違和感。　背中には一枚の札。

「コレってまさか……」

勘がイイ人はお気づきかもしれないが、この札、ナ〇トで使われている……

「起爆符ッ！？」

「覚悟しなさい！　私が……やっつけて――」

ドッカーン！

何とも間抜けな効果音だが気にしない。
ヒナギクが鉄パイプを振り下ろす前に人体模型は爆発してしまった。
明らかにワンテンポ早い。

「……」

「……」

ヒナギクは訳が分からない様子。　ハヤテは苦笑いだった。

『やられたー』

伊澄が必死に負け宣言。　テルの姿はない。　爆発と共に何処かへ飛んでいってしまった。

「え？　まだ私何もしてないのに……」

ヒナギクは疑問の眼差しを人体模型の頭に向けた。

「や！！　ああ！！　ス…スゴイですねヒナギクさん！！気合いだけで霊をやっつけるなんて！！」

『ホントホント！！』

ハヤテと伊澄が笑いながら返す。ヒナギクは首を傾げた。　ハヤテは更に続ける。

「きっと今のが『気』ってやつですよね？　『覇気』とかにも似てますし！」

「でも私別に……」

「ル〇ィだって無意識に使ってたんですから！！　いやースゴイなーヒナギクさんは！！」

「いや……『気』なんて普通使えな―」

「使えますよ！！」

ハヤテは両手を大きく広げた。

「いやー僕も今必殺技覚えたいと思ってるんですけど……やっぱ必殺技は『気』とかじゃないと！！　僕も修行とかして早く覚えたいな―！！」

「……」

何かを隠してそうなハヤテの言動にヒナギクはじーっとハヤテを見つめる。

ここまで来て状況が悪化したら不味いが……

「じゃ会得したら見せてね」

「へ？」

ヒナギクは笑ってみせた。

「『気』を使って相手を倒す必殺技……ハヤテ君が会得したら必ず

見せてね」

「え〝…？　え〝…？」

危機は回避した。　回避したはずなのだが……

「じゃ！！　ハヤテ君、いっぱい修行しなきゃいけないだろうから……帰りましょうか！！」

ヒナギクはそう言うと楽しげに踵を返して歩き出す。

「ちょ……！！　ま…！！　ヒナギクさん！！」

ハヤテも後を追う。　また厄介事を抱えてしまったらしい。

「ようやく帰ってくれるようですね……」

「……」

二人が消えていった後、伊澄がひょっこりと出てくる。　しかしテルは動かない。白目を向いて倒れている。

「……ほっと」

伊澄は札をかざすと　蒼色の光がテルを包んでいく。

「……ブッハアアアッッッ！」

まるで死の淵から蘇ったような起き上がり方。　テル復活。

「ホ〇ミの次はザ〇リクか、まるで賢者だな」

「……」

「ん？　どした、伊澄」

伊澄の表情が少し沈んでいた。　伊澄が頭を下げる。

「申し訳ありませんでした……危険と分かっていながらテル様にこんな役を……」

「こんな役？」

ボロボロの体を見て伊澄が言っているようだ。

「やっぱりテル様を巻き込んでしまうのはいけません……ここからは私が一人でやります」

伊澄は暗い表情でどこか悲しげだった。　間違ってもテルを爆破させたりと危険な目には合わせたく無かったのだろう。

それほどまでに彼女は責任感が強いのだ。

責任感が強いというのは別に負のステータスではない、誰かをまとめたり、物事には真剣に取り組める。　むしろ今の若者たちに必要なくらいだ。

しかし、責任というのは背負いすぎるとどこかでつまづく……そうなるとなかなか立ち直れない、人間というのは。
ずっと一人で戦うのだろう、これから先も……
巻き込みたくない、支えてやれる人がいない中、強い責任感だけを抱えて……
若いのにご苦労なこった……とテルはつくづく思わされた。
「バカが……」
ポンと伊澄の頭にテルの頭が乗っかった。
「巻き込みたくないなら最初から俺を連れてくんじゃねーよ」
伊澄の頭がいっぱいになるほど覆われしないが
「だが最終的にお前に付いていくと決めたのは俺だ。　だったらいちいち気にしてんじゃねぇ……」
どこか暖かくて、大きい。
「使うなり囮にすらなりなんなりしやがれ、まだ帰らねーぞ俺は」
誰かが支えていかなくてはならない、力不足かもしれないがテルなりの力添え。
「いいんですか？」

「あ？」

伊澄はテルと向き合いながらオロオロした感じで呟く。

「また危険な事に会っても……」

「うるせーな、ぐだぐだ言ってっとまた抓るぞ」

頭を掻きながらテルは伊澄に言い放つ。

伊澄は今度は別に折れた訳でもなく、ため息をつかずに笑顔で答えた。

「わかりました……」

「おう」

「では依頼された本物の悪霊を倒して、私達も帰りましょうか……」

「まだいんのかよ……」

あからさまに嫌な顔をするテルを伊澄がじーっと見ていた。

「わーった！わーったよ！」

面倒くさそうにテルは伊澄の後ろについて行く。

夜の旧校舎はやはり怖い。

「なぁ伊澄」

「なんですかテル様？」

「この世から悪霊とかが居なくなったらお前も自由になれんのか？」

「さぁどうでしょう……」

「ま、流石に分かんないよな」

「でも……」

「ん？」

「私は別に悪霊や霊が別に消えなくてもいいと思います……」

「お前、案外こえーな……どういう意味だよ」

夜の廊下を二人は歩く、少ない人数だが、百鬼夜行にもまけないかもしれない。

「それは……内緒です」

第２５話～幽霊役の人が客にボコられるのは仕方ないと思う～（後書き）

眠い……急ピッチで仕上げすぎた……なんか変な終わり方……
どことなく伏線はるなんてガラじゃないな～　なんて思ったり……
もう少しで物語が動く話もありますがまだまだ先の話。

というよりテルのポジション、どうせいつか関西の子に取られちゃうんですよね～　前にも言ったかも知れませんが暖かい目で見守って下さい……

一本のビデオテープにはたくさんの名シーンが詰まっている（前書き）

まぁなんというか、最近、出番がない人達にと思って作った話なんですよ。

今回出てきたキャラは知っている人は知っている。

なんでこんな奴を出したかは、１０万アクセス突破記念という事で……

一本のビデオテープにはたくさんの名シーンが詰まっている

とある昔の話。　日本のグループで高い知名度を誇っていたコングロマリットがあった。　化学製品を中心に不動産、様々な企業を参加におさめていた橘グループである。

だがこれは悪魔で過去の話で不況の波に飲まれたグループ企業はほとんどが倒産した。　資金調達もできず、唯一残ったのはエンタテイメント部門だけだ。

そんなグループが忘れられていく中、たった一人の男がグループの再生を計っていた……

～一本のテープにはたくさんの名シーンが詰まっている～

―新宿某所。

ここはとあるレンタルビデオ店、その店内。一人の女性が鼻歌を交じらせながらお盆にコーヒーを載せて歩いていた。

「♪～♪」

と言っても注目すべきはメイド服の姿だろうか、レンタルビデオ店なら店員らしい服装があるが彼女はいち店員でありながらある人物のメイドである。

ある人物とはこちらずっとパソコンを眺めている少年、眺めていると言っても睨んでいると言ったほうが正しいか。

「若、コーヒー入りましたよ」

眼鏡のメイド、貴嶋サキが若と呼ばれる少年に声をかける。

「ありがとよ、サキ」

橘　ワタルはサキから渡されたコーヒーに口をつける。

「ふぅ……」

「どうしたんですか？　お疲れのようですが……」

「いや、久しぶりの出番だな～って……」

「なんでパソコンの画面を見ながらそんな事を考えてるんですか？」

「だって俺が出たのってこの小説が始まって４ヶ月ぐらい後だぜ？
そこから変な特別編挟んで再登場まで数ヶ月……」

「いいじゃないですか、私なんてこれが初登場なんですよ？」

「今月の売上もなんか今一つだし、どうにかなんねえかな……」

「しっかりして下さい、若は店長なんですから」

サキはお盆を取ると悩めるこの店の店長に言った。

途端にワタルもやる気のある顔になる。

「そうだな、何が何でも橘グループを再建させないとな……」

「はい」

サキも闘志のあるワタルを見て笑顔になる。

橘　ワタルはこのレンタルビデオタチバナの年若い店長である。グループが衰退してもそのグループを再興させようと日々奮闘しているのである。

「私もできる限りなら何でも手伝いますから」

「ああ、本当にできる限りでいいからな」

「なんか言葉の裏にトゲのあるものを感じますが？」

ワタルは黙ってコーヒーを飲む。　こう言うのはサキの特殊な能力じみたドジさにあるのだがそれは後。

その時、店の自動ドアが開いたのである。

「ん？　客が来たな……」

「そうですね、なんか凄い借りてたんですかね？　あんな山積みになるまで……」

サキが見据える客はヨレヨレとした歩き方で向かって来ている。
山積みになったビデオの数は分からないが上半身が隠れる程。
「あんだけ貸したのはナギぐらいか？　ようやく返しに来やがったか」
「という事は三千院家の執事さんでしょうか？」
サキは手に持っていたお盆をカウンターの上に置いた。
「すいません、手伝いましょうか？」
「ん？　ああ、頼む、片腕でこの量は大変なんだ……」
サキからの視点で顔は分からないが声を確認することはできた。
サキはその男に近付いていく。
「おいサキ、またドジ踏むなよ～」
ワタルが遠くから声を掛ける。　サキは不満な表情だ。
「もう若ったら、心配しなくても大丈夫ですよ。　私もそう簡単に……ひゃっ」
ずるべたーん。　サキはなにも無いところで足を滑らして前のめりに倒れた。　倒れた拍子に目の前の客にぶつかる。
「うおっ！？」

男はバランスを崩し、山積みになったビデオが大崩壊を引き起こした。

「あーあ……やっちまったか……」

ワタルはいつもの事のように呟く。　やがてサキの方に駆け寄った。

「サキ、大丈夫か？」

「え、ええ大丈夫です……」

「アンタも大丈夫か？」

「痛ってーな、取り敢えず大丈夫だ……」

大量のビデオが崩壊をして、辺りはビデオが散乱している。
男が顔に乗っかっていた一枚のビデオに手を掛けどかす。
ムクッと起き上がった男の顔を見てワタルは目を丸くした。

見たことがある。死んだ魚のような瞳にやる気のない顔……

「おおおお前はぁぁぁ！！」

「ん？　おお、お前はいつぞやの……」

善立　テルだった。

○

「……」

「……」

レジのカウンターを挟み、二人は黙って対峙していた。　対峙していると言っても睨んでいるのはワタルだ。　テルに至っては頭を掻いている。

「あのぅ～　若、お知り合いですか？」

耳元でサキが小声で聞く。

「まぁ、一緒の学校に通っている奴だけどよ……三千院家の新しい執事らしい」

「あの人がですか？　」

小声でサキはワタルに言う。　そしてパンッと両手で音をたてた。

「若の友達ですね！」

「ハァッ！？」

ワタルは思わず声を出してしまう。　が、サキは更に続けた。

「すいません、若のお友達でしたか。　コーヒーを持って来ますので少しお待ちを……」

「イヤ、違うサキ！　別に会った事があるだけで友達とは……」

「何を言うんですか若！　男友達なんてあまり居ないんですから！」

「失敬な！　俺にだって男友達の一人や二人……」

「友達は多い方がいいはずです！」

ワタルの言葉を沈めるとサキは店の奥にある台所に向かった。

残ったのはワタルとテルだ。

「おお！」

「なんだよ……」

何か思い出したかのようなテルにワタルは聞いた。

「お前たしか白皇で告白してた奴か！！」

「ガアアアアッッ！」

ワタルは思い出したくない記憶を思い出され、顔を真っ赤にするほど叫んだ。

「まぁまぁ、誰にでも間違いはあらぁ、人生に汚点は付き物よ」

「お前！　まだ覚えてやがったのか！」

「あんな告白の仕方したら俺の方は絶対忘れねーって」

「お前……それ以上言ったら……」

「あっ、伊澄だ」

「え？　どこ！？」

テルの言葉にワタルは顔を真っ赤にさせて辺りを見渡す。　が、当然のごとく伊澄は居ない。　ワタルが視線をテルに戻すとテルがニヤリと笑みを浮かべていた。

「分かりやすいな」

「もう殺せ……」

ワタルはレジで顔を突っ伏す。　恥ずかしく仕方なかった。

「しかし……まぁ」

テルは店内を見渡す。　ナギの友達という事はいくらか聞いていたからＴ○ＵＴＡＹＡ顔負けするぐらいの巨大なビデオ店だと思っていたが案外普通だ。

「案外ちっさいんだな……」

「うるせーな、いつかでっかくしてやるんだよ！」

突っ伏していた顔をあげてワタルは言い放つ。

「店長、橘　ワタルがこの店でっかくしてやる！　ナギにも負けない位にな！」

「せっかくナギがいるんだから色々と知恵でも借りたらどうだ？」

テルの言う事も一理ある。　ナギが幼なじみという点で手助けなどして貰えるのは確かだ。

だがワタルは首を頑なに横に振る。

「それじゃあ意味ねぇんだよ。　ナギにも頼らないで、俺の力でっかくして見せなきゃな……」

「さすが子供店長……」

「バカにしてるのかお前は？」

「若〜　コーヒーお持ちしました♪」

区切りのいい所でサキがコーヒーカップをトレーに乗せてやってきた。

ガシッ

「あ……」

「げっ……」

ワタルは嫌な予感がした。　この予感はサキがいる時によく当たる。

サキは見事に足を滑らしてトレーに乗せた二つのコップをぶちまけた。

テルの頭に……

「ギャアアアアア！！！」

頭にかかったコーヒーはまさに熱湯であり、頭を伝い、背中までも届く。

たまらずテルは床を転がった。

「すすすすいません！　お怪我は！？　大丈夫ですか！？」

サキは慌ててテルに近づくが……

ドカッ！

「あ痛！！」

サキは慌てるあまり寄りによってビデオを並べていた棚に頭をぶつけてしまった。

そこからは正に不幸の連載。　棚は崩れ、テルはビデオの土石流の犠牲者になる。　当然下敷きにもなった。

「サキ……それ、ある意味暴力……」

「なななな、何を言ってるんですか！？　早く助けませんと！！」

ワタルとサキは急いで下敷きになったテルを救出した。

○

「どうして俺がこんな目に……」

「あぁ…スマン」

テルを救出した後、ワタルとテルは倒れた棚と散乱したビデオの片付けをしていた。

「なぁ、まさかサキさんってかなり……」

「あぁそうだ。　かなりアレな方だ……」

ワタルが溜め息混じりに言った。　ワタルの見据える先にはサキが一生懸命にビデオを片付けている。

が、ビデオを運んでいたサキはまたしても転倒した。

「もうアイツにはやらせない方がいいな……ってお前そう言えば……」

とここでワタルがテルの一点に目がついた。　グルグルに包帯が巻かれた右腕だ。

「何したんだよ。右腕サイ◯ガンに改造したのか？」

「あ？　違ェーよ。　骨折だ骨折」

「骨折ぅ？」

呑気に答えるテルにワタルが目を細める。

片腕なのに執事の仕事やってた事に驚いたのだ。

なぜ骨折したかは特別編参照。

「よくやるなぁ……」

感心するワタルだがテルの表情は冴えない。

「どうした？」

「だってなぁ、マリアさんが最低限あたりは出来るはずだから休まれねぇんだよ」

テルの骨折は私生活には支障は無い、執事の仕事もそれなりに出来る。　そう見越したマリアの判断だ。

下手に休ませてサボリ癖をつけないようにするためである。

「なんか……大変なんだな」

「まぁ色々と……な」

お互いが苦笑いを浮かべているとサキが声を掛けてきた。

「すいませんでした……コーヒーをぶちまけるつもりはなかったのですが…」

ぺこりと頭を下げて謝るサキをワタルが宥める。

「気にすんなって、変に気張るからそうなんだよ。　あんま無理すんな」

「若……」

励まされたサキは涙目にワタルに笑顔を向ける。

「へー」

テルは口をへの字にしてその光景を見つめつつ執事服を脱いだ。

やはりコーヒーにより濡れまくっている。　当分乾きそうにない。

んでもって……

「乾くまで取り敢えずコレを着てて下さい」

サキがテルに渡したのはビデオ店の店員がよく着ている服だった。

「なんでこんな事に……」

「仕方ないだろ、俺のは全く小さすぎるし」

とは言っても執事服でなくとも何故だかとても似合ってしまうのは何故だろうか。

「そういやナギがまた借りて来いって言っていたような……」

テルが取り出したのは一枚のメモ用紙、ここにナギの頼まれたビデオが書いてあるのだ。

「どれどれ……逆シャアか、古いの見てんなアイツも……まぁいい作品だからな」

ワタルはその足で頼まれたビデオがある場所へ行く。

途中、数々のビデオ、ＤＶＤに目が移るが、ここレンタルビデオタチバナはレアな物品が存在する。

「うわ、カウ〇ーイ・ビバップのテレ東版があるじゃねーか」

「ああ、ついでにミンキーモモ、よみがえる空、チャージマン研もあるぜ」

よく見れば、悪魔の毒々おばちゃん、蠅男の恐怖、未来警察ウラシマンなどの好事家が涙を流すような品がたくさんある。

ここになら作者の死ぬほど探しているバキのＯＶＡもあるかもしれない。

「こういうのをナギに見せればいいんじゃね？」

テルが顎に手を当てているとワタルはフフと笑った。

「コレは貸し出しては無いっつうの、悪魔で俺がナギに自慢するための物だからな……」

「お前、随分と手の込んだスネ夫ぶりだな……」

「すいませーん」

遠くから二人を呼ぶ声。　どうやら客のようだ。

「アレ？　テル君じゃないかな？」
「あ、にしっ……ジミー」
「なんで言い直したのかな！？　合ってたから別にいいよね！？」
店内に現れたのは西沢　歩だ。　制服姿からして学校帰りだろうか。
「アレ？　というかテル君、なんでワタル君のビデオ屋にいるの？
バイト？」
歩はテルの店員姿に気になったのかジロジロと見始める。
「ヘイ、ジミーさん。　そんな事してたら警察に突き出すぞ」
「な、なんで警察沙汰になるのかな？」
「どうでも良いけど今日はどうした？」
二人のやりとりにワタルが割って入った。　歩は渋々答える。
「えーっと、ジ〇ーズを……」
その言葉にテルは苦い顔した。
「なんか……普通」
「ていうかなんでジ〇ーズ？」
ワタルも訳が分からないようだ。

「すいませーん」

またしても客人。　ただの人のようだ。

「あのぅ……勇〇王ありませんか？」

「はーい、ちょっと待っててください」

客の応対をするためワタルはその場を離れていった。

「すいませーん」

「へ？俺？」

今度声を掛けられたのはテルだ。

「あのぅ銀〇伝のＤＶＤを借りたいんですけど……」

「え、いや、あの俺店員じゃないんだけど……」

「すいませーん、ＡＫ〇ＲＡはありますか？」

何故かどんどんと客はテルを店員と思って声を掛けてくる。

「普通に考えてそんな服装をしてるからじゃないかな？」

歩が一人ポツリと呟く。　客の足はまだ止まらないようだ。　どんどん入ってテルに向かっている。

「すいませーん、遊〇王５Ｄ，ｓを！」
「すいませーん、時をかける少女を！」
「すいませーん！！」
「すいませーん！！」
「すいませーん！！」

「ダァァァッ！　そう何人も捌けるかァァァ！　ていうかなんでお前ら自分で探そうとしねぇんだァァァ！」

至極最もなツッコミだ。

テルは仕方なく客一人ずつ捌いていく。

「な、なんなのかな？　なんで人がこんなにたくさん……って、うわ！！」

歩は雪崩のような人混みに飲まれて行く。

「にゃーッ！！？」

押し進む人混みにより歩は店内から一気に店外へ放り出された。

（どうして俺がこんな目に……誰かが俺に不幸エネルギーを与えているに違いない）

何故だか関係ないのに巻き込みをくらうテル。　不幸とは動き出したら最大を迎えるまで止まらない。　それがテルの不幸のスパイラル。

○

約数時間後。

「ハァ……」

客足も大分落ち着き、テルも漸く休憩。　溜め息をつきながら勢い良く椅子に座り込んだ。

「スゴいですよ若！　今日は大繁盛ですよ！？」

「そうだな！！」

サキがぴょんと飛び跳ねそうな顔だ。

ワタルも今回の売れ行きに顔が綻んだ。

「俺はとんだ疲労を重ねたけどな……」

テルは目を細めながら肩を揉む。　ビデオ屋の仕事がこんなに疲れ

るとは思ってもいなかった。

「ゼェ…ゼェ……」

「ん？」

店の自動ドアが開き、誰かが入ってくる。　息を切らしながらやってきたのは歩だった。

「なんだ、まだいたのかジミーヘントリー西沢」

「な…なんかプロレスにいるような名前ね……」

息を切らしながらもツッコミを入れる普通の底力を西沢は発揮した。

「若、今日はすき焼きにしませんか？」

サキが目を輝かせてワタルに言うがワタルは一喝した。

「バーカ。　まだ店は終わってねぇんだぞ。　閉店までが勝負だぞ！！」

「そ、そうですね！　最後まで気を引き締めます！！」

サキは綻んだ顔を一変させる。

「時間的にも、次来た客が……最後の客ッッ！」

時計の針を見てワタルは気合いを入れた。

「俺は全く関係ないんだがな……」

「私に限ってはＤＶＤ返しにきただけなのに……」

歩とテルは疲れた顔で溜め息をついた。

そんなこんなで時計の針が閉店へと近づく中、自動ドアが開いた。

「来たッ！」

「最後のッッ！」

「客ッ！」

サキ、ワタル、テルは目を光らせて臨戦態勢に入った。　それぞれが持ち場に付き、仕事に備える。

サキも今回に関しては油断のない表情。　ワタルの顔を見て、親指を立てた。

「さぁ、なんでも来やがれってんだ！！」

ワタルも精神、肉体、ともに安定している。　どんな状況にもすぐ対応できるようシュミレーションしている。　万事オーケー。

なのだが。

「わーーーっ！！」

間抜けな声を上げながら歩がレジにやって来た。

「ど、どうした？」

ワタルは震えている歩を見て驚く。　ワタルは直感的に悟った。

「コレは……パターン青か！！」

「パターン青ですか！！」

ワタルとサキが何やら専門用語を口にしている。　テルは疑問に思ったのかワタルに聞いた。

「なんだそりゃ、使徒でも来るのか？」

「パターン青、通常じゃ訪れないタチの悪い客の事だ……」

「まさか閉店間際に来るなんて……」

サキとワタルが顔を歪ませている。

ワタルがドンッ！　とテーブルを叩いた。

「クソッ！　ここで邪魔される訳にはいかねえのによ！！」

「……」

握りしめたままの拳はまだまだ震えていた。

テルは椅子から立ち上がった。

「なら、俺の出番だな……」

「な！？　テル、お前……」

ワタルはこれからテルが何をするのかわかった。　しかしそれはテルに危険が及ぶ。

「黙ってろよ。　お前ら二人の夢、ここで簡単に潰させる訳にはいかねぇ……」

片腕をポケットに入れて、テルは首を鳴らした。

「安心しろって、骨折しても俺がなんとかして……」

クルッとテルが前を見据えて、言葉が途中で終わった。

目の前には巨大な男。　身長はニメートルはあるのではないか。
ビデオ屋の天井に頭が着きそうである。　さらに裸足の状態で黒のスエットを着たスキンヘッドの男がヤバい位の笑顔で立っていた。

「ココがビデオ屋カ？」

グルグルと辺りを見渡す男。

ガバッとテル達は身を寄せた。

（オイィィィ！！　なんでこんな所にあの漫画のス〇ックがいるんだよ！？）

（知るかよ！　なんで最凶の死刑囚がこんなビデオ屋にィィィ！？）

テル達は聞こえないぐらいの声で悲痛に叫びまくる。

（で、でででも案外普通の用件だったりするんじゃないかな？）

（そ、そうかもな……）

歩の言葉にも一理あり、ただビデオを借りてに来たとも考えられる。

テルは一途の可能性にかけて、応対した。

「スイマセン、どうしたんですか？　ビデオを借りに来たんですよね？　そうなんですよね？　絶対そうなんですよね？」

（頼むぅぅぅ！　ビデオ借りに来たと言えぇぇぇ！！）

テルは心臓が張り裂けそうな思いだ。

ス〇ックはゆっくり口を開いた。

「アア…ソウダ、君ニ頼ミタイ事ガアル……」

「なんでございましょうか？」

テルが恐る恐る聞く。　そして奴は言った。

「私二……敗北を教エテクレ……」

まるでそれは、プロポーズをするような言い方だったと言う。

（オイィィィ！！　殺る気満々だよアイツゥゥゥ！！）

ス〇ックはゆっくりと近づき、長い腕を振り上げ、テルを指差した。

「アア、ソウダ……君がイイ……」

「俺？」

「ソウダ、君ダ。　君がコノ中デ、一番コッチ側ダ……君カラハ強者ノ匂いガスル……」

テルは体の服装を嗅いで一言。

「コーヒーの匂いならするけど……」

グワシィィィ！！

いつの間にかテルの頭が鷲掴みにされていた。

ヒョイと人差し指と親指で鉛筆の端を持つように軽々と出口へ向かっていく。

途中、去り際にワタルとサキ、歩が親指を立てていたのをテルはしっかりと見ている。

「どうだい坊や、コレが無呼吸連打さッ！！！」

「ミギャアアアアア！！！」

こうして一人の男の犠牲によりビデオ屋は守られたのである。

○

その後、三千院家。

テルが重い足取りで戻るとナギが一人でゲームをしていた。

「おー、テル。　遅かったじゃないか」

「おお……」

「私の頼んだビデオは借りて来ただろうな？」

「もちろんだが……その前にナギ？」

「む、なんだよ……」

「俺ってどんな匂いする？」

ガタンとナギはその場にコントローラーを落とした。　ナギが目を細めてやがて呟く。

「加齢臭じゃねーの？」

「テメェ！　俺はまだオッサンじゃねぇ！！」

「訂正しとくよ。　加齢臭じゃなくて負け犬の臭いだ……」

「オオオッッ！　もう容赦しねえ！！」

テルはナギの頬を人差し指と親指でぐにっとつまむ。

「ひでっ！　に、にゃにゃにをしる！！」

「人の尊厳を無視した発言ッ！　許すまじ！この俺が粛清する！！」

「エゴだよそれは！！」

ナギも負けじとテルの耳を引っ張り出した。　明らかにコッチの方が痛い。

引っ張り合いは続くかと思われたが……

「ナギ～、早く夕飯を食べないと……」

突然、扉が開きマリアが入ってきた。　ハヤテも一緒だ。

二人はつねり合いを目のあたりにして愕然としている。

「テルさん……！！」

最初に口を開いたのはハヤテだ。

「まさかテルさん、お嬢様と！！」

「「は？」」

二人は同時に口を開く。　ナギは目を丸くしていた。　ハヤテは誤解をしてしまっている。

「待て！　待つんだハヤテ！！　私はこのバカテルとはなんら関係はない！！」

「そうだ！！　俺はロリコンでもなんでもないッ！」

ナギとテルは全力で否定する。　ナギとしては誤解されたくはない、大問題だ。　しかし最も問題なのがマリアだ。　さっきから口を開かず、どんよりとした眼でテルを見ている。

「ま、マリアさん！　違います！　違いますから！！　そんなコレからゴミを捨てるような眼差しを俺に向けないで下さい！！」

冷や汗を垂らし続けるテル。

するとマリアは途端に笑顔になった。

だがコレは逆にテルが何度も体感している危険のサイン。

カチッ。

「ん？」

何かの作動音が聞こえ、テルが天井を見ると直径三メートルほどある鉄球がテルに直撃した。

「かぺ……」

打たれたテルロケットは外へ、宇宙にも飛んでいきそうなスピードで窓を突き抜けた。

「「……」」

ナギとハヤテは呆然としている。

「あら？　何か居ましたかしら？」

ナギとハヤテはブンブンと首を振った。　オーラがとんでも無い。

「夕飯にしますか♪」

「「イエッサ……」」

二人は何も言わず部屋を後にした。

ちなみにテルが誤解を解くまで1日掛かったという。

一本のビデオテープにはたくさんの名シーンが詰まっている（後書き）

マリア「どうもマリアです。　１０万アクセス突破記念という事もあり、お祝いをしたいと思っています♪」

マリア「テル君に変わりまして私が質問に答えて見ますか」

質問です。　テル君は屋敷では普段何をしているんですか？　料理は出来ないんですよね？

マリア「はい、ズバリお答えします。　料理は出来ません。というよりも私がさせません絶対に♪　テル君は普段起きては寝癖のまま掃除に入ります。　一応常人ぐらいの掃除力は持っていますから。洗濯をする事もできるようになりました。　この前はタマを入れようとしてましたから……そして疲れると立ったまま寝るので誰かが起こさないとずっと寝てしまいます。　だから何時も私が箒で叩きます。　でも最近、箒程度じゃ起きてくれませんので新しいのを考えないと……庭掃除もやったりしてます。　コッチの方が働きとしてはいいですね♪　そんな感じですよ♪」

マリア「そう言えばこの前の感想で私がだんだん怖くなってきてると書かれてましたがそんな事ないですよねナギ？」

ナギ「ふぇっ？　ま、まぁそうかもしれんが……」

マリア「本当に？」

ナギ「は……い…」

マリア「ですよね～そんな事ないですよね♪　ではまた次回♪」

次回予告ッ

次回予告ッ！！

「海だ……」

青い、青い海の上で。

「タイタニックの『タイ』はな、タイガースの『タイ』やねん」

うるさい関西少女の船に同乗したテルさん御一行。

「そうか、恋愛に必要なのは……つれない態度か！！」

主の思惑が動く動く船上。

「太陽が……渇いている」

「良きクルージング日和ですな……」

懐かしいキャラ達も加わり、ますます盛り上がっていく船の上で別の思惑が働いていた……

「これで設置完了っと……というか俺の事覚えている読者はいるか

？」

そして事件は起こる。

「爆発！？テロリスト！？　一体何が起きてんだ！？」
テロリストの狙いはハヤテ、その主犯を探すべくテルさんはひたすら走る。

「お嬢……さま……」

ハヤテはすでに命の危機。

「お前がこのテロリストたちのリーダーだな？」

「よく分かりましたね……」

そしてテルの身に迫る命の危機！！

「お前の邪魔なら一生してやるっつうの」

「それでは、もう二度と邪魔が出来ないようにしなくてはいけませんね……」

そしてテルの耳に響くのはあの声……

―んじゃ、一番私が得意なこと、教えるね

ピンチに聞こえるのはテルの記憶の断片。　その時、何かが起こる……

これは誰も知らない、もう一つの船の上の出来事。

立ち向かうのは一人の少年。

「簡単に教えてやる……俺が三千院家の執事だ」

第一部終了の船旅が始まる……

第２７話～ＲＡＧＩＮＧ　ＷＡＶＥＳ～

次回予告ッ（後書き）

原作の第五巻の話にとんでもないオリジナルを加えたものです。
前からも言っていたように、これが第一部の最後の話になります。
懐かしいキャラ達も現れるのですが、約一名、本当に皆さんから忘れられたキャラがいます。さて誰でしょう？
分かってしまった人、あなたは凄い人です。

第２７話～ＲＡＧＩＮＧ　ＷＡＶＥＳ～（前書き）

お待たせしました。　本編の２７話、開始です！！

第２７話～ＲＡＧＩＮＧ　ＷＡＶＥＳ～

「僕は…君が欲しいんだ（人質として）」

ナギとハヤテが運命的な出会いをしたクリスマス・イブの…出会いから１ヶ月ッ！

第２７話～ＲＡＧＩＮＧ　ＷＡＶＥＳ～

「ふむ…思ったより小さいな」

ここは東京湾。　車から降りたナギは一目見たソレに対して想像とは違ったと言った表情をする。

「……」

「……」

「あら？　どうしました？　ハヤテ君、テル君」

ナギの隣でハヤテとテルが逆に呆気に取られていた。

鞄片手にマリアはこれと言ったリアクションをする事なく、ナギと

共に歩き出す。

「あの……これ本当に咲夜さんのモノなんですか？」

「ああ」

ナギが至極当然のように答えた。

テルは目の前に存在する巨大な物体を見上げて呟く。

「船……デカくね？」

ボーーッ

と海に浮かんでいる鉄の塊は海に似合うかのように陽気な汽笛を鳴らす。

「コレ、なんてタ〇タニック号？」

「どこかで見たことあるデザインのクルーザーですね……」

「いや、クルーザーのレベル越えてない？　世界一周ができそうな大きさを持ってる船をクルーザーで済ますのかお前は……」

もはや驚くばかりだろう。　ハヤテやテルの言うとおり、そのクルーザーはどこからどう見ても某映画に出てくる沈む船と形が一致していた。

「つーか咲夜って誰だよ」

「この船の所有者だ。　私の幼なじみでもある……ほら、お前等もさっさと乗り込むぞ」

テルの言葉に短く答えて、ナギは船へと乗り込んでいく。　その途中でハヤテが口を開いた。

「でも、お嬢様、なんでいきなり船旅なんですか？」

「へ？　いや…その…」

何故だか理由を探すかのようなナギ。その場は適当な理由で凌いだが、本当の理由はコレだ。

――実は1日前。

皆さんは知っての通り、お嬢様のナギは執事のハヤテに恋をしている。

しかし、最近ハヤテが他の女になびくという事を危惧して、彼との

恋愛に悩んでいた。

そんなナギにも打開策が見つかった。　それは自分の書いた漫画。

ナギの書いた漫画は一般人には到底理解し難い、多分理解すると相当ズレている証拠と言われる内容だ。　ナギが刮目したのは書いていた時の主人公キャラとその先輩。

専ら恋愛ものだが先輩のクールな性格が主人公キャラがときめいている。

「なるほど……」

ナギは書いていたノートを戻した。

（恋愛に必要なのはコレ……つれない態度か！！）

ナギに取って理に叶った要素だ。

（確かに恋愛は追いかけるより…追いかけさせた方が勝ちという…）

十三歳がこんな知識を知っていても生かせるかというのが疑問だが、それ以前にハヤテはナギの事を恋人として認識してはいない。

悪意の無いアウトオブ眼中なのだ。

ナギはコレを知らない。

そんな事を知らず知らず、ナギは『つれない態度』を生かした作戦を考えた。

こう見えて天才なのですぐ思いつくが、恋愛に関しては知識だけの素人だ。

取り敢えずハヤテがナギを頼ってしまうシチュエーションを用意するように考えた結果……

「うわ――――！！　スゴい――イ！！」

太平洋を突き進む船上でハヤテが喜んでいた。

「クルーザーって初めて乗りましたけど…意外と速いんですね！！」

（予想通り初めてのクルーザーにテンション上がりまくりだな、ハヤテ……計画通りだ！！）

子供のようにはしゃぐハヤテを見て、自分の描いた脚本通り事が運んでいる事に笑みを浮かべるナギ。

「テルさん！！　見て下さいよ！！　カモメが優雅に飛んでいますよ！！」

「オイオイ、こんなんではしゃいんでんじゃねーよ。　小学生かコノヤロー」

船の手すりに前からもたれるように、テルは遠くを眺めている。
「大体な、そうやって船の上でテンション高い奴に限って後半でずっとビニール袋片手に横になるんだよ」
「でも、貴重な経験ですよ？　気分が高まらない訳ないじゃないですか！！」
どこまでも気分上昇のハヤテは修学旅行の小学生のようだ。
ナギはどのタイミングで作戦を実行するか見計らっていた。
「お嬢さま、お嬢さま！　あっちには何があるんですか！？」
（ここだ――――ッ！！）
まるで今がその時だと言わんばかりのタイミング。
（今回の私は一味違うぞ！　ドアを押してもダメなら引いてみろという逆転の発想に基づいた作戦を見せてやる！！）
「知らん。　いちいち私に聞くな」
ナギはぷいっと素っ気なく返した。　どうだと言わんばかりに口元に笑みが浮かぶ。
だが予想とは打って変わって……

「あ…す、すいません……」

ナギが振り返るとハヤテがしゅんとした表情でナギを見つめていた。

（ば！　ばかもの！！　そんな捨てられた小犬のみたいな顔を……）

このままでは自分が悪いみたいだとナギはちょっとした罪悪感を覚えた。

「と…！！　取り敢えず私はあっちでコーヒーでも飲んでいる！！
船の中を見て回りたいなら一人で回れ！！」

一応、突き放す事に違和感を感じたか、ナギはそう言い残してその場を去った。

「また何かあったんですかね？」

「さぁ、いつもの事じゃないですか？でもなんか落ち込んでますし……」

テルとマリアが一人ショボンとしたハヤテを見てあれやこれやと考察をする。やがてテルが仕方ないと言った感じで口を開いた。

「んじゃ、フォローは入れてやりますかね……」

「大丈夫なんですか？」

マリアは冷静だが不安の色は隠せない。
だがテルは不適に笑って見せた。
「ま、見ててくださいよ。手はありますから」
マリアは苦笑いを浮かべながらもテルに任せて二人を見守った。

「……」
立ち去ったナギを見てハヤテはテルの隣に着くように手すりにもたれかかった。

「どうしたよ？　ブルー入ってんじゃん？ひょっとしてまださっきのこと引きずってんの？」
どんよりしたハヤテにテルは陽気な感じで話かける。

「僕、またなにかお嬢さまの気にさわるような事を……」
「あんま気にしないほうがいいっつーの、元々あんな奴だったじゃん。　あいつお前だけじゃなく、庶務課のレジ夫もチンしてんだよ」
「レジ夫って誰でしょうか？　オフィスのＯＬ同士による昼休みの会話の男バージョンですか？」
マリアがその光景を見て、静かに突っ込む。
「あいつもあんな奴だからお前も好きなようにするしかないじゃん

……所詮は主従の関係だぜ、俺たちは……」

「エラく込み入った話になってるんですけど」

「甘ったれてんじゃないよォォォ！！」

「ぶっ！！」

次の瞬間、ハヤテにグーパンチが炸裂した。

「負けんなァ！！　強くなりなァァァ！！　東京に…自分に負けんなァァァ！！」

「……」

テルの一撃にハヤテは気絶した。

「手は尽くしましたが修復不可能でした……」

「完全にフォロー出来てませんよね！？　気絶させる必要なんてありませんよね！？」

マリアも猛然と突っ込む。

「しかしホントどうしたんでしょうね。ウチのお嬢は……」

「まぁ、１０月は改編期ですから納得いかない最終回でもあったんじゃないですか？」

「いや、リアルには今１０月ですけど、作中は一月なんで……」

○

「しかしまぁサク、なかなか作りこんだ船だな」

汽笛が海空に響く。　ナギは船の上で豪華に設置されたテーブルの上でティータイムだ。

ナギの目の前でコーヒーを飲んでいるのは短髪に左の髪にヘアバンドをつけた少女。

「ああさよか。　そら良かったの～」

関西弁を使うサクと呼ばれる少女は不機嫌な表情でコーヒーを口につける。

（……）

ナギはそんな様子を見てか一言。

「別にお前が冷たい態度をとっても私はお前に惚れたりせんぞ？」

「なんの話やぁぁぁ！！」

少女は立ち上がって怒り気味に突っ込んで見せた。

「さすがだな、本場関西のツッコミは衰えず」

「まったく……愛沢咲夜をナメるなちゅう話や……しかしやな……」

咲夜はそう呟くと高らかに叫んだ。

「なんでウチがこんなに遅く登場してんのやあああ！！」

「ザコキャラだからじゃないのか？」

「なんやとぉおお！！」

怒り気味の咲夜はドカッと椅子に座り込んで続ける。

「可笑しい話やと思わんか？　なんでウチを最初の方で登場させなかったんや！　幼なじみの中でもウチが最後やと？　ウチを生かすギャグパートならいくらでもあったやろォォォ！！」

（うるさいなホントに……）

ナギは咲夜の叫びを聞きながらそう心で呟いていた。

「あ―イラついたらブラックじゃ足りんかってん、巻田、国枝、アールグレイ持って来てな」

「はいよ」

ゴト。　とテーブルに一杯のカップが置かれた。

「おおきにな……ん？」

咲夜が自分の執事の顔をみて一瞬顔を歪めた。　咲夜の知っている

顔の執事ではなかったのだ。
「あんた誰やねんッ！！」
「ぐはっ！！」
咲夜はどこから取り出したか分からないハリソンで相手の頭を叩いた。
パシーン！と甲高い音が響く。
「あぁサク、紹介が遅れたな。　コイツがハヤテ以外にウチで働いている執事、善立　テルだ」
「へ？　コイツが？」
咲夜が驚いた顔でテルを見る。
「こんな死んだ魚の目した奴がか？」
「あんだとゴラァ！！」
テルは今にも食ってかかりそうな勢いだ。
後ろでは執事の巻田と国枝が日本刀を構えようとしている。
「変わった執事やな。　だがウチは笑いが取れなきゃ意味がないで？」
「ほう、そうかそうか……ならそのコーヒーを飲んで貰おうか」

「なんやねん、コーヒーで笑いが取れるかって……あん？」

「うわ、なんだコレ……」

ナギもカップの中をのぞき込んで嫌な顔をする。

カップのアールグレイは何故か異臭を放つ鼠色の液体だ。

「なんなんや…コレ」

「ふっふっふ……セメントだ」

バリィィィン！

「ブルアアアッ！」

カップが割れる音と共にテルは床を転がった。　咲夜はセメント入りカップをテルに思いっきり投げつけたのだ。

「なんつーもん飲ましとんのや！　ウチが頼んだのはアールグレイやっちゅうねん！　グレイやからか！？　グレイやからか！！」

「さすが本場関西のツッコミ……威力ともに半端じゃない……」

「今ので笑いが生まれるのかテル？」

「さぁな、全国の斎藤さんは笑ったと思うぞ」

ナギが静かにコーヒーを飲みながら言うとテルは腕を組ながら答えた。

「斎藤！？　斎藤って誰やねん！？　なんでピンポイントな奴しか笑い取れへんのや！！」

咲夜はまたしてもハリセンを振り回す。テルはそのツッコミ力には感心したようで

「素晴らしいツッコミ力だ。　銀〇でなら新〇に負けず劣らずのツッコミになれるはずだ」

「誰があんな地味なキャラになるかァァァ！！」

悪魔で自分はツッコミだと、新〇のようにまでキャラが薄くなるのは御免と言い張る咲夜。

「しかし、ウチにツッコミさせる技量はあるってことやな……」

「単にコイツが馬鹿なだけだ……」

ナギがボソッと一人呟いた。

その呟きのすぐ、ナギは咲夜に尋ねる。

「ところで一応伊澄も読んだと思うんだが……」

「どーせ伊澄さんは迷子やろ？　この船広いし」

「一行も出ていないのにやるな伊澄」

いつ何処でも迷子になれる伊澄、そのスキルは成長するばかりだ。

「ところで……」

「ん？」

「アッチにいるのは誰やねん？」

咲夜が指をさすと近くの手すり付近で巨漢と一人の少女がいた。

何故か少女は赤ジャージを羽織っている。

「太陽が……渇いている…」

風になびくのは赤ジャージとエメラルドの色の髪。

テル達はよく知っている。

日野寺　マユミだった。

「とうッ！　」

マユミは盛大にジャンプするとアクロバティックにナギの前に現れる。

「ナギィィィッ！！　いざ私と勝―」

だが勢い余ってマユミはナギの頭に頭突きをかましてしまう。　ゴチンといった音がした。

「なんやテル、知り合いか？」
伸びている二人を見て咲夜がテルに聞く。
「まぁ知り合いだ。　というか俺呼び捨てなんだな」
「まぁええやないか。　ウチはハヤテの事も呼び捨てやで」
「あまり図に乗るなよチビダヌキ、関西のノリが全国で受け入れられると思ったら大間違いだ」
「誰がチビダヌキやァァァ！！」
咲夜は本日何回目となるぐらいのツッコミを入れた。
「マユミお前！　なんでこんな所にいるのだ！？」
「ハッ！　言ったでしょう？　あんた達だけに主役を張らせないで私も本編に絡むってね！！」
ナギとマユミもお互いに頭を押さえながら言い合う。
「そして何より……私のユ〇ノオー達のリベンジよ！！」
マユミは懐からＤＳを取り出した。
「ほう面白い！　私の新しいパーティーに勝てるか？」
ナギもＤＳを取り出して対戦開始。　咲夜はその光景を見ながら

「へぇ、あのナギに同じ年の友達がねぇ……」
「ま、友達というかゲーム仲間…か？仲が良い事に変わんねえけど」
「まぁええことなやいか、ナギが楽しいならそれで……な？」
咲夜は自然と笑みを浮かべて楽しそうな二人の姿を見つめた。

「おやテル殿、良きクルージング日和ですな」
突然、テルと咲夜の影が更に大きな影に飲まれる。
振り返ると巨漢が。テルはまた忘れてはいない人物だ。
「なんだよシュトロハイム、お前も来てたのか？」
「当たり前です。　私はマユミお嬢さまの執事ですから」
シュトロハイムはニカッと歯茎が見えるほどのスマイル。
「うわ……デカいやん」
咲夜はシュトロハイムの迫力に圧倒されていた。
するとどうだろう。シュトロハイムは咲夜を見るなり、咲夜に近づいてきた。
「あなたが愛沢　咲夜さまでしょうか？」

ずいっとシュトロハイムは膝を織り、低い大勢をとる。

「え？　あ、そうやけど」

膝を織っても咲夜の身長よりまだ上だ。

シュトロハイムはゆっくりと口を開いた。

「今回許可なく咲夜さまの船に乗り込んだ事をお許しください。マユミさまがどうしてもナギさま達に会いたいと……」

「私はそんな事言ってないわよシュトロハイム！！」

遠くでマユミの声が聞こえたが咲夜は無視した。

「ええんよ。ナギの友達なんやろ？　だったら大歓迎やで？」

「おお、なんと寛大なお言葉……シュトロハイム、感激です…」

シュトロハイムは嬉しい表情で頭を下げた。

咲夜は腰に手を当てながら高らかに言い放った。

「まぁ大船に乗ったつもりでいればええんや！」

「大船…ねぇ。　それよりタヌキ」

「誰がタヌキや、なんや」

咲夜がテルに睨むように返す。

「大丈夫なのか？　その、このあからさまに沈みそうなデザインで……」

テルが危惧しているのはデザインだ。　これで沈んだらまさに呪いとしか言いようがないが。

「アホか！！　デザインで船の性能決めんな！！」

咲夜は頑なに否定して続けた。

「ええか？　タイタニック号の『タイ』は……タイガースの『タイ』やねんで？　せやから無敵やっちゅーねん！！」

咲夜は人差し指を立てる。　このザ・大阪ダジャレには一同が口を揃えた。

「「「「「沈むなこの船……」」」」」

「沈むかぁ！　沈んでたまるかぁ！！」

咲夜はバンッとテーブルを叩いた。

「この船は莫大な金がかかっとんねん！！テロリストに占拠されれん限り、ウチの〝タイ〟タニック号が沈むわけは――！」

その時青空に、それこそ船の外にいる人間に聞こえるくらいの銃声が響いた。

第２７話～ＲＡＧＩＮＧ　ＷＡＶＥＳ～（後書き）

ある意味一番オリジナルが多いかもしれません。色々と変わった所があるので、楽しんでいただければ……質問や意見はいつでも募集です！！

第２８話～あんま出てないキャラを出されても作者も読者も混乱する～（前書き

ぶっちゃけ出すかどうか迷ったキャラです。

第２８話～あんま出てないキャラを出されても作者も読者も混乱する～

雲が流れる海空に響く一発の銃声。　船の外にいたものは誰しもがその銃声を聞いた筈である。

しかし、それは逆に

「あっれ～　おかしいな～　ここってすごい広いよ」

船内にいたハヤテには全く聞こえていないのも事実だった。

複雑に入り組んだ船内に翻弄されながらハヤテはさまよっている。洋風のイメージがそのまま具現化された船内はまさしくあのタイタニック号。　これなら伊澄が迷子になってしまうのも頷ける程だ。

まぁそんな事は置いといて、ハヤテは別の懸案事項があった。

（お嬢さまの今日の様子、僕が何かしたとしか考えられない……見当なんて全然つかないけど）

理不尽な理由で売られそうになった事もあるくらいだ。　しかし、執事として主に粗相があってはならないという責任感がハヤテにはあった。

（なんとしてもお嬢さまの信頼を……）

取り戻すんだ―！　と言わんばかりに廊下を駆け抜ける。　決意を胸にハヤテは船内を回るつもりだ。

そしてハヤテが通り過ぎた道に隠れる人影が一人。

「あれはあの時の執事か……」

まるでコナンのシルエットのような人物だが実際は黒スーツの男だ。

「さてさて読者の皆さん、俺の事を覚えている人はいるかな？」

否。　多分この小説に目を通してくれた読者は誰もが口を揃えることだろう。

―アンタ誰だ？

「……酷いとしか言いようがないな。　この華麗な誘拐犯、兼工作員のバルトを忘れるとは……」

―だから誰だよ？

とまたしても眉をひそめる読者の反応が予想される。

仕方がない。なんせ彼が初登場をしたのはこの小説が始まった１～６話ぐらいしか出てないのだ。

「だが俺とて考え無しにここにいるわけではない」

バルトはポケットから黒い塊を取り出すとペタッと壁に貼り付けた。

「この作戦を生かせば俺も出番が増えるはずだ！！」

もはや流れ作業と言ってもいいほどぺたぺたと壁に黒い塊を貼り付ける。

果たしてこんな地味な事をしていて目立つ事ができるだろうか？

「地味なんかじゃないバルトだ！」

○

さて、場所は変わり甲板だ。

「あー！　あー！　乗組員に告ぐ！！　たった今この船は我々デ○ーズ・フリートが占拠したァ！」

テル達の目の前には覆面をした完全武装の男が三人。
取り敢えず先ほどの銃声が人に向かっていなかった事が幸いだ。
「オイオイ、なんかヤバい事になってんぞ？」
テルが状況を見て呟いた。
「あいつ等あんな事言っているがどうするのだ？」
「世の中には命知らずの冒険野郎がいるもんやな～」
「取り敢えずナギ、もう一回勝負よ。　砂パと晴れパ、どっちがイイ？」
そんなテルをよそにナギ、咲夜、マユミは至って冷静だ。
「あー、テロリスト諸君」
「なんだ小娘！　お前のようなチビに用はないぞ！　ロリはよそに行け！」
ナギの言葉にテロリストの一人が挑発するようにあしらった。
その瞬間、ナギの怒りが頂点に達した。

「乗組員や客には手を出すな。　人質なら少ない方がいいだろ？」

「え？」

このナギの発言にはテロリストだけでなく、テルもそう思った。

あれだけ言われてナギがキレない訳がない。　しかもその言い方はまるで自分が人質になると言わんばかりだ。

「お、おいナギ…お前まさか……」

「なんだ小娘、お前、人質を買って出ようってか気か？」

咲夜が冷や汗を浮かべ、テロリストだけは若干バカにするようにナギを伺っている。

「ああ。　適任だと思うぞ」

ナギは悪魔でも冷静だ。　その瞳には確固たる決意が見受けられる。

そして真顔で言い放った。

「なんせコイツがこの船のオーナーだからな」

「――って！！　ウチが人質になるんかい！！！」

ナギが指差したのは紛れもなく咲夜だ。　しかし咲夜はその振りに動ずることなくツッコミを入れる。

「このように小さなボケも見逃さず見事にツッこむキレのよさ……」

「なに冷静に推薦しとんねん！！」

「そうだな。　この状況であのツッコミができるなら将来芸人にもなれる……」

「テル！　アンタまでそう言うんか！！」

（……）

いつの間にか緊張状態は溶けてしまっている。　テロリスト達は覆面で表情は分からないが唖然としているだろう。

「まぁ、この船を占拠するならス〇ーク辺りを使うんだったな」

ナギの言葉に咲夜がうんうんと頷く。

「せやな。　ま、ここにいる奴らはヒドく言えばアンタらよりおっかない連中やからなぁ～」

咲夜がニッと笑うとテロリスト達は周りを見て、自分達が黒服に囲まれている事に気付いた。

～ここからは音声のみでお楽しみ下さい。

「ギャアアア！！！」

約三分後。

「ぐはぁ――！！」

船の床を転がるのはテロリスト達だった。　その様子をみる限りボロボロである。

そんなテロリスト達に、三人の男が一際目立っている。

「まったく……最近のテロリストは、鉄砲を持てば勝てるつもりでいる」

そう言いながら薬莢を拾うのは白髪のカイゼルヒゲの老人。　彼の名は三千院家の執事長クラウス。

「まったくなってないです……」

「功夫がたりませんよ」

クラウスの言葉を肯定する台詞を言っているのは咲夜の執事である巻田、国枝。

「ぐ…な、なんて強い連中だ…」

「なのにどこか紳士的な態度…お…お前たちはいったい……」

テロリスト達は強さと同時に合わせ持つ男達の態度に言いようがない圧倒感を覚えていた。

「愚か者め。　我々が何者かも知らずにこの船に乗り込んでくるとは……いいかよく聞け」

クラウスは眼鏡を光らせて言い放った。

「我々はお嬢さまを守る…一流の執事だ！！」

「お嬢さまを傷つけようとする連中は我々が全力で排除する！！よく覚えておけ！！」

去り際に拾った薬莢を親指で華麗に弾く。　決まったと言わんばかりの男達の背中である。

「な―んてカッコつけても、連中の侵入を許したドジは消えへんで？」

ギクッとさっきまでジェームス・ボンドのようなクールな男達は背中を震わしていた。

「私の出番はなかったですな……」

「まぁ無理しなくていいんじゃないかしら？　アナタ片腕だし」
眺めていたシュトロハイムとマユミ。　シュトロハイムは陽気にもははっと笑っている。

「なんや、意外と好戦的なんか？」

「いえいえ滅相も、まぁこうして平和に終わったのですからいいではないですか」

咲夜が悪戯っぽく聞いたがシュトロハイムは笑いながら返した。
年の功である。

「んなことより、早くこいつ等縛り上げて吐くこと吐かせちゃえよ」
「まぁ、それはそうね。　ナギ、早くテロリスト達を捕まえなさいな。　そして今度は私と組まない？　アナタと私ならスーパーマルチトレインも１００連勝も夢じゃないわよ？」

「お前は早くポ〇モンから離れろ」

テルは溜め息をつきながらＤＳを片手に持つマユミに突っ込んだ。

「！！」

その時、テロリストの一人がマユミに目をつけて覆面の下でニヤリ

と笑った。

「ん？」

テルが見たのは懐に手を入れているテロリストの姿だ。

ぞわっと肌が震える。　銃をまだ隠していたか、またそれに準ずる何か

「オイ！」

テルが声を上げたが、テロリストは動じることなく何かを投げた。

投げた筒状の物体はある程度の高さに浮いてからコロンと床を転がり、大量の煙を吐き出した。

「な？　煙幕だと！！？」

クラウスの声が聞こえる。　周りは煙に包まれている。

「ゴホッ、ゴホッ…な、なんなのだ？」

ナギの咳き込む声。　船の上だから数も少ないし煙はすぐ晴れるはずだ。

なら短時間で奴は何をする気か？

「きゃ！　ちょ、アナタどこ触ってるの？　離しなさい！！」

やがて煙が晴れて、聞こえてきたのは聞いた事のある声。

テルはその人物を見て頭に手をやった。

テロリストに首をかけられているのはマユミだった。

第２８話～あんま出てないキャラを出されても作者も読者も混乱する～（後書き

なんで今頃にって思われても仕方ないですね。　結構最初の方からバンバンだしていくつもりでいたんですが……気付けばという感じです。

本当、今後こんな事がないようにしっかり出番や配役は大切にしたいです。

第２９話～俺はアイツよりは不幸ではないと言ってる奴に限ってめっちゃ不幸～

ここからがとんでもないオリジナルの展開！

第２９話～俺はアイツよりは不幸ではないと言ってる奴に限ってめっちゃ不幸～

「コラァ！　私を離しなさぁぁぁい！！」

船の上で起きたバカ騒ぎは三千院家、愛沢の優秀な使用人たちによって治められたかに見えた。

だが状況は一変。　テロリストたちの一人が煙幕を使い人質にマユミが取られてしまった。

「お前ら、近づいたらこの小娘の命はねぇぞ！！」

男はがっちりと腕をマユミの首にまわし、身動きが出来ないようにしている。　さらには懐からナイフを取り出してマユミの首元に近付けた。

「むぅ・・・卑怯な」

クラウスが眉をひそめる。流石の使用人たちもこれでは身動きができない。下手に動けばマユミの命が危ない。
完全に裏をかかれた。　失策だ。

「こら！　人質にはこいつがなると言っていたではないか！！　はやくマユミを離すのだ！！」

「だからその話まだ続いてたんかい！　」

指さすナギに隣の咲夜は猛然と突っ込む。

「お前らほんとに緊張感ない奴らだな」

「「お前にいわれたくない！！」」

テルのつぶやきを見逃さず、ナギと咲夜は二人で突っ込んだ。

「ぐぬぬぬぬ・・・・」

マユミを人質に取っていた男が心底苛立っているようだ。　まったくもって緊張感の欠片もない状況に歯をかみしめる。

「お前らァァァ！　この小娘がどうなってもいいかって聞いてんだろうがァァ！」

ついに耐えきれなくなった男が一同に向けて叫んだ。　テルはうーんと唸ると素っ気なく

「え？　いいんじゃね別に？　キャラもここらで減らして人数合わせみたいなかんじでいいじゃん？」

「あなたを海の藻屑にしてやろうかしら！！」

テルの一言にマユミが額に青筋を浮かべて叫んだ。

「くそ！　無事に助けたいんだったら、綾崎　ハヤテを連れてこいってんだ！！」

「なんでハヤテなんだよ・・・・」

「おそらくあれから暫くたって知れ渡ってる頃やろうからな・・・・

」

「知れ渡ってるって・・・何が？」

テルの問いに咲夜が説明をものを言わせず１５秒で説明した。

「なるほど。　あいつ狙われてんのか・・・・」

「ま、不幸にまみれるのはあいつの専売特許だからな・・・」

ナギが隣でうんうんと頷く。

「あいつを倒すためなら手段は問わないといわれている！！」

「手段は問わない？　誰に？」

「え？　そりゃうちのボスに・・・・」

テルの誘導尋問にまんまとひっかかって男は喋ってしまった。

「おいおい、証拠一つにすべて自白とはな・・・・」

「まったくや。　今時火サスでもなかなかあらへんで？」

ナギと咲夜の言葉に男は言葉を詰まらせてしまう。　しかしそれを振り払うかのように男はナイフを振り回した。

「うわっ！　危ないじゃないの！！」

マユミが驚いた表情で身をよじる。　男はさらに興奮状態が続いて

いる。　あまりにも危険な状態だ。
クラウス達やナギ達も固唾をのんで見守るしかないと思われた。
「あー、あーテロリスト君、早くそいつを離した方が身のためだ」
しかしこの状況で不意にもなりふりを構わない男がいることをお忘れなく、テルだ。
「お前、言ってたとが分からないのか？いうことを聞かないならこいつの命は・・・」
ギラリと刃物をちらつかせテルを睨みつける。　しかしマユミは特に恐怖を覚えたような表情はない。それはテルにも分かっていたことだ。
テルは頭を掻きながら続ける。
「いや、ほんとに考え直した方がいいって」
だからなんだと言わんばかりの勢いだった男だったが、ここでテルの背後からゆっくりと何かが現れる。
ゆっくりと動き出したもの・・・それはシュトロハイムだった。
「・・・・」
身長が2メートルにも達するかもしれないほどの巨漢は、まっすぐにマユミへと近づいていく。
その瞳はまるで鷹のように鋭く、気高く。

まさに狩るものの目をしている。
咲夜はさっきと打って変わったシュトロハイムに戸惑っていた。
さっきまでは陽気な温厚の執事が、今はまるで眼光を赤くしたザクのモノアイのようにギラつかせている。

「お、おい！お前・・・」

咄嗟に我に返った男だが途中で言葉を詰まらせた。　その畏怖をも覚えさせてしまう威圧感に、男は言葉を失ったのである。

鷹のような瞳がマユミから男へと変わる。　その瞬間、背中がゾッと凍りつき、あまり寒くはないのに、汗はだらだらと流れているのに歯がガチガチと震え始めた。

「・・・・・」

無言のままシュトロハイムは近づいていく。　手袋をした右腕に力が入る。力を込めた右の拳は測定不能の握力によりさらに肥大化したように見えた。

「お・・・おま・・・いま・・こいつが・・どうなる・・・・か」

男がようやく発した声はおそらく遠くのテルたちには聞こえないくらいのものだ。　完全に恐怖で言葉が発せられていない。　ガチガチと震えているのは口だけではない。　ナイフをもっている手も小刻みに震え始めた。

本来なら人質をとっているこちらが有利のはずだと男が思っていた。

しかいどうだろうか、シュトロハイムは静かに静かに呟く。

「やってみろ」

その一言はもはや警告に近い。

シュトロハイムはゆっくりと拳を、突き出すためにテイクバックをとる。

より深く、より強く、より破壊力を生み出すために。

彼の、シュトロハイムの左腕はある事件を境に全く動かなくなってしまっている。

片腕だけの執事が主を守れるだろうか？　難しいだろう。

だがシュトロハイムは自身の決意、友との約束のために何が何でもマユミを守るために片腕だけでも守ることを考えた。

それがこの右腕だ。

「・・・・ッッッ！！」

男は黙ってシュトロハイムの一挙一動を震えながら見ることしかできなかった。　やがてテイクバックがとまり、ピタリとシュトロハイムの動きが止まる。

タメは終わった。

実戦空手の父。　大山倍達はかつてこう述べている・・・・

『体重×スピード×握力＝破壊力』！！

絶対破壊の方程式！！

突き出された拳が男の顔にピンポイントに突き刺さる。　若干、ねじりを加えた拳にそって男も回転方向に捻じれ、弾丸のような回転をしながら壁に叩きつけられた。

ドガッっという破壊音。　壁はもう機能を果たしてらず巨大な穴が開けられていた。

「威力は抑えました。　死んではいませんよ」

拳を自身の息でふうと払うとマユミに駆け寄り、膝をついてかがみこんだ。

「お怪我はありませんかお嬢様？」

まるで父親のような心配のし方でマユミの体に傷などがないかチェックする。　何事もなかったかのように確認するとシュトロハイムはため息をついた。

「まったく、日野寺の頭首が人質にとられるとはまったくもって不用心です」

今度は叱るようにマユミに言う。　はたから見れば完全に父親だ。

「不用心ではないわ。　だってあなたが助けに来てくれるもの」
マユミはそれに対して屈託のない笑顔で返す。シュトロハイムはまたため息をついた。
「やはり大変ですな執事というのは・・・・」
「あなたが自分で選んだ道でしょ？」
別の意味で頭を垂れるシュトロハイムにマユミはくすくすと笑った。
「えらい仲のいことだなオイ」
「ホンマやな、親子みたいでええけどウチなら絶対反抗期迎えられへんで？あの姿をみてまうと・・・」
咲夜にとってのシュトロハイムの印象は先ほどで大きく変わってしまったようだ。
「取り敢えず、あいつ等縛り上げて吐かせるだけ吐かせるか……」
「なら頼むぞ」
ナギの言葉に頷くとテルは倒れているテロリストに走っていった。
その後、事態が収まった為に甲板のテル達はテロリスト達を縛り上げていた。

「まったく世話かけさせる奴らだな……」

シュトロハイムが一層にきつめに縛り上げている。

「イタタタタ！　お前ら、余り調子にのるんじゃないぞ」

テロリストの一人が反抗的な声を上げた。

「ああ？　今どっちがお前らの主導権握ってんのか分かってんのか？」

「テル殿、悪役のセリフがお似合いですな」

シュトロハイムが陽気に笑った。　先ほどの怒りモードはすっかり無くなっている。

（くくく……完全に油断しているな、まだ最後の手段が残ってるんだ！）

男は縛られた手に隠していた握って隠せるぐらいの物を取り出し、スイッチを……

押した。

その瞬間、耳の鼓膜が震える程の爆音が発生した。

「うおっ！？　なんだ！？」

爆発とともにテルはバランスを崩して床を転がる。　船全体が揺れているのだ。バランスが崩れて当然だろう。

「爆弾が仕掛けられていたのか！？」

「やっぱりデザインがアレやったからかな～」

「んな事いってる場合か！？　」

頭に手をやる咲夜にナギが叫んだ。

爆発が数回続いていた事が振動で分かることから恐らく複数の爆弾が最初から仕掛けられていたのだ。

ちなみに仕掛けた張本人は後にすぐ爆発が起きたので巻き込まれて気絶中。

「おいサク！　ハヤテや伊澄は見つかっているのか！？」

ナギが口にしているのは勿論この場にはいないハヤテと伊澄の事だ。

咲夜は首を申し訳なさそうに横に振った。

「あかんな……急いで回収しないと危ないで？」

咲夜も焦りを感じてはいた。　爆発直後の事なのでまだ船が沈むと

は分からないが

「問題はハヤテよりも伊澄か……」

「まぁそれもあるがどっちもどっちだろ、この場合……」

テルが顎に手をやるとナギが冷静に返した。

使用人たちも救命ボートに客達を乗せたりと大慌てだ。

「ふむ。　私達も人名救助に進んで手伝いますか……マユミお嬢さまは早めにボートへ」

シュトロハイムも崩れていたバランスを整える。

「私にもなにか手伝える事はないかしら？」

マユミはシュトロハイムの言葉を無視してナギや咲夜と向き合っていた。

「お、お嬢さま！？　危ないですから早くボートに……」

「アナタなに言ってるの！？」

慌てるシュトロハイムにマユミは若干怒り混じらせて返す。

「人の命が掛かってるの！　目の前の人達を助けれないで日野寺家が復活できるか！！」
「なんや、やけに熱心な子やないかい……」
「サク、あいつはそういう奴だ……」
ナギの言葉になるほどなと頷くとポンと手のひらを叩いた。
「まぁそう言わずにな、執事の言う事はちゃんと聞かんとな？」
「あなたに言われる事は……」
マユミはムッとした顔になるが咲夜は笑いながら続けた。
「アンタの心配しとるんよ。ウチらもあの執事もな」
と、咲夜はシュトロハイムに目をやった。
「……分かったわよ」
マユミは少しばかり考えて、渋々咲夜の言う事を承諾した。
咲夜はニコッと笑みを浮かべてマユミの頭を撫でた。
「うんうん。この上なくエラい子やないか、ナギにも見習ってもらいたいものやな～」
陽気に笑っているとマユミは直ぐに咲夜の手を払ってボートに走

っていった。

「シュトロハイム、怪我人がいるかもしれないわ。　ウチの医療スタッフを支給回しなさい」

「御意」

シュトロハイムはそう頷くとマユミの後ろをついて行った。

「上手く操ったな……」

「こう見えても家ではお姉ちゃんなんや。下の子の面倒は得意やで？」

テルの言葉に咲夜はえっへんと言った顔で言った。

「テル君、ちょっと……」

「アレ？　マリアさん？」

今までどこにいたのか分からなかったマリアがいきなりテルを呼び出した。

「マリアさん、どうしたんですか？　今までどこに……」

「そんな事よりテル君、ハヤテ君と伊澄さんが居ないのは知ってま

すね？」

「はい、さっき聞きました」

「そうですか……何かが起きる前に早く二人を探してきてくれませんか？　時間もあまり無いので……」

「時間？」

時間という言葉にテルが反応する。　マリアはそれに答えるように続けた。

「犯人がわざわざパニックにさせるためだけに爆弾を仕掛けたりはしません。　多分沈ませるのが目的かと……数は５から６…しかもＣ４なので……」

「要するに船が沈むから早く二人を連れてこいと？」

「理解が早くて助かりますわ♪」

マリアは笑顔で返すとスッと踵を返した。

「ついでに相手のボスの方を捕まえてきてくれれば文句は無いのですが……」

「いや、直接犯人達のボスが現地にいるとは限らないでしょ……」

テルが頭を掻きながら返すが最終的にはそのボスを捕まえなくてはならない。　テルは唸って承諾した。

「じゃあ行ってきます……」

「行ってらっしゃーい♪」

まるで我が子を見送るようなワンカット。　テルは走りながら船内へと駆けて行く。

○

ゴゴゴ……

船内の中でもかなり下の方にある広い場所が地震のような唸りを上げている。

「痛たたた……なんだ…？　急に爆発なんて…」

爆発によって吹き飛ばされたハヤテが瓦礫の中から這い出てきた。

「まさかやっぱ氷山に当たった？　この船デザインがアレだから何かあったら……」

瓦礫を押しのけてながら歩いていたハヤテはある異変に気付く。

「アレ？　なんか海水が真っ赤に見える……」

何故か視界が真っ赤になっていたので目を擦ってみると、腕には夥しい程の血が……

「うあ！！なんだこりゃ！？　いっぱい血が出てるよ！！」

（いやいや落ち着け落ち着け……どーせいつものように次の行では何もないようになる！　実際なんともないッ！！）

自身に自己暗示を掛けるハヤテはその場でヒンドゥースクワット開始。　体の丈夫さをアピール。

しかし……

「ばふっ！！」

当たり前の事だが出血が酷くなった。

「だ――！！　そんな冗談言ってる場合じゃないよ！！　と…！！
とにかく止血しなきゃ！！」

慌ててハヤテは辺りを見渡すが周りには使えるような物は一つもない。

ハヤテはパニック状態を緩和するために落ち着いて状況を整理する。

爆弾の数や種類、仕掛けた意図などをどこからか学んだか分からな

い知識をフル使い、考察した結果は沈没だ。

「凍てつくようなこの1月末の海に……」

身を震わす程の寒気が襲ってくる。　出血状態で水の中に入るとは自殺行為もいいとこだ。

（とにかくどんどん水が入ってきてる…お嬢さまが心配だ。上に戻ろう。　幸い後ろが階段で良かったよ）

ハヤテは真後ろにある階段に足を掛ける。

（危ない所だったな……）

どんぶらこ。

（この出血でこんな冷たい水に入る事になったら…ホント…）

どんぶらこ。

「死んじゃ――」

どんぶらこ。　その言葉が繰り返される後方に目を向けると水で溢れている場所に箱に乗った伊澄が流れてきた。

「……」

「……」

ハヤテは状況を理解するのにワンテンポ置いた。

「で――！！　伊澄さん！？　な！！　なんでこんな所に！？」

「それは……」

「聞くまでもなく迷子ですね！？　てか大丈夫ですか！？」

理由を聞くだけ愚問だと考えられる。　今は木材の箱の上に居て浮いているがいつ沈むか分からないこの状況で危険は避けたい。

「待っててください！！　今すぐに助けを――！！」

と伊澄の所に向かおうとした時、体が急に止まった。　体が危険信号を放っている。

「……」

ハヤテが止まったのは目の前に広がる海水だ。

この辺りの冬の水温は三度だそうです。

出血で体温が下がってる時に冷たい水に浸かると死ぬそうです。

○

「ぜぇ…ぜぇ……」

ナギ達のいる反対方向。　テルは勢い良く船内から外に繋がる扉を開けた。

「おーい、伊澄、ハヤテ―」

辺りに声を掛けるが当然返事はない。

「オイオイ、このままじゃ冗談抜きでディカプリオの最期みたくなっちまうっつーのに」

息を整えてテルは呟くが焦りは見える。

「アイツらどっちも憑いてそうだからな……」

憑いていると言っても伊澄には幸運の女神がハヤテには死神が憑いていると言ったほうが確実だ。

「俺には一体どんな女神が憑いているっていう話だが、まぁいいか……」

自分に憑いているのはなんなんだと議論をしようと考えていたがそんな隙はない。　再び船内に引き返そうとしたその時だった。

テルの目に謎の光景が飛び込んできた。

「……」

「もぐもぐ…」

テルの目に映っているのは一人船の料理だったフライドチキンを食べている女性だった。

しかし注目するべきは服装だろうか。　紺色の上から下が繋がっている、さらに首から十字架を下げており、端から見てもその姿はシスターらしい。

（なんでこんな所にシスターが……避難出来なかったのか？）

こんな状況だ。　避難に遅れてしまったと考えるのが普通だろう。

テルは声を掛けた。

「そこのアンタ、飯食ってる場合じゃねぇぞ、早く避難しろ」

「もぐもぐ……」

「あのぅ……」

「もぐもぐ……」

「もしもしィィィッッ！！」

「む……」

大声にようやく気付いたのかシスターは食べていたフライドチキンを飲み込む。

「どちら様で？」

「それはこっちの話だァァァ！！」

まるで今まで居なかったようにシスターは自分の世界に没頭していたらしい。

「よほど食べるのが好きなのかよ。ならいっその事ファミレスにでも行ってお子様ランチを注文したらどうだ？」

シスターは持っていたティッシュで口元を拭くと

「あんなチャラついたオカズに興味はありません。　どちらかと言えば、私はお金の方が大好きです」

「ぶっちゃけやがった……物欲にまみれたシスターだな」

肩を落としたテルだが気を取り直す。

「向こうで三千院家やらの使用人達が避難させてるからアンタも早く乗った方がいいぜ？」

「三千院家？」

シスターはその言葉に反応する。

「……その服から貴方は三千院家の執事と見受けられますが？」

「まぁそうだな。　一応三千院家の執事だけど？」

テルの言葉に、シスターはくくくと口元で笑みを浮かべる。

「もう一人の執事さんはどうしたんですか？」

「ん？　ハヤテの事か？　今は迷子らしいが……なんだよ、お前もハヤテ追っかけ組か？」

「まさか……でも、いいんですかね？」

「何が？」

先程とは変わってる雰囲気のシスターにテルも眉をひそめた。そしてシスターは言う。

「今頃は海の藻屑になってるかも知れませんよ？　私達が仕掛けた爆弾で」

「ッッッ！！？」

一瞬だけ、思考が停止した。　そして数秒の思考の後、ある結論に達する。

「あんたがテロリスト達を手配した犯人か！」

シスターは笑みを浮かべた。

「バルトさんも上手く爆弾を設置したんですね。　流石と言っておきましょう……」

「アンタを先にお縄につかせる事が今は最優先事項だな……縄という単語に他意はないけど……」

またしてもシスターは笑う。　次に向けられた顔は凄まじい殺気を放った笑顔だった。

「元々、正体が明らかになったところで貴方を逃がすわけにはいきませんよ……」

ア〇デルセン顔負けの笑みを浮かべるシスターはどこからかトンファーを取り出した。　棒にはトゲトゲが付いている。

「うわ、エグいの持ってんな、シスターの癖に……」

「今すぐあなたを天に召しましょう……」

トンファーが音を立てながら回転し始める。

シスターは振り回しながら突っ込んでくる。

執事はこの状況に苛立ちを込めた舌打ちをした。

第２９話～俺はアイツよりは不幸ではないと言ってる奴に限ってめっちゃ不幸～

決して原作を作り替えたかったていう訳ではないんです。　ただあの場面でシスターがいたらっていう話だったんです。

ごっちゃになってきましたね……シスターとテル君の対決は次回に！！　多分、ちょっとキツいかな～内容とか表現が……

第３０話～心に鋼の意志を右手には象徴を～（前書き）

多分、読者がほとんどマジで！？　と思われる展開になるでしょう。　テル君に対して……

第３０話～心に鋼の意志を右手には象徴を～

気合いと共にトンファーがテル目掛けて降り下ろされる。

バキィンッという音が響く。　シスター渾身の一撃はテルに届くことなく手すりを代わりに破壊した。

「どんなパワー持ってんだよ！？」

完全に破壊された後を見て、背筋が凍りついた。　女性の腕力で成せる物だろうか。

シスターの追撃が更に続く。

右手のトンファー、左手のトンファーが交互にテルの顔面に迫ってきた。

「チッ！」

舌打ちの後、身をかがめて右手のトンファーを避ける。　だがシスターは見越していたように左手のトンファーを振り上げてしゃがんでいるテルに振り下ろした。

ドゴンッ、という破壊音が響く。　テルはなんとか一撃を避けていた。　振り下ろされた場所は小さなクレーターが出来ている。

お互いが距離を開けた。

「なかなかやりますね、流石は三千院家の執事と言った所でしょうか……」

先に口を開いたのはシスター。　トンファーをブンッと振って払うと床に血がつく。　テルの血だ。

「避けても下手すればキズが増えるか……」

テルの頬から少量の血が流れている。　シスターのトンファーにはトゲトゲが付いている。　かすればそれだけでダメージを受ける仕組みだ。

「迷える仔羊を導くのが役目ですから、救済は速い方が良いでしょう？」

「聖職者としての職務を全うするのは構わねえがやり方がえげつねぇ……」

吐き捨てるように顔の血を拭き取る。

「ここには関係ねぇ奴らがいるってのにな」

「私の悲願を考えれば犠牲も致し方なし……」

祈るように両手を合わせる。　その姿はまさしくシスターそのものだ。

「悲願だとかなんだか言おうが関係ねぇ……最初からハヤテだけを狙えばいいのによ」

そう呟きをいれて、シスターはまた駆け出す。

何時までもやられっぱなしのテルではない

「調子のんなよ……ッッ！！」

テルは近くにあったテーブルを持ち上げてシスターに向けてブン投げた。

「そんなものが……」

シスターは特に避けるような仕草を見せる訳でもなく、投げられたテーブルに突っ込んだ。

バキィンッと木製の白いテーブルがトンファーにより破壊された。

「通用するとでも思っていたのですか？」

破壊したテーブルの中を駆け抜けてシスターは跳び蹴りをテルにお見舞いする。
跳び蹴りはテルの溝落ちに突き刺さるように入った。

「ぐえっ！」

苦痛の表情と共にテルは後方へ吹っ飛び、床を転がった。

着地を決めたシスターは不適な笑みを浮かべる。

「さぁ息の根を止めてあげましょう」

トンファーを回転させながらシスターが迫る。

（ダメージが深い……直るまで後何分、いや、そんな事は関係ねぇ……）

今度は避けられないようにシスターは今まで以上にスピードを上げて接近してトンファーの一撃。

ふらつくテルはマトモに食らってしまった。　その気を逃さまいとトンファーが執拗な連撃を繰り出す。

（俺はコイツを許せねぇ……他人の事なりふり構わねえで好き勝手やるこいつ等を……そしてなにより）

連続する一撃に必死に耐えるが、確実にダメージは蓄積される。

（俺が折れちゃ……しまいだろうがよ……）

「ふんッ！！」

連撃の締めとしてシスターは頭部へ蹴りを直撃させた。

なす統べなくテルは床に仰向けに倒れる。

「武器を持っていれば良い勝負になっていたかもしれませんが……ここまでのようですね」

シスターは倒れているテルにトンファーを振り上げた。

「私の一撃はコンクリートブロック三枚を軽くぶち破る位の威力があります……」

シスターにとって、それは神の宣告、否。　死の宣告だ。

目の前に死という物をちらつかせる時、人間は最大の恐怖を覚える。

そして死ぬ瞬間、今までの出来事が流れてくるのだ。

歯を震わせ、涙ながら顔を歪ませるだろう。

「……」

だが、テルは引かない。

そこに絶対的な死が待っていたとしても……

「やってみろよ……」

どこかでシュトロハイムが言った一言と似ている。

鋼のような強い意志。

決して砕ける事のない魂。

だがそれを具現化する象徴がない。

「虚勢を張った所でどうしようもありませんよ？」

「うるせーな……」

例え虚勢と言い張られても、彼は諦めない。

「何が何でも邪魔してやるよ……」

己が己自身を通す為に……

「哀れね……貴方は」

最後にトンファーを回転させると、そう呟き、頭部へ振り下ろした。

ゴキン！と聞こえてはならないような音がした。

テルの右腕が空を掴むように震えながら伸びるが、ガタッと糸が切れたように崩れ落ちた。

「……テル君？」

ボート付近では皆の帰りを待つマリアが不安げな表情で呟いた。

○

「テル！　起きてるの？　早く来なさい！」
早朝。　やたらと五月蝿い声が部屋に響いた。

「なんだよ、まだ6時だろ？　ゆっくり寝かせてくれよ……」

「あんたに拒否権はない」

寝ぼけ眼のテルを布団から引き剥がし引きずっていく女性。

朝食をとり、支度をしてみるがなかなか眠気は取れない。

「んで、どうして朝っぱらからココ（道場）なんだよ……

くあっと欠伸をするテル。女性は腕をくんで説明する。

「決まってるじゃない。　朝稽古よ」
「いや、道場に来る理由はそれしかねぇけど、あまりにも時間が早すぎやしねぇか？」

「そうね……」

と女性は組んでいた腕を解いた。

「アンタがこれから生きてく上で沢山の壁にぶつかると思うの、テルには鋼のように固い意志と砕けない魂を持ってる……精神論的な事を言うと、いかに屈せず立ち向かえるか……それを身に付けていく事がこれからの課題――」

「んぐが～ごぉぉ……」

「……」

ゴキン！とテルの頭に拳骨が飛ぶ。

「なんで寝てるのよ……」

「わざわざ殴んなよ！！」

床に頭を突っ伏しているテルは女性に言う。

女性はため息をついて一言。

「アンタが誰かを守る為の力を身に付けるって言った方が分かりやすいかしら？」

「……」

守るという言葉に、テルはなるほどと頷く。　そして女性と向き合った。

「分かった……　教えてくれ先生」

その瞳は力強い意志を宿した瞳だった。　それを見て安心したのか女性も頷く。

「よろしい。　じゃあ死ぬ覚悟は出来たわね？」

「へ？」

謎の一言にテルは顔をへの字にする。

「なんで朝早くからやると思ってるの？　その頭に今日からじっくり叩き込んでやるためよ」

「ちょ、ちょっと待て！　今日からって、明日もやるのか！？」

「多分、未来永劫？」

至極当然のように女性は返す。

「後、相当な激痛を伴う事を頭に入れておいて？　一応、湿布と薬は山ほどあるけど……」

「何がこれから始まるんだよ！？　何が俺を待ってるんだよ！？」

「よーし、始めるぞぉ」（棒読み）

「無視するなァァァァ！！！」

最後に女性は振り向きざまに笑って見せた。

「それじゃ、私が一番得意であるのを教えるね」

その笑顔をテルはよく覚えている。

○

場面は戻り、船の甲板。　シスターが目の前のテルを見つめていた。

テルは動かない。

「……アーメン」

最後にシスターは胸の前で十字架を指で作って祈った。

そして何事もなかったように、その場を立ち去ろうとした。

その時である。

「待て……」

まさかの、ここで聞いたことがある声。耳を疑った。

「ッッ！！」

素早く振り返るとそこには有り得ない光景が……

「ま～だ終わってねぇんだよ」

立っている。テルが立っているのだ。

「貴方は何でできてるんでしょうか？」

不気味にシスターはテルに聞いた。テルは血を流しながらも返す。

「俺は昔からガンダニウム合金でできてる位頑丈なんだよ」

いつものテルだ。　シスターは戸惑うがテルの状態を見てフッと笑う。

「ですがもう虫の息……立ち上がった所ですぐやられるのは見えてます」
テルの状態ははっきり言ってマズい物だ。　頭はとめどなく血が流れている。
出血多量で倒れるのは明白だ。
「言われなくても、すぐ終わらせてやるよ。　丁度、思い出したな……」
『思い出した』という言葉に、シスターは顔をしかめる。
テルは一人ある所に向かう。　先ほどシスターが破壊した手すりだ。
「お、コレ良い感じじゃん」
そこで拾い上げたのは破壊された一本の棒。　壊された手すりが一本の鉄の棒になっていたのだ。
そして……
テルは構えた……
「なんのつもり……ッッ？」

その姿はまるで刀を持った日本の武士、サムライ。
鋼のように固い意志を持ち、自分を通す姿に似ていた。
「俺は一番大事なのを忘れてたな……」
先ほどとは違った表情を見せるテル。
笑っている。　だがその内を読み取る事は出来ない。
「なら、そんな棒切れ持った所でッッ！！」
シスターは一気に駆け出す。　先ほどと同じく、スピードで迫り、トンファーを殴りつけるように繰り出した。
当たった。　確かな手応えがある。　加えて、テルはただ水平に構えていて振り抜いていたが全て避けたのが分かる。
（ただの虚勢……のハズッッ）
勝利を確信したシスター。しかし……
バキィンッ！と破砕音。　シスターは目を疑う。　自分の左腕のト

ンファーが折れたのだ。

「〜〜〜〜ッッ！！？」

シスターは驚きを隠せない。　テルはシスターの一撃も避けて、尚且つ武器をも破壊していた。

「貴方……一体何者？」

シスターが疑問の言葉をテルに投げかける。

テルはニヤリと笑って答えた。

「簡単に教えてやる……俺が三千院家の執事だ」

その強く、気高い魂、鋼の意志はより一層、輝きを増す。

その力を伝って、鉄パイプが黒い輝きを増す。

―剣術は私の専売特許、ついてこれるかしら？

「遅くなったけど悪いな先生、ようやく思い出したしぜ……」

またテルは不適に笑った。

第３０話～心に鋼の意志を右手には象徴を～（後書き）

クルージング編もあと少し……

感想や意見はいつでもお待ちしております。

第３１話～どんな苦難に立たされても切り開くのは全て自分である～（前書き）

第一部、クライマックスであります。

第３１話～どんな苦難に立たされても切り開くのは全て自分である～

潮風が靡く。シスターがいる場では信じられないことが起こっている。

確かに奴は自分の一撃を貰い、倒れた。

なのに立ち上がった。

驚くのはそれだけじゃない。自分が見切れないまでに、奴の攻撃が自分の武器を砕いた。

「剣術……ですか？」

「ん、まぁな……昔ちょいとな？」

慎重に伺いながらシスターは問うがテルは素っ気なく返す。

あまりにも可笑しい話だ。シスターにとっては……

仮にも、先ほどはパワー、スピード、どれをとっても上回っていた。

それをちょっとやった程度に学んだ剣術で自分が翻弄される訳がない。

（この男は危険過ぎる……計画の邪魔にならないようにするために、

消す！！」

今、ここでッと言わんばかりに、シスターは残ったトンファーを片手に駆け出した。

「そろそろ、終わりにしようや……」

駆けてくるシスターを見て、テルもまた構えた。　といっても目つきや雰囲気が変わっただけで鉄パイプの位置はなんら変化はない。

普通なら真上に構えるか、両手で臍の辺りで構える。

だが、彼はそうしない。

それが彼なりの、テルの構え方なのだ。

「これで……」

唸りをあげたシスターのトンファーがテル目掛けて迫る。

放ったトンファーは頭から振り下ろされた。

轟音と同時に、激しい土埃が舞うがそこにテルは居ない。

「消えた……ッ！？」

呆気に取られたシスターが真横に感じた気配に目を向けると鉄パイプを振り上げているテルの姿が見えた。

「……」

鋭い目はしっかりとシスターに向けられている。　今までのような死んだ魚の目ではない。

完璧な隙。　タイミングを計られて避わされ攻撃される。

（ま、マズい……）

回避不可能。そんな言葉がよぎるなか、鉄パイプが振り下ろされた。

バキィンッ！！

「……？」

空に響く破砕音にシスターは耳を疑う。

体を殴られた訳でもない、シスターの右腕のトンファーが破壊されていたのだ。

（最初から武器だけ……を？）

「ふぅ～」

武器から破壊した理由を考えている時、テルはいつものようにダルそうに息を吐いた。　そして

「ハイ、終了～～～」

と言い放ったのだった。

「え？」

シスターはまたしても訳が分からない状態だ。

「もう終わったんだっつうのが聞こえてねぇのかコノヤロー。　お前はもう戦える武器が無い……なら、もうこれ以上やり合った所で無駄じゃねぇか……」

テルはシスターに対してダルそうに返す。

「……情けのつもりですか？」

シスターが怒り混じりに投げかける。シスターにとって、それは侮辱とも捉えられたのだろう。

「バーカ。　そんなもんかけるぐらいならご飯にでもかけるわ……」
頭を掻きながらテルは続ける。
「俺は俺のルールを守った。　ただそんだけ……」
「くっ……！！」
テルの言葉にシスターは歯を食いしばった。
一向に訳が分からない。　なぜ、トドメをささないのか、そんな美意識を貫いた所で自身の得になる事があるのか？
　シスターは困惑するばかりだった。
だが分かっているのは、自分が目の前の少年に負けた事。
「んじゃ、お縄に掛かって貰うとするかね」
自分がまだ捕まってはいけないという事だ。
「簡単に捕まると思ったら大間違いですよ……と！」
シスターは一歩下がると懐から丸い球を地面に投げつけた。
打ちつけられた球はバホッと音を立てて、白い煙が辺りを包んだ。
「好きだよな、煙幕……」

煙に包まれた場は何も見えない。　やがて煙が晴れて辺りを見渡すと、そこにシスターは居なかった。

遠くの方でモーターボートが海を突っ切って行くのが見える。　恐らくシスターの物だろう。

「チッ……逃げられたか」

舌打ちをするが直ぐに頭を切り替える。　早くハヤテ達を見つけなければマジメにディカプリオになってしまう。

「多分コッチか？」

テルは持っていたパイプをポイッと放り投げて走り出した。

○

方向をほとんど勘で走っていたテルは船内の広い場所に出た。

「俺の勘も捨てたもんじゃないな……」

テルの見据える先には伊澄が、ついでに何故かナギがいた。

疑問を抱いたが悩むだけ損というやつだ。　テルは二人に近寄る。

「おーいお前ら！」

「テル！？」

「テル様？」

二人が驚いてテルを見る。　それもそうだ。　シスターとの戦いで血だらけになったままだったからだ。

「事故にでもあったのか？」

ナギがそう言ってテルに聞く。

「まぁ、そんなとこだ」

テルがなんともないと言った表情だ。ナギとしては相変わらず訳が分からないと言った様子である。

「なんでお前らこんな所にいるんだよ？」

「ああ、そうだ！　ハヤテが！！」

ナギが思い出したかのように声をあげた。

ナギは掻い摘んで事情を説明。

「おいおい、どうしたらハヤテはそんなファンタスティックとは程遠いトラブルに巻き込まれるんだ？」

「ハヤテが鮫を倒して沈んでから全く上がってこないのだ！」

ナギは不安そうな表情でハヤテが沈んだ海面を見つめる。

「……ったく、しょうがねぇな」

そう呟くと、テルは頭を掻きながら近くのコンクリートの残骸を持ち上げた。

「な、何をやっているのだテル！？」

テルの行動にナギはもはや馬鹿をやっているとしか見てはいないだろう。

「時間がねぇ、早く沈めるように重りを持っていくだけだっつうの」

身の丈の半分の残骸を持つテルはふらふらと歩きながら海面を見据える。

「んじゃ、なんかあったら頼むわ……」

「え、ちょっ……」

ナギが言い終える前にテルは水の中へダイブした。

―数分後。

「ぷはぁぁぁっ！！」

海面から勢い良くテルが浮かんできた。　ハヤテも一緒だ。

「ハヤテ、ハヤテ！！」

ナギが涙目になりながらハヤテに問い掛けるが返事はない。気絶しているようだ。

「流石ですね、テルさま……」

落ち着いた口調で伊澄が言うがテルは頭を描いた。

「ま、いろんな借りがあるからなコイツには……」

テルは引き上げたハヤテを背に乗せた。

「早くしねえと、見事なまでにディカプリオの作り出したワンシーンになっちまうぞ」

「安心しろ、私達は女だ。　最後は生き残れる！！」

「バカ言ってねぇで行くぞ……ん？」

テルが階段に足を掛けた瞬間、近くに倒れている男が目に入った。

「なんだあの男は……」

まるで初対面のような顔だが一度は出会っている人間だ。

「誰だじゃない！　バルトだァァァ！！」

ナギの声が聞こえたると男はガバッと身を起こして叫んだ……が。

「……」

ワンテンポ。

「……」

またワンテンポ。

「……誰？」

「だぁぁぁ！　そこまでテンポを置いて誰も覚えてないのかぁぁぁ！！？」

「いや、テンポ、関係ないし」

ナギが素っ気なく言う。　バルトは膝をガクッとついた。

「クソッ！　爆弾配置したらすぐ目の前で爆発して気付いたらこんな所に……」

「お前が爆弾配置した犯人か……」

ナギが目を細めて迫るがバルトは顔を俯かせたままだ。

「おいコイツ反応しないぞ」

「この人誰でしょうか……」

「伊澄、そのリアクションは今やるには遅い」

バルトを除いたトライアングル会議が開始されている最中、テルが呟いた。

「とりあえず、帰るか？」

その言葉にはみんなが首を縦に素早くスイング。

皆それぞれに階段を上っていく。

「お前も早くこないのか？」

ナギや伊澄が上っていく中で、テルがバルトに尋ねた。

「フ……作戦も失敗した。　上司に見捨てられ、希望も明日もないこの世界で俺が生きていく必要はない……」

まるですべてを悟った詩人のような境地を垣間見せるバルト。

「分かってねぇな……」

テルが頭を掻いた。

「希望も何も、それらを見出すのはお前自身だ。　いつまでも上に捨てられたとか言ってんじゃねぇ、好都合だ。　上司にも頼らないで明日を切り開く事ができる瞬間じゃねぇか……」

「……」

紡ぐ言葉に、バルトは言葉を詰まらせた。

そうだ。今、出番が少ないとか、上司が捨てたという理由で明日を諦めるのは実にくだらない。

自分の目の前に新しい場所がある。　境目を前に自分は佇んでいた。

今までに見切りを付けて、己の道を歩むまでだ。

なら……

「分かってるじゃねぇか……」

境目を越えるためには何をする？

「決まってんじゃねぇか、その足は上がってんだろ？」

そうだ。　今、新しい道をバルトは行く決意する。

「なら、その一歩を踏み出すのになんの迷いがあるんだよ」

気付けばバルトは立ち上がっている。
新しい決意のある顔に。

○

少年、綾崎ハヤテは海に沈んでいた。

（お嬢様、大丈夫だったな……良かった）

自身の事より、他人の心配をするのはこの少年のサガだろう。

体には全く力が入らない。　瞼も重くなってきた。

（お嬢様……すいません）

そう呟いた後に何かが自分の腕を掴んだのが分かる。

それが最後に見たハヤテの映像だった。

「……おーい、謝るなら早く目を覚ませってんだコノヤロー」

「アレ？」

「アレ？　じゃねぇよ。　アレキサンドリアがそんなにいいかコノヤロー」

朧気な眼を開くとテルがいた。　更に周りにはナギが、マリアが、伊澄が、咲夜が、マユミが、シュトロハイムがいた。

「ハヤテ！！」

「テルさんが助けてくれたんですか？」

「ま、お前をサルベージしたのはそうだけどよ。実際治療したのはマユミの医療スタッフだ。感謝しろよ」

ナギはハヤテに声をかけるがハヤテはテルに聞いている。

気を取り直して

「ハヤテ……」

「まったく、鮫と戦えるのはなァ世界が変わったとしても花山薫だけなんだよ」

今度はテルによりナギのコンタクトは遮られる。

それを聞いたハヤテはシュンとする事はなく逆に

「でも、助けてくれて……ありがとうございます……」

「ッッッ！？」

突如として、ナギの全身を雷撃が突き抜けた。　その電圧、約百億ボルト、雷に匹敵する衝撃だ。

何故か素っ気なく返したテルに対して、ハヤテが胸キュンした可愛らしい乙女に見えてしまったのだ。

「お前からの礼はいいや、不幸をもらうのと一緒だからな」

更にテルのこの連れない態度。　ハヤテの背景にはジャポントーンが見えた。

（いかん、いかんぞ……）

では皆さん、ここらで今回のナギの作戦の内容を思いだしてみよう。

分からなかった人は廊下に立とう。　もしくはメダパニダンスを友人に披露してこよう。

マリアは苦笑いをしている。

マユミはＤＳ片手に厳選作業（ポ〇モン用語）

シュトロハイムはクラウスと年寄り談義。咲夜と伊澄はお互いに漫才の練習。

―何故か男はつれない態度に心ときめくという……

「ヌアアアアアッッッ！！！」

ナギは雄叫びをあげながら救助船の外に出た。
主の心配ごとがまた増えたのであった。

―え？　バルトは一体どうしたかって？

―数日後。

ここは東京どこかにあるラーメン屋、ラーメン辰也。
今日も店主、辰也の歳を感じさせない活きのいい声が聞こえる。

「辰也さん、なんだいバイト雇ったのかい？」

「あ？　あのクソガキが押し付けて来やがったんだよ……おい新人！　早くとんこつラーメン持って来い！！」

辰也は奥の厨房にいる人物に怒鳴り声で呼びつけた。

「新人じゃない……」

ラーメン屋の服を着た男はお盆片手に現れて言うのだ。

「バルトだ。　後、好きなのはダークモカペプラチーノな」

「お前ここ辞めてスターバックス行けェェェェ！！！」

ラーメン辰也には一人、ラーメンをつくる外国人が現れて、更に賑やかになったとさ。

第３１話～どんな苦難に立たされても切り開くのは全て自分である～（後書き）

終わったよ第一部……なんで第一部？　二部なんてあるの？　と言われるような感じですがあります。

実は最近病み期っぽい状態だったんで小説が進まなかったのですよね。　ようやく落ち着いたんですが思い出したように急ぎで書き始めてしまいました。　もはや巻き作業、ピッチを早めてやってしまったのでグダグダ感があります。

第一部はテルが色んな人々に会い、自身の先生と呼ばれる人物から教わった剣術を思い出す。　といった所です。

第二部は今までの失敗や成功を糧にしっかりやっていきたいです。

第二部は恐らく、この小説でもっとも大切な話になりますので。

感想や意見をいつでもお待ちしております。

第３２話～第二部というが素晴らしいスタートは切れない気がする～（前書き）

長く……長く…

それはゆっくりと動いていく……

物語は進み、一時の休息からまた、物語が始まる……

新しい始まりは何を生み出すのか。

それを知る者は……誰一人としていない。

第３２話～第二部というが素晴らしいスタートは切れない気がする～

皆さん知っているだろうか、数奇な運命から始まり、貧乏人から執事になった少年の話を……

知っているだろうか、更にひょんな事から執事として仕える事になったもう一人の少年のことを……

「ズル……ズル……」

何かと寒いこの1月の下旬。　三千院家の執事、善立　テルはラーメン辰也にて昼食中だった。

今日頼んだのはとんこつラーメン。　香ばしいとんこつの香りが仕事疲れの嗅覚を刺激する。

「ふぅ……」

あらかた食べ終えると大きく息をついた。

「なぁテル、一体その包帯はどうしたんだ？」

そう問い掛けるのはこのラーメン屋の店主、辰也　次郎である。

九十九里浜にて意識不明のテルを拾い、世話をした人物。

「うん？　船に乗っていたらテロリストがやって来て襲われたりし

た」

「ハァ？　外国じゃあるめぇし……」

「全くだな……」

辰也を肯定するように現れたのはこの店のアルバイトであるロシア人のバルトだ。

実はそのテロリストの一味だったりしたが、現在はこの通りラーメン屋のアルバイトである。

「つーか、この店大丈夫なんだろうな？」

「何が？」

辰也は頭上にクエスチョンマークを浮かべる。

「何って……地上げ屋共だよ、前に追い払ったやつ」

以前、このラーメン屋には質の悪い地上げ屋が頻繁に出入りしていた。

数々の商業妨害がラーメン屋の客足が悪くなった原因でもあった。

「あれ以来全く来なくなりやがった。　もう妨害される心配はねぇ」

「こっちの問題は解決か……俺は抱えた借金の問題があるのによぉ……」

テルには借金がある。しかし、そんじょそこらの金の貸し借りでは

ない。　その額六千万円也。　高校生が人生を棒に振るには充分。

「お前は何も考えなくていいんだよ。　元々この店が作ってた借金だ。　何が何でもあのお嬢ちゃんに返してやるからよ」

辰也は黙って皿洗いをする。　テルとしてもそうしたいのは山々だ。

だが借金の明細が自分宛てになってしまっているため否応無しという状況。

「辰也殿に心配をかけさせるのは頂けないな、急いで借金を返せる方法を考えろテル」

バルトが腕を組ながら言うのをテルは黙って聞いていた。

しかし、この男にそれを打開できる程の思考能力があれば、アインシュタインの相対性理論もフェルマーの最終定理もいとも簡単に理解できるだろう。

（しかし、六千万か……）

テルとしても何とかしたいと言うのも事実だった。

○

ひとまず屋敷に帰宅したテルはいかにして六千万の借金を返すかに悩んでいた。

街金はもっとも危険。　宝くじは当たらないのは目に見えてる。

競馬はできる歳ではない。

「臓器……」

思わず呟いてみたが慌てて首を振る。

（アレ？俺の現在の労働意欲って借金を返すだけだよな……）

借金をいかに返すというのが現在の労働意欲になっているという事に気づいたテルはなんとも１７歳らしくない思考をしていると切実に思ったという。

○

「むぅ……」

「ん？　なにしてんだナギ」

屋敷の廊下に、とても小さい少女が一人。

「……」

声を掛けた金髪ツインテールの少女は反応しない。　何か不機嫌な事があったのだろうかとテルが察知したのはその横顔だ。

鋭い眼光、つり上がった瞳は手に握られている一枚の紙に向けられていた。

「２月１日……白皇でマラソン大会なんですか……へぇ～」

「うおっ！？」

背後からの突然の奇襲にテルは驚いて振り返る。

「ハヤテ、なんでお前はいきなり現れるんだよ！！」

「嫌だなテルさん、神出鬼没は執事の専売特許ですよ？」

水色の髪をした少年、綾崎　ハヤテは当然のように返す。

彼は、綾崎　ハヤテはテルと同じ三千院家の執事である。

ロボをなぎ倒し、トラックにひかれても死ぬことのない超肉体を持つ。　最近はサメを倒している実は体を改造されたサイボーグ執事だったり……

「そんな設定ありましたか？」

「頑強過ぎるのに越したことはない。　あと、実は地上最強の生物と肩を並べれる存在だとか……」

「だからそんな設定はありませんよ」

ハヤテは淡々と念を押すように言うがテルは頭を掻いている。

「んで？　マラソン大会があるって？」

テルは先ほどのハヤテとの会話の流れを電車の線路を変更するかのように変える。

「……ええそうですけど」
先ほどの仕打ちにいささかムッとしたハヤテだが心を落ち着かせる。
「ま、出ようが出まいが関係ないけどな」
「どうしてですか？」
「だってまず、一人は確実に出ないってのはわかってんだから……」
テルのだらけた視線の先にはナギがいた。
「よしッ！！」
ナギは大戦中、敵艦に自爆特攻する兵士のような決意したような表情になると高らかに言い放った。
「2月1日は休みだ！！」
「な？」
テルが分かっていたかのように呟き、ハヤテは苦笑いをしていた。
「な～に朝から固い決意で自堕落になってるんですか？」
「痛っ！？」
突如、ナギの頭に馬場チョップが入る。

馬場チョップを入れたのはメイド服を着た女性、マリアである。
容姿端麗、才色兼備が似合う彼女、そこから醸し出されている雰囲気は大人そのもの……だが実はまだ１７歳だという。
ちなみに「まだ」という言葉はハヤテやテルも口にはしない。　それは基本マリアにとってＮＧだからだ。

「な、なんだマリア！　お前はこんな死人が出そうなデスマーチに参加しろと言うのか！？」

「そんな大袈裟な……」

まるで世界の終わりかのような顔をするナギにマリアは動じず対処する。

ようはナギは運動嫌い。しかも筋金入りの。　だから主であるナギのあしらい方は大体分かるのだ。

「でもお嬢さまは１３歳ですから、高校生が走る距離は辛いのでは？」

「そーだそーだ！！」

ハヤテの言葉にナギが非難の声。　しかしこれにもマリアは動じない。

「大丈夫ですよ。　そのために参加する距離は自由に選べるんです

から。　必ずどれか一つには出て下さいね」

ナギから取り上げていたマラソンの用紙をヒラヒラさせながらマリアが言う。しかし、

「ハヤテ、ケガは大丈夫か？」

「え？　あ…全然平気ですよ？」

「聞きなさい！！」

マリアの説明よそにハヤテのケガの具合を聞くナギ。　明らかにわざとらしい。

「おいナギ。　何時までもだらけた生活送ってんじゃねーよ。　いいか？　運動はな、適度に行う事で免疫力が上がったり、体に良いことだらけなんだぞ？　年中引きこもりのお前が巣から出て飛び立つ時が来たんだよ」

「テル、色んな意味で頭、大丈夫か？」

「ぶちのめされたいか主殿？」

「……」

もうマリアは言葉を発しなかった。

○

「しかし、お嬢さまのアレも筋金入りですね」

「ええ、なんとかしなくてはと思ってはいるのですが……」

「アイツの場合、スポーツに対する関心のベクトルがまるで逆ですからね」

食堂にて、使用人3人は自身の朝食をとっていた。

主より後で食事をするのは使用人達のルールである。

「ハヤテはこのままでいいなんて、思ってないだろ？」

「まぁそうですけど……運動嫌いが無くなれば部活も始めるだろうし、外に出る事も多くなりますから」

ハヤテも執事として、主の、ナギの運動嫌いをどうにか出来ないかと考えていた。

しかし現実は厳しく、本人にその気はない。　最早ナギには運動＝健康有害が図式化されており、まさに一方通行なのだ。

しかし、主を導き出すのもまた執事の使命。

「お任せください」

ハヤテはお椀の上に箸をパチッと置いた。

「お嬢さまの執事として僕が必ず……マラソン大会に参加させて見せます！！」

「おお、ハヤテが何か決意したような眼差しに！！」

テルはウインナーをご飯と共に食べながら熱いハヤテを見ていた。

○

そんなこんなで、ナギの改造計画が始まった訳だ。

ハヤテが大会に出るという口実で一緒に練習するというのが流れ。

最初こそ嫌そうなナギだったが、仕方ないといった感じで練習する事になった。

（大丈夫！！この練習中にスポーツの楽しさに目覚めれば……お嬢さまだってきっと大会に出たくなるはず！！）

しかし、ハヤテのその思惑は出鼻から挫かれる事になる。

「ハァ…ハァ……ハァ…」

「……」

「……マジで？」

五分後、タータンの上でぶっ倒れていたのは他ならぬ、ナギだった。

うん、これは問題ない。が、問題は別にある。

ナギが五分で走破した距離、およそ５０メートルッ！！

これはテルもハヤテも頭を抱えざるを得ない。

「あの……お嬢さま？」

「……ムリ、これ以上は…もう……」

ハヤテが駆け寄るもののナギは蚊の鳴くような声。　まさに虫の息状態だった。

「あの、体の具合とか良くないのでは……」

「そんな訳あるか！！」

ハヤテの言葉を、ナギは叫んで否定した。

「よき聞け！　人間はチーターとは違うのだ！！　走るようになど出来ていないのだ！！」

これを聞いている限り、もはや全ての人間としての身体構造を否定されている。
アースマラソンを頑張っている某芸能人が可哀想だ。とテルは眠そうな表情を浮かべているが。
ナギからすれば、この５０メートルが長距離だという。

「やれやれ、不甲斐ない執事っぷりですな……」
突然背後からの声にハヤテも気付いたのか、直ぐに振り返る。　クラウスがいたのだ。

「クラウスさん！」

「クラウス……」

「なんだいたのか」

「ぐっ！　　まったく、主を導くのが一流の執事の務めだというのに……お嬢さまを導くどころか危険な目に遭わせるばかり……」
カイゼル髭が立派なクラウスは今度は眼鏡をくいっと押し上げる。
「この１ヶ月、君の仕事っぷりを見せてもらいましたが……導くどころか、堕落させる一方ですな君は！！」
ゴスッ！！　とクラウスの頭部にナギの鉄拳が炸裂した。

「誰が堕落する一方だって？」

「お嬢さまは元気ハツラツですな……」

「ハヤテは執事としてよくやっている！　どちらかというとテルの方が執事として出来ていないのだ！　その点ハヤテはいつも私を守ってくれている！！余計な口を出すな！！」

「守るだけならＳＰにもできます！　主を良い方向に導けなければ一流の執事とは言えません！！　善立以上、一流未満ですよ！！」

２人の正論が飛び交う。　ここら一帯はどうやら戦時のような銃撃戦だ。

「なんか、さりげなく俺の悪口が言われていた気がするけど……」

「気のせいですよ」

テルの言葉にハヤテは苦笑いをしながら返した。

「ならば、ハヤテが一流であるという証拠に、今度のマラソン大会、私は一位をとるッ！！」

「ええ！！？」

「ちょ、ナギ！　なに考えてんだ！？」

テルとハヤテがこれ以上ないまでに混乱している。

「よいのですか？　そんな約束をして、もしダメなら少年には執事

を辞めてもらいますよ」
その提案にはナギも一瞬躊躇いが生まれた。
「できるよな？　ハヤテ……な？」
「え？　ええ……？」
まるでこの場はこう言っておけとばかりのナギの熱い視線。ハヤテは戸惑いながらも頷いていた。
クラウスは再び眼鏡を押し上げる。
「分かりました。　では大会を楽しみにしていますよ」
捨て台詞を残してクラウスは去っていった。
「ハヤテ……」
「なんですかお嬢さま？」
「ドーピングコンソメスープって作れるかな？」
「作れても飲まないでください」
「白田になりたい人、いるか？」
ナギやハヤテが途方に暮れるなか、テルの手にはさりげなく魔神探偵脳神ネ〇ロのコミックスがあった。

「簡単に言えば、そう言うのは勝算がないってことだよな？」

「そうですよね」

ハヤテもテルもお互いが腕を組んで頷く。

確かにそうだ。　ナギは黙っているが、言わずとしても理解してるのだろう。

一年の女子で一位を取ること即ち、アレに勝たなければならないことだ。

○

「くしゅん！！　誰か私の噂をしてるのかしら……」

アレ、もとい生徒会長、桂　ヒナギクである。

第３２話～第二部というが素晴らしいスタートは切れない気がする～（後書き）

復活ッ！　復活ッ！！　復活ッ！！　善立テル復活ッ！！　善立テル復活ッ！！善立テル復活ッ！！

実に長い期間が開いたと思います。　皆さんが待っていたか分からない第二部はきょうから開始です！！

第３３話～金を巡るトラブル。それは欲望のぶつかり合い～（前書き）

第二部の新キャラの登場です。　まず一人目でございます！

第３３話～金を巡るトラブル。それは欲望のぶつかり合い～

場所は白皇学院。テルとハヤテは時計塔にやってきていた。
扉の前ではテルが頭を掻きながら扉の前で誰かを待っていた。

バタン。　と生徒会室の扉が静かに開いた。　中から出て来たのはハヤテである。

「どうだった？」

テルが聞くが、ハヤテは顔を苦笑いにして首を振った。

「手加減は無いそうで、全種目出場するそうですよ」

事の発端はナギが晴れてマラソン大会に出場する事になったのだが、ナギが一位にならないとハヤテがクビになるというデスゲーム。

更に万能生徒会長、ヒナギクを倒さなければナギもとい、ハヤテには明日は無いわけである。

ナギからの要望でヒナギクが出場しないコースで勝つつもりだったが、先程のリサーチの結果、笑顔で全て出ると言われた。

「その代わりにこんな物が……」
ハヤテが取り出したのは一枚の紙だ。

「ん？　なに、マラソン自由形？」

「はい、今年は久しぶりに行われるらしくて、２人１組で出場してゴールを目指すらしいですよ」
「なんだよその中忍試験みたいなツーマンセル」
頭を掻きながらテルは不思議に呟いていた。
「なんにせよ、頑張るしかねぇなハヤテ」
「そうですね。　テルさんは出ないんですか？」
「え？　俺が出ると思う？」
「まぁおおよそ分かっていましたけど……」
欠伸をしながら答えるテルにハヤテは肩を落とした。
「だってダルいじゃん、寒い中マラソンなんて、体もケガだらけだぞ？　最近俺骨折したりとか大変だよ？テルさんはね、結構平気な顔してるけどね、心の中では床を転がりたいの！」
仮にも主人公の言うセリフとは思えない。
ではナギに熱弁していたスポーツの有用性もさっきのテルの発言で明らかに歪んでしまっている。
「実はこのマラソンには賞金がでるらしいんですよ～」
「ふ～ん」

ハヤテは半ばわざとらしい口調で言うがテルは鼻をほじくり返していた。

「金額は……一億五千万だそうですよ？」

スブシュッ！！

「なん…だと……？」

テルさん大出血。　鼻に突っ込んでいた指を驚きの余りに奥深く抉ってしまうほど。

それは金額的にもテル的にも破格なものであった。

「アレ？　テルさんなんで鼻血だしてるんですか？」

ハヤテがニコニコしながら問うがテルは鼻を手で抑える。

「え？なに、別になんでもないけど……」

「いやいや、明らかに金額の所で鼻血なんて可笑しいですよ」

「……これは今朝食べたチョコレートが原因なんだよ」

「チョコレートを食べて鼻血なんてそんなベタな」

明らかな動揺を見せるテルにハヤテは確信を抱いていた。　賞金が欲しいのだと。

しかし、自身のクビがかかっている以上、一位をテルに取らせる訳にはいかない。

（一億五千万の賞金があれば……借金を返せる！！）

だがテルも考えていた。

（一億五千万あれば、ジジィの借金返済して、残りは俺の物に……）

なんの因果か考えていた事は2人とも同じ、否、この学園には同じ思考を持つ人間は多数いる。

まさしくシンクロニシティ。

同じ時刻で同じ瞬間、場所は違えど他人と自分が同じ行動、思考をすることがある。

お互いが向き合い、悟っている。　もう既にギャンブルは、勝負は始まっていると……

だが言葉に出さない。

「ま、出てもまさか勝とうなんて思わないけどな～」

「そうなんですか～　なら僕とお嬢さまで一位を目指しますよ」

「おう頑張れよ～俺は悪魔で参加するだけだからな～」

「そうですか～」

（否、違う！　コレは罠だッ！　明らかな……明らかな戦略ッ！）

幼少期より様々な危険の渦中に身を置いてきた少年。　その危険な経験はやがて少年に相手の虚実を見破ってしまう力が自然と五感に備わさせていた。

（やはり気付いている……俺の嘘にッ！一点の曇り無くッ！ただ真実だけを……読み取ってやがる……）

お互いが自身の目的を達成する為には明らかに邪魔な存在だ。

（（決戦は当日のマラソン大会ッ！！）

ハヤテはにこやかな笑顔でテルはいつものやる気のない瞳で目には見えない光線を飛ばす。
互いの光線はぶつかり合い、火花をちらした。

（（負けられない……ッッ！！））まさに『絶対に負けられない闘いがそこにはある』である。

○

「アレ？アレアレ？　ハヤ太くん、なんで教室に来たの？」

「瀬川さん、昼休みももう終わりじゃないですか……授業受けないと」

場所は教室。　昼休みも終わりに近づき、ハヤテは教室に戻ってきていた。

「瀬川さん、まさかサボるつもりですか？」

「ふぇっ！？」

泉は面を食らった。まさしく、今まさに美希や理沙とサボるつもりだったからだ。

「いや～あのね……？」

と、ここで泉はハヤテの後ろにいる美希や理沙いる事に気付く。見ると美希が大きなカードを持っていた。

美希が何やらカードに書かれている文字を見よと言わんばかりに手を動かす。　泉はそれを読み上げた。

「『あれ？　ナギちゃんがいないけど大丈夫なのハヤ太くん』」

「なんですかその用意されていたかのような台詞は……」

ハヤテも不思議に思った。明らかにはぐらかそうとしてる。

がしかし、それよりも学校に来ているナギの姿が無いことが気がかりだ。

「あれ？　どこに行ったんだろう……」

「『早く探してきた方がいいよ。　』」

泉はまた棒読みに近い。　これも美希達が出したカードの内容だ。

「そうですね。　瀬川さんありがとうございました」

「いや～お礼なんていいよ～。　それより早く探しに行かないと」

泉も照れながら頭に手をやる。今度のは泉の言葉だ。

泉の言葉を聞くや、ハヤテは急いで教室を出て行った。

「ほぅ、遂にハヤ太くんを言いくるめる女になったか……」

「ふぇっ！？　美希ちゃん違うよこれはね……」

「お前も悪女への道を一歩踏み出したか……」

「理沙ちん～そんなんじゃないってば～」

頑張れ泉。委員長の星を掴むまで。

「ま、マラソン大会も近いことだしダルいから授業をサボるか～」

「ん、そうだ泉、少し話があるマラソンの事だ」

「え？なに理沙ちん」

○

「お嬢さまどこ行ったんだろう……」

ハヤテは学院を探し回る。　各教室を隈無く探した。　挙げ句の果てには先ほどいた生徒会室に戻った程だ。

しかしナギは見つからない。　あの地獄（ナギにとって）の練習の次の日に学校に来たのだ。　途中で帰ってしまっても可笑しくはない。

「あ……」

いた。　場所は学院の外のカフェテリア。ナギはテーブルの上に顔を伏せ、静かに寝息を立てていた。
疲れていたのであろう。

しかし、もう一つ気になる事がある。
ナギの隣で座っている女性についてだ。

「あの～」

「……ん？　なにか」

ハヤテの声に気付いたか、女性はハヤテの方を見る。
凛とした口調に艶のある長い黒髪、なかなか鋭い目つき。
最初に言った通り、『凛』という言葉が似合う人だとハヤテは思った。
「いえ、お嬢さまを探していたんです」
ハヤテは少々戸惑いながらもそう返す。　すると女性は分かったかのように片肘をテーブルに置いて静かな笑みを浮かべた。
「ああ、君が三千院くんの新しい執事の子か……」
「はい、綾崎ハヤテです。　もしかしてずっと寝ているお嬢さまについていたんですか？」
「まぁそんなとこだな。ウトウトしている姿を見たから気になっていたが案の定寝てしまったぞ」
女性は笑みを浮かべると肘を外して腕と足を組んだ。
「私は奈津美（なつみ）　唯子（ゆいこ）だ。　話は聞いているぞ綾崎くん、なんでも反射の超能力が使えるようだな」
「どこから聞いたんですかそんな噂……」
「フフッ、冗談だ……」
そう言うと唯子は少し笑った。

自身の噂は置いといてそろそろ戻ろう。時間的にもまだ大丈夫だが寝た状態のナギを起こすのは骨が折れる。

「はぁ、では僕はお嬢さまを起こして……」

ハヤテがナギに触れようとした次の瞬間である。

ガシッ。

「え？」

ハヤテは右腕に力強い圧力を感じる。　唯子が左手でハヤテの右腕を掴んでいたのだ。

「あ、あの～」

「起こすな」

「はい？」

ハヤテは唯子の言葉に耳を疑う。

ハヤテはその時の唯子の目を見た。　その鋭い眼光はまさしくザクのモノアイそのもの。　恐ろしい殺気を帯びている。

「君は寝ている人間を起こすことに躊躇いをもたないのだな……」

「えーっと起こし方の問題ですか？」

ハヤテは訳が分からずにそう答えてみる。

「起こし方の問題ではない、起きてしまったら……」

唯子はカッと目を見開き、言い放った。

「この可愛い寝顔が見られなくなるではないか！！」

「は？」

「だから寝顔だ寝顔！」

唯子は意味が理解出来ていないハヤテに呆れ顔で説明を開始する。

「見ろ、疲れとお日様の陽気な日で生み出された寝顔はまさしく天使のものだ。　この寝顔はナギ君ならではだ！！」

熱い熱弁はまだ続く。その時の唯子は笑みを浮かべているが次の発言でハヤテはその笑みの裏に隠されている真実を悟る。

「可愛い……お持ち帰りしてもいいか？」

刹那的にヤバいと思った。

「あの、そういう発言は疑われるので止めたほうが……」

「何を言っている。　私は真実を隠さず君に公表している。　可愛いものは可愛い、できれば愛でたい。どこに疑われる要素がある？」

「全部です！！」
ハヤテはこれまでに無いくらい素早い突っ込みを見せた。

唯子はナギの横顔をぷにぷにとつついてクスっと笑う。

「まぁ頑張れよ執事くん。　マラソン大会」

「あれ、唯子さん何で知ってるんですか？」

「知ってるも何も寝言でナギくんが呟いていたが……」

「そうですか……」

「しかし自由型にでるなんてよほどの勇気があるんだろうな……」

「えーっと、そんなに凄いんですか？マラソン自由型って……」

唯子の意味有り気な雰囲気にハヤテは気になったか唯子に聞いて見る。

「そうだな。白皇学院には五つの伝統行事がある。その内の一つがマラソン自由型だ」

唯子は得意げに説明を進めていく。

「自由型はフリーダムだ。勝つためなら手段選ばず、なにしても良い。だが殆どの参加者がリタイアしてゴールすら出来ないほどの過酷な競技だよ」

「よくご存知で……」

「この学院に3年もいれば耳にも入るさ……」

「そうなんですか……って、え？」

ハヤテは耳を疑う。先ほど唯子が言った事についてだ。

「……唯子さん、僕らと同じ一年ですよね？」

ハヤテの一言に唯子はムッとした表情になる。

「失礼な、私は二年だぞ。今年の４月から3年だ」

「ええーー！！？」

「そんなに驚くことではないだろ。上級生が居たっておかしくないはずだ」

「いやでも、今まで上級生キャラなんて出てきてませんでしたし……」

「その内おかしな先輩も出てくるはずだ。特に……乙葉　千里という男には気をつけた方がいい」

「はぁ……」

ハヤテは少しばかり険しい瞳をする唯子を見てそう返すしかなかった。

「そんな事よりナギくんをお持ち帰りしてもいいか？」

もはや変な先輩は目の前にいる事を本人は自覚しているのだろうか。ハヤテは不意にゾクッとしてしまう。

「あの、だから誤解を生むような発言は……」

「なんと！　もう既に飛躍した展開を迎えて、私より先にナギくんを愛でているのか！？」

「話を膨らませないでください！！」キーンコーン。

その時、学院の鐘が鳴る。　唯子はすたっと椅子から立ち上がった。

「ま、頑張りたまえ執事君。君にしか出来ないやり方でな」

唯子はそう言い終えると去って行った。

「むにゃ、どうしたハヤテ？」

鐘の音で起きたのかナギが目を擦る。ハヤテは去っていく唯子を見て

「不思議な人がいっぱいですね……この学院は」

そう呟くのだった。

○

そして次の日。　まだナギの特訓は続く。
今日は２００から３００メートルほど走っていた……がやはり耐えきれる事なく力つき果て、木陰に寄りかかっていた。

「本当に体力のない子ですね～」
今更な事をいうのはマリア。

「そんな事はない。ハヤテの特訓がハードすぎるのだ！！」
「２、３００メートル走っただけですよお嬢さま……」

「それでもハードなの！！」

ハヤテの言葉にナギは非難の声を上げた。

「でもナギがマラソン大会で一位をとらなきゃハヤテ君がクビという賭けを……クラウスさんとしているそうじゃないですか」

マリアの言葉にナギも反応する。マリアは改めてハヤテに聞いた。

「ハヤテ君もいいんですか？　そんな約束……」

「大丈夫ですよ……」

ハヤテは動じる事のない表情で言い放つ。

「それでもお嬢さまは一位をとってくれると……僕は信じていますから！！」

ナギもこの発言には唖然とする。

「大丈夫ですよね～お嬢さま」

「お？　おお……」

振り返った屈託のない笑顔にナギは頷くしかなかった。　ナギやマリアとしてもその根拠のない自信はどこから出てくるのか分からない。

暫くして走り込みの練習が再開される。

（しかし、一位をとれなきゃクビというのもムチャですが……あの子の運動嫌いも筋金入りですし……大丈夫かしらハヤテ君……）

「そう言えばお嬢さまって凄く体が柔らかいですよね？」

「そうか？　まぁこれ位なら普通に届くぞ」

ナギはその場で前屈をしてみせる。膝は曲がっておらず、手は地面につくほどの完璧なものだ。

「わぁスゴいじゃないですかーー！！　」

「そうか？」

「何もしていないのにそんなに体が曲がるなんて…スポーツの才能があるかもしれませんよ？」

ハヤテは賞賛を惜しまなかった。　ナギとしても次第に表情が明るくなっていく。

「じゃ、じゃあもう少し頑張ってみようかな」

「それがいいですよお嬢さま」

（へぇ…あの運動嫌いを上手くのせて、自主的な練習を促すなんて……）

「ハヤテ君は意外とやり手かもしれませんよ、クラウスさん」

「ギクッ！！」

マリアは木の陰にかくれているクラウスに聞こえるように呟いた。

「あんなのを見せられたらなぁ……」

一方、テルは屋敷の窓から走り込みをしているナギの姿を見ていた。

ナギが頑張っている。あの運動嫌いがだ。　それを邪魔しようとしている自分がいる。

（俺悪役じゃん！！）

端から見ればそうなる。　だがテルとしても賞金は欲しい。　辰也の困ることがないようになんとかしてやりたい。

テルは迷っていた。

んなこんなで2月1日。

マラソン大会ーーー当日ッッッ！！

「勝つぞーーーッッ！！」

天気は快晴。　雨オチなんてことがない空に、雪路の叫びが木霊していた。

「なんだアレ？」

「桂ちゃんは今日も絶好調だね♪」

美希と泉がその光景を眺めている。

「しかし賞金が出るかどうか分からないけどマラソンなんてよくや

るわね」

「あは、　私は５００メートル出たよ。　美希ちゃん運動キライだもんね」

「マラソンなんて適当に棄権しとけばいいのに……特に自由型なんて出る人の気が……」

「あーいたいた。　おーい美希ーー」

二人の所にやって来たのはヒナギクだ。

後ろには理沙がいる。

「これはこれは一年女子のコースで全勝された生徒会長さまじゃありませか」

「ヒナちゃんおめでとー」

「あら、ありがと」

美希は淡々と泉はシンプルにヒナギクに賞賛の言葉を送る。

「これでラストのマラソン自由型も制すれば全種目制覇ね。　ま、頑張ってくださいな」

「何、言ってるの？あなたも出るのよ？」

「……は？」

笑顔でいうヒナギクに美希は間の抜けた声を上げた。

「だって生徒会で出てないのはあなただけじゃない。　だから最後くらい出なさいね。　私が必ず完走させてみせるから」

「ッッッ！！？」

美希は慌てて泉と理沙を見る。２人とも午前の部で一つ競技に出ていたのだ。

明らかに策略だ。

「ちなみにコースは白皇の敷地一周だからかなり長いけど」

「挫けず頑張れよ♪」

理沙と泉がニヤニヤ、ニコニコと笑いながら親指をぐっと立てる。

「いやーーー！！」

美希は断末魔の叫びを上げた。

「いやーしかしお嬢さま、思った以上に参加者がいますねー」

場所はスタート地点前。２人の周りには人、人、人の群れ。

「これは結構、大変かもしれませんねお嬢さま……お嬢さま？」

（……）

ハヤテはナギに声をかける。　だがナギは顔を曇らせ、聞いてはいなかった。

（わたしが負けたらハヤテがクビになってしまう……私のせいでハヤテが……私が頑張らないと……でも私が負けたらハヤテは…）

離れる事になるだろう。言葉にこそ今まで出さなかった。しかし不安は募る。

ナギは知らずのうちに迫り来るプレッシャーによりいつもより緊張していた。

（ハヤテは……）

「お嬢さま」

ポンとナギの肩にハヤテは手を置いた。

「短い間でしたが、お嬢さまは頑張って練習しましたよ。　だから僕の事は気にせず、頑張って練習の成果を発揮しましょうよ」

「ハヤテ……」

ハヤテの笑顔を見てか、ナギも少しだけ表情のかたさがなくなる。

信頼しているのだ。　ハヤテはナギの事を……

ならば自分も信じるしかない。　自分とハヤテを……

「二人一組、お嬢さまの足りない所は僕が補いますから……一緒に……ゴールを目指しましょう」

「ハヤテ……」

「あのーー二人してゴールを目指しているところ悪いんですが……」

「はい？」

このマラソン大会の補助員らしき男がハヤテ達に声を掛ける。

「ゴールを目指す前に取り敢えずスタートしてもらえませんか？」

（（……））

二人は辺りを見渡す。

もう既に、人は見当たらず、風だけが虚しく吹いていた。

「ああ！！　いつの間に」

「いえ、二人のモノローグあたりから……」

「とにかく行くぞハヤテ！！」

「はい！！　お嬢さま！！」

慌ててハヤテ達はスタートを切る。　さい先は悪い。好スタートとはいかなかった。

「ハヤテ君達……大丈夫かしら……」

遠くでは心配してやって来ていたマリアが双眼鏡で見守っていた。

ーこうして……大ピンチのレースは本番へ……

ーそして当主人公のテルは……

「アレ？　今何時？」

ー寝ぼけた状態で未だに屋敷にいた。

第３３話～金を巡るトラブル。それは欲望のぶつかり合い～（後書き）

うーん、今更ながらもう少しオリジナルに欠ける。　そう考えていたりします。　もう次も考えていますが、受け入れてもらえているか心配です。感想や意見をお待ちしております。

次回はマラソンが始まります。　唯子先輩も出ます。　後、また新キャラの登場です。

第３４話～こんな寒い季節に走りたくはない～（前書き）

～テルが起床する直前の出来事～

スタート地点

ワタル「遅いなテルのやつ、自由型もうはじまっちまうぜ……」

（自由型で一位を取って、伊澄に格好いいところを見せるチャンスだって言うのによ……）

１０分後。

ワタル「スタートしちまったぞ……」

さらに１０分後。

ワタル「……もう無理じゃねェかァァァァ！！」

そんなこんなで本編へ……

第３４話～こんな寒い季節に走りたくはない～

大会、いざ始まる。
ここは大会本部。　午前の部で大会を終わらせた暇な人々が大型テレビで観戦できる場所だ。
さらにここは本部ということもあり名？解説者なおかげで実況動画と早変わり。

『さぁ始まりました、マラソン自由型！！　伝統のコースを制して賞金を手にするのは誰か？』

実況者、瀬川　泉がなりきったように解説を行う。

『なおここからは各所に点在するモニターを元に生徒会放送局がゲストと共に解説を行っています。　最初のゲストは早々に橘　ワタルくんです』

『宜しくお願いします』

解説席に座っているワタルは手を組ながら冷静に答える。

『ワタルくんは今回の自由型に出場するハズでしたが……一体どうしたんですか？』

『ハイ。　出場予定でしたがペアの人が遅刻したため、どうせ今から走っても勝てないだろと思い、解説に回らせていただきました』

『あ～、そのペアの人物はどうしたんですかね？』

『さぁ、どこにいるんでしょうか』

淡々とワタルは解説するが、本心は穏やかではない。

『おや？　スタート地点から奇妙な光景が』

泉が目をやると既に誰も居なくなったスタート地点に一人の人物が目に飛び込んできた。

『おや？　あれは善立　テルくんです！』

『アイツめ、今更来やがりましたね』

『まさかワタルくんのペアとは……』

『はい、まさしくアイツです』

ワタルの言葉に泉は苦笑い。

モニターには補助員ともめるテルの姿が目に見えた。

○

「だから今来たって言ってんだろうが！なんでダメなんだよ！」

「ダメも何も、君は自分のペアを連れて来てないじゃないか」

「うっせーなハゲ、その帽子取り上げて残りない髪を剃り上げてやろうか」

「なんだとォォォ！　まだハゲてねーから！　まだ２８だから若いから！」

補助員とテルの揉み合いは未だに続く。　テルとしては今から直ぐにスタートしたい。　だが規則として、二人一組がルールの自由型はペアがいなくては参加することができないのだ。

「分かったよ。ならペアを連れてくればいいんだな？」

テルは執事服のポケットから携帯を取り出した。

「ちょっと待っててくれ」

○

『どうやらまだ揉めていますね』

『そうですね。　これから何をするのか皆目見当つきません』

泉とワタルは携帯片手にしているテルに同じ意見を持っていた。

『ではレースの方に話を戻したいと思います！』

『そうですね。その方がいいです』

（一体何をする気だ？）

疑問が浮かんでいたワタルだった。

○

「うーん。先頭からだいぶ離されましたねぇ」

各地に点在するモニターを見て呟くのはハヤテだ。

「どうですかお嬢さま……まだ走れますか……って、聞くまでもないですね」

ハヤテはちらっとナギを見たが、ナギは枝を杖替わりに立っているのがやっとのように涙目を浮かべる。

「ではそろそろ……作戦開始といきますか」

ハヤテはそう言うと一枚の冊子を取り出した。

「作戦って？」

「以前ヒナギクさんがくれたこのレースについての説明書ですが……これによるとこのレースは各チェックポイントをクリアーしてゴ

ールするので、チェックポイントを通過すればコースに従う必要はないんですよ」

「ほぅ……」

「だからお嬢さまを抱えて、チェックポイントを一気にショートカットしていこうかと」

「なるほど……え？」

途中まで納得していたナギ、しかし後の言葉を考えてみると

「やっ！！ばか！！ちょっ、ちょっと待て！！」

「へっ？　なぜです？確かにメインコース以外の道を行くものは勇気あるものだけが行けとありますが……」

「そういう問題じゃなくてだ！！」

事の重大さを理解していないハヤテにナギは体をもじもじとさせる。

「抱えていくってお前、今体操服だし……それに走ったから……いっぱい汗かいてるし…だから…その…」

「大丈夫ですよ。　僕そういうの全然気にしませんし平気です」

「私は気にするって、うわっ！」

ナギの言葉を笑顔で聞かずに、ハヤテはナギに抱き抱えられた。

「そんなの気にしていたら優勝できませんよ」

「うわあああ！ばかあああ！！」

ハヤテは一気に脚に力を込めて、森の中に駆け出した。

○

ここは白皇学院敷地内……のハズだが、そこは見渡すばかり新世界、異常な成長を遂げた木々や苔などが溢れたジャングル地帯になっていた。イメージは死の森に近い。

そのジャングル地帯を突き進む二人の人影。

「まぁ確かにあの長いコースを地道に走るのは気が抜けるので分かりますが……ここって学校の敷地内ですよね？　唯子さん」

灰色のポニーテールを特徴とした少女が先頭たって歩く唯子に聞いた。

「うむ。　その通りだ書記くん、敷地内でありこれがショートカットのコースでもある」

「今更ながらに突っ込むのなんですが、本当に大丈夫なんですかここは？」

「大丈夫なんじゃないか書記くん。　少なくとも学校の中だ。猛獣

なんているわけがない」

二人はどんどん奥へと進んでいく。　次第に茂みが濃くなり、奇妙な虫が現れ始めた。

「だいたい二人一組参加というのがおかしいですよ。　なんの為の二人一組なんですか？」

「それはだな書記くん、一人が遭難してももう一人が助けを呼びにいけるようにするためさ！！」

「メチャメチャ危険じゃないですかぁぁーー！！」

顔をにやつかせ、手をうらめしそうにする唯子に、書記は猛然と突っ込んだ。

「唯子さん、いくらあなたが三年の委員長としても勝手が過ぎます！　私の意見はいつも聞いてくれないし！　なんでもできるからってヒドいです！」

書記は不満を余す事無く言い放つ。　唯子は黙ってそれを聞き、頷いた。

「確かに、いくらか私の身勝手さがある。　この自由型に参加したのは単に私が面白そうだという理由がそうだ……だが」

立ち止まった唯子は振り返り、手を差し出した。

「私は全力で君を守ろう。　いかなる時も、君の身を脅かす者がいれば、私は最低でも君はケガ無くゴールに送り届ける所存だ」

「あ……」

風により、黒い長髪が凛々しくなびく。

その瞳は追随を許さないかのように笑っているが意志のある瞳だった。

一瞬だがときめいてしまう自分がいる格好いいそう思った。

「……ズルいです」

思わず手を握りしめて唯子に示すのは信頼。　互いに了承したという事だ。

「さてチェックポイントはもうすぐだが……」

「へ？　ひゃ……」

グイッと左手を引っ張られて書記は唯子に抱きしめられる。

「まぁ時間はあるだろうし？　幸いにここは人気は少ないので思う存分……」

「委員長！　セクハラは禁止です！」

「セクハラではないのだよ書記くん、スキンシップと言いたまえ」

「スキンシップにもほどがあります！！って、にゃあああああ！！」

森の世界に黄色い声が響いていた。

○

『いや～どこも彼処も盛り上がっていますね～』

『どこか不健全な匂いがしますがまぁいいでしょう』

『ぶっちゃけた話、「正直もうキツいからやってらんねー」と既にリタイアが続出との事ですが……どうですかワタルくん？』

『名門ですからね。体力ないですね』

『取り敢えず今はこんな感じになっていますね』

一位　先生コンビ

二位　？

三位　？

四位　？

五位　ハヤテペア

六位　生徒会長

七位　委員長、書記ペア

最下位　テル

『波乱はありますでしょうか、誰が優勝するか分かりませんね』

『そうですね。ではワタルくんは誰が来ると予想しますか？』

『恐らく、生徒会長と委員長、三千院家の三つ巴になるでしょう。
生徒会長が六位という状況に納得いきませんが……』

『なるほど……でも！！』

『はい？』

泉が突然とマイクを片手に立ち上がった。

『このレースには今回はとんでも無い人物が登場しているのです！』

『はぁ……』

『白皇学院の上級生なら耳がバーストするくらい聞いているはずです！　あ！来ました！　来ました！　白皇学院のモンスターこと、乙葉（おとは）　千里（せんり）くんだぁーー！！』

○

「なははははは！　優勝は私のものだぁーー！！」

レースのトップを走るのは雪路と体育教員の薫　京ノ介　。
「一億五千万はァ！　私のもんだァァァ！！」
（ドンペリよ私の為に待ってなさァァァい！！）
ペアの襟首を引きずりながら走る雪路は踊る欲望に身を任せ、怒涛の走りを見せていた。
このままでは雪路の優勝は堅い。
しかし、トップには邪魔という因果がつき物だ。
「そんな事はさせんぞ！！」
「む！？」
雪路はどこからか聞こえた威厳ある声に立ち止まる。

ゴロゴロ……
「な、なに？」
向こうの茂みから聞こえる奇っ怪な音に、雪路はたじろいだ。　そして次の瞬間。
「ハァッ！！」
まるで馬をかるような声と共に茂みから一台の山車とともに男が現れた。

山車は急ブレーキを掛けたように、雪路の前にドリフトで止まる。

「それ以上の横暴、この乙葉　千里が許さんッ！！」

金髪を逆立て、鋭い瞳を持つなかなか整った顔立ち、まるで王のような威厳を放つ。　身長は１８０はあるだろうか、かなり高い。

「あなたは千里くん！？　自由型にも参加していたのね！？」

「その通りだ！　この自由型を制してこそ、俺の栄光のロードは始まる！」

千里は雪路を指差して言い放つ。

「この学院の生徒は、いや！　世界は望んでいる！　俺がキングになるということを！！」

雪路を指したかと思えば今度ははるか空を指す。　まるで後光がさしたように千里が輝いて見えるのは雪路の幻覚だろう。

○

『とんでも無い登場の仕方ですね』

『そうですね～でも男性の部では一位を総なめしたのは千里くんなのです～』

モニターに映る千里を見ながら、泉達の状況が続く。

『どういう人物か分かりますか泉さん？』

『はい♪　千里くんは学院屈指の俺様キャラで、あたかめ自分が王様のような振る舞いをする、他人を寄せ付けない雰囲気を持つ一匹狼！　「小手先など愚の骨頂、全ては力で押し通す。」それがモットーの二年生です♪』

『詳しい解説有難うございます。　しかし、先ほどから観客が騒いでいますね？』

ワタルは後ろの観客席を見渡す。　何故だかみんなため息をつき、なにやら暗い感じで呟いている。

きた…きた……

奴が…きた……

また…きた……

ざわ…ざわ……

『まぁ、頭の良い学校であんなキャラがいたら当然ウザいの極みですね～』

『多分そうかもしれません。　しかしあの山車は何でしょう？』

『大方、ペアを乗せるものでしょうね♪』

○

「おい女！　何時までもそこで寝てないでさっさと走らんか！！」

「ぐぅ～～～」

千里の声にひょこっと、山車の中から顔を出すのは紛れもない、伊澄だ。　山車の運転により目を回していた。

『伊澄だとォォォォ！？』

マイクを持ったワタルは大声を上げた。

「おい女、せっかく俺とペアを組めたのだ！　優勝しなければ意味がないぞ！」

「は、はい……ですが…きゅるるる……」

立ち上がろとするが伊澄は再び目を回して座り込む。

「クッ！　情けない！　あの程度の運転で根をあげるとはな！！」

『テメェェェ！！　何ふざけた事言ってんだァァァ！！』

その場の全員が耳を塞ぐ。　ワタルの怒号が響いてきた。

『テメェェェ伊澄に謝れコンチクショォォォォ！！』

『あーあー、ワタルくん！？　落ち着いて落ち着いて！』

泉の声が聞こえる。　ワタルを静めようとしているのだろう。

「ふん！　とんだ邪魔が入ったな、仕切り直しといこうか！！」

「望むところよ！」

千里の言葉通り、雪路も向かい合った。

「「勝負ッ！！」」

○

『落ち着きましたかワタルくん？』

『ま、まぁなんとか……』

まだ荒い息をついているがワタルはいつものように喋る。

『おーっと第三チェックポイントで善立　テルくんがチェックを受けているぞ～♪』

『え！？　スタートできたんですかアイツ！？』

『ええーと、参加者はテル夫くんとワタルくんということになっているのですが当の本人はここにいますし……』

『最悪失格がありえますね』

ワタルがうーんと唸らせてモニターを見た。

○

「はーいチェックポイントなので確認をお願いします」

「へいへい」

テルが補助員らしき人物に従う。

「ペアがいないと聞きましたが大丈夫だったんですか？」

「問題なかった。　ほらほら、何隠れてんだよ。　出て来いってワタル、トイレで遅れてたってなぁ」

「……」

茂みからの中から出てきた人物に補助員は目を細めた。

「そもそもお前はひ弱すぎんだよ、もっと身体とか鍛えなきゃ駄目だぜ」

そこに立っていたのは、身長はテルの一回りはでかい、頭にバンダナを巻いたサングラスの外人が立っていた。

「なァ、ワタルン」

その場、補助員がモニターを見ていた一同が口を揃えた。

「「「「「誰ェェェ

第３４話～こんな寒い季節に走りたくはない～（後書き）

さてさて、どこかで見たようなネタですがやって見たかったんです。

そして新キャラの千里くん。　次回は彼の力が……見れるかもしれない。

第３５話～マラソンをしてるとだんだん横腹が痛くなってくる～（前書き）

長いこと待たせてしまいたした。　開きすぎましたね……

では、どうぞ！！

第３５話～マラソンをしてるとだんだん横腹が痛くなってくる～

「おまっ、コレ誰だァァァ！！全くの別人だろうがァァァ！なんなんだこのふてぶてしい外人！！」

「は？何言ってんだワタルンだろ　どっからどう見てもワタルン以外の何者でもねーだろ」

補助員は猛然と突っ込んむがテルは不思議ながら返す。

「どこからどう見ても別人以外の何者でもねーだろ！３６０度あらゆる角度から見ても一カ所たりともかぶってねーよ！つーかワタルンってなんだ　なんでルンだけ英語発音なんだ！？」

「オイオイいちゃもんつけるのはよせよ。カブるも何も本人だからね　丸カブりだからね　思い出してみろ、ワタルンと言えばあのフランスパンのようなリーゼント……」

「ただ手にフランスパン持っているだけだろーが！そんな生徒じゃないだろ！リーゼントの学生はここにいねーよ！！つーかなんでフランスパンなんだよ！」」

「タイムイズマネー」

その時、ワタルンが一言呟いた。テルが思い出したかのように頷く。

「おお　そうだな、こんな事してる場合じゃないな　早く行かなきゃな」

「今完全に英語喋ったよね！？もう全然モノマネとかするつもりもないよね　フランスパン食べてるし！！」
補助員はフランスパンをむしゃむしゃ食べているワタルンに指差し突っ込んだ。
「一時間一万円　二時間二万円　ソノ間私ワタルン、オーケィ？」
「そっちの金かよ！完全に雇ってんじゃねーか！！」
そして今度はテルがうんうんと頷く。
「オーケィオーケィ、三時間フランスパン三本、四時間フランスパン四本、オーケィ？」
「なんで三時間以降の報酬がフランスパンになってんだよ！結局二万円しかもらえねーだろーが！！」
補助員はポケットから何かを取り出す。無線だ。
「これは明らかな不正だ！替え玉以外の何者でもない！大会側に報告させてもら―」
ゴンッ！
突如、鈍い音がして補助員は倒れる。ワタルンが補助員をフランスパンで殴ったのだ。
テルが頭を掻きながら辺りを見渡す。

「あぶねーあぶねーバレる訳にいかねーからな、アレ？　カメラがある。ワタルン」

「オーケィ」

木の枝に吊されているカメラにワタルンがフランスパンを振りかざす。解説側の画面で最後に映ったのはフランスパンを投げつけたワタルンの姿だった。

○

ブツン。

『え！？アレで壊れたんですかカメラ！？　固ッ！フランスパン固ッ！！』

画面が真っ暗になった為に泉が驚く。

『フランスパン以前に俺はあんな姿じゃなァァァイ！！』

ワタルは怒りの形相で叫ぶ。もはやテルのやり方は滅茶苦茶だ。

『これは失格だろ！！』

ワタルが泉に向けて言うが、泉が苦笑いしていた。何やら紙を一枚補助員から受け渡されたようだ。

『え～と、ただいまリアルタイムで見てる理事長からの伝言で、「

面白いから許す」とのことです！』

『えええええっ！！！？』

驚くワタルをよそに、泉は更に読み上げた。

『あと、「橘　ワタルはあんな感じじゃなかったか？」とあります』

『なんでだァァァァァッッ！？』

○

一方そんなコントが行われているのとは知らずに、熱い戦いを繰り広げているペアがいた。

「ハアアアアッ！！」

「ちょ、雪路！　俺を武器にー」

雪路が薫を千里に叩きつける。

千里は両腕を交差させ、その一撃を受け止めた。「そんな物を使ってでしか攻撃する事ができないとは……拍子抜けだな！！」

大人一人の質量を持った一撃を難無く受け止める千里。

「私のシークレットソードを受け止めるとは……さすがというべきかしら千里くん」

シークレットソード（薫）を引き離し、一旦距離を取る。　薫は既にげんなりとしていた。
「俺にそんな小細工が通用すると思ったのか！！　見せてやる！小細工なしのパワーの戦いを！！」
「望むところよ！！」
再び雪路は薫を振り回し、遠心力を生かした一撃をお見舞いする。
が、千里は動じる事無く、その薫を受け止めた。
「くっ！！」
またしても、と顔をしかめさせる雪路。
千里は今度はガッシリと掴み、逃がさないように腕に力を込める。
そしてー
「オオオオオッ！！」
持ち方、握り方、そんな技を使うのではなく、ただ力任せに、雪路ごと持ち上げる。
遠心力を使うのではなく、まるで棒切れを扱うかのように投げる。
「ッッッ！！」
投げられた雪路は空中で身を翻して見事に着地する。
投げられた作用でズザザザ！と砂煙が起こるがなんとかその勢いに負けず留まった。

「なかなか、どうして―」

パワー負けした雪路は案外と不敵に笑っていた。

「人生には壁がつきものなのかしら……」

堂々と仁王立ちで千里は構える。

「いかなる場合でも世の中は絶対強者により支配される―」

「そうだとも、強者により、支配される事が世の常……俺はその支配する側になっている……」

明らかに自身が上、世界を手に入れるという高い……自信。

「だけど、革命を起こす権利は私にはあるわ。　まだまだ終わらないわよ！」

「ああそうだ！そうでなければ、面白くないッ！！」

互いに構え、少しずつ円を描くように距離を縮める。

緊張の一瞬。

まさに闘い。

「「！！」」

悟ったか、二人は一気に真横に走り出す。　顔を見合わせながら不敵に笑うのだ。

「「勝つのは俺（私）ダアアアッッ！！」

まるでこの世の命運を掛けたように熱い戦いだ。なんの漫画だと突っ込まれても仕方がない。

しかし、二人は見落としていた。

この先に待ち構える大きな弊害を。

「「む？」」

一瞬、真横に走る事ができない……いや、足は動いているがその割にはゆっくりだ。

遂に二人は音速の壁を超えてしまったのか。　いや違う。

二人は気付かなかったのだ。　その先は崖になっている事に。

「「……」」

空中で走っているという奇妙な感覚に気付いた二人はお互いに確認した。

―アレ？　これヤバくね？

「「アアアアアッッ！！！」」

二人は重力に従い、崖の下へ下へと落下していった。

『ちなみに、千里くんは少しドジをする人なんですよね～普段王様気分の裏にある　隠しスキルと言っておきましょうか♪』

『なるほど、要はバカなんですね』

泉やワタルは解説が終わると、係員の持ってきたお茶をズズッーと飲みだした。

『いや～お茶は落ち着きますね～』

『全くですね。　ちなみに、白皇の安全管理の方は完璧です。　名門ですからね』

○

一方、ショートカットを目指すハヤテは意外な相手と対峙していた。

「くっ！！」

顔を歪ませ、辛うじてハヤテは相手に投げられた何かを回避。

投げられた物はドドドド！！　と地面に槍が突き刺さったかのような音をたてた。

「動きが悪い……どこか痛めて居るのかな？」

突き刺さったのは薔薇。

整った顔立ちで薔薇を片手に持つ。
彼の名は、冴木　ヒムロ。
彼もまたハヤテと同じ白皇学院の執事である。
「ヒムロ～頑張れ～！！」
遠くでは主である大河が扇子を和気あいあいと振っている。

「何時までも避けていられるかな？」
ヒムロの言葉にハヤテは顔を曇らせた。
いくら頑丈な肉体と言っても人間。　この前の怪我のダメージがしつこく残っていた。

（何とかしてヒムロさんを倒していかないと……でも一体どうすれば……）
ハヤテとしてはこれ以上足が止まるような事では時間が足りない。
早くゴールにたどり着かなければならない。
しかし此方は手負い、あちらは強敵、現状は厳しい。

「ではおとなしく―」
ヒムロの携えた薔薇が高く振りかざされる。
―しかしその時。

「お待ちなさい！！」

ヒムロの薔薇を持つ腕がピタリと止まる声。

その人物達は風のように現れた。

「弱気を助け、強きを挫く！　メイドブラックマックスハート！！」

「お…同じくメイドホワイトマックスハート…」

「……」

咄嗟の謎のメイド登場にハヤテは目を丸くした。

（あ…あれ、マリアさんとサキさんだよな。何だろう……突っ込んだらダメなのかな）

ハヤテは一目見ただけで二人がマリアとサキだという判別がついた。

なんせメイド服にただのグラサンを掛けただけだ。

これで分からない方がおかしい。

「あ…あの……」

「マックスハートです！」

「二人でキュアキュアなんです！！」

ハヤテが尋ねようとしたところ二人は若干恥ずかしそうにしながら声を荒らげた。

（やっぱり突っ込んだらダメか……しかしあの格好は……）

「かっこいい……」

「え？お嬢様？」

訂正。　分からない人もいるらしい。

「とにかくここは私達マックスハートに任せて、あなた方は先へ！！」

マリアは取り敢えず早く先に行くように促す。

「はい！！ありがとうございますマックスハートさん！！」

「……」

ナギの輝いている顔にハヤテは何も突っ込まないようにした。

「あの…本当に行ってもいいんですか？」

ハヤテが最後に聞くがマリアは背を向けて

「行って下さい！！　むしろできるだけ早く行って見なかった事にしてください！！！」

と返す。　ハヤテは苦笑いし、その場を去って行った。

「なるほど…身代わりとはね……しかしあなた方で僕を倒せるのかな？」

ハヤテ達が居なくなった場でヒムロが薔薇を携え、呟く。

「さぁ　それは…やってみないと分かりませんわ♪」

観客が居なくなった為か、いつもの調子に戻り笑顔で返す。

だがそれは逆に不敵な笑みともとれた。

「では行くよ―」

ヒュルルル……

「む？」

何か、空気を駆けるかのような音にヒムロが気づき、振り向いた瞬間。

ガンッ！と鈍い音と共にヒムロが崩れ落ちた。

「……え？」

突如の事態にマリア達は何が何だか分からない。

「……フランスパンですかねコレ？」

気絶したヒムロの側を転がっていたフランスパンをサキが拾い上げた。

「あんれ～　何やってんですかマリアさん？」

マリアが聞き覚えある声のする方を振り向くとそこにはワタルンに肩車しているテルがいた。

「テルくん！！」

「スイマセン。　結構急いでるんですけどハヤテ達来てませんか？」

「ええ、ハヤテくん達なら先ほど通っていきました」

「そうすか。　なら随分距離を縮めれたな……」

テルは高い位置から遠くを見つめる。

「というかテルくん、その人は……」

マリアが聞いているのは勿論ワタルンの事だろう。

「え？　ああ、ワタルンですよワタルン、サキさんも分かるでしょ？」

「イヤイヤ、ワタルくんそんなに大きくないし、そんな外人みたいな顔してませんよ！？」

マリアが至極当然、突っ込んでくる。

「サキさんも何か……」

マリアがサキの方を見たとき、サキはプルプル震えていた。

「若、若が……こんな、髪を染めて……うっ…悪い子に……ううっ……！」

ブワッとその場に泣き崩れた。『サキィィィィィィイ！！　なんで分かんねえんだァァァァ！！』

その場でワタルの絶叫が響いたのは言うまでもなく。

「にしてもマリアさん……その格好…」

「な、なんですか……」

テルが流石に気になったか、マリアとサキの服装をじーっと見つめ、

「マリアさんがコスプレ好きだったとは……」

「いや違います！」

「分かってます！！」

「何がですか！！」

マリアの言葉を制して、テルは続ける。

「人の趣味とか、そういう領域には俺は何も言いません！　全てを含めてマリアさんだと思ってるんで、ハイッ！！」」

「凄い勘違いしてますよ、話を聞いてください！」

「人間のプライバシーを考慮してますんで、俺！」

カシャ。

「え、ちょっ！」

突然のフラッシュにマリアは目を隠す。

マリアは気付かなかった、テルが携帯のカメラを使っていることに。

「なにちゃっかり撮影してるんですか！！　返しなさいテルくん！！」

「おし、保存完了。　ワタルン、さぁ～行こう、立ち止まること～なく～」

「歌ってればごまかせると思ってるんですか！？」

マリアが下から物凄い剣幕で睨むがワタルンは急に走り出した。まるで百メートルランナーのような華麗な走り。

「流れる時に～負けないよ～に～」

ドドドドド！！！

テル達の姿はあっという間に見えなくなってしまった。

「見事に誤魔化されましたね」

サキが苦笑いを浮かべながらマリアに駆け寄る。

「まったく、困ったものです……」

マリアは溜め息をついた。

「ハァ……」

更に大きな溜め息をつく人物が木の裏に一人。

「私の出番がない……」

溜め息をついた人物、それはアタッシュケースを持ったクラウスだった。

○

「美希、急がないと巻き返せないわよ！」

「ま、待てヒナ、私はちゃんと走っている！　ヒナが速すぎるの！」

コースを走る二人の人物、ヒナギクと美希だ。

「現在六位よ？　私も想定外だったけど、まだ間に合うわ！！」

「そ、それは分かるが！　私はヒナほど体力が……」

「その時は気合いよ気合い！」

「根性論は私には合わない！！」

二人の口論が走りながら続く。　現状、ヒナギク達は六位。今まで安心してロースペースで進んでいたが、その結果だ。

ヒナギクは焦っていた。

「この薔薇も渡された意味が分からないわ……何よ散らされたら負けって…」

ヒナギクが自身の胸に付けてある薔薇を見る。　大会のチェックポイントで渡されたのだ。

ペアの内、どちらかが散らせば負けというルールである。

「誰かと闘うんじゃないかヒナが」

「誰か……って誰よ」

ヒナギクは走りながらこれから当たる敵について考察する。

（この先のトップだったのはお姉ちゃんだったけど、トラップに掛かってるから多分出くわさない、だとするとハヤテくんかヒムロくん辺りかしら……）

一応自身の剣道があるとは言ったものの相手はなかなか手強い人々ばかり、ちなみにテルは入ってはいないだろう。

「ヒ、ヒナ！　ペース！　ペース！」

「あ、ごめん」

ヒナギクは急ブレーキを掛けたように止まる。　知らぬ間にペースが上がっていたようだ。　距離としては５０メートルほどはあった。

（なんにしても、負けてられないわね……）

そうヒナギクが闘志を燃え上がらせた矢先。

「とうっ！」

突如ヒナギクの眼前に真横から一人の人影が現れた。

鮮やかに着地を決めて、スッと立ち上がる。

「ふむ、コースに出てしまったか……」

長い黒の髪を揺らし、凛とした表情で辺りを見渡すのは唯子だ。

「ま、待ってくださいよ唯子さ～ん」

「遅いぞ書記君、まだまだ走れるだろう」
後から書記がヨレヨレの状態で林の中から現れた。
「唯子さん……」
「む……」
ヒナギクの呟きに気付いたのか唯子がヒナギクの方を見る。
「おお、ヒナギクくんじゃないか」
「唯子さんも出ていたんですね」
ヒナギクの言葉に唯子は腕を組んだ。
「当然だ。　私は面白そうな事が大好きだからな」
唯子は笑顔で答える。さながら冒険を楽しんでいるような、楽天家みたいだ。
「さて、ここに居るという事はお互い優勝を狙っているという事だな？」
「まぁ、そうですけど……」
「私と楽しい事をしないか？」
「またセクハラですか？」

「違う違う、いくら私でもそこまでスキンシップに及んだりはしない」

唯子は腕を組んだまま少しだけフッと笑う。

「聞いてますよ唯子さんのセクハラ被害が下級生にも及んでるって……」

「まったく、スキンシップと言っているのに……」

分からん奴だなと唯子は溜め息をついた。

「勝負しないか？」

「え？」

一瞬、ヒナギクは唯子が何を言っているか分からなかった。

「勝負だよ勝負。　書記君、私の竹刀、持ってきているか？」

書記はササッと近寄り、唯子に竹刀を渡す。

「いや、ちょっと唯子さん、いくらなんでも……」

（……ヒナ？）

美希はヒナギクが何故か気遣うように接しているのかが分からなかった。

「いいじゃないか、私が一手仕合いたいと頼んでいるんだよ」
唯子はまるで楽しみが始まるような瞳だ。　しかしヒナギクの表情は冴えない。
「で、でも―」
それを見たか、唯子の表情が少しだけ曇る。
「なんだその怪我人を見るような目は、私も簡単にやられるような女じゃない」
唯子は竹刀を持ち替えたりしながら続ける。
「それとも恐いのか、負ける事が……」
「む！」
一瞬だけヒナギクの眉がつり上がる。
「そうだな、君は一番じゃないと気が済まないんだよな～　この私に負けて一番を取れなくなる事事態が恐いのか？」
「……」
勝負において、ヒナギクは妥協を許さない。　いつだって真剣に全力で取り組んでいる。
だからこそ、これ以上の暴言は許せない、例え先輩であってもだ。

「怪我をしても知りませんよ！　美希！　竹刀！」

美希は慌てて、どっからか出したか竹刀をヒナギクに渡した。

（そうだ。それでいい……）

唯子は竹刀を構えたヒナギクを見て、笑みを浮かべる。

そして唯子もまた左手に竹刀を持って構えた。

（久しぶりだな……）

向かってくるヒナギクに唯子はまたクスリと笑みを浮かべるのだった。

第３５話～マラソンをしてるとだんだん横腹が痛くなってくる～（後書き）

なんだかんだで唯子ｖｓヒナギク。　なんか過去に行きそうな状況ですが、余裕がないので過去編ありません。

後２話ぐらいでマラソンも終わりそうです。　質問や感想をお待ちしています。

では。

第３６話～同じ目的を持ったもの同士が競い合えば争いになる～（前書き）

なんとか投稿できました。　いろいろと今回はバトルがメインになると思います。
アレ？これってそういう小説だったけ？

第３６話～同じ目的を持ったもの同士が競い合えば争いになる～

「はぁっ！！」

「ふっ！」

バシッ！

互いの得物がぶつかり合う。

竹刀なので乾いたような音だ。

「うおっ、ヒナ、頑張れ！！」

「委員長！　ここで時間を食っていたら優勝できませんよ！？」

美希は応援し、書記は鍔迫り合いの最中の唯子を見て少し焦り気味だ。

「まぁ、そんな事を言うな書記くん……」

バシッと唯子は鍔迫り合いから逃れ、一旦距離を取る。

「私がやりたいようにやるのだ。　この勝負は、ある意味ではマラソンの優勝以上に重要な事なのだよ」

その時の唯子の表情は笑っていただろうか、書記は感じる。

別に怒っていたのではない、悲しんでいるのではない、ただいつもと違う感じがしたのだ。

「勝てばヒナギクくんとウハウハだぞ！！　優勝より大事ではないか！！」

「どこがですか！！　めっちゃくだらない理由じゃないですか！！」

唯子に対してキレながら突っ込む書記。

「唯子さん、真面目にやりましょうよ……」

そのやり取りを見てかヒナギクが若干声色を強める。

唯子はそれを見て不敵に笑みながら

「済まないな、だが私は色々と楽しみながらやるのが好きなんだ……それは君が良く知っているだろう？」

「……はぁ」

ヒナギクは一旦考えて短い溜め息を漏らし

「相変わらずなんですね……」

ポツリとヒナギクが呟いた。

「ッッッ！！」

ヒナギクが気を緩めたその瞬間、唯子が左手の竹刀を構えて一気に距離を詰めてきた。

唯子は流れるような動作で竹刀をヒナギクに振り下ろした。

「まだッ！！」

だがヒナギク、どんな事態にも冷静に対応する。　いとも簡単に唯子の一撃を防いだ。

「ほぅ……ッッ」

「引っかかりませんよ！！」

ヒナギクは唯子に不敵に笑みを浮かべる。そして受け止めている竹刀に力を込め始めた。

「ああ、委員長ッ！！」

「ヒナ！　押せ押せ！！」

ゆっくりだが、ヒナギクの竹刀は次第に唯子の竹刀を押し返し始めた。

「……」

（そうか……）

唯子はその状態を見て少し目を細めた。

そしてフッと笑うとまたしても竹刀を横に弾いて距離を取った。

「次で終わりにしよう……ヒナギクくん」

「はい……」

唯子の目は真剣そのものだ。　今までのようなお茶目な様子は全くない。

まるで一人の剣士……

ヒナギクは生返事などせず、真剣に返すしかなかった。

「「……」」

一瞬の静寂の後……

二人の剣士は地面が抉れるぐらいの力で地を蹴り駆け出した。

互いが己の武器を、最も高速で繰り出せる動作を模索する。

ヒナギクは正攻法、真っ正面から両手で竹刀を持ち、居合いのようなスタイル。

唯子はまるで左手で持った竹刀をレイピアのように突き出すような

構え、牙突のスタイル。

この魂とも呼べるそれぞれのスタイル、二人の鼓動が……

「「だあぁぁぁぁッッ！！！」」

ガシッッッ！！！

今、交差した。

「「……」」

互いが走りながら素通りしたかのような光景。

ヒナギクと唯子はゆっくりと振り返り、お互いを見た。

「一体……どっちが？」

美希が手に汗を握る。　しかし空から何かが落ちてくる事に気付いた。

ガチャン。

と乾いた音をたてながら落ちてきたのは竹刀だ。
見ると、唯子の竹刀がない、更に……
「い、委員長ッッ」
書記が声を上げる。　唯子の胸の薔薇が静かに散ったのだ。
「……君と戦って、初めて…負けたかな？」
静寂の中、最初に口を開くの唯子。
「久しぶりだったので、楽しかったです唯子さん」
ヒナギクが小さな笑みを浮かべる。　しかしどこかやるせない感じだ。
それを見て、唯子はいつもの凛とした表情に戻る。
「さぁ早く行け、ヒナギクくん。　急がないと負けてしまうぞ？」
いつものだ。　唯子の凛とした表情は自然と相手の背中を押すような力強さがある。
ヒナギクは軽くお辞儀する。
「優勝しろよ」

唯子は最後にそう呟いて反対方向に歩き出す。

ヒナギクは美希と共に走り出した。

「委員長、委員長～」

「さぁ書記くん、どこかのモニターでこのマラソンの結末を見守ろうではないか」

唯子を追いかける書記の姿を見て、美希は何か腑に落ちない事があった。

「なぁヒナ、唯子さんの噂はよく知っているが、あの人とヒナはなんかあったのか？」

ヒナギクはその質問に対して遠くを見るような目で答えた。

「唯子さんは私が入部したての時の剣道部の部長よ・・・・」

「ええ！？」

「そんな事より、早くしないと巻き返せないわ、スパートかけるわよ美希！！」

美希の体力考えず、ヒナギクは猛ダッシュ。美希は更なる恐怖に顔を青ざめさせたのだった。

唯子・書記組み、リタイア。

○

一方、テルチーム。

「走れ！　ワタルン！」

「オーケィ」

テルを肩車していたワタルンがスピードを更に上げる。

スピードを上げに上げて、二人は何やら休憩所のような場所にたどり着いた。

元々白皇の敷地にあって作られたインテリジェンスの造り。

そこには一組の男がいた。

「おやおや・・・誰かいなくなったと思ったらあなた方ですか・・・」

一人は長身で顔も整った執事服の男。　紙は少し長めのライトパープル。

「野乃原、こいつは・・・」

もう一人はその主だろうか、どこにでもいそうな一般生徒Ａのような雰囲気を醸し出す少年。

「アレ？　お前は確かあの、えーっとだな・・・・」
テルが何か思い出しそうな表情で唸りだす。
「僕は――――」
「あー待て待て、何もいうなよ、今思い出しそうだから、今喉のところで魚の骨が出掛かってるから・・・えーっと・・・」
何か閃いたように手を叩く。テルが考え考えに導き出した答えはこうだ。
「ヘタレくんだ！！」
「ちっがーっう！！」
少年は額に青筋を浮かべながら突っ込んだ。
「東宮　庚太郎だ！！　全然違うだろう！！」
「だってよ～、間違えるも何も俺お前知らねーし」
「じゃあ何でヘタレだけ当てやがるんだ！！」
「いや、もうナンカ・・・ね？」
「どういう意味だよォォォォォ！！？」
ただひたすらに、東宮の絶叫が響いた。

「あなたは・・・確か三千院家の・・・」

今度は野乃原という執事が口を静かに開く。

「テルだ。　善立　テル。　覚えてもらえて光栄じゃねーの」

名前が知られていたことにテルは若干笑みを浮かべた。

しかし、野乃原はクスリと笑みを浮かべながら続ける。

「死んだ瞳というのはほんとですね。　後、結構白皇を騒がせている問題児とか・・・」

「オイオイ、どんな噂が流れてるんだよ・・・テルさん泣いちまうよ」

テルが頭を掻きながら沈んだ声で呟く。　野乃原は更に尋ねる。

「君もこの大会に参加なのかな？」

「まぁな」

テルは当然だろ？　言わんばかりの顔で答える。

「先ほど、三千院家の執事くんを逃してしまってね・・・」

「ハヤテか・・・・」

野乃原のその言葉にテルは若干の反応を見せた。

「アレは野乃原が・・・」

「お黙りください坊ちゃま・・・」

野乃原が竹刀をビシッと地面に叩きつけた。東宮がヒッと体を震わせる。

「言い訳など言語道断。　そんな事では真の男になることはできませんよッッ！！」

笑顔で東宮に迫る野乃原は地味にホラーだ。　テルはそんな光景を見ながら欠伸をする。

「スパルタもいいけどね～　ま、ヘタレにはいい薬になるんじゃねーの？　行くかワタルン」

テルは本当に他人事のようにその場を去ろうとするが、野乃原が目をギラッと光らせた。

「待ちなさい。　私が簡単に逃がすとお思いですか？」

「ん？」

テルは思わず立ち止まる。　向こうはかなりこちらを敵視している。
こうなると戦いは避けられないか。

「戦ってもらいますよ・・・坊ちゃまとッッ！！」

「え？」

そんな素っ頓狂な声を出したのは例外なく東宮だ。

「主の成長を促すのが執事の務めでもあります。　だから坊ちゃま、強くなってください！！　戦いを越えて！！」

「ちょちょ、待て待て！！」

と思っていた東宮だが、一度テルを見て考えてみる。

（確かにあいつは綾崎ほど怪物臭はしないし・・・・あんなやる気のない顔だ。　きっと僕より弱いやつに違いないッッ！！）

これなら僕にも勝てる。　そんな自信は一体どこから生まれたのかと突っ込んでみたい。

いかに容姿は戦いにおいて相手に影響を与えるかの問題だ。

「よーし！　相手になってやる！」

「まーった・・・・」

戦意向上した東宮にテルが待ったをかけた。

「執事と主が戦う・・・戦いにおいて、相手が誰であろうと関係ない弱肉強食の世界においては別に間違っているワケでもない・・・だがあえて言おう、アンフェアであると」

「まぁ確かに・・・そうではありますが」

野乃原がふむといった表情で頷いている。　そしてテルは言ったのだ。

「ここはフェアにするために、主と主で戦わせてみるってのはどーだ？」

テルがにやっと笑みを浮かべる。　野乃原はよい提案だと言わんばかりに竹刀を東宮に手渡した。

「そうですね。　いかにどちらの主を教育できているか、それを競い合う」

「そうだ。　不公平な点は何一つないだろ？」

「その前にあなたの主は誰ですか？」

野乃原はやはりといった感じで聞いてくる。　だがテルは堂々と答えるのだ。

「この・・・ワタルンだ。　今だけはこいつとペアを組んでるからな。一時的に主にしてくれ」

ワタル。その言葉を聴いて、東宮がニヤッと笑みを浮かべた。

（しめたッッ　ワタルなら武術もなんもやってないし、その点に関しては剣術を習っているこっちに分があるッッ！！）

武術関連のスポーツを習っている者とそうでない者ではえらい違いが出てくる。　その点では明らかに東宮が有利だろう。

ズシ・・・・

しかしだ。

ズシ・・・・・

絶対という言葉がないのが世の常。

「頼んだぜワタルン」

「オーケェイ」

「お前誰だァァァァァァアッッ！！」

東宮は、目の前の、自分より明らかに背の高い外人を前にして思いっきり突っ込んだ。

「ワタルはこんなんじゃないだろ！！　明らかに別人だろ！！　もっと小さくてなよなよしてるヘタレじゃなかったのかよ！！」

「おい、ワタルはヘタレなんかじゃねーよ」

テルは失敬なといった感じで東宮を睨む。

「いいか？　マラソンはな、人生と同じなんだよ。　長い長いゴールを目指すということが、彼を立派な大人にさせたんだよ・・・」

「こんなワープ進化があってたまるか！！　明らかに大人じゃねーかァァァァ！！！」

東宮は今度は野乃原を見た。

「野乃原、明らかに不正だ！！　僕じゃなくてお前が成敗しろ！！」

「なりません」

「な、なんでだ！？」

静かに返す野乃原に東宮は驚いた。

「これは大事な試練なのです・・・坊ちゃまが、これからをどう生き、人生を行くのか・・・それを見極めなければならないという仕事が執事にはあります」

野乃原は更に続ける。

「そうでもしなければ、想い人を射止める男にもなれはしません」

「ッッッ！！」

その瞬間、東宮の中で何かが変わった。

（そうだ。　僕は・・・桂さんに認められる男になりたい！！　逃げちゃだめだ・・・逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ！！！）

「だぁぁぁぁぁぁ！！」

東宮は果敢にも竹刀を構えて、ワタルンに突っ込んでいく。　しかし・・・

ガシッ

ワタルンが東宮の頭を鷲づかみする。　当然、背の低い東宮の振るう竹刀はワタルンの胸の薔薇すら掠ることなく空を切った。

やはり「絶対」なんてこの世にはないのかもしれない。

「ｆｒａｎｃｅ　ｐａａａａｈｎ！！」

バシーン！！

「ぶはっ！！」

今度はワタルンの攻撃。　フランスパンを東宮の頭に軽く当てた。

「ｃｒｅａｍ　ｐａａａａｈｎ！！」

ベチャッ！！

「あべしッ！！」

ワタルンはどこからか出したのか、今度はクリームパンを東宮の顔に投げつけた。　既に東宮の顔はクリーム塗れである。

「ｐｉｚｚａ　ｐａａａａａａａａｈｎ！！！」

ベシーン！！

「ひでぶッッ！！」

まだまだワタルンのターンは終わらない。　またしても出所不明のピザパンを取り出し、東宮に叩きつける。

「坊ちゃまァァァァァ！！　ウオォォォォォォォォオ！！」

「お前、結構馬鹿だな・・・・」

ハンカチ片手に涙を流しながら見守る野乃原に対してテルが細い目で見た。

数分後。

「・・・・・・」

東宮はクリームまみれのピザまみれのフランスパンまみれの、取り敢えずパン塗れになって倒れていた。

既に胸の薔薇はクリームやら何やらで原形とどめなくしている。勝敗は明らかだろう。

「坊ちゃま、あなたは頑張りました・・・坊ちゃまは真の男に一歩近づいたんですよッッ！！」

そう賞賛を評する野乃原はパン塗れの東宮を担いだ。

「おいアンタ・・・・」

「はい？」

立ち去ろうとした野乃原がテルに呼び止められ、足を止める。

「そいつの剣術の太刀筋だけどよぉ、荒いから直しとけよ。　怪我するからな」

テルの言葉に野乃原は一瞬驚いた。

「分かるんですね」

「まぁあんだけ見境なく振り回してればな？」

首をコキコキと鳴らし、テルはワタルンと共に野乃原に背を向けて歩き出した。

「・・・・これは面白い、やはり噂どおりでしたね」

誰もいなくなった後でフッと笑いながら野乃原は呟いた。

野乃原・東宮ペア、リタイア。

○

「お嬢様、なんだかんだで僕たちトップですよ」

「むぅ、私もここまで上手く事が運ぶとは思わなかったぞ」

ハヤテはナギを抱えながら走る。　ナギもこの態勢には慣れたようでもう気にしてはいなかった。

「この橋を渡れば、後はゴールまで一直線です！！」

ハヤテの目の前には一本の橋が。　下は谷底、真っ暗で何も見えない。

（ここを渡りきれば勝てるのだな！！）

本来なら、いつも高すぎて怖いと思ってしまうナギも「優勝」という二文字の前に興奮を抑えれなかった。　その興奮が、一時的にも恐怖とは無縁にさせている。

だがしかし、こういうシチュエーション。

「待ちなさい、そう簡単に行かせる訳にはいかないわよ！！」

ラスボスが付き物だ。

「ヒナギクッッ！！」

橋を目の前にして後方から追ってくるように現れたのは息を少しだけ荒くしたヒナギクだった。

「ひ、ヒナ・・・み、水・・・もう無理・・・」

「あ、はい美希」

しかしその側の岩場に寄りかかるようにペアの美希が涙目でヒナギ

クより荒い息遣いで座り込んでいた。
ヒナギクは慌てて給水ボトルを手渡す。

「と言う訳で、ここを通すわけにはいかないの！！」

（（人選ミスじゃないか？））

ナギとハヤテもこのヒナギクの誤算は一目見ただけで分かった。

「そんな事よりハヤテ君、あなたこのレースが終わるまでずっとナギを抱えたままでいるつもり？」

ヒナギクが呆れたような表情でハヤテを見る。

「まぁそのつもりですけど・・・・」

ハヤテはゆっくりとナギを地面に降ろす。

「でもハヤテ君が全部ナギを抱えてゴールしたとして・・・それはナギの為になるのかしら？」

ハヤテの言葉にヒナギクはナギ自身に問いかける。

（お嬢様の為・・・・そうだ、もともとこれはお嬢様の運動嫌いを少しでも無くす為・・・・）

ハヤテは今更になって気づかされた。　最初こそはナギの運動嫌いを無くすためのキッカケを作り出そうとしていたが、自身のクビもかかってしまってからは自分の為に、と目的が変わっていた。

「だ・・！　だが走れないのは走れないのだ！！　みんながヒナギクのように完璧ではないのだ！！」

流石にナギの意見も一理ある。　ナギとヒナギクの運動力を比べるのは、まさに天と地の差だ。

「・・・それでも」

ヒナギクはすこし神妙な顔で続ける。

「苦しくて、辛くて、死んでしまいそうな思いのその先に、何者にも変え難い喜びがあったりするのよ」

ヒナギクは言う。　もう駄目だ、できない、その境地を乗り切った場所に大きな喜びがあると。それは抱えられたままのナギには決して味わえないものだ。

これを聞いて戸惑うのはもちろんハヤテだ。

（確かにこのままではお嬢様の為にならない・・・でも負けてお嬢様に借金を返すことができなくなってしまっては・・・！）

「それでも一位にこだわる姿勢は嫌いじゃないわよ？」

（どっちだー！！）

付け加えたヒナギクの言葉にハヤテは更に困惑するが、すぐにもとの冷静な顔つきに戻り、ナギに言った。

「この橋を越えれば後は元のコースに戻って、そのままゴールへ一直線。　先に行ってください・・・」

ハヤテはどこからともなく箒を取り出す。

「僕がヒナギクさんを足止めします・・・」

「へぇ、でもナギの体力で辿り着けるかしら？」

ヒナギクが今度は挑発するように薄い笑みを浮かべる。　なんかさっきと言っている事が逆な気がするが。

「大丈夫です。　僕の鍛えた（二日間ほど）お嬢様ですから！！」

（ハヤテ・・・）

ナギも自身の顔を両の手でぱしっと叩き、渇を入れた後、走り出した。

「じゃあグズグズしてられないわね・・・・一気に行くわよハヤテ君！！」

ヒナギクが竹刀を構えて地を駆ける。　鋭い剣筋でハヤテをわき腹めがけて切りつけた。

「分かりました！　いくらでも向かってきてください！！」

ハヤテは体の痛みを押し切ってヒナギクの一振り一振りを紙一重で避けていく。

『おーっとここで燃えるようなラストバトルが勃発だーーーーっ！！』

『もうコメディー小説じゃないですね・・・・』

実況側も最早お手上げといった感じである。

しかし、そんな実況たちを置いてけぼりにして戦いは続くのだ。

（大丈夫、幸いにもこの戦いには一つの勝機がある！！）

ハヤテは柄にもなく薄く笑うとまるでヒナギクをある所へ誘導するかのように距離をとり始めた。

ヒナギクは逃がすまいとハヤテを追いかける。　そして・・・

「ただし・・・」

ハヤテがヒナギクを誘導した場所。

「つり橋の上ですけど・・・・」

「・・・・・・」

それはつり橋の上だった。

皆さんもお分かりと思いますが、ヒナギクは極度の高所恐怖症である。

「・・・・・」

どこまでも続く暗黒の世界、ヒナギクは石のように固まってしまった。

「・・・ちょっと揺らしてみたりして」

「キャーーー！！　バカバカ動かないでよ！！」

悪戯っぽく端のロープに手を掛けるハヤテを見てヒナギクは涙目になりながら崩れ落ちた。

「ヘンタイ！　バカ！　いじわるーーーっ！！」

「なんとでも言って下さい。　僕はお嬢様の為なら鬼でも悪魔でもなりますよ」

その時のハヤテは悪魔の笑みを浮かべていたという。

（お嬢様、後は頑張って！！）

ハヤテはナギの走り出した方向を見てその無事と成功を祈った。

『いや～ここまで来てまさかの三千院家とは・・・』

『ええ、やはり自分の予想通りでした・・・』

『ですがまだ終わってないらしいですよ？』

実況側もなぜか盛り上がっている。

その時、ハヤテも気づいたのか橋の入り口に視線を戻した。

「ラスボスを倒したその先の・・・真のラスボスってのは知ってる

か？」

黒い短髪の髪に死んだ魚のような瞳。

善立　テルその人である。

「テルさん・・・・」

ハヤテも真剣な表情でテルと向き合った。

「巻き返してやったぜ・・・そこ、通してもらえねぇか？」

「できません・・・・」

ハヤテは返す。　そして箒を構えた。

それが合図だったかのように、テルも野乃原から拝借した竹刀を構える。

「簡単な理屈だ――」

「同じ目的を持ったもの同士が競い合う時、この場合は――」

「即勝負だろ？」

互いが不敵に笑う。

「多分、初めてテルさんと戦うんじゃないかと思います・・・・」

「まぁそうだろうな・・・・」

（一回だけあるけどあんときは踏んだりけったりだったけどな）

思い出すだけでもイライラが湧き出てくる。　うんホント、その借りをテルは返さなければならない。

「一瞬だ」

「？」

テルの言葉にハヤテは疑問を浮かべる。

「多分、打ち合いにはならねぇ・・・一回きりの・・・それで決まる・・・」

「なら、始めましょう・・・」

ハヤテは先ほどのテルの言葉が気になっていたが、すぐに雰囲気に戻した。

互いが武器を構えて・・・・

「行くぜ・・・・」

テルが呟いて、ハヤテに向かって走り出した。

ボード表。

一位　三千院家

二位　生徒会

三位　テル

四位　先生ペア、千里（リタイア？）

そして戦いは最高潮にッッッ！！

第３６話～同じ目的を持ったもの同士が競い合えば争いになる～（後書き）

物凄いバトル色が濃いですね。　コメディーとは無縁かもしれません。

マラソン大会も、次でラストになると思います。　頑張れば年内に投稿できるかもしれません・・・多分。

第37話～人生とはマラソンと同じである～（前書き）

えーっ、まず明けましておめでとうございます。　新年初投稿です！

そしてマラソン大会最後の話です！

第37話～人生とはマラソンと同じである～

―――神は言っている・・・ここで負ける運命(さだめ)ではないと・・・

この勝負を見ていた花菱　美希（白皇学院生徒会役員）は後にこう語っている。

○

―あの時の勝負？　ああ、覚えてるよ。　私は給水しながら休んでたけど……

「ホラよッ」

「ッッッ！！」

―投げたんだ自分の竹刀を、テル夫くんが。　ハヤ太くんに向かってな……

―今思えば何やってんだアイツは？　って考えたな～　だって戦う武器が無くなればどっちが有利か明白……

「くっ……！！」

―ハヤ太くんか？　勿論弾いたよ、　放棄で上手く真横に……な

―奇襲攻撃のつもりだったのか知らないけど、アレは無い。

―だけどソレが狙いだったんだよな……

「あ……」

―ハヤ太くんも『しまった！』って思ったんだろうな。

―いつの間にかハヤ太くんの目の前にいたんだ。　最初のは悪魔で目眩まし……

（マズい……）

―ハヤ太くんは動かないままだったよ。　こんな古い手を使われるとは思ってなかった……って感じだな。

―だけど不思議な事に、彼は攻撃しなかったんだよ……

パシィィン！

「……ッッッ！？」

―パシィィンって、そ、蚊を両手で潰す感じでハヤ太くんの顔の前で叩いたんだ。

―そ、コレが真の狙いだった。　ねこだまし……ハヤ太くんは簡単に引っかかってしまったんだよ。　フェイクのフェイクに……

「しまった！！」

―んで、慌てて振り返ったらテル夫くんは橋の出口にいたわけだ……ある意味マジックだわな。

―え？　冗談でしょ？　いいえ、一秒一秒を細かく説明しているだけで、全て真実です！！

○

「テルさん！！」

ハヤテが叫ぶ。橋の出口にいるテルに向かってだ。

「言ったろ、打ち合いにはならねぇって……」

テルはニヤリと笑った。

「一回切りのソレで決まるってよ」

ハッキリと言えばズルい。　真剣勝負を自ら挑んでおいて蓋を開ければ武器を直接交えずねこだまし。

だがソレで道を開けてしまったのは紛れもない事実。

「勝負ってのはココよココ」

テルは頭をトントンと指でつつく。

「まだ！」

ハヤテはまだ間に合うとテルに迫る。だがその時、

「カモン、ワタルン！！」

テルの掛け声と共に橋を飛び越えて現れた人物は地をズシンと鳴ら

した。

（ワタルくんが？）

聞き慣れた名前を聞いてハヤテがそう思ったのも束の間。

「後は任せたぞワタルン」

「オーケィ」

「……」

一瞬の静寂の後。

「「「誰だアァァァァァッッ！！？」」」

グラサンの外人を見て一同がそうツッコンだのだった。

「んじゃ、マジで任せたぜ」

テルはワタルンに親指を立てて、改めて走りだす。

ワタルンは頷くとフランスパンを取り出した。

「アレは何をしてるのかしら……」

「さぁ？食べて巨大化……ですかね？」

ハヤテとヒナギクが考察するなか、ワタルンは大きく息を吸い……

「ｆｒａｎｃｅ　ｐａａａａｈｎ！！」

パシィィンとフランスパンを思いっきり叩きつけた。

バキン！

「「え？」」

何か支えていた金属の部品が破壊される音に、ハヤテ達は耳を疑った。

そして次第に橋が重量により落ち始める。

マズい。落ちている。

「ヒナギクさん！！」

「え？な、なに？」

「捕まっててください！！」

この間、僅か一秒に満たないだろう。　この間にハヤテはヒナギクを抱えて橋の入り口に跳び戻った。

「大丈夫ですかヒナギクさん？」

スタッと地面に着地するハヤテはヒナギクの安全を確認する。

「……」

返事がない、ヒナギクは目を回していた。　顔色も悪そうだ。

「……」

遠くではワタルンがじーっとこちらを見つめている。

「な、なんですか……」

ベチャ。

ハヤテが苦笑いをしながら聞いた時、ハヤテの顔にクリームパンが直撃した。

「……ペッ」

と谷底に唾を吐き捨てる。　そうして彼はその場を去っていった。

「あの…僕なにか悪い事しましたか？」

「さぁな、分からん」

顔がクリーム塗れのハヤテに対して美希はそれしか答えれなかった。

（お嬢さま……テルさんより先に、ゴールへ！！）

ハヤテはナギの心配をするのだった。

○

テルはひたすらゴールに向けて走る。

（まさか一回きりの騙し討ちが通るとは思わなかったな……）

正直、ハヤテの体の怪我のお陰で上手くいった訳だ。

（後はゴールへ向かうまで、待ってろよ賞金よ！！）

テルの頭の中で札束の世界が浮かんだ。

ズリュッ。

「ん？」

ドゴッとテルは前のめりに転んでしまった。

「オイオイ、こんな事してる場合じゃねぇってのに……アレ？」

テルは体を起こすために腕で地面を押そうとする……が動かない。

「アレ？　ナンダこれ？」

気付けば辺り一面真っ赤っか、頭部から凄い出血。

「え″え″え″え″っ！？　ちょ、え″え″え″え″っ！？」

テルは突然の事態にパニックだ。

説明しよう。何もハヤテだけが怪我をしている訳ではない。

テルもあの日、大怪我していた人物の一人なのだ。

「やっぱりガンダニウム合金で作らた方が良かったな……」

なんて言ってる場合ではない。　彼にはこの大会で優勝しなければならない。

自身の借金を払い、ラーメン辰也の不安を取り払ってやることだ。

もはや意地しかない……

交わした約束のもとにある男の意地だ。

「オオオオオッッッ！！！」

立った。　テルが立った。

○

ゴール付近。

『さぁマラソン大会もいよいよ大詰めだァ！！』

『名だたる強豪達を下してきたのは一体誰だ！！』

実況の泉とワタルがマイクを片手に総立ちだ。

「ハァ…ハァ……」

『おおーっと！　競技場一番乗りは、三千院家だァ――――！！』

「ハァ…ハァ……」

（あ、あと５００メートル！！）

ナギは荒い息遣いながらも安定した走りを見せていた。

「待てえェェェェ！！」

競技場の入り口からの声にナギが振り返った。

「げっ！　テル！！」

「ナギィ！　優勝は簡単にさせねぇぞォォォォ！！」

しかしその足取りはかなり重い。　走っていてもナギよりちょっと速いぐらいだ。

『何かジジィみたいな走りですね泉さん』

『まず私は血塗れの経緯を説明してほしいんだけど……』

『また誰か来ましたよこの競技場に』

『アレ、本当ですね！！』

「オオオオオッッ！　やらせはせん！　やらせはせんぞォォォォーーッッ！！」

怒涛の叫び声を上げながら走るのは崖に落ちた千里だ。

『崖からどうして無事に帰って来れたのかとツッコミたいですね』

『それは言わない約束なのだよワタルン♪』

『いや、あの泉さん、僕はワタルンではなくワタルです』

「なんだアイツは……」

必死の形相で走る千里を見て、テルがそう呟く。

「キングが負けるなど決して有り得ないッ！」

走る千里は怒涛のチャージング。　少しだがテルを追い越した。

（オイオイ、ここまで来てソレはねぇだろうがよ……）

走り、追い越していった千里の背中を悔しく見つめた。

（ここで負けたら、ジジィの借金返せなくなっちまう……ん？）

テルはここに来て一つ気付いた。

―今回、借金がどうとかでなんか俺らは騒いでるが負けた場合、ハヤテはクビなんだよな？

（クビっていうのは、離れちまうって事なんだよな……）

それは勿論、ハヤテは承知している。　もしハヤテとナギが離れてしまったらと考える。

……考える事を止めた。

（一番頑張ってるのはナギだよな……）

そう思い、先頭を走るナギの小さな背中を輝いているように見る。

（走ってきたんだよな……ここまで）

ここで自身の過ちに気付いた。　頑張ってるのはナギだ。俺じゃない。

（俺の借金はまだいい。けどあいつ等は離れちまったらダメなんだよ……）

少しばかりため息をつくとテルはスピードを上げた。

（誰かと一生会えなくなるなんて嫌だもんな！！）

「ヌオオオオオッ！！」

力を振り絞ったテルは千里の体に思いっきり飛びかかった。

「な、なに！？」

『おおーっとここでテル夫くん、千里くんが転倒だァーーーッ！！』

倒れたテルは千里の足にしがみついていた。

「貴様、俺の邪魔をするのか！！」

「あぁそうだ。邪魔してんだよ邪魔ァ、あいつ等はな、一緒にいなきゃいけねぇんだよ、離れちまったらダメなんだよ！！」

これでもか言わんばかりに千里はテルを引き剥がそうとするがテルは意地でも離さなかった。

「行けえェェェェェェ、ナギィィィ！！　マラソンキングになれぇぇぇぇぇ！！」

その声は主に向けての最大のエール。

（スマン、テル！）

ナギにはしっかりと届いていた。　テルに対する気持ちをぐっと堪え、そのままゴールへと向かう。

（辛いけど・・・さっきよりは息は荒くない・・・）

後１００メートル。

（足も・・・軽くなってきた・・・）

後８０メートル。

（ああ、これがヒナの言っていたことか・・・・）

後３０メートル。

（みんなありがとう・・・・スポーツもそんなに悪くは・・・・）

後５メートル。

遂にナギがゴールテープを切る瞬間がやってきた。　目の前の白いテープは今までの自分とはまったく持って無縁。　この大会をやるまでは憎たらしく間で感じていたが、今ではこの湧きあがる高揚感を心行くまで実感している。

ゴール付近のスタンドからはマリアやクラウス。　委員長の唯子達がその瞬間を見ようと集まっていた。

ーーーー神は言っている・・・ここで負ける運命(さだめ)ではないと・・・・

「優ーーーーーー」

ナギがゴールテープを切ろうとしたその瞬間。ナギの横を小さな風が吹いた。

「一等賞ーーーーーーーーッッ！！！」

ピシッ！とその場の全員が凍りついた。

残り一メートル、つまりゴールテープ手前でナギを抜き返した人物は・・・・

「賞金はあたしのもんじゃぁーーーーーーい！！」

桂　雪路だった。

「「「「「エエェェエエェェェェエエエェェエエエッッッ！！！！」」」」」」

競技場が揺れた。　それはもう大激震。　果ては大暴動でも起きるような勢い。

「・・・・・・・」

これを見ていたハヤテたちは、口をあんぐりとして、一人で万歳している雪路が目に映った。
それは美希やヒナギクも例外ではなく。

唯子はため息をつき、千里は競技場にて天高く吼える。

「・・・・マジで？」

テルは最後にそう呟くと、力尽きたのか瞼を閉じて、意識を失ったのだった。

第３７話～人生とはマラソンと同じである～（後書き）

マズい……マズいぞ、急ピッチ過ぎた……

後半まさかあそこまで調子が悪くなるなんて……

どうも２０１１初ネガティブ発言のバロックスです。

取り敢えずマラソン大会が終わりましたが、完成度がイマイチだと言わざるを得ません。

まず、千里あんま活躍できませんでしたし、唯子もあんま引きだせなかった感はあります。

結局原作通りにしてしまいました。　でもここはなんか外せなかったんですよね。　マラソン大会は好きな話でしたし、ここで新キャラ達を目立たせての優勝ルートも考えたんですけど、原作破壊はしたくはあまりやりたくなかったので……

そんな訳で次もテンプレの執事クエストです。　勿論、シスターとハヤテのやり取りは吹っ飛ばします。

メンバーは決まってるんで、面白く馬鹿らしくいきたいと思います。

楽しくやる。　コレをモットーにしていきたいですね。　スイマセ

ン、なんかここで抱負しちゃいました。

質問や意見はいつでもお待ちしています。

橘　ワタルの出来過ぎた話（前書き）

ヨッシャ執事クエストだぁい！　と思いましたが、色々と消化不良なので、2、3話ほど短編集を出そう、と思いました。

というか、完璧な思いつきです。

タイトルの通り、これはいつもと違う、ワタルくんが主役の話。

橘　ワタルの出来過ぎた話

『なんと！　優勝したのは、我らが白皇の教師こと、桂　雪路ちゃんだァァァ！！』

「アイアムッ！　チャンピオーーーーッッッン！！」

各個喝采、否、暴動の予兆とも言える競技場のなか、雪路がガッツポーズ。

「ハイハーイ、どいてくださーい」

カラカラ……

とキャスターの軽快な音が聞こえる。

『あ～善立選手は限界のようですね。　今救護班により運ばれています』

テルは血を流したまま意識不明の状態で運ばれていく。

ちなみに特に知らなくていいのだが今回の大会の救護班は日野寺家の医療スタッフが駆けつけて来てくれた。

『え～、優勝者も決まった訳ですし、コレにてマラソン大会は全日

程を終了します！！』

泉が柄にもなく締めると、花火が空に打ち上げられた。

それを見てか、生徒達がそれぞれ帰宅の準備をはじめた。

しかし、納得できていない者もいるのだ。

「クソッ！　何故だ！　何故このキングである俺が負けなければならなかったのだ！！」

それは乙葉　千里だ。

（あの男の邪魔さえ入らなければ……）

悔し紛れに歯を食いしばる。　プライドの高い彼に取って敗北。この二文字は人生に残る汚点。

ましてや自分より下の下級生に負けるなどもってのほか。

「認めん……認めんぞ……この乙葉　千里はッ！！」

怒りをこらえ、自身も競技場から去る。　彼に取っては負けた……など、1ミクロンたりとも思っていないらしい。

『え～皆さん1日お疲れさまでした～♪　司会は私、瀬川　泉と橘　ワタルくん……ってアレ？　ワタルくん？』

○

「なかなか見つからないな……」

ワタルは1人、大会が終わると同時にコースを見回っていた。

別に委員会の仕事とかあった訳ではない。

誰からでも頼まれた訳ではなくだ。

その道を通る理由が彼にはある。

「ここら辺りだったか？」

うーんと唸り、茂みを探すと目的の物を発見。

よく荷物などを運んでいく山車。

そんな物に彼が用があるのは、別に彼が山車マニア訳でもない。

「ああ、やっぱり居たか……」

と、1人呟く。　中には1人の和服を着た少女が眠っていた。

伊澄である。

「……」

皆さんご存じの通り、橘　ワタルは鷺ノ宮　伊澄に惚れている。

だが想いを本気で伝えた事はない。

全て彼のヘタレっぷりにその告白は未然に終わっている。

「余計だな……」

眉間にシワを寄せる。

「ん……」

「へ？」

ワタルの間抜け声が災いしてしまう。　伊澄が起きてしまった。

「あら、ワタルくん……？」

「いいいい、伊澄！？　悪い！　起こしちまったか？」

突然の事態にワタルは声を張り上げて、顔を真っ赤にしている。

「どうしてココに……？」

伊澄は若干寝ぼけ眼だが、その理由をしっかりと聞きだす。

「えーっと、あ、ほら、仕事だよ仕事！　俺司会やってたからな！」

嘘をつく。別に仕事関連で来たわけではない。

「まぁ、私まったく気が付きませんでしたわ……」

「まったく……」

グサリと小さな矢が胸に突き刺さる。

まったく。　その言葉は好きな人から言われるとダメージがデカい。

相手にされていない……という物。

「ん……あら…？」

伊澄は少しばかりか立ち眩むように頭をさするとまた座りこんだ。

「お、オイ大丈夫か？」

ワタルは流石にその様子を見て動揺する。

「なんか、頭クラクラ……疲れた」

ふぅ、と溜め息をつく伊澄は再び立ち上がった。

「ごめんなさいワタルくん……もう大丈夫だから……」

「ま、待て伊澄！」

申し訳無さそうに山車から降りようとする伊澄をワタルは止めた。

「ま、まだ良くなってないよな？　だ、だったら乗ってろよ！」

気恥ずかしながらもワタルは降りようとする伊澄の両肩を掴み、座らせる。

「はぁ……」

伊澄は特に断る理由もない。　静かに座った。やはり疲れているらしい。

ゴトン……

「あれ、ワタルくん……」

伊澄は山車がゆっくりと動いていることに気付いた。

勿論、動かしているのはワタルだ。

「えーっとだな……その…送ってやろうかなーって」

（この位できなきゃ男じゃねェェェ！！）

心の中でそう叫びながらワタルはゆっくりと山車を引いていく。

だが……

「待ってワタルくん……」

「へっ！？」

今度は伊澄がワタルの肩に触れた。

その瞬間、ワタルの心臓が尋常じゃない跳ね上がり方をする。

このままでは心筋梗塞を起こすかも知れない。

「それじゃワタルくんが疲れちゃうわ……」

「で、でも―」

「ワタルくん」

伊澄の瞳を見て、ワタルも何か言うのを止めた。

これ以上はホントに申し訳ないから、という罪悪感の目をしている。

「…一人で歩ける……」

面倒な事に伊澄はまた立ち上がる。

―ダメだ。また同じ繰り返しになる……

今までの自分の経験だ。

―どうすればいい……借金執事なら、若しくはアイツなら！

そう考えたのはハヤテとテルのことだろう。

―違う……俺ならどうするか、じゃないのか？

「だ、ダメだ！」

絞りだした声に、伊澄も動きを止めて反応する。

「も、もう遅くなるしさ危ないよ……それに…」

「それに……？」

「……俺の祖先は人を山車に乗せて引っ張る仕事してたんだよ」

「まぁ……」

ついつい、嘘を追加してしまいました。

「コイツはァ仕事人の血をひいている俺の誇りなんだ……誇り、奪ってくれるなよ…」

もはや完全にスイッチの入ってしまったワタルに伊澄もご関心のようす。

「……じゃあ、改めてお願いします。　仕事人さん」

ニコリとその笑顔を見ただけで、何度自分は言葉を失ったか。

（ヨッシャァァァッッ！！　やったぜ俺ェェェッッ！！）

伊澄に隠れて拳をグッと握るワタル。

「それでは行きますよお客さん……」

「ではゆっくり、お願いしますね？」

「……」

その台詞、狙ったのかは定かではないが……ワタルの顔が蒸気のごとく煙を発していたのは言うまでもなく。

（最高な……1日に…シェイシェイッ！！）

なぜ中国語なのかそれは置いといて、幸運の日に、不幸はある意味つき物だ。

―下り坂。

「ぐ、ぐぐ……」

下り坂をワタルは山車の重さに耐えながら必死に下っていた。

（なんだよこの以上な坂の傾斜は……）

明らかに大会のコースにあったのかという坂。　角度は三十度はあるか……

１３歳で山車を一人で支える。容易ではない。

「わ、ワタルくん……やっぱり…」

伊澄が心配そうな声でオロオロし始める。かだがワタルは怯まない。

「ファイトォーッッ！　一発ーーッッ！！」

言う伊澄の意見を無視し、ワタルは叫びながら坂を下りきった。

「ハァハァ……」

息を切らしながら勝ち誇るのもつかの間であるが

―上り坂

「ぐぬぬぬぬ……！！！」

「わ、ワタルくん……」

多分最大の難所だろうか、まるで箱根の山を駆け上がっていくみた

いな辛さだ。

「コオォォォアッッ！！」

もはや何語なのか分からないが自分を奮起させる物には違いない。

ズルッ

「うおっ！」

「きゃ……」

不意に脚を滑らせてしまったワタルだが寸での所で踏みとどまった。

「だ、大丈夫か伊澄？」

「わ、私は大丈夫だけど……ワタルくんが」

ワタルを見る伊澄の目はいつも心配そうに潤んでいる。

そう言うときはケラッとワタルは答えるのだ。

「だ、大丈夫だって、なんたってな……」

―今は引けねぇ時なのよ……

見上げる頂上。まるで自分をあざ笑うかのように見下す。

（上等……）

ここまで来たら根比べ、ただそれだけだ。

（伊澄を守る！　いつだって、どんな時だって！！！）

「ファイトォォォ！　一発ァァァァッッ！！」

今日の最大の叫び声。　今ならケ〇ン・コスギにも勝てるかもしれない。

「……上りきって、やっ……た、ぜ……」

気付けばというか、いつの間にか坂を上りきっていた。

難関難所をくぐり抜けてきたワタル達にはまるで今までを感じさせない平地が広がっていた。

「やっと落ち着いた……」

「そうね……」

と伊澄が呟いたのを境に会話が途切れる。

「……」

「……」

「「……」」

（ヤバい、なんか緊張してきやがった今更……）

最初から2人っきりだったのにも関わらず今更という緊張。

だがこの感じを、悪いとは感じなかった。

「まるで昔のお姫様を送る人みたいね、ワタルくんは……」

「はは、なら俺が従者で、伊澄がお姫様か……」

ソノ瞬間、ワタルは自身の口を片手で塞いだ。

（なに言ってんだ俺は！！）

途端に顔が赤くなる。　それは熱を帯びた鉄のように。

自分の発した言葉にさえ気恥ずかしさを感じた。

「くすっ……」

「え？」

「まぁ、ワタルくんったら……くすっ…」

伊澄が笑ってくれた。

いつもはお世辞に笑われていた気がするが、今日は心から笑っている。

好きな人が、自分の言った事で笑っているだけで、こんなにも嬉しいのか。

疲れが一気に吹き飛んだ。

「それにしても、あの先輩も酷いことしたよな～」

「先輩？」

ワタルの言葉に伊澄が聞き直す。

「伊澄とペアを組んだ先輩だよ。　伊澄ほったらかしにして、ったくよ……」

「あの人はそんなに悪い人じゃないわ」

その言葉に、ワタルは振り返った。

「ええっと……悪いというか、その……」

中々口には出しづらい理由なのか、伊澄はオロオロしだした。

「え？　何なんだ？　……って着いちまった」

「まぁ……」

いつの間にか、白皇学院の校舎に戻ってきていた。

その後は山車を元あった場所に返した。　勿論ワタルがだ。

「漸くか……」

と背伸びをして今まで自身が走破してきたコースを思い出す。

長かった。　ライバル達よ……

「終わったな……ッ！！」

ふぅ、と溜め息ついた瞬間、ワタルは地面に座りこんでしまった。

「ワタルくん！？」

顔を歪ませたワタルに伊澄が慌てて近寄る。

「いたたた……足かよ…」

その足は安定していない足場を歩いてきた為からか、酷くボロボロだった。

靴を脱ぐと、靴下からは血豆が滲んでいた。

「…ごめんなさい……私のせいで……」

伊澄はもう泣きそうな、そんな感じの顔だ。

瞬時にヤバいと思ったのか、ワタルは慌てて手を横に振る。

「いや！　伊澄が謝るなよ！　こんな怪我なんて明日になれば治るよ！」

いやそればかりは無理だろ。

「それに俺は今日かなり嬉しかったし……」

「え？　なにが……？」

「いや、なんでもない。　ただの妄言だ……」

（畜生……言えねぇ……）

ワタルは顔を敢えて逸らした。　その夕日に溶け込んだ真っ赤な顔を隠すように……

結局は、伊澄の車に送られていく事になった。

しかも伊澄とは同じ席。

好きな人と隣り合う。これほどの最高なシチュエーションはない、ないのだが……

（ね、眠……）

目をゴシゴシとするが襲ってくる睡魔には抗えない。
（つ、疲れてんのかな……せっかく伊澄の隣りなのによ）
ワタルは悔しそうに瞳を閉じる。
（結局、今日言えなかったな……）
なにやら伊澄が喋っていたように聞こえるが何と言っているか……
（いつになるか分かんねえけど……ちゃんと、届くか？）
―その日を待とう。
いつしかその日が来るまで……

―今日この日を忘れない

「……だから、もっとワタルくんはナギと仲良くしなきゃ……あら？」
「スー、スー」
説教の途中だと言うのに眠ってしまったワタルを見て、いささか微笑む。
「……今日はありがとう、ワタルくん」

そう柔らかい笑顔で呟くと、ワタルに向けて手をかざす。
そしてワタルの全身を、緑の光が包んだ。

○

「おっ、おっ、おおっ！！」
翌日、信じられない事が起きていた。
足の怪我が治っている。　傷一つない、むしろ昨日の疲れが嘘のようだ。
「サキィ！　俺の足の怪我が……」
「怪我？　なんの事ですか？」
サキはキョトンとしていた。
「そんなのは有りませんでしたよ？　最初から……」
その言葉に、ワタルは疑問を抱かずにはいられなかった。
「幻ですよ若。　きっと疲れてたんじゃないですか？」
「ば、バカッ！　そんな訳ねぇだろ？」

ワタルはサキに怒鳴ると一人洗面所に赴く。

冷水を顔に掛けると頭が冷えたがなかなか疑問が消えなかった。

橘　ワタルの出来過ぎた話（後書き）

なんかこういう話は初めてかも……

山車の構想はよくあるシチュエーション、彼女を自転車に乗せて走る、から出ました。

でもやっぱりこういう色恋沙汰は難しい。　向かないかも

でもこれ自分で書いてても、ワタルってとことん初々しいですよね。

青春してますよ！　羨ましい……俺は一体何をやってきたんだ……

んなことはさて置き、変な短編集まだ続きます。次は自称キングこと、乙葉　千里君のお話です。では。

～とある王様のマラソン大会～

ーーーー乙葉（おとは）　千里（せんり）。

白皇学院の上級生は、その名を聞いて知らない顔をする人間は誰一人としていない。

乙葉　千里、白皇学院二年生。　その圧倒的な自身が王、もといキングと称する男だ。

ーー千里か？　うん、取り敢えず五月蠅い男だよ。という代名詞だ。

と白皇の上級生たちは口を揃えて言うほどだ。

第一に、あの俺様キャラがいるということ自体が白皇にとって場違いなのだ。

そんな彼に友と呼べる人間はいるのか？　否、いない。

髪も地毛の金髪を理由に、誰もが不良という見方をするからだ。

ある意味では一匹狼。　王様よりもそっちのほうが似合っているかもしれない。

そんな彼もマラソン大会に出場する。

「自由型か・・・全校生徒、全ての白皇関係者と強さを競い合うこ

とができるのか・・・」

彼が求めるのは強さ、富、権力などではない。

――王という威厳。

自らの力を誇示するためには全ての人間に勝たなければない。

彼の生まれは、もともとは祖先が王家の血をひいている。　今はそんなだいそれたものではないが、乙葉家は富、権力により一応不自由ない生活を送れるほどだ。

いつかは乙葉家を継ぐという大役がある。　そのために必要なことは、自身の威厳を社会に広く深く影響できるようにしなければならない。

というわけで、彼はマラソンに出るのだ。

「むぅ・・・」

しかしだ。深刻な問題がある。

「ペアが決まらない・・・」

自由型は二人一組が基本だ。　これが絶対出場条件。　例外はないという。

「俺と組むのがそんなに恥ずかしいのか」

不思議・・・いや、必然的だろう。　なんせ白皇のモンスター、ト

ラブルメーカーとまでのレッテルを張らされているくらいだ。　本人は知らないが。

組んだら最後、彼の栄光のロードという唯我独尊極まりない危険な事態に巻き込まれると分かっているからだ。

『えー、スタート五分前でーす』

司会の声が響く。

（まずいな・・・このままでは参加することができない。　こうなったら！！）

「おい、そこの女！」

千里はスタート地点から少し離れた所にある、カフェテリアにいた少女に声を掛けた。

もうなりふり構っていられない。　どこの誰だろうと、こちらから声をかける。

「はぁ・・・」

「む？」

その少女は白皇の制服を着るばかりか、体操服にすら着替えていない。　ここではあまり見ない和服だ。

ご存知の通り、それは伊澄だった。

「女よ、マラソンには参加しないのか？」
取り敢えず手短に聞いてみると
「はぁ・・・私、運動は苦手なので・・・」
和服の袖で口元を隠すように言うのだ。
「ふむ、まぁよい。　貴様の都合など、このおれの前では霞んで見える。　俺と自由型に出ろ」
もはや相手の都合などお構いなしだといわんばかりの千里だ。　当然、伊澄は訳が分からずオロオロしだす。
「あの、私・・・運動は・・・」
「勿論、異論は認めない。　お前は黙って、俺の後ろを付いてくれば良いのだ。　行くぞ！！」
「え、その、ま、待ってくださーい」
勝手に声を掛けて、勝手にマラソンに参加させられ、勝手に走り出した千里に対して、声を間延びさせながら追いかけてしまう伊澄。
この時思えば、なぜ追いかけてしまったのかと思う。
「待ってくださーい・・・」
「どうした！　もっとペースを上げんか！！」

この傍若無人ぶり、確かに迷惑だ。　ペアを組みたがらないのもわかる気がする。

「まって・・・ください・・・」

「くっ！！」

和服を着た少女にとって、運動するのはあまり良いとは言えない。当然のことのように、伊澄は息を切らしてしまった。

「走るペースが・・・速いです・・・」

息を切らしながら千里に言う伊澄。　だが伊澄、言う言葉が違う。

「くっ！　情けない！！　たかがこれしきの運動で根を上げるとはッッ！！」

「すみません・・・・」

本来、伊澄が謝ることはないのだが。

「いかんな、取り敢えずチェックポイントまでは走らなければならんというのに・・・」

不意に、息を切らしている伊澄の姿が目に入った。　近くのイスに腰掛けている。

『おおーっと先頭を切って走るのは白皇の先生ペアだーーーーッ！！』

その放送が彼を一度冷静にさせた。　焦っていた思考をとめ、策を練る。

自分は体力は自身があるほうだが、問題がペアにあった。　今は若干呼吸は落ち着いたものの、これ以上走らせるとなると、きついだろう。

人選ミスだととという以前に、軽い罪悪感が生まれたと思った。

しかし、自分はこんなところで終わってはいけない。

「俺の本能がそう叫んでいる、ここで終わるような器の男ではないはずだ」

まるで自身を鼓舞するかのように拳を握り締める。

「おい女！　」

「は、はい・・・」

イスに座っていた伊澄は突然の声に驚いたように反応する。

「まだ走れるか？」

「ええ・・・と、難しいかと・・・」

返答などにはいつも時間がかかる伊澄だが、今回はかなり早い返答だった。

「そうか。よし、わかった。　これに乗れ」

ドスンと伊澄の前に、小柄な山車が現れた。
「これならお前も走らずに、疲れないでやれる筈だ」
腕を組みながら言い放つ千里。
「はぁ・・・」
と伊澄はつぶやき、特に反論することなく山車に乗る。
「疲れて倒れられてしまっては困るからな・・・」
「・・・・」
千里のその言葉に、伊澄は軽くだが笑ってしまう。
「優しいのですね・・・」
「ば、馬鹿者が！　そんなものではない！　これは俺の栄光のロードを棄権という形で汚されたくなかったからだ！　仕方なくだぞ！！」
伊澄からそう顔を背けると伊澄はまたしてもニコリと笑った。
「それなら早くしないといけないのではないでしょうか・・・」
「む、そうだな・・・しっかり掴まっているがいい・・・」
ギンッ　と目を鋭くさせる。　その姿に伊澄は恐怖を覚えた。　後

に伊澄は今日のことをあまりいい日ではなかったと語る。

「行くぞォォォォッッ！！」

前足に力をこめた千里が、天高く吠える。　力強く地面を蹴った瞬間、山車はあり得ないスピードで走り出した。

「キングは一人ッ！　この俺だッ！」

こうして、自称キングの物語は始まるのだ。

～とある王様のマラソン大会～（後書き）

短編集第二弾。　取り敢えず俺様野郎、乙葉　千里くんのお話。
取り敢えずはご感想のなかにあった、なぜ伊澄とペアを組んでいたのかという経緯を説明する形になってしまいました。

実は友達がいない・・・そんな子なんです千里くん。　ほんとはいい子？　なんですよ？

まぁそんなこんなで執事クエストは次回からです。

第３８話～ゲームなんかであんな強い仲間が簡単に集まるわけがない～（前書き

短編も終わらせて、ようやく執事クエスト。　さまざまな変更点を考察する中、結局、余計なことは考えず、フリーダムに楽しくいこうぜ。　という考えになりました。

第３８話～ゲームなんかであんな強い仲間が簡単に集まるわけがない～

マラソン大会後日――――。

バキッ！！

「ヒッ！」

物語は冒頭部分に相応しくない様な破壊音から始まる。　ここは執事長のクラウスの部屋。
その部屋は今はとんでもない光景に見舞われていた。

執事長の机に一本の竹ぼうきが貫通して突き刺さっている。　それを見て、クラウスが身を震わせていた。

「オイオイオイオイ、俺は聞ぃてねぇぜ。　いつの間にハヤテがクビになったなんてよぉ」

目を覚ましたテルが最初に聞いたこと、既にハヤテが屋敷から出て行ったという情報だった。
突然だっただけにテルはそれを聞くや否や箒をもって、クラウスの所へ・・・といった感じ。

「ち、違うんだ善立！！」

「なぁにが違うってぇ・・・・？」

堂々と執事長の机に立ち、ドスを利かせた声でテルは言う。

「テルくん落ち着いてください！！」

マリアが離れた場所で沈めるように促すが

「このとんでもねぇ不景気の中で、アイツが一人でやっていけるってのはまず無理だ。　目的達成できなかったら『君もういらんよ』と言われたサラリーマンの気持ちがテメェには分かるかァァァァ！！」

「善立！落ち着いてくれ！！　イヤ、マジで！！」

「世の中不景気三昧の社会人たちの怒りを、俺がお前にぶつけてやる！！」

「いやもうソレ八つ当たりの何物でもないからな！！」

クラウスのツッコミも構わず、テルは突き刺さっている竹ぼうきを引っこ抜くと執事長に一撃を食らわそうという執事最大の暴挙にでる。

ガツンッ！！

しかしその暴挙はマリアのカナヅチの投擲により止められた。

「ま、マリアさん・・・カナヅチの使い方を間違えてますよ？」

頭部に見事クリーンヒットしたか流石に痛がるテル。

「人の話をよく聞いていないからですよ？　もう一発、あげましょうか？」

「いや、もう、勘弁してください・・・」

笑顔でカナヅチを構えるマリアを見て、もう抵抗する気はないといったテルだ。

「テルくん、まだハヤテくんはクビなっていませんよ？」

「え？」

その一言に、ようやくテルは耳を傾けて動きを止めた。

「だから、もう三日もたってるんですよ？　マラソン大会から・・・」

「マジすか？」

テルは髪の毛をクエスチョンマークに変えて何がなんだか分からない状態だ。

掻い摘んで説明、実はテルは気絶した後、見事に三日間は眠っていたのだ。　船の事故の怪我がまだ完治していない状態での無理な運動。　これが原因だというのは言うまでもない。

その三日間の間にも当然のように物語は進んでいく訳で、ハヤテは執事復帰を目指して「執事とらのあな」に出かけている。

「なるほど、要は再教育センターに送り出されたようなもんですね」

「まぁそんな感じですね・・・・」

「んで、ナギが居ないのはそれですか？」

「はい。　何でも急に執事とらのあなに行くと言い出して早一日。
一緒に今居ると思うんですよね」

「なるほど・・・・」

ふむ、といった感じでテルはゆっくりと部屋から出て行こうとするが・・・・

「待ちなさい」

ガシッとテルの首を掴むのはもちろんマリアだ。

「あの、マリアさん、ちょっ・・・痛いッス」

「まずはダメにしてしまったクラウスさんの机を片付けてください・・・」

「いや、その前に・・・このままだとヤバいんじゃないですか・・・・って」

「何がですか？」

「なんかこのままだと咽喉切断とかに、なりそう・・・です」

「ついでに肋骨も開放性骨折にしましょうか？」

その笑顔は今までで一番恐ろしかったという。

その光景を見ていたクラウスはある疑問を抱いていた。

（アレ・・・私はクラウス、執事長。　でも部下の執事にキレられてるのにそのハウスメイドに頭が上がらない・・・え？私執事長なのに？）

クラウスはこの上なく自身の扱いを嘆いたそうな。

○

取り敢えず、片付けが終わった後にテルはその足を白皇学院に向けていた。

マラソン大会から数日あけてとのこともある。　もうあの時の盛り上がりは微塵も残っていなかった。

テルがマリアに命じたこと。　まず、執事とらのあなに赴き、ハヤテ達の様子を見てくる、と言った所だ。

しかし、学院に来たところで何もないわけだが。

「イヤこれは別にハヤテ達が帰ってくるまで白皇で時間を使うとか、そんなことを考えている訳ではないよテルさんは」

明らかに、本音が発せられていたのは言うまでもない。

「おや、三千院家の執事くんではないか？」

「ん？」

突如の声にテルは耳を疑う。　振り返るとそこには

「どうしてしまったのか執事くん。　気絶してから三日目だぞ、大丈夫か？」

凛としたその顔、黒髪。　テルには全く覚えがない。

「誰？」

「体に良いものはちゃんと摂取しているんだろうな執事くん。　そうだな骨を丈夫にしろ。　そうすれば粗方の不祥事には耐えれる肉体になる」

「いや、アンタ誰？」

「む？　顔色がよくないな、目もどちらかと言えば死んでいる。これはビタミンが足りていないと見た」

「オイコラ、悪口だろ？　明らかに悪口だろ？」

もはや止まることのないエンドレス。　それを打ち破ったのは相手だ。

「というか、君はだれだ？」

「オオオオオオィ！！　明らかに知ってるように話しかけてたよなァ！？　それで今更他人ぶるなよ！！」

「あまり怒るでない、ストレスが溜まっているな。　カルシウムだ、カルシウムを尚更とるんだ。　そうすれば万事うまくいく」

「話を聞いてくれぇぇぇぇ！！　話が進まないんだヨォォォ！！」

んでもって。

「まぁ冗談はよしとして、私は奈津美　唯子だ。　君じゃないもう一人との執事も知っている者さ」

「最初からそんな感じで話してくれよ・・・・」

若干疲れ気味のテルはげんなりとため息をついた。　それを見て、唯子が口を開く。

「まぁそういうなテルくん、ハヤテくんの情報なら私は知っているぞ？」

「・・・・マジで？」

テルのその反応を見てか、唯子もにやりと笑った。　そして続ける。

「執事とらのあなは知っているな？」

「まぁ・・・・」

屋敷で聞いた単語を再びここでリピートし、テルは頷く。

「どうやらハヤテくんは『執事クエスト』にて最終試験を受けるらしいが、その仲間集めをしている真っ最中らしい・・・・」

「まさかそれはあの四人でパーティを組んでダンジョンを進んでいくというトルネコも真っ青な伝説的な・・・」

「流石は三千院家の執事くん・・・なかなかの推理力」

唯子はそのまま続ける。

「その試験だが、何やらおかしな噂が流れていて・・・・」

「おかしな噂？」

「ああ。　何か、過去にとらのあなは確かに存在していた・・・が、もう既に存在していないらしい」

「あ！？　なんでだよ」

唯子の発言にテルは目を丸くした。　唯子はきょとんとした顔で

「そりゃ、執事ってあんまり居ないからだろ？」

と言い放つのだった。

「んで、君がこの話を知らないということは、当然、外部からの情報をシャットアウトされているハヤテくん達も知らないわけだ」

確かに、とテルは思う。　この不審な動きを、マリアやクラウスたちが知らないはずがない。　あの二人が気づかないとなると

「まるで何か誘い込まれたかのよう・・・・な」

唯子の一言にテルが反応する。
罠。そんな言葉が頭を過った。
「これはもしかすると・・・・」
「うむ、大事なのは間違いない。　既にハヤテくん達はパーティも決まっていて、もうクエストの試験に向かったそうだ」
「遅かったか・・・・」
「そこで・・・・だ」
唯子がこの時を待っていたかのように笑みを浮かべる。
「当然、君も行こうと考えているわけだ」
「まぁ、罠だとわかっていようがいまいが、様子を見て来いと言われているからな」
先ほどその職務を放っておいた人間とは思えない。
「その罠だが、敢えてその罠にかかってみないか？」
唯子の意味不明な言葉に、テルはん？と唸る。
「その罠を打ち破るんだよ。　中から直接入って堂々とな」
「アンタも来る気なのか？」

「無論、そのつもりでいる。　その方が私的には面白いからな」
まるでこの出来事を楽しんでいるかのようだ。　まるで動じていない。　気ままに動くマイペース、楽天家とはこのことか。
「どうなっても知らねぇぞ？」
テルは当然のことのように言う。　三千院家を罠にはめる。それは殺しの類の人間側が絡んでくるはずだ。　怪我しに行くようなものだ。
「大丈夫だ。　こちらも集めるのだよ。　エ○ンの戦士たちを・・・」
こうして仲間集めが始まったのだった。
○
「・・・・んで？　私のところに来たと・・・」
「その通りだ会長」
テルたちは生徒会室に直行した。
何故か、理由は簡単である。　その強さだ。
ヒナギクはもはや初期の状態からでもバトルマスターにつき、果て

は勇者の職業に就くこと間違いなしの能力をもつこの人物を、仲間にしないわけではない。

「まぁ、バーサーカーも真っ青のその戦力が欲しいというわけだ」

「それはどういう意味かしら」

ヒナギクが額に青筋を浮かべている。

「でもまぁ事情はわかったわ・・・」

しかしここで、テルも一つの疑問が浮かぶ。　ハヤテもヒナギクの戦力はのどから手が出るほど欲しいはずだ。同じ行動をしたのではなかったのではないかと。

「でも吊り橋一つも渡れない私が力になるかしら？」

ヒナギクの言葉にテルが顔をしかめる。

「だって大変なんでしょ？　それなのに……」

「あの、会長さま？」

改まってしまうのはヒナギクの目だ。

笑っている、笑っているのだけれど……

「吊り橋一つ渡れない女よ？」

――なるほど、ハヤテがコイツをスカウト出来なかった理由が分か

った。　でも俺なんかしたっけ？

どこまでその話で押すのか。

「ねぇ……」

（恐エェェェッ！！　やべーよ、なんでこんなに怒ってるんだよ！）

その瞬間、唯子がテルの襟首を掴みヒナギクに背をむけるように引っ張りよせた。

「時にテルくん、ヒナギクくんに何か怒られるような事をしたのか？」

「知らん、まったくもって……」

「じーっ……」

ひそひそ話を眺めるヒナギク。

「こえーよ、なんであんなオオカミみてぇな目になってるの？　やべーよ、狩られちまうよ、ジ〇オウガも真っ青だよ。俺なんかした？なんかしたのか俺、というかもう一人の・・・俺・・」

「ヒナギクくんの心の傷みたいなものに触れたとか、襲ってしまったとか？男はオオカミだというし……」

「いや、俺はアイツを襲うなら確実に重火器が必要だと思う。　後、オオカミは多分、俺じゃなくてアッチだろ色んな意味で」

「コソコソ話してんじゃねぇーよ」

え？　と唯子とテルは耳を、自身の聴覚を疑い、ヒナギクが声を不良のごときドスのある声を利かせているのを確かに聞いた。。

「ゴホン・・・冗談よ」

（（これだッッッ！！！））

二人は目を合わせ、ある作戦を思いつく。

「ヒナギクくん！！」

「ひゃ、ちょ！　唯子さん！」

咳払いしたヒナギクに唯子が涙を滝のように流しながら抱きついた。

「冗談でも止してくれェェェ！　君はありのままの君でいいんだ！君は大〇　涼子ではなく、桂　ヒナギクだろう！！」

「冗談ですって唯子さん……」

「いや、冗談じゃ済ませられないかもしれないぜ？」

そう言うのはテルだ。

「簡単な話だ。　これはギャップ効果によく似ている……」

テルは頭を掻きながら続けた。

「本来の人格が定着している人間が、突然別人のような振る舞いをする……しかしそれは不思議な事じゃない……が」

少しばかり間を置いた。

「確実にパターンある反応を見せる人間がいる……ある者はギャップ萌し、ある者はその人間の裏の人格を知る……」

「一般生徒ならあまり気にはしない……が君は生徒会長だ。　トップの人間が与える影響は計り知れない――」

ニヤリと唯子とテルはお互いに浮かべた。

「どうする、作者が感想ボックスを開けた瞬間、今回のお前の言動に対して抗議の感想がやって来るかもしれないんだぜ？」

「そ、そんな……私ってそんなに影響力あったなんて……」

（（自覚無かったのかよ、人気投票連続1位……））

「まぁ、我々に協力してくれれば忘れよう。　水に流そう。　記憶喪失にもなろう。だが――」

唯子は腕を組ながら続けた。

「協力しなかった場合、君の知人、家族、果ては一般人に明かそう！　ヒナギクくんは泣く子も黙るオオカミさんだという事を！！」

「ちょっと、それは脅迫ですよ！！」

ヒナギクが抗議の声をあげるが、唯子とテルの物凄い悪い顔に言葉を詰まらせる。

（ダメだ……この2人には何言ってもダメな気がする……）

そう結論づけたヒナギクだった。

「よし、急いでハヤテくんの所に行くぞ。　彼のクビが掛かってるからな」

「え？クビ？」

その言葉を聞いて、キョトンとしたのはヒナギクだった。

「アレ？　あんまり事情を聞いてない？」

テルの言葉にヒナギクは戸惑った感じで頷く。

―事情説明。

「そうだったの……」

まさかここまで大事に話が進んでいるとは知らなかったヒナギク。

だから先ほど、自分を頼ってきた理由に気付いた。

「困ってるなら素直に困ってるって言えばいいのに……」

む～と瞳を吊り上げるヒナギクはそう呟いた。

「なんだヒナギクくん？　彼が気になるのか？」

「ゆ、唯子さん！　違いますって！」

「あ～、やはり君は素直じゃない！　素直じゃないなァァァ！！だがそれがイイ！！」

唯子は顔をニヤニヤさせてヒナギクに後ろからもたれかかるように抱きつく。

なんだこの小説。

「オーイ、もう行こうぜ？」

テルは溜め息をつきながら呟いた。

第３８話～ゲームなんかであんな強い仲間が簡単に集まるわけがない～（後書き

一体何なんだコレハ・・・と思わず言いたくなる出来。　読んでいても詳しい人しか分からないようなパロディネタが多すぎる。

決まった新メンバーはまず唯子さんです。　やはりハヤテサイドをやるよりも、テルの方のサイドを膨らませた方がいいと思ったのでテルサイドで進みます。

第３９話～犬猿の仲って実際イヌ、サルがケンカしてるのを見ていたのか？～

大分空けてしまいました。

スイマセンで始まるのも何なんでどうぞ！

第３９話～犬猿の仲って実際イヌ、サルがケンカしてるのを見ていたのか？～

「準備は整いましたか？」

ここは教会、もとい執事とらのあな。

巨大な門を前に立つのは一人のシスターだ。

「まぁ集まりましたけど……」

苦笑いを浮かべながらそう言うのはハヤテだ。　現在、執事復帰を目指すために執事とらのあなにて実習中。

「おーい、こんな地下にデカい門があるって所はスルーか？」

そう不機嫌そうに割って入って来たのはナギである。

「え？　なに？　何が始まるのコレ？」

辺りをキョロキョロさせているのはワタル。　何故か知らないうちにこんな所へ……という感じだ。

「お宝はどこにあるのかしら……」

ワタル以上に目を輝かせて辺りを見回しているのは雪路。

すでにお宝散策モードになっている。

そう彼らは今回、執事クエストの為に集められた最強の戦士たちなのだ。

「ではこの執事クエストの説明をしましょう」

シスターがメンバーが集まったのを確認すると説明を始めた。

「この執事クエストではあなたがこのダンジョンのなかに入って執事のメダルを持ち帰ってくれば試験は合格です」

「え？　それだけなんですか？」

「てっきり魔王とか出るのかと思ったよ……」

ハヤテとナギがお互いの目を見合わせる。　ただ一枚のメダルを持ってくればいいという難易度の低さに意外といった表情だ。

（ククク……掛かったな！！）

そんな2人を見て、シスターは裏で不気味な笑みを浮かべていたのは誰も気付いていない。

「この向こうが地下迷宮なんですね？　シスター・フォルテシア」

「はい、その通りです」

シスターはそう答えると近くにあったレバーをガクンと下に下げる。

「では皆様、ご健闘を祈ります……」

レバーを下げた瞬間、門が低い音を立てながら開いていく。

ハヤテ達は中に入っていくのを見て、シスターはまた一人呟いた。

「さぁ、死のゲームの始まりですよ……」

シスターの笑顔はア〇デルセンも顔負けする狂気の笑みを浮かべた。

「……」

そしてそのシスターの背後の暗闇の中で、まるで人間のような目がこれから起きる何かを予知するようにギラリと動いた。

〇

「結局、連れてこられてしまったけど……」

ハヤテ達が入って数十分。　こんどは教会の前にヒナギク達がやってきていた。

「そんな言い方するなよ会長。　乗りかかった船だ。　楽しく行こ

うぜ？」

テルが先頭を切りながら歩く。

「そうだな。　我々もこれらの祭り事には積極的に参加したいものだな……」

「唯子さん、祭り事って……」

楽しそうな笑みを浮かべる唯子に、ヒナギクは溜め息一つ。

マイペースが主体のこのメンバーに頭を悩ませていた。

「だがまだ足りないのがある……」「そうだな。冷静に考えれば、ＲＰＧにおいて必要な役職……」

テルと唯子が呟いた。

「えーっと、何なのか分からないんだけど……」

「なんだ分からないのかヒナギクくんは……」

ヒナギクだけが困惑している中で唯子が説明する。

「こういった類のゲームはどんな時でも回復役が必要なのだよ。薬草で地道に回復していては埒があかないからな」

事実上、シミュレーション系のゲームではお決まりと言ってもいいほど回復役がいる。

ゲームにおいて、戦う側も体力が回復できることは戦力的には優位に立てるのだ。

「でもそんな魔法使いみたいな人いるかしら？」

ヒナギクが至極当然なことをいう。　しかしテルにはいささか心当たりがあった。

（伊澄が一番適任なんだろうけど、他言無用って言われてるからな……）

そう思いながら教会の前に行くと一人の少女がいた。

無論、伊澄であった。

「ってオイッ！！」

「あら、テルさま……」

突然のツッコミに伊澄はゆっくりと振り返りテルたちを見て言う。

「知り合いか、テルくん？」

唯子が不思議そうに尋ねてくる。

「まぁな……」

「そうか……」

テルが頷くと唯子はそのまま黙り込んだ。

「また迷子なのか？」

その問いに伊澄は首を振って見せた。

（えーっとだな、こういった場合は……）

テルは考える。　伊澄が迷子以外の事で、このような場所に来るという事はだ。

一つの案が浮かんだ。

「あまり近づかない方がいいですよ、皆さん……」

言う前に伊澄が袖で口元を隠す。

「あらどうして？」

「それはここが危険だからです……」

伊澄があからさまに危険だと、目を細めてヒナギクに言う。

（またか、またお前は悪いクセを……）

ちょっと勘弁してくれといった感じのテル。　伊澄の一人でなんでも抱え込む、頑固はなかなか治りそうにない。

「だったら尚更引けんな……」

「そうですね。　危ないんなら尚更助けに行かないと行けないし……」

「……」

ヒナギクと唯子の言葉に伊澄は面くらったようだ。

「危険なので近づかないで下さい」

「「「いやだ」」」

三人が同時に即答。

「実は危険じゃないよ～って……」

「「「なら問題ない」」」

またしても即答。　伊澄も流石に言葉詰まる。

「皆さんはナギと同じあまのじゃくです……」

「オイオイ、あいつと一緒にするなよ」

伊澄もテルも同時に溜め息をついた。

「今回はそういう仕事なんだろ？」

伊澄は何も答えない。　だがしかし、一瞬だけ首を上下に動かしたように見えた。

「俺達にも引けない理由があるからな……前回同様、巻き込まさせてもらうぜ」

「はぁ……分かりました」

今回も伊澄が折れるしかないようだ。

○

「ゲームだったらここで『賢者伊澄が仲間になった！』みたいなのがでてきそうだな」

伊澄が仲間になったのを見てか、唯子が呟く。

「まぁ、この戦力なら大丈夫だろ。　バーサーカーが二体いれば……」

ゴキン！

即座にヒナギクの鉄拳がテルの後頭部に炸裂する。

「不愉快な事を言ったかしら？」

「会長。　なんでもかんでも暴力で解決するのは良くないかと」

頭をさすりながらテルが言うがヒナギクは無視だ。

「ふむ。　私が狂戦士だというのは頂けないな、こんなにも可愛らしいというのに……」

「唯子さん、自分で言いますか……」

「しかし実際見ろヒナギクくん。　この集団はどう見ても女の割合が高いぞ？　両手に華じゃないか？」

「トリカブトとハエトリ草がいるパーティーじゃねぇか」

バキッ！

「不快極まりない言葉よ……」

「私もその言葉に気が障った。　殴ろうヒナギクくん」

2人はテルに対し、怒涛のラッシュをかける。　跳び蹴りから関節技、更にはテルを天高く放り投げ、空中ツープラトン。

ドゴッ！という轟音とともにテルは地面に頭から突き刺さった。

「息がピッタリですね……」

「息がピッタリですね……」

感嘆の言葉を贈る伊澄。テルはもはやライフが1という瀕死に限りなく近い状態になっていた。

「さて、そろそろ中に入ろうではないか」

唯子が髪を片手でバッと靡かせる。

一同もやる気のある表情を見せる。

今まさに彼らの冒険が始まろうとしていた。

とその時。

「貴様ら、こんな所で何をしている？」

不意に後ろから聞こえたのは聞き覚えのある声。

乙葉　千里である。

「まぁ千里さま……」

「む、女はあの時の奴か……」

千里は伊澄の存在に気付いたのか、視線を伊澄に向ける。

が、やがて興味を失ったかのようにフンッと鼻を鳴らすと視線を背けた。

「むっ、貴様は！！」

次に視線をテルに向け、怒りの表情を表した。

「俺の邪魔をした奴か！」

テルはいきなり指を指されて頭にクエスチョンマーク。

「え？　誰？　あ、斎藤くん？　なに、まだあの金魚デカくなってるの？」

「ええい！　しらを切るか！忘れたとは言わせんぞ！」

事実、テルは千里の事をあまり覚えていなかった。

理由、あの時は無我夢中だったためだ。

「今ここで貴様を殴らなければ、俺の気が収まらん！」

千里がくわっと目を見開いてテルに殴りこもうとする。

「下がれこの下衆が……」

その毒づきに反応したか、千里が拳を緩めた、いや、止めた。

「貴様、何故此処にいる……」

千里は先ほどより不機嫌な表情になり、その声の主を睨みつける。

視線の先、それは唯子だった。

「私が言った事が分からんか、下等生物」

普段、凛とした態度をとっているだけにそのセリフは今までの唯子とはかけ離れていた。

「貴様が呼吸するだけで世界中酸素の無駄だ……温暖化の原因になっていることが分からないのか木偶の坊」

「貴様こそなんだ、俺の視界に入らないようにするべきだ。今すぐ消えてくれ」

二人が火花を散らす。　まさに一触即発状態。　バルカン半島みたいだ。

「会長」

「なにかしら……」

テルの一言に黙って反応することしか見せないヒナギク。

「奴らの関係はなんだ？」

「白皇であの二人を知らない人は居ないわよ……悪い意味で」

若干、呆れたようにヒナギクが続ける。

「千里さんと唯子さん、何かとケンカが起きるのよ。　日常茶飯事なくらい。　唯子さんの常識論が通じないのよ、千里さん、基本アレだから……」

アレとは恐らくバカ、若しくは自己中な所だろうか。

「簡単に言い表せば『犬猿の仲』ね」

「なるほど、分かりやすいな」

テルも頷く。

視線の先では、未だに二人が睨みを利かしていた。

「ふん、まぁいい……ヒナギクくん。　さっさとこの中の用事を済ませてしまおう」

「むっ……」

くるっと翻した唯子に千里は眉をひそめた。

「貴様らはこの教会に入るというのか……」

「ああそうだとも。　その方が憎いあんちくちょうの顔を見ずに済むからな……」

「それは俺の事か、ならいいだろう……俺も貴様らについて行ってやる」

「は？」

一瞬の静寂の後、唯子が目を細めながら首を傾げた。

「貴様の邪魔なら俺は大歓迎だ。　それに俺はキングだからな」

「最後が意味わからん。　私は貴様のその意味不明な所が気に入らないのだ……」

「俺もだ。　貴様のその無駄に上から見下ろしているような態度、

このキングを差し置いている……気に入らん」

この二人は何かと相容れぬ物なのだろう。

「流石に唯子さん、もうこの際勝手にしましょうよ。時間もないんですから……」

埒が明かないと思ったか、ヒナギクが唯子に声をかける。

唯子も少しばかり考えて頷いた。

「……分かった」

「ふん……」

千里も鼻を鳴らして収めた。

相変わらず二人は顔を見合わせない。

「会長」

「どうしたの？」

「なんか……大変そうだな」

「大変なのよ……」

深い溜め息一つ。　唯子はいつもの表情に戻り、一同も教会へと踏

み出す。

今まさに、勇者達の冒険が始まる……

第３９話～犬猿の仲って実際イヌ、サルがケンカしてるのを見ていたのか？～

はい、ようやく始まります執事クエスト編。

テル達のはもっぱら新メンバーで固めましたがどうでしょう？　今更変えようがありませんが……

では次回も宜しくお願いします……

マリア「……」

バロックス「……アレ？」

マリア「……」

バロックス「アレ？　終わりじゃ……ない？」

マリア「……」

バロックス「マリアさん、なんで私はマリアさんの前で正座してるんでしょうか……」

マリア「これ……」

バロックス「そう言って私に突きつけるのは……紙？」

マリア「忘れたとは言わせません……質問」

バロックス「あ……」

マリア「コレって確か２０１０年の質問ですよね？」

バロックス「ハィ……」

マリア「今ここで返してください」

バロックス「分かりました……けどマリアさん、そろそろ首を掴むのを止めて頂ければ……」

ギリギリ……

マリア「このまま喉仏切断といくわけにはいけませんね……」

バロックス「グボッ……」

テル（マリアさん、怖ェェェェ！！）

バロックス「という訳でテルくんに質問です。『最近気になった事

ってなんですか？」』

テル「はい、ズバリお答えしますと、あの尖閣諸島の一件です。後一つは、モ〇ハンのリ〇レウスはどうしていつも序盤はあんなに強いのか？　ぐらいです」

バロックス「なんかひどい返しだな……質問をくださった方には本当に申し訳ございません……」

テル「以後、こんな事がないよう注意します」

では次回！

第４０話～生徒会長さんと４人の仲間たち～（前書き）

タイトル、なんかどっかで聞いたことありますね。　そんなことはあまり関係なかったり、あったり・・・・

第４０話～生徒会長さんと４人の仲間たち～

過去数千年前、古の大地より生れし王国の秘宝を手にしたその悪意は欲望のままに生きた。　そして、その欲望は肥大化し、世界のバランスを大きく崩し、世を混沌へと導きだした。

これはそんな欲望を阻止しようとする果敢な勇者達の物語――――。

「って、そんな設定のある内容でしたっけこれ？」

闇深いその迷宮ともいえる廊下を歩くのは勇者達一行。

彼はその一人。

まぁ変に肩っ苦しいのも何なんでスマートに進んでいきますと・・・・

このダンジョンを乗り越え、その奥にある執事のメダルを手にして綾崎　ハヤテは三千院家に復帰できるのだ。

――――これは彼にとって負けてはいけない、勝たなくてはいけない戦いなのだ。

――――心をつないだ仲間とともに必ず勝利を手にしなければならない戦いッッ

では紹介しようッ！　彼ら三人こそ！！　志を共にする彼の心強い勇者たちだッッ！！

「あーーーー！　お宝はっけーんっ！」

勇者その１　雪路
職業：世界史教師
特性：ダメ人間
必殺技：常時バーサク状態

「ダリーなぁ早く帰ろうぜーーー」

勇者その２　ワタル
職業：ビデオ屋店主
特性：へそ曲がり
必殺技：全５２話のアニメ一気鑑賞！！

「なんか・・・ダンジョンってすごい暗いんだけど・・・」

勇者その３　ナギ
職業：ひきこもり
特性：不登校
必殺技：働いたら負けかなと思ってるッッ！

・・・・あれ？人選ミスった？

押し寄せるのはもうビッグウェーブ並みの不安。

・・・・でも大丈夫、多少の欠点は補えているハズだ。

「ギャーーー！　トラップ！！　うわーー！！落とし穴だーーー！」

「先生がまた崖に落ちていったぞ？　ま、平気だろうけど・・・」

だって勇者だし。

「な・・・暗いけどお化けとか出ないよな？な？」

余りある人選のはず！！

最終的には僕がカヴァーすれば万事・・・・

勇者その４　ハヤテ
職業：借金野郎
特性：不幸
必殺技：超不幸

「ダメぁーーーーーーー！！」

ダンジョン内部にハヤテの絶望に近い叫びが木霊した。

○

「・・・・」

「・・・・」

場所は変わりまだ教会に入りたてのヒナギクたち。　先頭は伊澄、その後ろにはヒナギク、隣にはテルが、後ろには唯子と千里が付いてきている。

なにかと重苦しい雰囲気だ。

「会長。　いや、もといリーダー、もう冒険は始めながらにして終わっている気が・・・・」

「それは言わないで」

続けるな、と言わんばかりにヒナギクが肩を落とす。

原因となっているのは唯子と千里。　この二人は戦時のバルカン半島、ちょっとしたいざこざがあったら即戦争、のようなぐらいの仲の悪さであった。

「くそ、なぜキングであるこの俺がリーダーになれんのだ・・・」

「適任者はヒナギクくんに決まっているだろうが・・・クズ」

千里の呟きに唯子が最後にぼそりと毒突く。

もちろんこれを千里が聞き零す筈なく・・・

「貴様・・・小さくそのように俺を侮辱するとは・・・・」

「はっ、事実を述べたまでだ。　いやいや失敬、君は木偶の坊だか

ら私の言葉は片方の耳から入って片方の耳から流されているのかと思ったよ」

お互いが不敵に笑いながら睨みを利かせる。　このような状態が先ほどから続いているのだ。パワーバランスもとい、パーティの機能は果てしなく機能しない。

「だいたい、四人パーティなのにすでに五人いることになっているのがまずアレだろ？　即効あの王様野郎を馬車に突っ込ませるべきじゃねぇか」

「馬車なんてないわよ・・・」

ヒナギクがテルに対して的確な突っ込みをいれる。

そんな険悪なムードのなか、一同は長い階段を下り、広い場所に出た。

どことなく、寒気がする。　窓なんてないのに、冷えた風が周りを駆け抜けた。

「寒・・・」

「フン・・・」

テルが自身の服をさすり、千里は鼻を鳴らして耐える。

「・・・・生徒会長様」

「はい？」

なにか感じ取ったのか、伊澄がヒナギクに声をかけた。

「生徒会長様に渡さなければならないものがありました・・・」

「？」

一同が注目する中、伊澄がヒナギクに手渡したのは一本の木の棒。

「木・・・刀？」

手触りといい、独特のにおい、色を見て剣道をやっていたヒナギクは一目で分かった。

「ここから先は危険な予感がします・・・それをしばらくお貸しします・・・」

「ふーん」

軽く木刀を泳がせてヒナギクが呟く。

「これはかの天才刀鍛冶・・・名匠・正宗の作った最強の一本・・・」

伊澄は続けて言い放った。

「木刀・正宗です」

「……名匠も随分悩んだなオイ」

テルが木刀を見て呟いた。

「会長。　ちょいとその木刀、貸してくんね？」

テルがヒョイとヒナギクの正宗を掴み取る。

「あ、テルさま……止めておいたほうが……」

伊澄が言うのを聞かず、テルは正宗を手に取った。　その瞬間……

バチッ

「ん？」

体に走る謎の光。

バチバチバチッ！！

「え？」

先ほどよりも光の量が増していく……そして、

バリバリバリバリバリバリバリバリ！！！

「ミギャアアアアッ！！」

弾けたようにテルが紫の電激に包まれた。

「正宗は適性のある人物を選びます。　今は生徒会長さまが主とし

ているようです」

「ダメだったら電撃拒絶反応かよォォォォ！！！」

ゴトッと電撃が止んだ瞬間、テルは地面に倒れ込んだ。

「フンッ、面白いな」

テルの手から零れた正宗を広いあげた。

「さぁ正宗よ！　キングであるこの俺を選ぶがいいッ！！」

高々と正宗を突き上げ、叫ぶ。　だが当然……

バリバリバリバリバリバリッッ！！

「ウオオオオオッッッ！！」

千里もまた紫の電撃に包まれ、轟沈。

「ふ…馬鹿だな……」

「私も思いますね……」

丸焦げ状態になった二人を見て、剣士二人は呟いた。

「まぁテル様用にちゃんと用意してますが・・・・」

「マジで？」

ごそりと何かを取り出した伊澄を見て、テルが仮死状態から跳ね上がる。

「はいどうぞ」

「おお！！」

と感嘆するテルが手に持つの布に包まれた棒。　テルが持っただけでもずっしりとくる質量。

テルは布を外し始めた。

「これは、伊澄家伝統のオリジナル霊媒刀・・・・撃鉄（げきてつ）くんです」

「・・・・」

きりっとした目つきで伊澄は言うが当のテルはその物体を見て目を点にしていた。

布から解き放たれたのは一本の黒い棒。　それは伊澄は撃鉄といった。

「伊澄・・・・」

「はい・・・・」

テルの言葉に伊澄が応える。

「これどう見ても鉄パイプじゃねぇーか？」

「撃鉄です。　霊剣です」

「いやでもなんか先っぽ明らかになんかの一部だったみたいにボルトの穴あるし・・・」

と棒の先っぽはいい感じにくの字に曲がっており、あからさまにそこらから拾ってきた感がある。

「あと錆びくせーぞこれ？　大丈夫か？」

「霊剣なのでご心配なく・・・」

「どう見ても紛いもんだろォォォォォォ！！」

テルは鉄パイプもとい撃鉄を地面に叩きつけた。

「一応主人公だぞ俺！？　なんで会長にはとっておきのジェノサイドキャノンで俺はそこらへんの鉄パイプなんだよ！　」

「ふひ・・ひ、ひたいれふ・・・」

額に青筋を浮かべてテルは伊澄のほっぺをつねった。

伊澄は涙目を浮かべる。

「君は何をやっている・・・」

即座に唯子がテルの頭を殴りつける。　テルはごろんと地面を転がった。

「あれ、唯子さん・・・」

ヒナギクは唯子の手に握られている正宗を見て唖然としていた。

「ほう・・・なかなかの名刀だなこれは・・・・」

「唯子さまもまた正宗に認められる素質を備えていたということでしょうか・・・」

正宗を眺める唯子を見て、伊澄も少し考えたような表情だ。

「だったらこれは唯子さんが持った方がいいですよ。　私はそれが一番唯子さんに相応しいんじゃないかって思いますよ」

ヒナギクが笑顔で唯子に言う。　別に悪いことではない。　こうすることで、唯子も持ち前の剣術を活かせるし、パワーバランスを図ることができる。

「・・・・・」

しかし、唯子はすこし考えるとその手に持っている正宗をヒナギクに手渡した。

「これは・・・一番キミの手にあるのが似合っているよ・・・」

「え・・・・」

呆気手に取られるヒナギクをよそに、唯子は軽く笑うと身を翻した。
「うむ。それがいい・・・そうすれば鬼に金棒というものだ・・・・・」
「ちょ、それどういう意味ですか！？」
はっは、と高らかに笑う唯子。　一瞬だけ和んだかのような雰囲気だ。
「オイオイ・・・主人公の武器が錆びた鉄パイプって・・・・」
「ふむ。　時にテル君よ、そんな装備で大丈夫か？」
「大丈夫だ。　問題ない・・・ってんな訳あるかァァァァ！！」
と唯子に見事な突っ込みを見せるテル。
「こりゃあれだな。　『そんな装備で大丈夫か？』と聞かれたイ―○ックが『一番いいのを頼む』と言ったことに対して武器がうなぎパイだったみたいな・・・・」
「・・・・！！」
テルが一人ぼやいているさなか伊澄だけがその場の異変に気付き、目を細めた。
「む・・・」

やや遅れてなぜか千里が辺りを見渡す。

「皆様・・・来ます」

「そのようだな・・・」

「オイオイ、伊澄はともかくなんで馬鹿王子まで異変に気付くんだよ」

「キングの感だ」

テルの言葉に対して、千里が当然のように返す。

「一体、なにが来るっていうの？」

ヒナギクも思わず正宗を構えた。

・・・・・・・・・・ボゴ。

「ん？」

そんな奇怪な音がした。　地面から。

地面から突き出たもの、それは腕。

「うげ・・・」

テルは思わずその光景に顔色を悪くする。　地面から出てきた腕はさらに伸び、やがて頭、胴体、足とそれぞれ部位があった。　肉はなかったが。

「・・・ゾンビか？」

「見てるこっちは勿論のこと読んでいる読者たちも気味悪だと思ってますよ」

唯子とヒナギクはしかめた顔でなお冷静だ。

「伊澄、これが仕事の内容か？」

「はい。　どうやらこの教会には昔から悪霊の類が住み着いているらしくて・・・」

テルの質問に伊澄は頷いて答える。

「悪霊っつっても前みたいな幽霊の類じゃねぇよ。　つーか生きる死者の代名詞のゾンビじゃねぇか」

「さぁ、そこら辺は分かりませんね・・・」

「オイオイ・・・・」

なんともアバウトな伊澄に対してテルは深くため息をついた。

「・・・・・」

（確かに悪霊と死者は関係がない訳ではない・・・でも依頼内容と異なる。　なら、この教会にそれ以外の脅威がこの異常を引き起こしている可能性がある）

伊澄はただ冷静にこの異常な状況の分析をしていた。
しかし、目の前にいるのは異なる依頼内容だとしても人々に迷惑をかける恐れのある脅威。
「・・・・」
冷静な顔つきで懐から札を取り出し構える。　戦闘モード体制だ。
しかしその伊澄の前を遮るかのように一本の刀が前に現れる。
「ふむ。　流石に驚いたがなんとか理解したぞ伊澄くん」
そう言って竹刀を構えるのは唯子。
「唯子さん一体何を・・・」
ヒナギクが驚いた顔で肩を鳴らしている唯子を見る。
「無論、時間稼ぎのつもりだが？　ここは我々が食い止める」
「そんな！　唯子さんでもこの数は！！」
ヒナギクは目の前のゾンビを見る。　地面から出てくるゾンビは数を増し、すでに数は百を超えたようなものだ。
「なに、強い戦力がここで足を止めるわけにはいかないだろう。それに、この状況はここだけではな・・・」
「・・・ッッッ！！」

ヒナギクも伊澄も、この言葉にはっとなる。　この現象が起きているのはこの場所だけではない。　自然とナギやハヤテたちの方でも同じ現象が起きてる可能性がある。

「そうだな」

今度はテルが前に出る。

「幸い、先に進む道はあのゾンビどもの後ろとかにはねぇ、あのすぐ横だ」

「しかしテル様・・・！！」

伊澄が小さな声を上げる。　伊澄も流石に心配だと思っているのだろう。

「誰も死にに行くわけじゃねぇんだ。　生きてりゃまた会える・・・俺の実力は知ってんだろ？」

決めるかのようにテルは親指を突き立ててみせた。　伊澄はそれを見て

「ええっと・・・分かりません・・・」

「ああ、そうだよね・・・」

オロオロしながら応える伊澄にテルはまた肩を落とした。

「まぁいいや、取り敢えず行け、ついでに会長、お前は伊澄の護衛

だ」

「なんで私？」

「こいつはなにかと無茶するんだよ。　とくにこう言ったことに対してはな・・・後、ハヤテたちは狙われている。　だったら目的の奴等はこれ以上の危険に巻き込まれてる可能性がある」

ヒナギクもそのことには納得して頷く。

「その勢力を蹴散らすためにその刀はお前にあるんだ」

「・・・わかった」

ヒナギクは再度頷き、伊澄とともに先を行く。　伊澄も渋々納得したようだ。

「・・・君もなかなか頭が冴える様だな。　今の状況の予知は、私が言う予定だったのに」

腕を組んだ唯子はそう呟いた。

「別に・・・ぼやけた記憶なんだが、その経験が生きてるだけだ」

「・・・・？」

一瞬だけ見えたテルのその横顔を見て疑問を浮かべる唯子だった。

「んで？　どうするよこの数？」

テルは目の前のゾンビの大群に指をさす。　もう数は増えてはいないようだ。

「ふむ。　一人約５０といったところか・・・」

「なら二人でだいたいやれるな」

「いや！　俺が１００だッッ！！」

「アレ？　バカ王子？」

「ふん、貴様らだけに死にに行かせるわけにはいかんのでな！」

腕をぐるんぐるんと回して気合いを入れる千里。　前をいく千里に対し、唯子が呟いた。

「別に死ぬつもりはないのだが・・・・できれば貴様だけこの場で消えてくれ」

「なにィ！？」

またしても睨みあう。そんな事をしている場合ではないというのに。

「まぁそろそろあいつ等の相手してやんねぇとな。　待ちぼうけてるぜ？」

目の前ではゾンビたちがうめきながらこちらを見つめている。　非常に気味が悪い。

「そうだな。　そろそろ行くか・・・と、言いたい所だが」

「あん？」

「もう既にバカが突っ込んで行ってるぞ」

「ウォォォォォオッッ！！」

視線を戻すと、千里が雄たけびを上げながらゾンビの集団に突っ込んで行くのが見えた。

「・・・・」

テルは頭をぼりぼりと掻きながら一つため息をついた。

「見なかったことにしよう・・・」

そう言い、彼は構えるのだ。　自分のこれからの相棒を。

「ふむ」

唯子もまた竹刀を構える。

「さぁて、楽しい楽しいド〇クエもびっくりの戦闘の始まりだ」

3人の戦士たちは一つの戦いの中へ・・・・

第４０話～生徒会長さんと４人の仲間たち～（後書き）

さて、これまでの話をおさらいすると、ハヤテを追いかけてテルが来ました。仲間がなぜか増えていきます。　そして原作は幽霊だったのにこの小説ではゾンビです。　このゾンビは本文では詳しく描かれていませんがマジモンです。　ちゃんと死んだ人がゾンビです。

その理由は・・・このオリジナル要素にある！！　訳わかりませんね。

次はなんと、ド〇クエ仕様の戦闘をひっくり返すガチバトル。　その中にもギャグを混ぜるつもりですが。

では次回！！

第４１話～馬鹿共、激しく暴れる～（前書き）

久しぶりにバトルの話。　気合いを入れてみた感じですが……どうぞ。

第４１話～馬鹿共、激しく暴れる～

「うおおおおおっ！！！」

地下迷宮内、ハヤテ達一行はゾンビの大軍に追われていた。

「ハヤテー！一体何なのだ！？」

ハヤテの横を走るナギが叫ぶ。

「はぐれゾンビですよ！しかも骸骨の！なんか人の道からだいぶはぐれてた感じしましたし！」

「つーかはぐれてんのは現世からじゃねーか！？」

すぐ横で走るワタルが突っ込んでいる。すかさずワタルは付け加えた。

「気をつけろよ！さっき先生が散々引っかかってたトラップが色々あるからな！」

「先に言えよ～……」

カチッ。

そんな事を言っているナギが床のスイッチを押してしまった。

後ろから矢が発射される。

「お嬢さま！！」

割って入ったハヤテはナギの盾になるように立ちはだかった。

ドシュッ！

「ぐっ……！！」

「ハヤテ！！」

矢がハヤテの肩を貫き、ナギの悲鳴が木霊した。

○

場所は戻りテル達。

「オォォ……」

ゾンビ達は唸っている。　数は大体１００を越えているぐらいだ。

様々なゾンビがいる。　刀を持つもの、槍を持つもの、弓を持つもの、素手のもの。

その大軍の中で大立ち回りをする無謀な奴らがいた。

「ふんっ！」

気合いを込めた一撃により、竹刀によって切り上げられた頭は軽々と宙を舞う。

頭と言っても骸骨だからそんなグロくない。

そして即座にその胴体を袈裟斬りし、粉砕する。

足を止める事無く、大軍の波に飲まれる事無く、斬り倒す。

ある時は避け、的確に突きを繰り出す。

唯子は例えるなら漆黒の蝶が蜂のような獰猛さを兼ね備えているようだった。

「オォォ……」

今度はゾンビの反撃、何故か縦一列になり唯子に突っ込んでいく……ジ〇ットス〇リームアタックのつもりだろうか。

「セイィィィッ！！！」

唯子の後方で怒号が聞こえた。　チラッと振り返ると巨大な元〇玉、もといゾンビを丸く固めて作った塊を唯子が居ることを承知で投げつける。

「……ふぅ」

一瞬小さな溜め息をつくと唯子は真横に素早く飛ぶ。
大玉はゴロゴロと転がりながら縦一列のゾンビを巻き込んでいく。

ゴンッ！　と音をたてて、壁に激突した。
千里ならではの力業である。

「なかなかの芸術だ……」
一人感慨に耽る千里。

「……」

唯子はその千里の頭部に竹刀の一撃をお見舞いした。

「私まで巻き込むつもりか……」

「貴様などいたか？　あまりに小さすぎて分からんかったぞ」

「……木偶の坊が」

またしてもお互いが睨みをきかせる。
だが不意に、唯子の視線が遠くのゾンビに移る。　弓を構えたゾンビが次々と矢を放ってきた。
ドスドス！　と、地面に数発当たり、二人は当たらないように走りだす。

「厄介のがいるな……」
唯子は忌々しげに呟く。
「確かに厄介だ。　お前が盾になれ、その間に俺が蹴散らしてきてくれる」
「それはむしろ貴様の役目だろう……」
走りながらも続くこの言い合い。こいつら何処でも喧嘩ばかりだ。
「さて……テルくんはと…」
唯子は辺りを見渡し、テルを探す。　自分たちの周りには常にゾンビがいたが、一カ所に群がるようゾンビ達がいたのを見た。

○

時にテルは思う。此処最近、嫌な事ばかりであったと。
「どけどけェェェェ！！」
派手に宙を跳び、ゾンビの頭目掛けパイプを振り下ろす。
「次ィ！」

両断したゾンビに目も暮れず、力強い足運びで立ち回る。

「オォォ……」

刀を持ったゾンビが背後から切りかかる。

「しゃらくせぇ！！」

即座に振り返り、刀をパイプで受け止め、刀にパイプの先を引っ掛ける。

くの字になっているパイプは相手の武器を奪う。

そして頭部目掛けてのハイキックがゾンビにヒット。

「最近ムカつく事ばかりでよ……」

敵の腕を文字通り叩き折り、無力化した後、胴体ごと斬る。

「ストレス発散させろやァァァ！！」

彼は止まる事を知らない。

進む事に全てをなぎ倒していく台風のようだ。

進む道には屍の道のみ。

「オオォ……」

今度は槍を持ったゾンビ達がテルを囲むように現れた。

「……」

一瞬考えるのも束の間、ゾンビ達は同時に槍をテルの腹部目掛けて突く。

しかし、その槍達は空を斬らざるを得ない。

グサッとゾンビ達の腹部にお互いの槍を食らわせる羽目になった。

テルは真下に体を小さく屈ませていたのだ。　槍が通過した瞬間を狙い、素早く前方へ転がり込むついでに間を挟むゾンビの脚を叩き折った。

だが次の瞬間、足場に数発の矢が突き刺さる。

「チッ……」

すかさず第2射。甲高い弦の弾く音とともにまた数発。

「遠距離は相変わらず嫌いだぜ……」

二発ほどパイプで弾き、怪訝な顔を浮かべ目に入ったのは倒れているゾンビ。

「ソレ借りるぞっと」

ゾンビの輪から抜け出したテルは倒れているゾンビの槍を拾いあげた。

目指すは弓を放つその集団。

「受け取りやがれェェェェェッッ！！」

ブゥンッ！　と腕を振り抜いた瞬間、風を切るように槍は飛んだ。

それは避ける事は不可能なほど……

グサッ！

「オオォ……」

槍は見事に集団の内、二体を貫いて見せた。

だが残りの弓兵がすかさず構える。しかし……

「遅い……」

竹刀を構えた唯子が一気に距離を詰める。

バシッという甲高い音が響き渡ったその余韻に浸かるまでもなく、ゾンビ達は崩れ落ちた。

「君はなかなかやるようだな……」
唯子が軽く笑いながらテルと合流する。
「アンタもやるじゃねぇか……」
その言葉に二人はニヤリと笑う。　お互いを讃え合う、などではなく、同じ剣の道に通ずる者としてだ。
「もう敵も居なくなったな……」
どこからか千里が現れ、辺りを見渡す。　先ほどまでいた弓兵で最後だったようだ。
しかし……
ボゴッ！
「む……」
唯子が目を細める。　またしても、ゾンビ達は地中から現れてきた。
「さっきより数が多いぜ……」
「倍ぐらい、いや、それ以上だな……」

口に指を当て、考える仕草をする唯子。

「フン！　貴様らはそこで見ているがいい！　キングの真の力と言う物をッッ！！」

千里は後先考えず、ゾンビの大軍に勝手に突っ込んでいく。

「粉砕・玉砕・大喝采ィィィ！……ヌオォォォ！！」

見事にその波に飲まれた。

「バカだ……」

額に手を当てる唯子は仕方ないと言った感じで何かを取り出した。

「よし、爆破しよう」

「ちょっと待て！」

テルがすかさずストップ。　唯子が取り出したのは箱。　中には大量の筒状の物体がある。

ダイナマイトだ。

「なんで持ってるんだよ！！」

「なに。　そこにあったから拾ったまでだ……」

「なんで地下迷宮にあんだよダイナマイトが！」

物凄い見幕で突っ込んでいるがその間にもゾンビ達は増え続けていく。

「キリがねぇな……」

テルが舌打ちの後、吐き捨てるように呟いた。

「だから構ってる暇はない。　君は早く行った方がいいぞ……」

「ヒナギクと合流しねぇのか？」

「……」

その言葉に何故か黙り込んでしまう唯子。

「後からでも追いつけるさ……」

そう呟く。

「一ついいか……」

「なんだ？これからよもや私が、自爆特攻でも仕掛け、あたかも果敢に戦った戦士になろうとしている手前に」

テルは頭を掻きながら一つ聞いた。

「……アンタ、ヒナギクと何かあったか？」

「……」

最近、会ってみて分かったが正宗の会話からなにかとヒナギクは唯子に遠慮がちだ。先輩としてだけではない何かがある。

そして黙り込んだと言う事は何かがあったと言うことだ。

「彼女と私では……器が違いすぎる」

「……？」

「今も彼女は戦っているだろう。　自分の中の正義を通し、その力を正しく使っていく……」

楽しそうに語る一方でどこか悲しげな表情の唯子。

「眩しいのだよ。　彼女の色は……私はそんな色合いは持ち合わせていない……灰色だ…」

唯子は竹刀を地面につけて続ける。

「灰色は……どれだけ虚しい色か分かるかテルくん？」

「……」

今度はテルが黙った。　分からないと言ったところか。

「……昔、剣道をやっていた」

「昔……？」

初耳だ。さらに昔という単語がテルのなかで残る。

「君は、私が左利きだと思っているだろう？」

「違うのか？」

テルの言葉に、唯子は首を縦に振った。

「本来、私は右利きなんだよ。　だが右は……」

ヒュンッ！！という風を切り裂く音。唯子は何故か、テルに向けて右手に持ち替えた竹刀を繰り出した。

「うおっ！！　なにしやがる……え？」

驚きの後、テルは間の抜けた声を出した。

恐らく、テルだから反応した。　しかし、利き手の速さは左手から繰り出される一撃より明らかに速かった。

少しでも反応が遅れれば、テルは食らっていたかもしれないだろう。

「……この通りさ」

カシャン。と竹刀が落ちたのと同時に唯子が笑みを浮かべていた。

しかし、それは苦痛の表情から上乗せしたかのような笑み。

額からは汗が出てきている。

「医者の話では……もう昔のように振るえないらしい」

苦痛に耐え、唯子は右手を押さえながら続ける。

「痛みも酷い……まるで焼き鏝を直接手首に当てられたようなものだよ……」

手首をさするがまだ苦痛は解けないらしい。

「何故彼女があんなに私に気を使うか分かるか？」

「知るかよ……」

テルはしかめながら答える。　彼女とはヒナギクの事だ。

「この怪我は、私が彼女と試合をしたときにできたものだ……」

―彼女、奈津美　唯子が語り出すあの日。

それは約一年前、春盛る、桜が舞い散る４月の事。

「剣道部ってここよね……」

渡された一枚のかみ切れ、入部届け。

予め、貰った部活の歓迎。その中でヒナギクは剣道部に足を運んでいた。

「おや、君は？」

「わっ！すいません！！」

突如後ろから声を掛けられ、ヒナギクは驚いてしまった。

「新入生か？」

入学当初、ヒナギクの前に現れた唯子は今より若干、髪が短い。

しかし、凛とした態度は変わらない。　威厳はあった。

取り敢えず、これが二人のファーストコンタクト。

思えばこれが始まりだった。

「……」

剣道部の道場は意外に部員が少なかった。　中では１０人に満たるか満たないかのような感じだ。

床ではヒナギクがちょこんと座っており、見学している。

そして目の前では先ほどの唯子が防具をつけ、男子部員と模擬試合をしていた。

「始めッ！！」

審判の部員がその合図をした瞬間。

パシィッ！

男子部員の竹刀が床を転がる。そして

「勝負ありッ！！」

その声が響いた。

「え……？」

ヒナギクは目を疑う。　一瞬だ。　始まった瞬間に勝負がついている。　まさに電光石火の業。

隣の座っている部員がヒソヒソと会話しているのが聞こえる。

（出た！　奈津美先輩の神速！）

（相変わらず見切れないわ！　二年生で部長をやるだけあるわ）

（これで次の大会、優勝間違いなしだよ！！）

座っている部員からは尊敬を込めた会話が聞こえてくる。

「次！」

唯子は次の相手をする。　全て連戦だ。　そして全て勝つ。　圧倒的な強さで。

「ふむ。　終わろう、みんな」
唯子がそう言うと部員達が整列して、挨拶を挟み、解散していった。
「どうだった？　桂　ヒナギクくん」
「凄いですよ……ってあれ？　なんで私の名前を……」
「うむ。一年の名前は大体ココに入っている」
そう言いながら自身の頭を指した。
「よし、剣道部に入ろう。　君は筋がいい……」
「いや、あの、私まだやってないのに分かるんですか？」
ヒナギクの言葉に唯子は勿論と言った感じで答えた。
「瞳を見ればだいたい分かるんだよ。　君は強くなりそうだ……」
「はぁ……」
理由がよく分からず、ヒナギクはそう言うしかなかった。
しかし、先ほどの試合に釘付けになっていたのは紛れもない事実であり、剣道というものに惹かれていたのもまた事実。
「ふむ。しかし君はなかなか可愛いな……」
「へ？何を……ひゃ！」

唯子はうっとりとした表情を見せてヒナギクの背後から抱きついた。

「ちょ、止めてくださいよ！」

「ふふふ……良いではないか」

「良くないです！」

その後、なんだかんだでヒナギクは学業と部活を両立するために剣道部に入部した。

―彼女の成長は凄かったよ。　まるで剣道をするために生まれてきたのではないかと思ったくらいだ。

「うむ。　やはりヒナギクくんは成長も速いし、スジもいい……」

「まだ唯子さんには勝てないですが……」

「そんな事を言って、数カ月で私に白星をつけさせないようになるとは……」

彼女の成長は数カ月で私の連勝を止めていた。

だがそれでは終わらないと思ったよ。　まだまだ彼女は伸びる。

どこまでも行けるな……とな。

心強い味方だったが、逆に私も新しいライバルが現れたと思って練習に打ち込んだよ。

私は負けず嫌いだからな。

だが、不幸な事にソレが災いしたんだ。

第４１話～馬鹿共、激しく暴れる～（後書き）

気合いいれた結果、そうでもなかったのではないかと思ってしまいました。　やっぱり、頭のイメージを文字で表すのは簡単な事ではありませんね。

次は唯子さんの過去編。　ちゃんと次の話だけで終わらせるつもりです。

考えてみれば、この小説で過去編やるのは2人目ですね。　前はシュトロハイムとかやってましたし……覚えてない人は特別編を読みましょう。

第４２話～剣道を止めた戦士の話～（前書き）

今回は唯子さん一色……という訳にはいきません。　テンポが速いかもしれませんがそのまま本編を進めます。

第４２話～剣道を止めた戦士の話～

「そこまでッ！」

道場内に、試合中止を促す声が響き渡る。

交えていた２人は竹刀を下ろし、互いに礼をする。

「また引き分けだな……」

「そうですね……」

お互いに防具を外す。　物凄い汗の量だ。

外した瞬間、湯気が出来るほどである。

「むぅ、私の速さに追い付くの構わないがここ数カ月、私は君に勝つ事すら出来ていない……」

「引き分けばかりですから……」

汗を拭った唯子は不満げに呟く。　ここ数カ月というもの、ヒナギクと唯子の試合はヒナギクが言った通り引き分けだけだ。

最初こそ唯子が勝ちを納めていたものの、ヒナギクがメキメキと力をつけ、男子顔負けの実力を身に付けた。

「だが私もそろそろ勝ちたい……という訳で、負けてくれないかヒナギクくん」

「嫌ですよ。　そんな八百長みたいなこと」

その一言に一蹴された唯子は「冗談だ」と笑いながら返した。

そして一瞬、唯子が右手首をさする。ヒナギクが不思議に思ったか尋ねた。

「どうしたんですか唯子さん？」

「いや、大会もあるからな……今日はこのぐらいにしておこう」

まるで気にしなかったように、唯子はタオルで汗をふく。

その日の練習はそれで終わった。

―練習後。

（何だったださっきの違和感は……）

帰り道、自然と右手首に目がいく。　練習中、ちょっとだけだが何かチクリとした。

それは痛みとも言えない微々たるものだったが。

（……ラーメンでも食べるかな）
あまり気にせず、そこにあったラーメン屋に入っていく唯子だった。

―唯子宅。
「ふんっ！はっ！」
自宅の庭で一人竹刀を振るう唯子。
ただひたすらに、見えない敵を浮かべて自分の型を暗闇に向けて繰り出す。

（見えない敵と言っても、明確な敵はいる……）
それは最近の新入生であるヒナギクだ。
体に染み込ませるように鍛錬を重ねる。
その鍛錬はどれほどの物だったかのか？
あの数ヶ月では計り知れない。
ライバルとでも言っていいが、相手は年下。
仮に部長である唯子がそれを見て、焦らない筈はない。

だが顔には出さないようにはしていた。
この力の拮抗を崩すにはこちらの鍛錬を増やすしかない。
だから唯子は今までの倍の時間、竹刀を振るう時間が増えた。
全てはヒナギクに勝つため。

―翌日。

白皇の二年の教室で、唯子は一人自分の机で本を読む事に没頭する。

「唯子さん」

「ん？なんだ書記くんか」

灰色のポニーテールの少女が用紙一枚を持ってやって来た。

「何読んでるんです？」

「剣豪、宮本武蔵の本だ」

「変わったのを読んでるんですね……」

「何を言う、剣道を志すなら誰でも一度は彼を知りたいと思うだろう」

「いや～、剣道好きでもそんな活字だらけの分厚い本を読む人はそうそう居ないかと……」

「ふむ。それより、私に何か用か？」

「ああ、そうでした」

書記はそう言って一枚の用紙を差し出す。

「委員会の要項ですよ」

「承知……ッ」

用紙を右手で握った瞬間、唯子の右手首に痛みが走った。

昨日より若干だが強い。

（……むぅ、アイシングはしたんだがな）

ここで一抹の不安が生まれた。

そして不安は確実な物となっていく。

「やぁッ！」

ヒナギクの突きが唯子の胴目掛け繰り出されるが、唯子は竹刀で横

に弾く。

バシッ！

「……ッッ」

右手首が痛んだ。　思わず、顔を苦痛に歪める。

防具越しには余り見えないのが救いだ。

今、弱みを見せてはいけない。

（私は剣道部の……なんだ…）

部長だろ。　と自分自身に言い聞かせた。

繰り出されるヒナギクの一撃を竹刀で受けながら防ぐ。

今は部長という理由が彼女を突き動かしていた。

「そこまで！」

結局、今回は唯子が攻めに転じる事はなかった。

「……」

唯子は防具を外す。　歪んだ顔はない。
しかし、今までにない激痛があった。

だが弱みを見せる事はなかっただろう。

しかし、

（唯子さん、今日は攻め切れてなかったな……）

（ああ。　桂さんに防戦一方だった）

（桂さんココ最近実力つけてきたからな……唯子さんを抜く日も遠くはないぞ）

ヒソヒソ話が聞こえた。　傍観者達は私が弱くなっているという事実だけが目に映っていたのだ。

それは歯がゆいものだった。

「唯子さん、大丈夫ですか？　汗凄いですよ？」

「汗が多いのはいつもの事だよ」

確かにいつもの事だが、苦痛に伴った汗もある。

（弱くなったな……私も）

虚勢なんて張る人間ではない。

出来ることは大抵やって見せた。

そういう人間だったから、自分は。

怪我は酷くなる一方で、唯子は自宅の鍛錬を止めなかった。

鞭に鞭を打つ。

今止めたら、自分は死んでしまうのではないか……

今は負ける事が怖い。

失うことも……

そして事件は起こる。

それはヒナギクとの模擬試合の時だ。

その日は三本勝負であり、その日の勝負で団体戦の大将を決める物だった。

俄然気合いが倍入った。

試合は始まり、激痛を伴ってでの勝負。

「小手ッ」

「ッッ！！」

開始直後、ヒナギクの小手に唯子の素早い竹刀の技。

見事な小手である。

その一発で頭が冷えたか、ヒナギクも二本目から凄まじい攻めを見せる。

そして……

「小手ッ」

「ぐっ……！」

ドクンッ―。

心臓が跳ね上がるかのような激痛が右手首を駆ける。ヒナギクのお返しとも言える小手。

今の唯子の右手首は焼けるように熱い。

激痛が支配している。

その右手首に小手だ。　悪意は全く感じられないが、やり方としては頂けなかった。

「やるな……」

だが唯子は平然を装わなければいけない。

ズキズキと右手首が痛む。　意識が朦朧としてきた。

ヒナギクが三人になる。　周りが白く、ぽーっと溶けていた。

「始めッ」

最後の勝負……だが、唯子は完全に上の空だった。

「……」

景色が、視界が定まらない。　それが唯子を動かさかった。

それを好機に、ヒナギクが踏み込んでくる。

唯子は漸く視界が定まったか、目の前には今にも面をねらうヒナギクがいた。

（私は負けたくない……）

意識がはっきりした時点で彼女の覚悟は決まっていた。

（ここで負けたら……何も、何も……）

振りかざされた竹刀を、先に弾く。

「え……」

振り下ろす前に弾かれた為、ヒナギクが一瞬仰け反った。

これだ。この瞬間だ。

痛みなど忘れて、一気に踏み込む。

（せめて……これだけは！！）

願いも加えた一撃。　何を願ったのか？　失う事を拒んだか、勝利をか？　または別の何かか？

通じたのか、

パシンという音が道場内に響き渡る。

見事に唯子の面が決まったのだ。

（勝った……）

漸く手に入れた勝利。　掴んだ大将の座。

周りは歓声に満ちていた。　唯子完全復活を祝うもの、大会の予想など。

弱いというイメージを無くさせるように……

「唯子さん…完敗です」

防具を脱いだヒナギクが寄ってくる。　負けはしたがとても清々しい顔だ。

「私も負けませんよ。　また強くなりますから」

「うむ。　では楽しみ…に？」

「……？」

その時、痛みが全身を駆け巡った。　痛いの比ではない。　雷くらったかのような……

ドサッ。

「唯子さん！？」

倒れた唯子を前にヒナギクが悲鳴を上げる。

（……私は、どこへ行くんだ？）

暗闇の世界は光をささないのだ。生き甲斐なんて見付けれるだろうか。

夢であってほしい。

その瞬間、唯子の意識は完全に閉ざされた。

○

「私の思った通り、医者は私の右手首は手遅れと申告した」
そして現在に至る。
「明らかな私の自業自得だ。　管理の悪さだ……」

「だが彼女はそれを自分のせいだと思ってる。　説明はしたんだが」
ヒナギクは責任感が人の倍強い。　それがあの関係を作り出してしまったのだろう。
「もう剣を握れないのなら、居る必要はないだろう？　だから……」
「退部した……」
テルが答えるように言った。
「結局、私が最初から我欲だっただけだ。　いざ自分の身が危うくなると、その身を守ろうとして、周りが見えなくなる……」

そう言うと、唯子は竹刀を拾い上げ、地面に刺した。

「つまらん話をしたな」

「お前の人生にどうこう言うつもりはないが……一つだけ言わせてくれ」

テルが口を開いた。

「世の中には似たような奴らがたくさんいる」

頭を掻くとテルは鉄パイプを肩に担いだ。

「諦めるなよ。必ず追ってこい……」

そう言い残すとテルは走り出した。

「不思議な少年だな……」

走りながら目に入るのはテルの背中。

彼は何を背負っているか、今は誰も知らない。

当の本人もあまり知らない訳だが……

「さて……」

唯子はスッとダイナマイトの導火線に火を点けようとライターを取り出す。

だが……

ジュッ！ジュッ！

虚しく火打ちは小さな火花を作り出すだけで点火に至らない。

ジュッ！ジュッ！

「……」

完璧な燃料切れ。　ライターは　最初から使い物にはならなかったのだ。

「「「オオォ……」」」

目の前にはゾンビの大軍が迫っている。

「……」

唯子はポイッとライターと箱を投げ捨てる。

「これは逃げるのではない……」

そのまま後ろを向き

「敵に背を向け、全速力で走り出すッ！！」

世間一般ではそれを『逃げる』という。

「お前ェェェッッ！！何格好良く決めようとしてたのにすぐ戻って来てんだァァァ！！」

「フハハハハ！　まぁ問題ない問題ない」

唯子はあの場で一分と時間を稼げず、テルと共に併走していた。

「追い付いたぞ」

「こんな形で追い付いて欲しくはなかったよ！」

愚痴りながら2人は走る。　幸いにもゾンビ達はテル達よりペースは遅く、このままなら振り切れそうだ。

「では、改めてハヤテくん達の救出に向かう。　さきほどの2人は遠くに行ってはいないはずだ」

○

「ハヤテ！大丈夫か？」

「ええ…でも気を付けて……これ、なんか毒が塗ってあるみたいで…」

「毒！？」

ゾンビ達を振り切り、一先ず安全な場所に身を隠したナギ達だが、ハヤテは先ほどくらった矢に毒が塗ってあると言う。

「あ、でも全然平気ですよ。　あれ大丈夫ですかお嬢さま、なんか固くなりましたね……」

ハヤテは大丈夫そうにナギに触れるがハヤテが実際に触れているのは狸地蔵だ。

はっきり言うとヤバい。

（いかんハヤテがなんか壊れてる！）

「セ〇セタの花を！！　不治の病も一瞬で治るあの花を探さないと」

「落ち着け！！　ここはイー〇じゃない！」

ナギが慌てるがそれをワタルが落ち着かせた。

「そうだ。　まずは落ち着きたまえ」

「え？」

不意に声が聞こえ、その人物は現れた。

その人物は額に傷があり、首からは十字架を下げ、神父が着そうな服に身を包んでいた。

「お前は……？」

「この教会の神父、リィン・レジオスターです」

そのリィンという若い男は、基調ある言葉で話す。

「呼びにくいなら秋葉のロード・ブリティッシュとでも呼んでくれ」

（（絶対嫌だ！！））

ナギとワタルも御免被るという表情だ。

リィンは更に続ける。

「その毒は弱いがあまり動かさない方がいい。　一歩動けばＨＰは一つずつ減っていく」

「ド〇クエかよ」

「セ〇セタの花は迷宮の一番奥だ」

「あるのかよ」

もはや驚く事をしないワタル。

「なんにしても、私が仕掛けた毒で少年が死ぬのは忍びないので……急いで取って来た方がいい…」

ガツンッッ！

言い終わると同時にナギのパンチがリィンの顔に炸裂した。

「ああ、そうさせてもらう。　責任持ってお前はハヤテを看病してろ！！　ハヤテに何かあったら殺すぞ！！」

「ひ…引き受けた……」

わなわな震わしていた拳を解き、ナギは先に進もうとした。

「だ！！ダメですよお嬢さま！！　お嬢さまだけをそんな危険な目に遭わすわけには！！」

当然、ハヤテは主人の無謀とも呼べる行動を黙って見過ごせない。

「心配するなハヤテ。　主には、仕えてくれる物を護る義務がある。
その義務を果たさなくては……」

「ですがお嬢さま……」

「いや、それ狸地蔵だから……こっちだっつーの」

相変わらずハヤテは幻覚を見る始末。

「とにかく急ぐぞワタル！！　解毒剤をとりにいくのだ！！」

「おお！！」

ナギとワタルがハヤテの解毒剤を取るために更に奥へ進んでいく。

「お、お嬢さま……くっ、くそ……」

ハヤテも慌てて追うとするが体の毒のせいで上手く動けない。

「あまり無理はしないほうがいい。　その毒は一応猛毒だ……私も一度食らってね。君のように助けてくれる人が近くに居なくて困り果てたよ」

「え？でも……」

リィンの話に一つだけ疑問が浮かんだハヤテ。

「助けてくれる人がいないのに…どうやって解毒剤を？」

「ああ、だから……」

リィンは岩場にもたれかかっている何かに指を示した。

「私はこの通り死んだ」

「ええ！？　死んだの！？」

指差したリィンだった骸骨は、見事に頭に矢が突き刺さっている。

（これって即死なんじゃ……）

頭部に矢が刺されば毒の効果も関係無いのではないかと思ったハヤテであった。

「だがそれ以来この教会には悪霊が住み着くようになってね……」

「いやいや！！　悪霊はあなたが悪霊なんじゃないですか！？」

「違う、悪霊は……あいつ等さ」

更に神父はある方向を指差して言う。

そこにはゾンビの大軍と、水木し〇るが描いたような百鬼夜行が……

「正直まずいが……逃げられそうか？」

「ぐ！！そ……そんな！！」

リィンの提案に顔を苦くするハヤテ。

まだ体の毒がハヤテの自由を奪っている。　動けそうにない。

「でも、お嬢さまの所にも悪霊が！？」

「いや、悪霊はあいつ等だけだが……」

ハヤテの問いにリィンが続けて答える。

「迷宮の奥には私の配備した全長３メートルのＡ〇ＢＯ型ロボットが……」

「先に言えぇ――！！」

絶叫するハヤテ。リィンは平然と続ける。

「というか来たぞ」

「ひぃ！！」

口論を展開している間にゾンビと妖怪の大軍が押し迫ってきていた。

○

「わあああああ！！」

一方ナギ達。　ハヤテの解毒剤を求めて迷宮奥へ来ていたのだ。

最初こそ順調だったものの、リィンが言っていたように妨害ロボットに追われていた。

「ＳＯＮＹの技術は世界一ィィィィ！！」

「うおおおっ！！」

ロボットの迫る拳を寸前で回避するナギ。

しかし、外れた拳は地面をえぐり、轟音を響かせた。

人間が食らっては一溜まりもない。

「なんなのだアイツは！？」

「巨像じゃねーのか巨像！！」

「あんな神聖な雰囲気のない巨像があるかァァァッ！！」

ガツッ。

「うわっ！」

「ナギ！！」

話をしながら走っていた為か、ナギは石に躓いて転んでしまう。

「そこに痺れる憧れるぅ！！！」

そこへロボットの容赦ない一撃。

無機質な機械の腕が振り上げられ、ナギに振り下ろされる。

「ナギ逃げろ――ッッ！！」

ワタルが叫ぶが、ナギは完全に恐怖で動けないでいた。

「ひっ！！」

（ハヤテ！！）

（お嬢さま！！）

場所は離れていても危険な場面に変わりはない。

お互いが名前を心の中で叫んだ。

そして次の瞬間。

ナギに拳はいつまで経ってもやって来なかった。変わりに……

ガシャンッ！！

無機質なロボットの腕がキレイに切断され、ガラクタ同然に地面を転がる。

その人物はナギ達もよく知る人物だった。

○

「オオォ……！！」

ハヤテ達に遅いかかった悪霊達はハヤテ達に襲いかかる前に極太の紫の光に包まれた。

光が無くなるとそこには元から何もなかったように悪霊達は消滅していた。

「あなたは……？」

ハヤテが尋ねた人物は和服姿に札を構える。

そして言うのだ。

「通りすがりの……」

ハヤテの場には伊澄が。

「正義の味方♪」

ナギ達の場にはヒナギクが居た。

戦いは、ここから更に激化する。

○

「あ～、お宝ないかな～」

場所は変わり、迷宮のどこか。　お忘れかと思うが一応メンバーの桂　雪路。

お宝求めて、メンバー達など目も暮れず一人単独行動。

まぁ、メンバー達もいつの間にか居なくなっているという認識しかない。

一応、彼女もヒナギクの姉。　そのスペックもまたヒナギク譲りなのだ。

まぁ結果的にヒナギクが圧勝するのだが。

「ほんとこんな所にお宝なんてあるのかしらね？　なんもなかったら私これからチーカマだけで生活しないといけないわ……」

近場にあった石を蹴る。　可哀想な石はサッカー選手も顔負けのスピードで宙を駆ける。

―カツン。

それは何かに当たった。

「ん？」

そしてその瞬間、眩い緑の光が雪路を包み込んだ。

「オオオオッッ！？」

眩い光の中で雪路が見たもの、それは巨大な機械の顔だった。

第４２話～剣道を止めた戦士の話～（後書き）

唯子さんの過去が明らかになりました。　しかし、まだ物足りなさを感じている人もいるのではないでしょうか。

唯子さんは何かと謎が多い人物です。　これからは後々の謎にも注目してほしいと思います。

最後の雪路が見た物、はい、完全にオリジナルです。

もはやクエストなのかよとツッコミを入れたいですね。　途中から悪霊とゾンビ同時にきてるし、シスターが居ないし……

でも最後まで頑張ります。

一つの野望があります。文才が欲しい……

第４３話～昔はロボットに乗る事を夢見た自分がいる～（前書き）

今回はもう凄いアップテンポでいきます。

少しギャグが混ざっていて、それと分かりにくいネタがあるかも知れませんがご了承ください。

第４３話～昔はロボットに乗る事を夢見た自分がいる～

「たぁ！」

ヒナギクが正宗を構え、腕を斬られたじろいでいるロボットを頭から一刀両断。

ロボットはパチパチと電気を放ちながら崩れ落ちた。

「ふぅ。　二人ともケガはない？」

崩れた拍子に飛んできた小さな破片を弾きながらヒナギクが近寄る。

「ヒナギク…お前どうしてここに？　その持ってるものは一体？」

ナギはヒナギクの手にある正宗に視線を移す。

「ああ、これね～」

ヒナギクは正宗を伊澄から渡された。　しかしこれはナギ達には内緒である。

少しだけ考え、ヒナギクは言った。

「天使からの贈り物かしら？」

―あげてませんよ？あげてませんよ？あと天使ではないですし……

ここには居ない伊澄がオロオロしている姿が浮かんだ。

「ところであなた達…こんな所で何してるの？」

話を元に戻し、ヒナギクがナギ達に聞く。

するとナギは慌てて自分の役割を思い出し、

「ハヤテの…！　ハヤテの解毒剤を取りに行かなきゃ…！！」

更に奥へと走り出した。

○

「これでまた少しは動ける筈です。　でも毒が消えたわけではないので、無理はいけませんよ」

青色の光が伊澄がかざした手からハヤテを包むように溢れる。

光が無くなるとハヤテの体が立ち上がった。

「あ…！！　ありがとうございます！！」

立ち上がったハヤテは今までのようなつらい表情はない。　体は先ほどより動き、体の各部位に力が行き渡る。

「でも伊澄さん…その力は？」

「え！？　あ！？　こ…これはその…」

やはりと思っていたが実際聞かれると、伊澄は慌ててしまう。

取り敢えず両手を広げて言う。

「ハ…ハンドソープです……」

（ハンドパワーって言いたいんだろうな……）

なんとか伊澄の意図を察知したハヤテ。　伊澄は続ける。

「でもナギには内緒にしておいて下さい。　ナギは私がこういう力を使える事はしりませんから…その……」

そう言ってまた両手を広げる。

「ハンドソープを……」

（絶対ハンドパワーって言いたいんだろうな……）

伊澄の姿に少し苦笑いのハヤテ。

「しかし少年、気を抜いてはいかんぞ」

後ろでリィンが話掛ける。

「悪霊はまだたくさん居る……」

「まぁ、あなたもですけどね」

真剣な顔のリィンにハヤテは真顔でツッコンだ。

「あの…悪霊退治なら残って私がやりますから……ハヤテ様はナギ達を…」

伊澄はいつもの表情で言うがハヤテは驚きの表情だ。

「でも伊澄さん……！！」

「私なら平気です」

伊澄はそう言うとクルッと背を向け、袖で口元を隠す。

「ハヤテ様…私…ナギやワタル君の言うマンガやアニメはよく分からないのですが……変身ヒーローだけは好きなんですよ？」

「へ？」

伊澄の口からはあまり聞き慣れない単語にハヤテはキョトンとした。

「ヒロインがピンチになったら現れて…必ずその子を助けてくれる……そんなヒーローが好きなんです…」

伊澄はハヤテに見えない小さく微笑むと、ハヤテと向かい合って言った。

「ハヤテ様はナギのヒーローだから…ナギの所へ行って下さい……」

「伊澄さん」

「それにこちらの方が邪魔で大きな力が使えません」

伊澄が札を翳した瞬間、近くにいたリィンの姿が霧のように消えかかっていく。

「ああ……あれが三途の河か～」

消し飛ばされそうなリィンの目には渡ってはいけない河が見えるらしい。

「分かりました。　では伊澄さんも気をつけて……」

そう言うとハヤテはリィンと共に去って行った。

（……）

走り去るハヤテの背を伊澄は目で追っていた。

（……）

本当は初めて会った時…ハヤテ様なら私のヒーローになってくれるかもって思ったんですが……）

あの日を思い出す伊澄。　その背後に、身長2メートルぐらいの鬼が二体現れた。

「ガアアアッッ！！」

（どうやらヒロインは私ではなかったようですから……）

いつしかそう思ったその幻想はここで終わる。　仕方がない、運がなかったと諦めるのだ。

いつしか現れるだろうか。

「さて…早めに終わらせましょう……」

手慣れた動作で札を構えた伊澄。　しかし次の瞬間。

ドゴンッ！

まるで鈍器に殴られたような音が響く。

慌てて振り返ると二体の鬼が倒れていたのだ。

「ハッハッハッ。　どうやら間に合ったようだが、ハヤテくんには先に行かれてしまったようだな……」

笑いながら竹刀を肩に担いだ唯子が鬼の上に立っている。

「アイツもタイミング悪いな……それより伊澄、大丈夫か？」

鉄パイプを持つテルが倒れた鬼から降りる。

「追いついてやったぜ……ちゃんとよ」

「はい……」

この人は約束を守ってくれた人物。

「ここからは危険だ。　これからは俺も側にいてやる……」

「え？　あ、あの？」

その言葉をテルがどういう意味で言ったのか、少なくとも伊澄は履き違えている。
顔は赤くなり、あたふたする。
そんな時ふと思ったのだ。
（もしかしたら……ヒーローは……）
自分自身が思い描くヒーロー。　実はすぐ近くにいるのかも知れない。
この人だろうか？と伊澄は思った。

「むむ。　そんな空気をぶち壊してしまって悪いがテルくん……」
「あん？なんだよ……」
腕を組んだ唯子が割って入ってくる。
「ふむ。先ほどのゾンビ達がやって来たぞ」
「マジで？」
「マジだ」

そう見据える先ほどテル達がやって来た道からゾンビ達がわらわらと溢れてきた。

何故か某軍事国家のような後進をしながら。

「なんでゾンビが後進してんだよ」

「結束力を高める為だろう？　集団の中で独断行動は危険だからな」

「なんでそんなシ〇ミド的な事を……アレ？」

テルがひとつ気付く。　後進の横で二体のゾンビが会話をしていた。

『隊長、やはりこれ以上戦いを続けるのは……』

『サムソン一等兵、甘い事を言うなれば貴様には死が待っている』

「いや、死んでるだろ」

「つーかゾンビが喋っている所はスルーか？」

唯子とテルがツッコンでいく中で会話は続けられる。

『隊長、家族が心配ではないんですか？　私には娘が居ます！　もうすぐ誕生日、隊長にも子供が……』

『居らんな』

『隊長……』

『君はソマリアの出だったか……』

隊長の言葉にサムソンは黙って頷く。

『私は若いときに息子を亡くしてね……可愛い元気な子だった』

懐かしむような目で語る隊長は心なしか気を張った表情も緩んでいた。

『名前は……サムソン』

『え……』

『思えば些細なきっかけがあの悲劇を生み出したかも知れない。

ああそう言えばあの日は……』

目に涙を浮かべ……いや、骨だけだからイメージで浮かべる隊長。

『トマトケチャップが……』

『完熟トマト使用ですか？』

『ああ、その日トマトケチャップが……』

ゴオオオオ！！

隊長がその話を続ける前に、隊長、集団諸共が極太の光に包まれた。

勿論、その元は伊澄。

放たれ光が消え去ったあとは何も残らない。　あたかもそこには誰も居なかったように……

「って、ちょっと待てェェェェッッ！！」

テルの怒号が飛ぶ。

「なんだよ！？　最終的にはトマトケチャップがどうしたんだよ！？　息子どうしたんだよ！？　トマトケチャップでテロでどう繋がるんだよ！？」

「まぁこれ以上続けるのも何だったので……」

札をしまった伊澄が静かに呟く。　結果的には敵を全員殲滅できたというのものだ。

「結果おーらいです」

「いや良くねーよ伊澄ッ！　ヤベーよ、トマトケチャップが気になって今すぐにでもトマトケチャップを確認してェッ！！」

「意味がわからん」

唯子が自然にツッコンだ。

「どうすんだよォォォ！！　もうトマトケチャップが頭から離れねェよ！！　もう夜寝れねェよッッ！！！」

「くだらないな。　さっさと行こうか伊澄くん」

「はぁ……」

伊澄と唯子がテルを無視して歩き出した。

「いや待てって！　誰かァッ！　あの後の結末を教えてくれェェェッ！！」

ダンジョン内にテルの叫びが木霊したのだった。

○

～ダンジョン奥深く～

「へぇ…執事とらのあなねぇ…」

ナギ達と共にダンジョン奥深くにやって来たヒナギク。

辺りをナギが解毒剤を隈無く探している。

「あのマラソン大会から随分と深刻な状況になったのね……」

「ああ」

ナギの話はヒナギクは元々テル達から聞いていた事もあったが、改めて聞くとハヤテがかなり深刻な状況にいることが分かった。

「でも今はそんな事はどうでもいいんだ！！　ハヤテが毒にやられて…！！　一刻も早く解毒剤を手に入れないと…」

ナギは崩れた建物や柱の影などにも目を向ける。

「ヒナギクも一緒に探してくれ！早く見つけないとハヤテが……」

ヒナギクも頷くがここで『毒ってなにかしら？』という疑問が頭に浮かんだ。

「おーい見つけたぞ―」

ワタルが目当ての物を見つけたのか、ナギが急いでその場へ。

「見つけたんだけど……」

「けど？

ナギは怪訝そうな顔をしているワタルを見て顔をしかめる。

ワタルが見つけたのはなんも変哲もない岩場に咲いている花だった。
しかし、その近くにある小さなプラカードにはこう書かれていた。

『枯れてると効果ないよ』

「そ…そんな……」

絶望的な状況にガクッと膝をつくナギ。

「枯れてても効くのかな？」

「さぁ私に聞かれても……」

「分からないか、生徒会長でも」

「ちょっと待って、今ググるから」

ワタルやヒナギクがあれこれ考察するなか、ナギが立ち上がる。

「リタイアしよう」

「へ？」

「リタイアしてハヤテを……ハヤテを病院に連れて行く！！」

「え！？　だけど……！！」

ワタルが戸惑いの表情。

執事とらのあな、最終試練執事クエスト。　ここにはルールがある。

リタイア可能、しかし、メダルを持たず外に出ればその時点で執事失格なり。

ナギ達は現時点ではメダルは持ってない。

つまりここでリタイアを選択するという事は、ハヤテの執事復帰を諦めるという事だ。

「リタイアしたらもうあいつはお前の執事に復帰は……」

「いい！！」

ワタルの言葉にナギが声を張り上げる。

「ハヤテが無事なら私はそれでいい……！！」

（……）

「ナギ……」

ワタルもヒナギクも涙目を浮かべているナギの姿にこれ以上は何も言えなかった。

しかしその時だ。

「でも、それでは僕が困ってしまいます」

暗闇から声が聞こえた。

「僕はお嬢さまの側以外に、帰る場所がありませんから……」

「ハヤテ…お前どうしてここに！？　ていうか毒は！？」

ナギはハヤテがここまで立って歩いてきたという事実を疑問に思っていた。

「へ！？あ…いやそれは……！！」

ハヤテはこの質問に決して伊澄の事がバレるような返答をしてはいけない。

「それはその……？」

「？」

ここには居ない伊澄が必死で秘密にして欲しいと慌てる姿が自然と浮かんだ。

「ぐ…偶然薬が落ちていたのでそれを拾って……」

「ええ！？　落ちてた物を拾って食べちゃったのか！？」

ハヤテの発言にナギは苦い顔をする。

「ダメだぞハヤテ、落ちてた物なんか口に入れるなんてテルみたいな事を……人としてプライドに関わる問題だぞ」

「え…？ええ……」

流石にテルはそこまでしないのではないかと思ったハヤテだが。

「おいおい、落ちてたものを拾って食べたのかよ……」

とワタル。

「ああ。　俺に3秒ルールなんていらない。　エラい人にはそれが分からんのですよとパクパクと……」

とリィンがあらぬ事実を言いふらす。

「ハヤテ君、いくらなんでもそれはマズいわよ」

とヒナギク。

一同はドン引きだ。

（ああ…僕の人としての尊厳が失われていく……）

ハヤテはそんな事を思いながらある疑問に気付く。

「ていうか、あれ？　ヒナギクさんがなぜここに？」

「へ！？　いやそれは……」

慌てるヒナギクにハヤテは続ける。

「あ！！　もしかして僕の事、心配して助けに来てくれたとか？　うわーうれしー」

後半の台詞は正宗によりかき消された。

「勘違いしないでくれる？私はただ通りかかっただけ！　私が綾崎くんの心配なんてするわけないでしょ」

鼻先に正宗を構えたままヒナギクが言い放つ。

「あ…はい、スミマセン…本当にスミマセン……」

それを言うや否やそんなの絶対有り得ないといいたげな顔で正宗を下ろす。

「でも無事で良かったですね」

今度はハヤテの背後から声が。

「え？　その声はシスター・フォルテシア？」

後ろに居たのはまさしくシスターフォルテシア、しかしその姿は何か災害に見まわれたかのような姿である。

「なんだか随分とボロボロですね」

「ええ…色々ありまして……」

ふぅと溜め息をつくシスター。　まさかゾンビや悪霊に襲われてたとは言えない。

「ですが後はあの神殿の中にあるメダルを取ってくるだけ。　さぁどうぞ」

シスターが指す先にはもうダー〇の神殿のような建物が。
「最後くらいは主と執事、二人で行くのがいいかと」
「そうだな」
「そうですね。ではお嬢さま、一緒に……」
ハヤテとナギもノリノリで階段を上っていく。
（まぁ…それが最後の罠だけどね……）
それを見て計画通りだとも言える悪の顔を浮かべるシスター。
だがその時である。
「誰だ？」
そう言うのはリィンだ。
「え？」
その言葉に、一同が動きが止まる。　シスターでさえもだ。
「お前は誰だ？　なぜフォルテシアの名を語っている？」

シスターはゆっくり振り返る。　笑顔だ。

「いったい何を……」

「とぼけるな」

リィンが口調を強めた。

「本物のシスター・フォルテシアは６０超えたばあさんだ。　しかもばあさんのクセに趣味がジャ〇ーズの追っかけという年甲斐のないばあさんだ」

その事実に驚きを隠せないハヤテ達。　だがリィンはすかさず続ける。

「しかも最近ではジャ〇ーズだけでは飽きたらず、アトベさまにまで手を出して…テ〇プリミュージカルにまで出掛ける神の使いぶりなんだぞッ！！」

（（（（（そんなプライベートをばらしてやるなよッ！！））））

一同、そんな情報どこから仕入れたと言いたげにリィンにツッコむ。

しかし、シスターは笑みを浮かべる。

「まったく…つまらない言いがかりをつくる人ですねぇ……」

「シスター？」

「そんな言いがかりをつけなければ……」

自身の髪をかきあげて更にクスクスと笑うシスターは懐から何かを取り出した。

「痛い目に遭わずに済んだのに……」

そのボタンを押す。

ドゴッ！！

「「〜〜〜〜ッ！？」」

ハヤテ達は驚愕の表情。なんと機械音と共に地面から犬型ロボットが数体現れたのだ。

「こいつらさっきの……」

「まだいたの？」

ヒナギクが正宗を構える。

「当然だ！！　なぜなら私が教会の寄付の大半をつぎ込んで買ったからな！！　ついでにさっきの5倍強いッ！！」

（……）

「とりあえずあいつをどうにかした方がいいんじゃねーの？」

ワタルが目を細めながら言うが、それでは全く解決に繋がらない。

「まったく…ここまで計画して最後まで実力行使とは……我ながらスマートじゃないですね」

不敵に笑うシスターはゆっくりとロボットの方へ歩く。。

「シスター！？　いったいこれは……？」

「いったいこれはって……」

ハヤテがシスターに聞くがシスターは笑みを崩さず言う。

「私がこの教会の本当のシスターではないって事ですよ。　綾崎ハヤテ君」

その言葉にハヤテは分かったのか手をポンと叩く。

「まさか男で神父（ブラザー）というオチ……」

「違います」

シスターはハヤテの言葉を即否定した。

「この前あなた達が乗った船がテロリストに襲われたでしょ？　あれを手配したのは私ですよ」

（まぁ失敗に終わりましたが）

最後に戦った一人の執事を思いだし、顔を歪める。

「ならいったいあなたの目的は！？」

「金…というのもありますが……」

シスターは突然真剣な顔になった。

「一番の目的は三千院家への……」

その時、地面から巨大な手が現れその手にシスターは飛び乗る。

「復讐だぁッ！！」

ゴゴゴゴゴッ！

と地面を鳴らし、現れたのは巨大なロボット。

今までのより数段デカい。

「え……コレって」

ハヤテ達が視線を向けるロボット。　目を引くのはそのデザインだ。

「ゲッ〇ーロボじゃないか？」

「え、ちょっ！コレマズいですよ！！サ〇ライズさんがブチギレますって！！」

飛び出た2本の角、そして白と赤のボディ、そして顔は獲物を逃さないような鋭い目だ。

「しかもこれアレだろ、初代じゃないぜ！　『真』のヤツだ！！」

「というか、読者が分かりづらいネタを取り入れても仕方ないのでは！？」

何故か一人テンションが上がるワタル。

シスターはその手のひらの上で言い放った。

「まったく甘いですね！！　ワナとも知らずこんな所へノコノコと出てきて！！」

「でも…あなたは執事とらのあなの教官では！？　もしかしてこれも含めて試練ですか！？」

ここまで来てハヤテはまだわかってないのか、シスターはクスリと笑った。

「勉強不足ですよハヤテ君！！　執事とらのあななんて…とうの昔になくなっていますよ！！」

「そんな…なぜ！？」

シスターの言葉にハヤテは驚きの表情だ。

シスターはそんな質問するのかといった表情で言い放った。

「なぜってそりぁ…！！　執事ってあんまいないのに…やっていけるか！！」

（納得の理由だ――！！）

「なんにしても全員まとめてここで……死んでもらうッ！！」

シスターからの死の宣告が主と執事に降りかかる。

これを止める事はできるか。

執事クエスト、終盤戦へ……

「私は既に死んでいるがな」

「威張らないでください神父さん……」

第４３話～昔はロボットに乗る事を夢見た自分がいる～（後書き）

バロックス「質問コーナーですよォ……」

ハヤテ「どうしたんですか！？　もの凄い疲れてますよ？」

バロックス「小説の構成力がないうえに、携帯で投稿するのが大変で……」

ハヤテ「パソコン買えばいいじゃないですか」

バロックス「あるけどネットつないでない……金が無くて」

ナギ「働けェェェッ！！」

バロックス「ぎゃッ！！」

伊澄に質問です。テルは伊澄の中でどんな存在ですか？

バロックス「実際に本人に聞いて見た」

伊澄「え、ええっ、あ、あの……」

咲夜「ほらほら、伊澄さん」

唯子「さて評価を頼むぞ伊澄くん」

ハヤテ「意外に好評だったらどうしましょう？」

ナギ「いや無いだろ。大人になったら酒のみで一年中パチンコやってそうな奴だぞ？」

テル「人をどこかの天然パーマの侍みたいなダメ人間に仕立てあげるなよ！！」

伊澄「テル様は……普段はダメなんです……」

咲夜「はい！　ズバリ答えてくれました！　テルはダメ人間でどうしようも無いと！」

テル「オオォォィ！！　どこまで俺の評価下げれば気が済むんだァァァッ！！」

伊澄「あ、いや…そのぅ……」
（時には私を助けてくれるヒーローのような人って言おうとしたのに……）

ハヤテ「それではコーナーもここら辺で」

咲夜「せやな」

ナギ「アレ？　サクよ、なんでこんな所にいるんだ？」

咲夜「もう居ても立ってもられへんかったんや！！　だから後書きに出てきてやってるねん！！　つーか、早く本編だせぇぇぇ作者ァァッ！！」

バロックス「ではまた次回！！」

咲夜「ゴルアアアア！！」

第４４話～赤いからって通常の三倍は速くなれない～（前書き）

今回もアップテンポでいきます。

分からないネタばかりがでると思いますので、そこは暖かい目で見守ってください。

第４４話～赤いからって通常の三倍は速くなれない～

「さぁ、そろそろ終わりにしましょうか！？」

まるで裏ボスのような台詞を手のひらから言い放つシスター。

地響きと共にゲッ〇ーロボが両腕を掲げる。

「いやぁ、それにしても見事なゲッ〇ーだな……」

腕を組ながら大きく立ち聳えるゲッ〇ーロボに感嘆の意を送るワタル。

「ほんと、どうやったら倒せるのかしらこんなの……」

せめてコンセントとかで動く類の物ならどうにかなると思ったが、見たところそのような物はない。

「さぁ行きますわよ！！」

高らかに腕を掲げたシスターはゲッ〇ーロボの胸のコクピットに入った。

「これであなた達も終わりにしてあげます……ゲッ〇ーウィィィング！！」

ゲッ〇ーの背中から悪魔に似たような翼が生え広がる。

「凄い！　見事に翼の部分も再現されている！！　まるで悪魔のようなアノ顔も！！」

「ワタルくん、どうしてワタルくんだけそんなテンションが高いの？　私分からないんだけど……」

ヒナギクが呆れた感じでワタルを見る。

ゲッターロボは大きく翼をはためかせ……飛んだ。

「さぁ覚悟―」

ハズだった……。

ドゴッ！

しかし、ここは巨大であるロボットが活動するにはデカすぎた。

豆知識だが真ゲッ〇ーロボの全長は５５メートル。　ガンダムの全長の平均が大体２０メートルと考えると二倍以上。

Ｚガンダムシリーズのサイ○ガンダムやデスティニーシリーズのデス○ロイガンダムよりもデカいのだ。

そんな機体が勢いよく飛び上がったらどうか？

ここは地下だ。　ゲッ○ーが飛び回れるスペースはあまり無い。

見事天井に激突した。

『なあぁぁぁぁ！？』

中からシスターの叫び声。　ゲッ○ーロボは地面に落ち、崩れてきた瓦礫に埋まってしまった。

「もしかして三千院家の人達ってマヌケ人に命を狙われたりするんですかね？」

瓦礫の隙間から出ている赤い腕を見てハヤテが呟いた。

『まっっっっだあぁぁぁぁッ！！！』

瓦礫が一気に持ち上がる。　ゲッ○ーロボが再び現れた。

『見せてやるわ本当の力を！！……チェンジ！　ゲッ〇ー2！！』

ガコンッ！！

「うわ！　分離した！！」

とハヤテ。

「スゲー！　イーグル号とライガー号、ジャガー号まで完全に再現されてやがる！」

ゲッ〇ーロボは新たな合体時、三つの機体に分離する。

ガチャン！ガチャン！ガチャン！

三つの機体が合体して現れたのは先ほどよりも細い機体。

しかし目を引くのは先ほどの機体になかった腕についてある巨大なドリル。

『ゲッ〇ーの中では最速のこの機体で今度こそあなた達を！！』

ゲッ〇ー2がドリルを激しく回転させる。

地面から離れ、宙を激しく飛び回るゲッ〇ー2。

「は、速い！」

「目が追い付けないわ！！」

ハヤテとヒナギクは目で追うが最速の機体を捉える事はできない。

『ア～ハッハッハ！！　見えないでしょ見えないでしょう！？　さぁ迷える子羊よォ！　今救いの手を―』

ドゴォ！！

ゲッ〇ー2、壁に激突。

そのまま地面に大の字に倒れ込む。

更には近くにいた犬型ロボットまでも下敷きにしてしまった。

「……」

その光景を目の当たりにしたハヤテが呟いた。

「やっぱり三千院家って……」

「違ーう！！」

言いかけた所でナギが否定した。

「おいそこのお前！！」

「あ…はい！！」

カパッとコクピットが開き、シスターの姿が見える。

「復讐とか言うんだから私の命を狙うには、凄い理由があるんだよな！！　もし無かったらただでは済まさんぞ！！」

額に青筋を浮かべシスターに質問するナギ。

シスターはたじろぎながらも立ち上がる。

「い…言われなくても…！　私の復讐理由は父の――」

「あの…そんな高い所でふんぞり返るとスカートの中が……」

「～～～ッッッ！？」

慌ててスカートを隠すシスター。

「……チッ」

「おい……」

リィンの舌打ちにナギがドスの利かせた声をリィンの後ろで呟く。

「す…座ってれば見えない？」

「はい…じゃ…続きを……」

赤面しながら聞くシスターに苦笑しながらハヤテも頷いた。

○

―私の家は代々シチリアでマフィアを営む家計だった……だが父にマフィアの才能はなく、せいぜいアイスの当たり棒偽造が精一杯の小悪党。

「ほんとに小さいな……」

とナギ。

「黙ってなさい」

シスターは更に続ける。

―そんなある日。　父に暗殺の仕事が入った。

「これが成功すれば父も立派なマフィアだぞ！！」

「わ―、すごいお父さん！！」

―父に与えられた任務はミコノス島で三千院ナギを暗殺する事。
父はゴミ箱に隠れチャンスを待った……しかし

「父は敗れた……三千院家の執事と思われる執事に」

思い出したか目に涙を浮かべるシスター。　ハヤテも険しい表情になる。

「なるほど……その時の恨みというわけですね？」

「違う！！　肝心なのはここから先！！」

「「え？」」

―父はマフィアを辞めてしまい……

「やっぱりマフィアは良くないから父さん日本で板前になるよ」

―そして日本でフグを免許なしで調理……魚に当たって……。

「まさかフグに毒があるとは……」

「父さーん！！」

父は死んだ。

「……」

シスター以外の一同は笑う事すら出来なかった。　別の意味で。

「あの時…敗れつ改心しなければ父は……父は死なずにすんだハズ……」

「は、はぁ……」

「だからッッ！！」

そして瞬間的にシスターの目の色が変わる。

「私は父に誓った！！　絶対に三千院家に復讐すると！！」

いきなり立ち上がったかと思うと、シスターはトンファーを取り出しコクピットから飛び上がった。

「え！？　ちょ…待ってください！！　僕はシスターと戦いたくなんか……！！」

―ガクン。

（え？）

シスターの一撃を避けようとした瞬間、ハヤテは膝に力が入らないのを感じた。

一瞬だけハヤテの動きが止まる。

「スキアリィィィィ！！！」

「がは！！」

ハヤテの頭部にトンファーの一撃が命中。　まともに食らったハヤテは簡単に地を転がり石柱に叩きつけられた。

「ハヤテ！」

ナギが振り返った時には既にシスターが迫って来ている。

「さぁ父の仇！　今こそまとめて――」

振り上げたトンファーを容赦なくハヤテに叩きつけ……られなかった。

「な！！」

「まったく……あまり手を焼かさないでくれる？」

トンファーは木刀により見事防がれていた。

「ヒナギク！」

ナギが鍔迫り合い状態のヒナギクを見る。

「だいたい動きが鈍いわよ綾崎君。　毒でも盛られた？」

「はは…そう言えばまだ消えてませんでした……」

涼しげな顔のヒナギクに対して苦笑しながら返すハヤテ。

シスターは顔をしかめながら聞いた。

「く！！　あなたは？」

「桂ヒナギク。　白皇学院の生徒会長よ」

笑顔で返すヒナギクにシスターの表情が一層怒りを露わにする。

「ふん…学生風情が……」

ギリリ……と腕に力が入る。　そして何かが弾けたかのように

「なめるなァァァッ！！」

ヒナギクの正宗を弾かれた。

直ぐにバックステップで距離をとるヒナギクだがシスターが間髪入れず踏み込んでくる。

「わっ！！」

目先に迫ったトンファーを寸前で避わしすが、真後ろにあった石柱は粉々に吹き飛んだ。

「なによあの腕力！？　人間ができるのあんなこと！？」

粉々になった石柱を見てヒナギクが距離を取った。

「それに……剣を持ってる奴を見ると……無性に腹が立つわ！！」

「し、シスター！　目が……」

ハヤテは息を呑む。　シスターの目の色が妖しい緑色を放っていたのだ。

同時にそれと呼応するかのように倒れていたゲッ〇ーロボが身を起こす。

「なかなかやるじゃない……」

ヒナギクが改めて正宗を構えた瞬間。

「「加勢してやろうかシスター？」」

どこから途もなく声が聞こえた。

「なっ……」

見上げると石柱に見知った人物。

千里と雪路だった。

「千里君！？　お姉ちゃん！？」

「千里などではない。　俺はＭｒ．ハヤトだ」

「お姉ちゃん？　それはこの体の持ち主のようだな……俺はＭｒ．ムサシ」

二人が自身に指を差してヒナギクに言う。

そしてシスターまでもが

「俺はシスターではない……Ｍｒ．リョーマだ」

自身を指して言い放った。

「え！？　なんなの！？一体何が……」

もはや状況が理解できないヒナギク。

シスターが石柱に飛び上がった。　綺麗に飛び乗り、不気味な笑みを浮かべる。

「リョーマ、ゲッ〇ーロボは三人で戦わないとパワーが落ちるぞ、忘れたか？」

千里ならぬハヤトがシスターに言う。

「分かってんだよそんなことはな！」

「まぁまぁ、取り敢えずゲッ〇ーチームまた再結成だ！！」

雪路ならぬベンケイが二人を沈める。

三人がフッと笑い合う。

「行くぞ！！」

三人はゲッ〇ーロボに飛び乗った。

ゲッ〇ーロボは元々三人乗りである。　胸から順にコクピットが開き、シスター、千里、雪路とそれぞれが入った。

「ウオオオッ！！　なんて感動を呼ぶシーンなんだ！！」
ワタルが輝かしい瞳をゲッ〇ーロボに向ける。
「ワタルくん！　そんな事言ってないで早く逃げなさい！！」
ヒナギクが正宗を構えてワタルに叫ぶ。
「神父、シスター達は一体……」
「ああ。どうやらこのダンジョンに潜む悪霊に体を乗っ取られたようだ……」
これまでの状況を考察するハヤテと神父。ハヤテが続ける。
「大丈夫なんですか？」
「ふむ。　これらを除霊できる人間がいれば早い話だが簡単だ」
「いや、著作権とか……」
「目を瞑ろう……」
そっちの心配か。と心の中でツッコンだリィンだった。

『ふむ。久しぶりに暴れてやろう、まずは出始めにこいつ等だ！！』

「え？」

ゲッ〇ーロボの視線がハヤテとリィンに向けられる。

拳を振り上げ……

「アレ？　ヤバくないですか？」

「そうか？私は既に死んでいるから問題ないが……」

「だから威張らないでくださいって！！」

キョトンとするリィンにハヤテがツッコむが、ゲッ〇ーロボは構わず拳を……

一気に振り下ろした。

「なあぁぁぁぁ！！！」

ハヤテが目を瞑る。　しかし、巨大な拳は迫って来なかった。　代わりに……

ドサッ！　とゲッ〇ーロボの腕が砕け落ちる。

「あ……」

ハヤテが、一同が目を見開きその人物を見た。

まさか、来るとは思わなかった。

「たくよォ、相変わらずトラブルに巻き込まれるのが好きみてえだな」

先が曲がった黒の鉄パイプを肩に担いだその男。

「おやおや、ヒナギク君も苦戦のようだな」

竹刀を左手に携えた女性。

「ようやく……追い付いてやったぜ？」

善立　テルと奈津美　唯子、只今推参。

「テルさん、どうしてここに―」

ハヤテが言いかける前に、テルの右手がハヤテの顔面を鷲掴み。

ギリギリ……

「コノヤロウ、お前のせいでな、俺は無駄な体力使うという重労働を強要されているんだぜ……」

「あの…テルさん、痛いです」

「しかもマリアさんだから尚更断れねェッ！　挙げ句の果てにちゃんと仕事しなきゃ戻ってくるなって言われたんだぜ」

（それはいつもの事では……？）

と言いかけたが心に留めておく事にした。

「……しかしまぁ、随分と厄介な事に巻き込まれてんな」

目の前に立つ巨大ロボット、ゲッ〇ーロボを見上げるテル。

「中にシスターと桂先生と千里さんがいるんです！　なんか操られてるとかで……」

「操られてるって……何に？　ゲッ〇ー線に？」

頭にクエスチョンマークを浮かべるテル。

「悪霊に憑かれてるとの事ですが、伊澄さんは居ませんか？」

「うーん、伊澄ならなぁ……」

頭を掻きながら唸るテル。

「迷子ですか……」

「うん……」

二人は同時にうなだれた。

伊澄はどこかでまたオロオロしているに違いない。

「取り敢えず、コイツぶち壊せば止まるんじゃね？」

「ダメですよ！　先生達が傷ついてしまいます！」

「私は馬鹿王子以外無事なら別に構わんが……」

唯子が真顔で言うがとてもじゃないがそんな恐ろしい事は出来ない。

「一体どうしたら……」

「悩む必要はないぞハヤテ」

ハヤテにそう言うのはナギだ。

「お嬢さま？」

「唯子さん、ワタル。　お前らはヒナギク達を連れてさっさと地上に戻れ」

「わかった」

「ちょっと！　何勝手に決めてるのよナギ！」

ワタルは親指を立てて返すがヒナギクはそうはいかない。

「ヒナギク君……」

しかし後ろから唯子が肩を掴んだ。

「ここはあの者達に任せよう。　これは試練だ。ここから先、彼等の運命を決める別れ道の……」

そう言われて、ヒナギクも納得したか、それでも不機嫌な顔でハヤテに言った。

「ハヤテ君……不本意だけど任せるわ…あとお姉ちゃんを……」

「分かってますよヒナギクさん……」

助け出してという言葉を想像したのだが……

「死なない程度にボコボコにしてあげて……」

「え？」

一瞬だけ耳を疑うハヤテ。ヒナギクは続ける。

「人様に迷惑かけるのはいけないことだって何度も言ってるのを今回は実力行使で分からせてあげて」

「イ、イエッサ……」

思わず敬礼したくなるような威圧感だ。

「ふむ。　私からも頼むぞハヤテ君」

今度は唯子が。

「あの馬鹿王子を死なせるぐらいにボコボコにしてくれ……ちゃんと心停止してるかも確認だ」

「唯子さん、めっちゃ怖いんで止めましょう……」

ハヤテは顔を真っ青にして笑っていた。

ヒナギク達は言い終えると急いで走り去って行く。

残ったのはハヤテとナギとテル、リィンだ。

「テル、お前も行け」

「イヤだね、俺はなんと言われようが残る」

ナギがテルに言うがテルは拒否。

「簡単に言うなよな。　俺も一応執事なんだぜ、三千院家のな……」

頭を掻きながら続ける。

「ま、馬鹿な先輩方やら先生らも助けなきゃなんねぇからな」

「勝手にしろ！」

ナギは不機嫌な顔でそっぽを向いた。

「オイオイ、お前みたいな奴が油断して先に捕まったりするんだよ」

仕方ないと言った感じで溜め息をついた。

『ふん、見上げた覚悟と言った所か。　だがこの中には貴様の仲間がいる！　果たして容赦ない攻撃ができるかな？』

ゲッ〇ーロボの言葉にハヤテは顔を曇らせる。

（確かに桂先生は僕達の先生！　攻撃なんて……）

まずハヤテはこれまでの雪路との出来事をリピートする。

不審者に間違われた。
不合格にさせられた。
今もこんな状況。

「……」

一方、テルも同じ事を考えていた。
不審者に間違われた。
木刀でぶん殴られた。
マラソン大会で空気読めない行動された。
コンプレックス（死んだ目）を馬鹿にされた。

「案外できるんじゃね？」

「そうですね」

ハヤテとテルがお互いに相槌を打つ。

「くっ！ならば！」

ゲッ〇ーがその腕を伸ばし、ナギにつかみ上げた。

「コラァ！　離せェッ！！」

「お嬢さま！！」

「オォォイ！　見事予想が的中しちまったじゃねーか！！」

「ハヤテ！バカテル！早く助けろォ！」

ナギはひたすら腕の中でもがく。　しかしロボットの力はやはり桁違いだ。　ピクリとも動かない。

「ふふふ……我らも守るべき者達を守れず朽ち果てていった怨念の塊！　さぁ執事達よ、主を守る為に試練に挑め！！」

ゲッ〇ーロボの肩の小さな穴から一本の鉄の棒が飛び出る。

「ゲッ〇ートマホォォォク！！」

棒を手にした瞬間、棒は突如変形し巨大な斧と化した。

「……さて、どうやら気味悪いゾンビより本番はここからのようだ。
どうするよハヤテ？」

ニヤリと不適な笑みを浮かべ、鉄パイプを構えるテル。

「そんなの決まってます！　お嬢さまを必ず助けます！」

闘志を瞳に宿し、覚束ない足取りで立ち上がるハヤテ。

執事クエスト、最後の闘いの火蓋が今切って落とされる……

第４４話～赤いからって通常の三倍は速くなれない～（後書き）

なぜここまでこのロボットにこだわっていたのか……好きだからというのもありましたが、結局は自分の我を通したかっただけです……そして恐ろしく速い展開で、手抜きと思われないか心配です。

次で執事クエストは最後です。　最後はしっかりしていきたいところです。

文章力が欲しい……では。

第４５話～そして伝説へ？～（前書き）

執事クエスト編、最終回！

第４５話～そして伝説へ？～

執事クエスト最終試練。

ゲッ〇ーロボがナギを手にしている。

迎えるは手負いの執事と未だ力が未知数の執事２人。

「ハヤテ、お前動けるか？」

「体の具合は大分良くなりましたが、完全ではないです……」

ハヤテもまだ体の状態は完全ではない。　テルはそれを聞くと鉄パイプを構えた。

「なら最低限避けることだけ考えろ。　アイツは片腕だけでまともな攻撃なんてできはしない」

確かに、ゲッ〇ーロボは今は片腕だけである。　一本は破壊され、もう片方はナギを掴んでいるため使えないのだ。

『甘いぞ……』

だが、敵もまたテルの予想の範疇を遥かに越えていた。

『フンヌゥゥゥ！！』

バキャン！

「「ウッソーん……」」

目を疑い呟く2人。なんとゲッ〇ーロボの折れた腕から新しい腕が緑色の光ともに生えたのだ。

「ゲッ〇ーなら何でも有りなのか」

悪くなった状況を即座に理解するテル。

ゲッ〇ーロボは片腕だけで地面に突き刺さっていた斧を掴んだ。

『死ねェェェッ！！』

身の丈程の縦に振り下ろす。

「チッ」

「うわ！」

舌打ちと共に、テルがハヤテの襟首を掴んで横に跳ねる。

豪快な音を立てた一撃はいとも簡単に地面を破壊した。

『逃がさァァァン！！』

悪魔のような瞳を光らせ、今度は斧を横に薙ぐ。

「ほっ」

「がふっ」

すかさずテルは斧と地面の数十センチの隙間に滑り込む。

ハヤテは強引に地面に顔をぶつけた形になった。

「ん？　どしたハヤテ。　アホ毛でも刈り取られたか？」

「いや、刈り取られそうになったのは首でした……」

冷や汗をかくハヤテの表情は苦笑いだった。　あと少しタイミングがズレていたら確実にハヤテはくびちょんぱされていただろう。

「ハヤテはもう動けるか？」

「ええ、大体は……」

そう聞いたテルは鉄パイプを構え、ゲッ〇ーロボと対峙する。

「俺がアイツの動き止めっからその間にナギを助けろ」

「ええ！？」

ハヤテは何を言ってるのか、テルの言葉を疑った。

「お前しか居ないんだ」

テルは振り返る事無く続ける。

「アイツはお前を待っている、その役は俺じゃねーんだよ……」

「テルさん……」

「その代わりだ……」

両手で構えていた鉄パイプを肩に担ぎ、一度振り返る。

「ハーゲンダッツ奢れよな」

「ハーゲンダッツですか？」
「そうだ。　バニラもいいがチョコクッキーのほうが俺は気に入ってるからな」
「……分かりました。　絶対に奢ります」
ハヤテは顔を両手で叩き、気合いを入れてゲッ〇ーロボを見た。
『逃げる気力も失せたか……』
ゲッ〇ーが薄い笑い声で2人を見る。
「ああそうだな」
テルはあっさりと肯定した。
「もう逃げる気力はない。　後は立ち向かうだけだぜ」
へっと笑い、テルは足踏みをした。
「ここからは一歩も動かねえ」
首を鳴らし、堂々と構え、見上げる。
―来いよ。

と言わんばかりだ。

『小癪なァァァッ！！』

どうやら一種の挑発だと感じたのだろう。　怒りのオーラを醸し出し、斧を振り下ろした。

『終わりだ……？』

豪快な一撃が響く。　砂塵を上げた先に何か影が。

「人間ナメんなよ鉄クズさんよ……」

斧が震える。　金属同士がせめぎ合うようにガキガキと。

「オラァ！　ハヤテェッ！　早く行けェッ！」

「テルさん！！」

テルの後ろにいたハヤテがテルに近づこうとしたがテルが叫ぶ。

「もう迷うな……とっとと行けぇぇぇ！！」

「ッッッ！！」

その言葉で我に返る。　ハヤテはゲッ〇ーロボに向かって走り出した。

『させん！　ゲッ〇ービィィィム！！』

頭部が光り、弾ける。　その瞬間、緑色の光がハヤテの目の前を駆け抜けた。

その光が通った後は、焼き尽くされたように地面をえぐり出していた。

「ハヤテ！！」

ナギが吹き飛ばされたハヤテに悲鳴を上げた。

『ふふふ……無駄だ。　人間は私に勝てない』

「ググググ……」

テルも踏ん張っているが、足は震えていた。　更に足が沈んでいく。

（一体どうすれば……こんな時、必殺技でもあればいいのに……）

ハヤテは体を起こす。が打開策が見つからない。

―ならばイメージするんだ。

（え？）

―君の心が主を守る力になるから……あとはイメージだけ…

―そのイメージを形にするんだ。　それを実現させる力を君は既に持ってるだろう？

聞き覚えがある声。　リィンの声だ。

「イメージを力に……」

自分の思い描く力。

―守りたいんだ…誰よりも速く…誰よりも速く…

―誰よりも速く、君の元に駆けつけて！

その瞬間、風が舞った。

しかし、それは風なんて優しいものではない。

言いなれば突風。　いやそれも違う。
それは言うなれば文字通り……疾風。

―疾風（はやて）のごとく！

テルの視点からハヤテが消える。　これはゲッ〇ーの方も同じ事だろう。

ハヤテが目に追い付けないスピードでゲッ〇ーロボに突っ込んで行く。

「あ。悪霊発見」

と、ここで伊澄登場。　迷子の果てにようやく辿り着いたようだ。

「では除霊っと……」

目的を見つけるや、伊澄は札をかざす。　一瞬だけ青白く光るとゲッ〇ーロボの内部に変化が起きた。

「あれ？　あたしは何を……」

「いつの間に……」

「ここは……どこだ？」

雪路、ソニア、千里が順に意識を取り戻した。

しかし三人が次に目にしたものは。

ギロッ！！

赤い眼光で三人の眼前に迫るハヤテの姿だった。

「「「……え？」」」

三人は同時に間の抜けた声を出した後、ハヤテが駆け抜ける。　文字通り駆け抜けたのだ。　ロボットの体は有り得ない力で出来た穴がある。

空中のハヤテの腕の中にはナギの姿があった。

ハヤテが地面に着いた瞬間、　ゲッ〇ーロボは一瞬光って爆発した。

「ヨッシャ！！　やったぜハヤテ！！」

テルがハヤテに駆け寄る。　ハヤテはその場で立ち尽くしていた。

「どうした？」

「いや、なんか体中の骨が……」

どうやら先ほどの必殺技のおかげで体中にダメージができたようだ。

「そんな事よりこれで終わったのか？」

ナギが呟いた。　確かに悪霊は退治したハズだ。　テルやハヤテもそう思っていた。

しかし、そう思っていたのはその三人だけである。

「……！！」

伊澄が何か感じ取ったか、険しい目をして辺りを見渡している。

『オオオオッッッ！！』

地の底からの声に一同が反応する。

緑色の光が一本の柱のように伸びたのだ。

「オオオ……」

「ッッ！？」

ハヤテ達は目を疑う。　辺りからゾンビが現れ始めたのだ。

「なんだこいつら……急にわらわらと……」

（テルさま……）

（ん？その声は伊澄か？）

テルの耳に聞き覚えのある声。　以前のように、念で声を届けているのか。

（物凄い妖力です……あの緑色の光は冥界の扉をこじ開けてる可能

性があります）

（なるほど、だから死者が生き返ってたりしてた訳か……）

（全ての原因は……あの光の源……）

テルが光りの柱に目を向けるとその場所には大きな緑色の結晶があった。

「え？　アレってたしかゲッ〇ーの心臓―」

（アレの放つ光りが全ての原因です。　ですが……）

「伊澄？」

途端に伊澄が会話を止める。　テルが不思議に聞いた。

（壊すしか方法がないんです。でも破壊すれば危険な事に……）

どうやらあの心臓とも呼べる結晶は、膨大なエネルギーの塊のようだ。　伊澄は破壊する事により生じる危険を恐れているのだ。

（テルさまも早く逃げてください。後は私が――）

「えっ、テルさん何やってるんですか！？」

途中聞こえたハヤテの声に、伊澄は目を向ける。

大変な事に、テルは伊澄の言葉を無視して、結晶の上によじ登っていた。

「よいしょ……ハヤテ！！」

結晶の上に乗ったテルは腕を回しながらハヤテに言った。

「今からコイツぶっ壊すから！　体低くしてろ！」

『えええ！？』

結晶から声が聞こえる。　どうやら悪霊は完全に成仏してなかったようだ。

『何言ってんのお前？　コレ俺の心臓だよ？　どうなるか知ってる？　俺らの心臓ね、壊すと地球の半分は破壊できるよ？　知らないの？』

「あん？　んなの知ったこっちゃねぇんだよ。　アレな、ちゃんと武蔵がやらないとダメなんだよ」

『いやいやダメだって！　考え直して！　３００円あげるから！』

「だーかーらー、知ったこっちゃねぇんだよ」

テルは高々と鉄パイプを振り上げた。

「俺はな、決めてんだよ。大切なモン護る為ならいくらでも、この命、くれてやるって！！」

一呼吸おいて、テルは叫んだ。

「ゲッ○ー線は！　俺らと共にあるッ！！」

振り下ろした鉄パイプは見事結晶にヒビを入れ、そして……

○

「♪～♪」

同時刻。　西沢　歩は、呑気にパフェを食べながら道を歩いていた。

「あ～このロイヤルプリンセスパフェ最高～♪　朝から並んで買った甲斐があったよ～～」

幸せそうにパフェを頬張る歩はスキップしながら道を行く。

「あ～幸せぇ♪　幸せスパイラルぅ～～♪」

クルクル回りながら空を見上げたその時であった。

ドゴオオオオンッッッ！！！

まさしくそんな感じの爆音が、歩の横で起こった。

先ほど隣にあった教会から巨大な爆発とともに、崩れ去っていく。

歩の横に建っていた。神聖な教会は一瞬にしてジーザスとかした。

「ななな何が起こったのかな！？こんな場所で爆発って…ア――ッッ！？」

歩が叫ぶ。　自分の足元には朝並んで買ったパフェが……

「あ、あたしのロイヤルプリンセスパフェが……」

地面に膝を着き、ｏｒｚ。

第二部初登場の割になかなか酷い扱いである歩だった。

○

「あの～悪霊退治を頼んだのですが……教会ごとなくなるとは……」

「スイマセンスイマセン」

荒れ地となった場所で、伊澄と本当のシスターフォルテシアが伊澄と会話している。

「おいハヤテ、大丈夫か？」

「大丈夫だ。　問題ない……とはいかないようです。　体中の骨が……」

「ま、自爆だし、修行あるのみだな……」

「そのようだな」

直立で体を奮わせているハヤテにナギが溜め息をついている。リィンも一緒だ。

「百万円は！？　私の百万円はどこ！？」

「お姉ちゃん、仕事サボってんだから早く帰るわよ」

血眼の雪路がヒナギクにより引っ張られている。

「あの……そろそろ離れて欲しいんだけど……」

「まだ体調がちょっと……」

何故か岩場により添うワタルとシスター。　このいきさつは後ほどに。

「ゴホッゴホ……はぁ～散々な日だったな」

体の上にのしかかる部品を押しのけるテル。

這い出て来たや直ぐにハヤテ達の元へ。

「おお、テルよ。　普通に無事だったか」

ナギが少し残念そうにするがテルがすぐさまナギの頭にチョップ。

「い、痛いぞ！！」

「この馬鹿やろうめ。少しは感謝したらどうだ……んで？コレは一応クリアした事になるのか？」

「元々仕組まれたものだし大丈夫なんじゃないか？」

「まぁ…それもそうだが……」

テルも少し考えて頷く。

その後、三千院家の救急車でハヤテは運ばれていった。

全身の骨がどうだのと言っていたが、ハヤテは超人的な回復力を持つので深く考えないようにする。

「結局、あんま俺が来なくても良かったんじゃねぇか？」

小さく呟いたテルだったが。

「そんな事はないぞテルくん」

「おおう！？」

後ろにいた唯子に飛び退くテル。

「君が来なければ、あの2人は状況を覆す事は出来なかったと思うぞ。　最後の爆発も恐らく君がやらなければならない事だったんだろ？」

唯子には恐ろしい洞察力があるらしい。推理小説とか読んでそうだ。

「ま、これも未来の一つだ。　これからも君は、君のしたいことだけをすればいい」

凛とした態度で言う唯子。とここで……

「オオオオッ！」

地面から千里が現れた。

「貴様ら！俺を置いて先に進むとはそれでも人間か！！」

「しつこい奴だな……生命力はゴキブリ並だな」

唯子の目が細くなる。

「貴様に褒められても嬉しくないぞ！！」

「別に褒めてなどいない、消えろ、筋肉しか頭にない脳筋ゴキブリデカ男」

「貴様ァッ！今日こそ決着をつけてやるッッ！！」

「望むところだ……」

竹刀を構えて唯子がニヤリと笑う。
また2人は戦い始めた。

久しぶりに見たこの騒がしい風景。これで日常が戻るわけではない。
ハヤテはこれからも狙われ続けるだろう。
その度にハヤテが敵を倒すかもしれない。自分はあまり必要はない
かもしれない……だが。

―君は君がやりたいことだけをすればいい。

「言われなくても……」
頭を掻きながらテルは空を見上げる。
「俺は最初からそういう事しか考えてねーよ」
白い雲を眺めながらテルは言った。
そしてポケットから何かを取り出す。

「これはあっても給料にはなんねーからな……」

手にあるのは一枚のメダル。先ほど拾ったものだ。

「ま、ゲームクリアにはなるだろ一応」

へっと笑うとその小さなメダルを親指で弾き、空に打ち上げた。

第４５話～そして伝説へ？～（後書き）

ハヤテ「はい、お約束通り質問コーナーです」

ナギ「執事クエスト編も無事完結ということであらかじめ寄せられていた質問に答えていくぞ！」

質問・ナギがドラクエで一番はまったどのシリーズ？」

ナギ「私に言わせればどれも名作だが強いて言うならドラクエ？だな」

ハヤテ「理由は？」

ナギ「うむ。　世界観もさることながら、戦闘を盛り上げる為のＢＧＭ、アレは神と言っていいッッ！！」

質問・マリアさんに質問です。ＲＰＧでなりたい職業は？

マリア「ええと……あまり私そういうのは分からないのですが……」

ナギ「たしかにそうだな……よし！！　取り敢えず黒魔法使いとでも……」

マリア「ナギ？　敢えて黒を選んだ理由はなんですか？」

質問・全員に質問です。テルをどう思うか

ハヤテ「うーん」

伊澄「……」

テル「何故こんな微妙な反応なんだ？…俺なんか悪い事したか？」

ハヤテ「これはみんなに一斉に聞いた方がいいですね……せーの！！」

一同「「「「「「グータら執事」」」」」」

テル「ウオオオオッッ！！！」

唯子「ふむ。では質問を返しきった所でお開きだ。また次回……」

テル「さり気なく最後とんなァァァッ！！！」

第４６話～それは誰かの陰謀～（前書き）

では、久しぶりの投稿です！　どうぞ！

第４６話～それは誰かの陰謀～

「ふぃ～」

高そうなソファーにどっかりと腰を掛けるテルは優雅にカップに入っているコーヒーを飲み干した。

「うーん。　やはりここのコーヒーは最高だな。　全部が高級豆で味の種類も沢山ある……」

窓から入ってくる風のせいもあってか、一層コーヒーの風味が増す。

「授業なんて無ければもっと最高だ……」

「な～にナギみたいな事言っているの？」

「お、会長」

ソファーの後ろにはヒナギクが細い眼差しを向けていた事にテルは気付く。

「否定はしない……俺のリラックスタイムはこうやって休み時間にくつろぐ事なんだよ」

「だからってわざわざ生徒会室でくつろがないでくれる？　他にも場所はあるでしょうに……」

確かにヒナギクの言う通りだ。　学院内にはカフェテリアや日向のかかったまさにくつろいだりする場所はいくらでもある。

「理由はなんとなくだ。　ここなら俺のストレス、疲労が抜けると思ったんだよ」

「馬鹿は高いところが好き……と」

「あ？　なんだとテメェ、触りまくって馬鹿移すぞ」

そんな感じのジェスチャーをした瞬間、テルの鼻先に木刀が突きつけられた。

「斬られたい？」

「ハイ、スンマセン」

名刀正宗を構えるヒナギクの目はもはや一人の武士（ものふふ）である。

「つーか、まだ持ってたんだその木刀……」

「なんか気に入られちゃってね……」

この木刀は元々鷺ノ宮家の物なのだが、前回の執事クエストの際に、正宗がヒナギクを偉く気に入ってしまい、持ち主は現在ヒナギクという事になっている。

「鷺ノ宮さんが困ってたけど、仕方ないわね……」

ふぅと溜め息をつくと、ヒナギクの手から正宗が消える。　なんと正宗はヒナギクが呼べば簡単にその場に現れてくれる万能武器なのだ。

「つーかこれ以上お前、そんなに強くなっちゃって、木刀も使い道あるの？」

テルの言う事も一理あり、鉄をも切り裂くこの木刀、前回はロボットを切るのに使っていたが、これから先にそういったのが現れるか甚だ疑問である。

「ん～そうね……宇宙人とか、新しい敵とか来るのかしら？」

「まさか……な」

ヒナギクの言葉に苦笑いのテル。２人の脳内には人の体内から孵化して飛び出る宇宙生命体や、宇宙生命体や人間を狩る狩人が浮かんだ。

「まぁそれはそれとして、そろそろ教室に戻ったら？　昼休みも終わっちゃうわよ？」

ヒナギクがテーブルの上に置いてある時計を指差す。

テルはカップをソーサーに乗せ、ソファーから立ち上がった。

「あーあ、いっそのこと時間なんてスイッチ一つで永遠に止めれればいいのに」

「くだらない妄言を言ってないで早く戻りなさい」

「へーい、生徒会長様は厳しいッスな」

「なんか言った？」

「なーんも……ん？」

テラスから学院を見渡していたテルは奇妙な光景が目に入った。

学院内の廊下にテラスから分かる程の人集りがあったのだ。

「なんだか祭りでもやってるのか会長」

「あぁアレ？　ただの喧嘩よ」

ヒナギクはトントンと書類を整え、さほど問題なさそうに言う。
が、これはテルも驚いていた。

「この白皇で喧嘩ねぇ、こんな頭良い学校でもあるんだな…まぁそれぐらい若さがないと」

名門白皇でも喧嘩などの青春じみた事があることに少しばかり安心したテルであった。

「どらどら、その熱い青春を謳歌しているヤツらを見てこよう」

「ああ、ケガとかするから止めておいたほうが良いわよ」

「なんで？」

「その喧嘩があなたが思ってるまさに青春謳歌の喧嘩だったら良かったけど、それは間違いよ」

ヒナギクが笑顔で続ける。

「一般生徒も巻き込んでしまい、挙げ句の果てには学校のガラスも壊しちゃうような危険な喧嘩よ」

「そんなクローズみたいな学園生活を送る輩がいるのか？」

「いるのよ」

ヒナギクが急に真顔になった。

「また誰か巻き込まれてるのかしら……」

最後に一つ溜め息をついたのだった。

○

その喧嘩が起こる数分前。

「なんか上級生のいる廊下ってなかなか新鮮な感覚があるなぁ」

辺りを初めて見るかのようにキョロキョロする人物がいた。　ハヤテである。

実は昼休み、白皇学院の探索をしていたのである。
取り敢えずこの校舎、有り得ないくらい広い。

「やっぱり違うな～」

「何がだ少年」

「うわっ！　唯子さん！！」

背後からの声に慌てて飛び上がるハヤテ。

「なんだ、化け物が出たみたいに……」

「後ろから気配なく現れないでくださいよ」

「すまんな、気配を消すのはクセなんだ……それで、何が違うんだ？」

フッと笑うと唯子は話を戻す。

ハヤテは笑いながら答えた。

「上級生のいる廊下ってなんか雰囲気が違うな～って」

「確かに君の言うことも一理あるな。　我々も一年の廊下を通る時

はなんとも言えない懐かしさを思い出してしまうからな」

笑いながらハヤテの言葉に頷く唯子。　長大な廊下を2人は歩いていく。

「そうだ」

やがて唯子がパンッと両手を叩いた。

「ここで会ったのも何かの縁だ。　私が学内を出来る限り案内してやろうか？」

「え、でも唯子さんに悪いですよ。　せっかくの昼休みを―」

「黙れこの与太郎が」

「え？」

唯子の突然の言葉に、ハヤテが目を丸くした。

「この私が案内してやろうと言うのだ。　不服か？　この美人なお姉さんと隣を歩けるのだぞ？　イヤなのか？」

最後に唯子は首を傾げた。　ハヤテは慌てて両手を振って否定する。

「べ、別に嫌なんかではありませんよ！　むしろ嬉しいくらいです！」

「ふむ。　素直でよろしい」

何やら慌てているハヤテを見て少し笑うと

「君は執事である前に、紳士としての自覚を持ちたまえ」

とハヤテに言うのだった。

「では行こうか、まずこの学内の名物を紹介していこう」

「名物なんてあるんですか？」

もう観念したか、ハヤテが抵抗なく聞く。

「勿論」

唯子はそう言うと指をさした。

「アレ」

「アレ？」

２人が見据えるのは一人の男。

なかなかの大柄の男だ。　そして白皇学院では珍しい金髪。

乙葉　千里である。

「千里さんですか？」

「ああそうだ。　まぁ見てろ」

言われるがままに千里を観察しているとやがて窓際から千里が動いた。　教室に戻るのだろう。

（大きい人だよな～あんなに背が高かったら入り口に頭ぶつけそうだな……）

ハヤテがそんな考察をしている間に、千里が教室に入ろうとしたその瞬間だった。

―ゴンッ！

「……」

唯子とハヤテがその音に沈黙。　その光景を見た教室内も一気に沈黙した。

千里が入り口に頭をぶつけたのである。

「……」

千里は一歩下がり、廊下から教室内を見渡す。

鋭い眼光が獲物を睨みつけるように、教室内はいつものように活気を取り戻した。

みんな何も見なかった事にしているのである。

「……ご覧の通り、なかなか入れない男の悲劇という名物だ。　どうだ？」

「どうと言われましても……」

「……ッッッ！？」

その会話が聞こえたか、千里が素早く踵を返し、唯子達を視線に捉える。

そして怒りの形相で指をビシッと唯子にさし、叫んだ。

「勝負だァァァッッッ！！！！！」

「えええええっ！！？」

突然の宣戦布告に思わず叫び返してしまったハヤテ。

「貴様ァ、さっき笑っただろう？キングであるこの俺を！」

顔を真っ赤に、いや、怒りの形相に染め上げた千里はドカドカと唯子に詰め寄る。

「は？　誰が貴様なんか見て笑うかゴキブリ」

鼻をならしながら返す唯子に千里は更に怒りが募る。

「イヤ、俺の本能が告げている！　キングである俺の本能がな！」

「いいがかりもよせ、と言いたいが話をして分かる脳細胞ではないからな」

フッと笑うと、その顔は冷徹極まりない、冷めた表情になった。

どこからか竹刀を取り出し、構える。

「断罪してやろう」

唯子が不敵に笑う。いつの間にか周りは野次馬で溢れかえっていた。

後にハヤテが知ることになるのは、この情景がいつも通りの事であること、意味不可解な理由で千里が唯子に喧嘩を売るのはいつもの事だった。

「そらそらそら！」

唯子が竹刀を薙ぐ。　鋭い一撃が横腹に決まると、すかさず千里が拳で応戦。

「片腹痛いわ！！」

ぶんッ！と振るが、拳は空気を掴むのみだ。

唯子がいつの間にか千里の後ろに移動していた。

「ほらほら、私はここだぞ」

「ぬぅ！」

唇を噛み締めた千里が手招きで挑発する唯子に拳を伸ばす。

今度も唯子を捉えれなかったが

バリーンッッ！

代わりに窓を捉えたのだった。

「ったく、2人もよくやるよな……」

ハヤテの耳に野次馬の会話が聞こえた。

「あの2人のせいで毎回窓ガラスが壊れるんだよな」

「まぁ、見てて面白いからいいけど」

ある意味、この喧嘩は他の生徒達にとって一つのイベントと化していた。

（この人達、もう無茶苦茶だよ）

そう苦笑いを浮かべたハヤテだった。

轟音が響く。　左右から絶え間なく響く。

教室では机の上にある書類を整える書記の姿が。

「今日も平和ですな～」

トントンと書類を整え、呟くのだった。

○

「ん？　会長よ、つかぬ事をお聞きしたいのだが」

「何かしら」

「今までスルーっていうか、放課後にここに寄ったらお前のテーブルには昼までなかったご丁寧に包装された小箱がたくさんあるんだが……なんだ？」

「……」

ヒナギクはテーブルの上に山積みされている小箱を眺めて一言呟いた。

「……バレンタインのチョコ」

「俺が思うに、バレンタインは確か女が男にチョコを上げるイベントじゃなかったのか？」

耳を疑い、山積みのチョコをじーっと眺める。

「私だってそれくらい知ってるわよ……」

パキッとヒナギクがチョコを食べる。

「毎年毎年こうなのよ、何故かしら、年々量が多くなっているんだけど……」

「ヒナは男子よりかっこいいからモテるのよ」

いつの間にか居たのか、美希が説明する。

「いつかいたんだ？」

「最初からいたのよ」

そう会話をしているとヒナギクが眉を細めた。

「でもおかしいわ。ていうか陰謀よ。　私、こんなに女の子らしくしているのに……」

「え、お前マジで言ってるの？」

バキャ！

テルの言葉の返答はグーパンだった。

「確かに昔に比べたら……」

「止めてよ、一応、反省はしてるんだから……」

2人して昔のヒナギクの武勇伝を思い返しているらしい。

「でもこんかに食べたら太るわよ？」

美希が話を元に戻し、ヒナギクに言う。

「わかってるけど捨てられないじゃない……」

食べるのを一旦止め、山積みのチョコを見た。

「一つ一つ…女の子の想いがこもったものなんだから……」

「なんなら幾つか俺にくれ」

「却下」

テルの言葉をヒナギクはピシャリと切り捨てた。

「畜生！　バレンタインデーにチョコ貰うヤツらなんか爆撃されて死んじまえ――！！」

「少なくとも、テロに遭わない限りはなさそうね」

叫びながらテルは一直線にエレベーターに転がり込んだ。

ガコンッとエレベーターが降りていく音が聞こえた。

誰も居なくなり、ふぅと美希が息を漏らす。

「じゃ…私からも…」

「な！！」

ずいっと美希から差し出された小包を見てヒナギクの表情が曇る。

「いじわる……」

「はは。　でも太ったりしてはダメよ」
涙目のヒナギクを面白く笑いながら美希は言った。
「ヒナは…どんな時でもかっこよくなくちゃいけないんだから……」
ドアノブに手をかけた所で振り返る。
「ところでヒナ。　今日は誰かにチョコとか渡したのか？」
突然の質問にヒナギクは戸惑いながらも
「い、いえ……渡してないわよ？」
と返す。
「ホントに？」
「ホントよ」
「ホントのホントのホントに？」
「しつこいわよ……なんか怖いわよ」
「なら良かった……」

最後に笑顔を浮かべるとバタンとドアを閉めた。

そんなこんなで本日はセントバレンタインデー。

まだまだ続きます。

第４６話～それは誰かの陰謀～（後書き）

どうも、最近捻挫してしまい片足生活のバロックスです。

クエスト編が終わり、気が緩んでいたんですね、いきなりグギャッ！っと。

そうですね、バレンタインデー、貰いましたよ。親から。　あと友達から。

義理です。当たり前です。　期待はしてはいけない。　そうしたら企業の思う壺だ。　そして本編ですがあと2、3回したら長編やる予定です。

では皆さん、私のように片足生活にならないようケガにはお気をつけください。

では。

第４７話～実は男から渡すのが本来のバレンタイン～

―――白皇学院校門。　その巨大な門はがらんと開け放たれている。
千人の生徒を出し入れしたりするのだからこれくらいの大きさがあって当然だろう。

その巨大な門を前に一人たたずむ少女がいた。

「噂以上じゃないかな・・・この規模は」

制服姿からして学生、しかし白皇の生徒ではない。県立潮見高校のジミーこと西沢　歩である。

（しかし義理と本命の二つのチョコを持ってきて・・告白、どうしようかな）

もはや地の文にすらツッコム余裕もないのか、片手にもつ紙袋を広げては中を覗き、また閉じて、また覗くを繰り返している。

（と、とりあえず中に入ってみるか？　門も開いているし・・・いいよね？）

周囲をくまなく警戒しながら門の内側へと足を踏み入れる。　スニーカーが平らな地面に触れた瞬間。

「お嬢さん、不審者ですね？」

「・・・・」

茂みの中から黒服で強面の男たちがぞろぞろと現れてきた。

いつか体験したことがある。　たしかあれは三千院家を訪れた（不法侵入）時だったか。　見つかった時、同じような男たちに捕まったのだった。

西沢　歩は瞬時に悟る。　またこのパターンかよ！と。

言葉を発するより早く、歩の体は動いていた。　身を翻して颯爽と逃げようとする・・・が、それよりも早く、黒服は歩の右腕を掴み取った。

その瞬間、持っていた袋が地面に落ち、中からチョコが二つ飛び出す。

「は、はなして！！」

（このままだと私、この小説では決してやってはいけないような展開を迎えてしまうのでは！？）

もはや身の危険以外感じられないと思い、この際に相手の腕をかじってでも逃げるかと考えていた矢先。

「どうかなさいましたか？」

その言葉に、黒服の男たちの動きが止まる。

「こ、これは桂お嬢さま・・・いえ、不審者を捕まえたので・・・」

「不審者？」

男が頷くと、ヒナギクの視界に地面に転がった二つのチョコが入った。　ヒナギクはそれを見て、その少女がここに何をしに来たかをだいたいは察することができる。

「こんなかわいい不審者ならウチの男子生徒は大歓迎よ？」

転がった袋とチョコを丁寧に拾い上げ、袋に再び入れる。

「とにかく、後は私が引き受けますからその子を放してあげてください」

「まぁ、桂お嬢さまが仰るのなら・・・」

ヒナギクの言葉に男は頷くと、男はパッと歩を手放した。

（すごいなこの人・・・）

先ほどのしゃべり方、黒服の男たちを簡単に退けるほどの人間だ。相当偉い人に違いない。

（おまけにすごいキレーだし・・・）

「はいコレ。　まったくバレンタインだって言うのに気の利かない人たちなんだから・・・」

「あ・・・ありがとうございます」

手渡された紙袋を受け取り、お礼をいう歩。

「でもチョコ二つも持ってるみたいだけど・・・もしかして二人に？」

ヒナギクがクスリと笑って冗談めかしく聞くと、歩は両手を振って否定した。

「ち、違います！！ずっと一人！！　一人だけです！！」

顔を真っ赤にして答える歩にヒナギクは少し、冗談を交えて聞くのは止めようと考えた。　かなり本気の想いを感じたからだ。

「でもココ結構広いから探すの大変よ？」

「うっ・・・」

ヒナギクの言葉に歩は顔をひきつらせるを得ない。　本気で悩んでそうなのでヒナギクはその少女にある提案をした。

「なんだったらその幸せ者と二人っきりになれる場所にその子を呼び出してあげましょうか？」

「え？」

歩はその提案に遠慮することはなかった。

「じゃ、じゃあお願いします！　一年生の・・・綾崎　ハヤテくんを・・・！！」

「え？」

その幸せ者の名前が知っている人間だったのでヒナギクは驚いていた。

ーーーーー生徒会室、天球の間。

「ス、スミマセン・・・ヒナギクさん・・・」

「・・・何をいきなり誤っているの？」

生徒会室に呼び出したハヤテが最初に言った第一声は謝罪の言葉だった。

「いや、分かりませんけど・・・また怒らせるようなことを僕がしたんじゃないかと・・・」

「なんだか遠まわしにバカにされてる気分だわ」

目を細めて、ハヤテを睨む。

これ以上イライラが募る前に、早々に要件を言い渡すことにした。

「それよりも向こうの部屋でお客様がお待ちよ」

指をさして言ってみたものの、ハヤテはさらに困惑している。

「あの・・・やはりなにか怒らせるようなことを・・・」

「うるさい！！　つべこべ言わず行きなさい！！」

イライラが頂点に達したか、戸惑うハヤテの背中を押し、無理やり生徒会室の客室へと入れさせ、扉を閉める。

「に、西沢さん・・・」

「ハヤテ・・・くん」

ほどなくして、お互い顔を確認したのだろう。　これ以上聞くのは野暮というものだ。

「下へ行ってようっと」

扉から手を放し、エレベータを起動させる。　エレベータを待っている間、ヒナギクはポケットから小包を取りだした。

女の子の気持ちがこもった大切なものだ。　実際自分も受け取っているから分かる。　しかし、本気の想いを目の当たりにしたとき、この２月１４日と言う日を改めて考えさせられる。

「女の子が・・・男の子にチョコを渡すイベント・・・か」

ちん。という音がして、エレベータが開く。乗り込もうとしたその時であった。

「え？」

突如として客室の間が開き、一人の少女が駆け込んでくる。　見間違えるはずもない。　先ほどの少女だ。

「・・・・・」

エレベータの扉が閉まり、下の階へ移動していく。　ヒナギクは乗り込むことができなかった。

ヒナギクは何が何だか分からない状況だ。

「・・・・どうしたの？」

部屋から出てきたハヤテにヒナギクは聞く。

「へ？　いや・・・別に何もないっていうか・・・義理チョコ貰っちゃいました」

戸惑いの笑みを浮かべながら渡されたそのチョコの形は・・・・長方形の箱。

「・・・？　義理？」

「はい。　ずっと友達でいようって・・・そんな気を使わなくてもいいのに・・・・」

ヒナギクは聞いたハヤテの説明から少女のある言葉を思い出す。

ーーーずっと一人！！　一人だけです！！

（なるほど・・・そういうことか・・・）

まったくもってこの少年はバカだ。ヒナギクは拳を握りしめる。

そんな事を察知もできないのか、鈍感すぎる。

まだ間に合うはずだ。　なら自分に出来ることは一つしかない。

「今すぐ追いかけて、交換してもらいなさい」

本当は今すぐにでもぶん殴ってやりたいという気持ちを抑えてヒナギクは言う。

「へ？」

キョトンとするハヤテ。　まだ分からないのかと、ヒナギクは怒声を飛ばした。

「つべこべ言わず追いかけなさーーーーい！！」

「は、はいーーーーーーーー！！」

ハヤテが慌ててエレベータに乗って下に行くのを見ると、ヒナギクはため息をつきながらイスにドカッと座り込む。　残った仕事を片付けるためだ。

（選択は正しかった？）

自問自答しながらもヒナギクは書類の整理にかかり始めたのだった。

○

校内を飛び出し、歩を追いかけることにしたハヤテ。　しかし、途中で彼女を見失ってしまう。

「くっ！　一体どこに行ったんだ西沢さん！」

もうダッシュで町を駆ける中見知った顔を見つけた。

「あれ、ハヤテじゃねぇか」

善立　テルである。

ダッシュを止めて激しい土ぼこりが舞う。　そんな事を気に留めずハヤテはテルに聞いた。

「て、テルさん・・・さっき、西沢さんを見かけませんでしたか？」

「ゴホッゴホッ・・・いや、見てねぇけど」

土ぼこりを払いながら、ハヤテに答える。　ハヤテはしゅんとした顔になるが改めて顔を引き締める。

「ありがとうございます。　ではこれで」

「ちょっと待てよ」

再び走りだそうとしたところをテルは呼びとめる。

「俺に任せな」

そう言うなり、テルはどこからか持ち出したか鉄パイプ、撃鉄くんを取りだす。　テルはその場に撃鉄を立たせて一本の指で鉄パイプを支える。

「ほいっと」
その支えていた手を放すと、鉄パイプはコロンと音を立てて転がった。
その倒れた先を確認してその方向に指をさす。
「あっちだ」
「いや、それただの勘ですよね」
「大丈夫だ。　こいつは見た目は腐った鉄パイプだが、実質霊刀だったらよかったのになぁ～」
「途中からただの願望になってるじゃないですか！！」
「人間は時に勘に頼る一瞬ってのがあるのさ・・・」
フッと笑うテルにハヤテはえーという表情。
「つべこべ言わず行けよコノヤロォォォォ！！　俺はどうせ負け犬だろうがァァァ！　この負け犬の意見ぐらいたまに聞けってんだよコノヤロォォォ！！」
「は、はぁぁぁい！！」
ヒナギクに似たようなことを言われたが後半は明らかに殺意がこもってたので慌ててその方向へと駆けだした。
「ったく・・・バレンタインなんて中止になっちまえよ」

頭をかきながらテルは歩きだした。

○

場所は変わり、歩は橋の下の壁に手を当てて項垂れていた。

（ていうか・・・私はバカなんじゃないかな？）

その姿はまるで上杉勝也が死んだときの朝倉南の姿によく似ている。

（せめてもう一度想いを伝えるくらいのことは・・・こんなチャンスはもう・・・）

ないだろう。これで自分の青春は終わった。　後悔が残ったまま灰色のまま終わるのだ。

そう考えていた時である。

「西沢さん……」

振り返るとハヤテがいた。

なんとテルの感も捨てた物じゃないらしい。

しかしビルを超えたり走っている車も飛び越えてきたというのは秘密だ。

「……ハヤテ、くん」

その顔を見たとき、ハヤテはどう言ったものか戸惑った。

歩が涙を浮かべていたからだ。

「あの……その…」

ハヤテが何から話したらいいか、そう思っていた瞬間。

がしっ。

「えっ？」

ハヤテの体が少しだけ後ろに傾く。　歩が前から抱きついてきたのだ。

「え…にし……」

「返事は…言わなくていいから……ただ…想いを伝えたいだけだから……」

しっかりとハヤテを抱きしめていた歩は本当にその場でハヤテの口から聞きたいことを言わせずに一つの小包を渡した。

「これを……受け取ってください…」

○

（私はきっと正しい選択をした……正しい選択をした……）

なんとこの会長。仕事始めてから帰宅までの道中、自問自答を繰り返していた。

小包のチョコを取り出し、チョコを少しだけ眺めるとひとかじりした。

（……にが…）

「あ、あの！！」

急に呼び止められたので振り返ると、そこには息を荒くしている歩がいた。

「さっきは…ありがとうございました！！　それで…その…あの…」

疲れているから言いにくいのか、恐らくはハヤテにチョコを渡す手引きをしてくれたことの感謝だろう。

そうヒナギクは考え、笑顔で向き合う。

「想いは伝えられた？」

「は……はい！！　それであの……お礼がしたくて来たんですけど…その、渡せるのがこれしかなくて……でもこれ…一度人に渡したので…その……」

チョコの形を確認して、ハヤテが最初に貰ったものだと確認して少し安心するヒナギク。

「お名前は？」

「あ！！　西沢です！！　潮見高校一年　西沢…歩…」

ヒナギクはそのチョコを受け取る。

「私は白皇学院一年、生徒会長の桂　ヒナギク。　これ有り難く受け取っとくわ西沢さん。　ではごきげんよう」

その凛々しい姿に歩は見とれてしまう。ヒナギクはそう言い終えると髪を翻して去っていく。

「……え？　生徒会長？　白皇の？」

2、3秒ほど遅れて歩が聞き返すが、すでにヒナギクは既に遠くまで歩いていたのだ。

（でもかっこいい人だな……あんな風にカッコ良くなれたら…ハヤテくんも振り向いてくれるかも……）

そんな願いが生まれ、自然と笑みが浮かんだ歩。

「そんなふうに男らしいところを見せるから、年々チョコが増えるのよ？」

「はっ！！！そういうことか！！！」

今までの一部始終を見ていたか、美希に言われてヒナギクはしまったという表情。

実は本日のこの歩とヒナギクのやりとりにおいて大きな誤解が生まれているのを二人は知らない。

一方主人公ズ。

「テルさん、愛ってなんですか？」

「……知らん」

一方ヒロイン。

「ナギ？これはなんですか？」

「鉄鍋のチョコレート包み……」

「食べごたえありそうですね……」

朝から学校を休んでまでチョコ作りに励んでいたお嬢様は失敗したようで。

２月１４日は過ぎていったのだった。

第４７話～実は男から渡すのが本来のバレンタイン～（後書き）

まず、最初に東日本大震災の被害にみまわれた方々に、この場を借りましてお悔やみ申し上げます。

本来ならこんなことをしてる場合ではありませんが、この小説で少しでも笑いが生まれることを願って書こうと思いました。

しかし、皆さんのおかげで事態は良い方向に向かいつつあります。

ボランティアも動くとか、海外からの支援も正式に出たようです。

行方不明の人々も、沢山生還してきたという情報も聞こえました。

これも募金活動など人間一人一人が思いやりのある行動を続けてきた成果だと思います。

その方々には深く感謝を申し上げます。　ありがとうございました。

第４８話～第１回白皇学院内、缶蹴り大会～前篇（前書き）

どうもバロックスです。　今回はあの懐かしい遊びをここで再現！
しかも今日は豪華２本立て！！

第４８話～第１回白皇学院内、缶蹴り大会～前篇

それは白皇学院、昼休みの出来事。

「あ～あ、最近暇だなぁ……」

太陽も真上に登り、弁当も食べ陽気な眠気がやって来る昼休み。

教室にてナギが指でペンを回していた。

「どうしたんですか？」

ハヤテも少しばかり気になったかナギに訪ねる。

「ん～、学校の昼休みってさぁ、こんなつまんないとは思わなかったんだよ」

「そうですか？　僕は楽しかったですよ？　色んな事をやらなきゃならなかったんで大変でしたけど……でもその中で楽しさを見つけてたというか……」

「な、なにをやってたんだ昼休みに……」

「別に大した事じゃありませんが、昼休みには暇があれば街の飲食店のアルバイトやってました」

「お前昼ぐらいちゃんと食べろよ！！」

ナギが突っ込むがハヤテはケロッとして、苦にも思わなかったような表情だ。

「あとはですね……」

「いやもういい」

まだ話の続きをしようとするハヤテをナギが手を翳して止める。

「昼休み……か。　青春時代はそこで決まるという」

「いや、そういうのなら運動とか部活動にも青春を駆け抜ける要素はありますって」

「え～、運動はいやだな……」

体を動かす事はナギにとって嫌いな部分に入る。

この前のマラソン大会だって練習しても３００メートルしか走れなかったのだ。

ちなみにマラソンは白皇の敷地内一周である。

「マラソンして少しは体力はつきましたよ？」

「だろうな。　そうだと思ってこの前のダンジョンは走りまくったさ。　でも体力が上がった所か、以前より落ちた気がする」

「簡単な話だ」

ナギの後方で声がした。

「なんだテル。　一時間目から寝てるから、昼も寝てると思ったのに……」

「なんか平和な学生談義してるから俺も乗っかろうと思ってな……ていうかいつの間にか昼なんだな」

涎を拭き、体を捻って関節からポキッと音が鳴る。

「それでテルさん、分かるんですか？その体力低下の理由」

「おう」

ハヤテが話を戻し、それにテルが頭を掻きながら答える。

「そういう持久系はな、少し間を開けるとすぐ元の体力に戻っちまうんだよ。　つーかお前、アレからまったく走ってないだろ？」

「う、うるさい！」

ナギは事実を突かれ、声を荒らげる。

陸上競技において一流の長距離選手達は常に走り続ける練習を行う事で長期的負荷に体が耐えれるようになる。

しかし例え1ヶ月走る練習をしてその時体力が上がっても、1ヶ月まったく練習をしなければ体力は必然的に落ちる。

プラスマイナスゼロだ。

「まったく、マラソン大会を機会に脱ニートすれば良かったんだよ」

「私は運動できてなくても、家に居ることが多くても、最終的に人を助ける事ができればいいと思っている」

「なんだそりゃ！　平成ライダーの主人公達か！！」

「バカ者！ライダーは世界を守ってるんだぞ！！偉いではないか！！」

「あいつ等たしかに人助けしてるよ？　偉いよ？　平和守ってるよ？　でもさぁ、あいつ等さぁ、怪人くる以外の午前中とかホントなにやってんだよ？　五代　○介もなにしてんの？１００個以上必殺技考える以外に就職さきに考えろよ」

「いや、確かに平成ライダーはフリーターとか、修行とか、仕事してる描写あまりないですけど……」

ハヤテが冷静に突っ込むがテルは続ける。

「キャラ付けだかなんだか知らないけどさぁ、子供が仕事なんかにしないで『俺ライダーだから関係ねぇし』みたいな事になっちゃ困るんだよ。少しは探偵とか新聞記者とか万事屋を見習え！！」

「Wと龍騎ですか？でも万事屋はライダーじゃありませんよ？」

「たくよォ……イケメン揃えればなんとかなると思ってやが――」

「って一体なんの話だァ――――ッ！！？」

グサッ！！

「アーーーーーーッッ！！！」

ナギはテルの額に思いっ切りペンを突き刺した。

「何してくれてんのお前！　ちょっとハヤテェ！　血出てないコレ！？　脳みそ的なものとか中から出てないコレ！？」

「あわわ……」

額を両手で抑えながら床を転がるテルにハヤテが慌てる。　幸いにケガはなかった。

「それぐらい動ければ大丈夫だろ」

「なんかこのやり取りも久し振りに感じますね」

腕を組んでフンッと鼻息を鳴らす……そして

「話を戻さないとな」

―閑話休題。

「昼休みかぁ……」

額に絆創膏を貼ったテルが腕を組んでうーんと唸る。

「なんでしょうね……」

「ふむ……テルよ、何か楽しい事を提案してくれないか？」

「そうだな……」

ナギとハヤテも唸る。テルは少し考えていたが、教室を見回し、何かを見つけた。

それを拾い上げる。

「なら」

テルはその拾い上げた物体をナギの机に静かに置いた。

カタッ。

置かれたのはアルミ製の缶。

「缶蹴りをしよう」

「「……」」

「昼休みは缶蹴りだな。　コレ決定」

「「はい？」」

しばらく沈黙していたハヤテとナギが同時に聞いた。

「昼休みいっぱい使って缶蹴りだ。　いいじゃねーか。　小さい頃はよくやったもんだろ」

「テルさん。　三人でやるんですか？」

ハヤテが恐る恐る聞く。　テルはまさかと首を振った。

「いや、知ってる奴ら全員だ」

「また大規模な缶蹴りですね。　まぁ人数は多いほうがいいですけど……」

「エエエッッ！？　お前らマジでやる気してんのかよ！？あとさりげなく私も入ってるし！！」

なにかとやる気なハヤテにナギが猛然と突っ込む。

「いや…お前以外に誰がいるんだ？」

「テルよ。　私もやらなければならないのか？」

「昼休みがつまらないと言ったのはどこのどいつだ」

「いや、私はあんまやったことないし」

「僕が教えます。　楽しいと思いますよ」

「むぅ……」

ハヤテに言われてナギは眉を寄せながらも了解した。

「よし、じゃあメンバー集めねぇとな。昼休みは有限だし」

「でもどうしますか？　僕らの知り合いって……」

「あのやかましトリオとかワタルとかいるだろ」

テルは缶を片手にダルそうに言った。

まぁそれぐらいしかいないのもまた事実。

「じゃあ僕が言ってきますけど、どこに集合するんですか？」

「いや、外しかないだろ……」

ナギが当然のように言うが、テルは口元をひきつらせてニヤリと笑って床を指差した。

「ここ」

「え……」

ハヤテが目を丸くするなか、テルは薄気味悪い笑みを浮かべて高らかに叫んだ。

「第1回缶蹴り大会は……白皇学院の校舎にて開催だァァァ！！！」

○

「缶蹴り大会をするそうだなテル夫くん」

数分後、暇人たちが見事集まってくれた。

「やはは、缶蹴りなんて久し振りだよ～♪」

「うむ。　久し振りに血湧き肉踊りそうだ」

泉と理沙が腕をブンブン回す。　お前ら生徒会はどうした。

「つーか、なんで学校の中で缶蹴り？」

ワタルがしかめっ面で床にある缶を眺めている。

「その方が楽しいからだ。　よし、ルールを説明する」

テルは楽しそうに説明を始めた。

ルールその１、範囲は校舎内。

ルール２、鬼は三人。

ルール３、鬼以外は逃げるもよし、集団でかかるのもよし、隠れるもよし。

ルールその４、缶を置く場所は鬼が決める権利がある。

ルール5、鬼に捕まったら誰かが缶を蹴るまで捕獲状態となる。

「ルール2は鬼が一人だとあからさまに不利と見てだ。　ルール4に関しては、あらかじめ缶がある場所が分かってしまうと、鬼側が対策を立てにくいためだ」

突然缶を見つけたらどうするか？判断力を試される場面だ。

その場で蹴りに行くか、仲間に連絡して作戦を考えるかだ。

「案外頭を使うな……でも鬼が結構不利だろ」

ワタルの言う事も一理あり、あらかじめ隠れていれば、鬼が居なくなったのを確認して蹴りに行けばいい。

「ふっ、甘いぜ。それを無くすためにこの鬼の接近を伝えるセンサーがある」

だがテルはこれについて既に解決していたようだ。

テルがポケットからセンサーらしき物を取り出した。

「委員長、これを持って離れてみろ」

「ふぇ？了解だよ」
離れるごとに電子音の間隔が緩くなる。
「有効範囲は３から４メートルってとこだ。　隠れてるだけじゃ面白くないしな。　じっとしてると速攻見つかるようにしておいた」
「また凝ったのを用意してきましたね……」
ハヤテは苦笑いしているがテルはふっと笑う。
「ちなみに提供は牧村先生だ」
よく見るとセンサーには小さくｂｙ牧村の文字が。
「これは燃えてきたな……」
とナギ。
「……」
ハヤテもなぜか屈伸運動。
「へっ、こういうのも悪くねぇな」
とワタル。

みんなやる気満々だった。

「あら、面白そうなことやってんじゃない。　私も混ぜてよ」

廊下の集まりに加わってきたのは雪路だ。

「雪路……たしか昼はテスト前の講習があるんじゃ」

美希が言うが雪路はフンッと鼻を鳴らす。

「んなの他の奴にやらせればいいのよ。　しかし懐かしいわね缶蹴りなんて」

「ほんとにアンタ教師か？」

すでに呆れ顔のテル。

「ふむ。　それなら私は追いかける側に回るとしよう」

いつの間にかハヤテの後ろにいた唯子がテルからセンサーを受け取っていた。

「好んでハズレくじを引きたがるな、アンタは……」

突然現れた事を意にも介さず、テルは言うが唯子はクスリと笑う。

「ハズレとは思わんよ。ただ、このほうが面白そうだ」
その言葉を聞くや、テルも少しばかり考える。
「なる程……それもそうだな。俺もやろう」
「なんという組み合わせッッ！！」
ナギが異質を見るような目を向ける。
ちなみに残りの鬼は泉という事に。
「テル夫くん、質問があります！」
元気良く泉が手を上げる。
「なんだ委員長隊員」
「アレ？　私委員長なの？隊員なの？」
戸惑いながらも泉は続ける事にした。
「こういうのはやはりヒナちゃんが許さないと思いま―す」

（（（（（たしかにそうだ――！！！））））））

一同が気付いたかのように心の中で突っ込む。

「そういえばヒナギクがいねーな、仕事か？」

「そうであります隊長！　仕事は昼休みいっぱい使うという話をしてましたがヒナちゃんなのでそれまでに終わらせる可能性がありますです！」

「なんかなりきってるよ泉さん！！」

軍隊口調の泉に対してハヤテが突っ込む。

「なら、それもアリだ」

テルの言葉に一同（唯子以外）が驚きの声を上げる。

「見つからないか、見つかるか、まさにスリリングの連続だ。　まさにバイオハザードの追跡者、まさに大人の階段のぼるだよ」

「階段は関係ないだろ」

ワタルも突っ込みに入る。どうやら止める気は一切ないらしい。

ちなみにヒナギクが昼いっぱいに仕事をしなければならなかった原因は明らかに別にある。

「それじゃあ缶を置いたら随時メールを入れよう。　その次のメールが開始の合図だ」

そしてみんなが散っていく。

「でも見つかったらどうなるんだろう？」

廊下を歩くハヤテはそんな疑問を考えていた。

そしてメールが届き、缶が置かれたという情報がくる。

次のメールが開始の合図だ。

『♪～♪』

ほどなくして二回目のメールが届いた。

こうしてハラハラドキドキの血みどろ缶蹴り大会が今……始まる。

第４８話～第１回白皇学院内、缶蹴り大会～前篇（後書き）

昔はものすごいアウトドアっ子でした。　友達と一緒にやり、怪我をしたり、けんかになったのもの懐かしい話。　昔は顔を見られなければいいやという理由で顔を大きな葉っぱで隠して接近・・・という奴らもいました。　しかし、私の中ではそれは何故かありというものでした。

童心をくすぐられる思い出ですが、みなさんはどうでしょう。

２本立てとありますが　続けて読むのもよし、もしくは片手に紅茶を持ちながらリラックスしてみるのもまた新しい世界を開くきっかけになるというものです。

まぁそういのも前篇が短い分、後編がすこし長いので休憩などをとって見てほしいと思います・・・あんま長くないけど。

第４９話～第1回白皇学院内、缶蹴り大会～後編

前回のあらすじ。

突如として始まってしまった白皇学院、第一回缶蹴り大会。
主催テルの元、多くの暇人たちが集まってくる昼休み。　たかが昼休み、されど昼休み。遊ばなければもったいない！！

しかし彼らは知らなかった。　この缶蹴りが後に血みどろの缶蹴り大会に変わることを・・・

「ついに始まりましたか・・・ん？」

廊下を歩いていたハヤテは自分のポケットに入っている携帯が震えていることに気付いた。

「あれ？花菱さん？」

『ハヤ太くん、電話したのは情報交換をするためだ。　ここから先はメールなどで鬼の動き、缶の位置をお互いに報告したりしよう』

「たしかにそうですね」

「うむ。　では私はこれで切るぞ。　あと奈津美さんとテル夫くんには気を付けた方がいいぞ？」

それを最後に美希からの通信が切れる。　たしかに、あの二人はいまだ実力が未知数だ。

ピピ・・・

「ん？」

そんなことを考えているとハヤテのセンサーが微弱の反応を見せた。

（だ、誰だろう？取り敢えず近場の教室に！！）

慌てながらハヤテは近くの教室に入り込んだ。　そして教卓の陰に身を隠す。

やがて・・・

「見つけたよ～桂ちゃん！！」

ハヤテは声だけで反応したが、どうやら泉はここにもともといた雪路を発見したようだった。

「くっくっくっ・・・瀬川さん、私を捕まえることはできるかしら？」

雪路が不敵な笑みを浮かべて泉と対峙する。

（ここは隠れたままやり過ごすのが得策ッッ）

それが一番の判断だと決め、ハヤテはその場からはセンサーの音を頼りにしていた。しかし・・・

ピピピ・・・

（あれ・・・距離が開いてきているのに・・・）

ピピピ・・・

（音が小さくならないんだッッ！！？）

ハヤテは混乱していた。　雪路と瀬川はだんだんとハヤテからは遠ざかっている。　普通なら音は小さくなるはずだが、近くにいるのと変わらないくらいに音が響いていた。

その瞬間。

「かかったな！　ハヤテェェェッッ！！」

ばん。

突如、ハヤテの入口の近くにあったロッカーが開き、テルが飛び出してきた。

「し、しまった！　罠かッッ！！」

さすがのハヤテも入口を塞がれ、不意打ちの奇襲を掛けられてはなす術がない。　あっさりと捕まってしまった。

「最初から瀬川さんとセットで捜していたんですか？」

「おうよ。　こうしてセンサーに頼ることくらいお見通しよ」

なんとも裏をかかれた気分だ。　すべては計算のうちだということだというわけか。

そして雪路は二人掛かりになるとあっさりと捕まってしまう。

「オッノーーーーーーレェェェ！！！」

捕まる瞬間に教室内でそう叫んだのだった。

○

さてさてハイスペック（化け物超人組）組が捕まったところで場所は変わり、ナギだ。

センサー片手にナギは廊下を歩く。　とくに動き回るわけでもなく、缶を蹴りに行く訳ではない。あきらかに職務を放棄していた。

「いやぁさすがにハヤテは負けんだろ」

そういった安心感からその役目を果たそうとしないナギ。そのハヤテが捕まったとも知らずに。

ナギはふところからＰＳＰを取り出し、近くの教室に入る。　そして人目も気にせず、テルがとった作戦、ロッカーに入るという荒業に入る。

そうナギはほとぼりが冷めるまでここで過ごすというのだろう。

（完璧だ・・・なんという完璧な作戦ッッッ）

おそらく彼女の脳内の中では自身の才能の恐ろしさに恐怖している
に違いない。

幸いＰＳＰの光があるため、少し暗くても問題ない。

「ではさっそくジン〇ウガでも狩りに行くとしますか・・・・」

電源をつけようとした瞬間だった！

ピ・・・・

「ん？」

ポケットの中に入れていたセンサーが微弱な反応を見せる。

しかし、気づかないままここを通り過ぎていくだろうと考えていた
ナギ。

ピピ・・・

（まさか・・・）

ピピピ・・・

（ここに・・・・）

ピピピピ・・・

（来るというのかッッ）

身に迫る危険を感じながらナギの手には次第に汗が浮かんでいた。

そして次の瞬間。

ーーーブツンッ！！

何故か知らないが、充電が満タンだったのにも関わらずＰＳＰの電源が切れてしまった。

（な、なにが起きたんだ！？え、電源が入らない！！！）

もはやスリルというよりはそれ以上にまずい状態なんではないかと察知したナギ。　そして更に追い打ちが。

ドゴッ！！

「ひっ・・・！！！」

突如としてロッカーを轟音が襲う。　思わず声を出してしまった。

ドゴッドゴッ！！

さらにロッカーは激しく音を立てながら揺れる。　誰かが殴っているのか、それはナギにはわからない。狭い空間で少しの薄暗さはナギの精神にダメージを与えていた。

「だ、誰だこんなことをするのは・・・・」

若干涙目になりながらも、ナギはロッカーを開けようとした。　し

かし・・・

「あ、開かないだと？」

片腕から両手まで、さまざまな方法をやってみたが扉はあく様子がない。

ドゴッ！ドゴッ！ドゴッ！ドゴッ！ドゴッ！

ピピピ

「自分から敵の中に飛び込んでくるとは・・・・」

顔を上げて確かめてみるとそこには唯子の姿があった。

「どうしたんだ泣き顔なんて君にはあまり似合わないぞ？」

そう言われてナギは自身が顔がとてもひどい状態だということに気付く。　慌てて顔をもとに戻すと当然の疑問を口にした。

「お、おまえぇ！　そこまでやる必要なんてあるのか！　たかが遊びだぞ！？　ロッカー叩いて揺らして、挙句の果てには閉じ込めるかキサマァァァ！！」

「ん？」

唯子は何が起きたのか全く理解していない。　すこし考える仕草をして答えた。

「私はロッカーを叩いたりしてはいない。　あと、押さえつけたりもしていないぞ」

「え？」

ナギはその瞬間、思考が停止した。　自身は確かにロッカーを揺らされ、閉じ込められるという状況になったのだ。　夢であるはずがない。

「ところで・・・そろそろ離れてくれると嬉しいのだが・・・別にイヤなわけではないのだがな」

ナギはいまだに自分が唯子の胸に顔をうずめていることが分かった。

「・・・・・・・でかい」

「む・・・」

少しばかり遺憾が残るような表情になるがすぐにいつもの凛とした表情に戻る。

「さてさて、そろそろ戻ろうかナギくん。　君で最後なのだ」

「マジでか」

まさかといった表情。　自分が最後の一人とは思わなかったのだ。

「くそぉぅ・・・・・」

と悔しそうにしていた時だった。

ガタッ。

「ふおぉぉぉぉぉ！！！」

その小さな物音にナギは振り返る。　よく見るとただ筆箱が落ちただけだった。

「どうした？　どこぞの芸人のようなオーバーリアクションをするとは・・・・」

唯子は即座にナギの状態と対処を計算した。　何があったかわからないが、からかわないでいた方がいいらしいと判断したのだろう。
右手を差し出してきた。
「ほらほらおねーさんと一緒に戻るぞ」
「む、むむむ・・・・」
ナギも恥ずかしそうだったが、力強く手を握った。
その後、何故か手をつないでみんなの場所に戻ってくる唯子とナギの姿があった。

ーーーーーーー
結局、残りの昼休みの時間の半分の時間を残し、全員は捕まってしまった。　しかも、それはほとんどテルと唯子の手によるものである。
「だらしねぇなテメェら」
テルが勝ち誇った笑みを見せつける。
「まだ時間も残ってるし、仕方ないからもう一回くらいやろうじゃ

ねぇか」

その言葉にみんなも簡単に同意。　しかしテルは知らなかった。

みんながこの時。

（（（（鬼になったらコイツを地の果てまで追いかけてやる！！！！！））））

みんな違う意味でやる気だった。

その後はチーム決めとなり鬼は唯子、ハヤテ、花菱、ナギとなった。

鬼の数が増えたのは少しばかり時間が押しているのと、さっきのように力が偏らないためだ。

そして第二回戦スタート。

廊下の踊場にて少し作戦会議をするテルたち。

「大分実力が別れたね♪」

「そうね。　綾崎くんと奈津美ちゃんが相手だけど後はアウトドアのナギちゃんと花菱さんだからね！」

「いや……」

盛り上がる泉と雪路をテルが静かに否定した。

「今回マークすべきは……花菱だ」

「どういうことだ？」

「まぁ、始まれば分かることだな。　アイツ、実は五感のト〇ズ使えるからな」

「んなワケねーだろ」

ワタルが冷静に突っ込んだ。

それを言い終えるや否や、テルたちは各自分かれていった。

「ったく、なんだってんだよ」

残ったワタルは少しばかりかテルの言葉が気になっていたか、少し顔をしかめる。

数十分後。　ワタルの携帯電話に一通のメールが入った。　差出人を見ると、泉であった。

『桂ちゃんが捕まったよ～～』

「早いな・・・・」

なんとここで早々に雪路が捕まったという情報だった。　おそらく、一番最初に厄介だと判断され唯子とハヤテが二人掛かりで捕まえに入ったに違いない。

そして続けて泉からメール。

『一階の階段付近に缶があるよ～缶蹴るからみんなきてね～♪』

「なかなかアグレシップだな委員長・・・こんなキャラだったか？」

けっこう大胆な作戦だがこういった缶蹴りは我先にと缶を蹴ってしまえばその蹴った人間が英雄になれるのだ。　少しばかり大胆になってもなんら不思議ではない。

いつも活躍できない子も東北新幹線並みのスピードと便利さで英雄になる。これぞ缶蹴りマジック。

（取り敢えず、一人だと心もとない・・・援護に行くか？）

と考えつつも、積極的に缶を蹴りに向かい、英雄の座を狙おうというのが彼の腹だ。

○

ワタルは一階の階段につながる廊下へと足を運んだ。

「あれ？」

とワタルの後ろで声が。

「あれ、先生？」

そこには捕まったはずの雪路がいた。

「なんでワタルくんがここにいるのよ？」

「先生こそ、捕まったんじゃ？」

ワタルの言葉に雪路は頭にクエスチョンマークを浮かべる。

「あたしはワタルくんが捕まったって聞いたから・・・」

お互いに話が噛み合っていない。

（なんかおかしいぞ・・・）

ワタルが不安の色を濃くしているとき、一通の電話が入った。

電話の相手はテルだ。

『逃げろ！　そいつは罠だ！！』

「な、なに！？」

ワタルがテルの言葉を聞いたとき、

「見つけたぞ！！」

なんと雪路の後方から唯子が現れた。

「なんだと！？」

さらに・・・

「逃がしませんよっと・・・」

前方からハヤテが登場！！

（こ、これは一体・・・）

よく見るとハヤテの後方には缶を守るナギの姿が。とワタルが考えている間に一通の着信が。

『ふっふっふ・・・ファファファァ・・・やーい、引っかかったな！！』

まるでダークサイドに落ちた戦士のように笑うのは美希だった。近くの教室から現れる。

「はめられたのか・・・」

「そうだ。　メールもものすごく泉っぽかったろ？」

高らかに笑う美希とは対照的にワタルは苦虫をつぶすかのような表情。

「こんなところで簡単には捕まらないわよッ！！」

雪路が素早く間を抜けようとするが・・・

「「もちろん通しませんよ？」」

ザ〇のモノアイのような赤い目をぎらつかせながらハヤテと唯子が立ちふさがる。

「くっ！！　最初からこれが狙いだったのね！？」

「そうですよ。　まぁ僕は昔よくやられていたのでその作戦内容はすぐ理解できました」

「自慢げにいうが、君は昔何をしていたんだ」

唯子が尋ねるがハヤテは笑うばかりだ。　あまり追求しない方がよさそうだ。

「ほいタッチ」

「うぎゃ！！　しまったッッ！！」

いつの間にか接近していた美希に、ワタルが簡単に捕まってしまった。

「どうだ。　たとえ缶蹴りといえど世の中情報社会ッッ　情報を制する者が、この缶蹴りを制すのだッッ」

最後に高らかに笑う美希をワタルは悔しそうな表情になる。

「ちくしょう・・・ここまでかよ」

「あきらめるな！！」

ワタルがあきらめかけたその時、はるか遠くの廊下に、テルが立っていた。

「やはり攻めに転じてきたかッッ」

唯子が目を鋭くさせ、臨戦態勢に入る。

テルは廊下を走り出した。

「いまだ！！」

雪路がその間を突いて二人の間を抜けようとするが。

「させません！！」

「ぐはぁ！！」

そんな小さな油断もするわけもないハヤテは簡単に雪路を捕まえる。

「蹴りにきたよ～♪」

「いいとこどりと行こうか」

集団を遠くから挟むように泉と理沙が現れた。　もはやこの缶蹴りは誰も勝者が分からなくなる混戦状態と化した。

「勝負だテル君！！」

「オウよッッ」

テルは止まることなくむしろスピードを上げて突っ込んできた。

（どっちだ・・・右か？　と見せかけて左か？）

一瞬の判断。　唯子は全身の神経を張り巡らせる。　そして彼の出した答えは。

ぱしぃん。

「くっ！！」

一瞬何が起きたか分からなかった。　ただ瞬間的にテルが両手を唯子の目の前で叩いたということ。そして・・・

「は～はっはは！！！　アバヨォォ！！」

そこには唯子を横から抜いたという事実ッッ。

「不覚ッッ！！　猫騙しか」

拳を握りしめる唯子は頼みの綱をハヤテに託した。

「テルさん！！」

「勝負だッッ！！」

ハヤテには経験がある。　一度はテルに猫騙しを食らっているのだ。
奇襲は奇襲、二度目は通用しないという自信がある。

「ハヤテェ！！」

しかし、テルのとった行動は・・・

「叩いてェ、被ってェ、じゃんけーーーーーん・・・」

「え？え？え？」

右手を大きく振り上げてきたテルに対して、ハヤテは戸惑いながら右手を差し出す。

「ポンッッッ！！」

結果、ハヤテがチョキ、テルがグー。

「し、しまった！！　な、なにか・・・なにか被るものを・・・」

ハヤテが辺りをキョロキョロしている間に。

「ギャハハッハハハハハァァァ！！！　引っかかってやがんのーー！！！」

無防備になった横を簡単に抜いてしまった。

「卑怯クセェェェッッ！！」

遠くでワタルが怒声を響かせる。
突っ走るテルの前にはナギが守る缶だけだ。
「こ・・・来いッッ！！！」
珍しく強気のナギだ。　自分からテルに向かっていく。
「終わりだぁぁぁあ！！！！」
ナギ勝利を確信したか、テルに思いっきり手を伸ばした。　しかし、次の瞬間。
「な・・・ッッ」
ナギがつかんだと思ったテルの姿はまるで霧のように霧散した。
あたかもテルがナギの体を突き抜けたように・・・
「デビ〇バットゴーストッッッ！？」
「いや、ただ普通に抜かれただけだろ」
遠くで唯子が静かに突っ込んでいた。　遠くからなら普通にテルが伸ばしてきたナギの腕をひょいとかわしてその上でナギを抜いていると分かっているからだ。
結果的にテルの独壇場。　目の前には無防備な缶が。
「貫ったあぁぁぁぁぁ！！！　雷獣シュゥゥゥゥゥゥト！！！」

かん。

「音はいたって普通だ！！」

ハヤテのツッコミをよそに、蹴られた缶はきれいな放物線を描きながら廊下を駆け抜けていく・・・・しかし、これがいけなかった。

「ふぅ・・・結局昼休みいっぱい使ってしまったわ・・・」

「げっ！！」

なんとビックリ。　角を曲がってきた人物はヒナギクである。　そして。

ーカツン。

見事にクリーンヒット。

「・・・・・・」

「・・・・・・・・」

しばしの沈黙。　ヒナギクは無言で落ちていた缶を拾い上げた。

「・・・アンタたち、生徒会はどうしたのかしら？」

少しばかり顔を俯かせているのでヒナギク以外の人物は表情が伺えない。　だが、それが逆に怖い。

「あと・・・いったい何をやっているの？」

「か、缶拾いですよヒナギクさん・・・・」

額に汗を流し始めたハヤテが笑顔で対処する。

「缶蹴り・・・なら、その善意ある行為の中で、人に缶をぶつけたのは誰かしら？」

「「「「「こいつです」」」」」

全員が一斉にテルを指差した。

「オォォォォィ！！！　テメェら、簡単にバラすなよ・・・あ、やべ言っちゃった」

慌てて口を両手で押さえるが時すでに遅し。

「・・・・・」

ヒナギクの手にはすでに正宗と竹刀があった。

「ヒナギクさん！　二刀流ッスか！！」

テルは汗をだらだらと流しながら訳の分からないことを言い出す。

一方のヒナギクは正宗を肩に担ぎ、獣を狩るかのような瞳でテルを睨み付けた。

「そこ動くんじゃないわよ！！！　覚悟しなさぁぁぁぁい！！！」

「ギャアアアアアアアアアアアア！！！！」

その日、断末魔とともに一つの伝説が生まれた。

缶蹴りをして人に缶をぶつけると赤い悪魔が出るという伝説が。

みなさん、昼休みの遊び方は安全に行いましょう。　あと、缶を人にぶつけてはいけません。

第４９話～第1回白皇学院内、缶蹴り大会～後編（後書き）

どうも。こんなこんなで短編を終わらせました。　結構後半はグダグダでしたがどうだったでしょうか？

実は、次から長い長い沈黙を守ってきたシリアス編が始まります。
なかなかＫＹですね。　やるならもっと早くやる予定でしたけど、そこは私の力のなさ。

ここまでギャグで引っ張ってシリアスかい！！　となってしまいますがそろそろと思いました。

まぁ暖かい目で見守ってください。

次回予告

青空も見られない、曇天を含んだ嵐の夜にそれは起きた。

「オウマイガー！コウモアラシガヒドイナンテ、キイテナイヨ！」

場所は太平洋。　貨物船だろうか、おおきなその船の中では船長らしき人物がセンサーとにらめっこしている。

「こうも嵐がひどくちゃ、貿易もままならんですな」

乗組員の一人がははっと笑う。　確かに、おおきな異常が無い分はなんら問題はない。　しかし、ものを運ぶということに関しては一層気がめいるというものだ。

「アーウチ！　ナンテコッタ！」

「どうしたんですか船長、マルペンが腕にでも刺さって爆発したんですか？」

「チゲェーヨ、オレノハニートノホットラインガ、キレチマッタノサァ！！」

「ああ、携帯の電池、切れたんですね」

男の静かなツッコミに船長は頭を振り回す。

「シーット！！　モウダメダ！！　サッサトコーヒー入れろ、この助手！！」

へいへい、と乗組員の男がゆっくりとイスから立ち上がり、だるそうにコーヒーを入れる。

こんな感じだった。　天気はこんなんだが、いつも通りに物を運び、いつも通りに海の上で寝る。
正直、青い空を拝むことなくこの海で寝るのはよくあることだった。

しかし、今日は・・・何かが違った。

「オウ・・・？　ヘーイ、コイツハどうしたってんだよーー！！」
コーヒーを持ってきた途端に、船長があり得なくらいの叫びをあげる。

「どうしたんですか？　標準語に戻っちまうほどマルペンが腕に刺さったんですか？」

「バカチゲェーヨ！！　センサー見ろってアホ！！」

船長の言われたと通りにセンサーの画面を見ると、船の横・・・百メートルくらいか、それくらい離れたところにセンサーが一つ反応していた。

「ん？　なんですかコレ？　こんな嵐のなかで航海なんてするバカいるんですか？」

乗組員が船長にいうが、船長は慌てた表情で返した。

「オマッ、だからチゲェーヨ！！　海面にナァ、なんかイルンダヨ！！」

乗組員は船長から渡された双眼鏡でその海面の何かを確認する。
どうせなんかのゴミとかと勘違いしたんだろうと思っていた。

「・・・・・」

双眼鏡を覗いた乗組員は絶句した。

「うそだろ・・・」

乗組員はわが目を疑った。　何度も何度も。　しかしそこには確かにその事実があった。

「・・・人が・・海面を歩いてる！？」

目を擦っても頬をつねっても、その幻想が冷めることはなかった。
荒れ狂うの波の中を人が海面を悠々と歩いているのだ。

そして驚くことに。

「なんで・・・あの歩いている海面だけが・・・平面なんだ？」

なんと、その人物の歩く海面だけが波の影響を全く受けておらず、
まるで穏やかな平面であった。
その人物は敷かれたカーペットを歩くがごとく。

ここからでは人物の容姿はあまりはっきりとうかがえない。　しかし、見た目は小さかった。子供あたりだろうか。

写真を撮ろうとしたところで双眼鏡から覗いていた景色が荒波に妨害される。

次に乗組員が見た時に・・・その姿はなかった。

「コワクネ！？」

船長が奥の隅で震えている。　なんとも情けない姿か。

「見なかったことにしよう・・・」

あまりいい夢とは言い難いものなので彼はこの、今日見たものを忘れることにした。　それがいいだろう。　そう思っている。　今日見たものは幻だ。　忘れよう。

海面を歩く謎の人物。　これがまさに始まりを伝えるメッセンジャー。

そして・・・本当の物語が始まる。

次回予告（後書き）

～質問コーナー～

マユミ「はーい今日はクエスト編の最後に感想でもらった質問を返していきたいと思います。　ちなみに進行役は日野寺家当主、日野寺マユミでーす」

質問・テル君に質問です。今回のクエスト編で一番頑張ったのは誰ですか？

テル「なんだかんだで一番はハヤテじゃねぇの？　毒もらったり、全身複雑骨折とかしてるし」

マユミ「自分のこととかは言わないんだ」

テル「バカ言っちゃいけねぇよ。　努力や満足は見えないからこそ輝くんだ。　そんな俺にはご褒美のハーゲンダッツがあればな・・・」

マユミ「あーもう面倒くさいから飛ばすわよ」

質問・クラウスさんに質問です。　みんながクエストに言っている間、何をしていましたか？

マユミ「あぁ、それは私が話すわよ」

～ハヤテとテルがクエストに言っているとき～

クラウス「はぁ、下手したら今度は私がクビ・・・ですか」

シュトロハイム「まぁまぁクラウス殿。　ナギお嬢様の機嫌も山の天気のごとき変わりよう。　失態を重ねることがなければクビが飛ぶことはありえませんよ」

クラウス「そんなことを言いながらシュトロハイムさん、なぜさっきから私のテーブルの上に求人雑誌を置くのですか？」

シュトロハイム「違いますよ。こんな時代です。執事業のほかにもアルバイトをやろうとしていましてな・・・おっと」

クラウス「さりげなく私の部屋のいたるところにＷＯＲＫＩＮＧを置かないでください！！」

シュトロハイム「はっはっは。　安心してくだされクラウス殿。いざ執事をやめることがあったら私とゲートボールしましょう。午前中なら私はいつでも空いてますので」

クラウス「あなたも暇人ですな・・・」

シュトロハイム「ええ・・・実は最近、お嬢様にも『加齢臭』がどうだのと言われてあまり近くにいることが少ないのです・・・・」

クラウス「ああ・・・なんだか他人事の気がしませんな。　私もいつぞやかナギお嬢様に『なぜお前が私の部屋にいる！？　出てけ！！』と言われましてな・・・」

シュトロハイム「やっぱり・・・年頃なのでしょうか・・・」

クラウス「年寄りの談義もまた、あまり需要も無いことですからのお」

「「はぁ・・・・」」

○

マユミ「という会話をしていたのを聞いたから」

テル「なんかもの凄い聞いちゃいけないこと聞いちゃった気がするんだけど・・・」

マユミ「ええ、私もちょっと家政婦の気持ちがわかった気がするわ」

テル「それもまた違うんじゃね？」

質問・ナギに質問です。　ナギが感動したアニメは？

ナギ「うーむ。　私のアニメのデータベースによると、２０１０年

の一押しはＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！　探偵オペラミルキーホームズ、今だったら魔法少女まどか☆マギカ、あとは・・・・」

マユミ「はーい、言ってたらキリがないんで飛ばしまーす」

質問・ワタルくんに質問です。　ワタルくんが好きな特撮ってなんですか？

マユミ「取り敢えずワタルって誰？」

テル「ああそうか、お前は顔すら会ってないんだったな」

ナギ「ワタルは今回はビデオ屋が立て込んでて来れないらしいぞ。
だから質問に対する回答は紙に書いて預かってきた」

テル「後書きの項目にすら来れないほど忙しいのかよあのビデオ屋・・・どれどれ」

ワタル「俺はタイムレンジャーとかストーリーは濃かったし良かったな。　あとはシンケンジャーあたりがお気に入りだぜ！　最終回なんて、敵に突っ込んでいく折神の姿とかマジで・・・・」

テル「ハイ、なんか長くなりそうなので終了」

マユミ「あら、もうこのコーナーも終わりなの？　なんだかつまんないわ」

ナギ「というよりなんでお前はここにいるんだ？」

マユミ「ふっ・・・もはや私は後書きぐらいにしか出れる力が残っていないのよ・・・ふっ」

テル「いかんな。　あのままだとアイツ、ダークサイドに落ちるぞ」

ナギ「むぅ、しかし読者も覚えているか分からんキャラを本篇に混ぜ込むのはまた作者に大きな労力を費やさせそうだ・・・」

マユミ「せめてこの後書きという世界だけッッ　私が神になったっていいじゃないッッ！！」

テル「うおっ！！　マユミがなんか言い出したぞ！？」

マユミ「ねぇ、滑稽でしょう？　最初は特別編の主役を張っておいて、特別編が終わったらもうおじゃんよ、本篇だって私の入る隙間なしよ！　穴があったら入りたいけどないのよ！？　さぁ笑えばいいじゃない、あーはっはっはって！」

ナギ「いかん、アイツとうとうおかしくなったぞ・・・」

テル「取り敢えず、この後書きをアイツの世界として提供してやるしか、アイツのストレス解消はできなさそうだ」

ナギ「まぁ、哀れな友人を少しでも元気にしてやるため、これからも質問の受け付けは続けていくつもりだ」

テル「取り敢えず感想や質問を下さった読者、ありがとな」

マユミ「あーはっはっはっは！！！」

では、次回から長編をお楽しみください！！

第５０話～始まりが近付く……とも分からないまま過ごす午前午後～（前書き）

ついに完成しました。　ここまで来るのに何ヶ月かかったか……シリアス長編、開始です！！

第５０話～始まりが近付く……とも分からないまま過ごす午前午後～

ここは東京都練馬区にある三千院家。

その広大さは練馬区の６０％を占めるという。

どんだけブルジョアジーなんだと言われるかもしれないが、ここに住んでるお方、三千院　ナギは生粋のブルジョアジーである。

そこに奇妙な人間関係を持つ人間か分からないが、執事である綾崎　ハヤテ。

そしてメイドさんことマリアさん。　腹黒いプラスにその大人びた佇まいから本当に１７歳なのか……おっと誰か来たようだ。

そんな個性溢れる人間が使用人がいる三千院家の屋敷。

そう言えばここ最近、更に奇妙な人間が使用人になったようである。

「流石だぜ……」

三千院家の台所。　黒煙が立ち込めるなか、三千院家の執事　善立　テルは薄ら笑いを浮かべていた。

朝から続いていた自分の運の良さを改めて確認する。

目覚め良し、気分良し、タマが襲ってこない。　この３拍子が彼に自信を持たせていた。

「朝ご飯の完成だ……」

皿に乗ったその物体をテルは動じる事無く食堂へ運ぶ。　むしろその表情は誇らしげだ。

本日、自分は絶好調……なのだが。

「馬鹿者がァァァァァッ！！」

「ごふっ！」

この屋敷の主人、もとい、三千院　ナギのアッパーカートがテルに炸裂していた。

「ハヤテよ。　テルに料理を作らせるなとあれほど言っただろ」

「申し訳ありませんお嬢様……」

床に倒れているテルを一瞥し、後ろにいるハヤテは申し訳なさそうにだが、苦笑いで言う。

「えーとテルくん、この料理はなんなんですか？」

目を細めてその料理なのか分からない物体をマリアが聞く。

「何って……ミートソーススパゲティに決まってるじゃないですか？」

「一言言わせてもらう。　ミートソースは少なからずとも黒くはないはずだ」

ナギの言う通りでテルの作ったミートソースはとてつもなく黒い。　そして鼻を詰まらせるかのような異臭。　パスタは伸びきり、全体からは黒い煙が出ていた。

「キッチンも爆破しおって、一体なにをしたらあんな爆発が起きるんだ？」

「台所を見てきましたが薬品が転がってました。　あと……これも

……」

小さなビンを抱えたマリアが差し出したのは……墨汁。

「マジでか……」

呆れてそれしか言えないナギ。

「イカ墨をいかそうと思ってな。　イカ墨がないから仕方なく……」

「もはや料理と呼べませんよ！　兵器ですよ兵器！！」

ハヤテが猛然とツッコむが、テルは頭に手をやり

「ふっ…よせよ、テレるぜ」

誇らしげに言うのであった。

「お前の料理のセンスはもはや人外と言わざるを得んな……」

「いや、お嬢様も言えませんよあまり……」

ハヤテの小さな呟きをナギは聞こえないように咳払い。

「生まれついてのスキルだ。　どうしようもない」

テルが開き直ったか、両手を広げて言う。

「ならお前はアレか？　その料理で世界でも破壊するつもりなのか？」

「逆だ。　俺の料理は新たなる始まり、生命の誕生を表してんだよ……食って見ろって、そうすればお前は万物の法則を理解し、人間を越えた存在に―」

「な　ら　ば　お前　が　食え！！」

ベラベラ喋るテルに対してナギは限界だったか、テルの後頭部に手を当て、顔面をダークマターにぶちまけた。

その瞬間、テルの全身が痙攣を起こしたようにビクッと震える。

そして3秒後。

「……」

「あー、テルさーん？」

ピクリとも動かなくなったテルをハヤテが揺すると床に大の字に倒れる。

目は白目を剥いていた。

「自分が食べるまで作った料理は最高級だと思ってますからねぇ……」

マリアがふぅ、と残念そうに溜め息をつく。

「これは遺伝子レベルでヤバいですよ……」

白目を剥き、テルはついには黒い泡まで吹き出す。

「まぁ、なにはともあれハヤテよ、お前が変わりにミートソーススパゲティを作るのだ！！」

「は、はい！　分かりました！！」

（というか、朝ご飯はそれで良いんですね？）

そんな小さな疑問を考えながらせっせとキッチンへ戻る。　しかしキッチンは絶望と破滅をセットにした状態なのだ。まず最初に行うことが掃除であると思うとハヤテはトホホと先が思いやられるのであった。

○

―私立、白皇学院。

神々しい名前から察する通り、名門である。

在学中の生徒が殆どブルジョアジーであるため、校舎内にはカフェテリア、時計塔、美しい池などの立派な設備がいっぱいである。

「……」

テルは1限目からずっと机に突っ伏していた。　原因は明白である。

（頭んなかで黒いパスタがぐるぐる回ってら……）

顔色が悪いのは確かなこと、それでもその状態で学校まで来たその根性、見上げたものである。

（授業もまともに受けれたモンじゃねぇわな……）

グッタリした表情の裏はなかなか腹黒い。　堂々と授業中眠る事ができるからである。

最も、普段の授業態度とあまり変わらないが……

「かの策士、竹中半部衛は言いました。　『己を知る者を守る』と」

黒板にチョークをガツガツと音を立てながら語るのは、我らが担任、桂　雪路である。

今は世界史の時間なのだがマイナーな日本史の話が出てくるのはなぜだろうか。

「先生、今は世界史の授業です」

雪路が次に織田信長の話をしかけた所で生徒の一人が手を挙げて指摘する。

ホットピンクでよく目立つ長髪の生徒、桂　ヒナギクは雪路の妹だ。

外見からして似ても似つかない、規律を乱さない、生徒会長を勤める生徒の模範的姿である。

「良いことヒナ。　己を知るという言葉だけでも胸の中に刻んでおくべきよ！　特に今の荒んだ日本にはッッ」

再び黒板にチョークを走らせ、『己を知る』と書き散らす。

それを見てか、ヒナギクも溜め息を少しばかりつき、これ以上は何も言うまいといった表情だ。

（姉の教師とその妹が同じ教室にいるって誰もツッコミ入れんのだ

な……おえ…）

一瞬ゲロを吐きそうな気分になるがなんとか持ちこたえる。

テルはこのままトイレに直行したい気分だが体が動かない。否、動かせない。

虚ろな瞳で黒板の文字を凝視した。

『己を知る』

（そう言えば俺って自分の事、全然知らねえや……）

皆さんお忘れかと思うが、テルは記憶喪失である。

自分の生い立ちから両親の顔、その友の顔は本人のテルは誰も覚えていないのだ。

（ただ一つだけ……）

そう一つだけ、分かった事があるのだ。

かつて自分は、「先生」なる人物と暮らしていた『らしい』。
その人物はテルになぜか剣術を教え、鍛えさせていた。
（恐らく俺のことを知っている数少ない人物の一人……）
しかしその人物はどこに居るのか分かった物ではない。
最低限の関係性は思い出しても、顔は全く思い出せないのだ。
（と、考えると逆に俺のことを知ってるヤツって今の知り合いを除いたらゼロなのか！？）
なんということか。　自分は友達ゼロ人という寂しい人生を送っていたのだ（仮定）。
（はぁ……鬱だ。　自殺してしまいそうな危機だ）
死ぬ前にゲロの危機を抱えているが……
（やば、色々考えすぎたから更に気持ち悪くなってきた……）
焦点はもう合わず、力尽きたテルは視界を完全にブラックアウトさせた。

しかしテルは思う。さほど悪い過去ではないのではないかと。　少なくとも、『今』あるこの光景は楽しい。　それだけで充分だ。

あの時を迎えるまでは……。

ここは都内の高層ビル……の屋上。
そこに設けられた貯水タンクに携帯片手に立つ一人の少年。

帽子を被り、ジーンズ、左手の真っ黒な手袋。
ジャケット姿の少年は誰かと会話しているようだった。

「あーあー　東京都練馬区に到着しましたぁー、どうぞ？」

音声チェックも兼ねてか若干、間延びした声をだす。　しかし相手からの返事はない。

「もしも～し」

立て続けに相手をコールする。

「黒羽（くろはね）さ～ん、聞いてますかぁ？　木原（きはら）ですよ～」

だが答えない。　男、木原は携帯の画面に向かって叫んだ。

「ダァ――！！　このスットコドッコイ！！　返事ぐらいしやがれよ！　ちゃんと言葉分かる！？　ユアダスタン！？」

木原は息を切らしながら言い終える。　だが結局返事は来なかった。

「くそっ！！」

仕方なく携帯の通話を切る。　まぁこれは今に始まった事ではないが。

（まぁ何日も前からここにきてるし、業務連絡もしてあるから大丈夫か……でもアイツ、早ければ今夜にでも動きそうだよな）

その懸案事項を色々と考える。　どうやら木原という男は心配症のようだ。

「おっと」

ビル風に煽られて帽子が飛ばないように押さえるが、体のバランスが崩れて地面に落下する。

「ほい♪」

しかし空中で体を回転させ、体操選手顔負けの空宙返りを決めて、地面に着地。

木原は立ち上がると空を眺めて一人呟く。

「またアイツ……どこほっつき歩いてんだろうな」

そんな謎の脅威が迫る中、主人公は……

「おぼろ〝ろ〝ろ〝ろ〝……」

1人トイレにて吐き気と格闘中であった。

第５０話～始まりが近付く……とも分からないまま過ごす午前午後～（後書き）

特別編が始まりました。　また新キャラが出ました……名前は頑張った結果、あんな感じになりました。　フルネームもあるんですけど、それはまだ先の話で……

次はもう一人の方を出したいと思ってます。

質問や意見をいつでもお待ちしています。

では次回！！

第５１話～誰かが月明かりとともに現れると補正がかかってカッコイイ～（前書

どうも。シリアス長編第２話！！　さぁ新キャラ登場！！

第５１話～誰かが月明かりとともに現れると補正がかかってカッコイイ～

場所は変わり、ここはラーメン辰屋。　テルの行きつけのラーメン屋である。

香ばしい豚骨ラーメンの香りが漂う店内。

放課後、テルは体調も良くなり、体調不良のせいで取ることができなかった朝と昼の分を取り返そうとしていた。

テルが箸を割り、さぁ食べようとした時である。

「翼を生やしたお化け？」

麺を半分食べようとしていた時、辰屋のその言葉にテルは箸を止めた。

「そうだ。　なんでもココ数日、夜になると翼を生やしたお化けが現れるって話だ」

ロシア人のアルバイト、バルトが続ける。

「ふーん、どこぞのアニメ好きの坊ちゃんが見た幻じゃねぇの？」

堕落しきったかんじでテルは構わずズルズルと麺を口に運んだ。

「まぁそうだな。　確かに目撃したヤツはかなりのアニメ好きだ。しかし他の奴らも口を揃えて天使だの鳥人だの言う……1人はたしか隣近所の大塚さんだったか？」

「いや辰屋殿・・・たしか犬塚さんではなかったか？」

「バルト、ダメだ。　俺はもう点が付いてるかどうかも区別できなくなったらしい・・・」

「どーでもいいけどよ、アニメとかに振り回されて現実と二次元の区別つけられないとなるとは……日本も末だなぁオイ」

他人事のようにテルが呟く。　バルトも腕を組みながらウンウンと首を縦に振った。

「まったくだな……これでは荒んだ日本になってしまうのも時間の問題・・・」

「さりげなく俺のメンマ奪ったなテメェ・・・」

テルはバルトの口の動きに注目一体、腕を組みながらどうやって取ったと疑問を浮かべながら睨み付ける。　口をモゴモゴと動かしているバルトは動じることなく言った。

「違う違う。　これは飴玉だ。　疲れたときは糖分、働いているときもまた糖分・・・」

「黙れエセ外国人、飴玉はシャキシャキと音はたてねーよ」

「エセじゃない！　バルトだ！！　生粋のロシア人だ！！」

「テメェーら黙りやがれぇぇ！！　周りの客に迷惑だろうがァァア！！」

ゴキン！　と、テルとバルトの両方の頭に辰屋の鉄拳が飛び、しばらく二人は大人しくなった。

「お化け・・・ねぇ・・・」

鉄拳制裁の痛みに耐えながらテルは残りのスープを一気に飲み干す。
実際、そのようなＳＦじみた世界とはもう既に繋がりを持っており、さほど驚いたりはしなかった。

ーーーそして、夜。

「んじゃ、ちょっくら行ってくるわ」

「アレどこ行くんですかテルさん？」

夜の八時頃を回ったあたりか、仕事を終えたテルが何やら支度をして玄関に向かったのをハヤテが発見。　声を掛けられる。

「お仕事だ」

テルは力なく言うと、ハヤテは分かったかのように手をぽんっと叩く。

「ああ、伊澄さんのお手伝いですね？」

「まぁそんな所だ。　多分おれは今日は屋敷には帰れないだろう・・・」

眠そうなテルだが仕方ない。　悪霊退治はたいて夜に行われる。しかも不定期であり、伊澄からの連絡があり次第問答無用で駆り出されるのだ。　そのため、テルは朝帰りを余儀なくされている。

「僕も行きましょうか？」

ハヤテが心配そうに言ったがテルが手をかざして制する。

「いんや、構わない。　どうせ伊澄が一人で片付けちまうし必要ねぇだろ。　それに最近生きのいい新人さんが仲間になったからな」

そう。　たいていの荒事はほとんど伊澄に任せている。　テルは何をするのか？　聞くまでもない、ほとんどが伊澄のサポートだ。そう、囮役という名の。

ちなみに、最近入った新人というのは某関西人だ。

「咲夜さんも大変ですね・・・」

「まぁそうなんだがな？　確かに半分強制だから、幼馴染だから結構な頻度で咲夜が伊澄と居ることがあるよ？　でもテルさんはポジションチェンジなんて全然気にしてないよ？」

「本当は気にしてるんですね・・・」

「んな訳ねーじゃん？　テルさんそこまで寂しがりやな訳ないじゃん！？　遅刻が多いからって左遷されたわけでもないしィ？　今日だってもう既に一時間くらいもう遅れてるから機嫌直しにハーゲンダッツあいつ等に買ってやるけど別にいつも遅れてるから左遷された訳じゃないんだからね！？」

「原因は明白ですね・・・」

その様子を見た限り、ある程度の察しがついたハヤテはやれやれと言った表情だ。

「ヤベェ・・・もう俺の財布には五百円玉しか存在しない・・・ハヤテ、ちょっくら貸しｒｙ」

「嫌ですよ♪　僕だってギリギリですから♪」

最近ではハヤテもテルに対して扱いが変わってきたようである。

ーーーーーーーーーー

場所は変わり、どこぞの神社。　鳥居を抜けたそこには大きく空間が広がっている。　夜の神社は怖いという風評もあってか、人はいない。

そこを生業としている者たちを除いてだが。

砂塵と爆発が起こり、辺りは散らかされたと言うよりは戦争でも起きたのかという惨状。

あちらこちらの地面はクレーターを作り、神社の犬神の像は原型を留めていない位に崩れている。

「ぷはっ・・・しんど」

突如、土の中から一人の少女が這い出てきた。　テルの言っていたもう一人の新人こと、愛沢　咲夜である。

「相変わらずど派手にやりおったな～」

「ごめんなさい咲夜・・・大丈夫だった？」

砂埃を払う咲夜の前には和服を着た一人の少女が立っていた。　鷺ノ宮　伊澄である。

「この惨状を見る限り大丈夫なんて言える訳ないやないかい！！」

パシン！　と咲夜お手製のビックハリセンが伊澄の頭に炸裂する。

「あう・・・」

あまりにも決まってしまったのか、少しばかり頭を押さえる伊澄。

咲夜は腕を組みながら続けた。

「しかし今回はかなり手こずったんな～」

「すみません・・・なかなか手ごわかったので・・・ごほっ」
と手を口に当てて咳払いする伊澄に咲夜が気づいたか心配そうに聞いた。
「なんや自分、体調でも悪いんか？」
「そんなことないわ。　少しだけ疲れただけよ・・・」
ふぅと咳が収まったのを確認して、いつものようなゆったりした喋り方になる伊澄。
「そうか、ならえんやけどな・・・ところでコレどないするん？」
咲夜がそう指すのはこの荒れ果てた神社だ。　一応明日にも来るか分からないが参拝客、つまり一般人だって来るのだ。　この荒れようは流石にマズイ。
「大丈夫よ咲夜、こういう時はあとで式神をつかって直しますから・・・」
「出たな陰陽師の特権・・・」
キランと目を光らせる伊澄に咲夜がぼそりと呟いた。
「ところで・・・テルはまた遅刻かいな」
首に手をやる咲夜はこの場にいないもう一人の人物の名を呟く。
「まったくです・・・咲夜が来てからというもの、最近は仕事もサ

ボりがちで・・・」

「いや、それじゃまるでウチが来てから来なくなったみたいになっとるやんか・・・」

袖で口元を隠しながら不満を言う伊澄に咲夜が冷静にツッコム。

ふと気づいたかのように咲夜が伊澄に聞いた。

「そう言えば伊澄さん、テルの事どう思っとるん？」

「え？」

その言葉にか、伊澄は一瞬思考を停止したかのように動きを止めた。

しかし言葉の意味を理解したか、慌てて咲夜に聞き返す。

「どう・・・どうって、どういうことかしら・・・」

「ん？　いや別にな？　この仕事してて分かったんやけどな、テルの隣に立っている伊澄さん、メッチャ楽しそうな顔しとるからな～」

ちょっとばかり小悪魔じみた笑みを浮かべる咲夜に対し、夜だというのに薄暗くてあまり顔色が分かりづらいのだが、伊澄の頬は紅くなっていた。

「そ、その・・・」

「ん？　実際どうなんや？　ん？ん？」

面白がって咲夜は続けるが伊澄は一向に恥ずかしそうにして、話そうとしない。

しかし、ようやく伊澄が口を開いた。

「なんと言えばいいのか・・・分かりません・・・」

「・・・・そっか」

（これは・・・相当やで）

伊澄に気付かれることなく笑うと咲夜はこの話を切り上げることにした。

（しかし、あの万年金欠しそうで死んだ魚の目をしたあの男にそんな価値があるんかいな・・・）

その点だけを見るととても他の女に声を掛けられるようなことはないと第一印象で決めていた咲夜は不思議に思っていた。

（はぁ・・・これじゃホントにワタルが可哀想になってきたで・・・）

またしてもため息、どこぞのレンタルビデオ店の子供店長のことを考えていた咲夜だったが

「まったく咲夜は・・・ごほっ」

伊澄の咳に反応して思考を中断した。

「なんや、熱でもあるんやないか自分？」

よく見ると、伊澄の顔は熟れたリンゴのように赤かった。　どこと

なく息遣いも荒い。　目も少しばかりか覚束無さそうだ。

「実際立ってるだけでも辛いんとちゃうんか？」

「だ、大丈夫よ・・・疲れてるだけで・・・・」

そう言って、伊澄は笑顔を浮かべる。　しかしそれが作り笑顔だというのは見て分かった。

「ま、もう少ししたらテルも来るしな。　責任もって負んぶしてもらわなあかんな～」

「も、もう～！　咲夜～～！！」

「嫌なん？」

そう言うと、またしても黙り込んでしまう。　今度は頭から湯気が出てきていた。　ここまで来ると正直すぎて笑えてくる。　ますますワタルが可哀想になった。

結構この生活にも慣れてきていた咲夜はこの状況下でも笑い飛ばしてくれる度胸があった。　彼女の中ではどんな時でも『爆笑』を心がけているからだ。

（今はもう・・・一人じゃない・・・）

伊澄は思う。光の巫女として悪霊と戦う日々。　ずっと一人だった。

誰かに話しても信じてもらえないだろうから、信じたとしても自分のいる世界は楽しいことはない、逆に危険だけが満ち溢れている。

それでも彼は逃げなかった。
そばに居てやると言った。
自分はそれに応えられているだろうか。

少なくとも・・・・彼女の中で、守らなければならない者が増えたのは確かだ。
だからこそ誰も傷つけない。させない。　それだけの決意が彼女にはあった。

「私は幸せだったんですね・・・・咲夜」

少しばかりボーッとした眼差しで呟く。　咲夜は笑いながら返した。

「ちゃうちゃう、幸せなんやで？　伊澄さん」

「そうね」

そうお互いにクスクスと笑う。　あとはこの場所にもう一人来ればいいのだが・・・・と考えていた時だった。

「・・・・・？」

風が・・・・・吹いた。

「おお、寒い寒い。　これは風も引いてまうわ・・・ってどないしたん伊澄さん？」

咲夜が両肩を押さえながら咲夜を見た。　普段見せない、悪霊退治に見せる険しい表情。

「・・・これは？」

伊澄が辺りを見回す。　勘という以前に、脳が認識するよりも早く肌という器官が察知した。
その気配を探り、その『何か』の場所を特定する。

「・・・・・！！」

それが自分の後方にいるとは最初は分からなかった。　ちょうど雲がかかり、月が隠れていたからだ。

後方の鳥居の上に『そいつ』は立っている。

「あなたは・・・？」

次第に雲に隠れていた月が姿を現す。　と、同時に月明かりに照らされその姿が明らかになった。

『そいつ』は伊澄の意を介さず、地面に降りた。

「うわっ」

咲夜が声を上げる。　鳥居は少なくとも6～7メートル位あるだろうか。　そこから直立姿勢のまま飛び降りた。

ストッ。

と静かな音だけを立てて『そいつ』は着地した。

月明かりに照らされたのは一目見れば分かる位の黒が目立ち、若干の白のラインが入ったローブを着た『人』だ。

（・・・人？）

それでも伊澄は疑念を巡らせていた。　目の前にいる奴は少なからずとも『人』だ。　黒のローブの袖からは白い肌をさらして、黒のブーツがあるところ足もあるのだと理解できる。

しかし、この背筋からくるものは何だろうか。　生まれてこの方、背筋が凍るほどゾッと感じたことはない。

（悪霊？・・・いったいこれは・・・）

渦巻く疑念を振り払おうと札を構えたその刹那。　相手が右手を翳してきたのが見えた。

その瞬間、伊澄は本能的な反射で前方に結界を張った。

その判断は正解だったようで伊澄の結界に『何か』がぶつかる。

力と力の衝突により、地面の砂が舞い上がった。

「これは・・・・」

砂埃が晴れてきて目に入った光景に伊澄は驚愕した。
　結界にぶつかってきたのは先端が尖った黒い物体まるで槍だ。
しかし驚くのはその出所。　それは細く伸びてフードの翳した右の掌から出てきていた。

「・・・・・」

フードの人物は何かが自身の『攻撃』を阻んだのが分かったのか、その槍を自身の掌の中に『戻す』。

「う、腕の中に消えたで・・・」

咲夜もその光景をみて唖然としていた。

「咲夜、私から離れないで・・・」

「え？　何を言って・・・ってまた来た！！」

咲夜が言いかけたところでフードはまた右手を翳して黒い槍を放つ。

「同じ手・・・ッッ」

と、同じく前方に結界を展開した。　だがそれを図ったかのように槍は結界に直撃する寸前に枝分かれした。

「うわっ！　色んな所から来るーーー！！」

「くっ！！」

前方に結界を張っていたために虚を突かれたが、伊澄は即座に全方位に結界を展開。　激しい衝撃音が四方八方から襲ってきた。

「はぁ・・・はぁ・・」

黒い槍はまたしても貫けず、主の元へ戻っていく。　ここで咲夜があることに気付いた。

「伊澄さん・・・息が荒いで？」

「え？」

そう。　先ほどから、伊澄は自身の体調の変化に気付けないでいた。　頭がぼんやりして集中力が足りず、額からは異常なほどの汗が出ていた。

「・・・・・」

それを見たフードの人物は同じように黒い槍を放つ。　しかし今度は両手だ。

二本の両手から放たれた槍は同じく枝分かれし、無数の槍と化す。

その量に空一面が漆黒の色で塗りつぶされた。

「耐える！！」

その決意のもと、防御意識して、全方位ほ結界を作り出す。　次の瞬間、槍の雨が襲いかかってきた。

何千何万という槍の衝撃に結界は耐えてくれるだろうか。

（なにがなんでも・・・守って見せる！）

辛い体力の中、それだけを想い、力を込める。

先ほどとは尋常ではないほどの砂埃が舞い上がる。

襲ってくる衝撃がなくなるのを確認すると伊澄は安堵した。

「耐えた・・・」

荒い息を吐きながらフードの人物を見据える。　しかしその目に映った光景を見て、伊澄は目を見開いた。

大木が浮いている、否、持ち上げられているのだ。　今度は黒い腕が肩から伸びて、その大木を持ち上げていた。

「うわあああ！　伊澄さんまた来るで！　結界結界！！」

振りかざしているのを見てその大木を叩きつけてくるのは明白だろう。　しかし同じように結界を使って守ればいいと咲夜は簡単に言うが、伊澄は顔をしかめた。

「この結界は霊的な攻撃の類を完全に遮断するけど・・・それ以外は」

そこから先は言わなくても分かった。　つまり、物理にはめちゃくちゃ弱いということだ。

「ぬおおおおお！！」

大木が動きを見せた瞬間、咲夜が叫び声を上げながら伊澄の手を引いてその場から退避。　振り下ろされた大木は轟音を上げて地面に叩きつけられた。

「どわぁぁぁ！！」

地を揺るがす威力に、二人は見事に地面に伏した。

「なんか無いんか伊澄さん！！　マジヤバいこの状況を打開する術とか！！」

手をばたつかせながら伊澄に聞くが、肝心の伊澄には聞こえてなかった。

（ああ、マズイ・・・）

目の前の景色が歪む。

（力が・・・・）

歪んだ伊景色を少しだけはっきりさせると右手を翳しているフードの姿が見て取れた。

この状況、何かしないと確実にやられる。　しかしその手段すら考えられないのだ。

まさに絶体絶命。

（テル・・・さま！）

その名を心の中で叫んだ時、黒い槍が二人に向かって放たれた。

「なあぁぁぁぁあ！！？」

咲夜も覚悟して目をつぶった時だった。

べちゃ。

と、何かぶちまけたかのような音が聞こえる。　恐る恐る目を開けると、そこには槍に貫かれたアイスがあった。

「・・・・・」

フードの方にもアイスは投げられていたようで、肩から飛び出ていた槍がそのアイスを貫いている。

「あ～あ、オレの小遣い全部無くなっちゃたよ。　どうしてくれる？」

月明かりに照らされた男は残念そうに頭を掻いていた。

「テメェら、ご近所迷惑ってのが分かってねぇな、特に関西！　叫びすぎて耳が破裂しそうだっつーの！！」

ダルそうに答えると、右手に携えていた鉄パイプを肩に担いだ人物は・・・

「さて・・・お前は何モンだ？」

善立　テルその人であった。

第５１話～誰かが月明かりとともに現れると補正がかかってカッコイイ～（後書

さぁ無駄に力を入れすぎて失敗したかもしれない戦闘の描写、いかがでしたか？
今回は体調がいかん伊澄さん。　実際この人がチートなのでこれぐらいしないと均整が・・・相手も十分チートですけど。　それでも咲夜でシリアス雰囲気を中和させようと思っていましたが、なかなか難しいところです。

次回はテルさんと謎の敵。　どうなるか分かりませんが一応・・・グロ注意。

では次回！！

第５２話～月下、死神の調べ～（前書き）

どうも、夜中の投稿になります。　そんなこんなで第３話は・・・・・
スイマセン、グロいです。　新キャラの意外な真実が明らかに。

第５２話～月下、死神の調べ～

夜の神社に異形、現る。

「お前……何モンだ？」

テルはそのフードの人物と改めて対峙する。テルも相手の佇まいから何か感じ取ったか伊澄に聞いた。

「伊澄……こいつァ、悪霊なのか？」

伊澄の違和感にテルも感づいたようだ。　伊澄は分かる事を伝える。

「分かりません……ただ、これだけは分かります。　危険だと……」

「なるほど」

そう聞くとテルは一層険しい顔になる。　伊澄がここまで追い詰められた事があっただろうか？

「ま、何にしてもとっとと追っ払ってやらないとお前の体が心配だ」

少しばかり笑うと鉄パイプを構える。

「まったく、テメェもテメェでその格好は何なんですかァ？キン○ダムハーツの１３機関ですかコノヤロー」

「……」

テルの軽い挑発にも相手は同時ない。　その不動さ、まるで山のごとし。

（チッ、気味悪いぜ……）

心の中で呟いた瞬間、相手が動きを見せる。　右手を翳した。
右手の掌から黒い槍が飛び出した。

「テル様！　避けてくださいッ！」

その伊澄の言葉が聞こえ、反射的に横に跳ぶ。

そしてテルの居た場所に黒い槍が真っ直ぐ突き抜けた。

「なんだ、ゴ〇ゴムの実でも食べたのか？」

突き抜けた槍は奥の木を貫いていた。　凄まじい破壊力である。

「伊澄、助かったぜ！」

「い、いえ……」

相手と対峙したまま礼を言うテルに伊澄は満足いく返事は出来なかった。　体力の消耗が激しい。

「なぁテル！　もしかしたらアイツめんどくさい攻撃する分だけで、生身はそんな強くないかもしれないで！？」

矢継ぎ早に放たれる槍を鉄パイプで弾くテルに咲夜が叫んだ。

「確かに！　ＲＰＧでは魔術師は物理に弱い……その考え乗ったぜ関西！！」

「関西やなーい！！ちゃんと名前で呼べボケェッ！！」

怒る咲夜を無視してテルは相手の懐に接近を試みる。

「……」

フードはそれを見るや左手も翳して黒い槍をテルに向けて放つ。

「邪魔くせぇなホント！！」

枝分かれした無数の槍が迫るが、鉄パイプで体に当たる最小限を弾いて前進をしていた。

「アイツ…何者なんや？」

その光景を見て、咲夜が思わず呟く。　恐らくテルについてだろう。

「私も詳しくは分かりません……でも、これなら…」

伊澄の知らずの内に笑顔が戻る。
これなら倒せるのではないかと。

一方でテルは確実にフードの距離を縮めつつあった。
迫ってくる槍の横腹を軽く当てて軌道をズラす、それを繰り返す。

「コノヤロ……今その化けの皮剥がしてやるぜ！！」

そして槍を弾いた瞬間、本能的に彼は相手の懐へのルートを見いだした。

ここからは防御不要。　一撃の元に沈める所存だ。
強く地面を蹴り、一気に駆ける。　途中体を槍が掠めるが止まる気はない。　必殺の一撃をお見舞いする為にテルは地面を飛んだ。

「……」

フードもすぐさま右手の槍を引き戻すが、タイミング的に間に合わない。

「ちょいと痛ェーぞ！！　治療費は出してやんねーけど！！」

飛んだ姿勢から鉄パイプを構えて、相手の側頭部目掛けて振り込む。

バキッ！

「き、決まった……」

明らかにヒットしたであろう快音を見逃す事無く咲夜が呟く。

しかし、テルは違っていた。　鉄を通して感じる違和感はなんだ？
疑問を胸にテルは次に目に映る光景を信じられなかった。

先ほど放った一撃は、手加減したのもあるが相手の意識を奪うのには充分だったとテルは認識していた。

だがその一撃が、相手の素手に止められていたなんて、信じられなかった。

「「〜〜〜〜ッッッ！？」」

その真実に気付いたかで咲夜と伊澄が唖然としている。

（オイオイ……なんだよ、俺は鉄でも殴ったのか？）

鉄パイプを通して伝わる違和感にテルの頬に冷や汗が浮かんだ。

「……」

フードの人物は鉄パイプを掴むと、フードの中からテルを見据える。

「……ヤベ」

そう呟いたテルが見たのは相手の肩。

その肩から黒い物体が現れる。　それが鎌のような形になるとテルの首目掛けて襲ってきた。

「ちぃ……ッッ！！」

その鎌が首に掛かる瞬間、相手の腹部に蹴りを入れ、その反動で後方へ飛び退いた。

程なくしてヒュンッ！　という風を斬る音がする。鎌が振り抜かれた音だ。

「オイオイ、クビちょんぱは勘弁だぜ……」

飛び退いたテルが自身の首が繋がっている事にふぅとため息をつく。

「オオォイ関西ッ！！　話が全然違ェーじゃねぇーか！　危うくクビ無しになる所だったぞ！！」

テルが咲夜に向けて猛然と叫ぶ。　その言葉に咲夜は怒鳴り返した。

「うっさいわボケェッ！　悪魔で予想の話やアホンダラァァァ！！」

その突っ込みよう、まるでこのシリアスな雰囲気をも感じさせない。

テルは改めて向き直る。

「ったく……鉄パイプ殴られてピンピンしてんだけど…どこの夜兎族ですかコンチクショウ」

テルが再び鉄パイプを構えたその時である。

「……」

もう片方の槍を引き戻した相手は、自身のフードに手をかけた。

そしてゆっくりと、フードを脱ぎ始める。

月明かりがまたしてもいい仕事をして、フードを脱ぐ動作に演出がかかる。

「冗談じゃねぇ……」

テルはその現実を直視できずにした。

フードの中で隠れていた黒い長髪がその手により姿を表す。

その髪は腰辺りまで伸びる。　癖っ毛もないストレート。

黒衣に身を包んだ人物の正体は……空色の瞳をした少女だった。

「な、なんやと……？」

咲夜も相手が少女だった事に同じく驚きを隠せないでいた。

一方で伊澄も。

（謎の術、有り得ない防御……どれに関しても情報がない。　でもここはテル様に任せるしかない……）

まだ分からない未知の力。　今の自分では抵抗も虚しい。　目の前のテルに頼るほかなかった。

「ったくよ……そういう事になると、ますますヘコんじまうぜ……」

勿論、テルとしても黙っている訳がない。　仮にも鉄パイプの一撃を片手で止めるという屈辱を味合わされたのだ。

しかし、意外な事に今度は相手が仕掛ける。
それはゆっくりと倒れるようで、次の瞬間、タンっと跳ねるように踏み込んできた。

そして着目すべきは相手の右手、今度の右手には槍はない。　しかし代わりに黒い刃物らしき物が生えている。　素早くその刃を振るう。

それを素早く反応し、テルもまた鉄パイプでその一撃を防ぐ。　互いの獲物が鉄をぶつけたような鈍い音が響いた。

少女の攻撃は止むことない。　その一振りを防がれたのを確認して体の姿勢を低くした突き、下段斬り、武器を弾いて首を狙うという流れるような舞の動作でテルを追い詰める。

「調子乗るんじゃ・・・ねぇッッ！！」

一方的に攻められるのは好きではないテルは、首を狙った突きを体を捻って躱す。　少女の真横に対面し、横薙ぎに鉄パイプを一閃。

今度はしっかりと捉えた筈だった。　しかし、その攻撃は空振りに終わる。
少女は超人的な反応を見せて、真上へとジャンプしていたのだ。

「なんじゃそりゃあああッッ！！？」

咲夜が驚くのは無理もない。　その少女は地面から7、8メートルの高さまでジャンプしていたのだ。
とても人間が助走なしで跳躍できる高さではない。あり得ない。
しかし、その『あり得ない』ことは続くのだ。
それは見上げていたテルが最初に気付いたことで、流石に夢でも見てるんじゃないかと一度目を袖で擦った位だった。

少女の背中から翼が生えていた。

「なるほどね・・・・」

この時テルは辰屋から聞いていたあの言葉を思い出す。
――口を揃えて鳥人だ天使だの言うんだよ

「冗談じゃねェ・・・鳥でも、むしろ天使ですらねぇ」
目の前のこの光景に、自分が思い浮かべた一番のイメージはこうだ。
「悪魔だろうが・・・」
その呟きを入れた瞬間、少女はその翼を広げて一気に急降下。
「くそ・・・・」

滑るかのように降下した少女は黒い刃物をスピードを生かして切り込んでくる。　それに対してテルは鉄パイプで弾いて応戦した。
　しかし、今度はスピードという力が働いている。　下手したら押し切られる可能性があるため、弾くと同時に真横に跳んで回避する。

「・・・・・」

だが少女はすぐさま身を翻し、テルに向かって刃を振るう。　先ほどとは違って、またスピードを上げている。　回避などさせない気だ。

地面と空、縦横無尽に対応した戦い、相手は戦いを知っている。テルはそう思っていた。

「チートっていうレベルじゃねぇぞ・・・」

弾き際、いったん距離を置いたテル。　しかしその足場には自身の血が少しばかり流れていた。

「だ、大丈夫なんか・・・」

その姿を見てか、遠くの咲夜が心配そうに伊澄に聞く。　だが伊澄は動じることなく答えた。

「大丈夫よ咲夜・・・テル様はやる時はやる人です」

それはお互いを信頼しているから発せられる言葉だった。

「・・・・」

どうやらテルが何か閃いたか先ほどとは違い、冷静な顔で相手を見据える。

相手はまたしても空からの滑空攻撃を仕掛けてきた。　ここまではテルの予定通り。

体を静め、頃合いを見計らったのを見てテルは片腕でゴルフボールを打つ要領で地面を穿った。

「オラァァァ！！」

鉄パイプにより生み出された砂埃が少女を包む。　少女は砂埃でテルを見失ったか、滑空をやめてその場に降りた。

「喧嘩は真正面だけじゃねぇーんだぜ！！」

その背後から砂埃に紛れてテルが現れる。　これは完全に隙をつけた。相手はまだ気づかないでいる。

これで終わらせる。　そう決めて鉄パイプを振り下ろした・・・だが。

ガチンッ。

と、金属同士の衝突による鈍い音が響く。

「な・・・ッ」

鉄パイプは少女に触れられることなく防がれていた。　両肩から生えた黒い腕によって、鉄パイプは防がれていたのだ。

これにはテルも唖然とせざるを得ない。　相手はこちらにまったく気づいていない状態でガードをしたのだから。

「・・・・・」

その一瞬の隙を少女は好機だと感じたのか、黒い刃物をさらに変形させる。

今度は黒い剣。　しかし、武士の使う刀とは比べ物にならない長さだ。　西洋でいう長剣の類だろう。

少女は片足を軸に、まるでコマのような体を捻りながらしながら不向きざまに真横に長剣を振るった。

「やべ・・・」

反射的に体を鉄パイプでガードしたまま後方に飛び退く・・・だが。

バキンッと聞きなれない音がした。　それは自分の右手にあるパイプが発した音である。

鉄パイプが真っ二つに折られていた。

まともに鉄パイプで受けたのが原因か、テルの体がまるで紙のように吹き飛ぶ。　地面に転がったテルは頭を押さえながら上半身だけを起こして体制を立て直そうとした・・・その時。

バシュッ。

何かが自分の体から勢いよく吹き出す。　最初はまったく分からなかったが血だ。　それはまるで噴水のごとく飛び散り、地面には真っ赤な血がべっとり。

胸から一閃させられた傷は思ったより深く、そこからは物凄い勢いで血がドクドクと流れていた。

心臓が波打つたびに血の出る量が変わる。　それを見ていたテルは青ざめた表情をしていた。

「オイオイ・・・これマジヤベェって・・・・・！！！」

恐らく、この瞬間が最大の好きだったであろう。　こともあろうに、テルは少女が眼前に迫るまで気づいていなかった。

翼を広げて地面から動けないテルのすぐ上で黒い長剣を構える姿が目に入った。

当然、反応することも叶わなかった。

ズブッ。　といテルの腹部に長剣が深々と突き刺さった。それは体の肉の影響を全く受けないくらい滑るように体を貫き、地面にも突き刺さる。

ズドンっと衝撃が体を駆け巡ったとき、テルは盛大に口内からは血を吐き出した。、その少女にもその血がかかる。

しかしべちゃ、と顔についても少女は血をふき取るどころか、その無表情を崩すことはなかった。

全てを吸い込んでしまいそうな空色の瞳を持つ少女はこの時は死神と呼ぶに相応しい。

地面に縫い付けられるように動けなくなったその姿は串刺しという言葉がピッタリなぐらい、残酷な絵図だった。

「あ、ああ・・・」

咲夜が目をそらす中、伊澄が肩を震わせる。　そして変わり果てた自分の大切な人の姿を見て神社に悲痛な叫びが響いた。

第５２話～月下、死神の調べ～（後書き）

今回の相手の使った武器のイメージを簡単に説明します。
黒い刃物は「Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ」の立華　奏の『ハンドソニック』のイメージで。
黒い長剣は・・・もう銀魂を見てる人はそこまでグロくない紅桜想像した方が早いかと。

はい、これにてテル死亡。　来週から新しい小説が・・・始まりません！！　絶対に始まりません！！　主人公ですから、生命力はゴキブリ並ですから！！というよりこれホントに『ハヤテのごとく！』かい？　別物じゃないのか？　なぜテルがグロイ結果に・・・次回もまた急テンポでいきます。　なんとここまで一言もしゃべっていない新キャラ。　どんだけ長門なんだよ。だいたい読者の皆様も新キャラの少女の名前は分かっていると思いますが次で一応種明かしです。
では次回！！

第５３話～それはやはりお約束～（前書き）

今回は少し短めです。

第５３話～それはやはりお約束～

「かっ・・・は・・」

体を貫く激痛に耐えながら、テルは意識を保っていた。　見上げればすぐそこには自分を貫いた少女がいる。

「・・・・」

まるで慣れているかのような冷静さ。　いや、冷静すぎる。　まるで感情が全く機能していないような機械のような表情だ。

体を動かそうにも、見事なまでに地面に串刺し状態、とても動かして反撃とまではいかなった。

その時。

ｐｒｒｒｒ！

少女のローブのポケットから無機質な電子音。　どうやら携帯を所持していたようだ。

空いている片手でポケットから携帯を取り出す。

『黒羽・・・今どこにいる』

電話をかけてきたのは男の声。

「・・・・神社」

『例の物は見つかったのか？』

「見つからない・・・少なくとも、私のいる場所に『石』の気配はない」

トーンも全く変えずに静かに応対する黒羽という少女。

この隙に逃げ出せないかと画策していたが、視線はずっとこちらを見ており、動けない状態は変わらない。

『あー、分かった。　オレの方でだいたい目星がついたからいったん戻って来い・・・誰かに見られたか？』

男の言葉を聞くと、黒羽は辺りを見渡して一言。

「・・・三人」

『そいつらは？』

「口封じ」

プッ。　と携帯を切ったのを皮切りに、黒羽は長剣を抜こうとする。

完璧に首から切断し、その命を消すつもり・・・だった。

「・・・・」

抜けない。　さきほどから力を込めて抜こうとしているのだが微動だにしない。

「オイ・・・」

と、小さな声。　視線を向けるとテルが長剣を両手で握っていた。
刃の部分を掴んでいるため、手からも血がドクドクと流れる。
「こんなもんで・・・俺の心は折れねーよ・・」
「・・・・・」
抜けない。　一体どこにこんな力があるだろうか。　もはや相手は虫の息のはずなのに。
それなら…と、もう片方の手を刃物に変形させてトドメを与えようと構える。

「八葉六式……撃破滅却！！」
黒羽が振り返えったとき、巨大な光線が直撃した。
咄嗟に羽でガードしたが突き刺さっていた剣ごと吹き飛ばす。
「これ以上は……やらせません！」
鬼気迫る口調だが顔は涙目の伊澄は限界な体力を使って札を構える。
「……」
黒羽も地面を転がってムクリと起き上がる。　羽は伊澄の術を受けても少ししか効いていないようだった。

その表情はどうやら痛みを知らないというぐらいに平然としていた。
羽を広げて空へと飛び上がった黒羽は伊澄に目を向ける事無くその場を去っていった。

「……帰った？」

静まる場の中で咲夜呟く。　すると倒れていたテルが消えそうな声をだした。

「へへ……ありがとよ伊澄ちゃん、お前はやればできる子だって信じて…たぜ」

ここまで傷を負いながら笑いながら返すテルはそう呟くと目を閉じてしまう。

「テル様！？　さ、咲夜どうしよう！テル様が死んじゃう！」

「おおおお落ち着けぇ！　アンタも結構ヤバいんやから！　」

「た、タイムマシンを・・・」

「ボケとる場合かァァァ！！　応急処置ィ！　取り敢えず伊澄さん家に運ぶで！！」

病人である伊澄にツッコミを入れるとすぐさま咲夜は携帯を取り出す。

こうして、テル一時的に鷺ノ宮家に運ばれることになった。

○

その翌日。　テルが襲撃されたことがまだ誰にも知らされていない三千院家。

「あれ？　テルさん今日は帰ってこないのかな・・・」

ハヤテもこういう日があるのは承知していた。　テルが朝見かけないのは仕事の影響であると。

普段はこういったときはハヤテの方からうまく話をしているのである。伊澄の仕事は一般の人物には公にできないことであり、内密にしなければならないからだ。

ナギやマリアにうまく説明するのも一苦労だったがなんとか言いくるめてナギとともに学校へ登校。

「ふぅ、あのバカが居ないと何とも静かな登校となるな・・・」

「ハハ・・・」

そんな登校道、ため息をつきながら歩いていると・・・

「ほい」

突如、ナギの視界が真っ暗になった。ハヤテが振り返ると

「おはよう少年」

ナギの背後にいたのは黒い長髪で凛々しい顔立ちの先輩。　見た目はものすごいナイスバディ、自称ちょっぴりおお茶目な姉御肌、奈津美　唯子である。

「唯子さん、おはようございます」

「うむ」

唯子は頷くと、ぱっとナギの目を塞いでいる手を離す。

「何をするのだ！！」

「フッ・・・スキンシップだよナギくん」

腰に手を当てて軽い笑みを浮かべながら唯子は言った。

「まぁもっとも、私のスキンシップは多くの種類が存在するが――」

「あ、唯子さんおはようございます」

唯子の台詞に割って入るように、後ろからヒナギクが挨拶をしてくる。　それを聞いた瞬間、唯子は１８０℃回転、その場で飛び上がるとそのままヒナギクに抱きついた。

「ハーハッハッハァァーーーー！！　ヒナギクくぅぅぅぅウン、おはようだァァ！！」

「なんてダイナミックな朝の挨拶ッッ！！」

「私のスキンシップは百八式まであるぞ！！」

ハヤテが遠くでツッコム中、唯子の高笑い。　ヒナギクは抱きつかれたまま戸惑っていた。

「あの、唯子さん。　一応公共の場でもあるのでこういったのは止めてください」

「なんだ？　なら誰もいないところならオゥケェーイなのか？」

「いいわけないです！！」

ヒナギクが顔を真っ赤にさせながら否定。　仕方ないといった感じでヒナギクから離れた。

そう、何を隠そうこの唯子先輩、かわいい女の子なら誰でも抱きついたりしたりと度を越えたスキンシップをする人なのだ。

「おや？　今日はテル君がいないのだな？」

唯子が一人足りないということを察したのか顎に手を当てて呟く。

「なんか自分探しの旅に出ているらしいぞ」

ナギが素っ気なく答えるとヒナギクがマジで？　といった表情で聞いた。

「自分探し？　職探しの間違いじゃないかしら？」

その言葉にハヤテが説明を加える。

「なんでも『おれは世界の崩壊を止めるために様々な世界を旅しながら自分の記憶の究明に務めるぜ！！』って言ってました」

「ディ○イドじゃないんだから・・・」

しかし、これはすべてハヤテのアドリブである。　もう少し、まともな言い訳を考えられなかったものだろうか。

「そういった理由で学校を休むとは・・・取り敢えず減給は免れんな・・・」

ナギが言えたあ言葉か？　と一同が視線を向ける中、ますます生活がひどくなるテルであった。

○

そして時間は早く流れて放課後、その帰り道にハヤテとナギはいた。

「疲れた・・・こんなことならテルと同じく世界をめぐる旅に出ればよかった」

ため息交じりにそう呟くナギに苦笑いのハヤテ。

「ああ、そう言えば足橋先生の『もうなんだかんだ憂鬱』の新巻が

もうすぐ出るじゃないか……」

「あ、近くの本屋で買いますか？　ちょうど僕も買いたい物が―」

ｐｒｒｒｒ！

「あれ？」

ポケットの携帯が震える。　ナギも早く出ろと言わんばかりにアイコンタクト。

「もしもし……あ、咲夜さんですか？」

「ふぁ……ん？」

長い話になるかと思ったナギが大きく欠伸をする。　そして何かを見つけたか地面を見ると一冊の本が……

「これはッッッ！！『もうなんだかんだ憂鬱』の新巻ッッ！？」

ナギが肩を震わせるほど歓喜するその本はナギが先ほど呟いた新巻だった。

（なぜこんな所に……いやそんなことはどうでもいい！！）

小さな疑問よりも目の前の大きな欲望が少女を突き動かす。

手を伸ばして掴もうとした瞬間。

―その時、不思議な事が起こった！（仮面ラ〇ダーｂｌａｃｋ　ＲＸ風に）

ピョン。

「ヌッッッ！？」

ナギ掴む瞬間、風が吹くと同時に本が動いたのだ。

なんだ風かと思い再び手を伸ばす……が。

ピョン。

「なに！？」

ピョン。

「待て！」

ナギはたびたび動く本を追いかけてハヤテからドンドン離れていく。

しかも不幸な事にハヤテは電話をしているためそれに気付いていない。

気付けばナギは誰もいない路地に入っていた。

「取ったァ！！」

漸く、念願の本を掴んだ。　しかしナギは表紙を見て唖然とする。

ピラっと表紙が剥がれる。　テープで接着していたらしい。

新しい表紙には……

『幸子の憂鬱～昼と夜の愛憎劇～』

「偽モンじゃねぇぇぇぇぇぇか！？」

勘に障ったか勢いよく地面に幸子は叩き付けられた。

「……いや、でも大人の本って…いや、待て待て、まだ早いだろ？　いやいや、行けるって行けるって。　大丈夫大丈夫、何が大丈夫かって分かんないけどとりあえず大丈夫……ちょっとだけ」

まだ踏み込んだ事のない境地……というのもハヤテやマリアがそういった物を見せないからだ。

「そうだ・・・この見たいという欲望・・誰にも止められないッッ」

そのページを開こうとした時。

ガシャ。

「へ？」

突如真上からナギを覆うようにザルが振ってきた。　かなりデカい。

「なんでザル！？」

闇雲に突っ込むがただのザルではないらしく、中についていたセンサーらしきものから煙が吹き出る。

「……」

そのままナギはパタリと倒れて寝てしまった。

暫くして。

「はっ……と」

今度飛び降りてきたのは人だ。　ザルをどけるや本を摘んで呟く。

「マジでこんな手に引っかかりやがった……三千院家、恐るべし」

男はヒョイとナギを抱えるとポケットから紙切れを取り出し近くに捨てる。

「ま、いずれアイツにも嗅ぎつけるだろ……」

ナギを抱えた少年　木原はその場を歩きながら去っていった。

「分かりました……テルさんを宜しくお願いします」

『わかった。ハヤテも気を付けてな、次狙われるのは自分かも知れへんからな？』

そう言い残すとプツンと電話を切った。

「…お嬢さま、お話が……ってアレ？」

ハヤテが振り返るとナギの姿はない。

「お嬢さま――――！　どこですか――――！？」

返事をする気配がまったくない。　そして近くの路地にまで捜索範囲を広げた所、あの紙切れを拾った。

「これは……ッッ！？」

それを見て、ナギが誘拐されたのに気づくのに時間は掛からなかった。

○

――雨。　それは見てるだけ嫌になる天気だ。

その単語だけで人を鬱々とさせる力がある。

そんな雨の道を一人歩く小柄な影があった。鷺ノ宮　伊澄である。

（私が未熟だったばかりに……テルさまが傷ついてしまった……）

傘を差し、フラフラな足で歩くその姿は後悔の念が見て取れた。

またやってしまった。

大切な人を傷つけてしまった。

（もう繰り返さない……何がなんでも）

無理をしてはいけないというのは分かってる。　しかし、こうする意外に何か方法があるのか。

大きな決意を胸に秘めて伊澄は歩く。

「なにがなんでも……倒します。　例え相討ちになっても」

第５３話～それはやはりお約束～（後書き）

次回は久しぶりの記憶回想・・・ほんのちょっとだけですけど。
それが終わったらいろいろと展開が早いです。バトルやらなんやら
ですごいことに・・・では、また次回！！

第５４話～人を見かけで判断しない～（前書き）

どうも。今回はもう一人の少年くんの方の話をやりたいと思います。　前半シリアス？　後半ギャグです。

第５４話～人を見かけで判断しない～

「はい注目ーーー！！」

『３人』しかいないその道場にて女性が大きなボードをばんっと叩く。

「今回は人体の効率の良い破壊の仕方を教えるよ～？」

「先生、軽い気持ちで人体壊されたら溜まりません。　できればもう少し雰囲気だしてくださ～い」

テルが眠そうに、そしてダルそうに先生と呼ばれる人物に手を上げて要求。

「そうねぇ・・・今回は人体の効率の良い破壊の仕方を『お前たち』に享受してやる。　まずは顎をのどを切り裂き、目を抉り、肋骨を破壊し中の臓器を・・・・」

「おーい、怖くすればいいってもんじゃねぇぞぉー」

テルが静かにツッコムが女性は頭を手にやり、フゥ、とため息をつく。

「どこまでレベルを落とせばいいのかしら・・・やれやれだぜ」

「こっちがやれやれだよ」

授業なのにこのグダグダ感。　女性は竹刀を構えて不満を言い始め

る。

「だーったら、アンタらが門下生連れてくればいいじゃない。　いまやこの道場は門下生が二人なのよ？」

「先生、隣の奴はすでに受ける気力ゼロです」

テルは隣でスースーと静かに寝息を立てる同じ少年のことを指差した。

すると女性は持っていた竹刀を机にバシンッと叩きつける。

「よぉ～く聞けや小僧ども！！」

その怒声にたたき起こされたかテルの隣の少年が素早く上体を起こす。

少しばかり間を開けてから女性は口を開いた。

「・・・この世界に生まれたからには色々な事を知って生きていかなきゃいけない。　でもアンタたちはまだ子供だから、誰かが教える役を担ってやらなきゃいけない・・・私もできる限りのことは教えるわ」

今までよりも一番真剣な顔で女性は続けた。

「いつかはアンタたちが自分の意志で自分の道を歩いて行けるように・・・」

笑顔で言うとその手にある竹刀を肩に担ぎ、テルたちに言った。

「最初に教えることは－－－－－」

○

「・・・・・」

目を覚ますと最初に天井が視界に入った。　辺りは薄暗く、雨音がザーッと聞こえてくる。

「・・・たこ焼きがなんやっちゅうねん・・・」

小さな呟きが聞こえたかと思うとテルの側にはうっつらうっつらと寝言を言う咲夜がいた。

（なるほど・・・看病してくれてたのか）

体に巻かれた包帯を見てみる。　上半身は痛みが走る所を見ると重症らしい。

「・・・うん？　おお！　起きたか！！」

テルが起きていたことに気付いたか、咲夜が笑顔を浮かべる。

「なんとか命は助かったようだな・・・あの黒髪野郎は？」

頭を掻きながらテルは咲夜に聞く。　咲夜はあの後の事を全て話した。

「・・・なるほどな。　体制を整えに戻ったというところか」

ぬく、とテルは身を起こして立ち上がろうとしたのを見て、咲夜が慌てて止めに入る。

「何してるんやテル！？　寝てなきゃあかん！」

「電話を聞いていたところ、他にも仲間がいる可能性がある。『石』がどうだのなんだの言ってた・・・」

「なんか心当たりあるんか？」

咲夜がテルに聞くが、テルは首を振った。

「いや、さっぱりだわ・・・」

「わからんのかい！！」

咲夜がビシッと突っ込んだところ、テルが顔をしかめながら呟いた。

「なんかな・・・胸騒ぎがする」

「何を言うて・・・ん？」

聞こうとしたところで咲夜の携帯が鳴る。　咲夜は席を外し、その電話を聞いて何やら驚いた声を出している。

再び戻ってくると咲夜は慌てながら一言。

「ナギがまたさらわれたで！！」

その言葉を聞いてテルはまたか、と頭を押さえる。

「まさか・・・あいつ等がやったのか？」

そう推測することは容易いが、確実にあの黒髪の少女が絡んでいるという可能性はない。　ただ何となくだ。　その可能性がテルの頭から離れない。

「そう判断するのはまだ早いで・・・とにかくアンタのやることは傷を早く治すことや」

「オイオイ冗談じゃねーぜ・・・これ以上職務放棄したらオレの給料が－－－－」

ズドンッッ！

「・・・・・」

テルが立ち上がろうとした時、テルの顔の真横に槍が突き刺さった。

「アンタに動かれたら困るんや、マリアさんに言われてるからな」

「なんて？」

恐る恐るテルが聞くと咲夜は笑顔で返した。

「『無理させずに一歩もそこから動かさないで下いね？場合によっては実力行使で止めに入っても構いません』ってなぁ！！」

そして咲夜はどっから持ってきたのか分からないがその手には巨大なドリルが握られていた。

「お前実力行使って・・・何を止めるの？　俺の息の根？」

額に冷や汗を浮かべるテル。　咲夜はドリルを稼働させながらテルの眼前に構える。

「ナギのことは大丈夫や。　ナギに関しても大丈夫や、ハヤテもおるしな」

「この野郎、スペックの差に物を言わせやがって・・・・」

テルがそう呟いたとき、咲夜がドリルを止めていった。

「これは伊澄さんからも言われてるんや・・・」

「あ？」

ピクリと反応したテルだが、咲夜がそのまま続ける。

咲夜の話を聞いたところ、今は伊澄は眠っているとのことだが、テルの体が落ち着くまではずっと泣きながら謝っていたようだ。

――ごめんなさい、と。

「・・・・・」

「ウチも怖かったんや、あの時のテルはホンマに死んでしまうんや

ないかって不安だったんやで・・・」

その言葉を聞くと、テルは黙り込んでしまう。

「アンタが死んでまったら、ハヤテが悲しむ、ナギも悲しむ、ワタルも悲しむ・・・伊澄さんだって」

「わ、分かった分かった！！　もう何も言わねぇよ！！　どこにも行かねぇから！！」

そう言い終えると、咲夜も自然と笑顔を取り戻す。　少しだけ笑うと立ち上がり

「そんなら、もう心配あらへんな・・・んじゃ、ええ子にしとるんやで？」

「お前オレを小学生かなんかと勘違いしてるだろ！？　んなことよりジャンプ買ってこいジャンプ！！　」

「はいはい、ジャンプでもサンデーでも買ってくるさかい」

「言っとくけどなァ、間違って赤丸とかスーパーの方を買ってくんなよ！！　母ちゃんみてぇな間違いすなよな！？」

怒鳴りながら要求を言い渡したテルを見て咲夜は笑いながら障子を静かに閉じてその場を去っていく。

「・・・・・」

廊下が軋む音が遠ざかっていくのを確認してテルは被っていた布団

をどかした。

「すまねぇな・・・」

「フン、結局行くつもりだったんじゃな・・・」

スッと立ち上がろうとした時、幼い声が聞こえた。テルが天井を見ると、仮面をつけた白い着物の人らしきものがぶら下がっていた。

「・・・ずっと居たんだろ」

「ほう、気づいておったのか・・・」

ケケケと笑うと小さい白い着物が畳の上に降りてきた。

「お前が寝ている間に伊澄は先に行ってしまったぞ？　もっとも、ワシが最初に気付いた時には既にいなかったのじゃがな」

仮面から聞こえる薄ら笑いにいささかイラッと来るものがあったテルだが、ため息をついてそのイライラを押し殺す。

「あの野郎目、やっぱり行きやがったか・・・」

「分かっていたのか？」

「アイツがあり得ないほど負けず嫌いなのは知ってんだろ？」

頭を掻きながら確認するように聞き返す。　仮面の人物は首を縦に振った。

「誰に似たんだか気になるがの・・・しかしお前、本当に行くつもりなのか？」

今度は仮面が聞く。テルは当然のように返した。

「当たりめぇーだろ」

テルはさらに続ける。

「俺がこうしている間にもアイツは・・・伊澄はまた抱え込んじまってるかもしれねぇ、無茶するかもしれねぇ。　俺はよぉ、この手で救える人間が目の前にいるなら手を差し出さずにはいられねぇんだよ・・・」

「ふーむ。　お人よしというかなんというか・・・」

仮面は少し考えてフッと笑った。

「分かった。　ならお前に良いものくれてやる。　この鷺ノ宮　銀華からの贈り物じゃ」

そういって銀華と名乗る人物は袖から一本の得物を渡される。

黒い鞘に金色の鍔。　まぎれもない真剣のものだった。

「またパチモンとかじゃねーよな？」

一瞬、折られた撃鉄の件もあり、こう言ったものには少しばかり抵抗のあるテル。　銀華は少しばかり唸って説明。

「これは紛れもなく鷺ノ宮の霊剣。　名は無いが得体のしれない連中と戦うには普通の刀じゃ勝てんよ」

取り敢えず分かったことはこの刀は高性能ということだ。

「やっぱり昨日俺らが襲われた奴が絡んでるのか？」

テルの問いに、銀華は小さく笑う。

「恐らくはじゃがな。　気を感じてはおるがワシも伊澄より霊力があるわけではないのじゃからの」

腕を組んだまま言い放つと

「取り敢えず、かわいい孫娘を頼んだぞ」

そう言い残して去っていった。

最後一人になったテルは渡された刀を持ってひとり呟く。今までのようなただの鉄の塊とは違い、ずっしりとした重みが伝わる。

「任せろ」

決意を秘め、テルは玄関へと向かった。　上半身は包帯だけ、下半身は執事服のものだがまず上をどうするか、と考えていた時、玄関に自分の執事服が置かれていることが分かった。

「・・・・」

そしてその横に添えるように置手紙と傘が一通。

書かれていた内容はこうだった。

―――アホテルへ。　一応ウチのお気に入りの傘や、壊したら承知しないで！！

「・・・・参ったな」

その手紙を握りつぶすと傘を広げて雨の道を歩き出す。　そして心の中でこう呟くのだ。

（バカな女・・・）

「・・・・」

鷺ノ宮家の別室の窓から咲夜は、雨の中を傘をさして歩くテルの姿を眺めていた。

「マリアさんの言うとおりだったわ・・・」

『でもテル君は無茶してでも仕事に戻ると思うんですが、その時はテル君の意地なんで止めないでやってください』

これがマリアからの電話の続き。　ここまでする人間だっただろうか。　ここまで片意地を通して命をかけてくものだろうか。

多分それは違うだろう。　意地もあるだろうが、これが彼の、善立

テルが決めたルールなのだ。
咲夜から言わせればここまで面倒くさい男だろう。
（だけど、伊澄さんが気になってしまうのも分かる気がするなぁ・・・・でもホンマに）
そして心の中で細めながらテルを眺めて呟く。
（バカな男や・・・）

○

「ここは・・・どこだ？」

場所は変わり、ここは薄暗い建物の中。　ソファーには誘拐されたナギは目を覚ました。　誘拐されたというのに手足にはロープは結ばれておらず、体の自由は利いていた。
天井に穴が開いており、そこから水が降っていたので、外が雨だと言うのが分かった。
「くそう・・・幸子に騙された」
自分のこの状況を見て、悔しそうにあざ笑う幸子の姿が脳裏に浮かぶ。　そして横たわっていた体を起こした時、一人の男が現れる。

「ん？　なんだ、起きたのか」

そう言う男はナギの近くに寄るが、ナギはその顔を見て絶句した。

まずは顔である。　特徴的な三白眼作り出す目つきの悪さがどう見てもヤンキー、ヤクザをイメージさせる。　なんだかいつも機嫌が悪そうな。というのを一目で分からせる。

（や、ヤバイ・・・めっちゃくちゃ怖いんだけど！　あれ明らかに極悪人ではないのか？）

「なんだよ。　人を化け物みたいに・・・」

と彼が一歩近づくたびに

ズリ・・・

ナギが一歩横にずれる。　彼から距離を置くように。

「・・・・・」

スッ・・・

一歩。

「・・・・・」

真横にまた一歩。

「「・・・・・・」」

ナギが冷や汗を浮かべながら男の方を見る。　誘拐とかには慣れていたので、そういった強面にも慣れているのだが今回はいかんせん。
普通の不良とはまた違うというイメージがあるので、ほんとに食われるのではないかと思っていた。

「・・・・」

しかし、意外なことに男の方はガクッと膝をついてｏｒｚしていた。

「な、なんだよ・・・」

ホントにどうしたとナギが恐る恐る尋ねて、男が顔を上げる。　表情は少しばかり沈んでいた。

「なんだってお前ら・・・顔で人を判断するんだよ」

「はっ！？」

「俺だってヤクザでも不良でもないんだぞ！！　窃盗なんてこのかた、ましてや煙草だってやってねぇのによ！！」

「でも誘拐はするんだな」

「うっ！！」

シャウトする男にナギが冷ややかなツッコミを入れる。　痛いところを突かれたらしい。

「だ、だけど俺は優しい！　誘拐犯だったらお前を縛ったりして動

かさせないでいるだろうからな！　それをしてない、毛布までかけてある！うん、俺は優しい！！」

「まぁ確かに、銃とかロープを使わないでいたのは私に対する礼儀だと受け取る。いままでの奴らに以上になかなか気の利いた奴だ。　そこは評価してやる」

「だろ？　だろ？」

ナギが腕を組みながら言うと、途端に男の口調が明るくなる。しかしナギは続けて言い放った。

「だが誘拐は誘拐だ」

「ノオオオオオオオオオウ！！！」

男は頭を抱えて叫んだ。

「それにお前は人質に対する礼儀がまだなっとらん。　取り敢えず紅茶だ紅茶、紅茶を買ってこい」

「な、今度はオレをパシリに使う気か！？」

「それができなきゃ私はお前を一生誘拐犯と言い続けるぞ？　それでもいいのか・・・」

薄ら笑いを浮かべると男は顔をしかめた。　そして仕方がないといった感じで出口へと向かう。

「分かったよ。　紅茶だな？　紅茶をご所望してるんだな？」

「ああそうだ。　ていうかここはどこだ？」

辺りを見回しながらナギ聞くと、男は普通に返す。

「ここは廃ビルだ。　あまり人目に付くことがなさそうだからここを選んでみた」

「うん、分かった。とりあえず行け、犬」

「ぐほっ・・お前、一応人質だろうに・・・あと俺は木原竜児（きはら　りゅうじ）という名前が・・・」

そう言い放ってもナギは受け流すように一言。

「そうか、行け木原犬」

「だあぁぁぁぁぁ！！」

耐え切れなかったか、木原は叫びながら走っていった。

（暇だな・・・寝るか）

特にすることもなくなったナギはまたしても夢の中へ・・・とも行かなかった。

「コラ、買ってきたぞ」

「げ！　早ッ！？」

ちょうど目を閉じたと思ったときに木原の声が聞こえた。　思わず飛び上がってしまったナギである。

「ホレ」

ポイッとその缶を投げ渡す木原。　ナギは納得がいかない様な顔をしていたがまぁ仕方ないといった感じで缶を開ける。

「まぁ迅速な動きで主の要望にこたえれるとは大したものだ。　その従順さ、まさに犬といわざるを得んな」

「結局オレは犬のままだってのか！？」

ずっこけながら突っ込む木原。　この光景を見る限り、とても誘拐の現場だとは思えない。

「ん？　なんで片方だけ手袋をしているんだ？」

ナギが気になったのは木原の左手。　真っ黒な手袋を片腕で摩りながらちょっとばかり間を置いて答えた。

「ん～、まぁちょっと怪我してんだよ」

「あ～」

木原の言葉にナギ頭に手をやって少しだけ悟ったような顔で、哀れみを含めた視線を木原に送った。

「お前は犬だけではなく、厨二病の称号も手にしているのか」

「ぶふっ！！」

ナギの素っ気無い一言に木原は吹き出してしまう。　さらに大きなダメージ。

「まぁ厨二病は一時のアレだ。　時間が全てを解決させてくれる。だからその・・・頑張れ」

「いや、なんで両手合わせてんだよ！？　明らかに『ご愁傷様』って事だろうが！！　あとその哀れみに満ちた視線を送るのやめろ！！」

もはや泣きそうな木原は涙目になりながら突っ込んだ。

「いやマジでどうでもいいけどさぁ、お前が買ってきた飲み物、紅茶じゃなくてコーヒーなんだけど・・・」

「しょうがないだろ？紅茶なかったんだよ」

「ばぁぁぁぁぁかものぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

「おう！？」

木原のその一言にナギは激昂した。その迫力には、思わず身を引いてしまうほどにだ。

そんな木原を睨みながらナギは続ける。

「コーヒーを選ぶにしても味が濃すぎる！　私がコーヒーを飲むときはカフェラテだ！　お前はブラックの飲めない主人に、衆目の前でたっぷりのミルクとお砂糖をいれるという屈辱を与えようという

のか！！」

ブンッとその手にあるコーヒー缶を投げた。　その缶に飛びつくように木原が缶に向かってダイブする。
ズザザザーーッと床をすべるが、コーヒー缶は無事だった。

「おまっ、勿体無いだろう！！　しかも人質の癖に犯人にダメ出しするな！！」

ストレスが頂点に達したか、木原が抑えていた感情を叫びに乗せて不満をぶつける。　しかし、ナギは平然と腕を組みながら答えた。

「私は自分を誘拐した全ての誘拐犯にダメ出しをしている」

「なんて嫌な人質なんだ！！」

まさしく誘拐犯殺しの落ち着きである。　例え銃を突きつけられてもナギは動じないだろう。ある意味迷惑な人質である。　財布の中が磨り減っていくことが心配な木原だった。

「まぁ取り敢えず本命が来るまで待ってろよ。　お前はアイツを誘き出すために誘拐したんだからな・・・おっと誰か来たようだ」

それは背後に感じた殺気に近い物が会話を中断させた。木原がくるっと振り返ると出口付近に一人の少年の姿が目に入った。　ナギもそれを見て、笑顔になる。

最初に木原がその少年に聞いた。

「一応聞いておくけど、何モンだ？」

「執事ですが・・・お嬢様は大丈夫ですか？」

端と返して今度は執事、ハヤテが聞く。　木原はナギを指差して一言。

「この通りで」

「どうも・・・ではこちらに返していただけませんか？」

鋭い目つきのハヤテが木原を睨む。　木原は少しだけたじろくと、口笛を一瞬だけ鳴らした。

「怖い怖い。　だけど簡単に返す訳にも・・・いかねぇ」

「ハヤテぇ、もう思いっきりやっちゃってもいいぞー。　手加減はいらんからなぁー」

間延びするような声でナギが言う。　その言葉にハヤテも頷いた。

「そうですね、その『目つきの悪い』凶悪犯から早く離れてもらいましょう！」

「・・・・」

その言葉に、木原の眉間がピクッと寄った。

「お前・・・ソレ俺の顔を見て判断したなぁ・・」

「え？」

「そうやってお前は第一印象で決めてしまうのか。　いいよいいよ、俺はどうせ目つき悪いさ、俺は光を求めちゃいけないんだ・・・どうせ俺なんか」

「どこの地獄兄弟だ」

ナギ後方で突っ込むが木原の鬱モードは簡単に終わりそうにない。
だらんと両腕をぶら下げて、顔は俯かせたその姿は不気味だ。

「イテェ思いをしても、俺は責任持たねーぞ」

ゆったりとした動作で構える。　ナイフを使うわけでもなければ、銃を使うわけでもない。

ごく一般的な格闘家の構えだ。　簡単に言わせれば、ボクサーのような構えだといったほうが早いだろう。

「さぁ、ラウンド1と行こうぜぇ！！」

今まさに、執事と異質の格闘家の闘いが始まる。

「・・・・・」

その光景を黒羽はビルの屋上から無機質な瞳で見下ろしていた。

第５４話～人を見かけで判断しない～（後書き）

やっぱりシリアスってのはムズイね、うん。　キャラ心情とか文章で表現しないといけないから。　その人の行動で表現するって言うのもあるかもしれませんが・・・皆さんはどうなのか、シリアスにおいて心がけていることってなんでしょうか？　暇だったら感想にのせてお書き下さい。

次回はハヤテ君と木原くんとのガチバトル。

第５５話～仮面ライダーって今年で４０周年だってね～（前書き）

戦闘シーン、入ります。

第５５話～仮面ライダーって今年で４０周年だってね～

弱まりそうのない雨道を、善立　テルは歩いていた。　決意と武器を渡された彼が向かうのはナギが誘拐されたとされるその場所。

その場所は情報屋のバルトが大いに役に立ってくれた。　さすがもとスパイというべきか、短時間で情報を集めてくれたため、粗方の場所を特定することに成功している。

あとはその場所に向かうだけなのだが・・・

「あ～！　テルくんだ！　おーい！」

突如、背後からの声にテルは振り向く。　そこには傘をさした見知った女子がいた。

「なんだ、ジミーか」

「じ、ジミーとはなにかな？　歩だよ歩！？　まさかこの短期間で私の名前を忘れたとか言うんじゃないよね！？」

「冗談冗談、んで？　お前は何をしてんの？」

その言葉に歩はハッ！　と気づくとポケットから何かを取り出す。

「実は今日はたい焼きが安い日だったんだよ！　場所は隣町だけどそこは気力でカバーした」

そういいながら歩はたい焼きを食べ始める。物凄い笑顔で。　テル

はそれを見ると大きくため息をついた。

「うん、君は平和だなジミー君。　君はまるで別の世界にいる人間のようだ・・・んじゃ」

「ま、待ってくれないかな！？」

「ぐえっ！」

去ろうとしたテルの襟首を歩ががっしりと掴む。　そのせいで一瞬呼吸が止まったテルである。

「とても気になる台詞を吐いていくね？　どうしてなのかな？」

「どうにもこうにも、お前は世界をものともしない最強の普通の女子高生だ。と思ったほどだ」

「さ、最強！？　でも普通なんだよね？　でも最強なんだよね？　アレ！？　最強で普通で普通で最強で・・・アレ！？」

「うん、そうやって考えていてくれジミー」

今度こそその場を去ろうとしたテルだが・・・

「ヘイ、ストップ！！」

ガシッと首を掴まれてしまった。

「だからなんだっつーの！！」

そう言うテルに対して、歩は差し出したのはたい焼きだ。

「はいこれ」

「あん？」

「なにやらお困りのようだから素直に上げようかと・・・」

その一個のたい焼きを見つめると、黙ってテルはそれを受け取る。

そして一言。

「別にもらったからってお前の家来にはならないぞ。　あと、これじゃ足りないからもう一個」

「別に桃太郎の話を意識してないよ！？　　あと、さりげなくもう一個追加しないでほしいかな！？」

仕方なく、歩がもう一個渡そうと近寄った時。

「あれ？」

「む？」

二人同時に感じたことである。　歩がつまずいてしまってテルに向かって倒れこんできた。

ここからの一連の内容は、わずか一秒あるかないかの世界で行われたものである。

（アレ？　なぜか前のめりに倒れちゃってるよ私・・・アレ？　でもこのままだと計算すれば確実にテル君にもたれかかるようになっちゃうんじゃないかな？）

徐々に近づいていく二人の距離。　テルもぼーっとしてるせいか、反応できないでいる。

（でも避けられちゃったら私が地面に倒れることになるよね？　それは嫌だけど出来ればそういうのはハヤテくんに受け止めて貰いたい・・・・・・だからッッ！！）

そして彼女の決断した行動はこれだ！！

「だっ・・・・・」

前に倒れこむと同時につまずいている足とは逆の足を前にだして地面を踏ん張る。　そして・・・・

「シャァーーーーーーーーッッ！！」

ズドッ！　と勢いを利用したその右ストレートははテルの腹部打にち上げる形で見事直撃した。

「ぶっ・・・・」

最初はまるで神経が通っていなかったのように平然としていたテルだが、次第にじわりと効いてきたらしく・・・

「ギャァアアアアアア！！！」

カッ！　と目を見開いて血を吐き出した。

「うわぁぁぁ！！　テル君が血を吐き出したよぉぉぉ！！？」

突如のテルの吐血に歩は慌てる。　しかしテルは手を翳して制した。

「お、お前違うからな？　これ・・・な？　朝飲んできたトマトジュースだ・・・てゴバァッ！！」

平然を装って苦笑いでアピールするがまたしても吐血。

「のわぁぁぁぁぁ！　私の拳が致命傷に！？私ボクサーデビューできるかも！？」

「気にするところそこかよォォォ！？お前がデビューする前にオレが先に天国デビューするわッッ！」

重症に重傷を重ねられ、もはやテルは戦う前からボロボロだった。

「・・・じゃあそれはトマトジュースだってことでいいんだよね？」

「ああ、そうだ・・・そしてお前は家へ帰る途中で、お前は『何も見なかった』！！」

ボロボロの体で歩を指差すテル。歩は敬礼するように手を構えた。

「りょ、了解であります！！」

とお互いに了解した所で歩は走ってその場を去っていく。　テルは空を仰いで叫んだ。

「オデノカラダハボドボドダァー！！！」

なぜにここでオンドゥル語なのか、あまり突っ込まないでいただきたい。　そして、テルはポケットから携帯を取り出す。　めんどくさそうにボタンを押していき、電話をかけた。

「おう、俺だ。　ちょっとお前、俺の危機を助けるために手伝ってくんね？」

○

そして場所は変わって廃ビル内。　その場所ではハヤテと木原が対峙している。その場所で激しい戦いが始まろうとしていた・・・ハズだった。

「あ、ちょっと待って」

「へ？」

突如の待ったにキョトンとするハヤテ。　相手の木原が片手を翳していたのだ。

「コーヒーが残ってんだ。　これ飲ませて・・・」

「は、はぁ・・・」

出鼻をくじかれ、取り敢えず木原が飲み終えるのを待つ。　片手で持っていたコーヒーを思いっきり飲み尽くす。

「ぷはぁ・・・カフェインはいいな」

コーヒーのうまさに肩を震わせながら木原が笑みを浮かべながら立ち尽くす。

「コイツはバカなのか？」

「緊張感の欠片もありませんね・・・」

ナギとハヤテがグダグダ感を否めない中、木原がふぅとため息をついて続ける。

「誰かさんが投げたコーヒーだ。　どうしようとオレの勝手、しかし地球にエコを心がけていないのはいただけない」

「なんか地球環境規模で語り始めたぞ」

「実はイイ人ですかね？」

なかなか奇妙な光景だな・・・とハヤテが考えていた瞬間。

ヒュン！

「え・・・？」

ハヤテの顔面に何かが投げつけられる。　先ほどの空き缶だ。　そ

れを掴もうとした時であった。

「ハヤテ！」

ナギの声が飛ぶ。　だがそれに気づくにはあまりにも遅すぎた。

既に真横には大きく腕を振るう木原の姿があった。

「シュッ！！」

まるでボクサーのようにステップを利かせた右ブローがハヤテの腹部に炸裂した。

「がはっ！」

身を貫いたような激痛が腹部を襲う。　木原というと打ち込んだ瞬間にバックステップでハヤテとの距離をとる。　この一連の流れはやはりボクサーだ。

「おまえ！　卑怯だぞ！！」

ナギが後ろで抗議の声。　しかし木原は頭にクエスチョンマークを浮かべて返した。

「バカめ、これはスポーツじゃねぇんだ。　ルールなし、助けなしの喧嘩よ」

行った行為にまるで悪びれる様子もなく、木原は構えてハヤテに突っ込む。

「大丈夫ですよお嬢様・・・」

腹部の痛みを押さえながらハヤテが構えた。　先ほどとは全く違う真剣な表情だ。

「三千院家の執事は・・・」

「ヒュッ！」

左右に揺れながら迫る木原の右拳がハヤテの顔面に迫ってきたがその右腕の軌道をずらすように右足の蹴り。

軌道を見事にずらされた拳は当たることなく空を切る。

「この程度では負けませんッッ！！」

ハヤテは今度は左足で木原の顔面に突っ張るようなキックを打ち込んだ。

「ごっ・・・・！！」

当たった場所が顔だったこともあったか、スピードも利いてた分、反動で吹っ飛んだ。

（や、やはりハヤテはカッコイイな・・・）

ナギにとって今更分かったことではないが、とナギは感嘆する。

蹴りを決めた際にナギに向けた笑顔にまたナギは胸を打たれたのだ。

「いたたたた・・・」

地面を転がっていた木原がムクリと体を起こした。　起きたと思うと、突然笑い出す。

「いいね、いいねいいね！　嫌いじゃねェぜェそういうのさぁ！！」

再び構える木原。　しかし、ハヤテは疑問を浮かべた。

「さっきと違う・・・だと」

その構えは先ほどと大差ないがハヤテには分かる。　ボクサーの握りではない、握っていた手は軽く開かれている。　まるで柔道の構えだ。

「ほっ」

と、木原が素早くハヤテの懐に接近。　そのままハヤテを掴もうとしてきた。

「くっ！！」

ハヤテもただやられるだけでは無く、掴みかかる腕を先ほどと同じように足で裁こうとしたが。

「甘ェッッ！！」

パシンッ！

と右手と左手で受け流され、逆に隙を作ってしまった。

力強い握力で執事服の袖と胸倉を掴まれる。

（ま・・マズイッ！！）

この態勢にハヤテはどうしようもない危険を察知する。　何とかして振りほどこうとするが、ほどけない。

「どっせぇぇぇぇぇい！！」

ぶん。　と木原が掴んでいた状態から素早く切り返し、ハヤテを投げた。　見事な一本背負いである。

「がはっ！！」

ハヤテの体が地面に打ち付けられる。　下はコンクリだ。　受け身が取れない。　受けるダメージは必然と高い。

だがハヤテも人外を超えた防御力を持っている。　ダメージが高くても一発ＫＯとまではいかなかった。

「ＵＲＹＹＹＹＹＹＹ！！！」

しかし、木原はまったく動揺することなく某吸血鬼のような雄たけびを上げながら追い打ちを仕掛ける。

今度は空中へ飛び、体をグルグルン回転させてハヤテの顔面向けて踵落とし。

これはマズイと思ったか、ハヤテは床を転がってそれを回避。　勢いついた踵落としはハヤテに当たることなく地面に打ち込まれた。

「チッ・・・」

外れたことに小さく舌打ちして素早く木原が距離をとる。

危機的回避をみせたハヤテ。　しかし追い詰められていることには変わりない。

（まるで掴みようのない攻撃方法、隙がない戦法だ。　色んなジャンルの格闘が混ざってるッッ！！）

縦横無尽に攻撃方法を変え、隙を作らないような距離の作り方。先ほどの踵落としの動きもまるで中国のカンフーにも使われてそうだ。

相手はおそらく、多くの格闘技を習っているのだろう。　しかも全てのレベルが高い。

「なかなか頑丈な奴じゃねぇーか。　アンタは鉄ででも出来てるんですかー？」

敵である木原もここまで攻めながらもハヤテのしぶとさに疑問を抱いていた。

最初の一撃のパンチもその一発で終わらせるつもりだった。　しかし相手は怯むどころか見事な反撃を与えてきた。

「どうなのよ・・・実際？」

その真実を問うや否やハヤテは胸を張って言い放った。

「鍛えてますから・・・」

まるで平成ライダーの一人のようなセリフを放つハヤテ。　そして今度はハヤテが仕掛ける。

「行きますよ！！」

タンッとステップを踏みこみ、目にもとまらぬスピードで接近した。

（あれ？　消えた・・・）

率直な感想。　木原も仰天していた。　小さなステップを踏んだ瞬間、ハヤテの姿が消えたのだ。

これがハヤテの絶対的強みともいえるスキル・・・それは速さ。

木原が瞬きをした瞬間、眼前にハヤテが現れる。　しかも宙に浮いたままだ。

「これが綾崎家の奥義・・・・」

「へ？」

ハヤテは両足で木原の首部分をしっかりとホールド。　木原もこの行動にまずいものを感じた。しかし時すでに遅し、脱出不可能。

「木の葉落としぃぃぃーーーーーッッ！！」

ホールドした状態からハヤテが体全体を捻る。　木原も危険を察知し、ハヤテの動きに合わせて体を捻られる方向へ浮かす。　そうした結果、木原は顔面から地面に激突した。

「ふぅ・・・」

素早く距離をとったハヤテが安堵の息をつく。

「ふぅ・・・じゃない。　なんだ木の葉落としって・・・」

「僕の考えた必殺技です。　なかなかの威力でしょ？」

笑顔で答えるハヤテは親指まで立てて見せつける。

「いやいや、アレ木の葉落としじゃないから関係ないから・・・アレただのプロレスと大差ないから」

ナギの冷静なツッコミにハヤテは笑うばかりである。

「オオオ・・・首と顔面が・・」

埋まっていた顔を持ち上げると、木原は顔についているその汚れを払った。　これにはハヤテやナギも驚いていた。

「まさか・・・アレをくらっても倒れないとは・・・」

「アイツこそ鉄でできてるんじゃないか？」

実際ハヤテが仕掛けた技、木の葉落とし（ハヤテ命名）の時に咄嗟の判断で木原は体をハヤテが捻る方向に合わせて体を浮かせていた。
これが功を奏し、顔面だけのダメージで済んだのである。
もし木原がタイミングを合わせて体を捻らなければ、首はへし折られていただろう。
「イタタタ・・・顔に似合わず、えげつない技使うのねホント・・・」
首をさすりながら木原が呟く。
「だったら俺も似たような技を使ってやろうじゃねぇの・・・・」
木原がそう言い終えると、木原は立ち上がって構える動作に入った。
「・・・・？」
ハヤテが目を疑った。　構えに入ったのはいいだろう。　しかし、木原の構え方が妙だ。
まるで体全体から力を感じないかのような状態。　両手はだらんとして、顔も若干力が抜けている。
（な、なんだ？）
ハヤテは相手の謎の行動に緊張感を感じていた。
「問題・・・」

木原が突然呟く。

「この世で人体にとって最も有毒なガスはなんだと思う？」

「え？」

刹那。　一瞬の間に木原がハヤテの顔面に蹴り上げた砂をぶつけてくる。　ハヤテは防御するがその時に巻き上がった砂煙で視界を失ってしまった。　そしてこれが大きな隙。

ぱちん。

と、ハヤテの口と鼻を覆うように木原の平手打ちが決まる。これがなんなんだと思っていたナギだが、次の瞬間にハヤテの体が大きく揺れるのを見て目を疑った。

「・・・・・・」

ハヤテは視界が定まらないのか、足元が覚束無い。　そして大きく地面に・・・・・倒れた。

大の字に倒れたハヤテを見下ろして、木原が呟く。

「はい、時間切れの不正解だ。　ついでに答え合わせを言うとだな・・・」

肩を鳴らして、少しばかり笑みを浮かべながら一言。

「答えは『酸素』・・・分かった時にはもう遅い・・・」

第５５話～仮面ライダーって今年で４０周年だってね～（後書き）

アレ？　最後のってどこかで見たことあるネタとか言わないで！

まぁ知ってなくてもそういう技なんだと思ってくれればＯＫです。

さてさてハヤテくん倒れちゃいました。このピンチをどう切り抜けるか！

第５６話～宇宙一馬鹿な執事～（前書き）

どうも、少し遅れてしまいました。　戦闘の色合いが強い今回の話です。
ではどうぞ！！

第５６話～宇宙一馬鹿な執事～

「酸素……だと？」

「そうだ。　普通に俺達の周りにある酸素だ」

ナギ達のいる廃ビルでは異様な光景が広がっていた。

大の字に倒れているのは紛れもなくハヤテだ。　トラックに跳ねられても、洗剤入り料理を食べても無事だったハヤテがだ。

「お、おい！　ハヤテ、しっかりしろ！！」

今まで見たことのないハヤテの姿にナギは驚くばかりだ。

「酸素は俺達が生きていくには必要不可欠……しかし、使い方次第では…人体にこれほど有毒ッッ」

木原が勝ち誇った笑みを浮かべた。

「一つだけ豆知識を教えよう……」

―人間の体はとても不思議な物であり、酸素を取り込まないと生きていけない。
しかし大気中にある酸素濃度が６パーセントを下回った時、コレを吸い込んだ人間は意識を失うッッ。

「俺はこの手のひらに濃度６パーセント以下の酸素を集め、コイツに吸わせた……」

大の字に倒れているハヤテを見下ろしながら木原は続ける。

「まともに食らったんだ。半日は起き上がってこれねぇ・・・」

「だ、だが掌で作った大気を別の大気と混ざらせないように相手に吸わせるなんて・・・」

頭のいいナギ。　その点に対してはすぐに疑問が上がった。

たとえ掌で毒の大気を作ったとしても、その大気に大気中の酸素が混ざってしまっては意味がないのだ。

不純物を混ぜずに相手に与える技にしてはとてもリスクが高い。

「だが俺は克服した」

ナギの疑問に打ち消すように木原が答えた。

「それでこそ、自身を発狂寸前までに追い込むほどの修行だったがな・・・」

その右手を見つめる木原。　技ひとつ磨くのに対しても、武人は自

身を発狂寸前に、自分の気がくるってしまうほどまでに荒行に励むという。

彼も若いとは言えそれを体験したのだろう。

「しかしアレだな、毒が『酸素だ』と言っておきながらその実態はただの『酸欠』なんだな・・・」

「そこには突っ込まないでいただきたいね・・・」

ナギの言葉に咳払いをする木原。

「だけど、動けない相手をどうするか、ここ重要」

途端に木原の顔に笑みが宿った。

「動けない相手を生かすも殺すも俺しだいだ・・・」

「ま、待て!!」

ハヤテに近づこうとした木原の前にナギが両手を広げて立ちはだかる。

「へっ・・・なんのつもりだよ?」

「主は執事の身を守るという義務がある!　お前にハヤテは傷つけさせない!!」

それを見た木原は

「・・・ハァ！？」
頭を掻きむしゃりながら声を上げた。
「いや、なにも俺は――――」
木原が何かを言おうとした時だった。
「ナギ！　下がっててッッ！！」
突如、ナギの耳に聞きなれた声が聞こえた。
その人物は木原の真横に現れると横腹目がけて長物一閃。
バキッと音を立てて木原は地面を転がった。
「怪我はなかった？ナギ」
「ひ、ヒナギクなのか？」
そこにいたのは紛れもない白皇の生徒会長、桂　ヒナギクだった。
○
一方で屋上にてただ一人だけ立ち尽くしている人物が一人。
背は１６０あるぐらいか、黒衣のローブに身を包んで黒い長髪の少女、黒羽である。

雨を気にしないのか、黒羽は傘をさしていなかった。　先ほどから雨も弱くなっているのでさほど必要でもないのだが。

「・・・・・・」

特にすることも無く、黒羽はその無機質な瞳で虚空を見つめ続ける。
下で何やら新しい人が来たようだが黒羽が加勢に行くようなことはなさそうだ。

「見つけましたよ・・・」

黒羽の後ろで、なにやら聞いたことのあるような声がする。

ふと、振り返るとそこには番傘をさした伊澄がいた。
番傘をたたむと袖から札を構える。

ここでもまた一つの激闘が始まるのだ。

○

「ヒナギクはなんでいるのだ？」

場所は戻って廃ビル内。　ナギが突然現れたヒナギクに聞いた。
ヒナギクは木刀正宗を肩に担いで答える。

「何でって、だいたい事情を聴いたから助けにきたのよ」

「お、お前・・・単身木刀一本で乗り込んでくるとか、もうお前戦

国無双の世界でも行け」

「ちょ、それどういう意味！？」

ナギに意味ありげに言われたヒナギクは少しばかり口調を強めた声を出す。

「ちょっとちょっと・・・なんなんですか？」

床に伏せていた木原が立ち上がって笑ったような声を出した。

そしてヒナギクを見て一言。

「スケ番じゃねーか！！」

カチン。　出会って数秒、ヒナギクの中で何かが切れた。

「あ？」

「のわあああああ！！　落ち着けヒナギク！！　お、おいお前、前言撤回しろォォォ！！」

「だってお前、セーラー服に木刀って、やっくんスタイルにもほどがあるだろ！！」

「うわあああああ！！！」

頭に怒りマークを浮かべたヒナギクを見てナギは必死になって木原に先ほどの言葉を撤回するように促す。もう遅いのだが。

「ねぇナギ・・・あの人ってナギを誘拐した人なのかしら・・・」

「あ、ああそうだが・・・」

顔を俯かせたヒナギクの低音ボイスがナギの体を震わせる。　なんか後ろから鬼っぽいの見えるし、体から負のオーラ見えるよ、なにこの人、コワイ。

「本気でやってもいいのかしら？　さっきは峰で吹っ飛ばしたけど、今度は刃の部分を使うわよ」

「殺傷沙汰は勘弁してください、マジで」

あまりの怖さに敬語になっていたナギである。

「てか、なんでそんなに怒ってんだ？」

ようやくヒナギクの負のオーラに気付いたのか、木原が額に汗を浮かべる。

それにヒナギクは笑顔で答えた。

「あら、味の利いた嫌がらせするわね？　無自覚なのかしら？　それともワザとなのかしら？」

「待て待てヒナギク！　そこで手を出したら終わりだぞ！ストップ・ザ・イジメ！」

「うん、それ無理♪　テルくんとハヤテくん以上にボコボコにしたい気分だから」

ぶんっと正宗をその場で構えて一言。

「というワケでそこになおれェェェーーーッッ！！！」
怒声とともにヒナギクが正宗を構えて物凄いスピードで木原に斬りかかる。
「ちょっと待て！　俺は女と戦う気はこれっぽちもねぇ！！」
「女だからって舐めないでよね！！」
攻撃意識がないように木原はアピールするがそれは逆にヒナギクを逆撫でする結果になってしまう。
怒りながらも正宗が描く軌跡はしっかりと真っ直ぐでブレがない。
しかし、木原もただでやられる男ではなく、その太刀筋を読んだうえでしっかりと避ける。
（あ、当たらないッッ！？）
「ホント勘弁してくれ！　お前は一体何なんだよ！？」
避けながらそう言う木原に対してヒナギクはさらに踏み込んで答えた。
「白皇学院の生徒会長・・・桂　ヒナギクよ！！」
バシンッと正宗の峰の部分で右腕を捉える。　かすった程度だが、木原の動きを一瞬止めるには十分だった。

（もらった！！）

一瞬の隙を突いてヒナギクが正宗を振りかざす。　木原はしまったという顔で退避を試みるがもう間に合いそうにない。

峰の部分を脳天目がけて振り下ろす。　木原はなりふり構っていられず左腕で翳した。

次の瞬間。

ガキンッ！！

「ッッッ！？」

ヒナギクは耳を疑った。　それもそうだろう、まさか相手の腕から金属音の音がするとは思わなかったからだ。

ヒナギク自身も正宗の力は十分発揮しており、ロボットだって関係ないぐらいスクラップにしてしまう戦闘力を有する。

正宗も鉄をも切り裂く切れ味はもっているので相当の名刀だということは自覚していた。　峰で殴っても腕の一本は軽く折れるだろうと思ったのだが・・・

「あぶねっ！！」

「あ、しまった！！」

正宗で叩いた違和感に気を取られてヒナギクは木原に距離を取らせるという行動を許してしまった。

離れた木原は左腕を摩りながらつぶやく。

「こいつじゃなかったら折れてたな確実に・・・」

ヒナギクの一撃により、ボロボロになっていた手袋を木原は脱いだ。

「なっ・・・」

「あ、あなた・・・」

ナギとヒナギクが目を驚愕の表情で見る。。　その男の左腕を・・・

その腕は普段の人間の皮膚の色をしておらず、黒い。　いや最早人の腕ではないのだ。

「そ、義手なんだよ。　俺の左腕」

左腕だけが機械の腕だから。

「よほどのことがない限りはへこみもしないし、錆びることはない・・・ちょっといいところを使った奴でさ」

左腕を摩りながら木原は言う。

「なんということだ・・・お前、人体錬成でも行ったのか？」

「ここでそのツッコミはどうかと思うわよナギ・・・」

呆れ顔でヒナギクが呟くが、木原が真剣な顔で答える。

「そう・・・持ってかれたのさ・・・」

「いや、わざわざ乗って答えなくても・・・」

ヒナギクも相手のおかしなボケに突っ込んでいく。　どういうことだろうと、この人はホントに悪い人間なのかと疑問を抱いてしまうほどに。

「じゃあ、その恐い木刀は没収だな！！」

まるで不意を突くかのような切り替え。　木原は姿勢を低くしたままヒナギクに接近。　ヒナギクは正宗を構えて応戦。

避けるだけだった木原が今度は転じて攻めに。　剣と拳の激しいぶつかり合いが始まる。

（ほとんど片腕でいなされてる・・・この人、武器を持った人との戦いに慣れてるッッ！！）

その見事なまでの対処法は、単純にヒナギクの剣戟一つ一つを鋼鉄の義手の部分で当てる、受ける、流す。　という物だった。

しかし、ヒナギクなどの上級者になるとそう言った防御は繊細な動作、タイミングが必要になってくる。　それを平然とやってのける木原にヒナギクはひとつの危険を感じた。

そしてついに。

「とったッ！！」

「くッ！！」

その左手に正宗が掴まれてしまう。　そして左手で刀身を捻った。

「し、しまった・・・！！」

ヒナギクが一瞬の痛みに顔をしかめる。　木原が正宗を捻ったのは簡単に言えばヒナギクの間接を痛い方向に捻って手を離させる為だ。

「よし、没収完了」

目的の物を手にしたかを確認すると、木原は正宗を遠くへ投げた。
暗闇に投げられた正宗はカランカランと床をすべる様に転がる。

「あ、あなた・・・一体」

この鮮やかな敵の武器の奪い方。　ヒナギクは疑問を抱かずには居られない。　この男の正体を・・・

「俺は木原　竜児・・・伊達に世界最強を目指してはいないさ」

笑みを浮かべながら木原がそう答える。　そして続けざまにこう言ったのだ。

「・・・まだやるかい？」

武器を奪い、明らかに戦力は逆転した。　こうする事で相手を無力化する・・・それが武器を持った人間との立ち合い方。

もっとも、随分と生易しい気がするが。

しかし、木原は勘違いをしていた。

目の前にいるのはハヤテやテルも畏怖せざるを得ない程の負けず嫌いである。

そんな彼女が『まいった』なんて言う訳が無かった。

「もちろん！！　来て正宗！！」

ヒナギクが手を翳す。　木原は何をしてるのかとヒナギクの行動を見ていたが、後にその顔は驚愕の物へと変わる。

そして、目を疑うような事態が起きた。

瞬きをしてもいない状態で、ヒナギクの手には正宗の姿があった。

「ハアァァァーーーーーッッ！！？」

木原は驚愕するばかりであった。　そこには、ワープでもしたようにヒナギクの手に正宗が現れたという事実ッッ。

「残念ね、正宗は私が呼べばどんな所からだってやってくるのよ！！」

どうだ、と言わんばかりのヒナギク。

「こ、この原作チートキャラめ！　そんな武器持ったら鬼に金棒じ

ゃねーか！！」

カチン。

「誰が鬼ですってーーーー！！？」

ヒナギク、本日二度目のプッツンタイム。　そしてあろう事か後ろを振り返って、倒れているハヤテに叫んだ。

「ちょっとハヤテ君！？　なに何時まで寝てるのよ！？　さっさと起きて手伝いなさい！！」

それを見て無駄だというように木原がヒナギクを嘲笑った。

「フフフ・・・無駄だぜ。　ソイツは俺の技を喰らってもう半日は動けーーー」

「ハッ！？」

その瞬間、ハヤテがヒナギクの呼びかけに呼応するように跳ね上がるように起きた。

もちろんソレを見て木原くん青ざめながら絶叫。

「エエェーーーーーーーッッ！？」

ムンクのように顔を両手で押し合ってこの世のものとは思えない表情だ。

「ど、どうしてヒナギクさんがここに？」

眠りから覚めたハヤテが当然のようにヒナギクに聞くがヒナギクは前を向きながら答える。

「今はソレを議論するよりも、目の前の事件を解決することが先よハヤテ君」

ヒナギクの言葉に、まだふらつく体を手で叩いて渇を入れる。　それを見て木原が聞いた。

「ありえない木刀を使う女に、半日は起きれない毒を喰らってもたったの数分で起きる執事・・・俺は夢でも見てるのか！？」

「いいえ、紛れもない現実よ」

「悲しいけど、これって現実なんですよね・・・」

「畜生、なんなんだお前ら！　一体何なんだよ！！」

木原が怒声を飛ばすとハヤテがキランと光らせて呟いた。

「なんだかんだと聞かれたら・・・・」

「いや今もやってるけどそのネタはどうかと・・・」

冷静沈着なナギのツッコミ。それに代わってこたえるようにヒナギクが笑顔で言った。

「ん～簡単に言えば、『宇宙一バカな執事』の仲間の一味ってトコかしら？」

「え・・・それってまさか・・・」

宇宙一バカな執事という単語にハヤテが反応した。

○

場所は戻って屋上。　ここでも激しい戦いが繰り広げられていた。
黒羽と伊澄である。

闘いの構図は至ってシンプルだ。　黒羽のあの伸縮自在の『黒い槍』を伊澄が結界で弾く。
そして伊澄が反撃に札を飛ばす。

ほぼ伊澄が攻撃をしているという点を除けば、あの神社での闘いと変わらない。

「・・・・・」

黒羽が黒い槍を伸ばす。　伸びた槍は一直線に伊澄の元へ。

「くっ・・・・！！」

対する伊澄は結界で対応。　槍は見えない何かにぶつかって、拒絶されたかのように弾かれる。

実力拮抗・・・まさにそう思わせる戦いだが。

「はぁ・・はぁ・・・・！！」

如何せん、伊澄の体調はベストではない・・・いくら互角に戦えているといってもその体力の消耗の差が明らかであった。

「・・・・・・」

荒い息を吐く伊澄に対して黒羽は汗ひとつ掻いていない状況。　この女の体力は無尽蔵か。

「・・・・・・」

槍をいったん戻すと右手に黒い短剣を生やして伊澄に接近。　遠距離から接近戦に切り替えたようだ。

「はっ！」

即座に札を構え、結果を展開。

ほぼ展開したと同時に短剣が衝突。

電気のような物が散り、短剣は弾かれた。

だがまだ油断してはいけない、そう神経を尖らせて結界をまだ解かない伊澄。

相手はまだそこにいるのだ。　何かしてくるかもしれない。

案の定、それは的中する。

「やはり来ますか！！」

「……」

冷徹な瞳で構えるはまたしても黒い短剣。

違うのは右と左の手にあるという事だ。

黒羽はタンっと勢いをつけて前に飛ぶとまるで独楽のような回転で伊澄の結界に突進。

「ぐっ……これは！」

まるでチェンソーで木をガリガリと削られるような感覚。

それは疲労している伊澄にとってボディーブローのように効いてくる。

やがて黒羽の独楽攻撃は勢いを失って止まってしまう。またしても直接ダメージを与えられなかったが。

「か、体が……」

膝を落とし、洗い息をつく伊澄。
それを見れば効果は充分だった。

（もう視界がはっきりしない……だけど負けたら……）

何人も見える黒羽の姿が伊澄を追い詰める。　黒羽は既に短剣を長剣へと変化させていた。

テルを刺したあの長剣だ。

（…悔しい、誰も護れないまま消えるなんて……）

長剣を床に引き吊りながら迫る黒羽に対して、伊澄は悔しさと無力さでいっぱいだった。

このまま自分は無抵抗のまま消えるのだ……そう思っていた。

「……」

振り上げていた長剣を黒羽がピタリと動きを止めていた。

その視線も、伊澄には向いていない。

遥かその後ろ……

「よぉ……」

昇降口から一人の男の影。

腰には一本の刀を携えた男はその姿を現した。

そしてその男の現れと共に、曇天の空の隙間から光が差し込んだ。

「ラウンド2開始だぜ……お嬢さん」

へらっと笑ったその男は伊澄がよく知る男。

善立　テル、意地と面子と覚悟の為、今ここに推参！

第５６話～宇宙一馬鹿な執事～（後書き）

物凄い釣りでした。　毒と言っときながらその正体は『酸欠』！！
　なんという野郎でしょう木原くん・・・ぶっちゃけこの技最強だと思いません？

さぁヒナギクも混ざってきて混戦が予想される中、ようやくやってきました主人公！　次回はあまり細かいことはやらずに戦闘一色になりそうです。
感想や意見はいつでもお待ちしております！

第57話～それは男のロマンである～（前書き）

もはやタイトルが釣り・・・という訳ではないです。　ちゃんと意味があるタイトルです。　さぁバトルも佳境に！　テルだけでなく、ハヤテやヒナギクたちにも注目してください！！

第５７話～それは男のロマンである～

廃ビルの屋上に彼は現れた。

以前、自身の刃によって貫かれた男。

致命傷の筈。　助かったとしても動ける体ではない筈だ。

そこまでしてここへやって来た理由は？

分からない。　しかし、今の彼は何故か輝いて見える。

黒く塗りつぶそうにもそれ拒もうと更に輝こうとする・・・

それは例えるなら・・・銀色。

第５７話～黒星のままでは終われない～

「どうして・・・来たのですか」

伊澄が小さく呟く。これは最早自分だけの戦いだと思っていたのに・・・

「私のせいだから・・・誰も巻き込みたくなかったのに・・・」
テルが傷ついてしまったのは自分が弱いから。　やはり自分は甘えていたのかもしれない、その現状に・・・仲間ができるということはこんなにも辛いことだとは思わなかった。
「簡単な話だろバカめ」
ゆっくりと歩いてくるテルは伊澄の近くまで来てこう言った。
「仲間だからだ」
視線は黒羽に向けたままテルは続けた。
「誰かが怪我したからって一人無茶をする大馬鹿野郎、それを止めるのが俺の役目だ」
「でも・・・！」
「それ以上言うな・・・何度だって言ってやる。　お前は一人じゃない」
その言葉に涙を流した。　最初から一人と決め込んでいたのは自分だ。
だけどここに仲間と言ってくれる人がいる。
「もう休んでな。　ここからは俺の一人舞台だ」

コクリと伊澄は頷く。　そしてテルは伊澄を見ないまま続けた。
「後ねぇ伊澄くん。　テルさんはこの世で一番『負ける』という言葉が大の嫌いなんだよ」
カチャ。
その手に鞘を持ち、テルは鞘から刀をゆっくりと抜き放った。
その刀身、光を受けて輝く姿は何物に染まることのない美しい銀色。
「・・・・・」
何かを悟ったのか、黒羽も右手に黒い刃を展開させる。　形は長剣、テルを刺した武器だ。
お互いに武器を構えたということは、準備ＯＫだということだ。
ここから先、二人にはあまり言葉というものは必要ないだろう。
全ては剣劇の中で語られるだろう。
誰しもが図ったわけでもなく、ほぼ同時に二人が踏み込んだ。
二人の刃が同時に一太刀、それは体に触れられることなく互いの刃と激突した。
激しい火花を散らすほどの鍔迫り合い。　全力でお互い押している

がギチギチという金属の音が響くだけだ。

（ここ・・・！）

仕掛けたのはテルだ。　鍔迫り合いの状態から刃を滑らして踏み込む。

近くなった距離で今度は黒羽の別攻撃。　肩の部分から黒い槍を出現、顔面目がけて放つ。

「チィッ！」

即座に鍔迫り合いを一歩下がって解除し、迫ってきた黒い槍を『斬る』。

「・・・・」

黒羽は槍を戻して斬られた部分を凝視した。　バッサリと真っ黒な断面が見えるほどの切れ方。

この槍は弾かれることはあったが、『斬られる』ということは今までなかった。

そういうのを斬ることができる刀なのだろう。　そう黒羽は分析した。

そして繰り出す次の一手。

両肩から黒い槍を多数展開、一本の槍から二本の槍、どんどん数を増やしていく。

「数で決めようってかい・・・面白れぇ！」

刀を握り、不敵に笑うテルは敢えてその突っ込んだ。

黒羽はその場で動かないまま狙いを見定めると、弾丸のように槍を放った。

だが・・・

テルは斬る。　自分の道を阻むものを排除するように。

自身が進むのに必要な槍だけを斬る、もしくは受け流す。

「・・・・・」

距離を近づかせているテルを見て黒羽は長剣をテルに向けて構える。

どうやらここまで計算だったようにその長剣を槍に変えてテル目がけて突き出した。

「ッッ！！」

気づいたテルはすぐさま真横にズレることにより二度目の串刺しの刑を回避。

そしてこの間を一気に縮める。

「・・・・・」

すかさず黒羽が右手横に振るうと全ての槍がテルに追いかけるように迫ってきた。

「いいねいいね！！」

迫る槍を振り返ることなく、テルは黒羽に突っ込んでいく。　そしてそのまま真上へジャンプ。

しかし、槍は飛んでいるテルにも容赦なく追撃。

これは大きな隙。　と黒羽は思っただろう。

しかし信じられないことに、テルは黒羽の頭上を越えていく中で、その黒い槍を見事に捌き切っていた。

ストンッと低く着地するとともに振り向きざま一閃。

黒羽は左手に展開させた短剣でかろうじてガード。

再び金属音が鳴り響く。

（相変わらずの馬鹿力だぜ・・・！！）

テルとて加減してるわけがない。片手で刀を受け止めるというその怪力ぶり、本当に人間なのかと疑ってしまうほどだ。

そんな疑問が浮かんだ瞬間。　黒羽は右手に戻した長剣を真横に振るった。

危険を感じたテルが後ろへ下がりながら刀で受ける。　刀が折れてしまうかという重い一撃に数メートルほど吹き飛んだ。

「へっ・・・」

ムクリと体を起こしたテルは刀を杖代わりにして立ち上がる。口からは血が出ていた。　黒羽はそれを見ていて無表情を通し続けていた。

「テル様・・・」

見守る伊澄も心配そうだ。　それほどまでに相手の力は圧倒的である。しかし次の瞬間。

バシュ！

何かが噴出したような水の音に黒羽は自身の右手の違和感を覚える。右手を見ると。

「・・・・・」

手から血が出ていた。　幸いそこまで深い傷というわけではない。

それを見たテルが一言。

「どうした・・・血が出てるぜ？」

「・・・・・」

再び武器を構えて素早く踏み込んでいく。　テルは転がりながらそれを避けた。

「さぁて、盛り上げるために付いてきな！」

テルは起き上がるとすぐさま近くの下の階につながる穴の中に入ってその姿を隠した。

まるで誘っているのか・・・という行動。

「・・・・」

しばし考えた黒羽は一瞬だけ伊澄を見る。

「え？」

戸惑った伊澄だったが黒羽は武器をしまうと穴の中に飛び込んでいった。

○

（ここからが本番だ・・・）

そう考えたテル。　今は近くの壁に身を隠して敵が来るのをひたすら待つ。

わざわざ内部を選んだのは理由がある。　まず暗さ。　外が晴れているとはいえ、中は十分暗い。それはあの黒い槍でこちらを狙うことは難しいだろう。

そして残るはあの空中能力。　敵に空が飛べる能力がある以上、狭いところに引き込んでソレを活かせなくするしかない。

（来たか・・・）

壁から少しだけ頭を出し、穴から黒羽が降りてきた。

結構な高さだが、問題ないかのようにストンッと着地。

「・・・・・」

辺りを見渡し、テルを探しながら取り敢えずといった感じで適当なところに槍を放つ。

テルの方から暗くてよく見えないが、響く轟音から察するに全く見当違いの場所に放たれていると考えて間違いはないそうだ。

黒羽はテルの位置が分かっていない。

「全ての環境は使えるだけ使う・・・先生もよく言ったもんだぜ」

後はどう攻めるかというのを考えていたその時である。　突如黒羽に変化が起こった。

（なんだ？）

テルがよく見ると、黒羽の手から何かを作り出していた。　黒い物体が掌からどんどん溢れ出し一つの形を作り出す。

「・・・・・」

出来上がったのはなんか漫画とかに出てきそうなレーダーだった。

簡単なイメージで言うと、サ〇ゲッチュにでてくるピ〇サルレーダーに酷似している。

（なんじゃありゃ！？）

目を見開いて驚くテル。しかし驚き反面、とても極めてシュールなシーンだ。

テルは黙ってその光景を見続けることにする。

「・・・・・」

ウィーンウィーンとレーダーが回転しだす。　本当にあのタイプのレーダーってあったんだなと思うテルである。

『ウィーン・・・ピポポポポポ！！』

「なんでピ〇サルレーダーァァァァッッ！？」

気づかれないように突っ込んでみるが今のでこちらの位置がバレてしまったとテルは考える。

キュイイィィィインッッ！！

出来るだけ遠くへ離れようとした時である。テルの耳に奇妙な音が聞こえた。

恐る恐るテルが再び壁から黒羽を見て彼は口をあんぐり、目が点状態になっていた。

「へ、へぇ・・・そういうのもアリなんだ」

テルが見据えるその先には右手の武器を構える黒羽の姿。先ほどの奇妙な音、それはその武器から発せられていた。

黒く、尖っていてどんな壁をも削りとおす、そして同時に男のロマン。

それはドリルッッ！！

右手には大きな、彼女の身の丈のほどの巨大なドリルが装着されていた。

モーターが回転する音とともに巨大なドリルが回転しだす。　それを構えて黒羽は壁に突進。

その瞬間、厚い壁が簡単にドリルにより破壊された。　しかもテルは目と鼻の先。

「やべっ！！」

ドリルを回転させてこちらに向けていることから瞬間的に背を向けてダッシュ。

勿論黒羽は追ってくる、壁ごとドリルで貫いてだ。

「おおおおおおお！！　ホントにアイツなんでもありだよ！　調子乗って一対一なんて申し込むんじゃなかった！！」

全速力で走るテルだが予想以上に黒羽の移動速度が速い。　もはや背中にジェットでもつけてるんじゃないかと疑っているが、あの巨

大な物体を持ってダッシュしている。
ほんと何でもアリだ。

○

「黒羽のヤツ・・・派手にやってるな」
上からの振動音で黒羽が暴れているのだということを感じ取る木原。
しかしコチラの戦況は芳しくない、目の前にはチートキャラが二人。　ここは猫の手でも借りたい気分である。

（と言っても、アイツは今まで助けに来てくれた事なかったからな・・・トホホ・・・）

「ハヤテくん！　私の動きに付いて来れるかしら！？」

「任せてください！　いかなる時でも即座に対応するのが執事ですッッ！！」

まるでス○ロボで言う合体攻撃前のキャラの掛け合いに木原は身構える。

ハヤテとヒナギクが同時に駆け出す。　最初に仕掛けたのはハヤテで、木原に向けてとび蹴りを放つ。

「甘いぜェ！」

その蹴りを真横にずれて躱すと少し離れた場所でヒナギクが走りな

がら正宗を振りかぶった。

「せいやーーーーっ！！」

力を込めた叫びとともにヒナギクは正宗を投擲。　まるでブーメランのように回転して向かっていく。

それも木原はしゃがんで対応。　正宗は木原の真上を通り過ぎていく。

「武器を手放したッッ　これは勝機ッッ！！」

「まだだァァァ！！」

その声にすぐさま木原は振り返る。　真後ろに居たのはハヤテだ。

ハヤテの方向には先ほどヒナギクが投擲した正宗がある。　ハヤテはそれをサッカーボールのように右足で蹴り返す。

「な、んだとッッ！？」

驚愕する木原、再び木刀は回転しながら向かってくる。まさか二段構えとは思わず一瞬判断が遅れてしまうが間一髪、体をマトリックスのごとく回避。

（残念だったな・・・ん？）

木原が完全に安心しきっていた時である。　木原の目の前に迫る一人の人影。

「残念だったわね！」

回避した正宗を掴みとったヒナギクだった。　ヒナギクは気合一閃、木原を思いっきり真上に上げる。

「ふごっ！！」

避ける間もなく完璧に食らった木原は更に思い知ることになる、この二人の恐怖を・・・

気づくのはさほど時間は掛からなかった。　暫くして木原の更に上をいくハヤテの姿が見えたからだ。

「・・・・・」

その目を見てさほど恐怖を感じただろう木原君、その時のハヤテの目はまさしくザク。　ザクのモノアイのような妖しい輝きを放っていた。

「せいやーーーーーッッ！！」

ドズン！　と空中に居る木原のどてっぱらにハヤテの断罪のギロチンともいえる踵落としが炸裂。　木原は叫ぶ暇もない、このまま地面に叩きつけられるかと思いきや・・・

「まだまだ終わらせないわよ・・・」

下には地獄が待っていた。

木原の着地地点であろうその場所にブンブンと殺る気満々のヒナギクが正宗を振るっている。
そして正宗を構えるとニヤリと笑うのだ。

（・・・ヤベェ、こいつら容赦ねぇ・・・）

木原は確信する、悪魔は本当にいたんだと。　これは今年のベスト3に入るくらいのネタだと感じたほどだ。

「ハアアアアッッ！！」

ハヤテも木原の腹に食い込ませている踵に込める力を強める。

「これが私達の・・・」

「「力だァァァーーーー！！」」

ヒナギクの正宗の一撃が木原の背中に炸裂。　もちろん叫ぶ暇もありません。

締めとばかりにハヤテがトドメの空中人間オーバーヘッドキック。
　まるで人がサッカーボールのように吹っ飛んで行った。

（アレ？　これ本当にハヤテのごとく？）

最早どこぞの戦闘漫画になっていないかと心の中で思ったナギである。

吹っ飛ばされた木原は飛ばされた先にあるドラム缶の山に突っ込んだ。
しかしそのまま動かないというか動けないのか、ドラム缶から出てくる気配はない。それを見て二人は勝利を確信し、お互いにハイタッチ。

「流石ねハヤテくん、一瞬であの動きに付いて来れるとわね・・・」

「ヒナギクさんも、僕の正宗のパスに対応できるのも流石です・・・今の技はランページ・ゴーストと名づけましょう！」

「え・・・ちょ、ちょっとハヤテくん！？」

「あ・・・・」

咄嗟に目を輝かせてヒナギクの手を握るハヤテ。　ヒナギクはそれが恥ずかしかったのか慌ててハヤテは手を離す。

「なんか凄い自然とやってくるとこを見ると・・・ワザとやってるのかしら？」

「ま、まさか！　僕がヒナギクさんなんかにそんな命知らずなことをするわけ無いじゃないですか！」

プチン。

「バカモノォォォォォッッ！！！」

「え？」

ドゴッ！

本日何回目となるこのプッツンタイム。　だが今回はハヤテの軽はずみな行動から激怒したナギも参加し、ダブルプッツン。ハヤテは怒りのヒナギクとナギの鉄槌により再び沈んだ。

「まったくもう・・・」

「まったく、ハヤテときたらまったく・・・！！！」

床に轟沈しているハヤテをよそにため息をつくヒナギク。ナギは怒りを露わにしながらボソボソと呟いている。　だがその時である。

突如天井から轟音と共に落ちてくる二人の人影。

「テル君！？」

刀を持ったテルが落ちてくるのを見てヒナギクが正宗を構える。

テルと黒羽はお互いに地面に着地した。

黒羽はともかく、テルは息が荒い。

「よぅ・・会長、みんな無事か」

「ええ、なんとか・・・それよりその人は？」

ヒナギクは黒羽の方を見てテルに聞くがテルは刀を振ってニヤリと笑いながら言うのだ。

「野生のマウンテンゴリラもとい、グ〇ンラガン・・・」

「どういうこと？」

不思議そうなヒナギクは訳が分からない状態だ。

「おーいどうしたテル、爆撃されたのか？」

「コレね、イメチェンだよイメチェン。　最近流行ってんだよ」

「どんなイメチェンだ！？」

ナギがテルのボロボロの姿を見てどうしたのかと聞いているがテルは悪魔でボケる。　すかさずナギが突っ込んだ。

「手伝いましょうか？」

覚醒したハヤテがテルの援護に向かおうとしたがテルが「いや」と答える。

「こいつは・・・俺が決着つけるさ・・・」

手に持つ刀を握る力を強めてその先の黒羽の姿を見据える。　相手は先ほどのドリルをしまい、元の腕から黒い長剣へと変化させた。

どうやら相手も一撃で決めるらしい。　その準備か、初めて相手が構える。

「・・・・・」

静まり返る中、テルも刀を構えてその決戦のタイミングを図る。

そして黒羽が長剣を構えたまま、テルに向かって走り出した。

テルは居合の構えのまま全く動かない。

一瞬の隙が命取り、それは十分承知しているため、全身全霊をこの一太刀に賭ける。

――やがて。

――一瞬とも取れるその瞬間、二人は交錯した。

――たった一つの金属音を響かせて。

第57話～それは男のロマンである～（後書き）

攻めていたはずの木原君、一転してリンチに・・・ランページゴーストは確かスパロボの技名です。というかハヤテ、ヒナギク、結婚しろよ・・・（不動遊星風に）

黒羽さんの腕がドリルになったのは・・・私の個人的な理由です。
　あまりお気になさらず・・・

次回、突然ですが特別編クライマックスです。
果たして勝者は？

第５８話～残った大きな手がかり～（前書き）

ちょっと間が開いてしまいした・・・ではシリアス長編もこれで最後です！

第５８話～残った大きな手がかり～

互いの勝負は一瞬だった。　それはハヤテやヒナギクには見切ることも難しく、捉えることはできなかった。

静寂だけが響き、両者はまったく動かない。　そしてやがてハヤテが呟く。

「一体・・・誰が？」

その時、上から何かが落ちてきた。　銀色の刀の破片がくるくると回りながら地面に突き刺さる。

テルの刀だ。

まさか。とハヤテ達が顔を歪めたときである。

ピキ・・・

何かがヒビ入る音が聞こえた。　皆がその音の出所を見る。

それは黒羽の持つ武器からだった。

そのヒビはやがて腕までに達し、形を維持できなくなったその剣は崩れ落ちる。

「・・・・」

同時に黒羽が右腕を押さえながら膝をついた。　右腕からは機械が

ショートしたかのように火花が小さく弾ける。

「・・・・」

ゆっくりと立ち上がり、テルを振り返る。　その表情は全く変わることのない無表情だった。
まるで痛覚がないかのような平然さにテルは悪寒が走る。

「黒羽！」

「なにッ！？」

突如、ドラム缶の山から一つの丸い球が場に投げ込まれる。　テルは「まさか」とデジャヴュ感否めない展開を予測した。

ボシュン。

と丸い球からあふれ出る白い煙が場を包み込んでいく。

「うわ！　なんか悪党どものお約束の煙幕だー！」

「ちょ、なんも見えないじゃない！」

「誰か！　鳥系のポ〇モンを！　早く『かぜおこし』をッッ！！」

「「「誰もポ〇モンなんて持ってないわァァァァ！！！」」」

テルのボケに一同が突っ込みながら叫んだ。　確かに何も見えない。
お互いが誰かというぐらいにだ。

一方で煙幕を投げ込んだ木原はドラム缶から一直線に黒羽のもとに。

「黒羽・・・大丈夫か？」

「・・・大丈夫、問題ない」

「涼しい顔でイー〇ックの真似なんてやるもんじゃねぇよ」

もちろんその類のネタを知ってるわけではない、自然と出た返答であることは木原も承知している。

「片腕の黒曜の機能が８０％ダウンした・・・でもまだやれる」

腕を押さえながら黒羽は言うが、片腕はバチバチと音を上げながらプルプルと震えている。

「機会はいくらでもある。　今は無理してまでやることはない！」

「・・・・」

無理するな、という木原の言葉にしばし考えていてコクッと頷いてか、黒羽はその場を走り去っていく。

「やれやれだぜ・・・」

一瞬にして消え去ったのを確認する木原。　いくら煙で周りが見えなくても彼女の力をもってすれば簡単に出口まで逃げれるだろう。

木原もそろそろこの騒ぎに紛れて廃ビルを後にする。　黒羽と違って特殊能力は全くないが一つの感覚が彼を導いていく。

その白い煙の中を何も道しるべ無く進んでいく木原。

「へ・・・これなら楽勝でーーーー」

だが、どうしてそのに足を止めてしまったのだろう。

どんな時でも逃げる時は全力で逃げ、ノンストップを心がけていた彼が。

「ん？」

偶然だ。　偶然だった。　惚け顔のテルと木原が鉢合わせになってしまっていた。

「なんでお前が・・・ッッ！？」

そう呟いたのは木原だった。　その発言にテルも顔をしかめる。

木原は明らかに動揺していた。　まるで『居ない人が目の前にいるかのような』、幽霊でも見たかのような。

「なんでお前が居るんだよ！！」

思わず叫んでしまう木原。　テルは疑問に思いながら返していた。

「お前・・・どっかで会ったか？」

「ッッッ！？」

その言葉を聞いて木原はまさか・・・と驚愕の表情だ。　忘れてしまっているのかという顔だ。

「チィ！」

「あ、オイこら！！」

やがて木原が舌打ちするとテルの真横をそのまま走り抜ける。　テルは一度は叫ぶがその後は追っても無駄だと判断し、黙ってその背中を見続けることしかできなかった。

やがて白い煙が晴れて、二人が居なくなったことを確認して一同が騒然とした。

「くっそう、逃げられたか・・・」

「まぁ何事もなくて良かったですけど・・・」

逃げられたことに悔しがるナギだが隣でハヤテが宥める。

「いや」

隣でテルが小さく呟く。

「俺はなんかあったぜ」

その言葉にはみんながよく分からないでいた。

アイツは俺のことを知っているようだった。

大きな進展だ。

「という訳でお前ら先に帰ってろよ、俺屋上に忘れ物したから」

「わ、分かりました・・・」

頷くハヤテに同意して、ヒナギクやナギも後に続いていく。

テルはそれを見送ると屋上へと向かっていった。

○

テルは帰り道を歩いていく。　その背中には伊澄がいた。　最初は嫌がっていた伊澄だがテルに

「お前に拒否権はない」

と断言されてしまい背中に乗せられてしまっている。

今は鷺ノ宮家まで帰る途中だ。

「あーだるい、どれ位だるいかっていうととんでもなくだるい・・・」

そんなことを言っていると伊澄が降りそうになるが慌てて冗談と言って歩き続けた。

「テル様・・・」

「ん？」

伊澄の言葉にテルが相槌を打つ。

「あ、ありがとうございました・・・」

「気にすんな。　ただ、もう簡単になんでもしょい込むなよ？　いざとなったら高性能関西人がいるんだからな？」

「・・・はい」

戸惑いながら答える伊澄の言葉には嬉しそうな感じが混じっていた。

これならもう大丈夫だろう。　取り敢えず一安心したテルだった。

ちなみに高性能関西人とは咲夜のことである。

どんなシリアスな雰囲気を作り上げても持ち前の関西パワーでその雰囲気を中和することから名づけられた。

その関西人はというと。

「あーはっはっはっ！　なんかまだ伊澄さん達帰ってこんなぁ！」
お笑い番組を見ながら平和に過ごしていた。
○
「・・・・・」
とあるビルの屋上に黒羽と木原はいた。　無事退却をし、今はその屋上から町全体を見渡している。
すると黒羽が珍しく口を開いた。
「石は・・・？」
「久しぶりに喋りかけたと言えばソレかよ、もうちょいまともな会話をしようぜ」
ふぅため息をつく木原は人間らしい会話を黒羽に求めるが、再度問い詰められて無理と悟ったか両腕を交差してジェスチャーする。
「チャンスはあった」
その一言をいう黒羽の表情はいつもと同じ無表情。
「だからどうした、まさか殺してでも奪えって話なのかよ？　そんな大切か石が」
「・・・・」

それを言うと黒羽は黙り込んでしまう。　木原は続けた。

「別に命まで取らんでも気絶させてる間に奪うっていう手もあるんだろうが」

失敗したのを棚に上げる訳ではないが、少しばかり口調を強める。
木原も感じていた。　この少女、黒羽には人間らしい感情が見受けられない。　その謎の力を使い、他人を傷つけることを躊躇わない。

まず、本当に人間なのだろうか？

だが黒羽は木原の言葉に全く動じることなく、いつものように無表情を通し続ける。
それを見て小さく舌打ちすると

「取り敢えず、しばらくこの街に潜伏することにしよう。　そうすればあいつ等だって監視できるしな」

「・・・・・」

それを聞きうけると、黒羽は翼を広げて東京の空へと姿を消していった。

（あいつのあだ名は今日からミス・ポーカフェイスだ！！）

そう決めると前方に広がる景色を眺める。　しかし彼は少しだけその虚空を見つめた。

「本当にお前なのか・・・・テル」

その呟きは風と共に消えていく。

○

その次の週。　善立　テルは元気？　良く白皇学院に登校していた。
怪我を理由に休もうという算段だったが、なんと土日を挟んでだいぶ良くなってしまい（それでもまだ怪我人）、休もうという野望が打ち砕かれてしまった。

「あー、ダルイ・・・世界よ、なぜお前は俺に対して残酷なんだ・・・」

一人机の上に頭だけを乗せて理不尽をつぶやくテル。　隣では休みの最中にできなかった宿題を急ピッチで片付けるハヤテの姿が。

「テルさん！　時間が刻々と迫ってきていますよ！？　あの宿題、今日の一限目に提出なんですから！！」

「んなこと言われてもなぁハヤテくん、俺は今にもこのまま死んで死後の世界で新しく人生をやり直した気分だよ」

「口を動かすより手を動かしてください！　僕だって過去に戻りたいですよ！　タイムマシンが欲しいくらいです！」

「机の中を覗けばあるかもな」

「ちょっとあなたたち、あの宿題終わってないの？」

絶望を感じている二人の間に現れたのはヒナギクとナギだ。

「あんなの数分あれば終わる」

「あり得ない。　お前らの頭はどうなってるんだ？　改造でもされたのか？　どこだ？　どこの組織だ？ショッカー？」

物凄いだるそうな表情のテルは鉛筆を手に持つ気力すらないらしい、持っては机をころがし、持っては転がす・・それを繰り返していた。

とそこへ・・・

「ヒナちゃーん！」

「ノートを！」

「見せてー！」

「却下ッッ！！！」

この話では初登場となる生徒会三人組、泉と美希、理沙が現れた。しかしヒナギクはその三人の明らかに手抜きを見て習いバッサリと切り捨てた。

さらに・・・

「うわー！　唯子先輩と王華　千里が喧嘩でこっちまで来たぞーー！！」

一人の生徒が叫ぶ。　その瞬間、両側のドアを蹴破って千里と唯子が入ってきた。

「待たぬか貴様ァァァ！！　もう一度言ってみろォォォ！！」

「ハッハッハッハ！　何度でも言ってやるぞ木偶の坊！　貴様のようなキャラは使いにくいから最後の方でしか一生使われないとな！！」

「ふざけるなァァァァ！！　キングである俺様がこれ以上の侮辱を受けるとは、貴様八つ裂きにしてくれる！！」

「望むところだ陶片僕。　口から2リットルの血を吐き出させてやろう！」

千里は飛びかかりながら、唯子は竹刀を構えながら応戦。　朝っぱらから、この2年生たちは何やってるんだろう・・・そう思えてならないハヤテのクラスだった。

「ああーもうっ！　朝から騒ぐんじゃなぁぁぁぁぁぁい！！」

ヒナギクが叫びながら喧嘩を止めるように呼び止めるが、二人は聞く耳持たずといったところであり、戦闘はさらに激化。　ほかの生徒も巻き添えを食らう。

「おっ！　喧嘩か？　いいねいいね、青春だね！　先生も混ぜろーーー！！」

「ギャーーーー！　雪路も暴れてきたぞーーー！！」

更に雪路も加わり、教室内はカオス状態に・・・

「俺様キャラなんて古いのだよ！　いい加減目を覚ましたらどうだ！？　そんな事だから友達ができなのだ！！」

「貴様、これ以上の無礼は許さん！　キングは一人、この俺だッッ！！」

もうこいつらは気が済むまでやらせないと事態の収拾はつかない、アレ、今正宗を持ったヒナギクが突っ込んでいったぞ。　なら後数分と言った所だ。

とその喧騒を物ともせず惰眠を貪ろうとしていたテルだったが、千里の投げた机がテルに直撃。

「・・・もう勘弁してくれ」

遠のく意識の中、テルはそんなことを呟いていたのだった。

第５８話～残った大きな手がかり～（後書き）

　ようやくシリアス長編も終わりました。　まずひと段落と言った所です。
話の中で出てきた黒羽さん、木原君はこの話を機会に本篇にも出てくる回数が多くなることでしょう。

所謂この人たちが物語の鍵っていう感じです。
正確な情報はまだお伝えすることはできませんが、黒羽さんのあの力は『黒曜』という物です。　伊澄の『八葉』と似ていますが全く別物です。　設定上は通常の武器でもダメージは通りますが、伊澄の力や正宗や霊剣の類は効果が高い、という設定です。

だいぶこれでストーリが変わってきます。この二人が現れたことにより、テル君の生活にも多少なりとも影響を与えてきそうです。

現在、ストーリー進行度は１００％で表すと・・・３０％ぐらいですかね？
１年たってこれしか進んでないぜ！　なんてこった！

それでは久しぶりにやって来た質問コーナーです。

テル「はい、今回は久しぶりに質問が来たので元気よく答えていきたいと思いま～す」

ハヤテ「口で言っている割にとてもやる気がなさそうですね・・・」

ナギ「質問って言ってもこれ一つだけどな」

唯子「さぁ！　そろそろフィナーレといこうか！」

千里「望むところだ！」

ハヤテ「皆さんまだ喧嘩していたんですか！？」

ナギ「喧嘩するほど仲が良いというが・・・」

テル「チッ、面倒くせーからとっとと読み上げるぞ・・・」

質問・今回のテルを見てどう思った？

テル「なお、今回は特にナギと伊澄の方から聞きたいらしく、質問者の要望に応えてこの二人だけとすーーー」

ガツン！

ハヤテ「うわ！　千里さんの投げた机がまたしてもテルさんに直撃した！」

ヒナギク「ハヤテくん・・・・」

ハヤテ「な、なんですかヒナギクさん？」

ヒナギク「ちょっと私、二人を止めてくるわ」

ハヤテ「うわーーー！！　ヒナギクさんがハンターのような目つき

で正宗を構えて二人の喧騒に突っ込んでいった！！」

ナギ「よし、これなら数分で終わるだろう。　ヒナギクが時間を稼いでる間に進めるぞ！！」

ハヤテ「はい！では早速、質問の回答をお願いします！！」

ナギ「ぶっちゃけ、最後の方しか見てないからよく分からん・・・だが」

ハヤテ「だが？」

ナギ「あのドリルはカッコよかったッッ！！」

ハヤテ「まさかの敵キャラに評価が！？」

ナギ「何度でも言おう！ドリルは男のロマン！　そしてぇ！　魂だぁぁぁあ！！」

伊澄「ナギは女の子なのに・・・」

ハヤテ「珍しいツッコミ、ありがとうございます・・・伊澄さんは？」

伊澄「今回は・・・本当にたくさん助けてもらいました・・・」

ハヤテ「伊澄さん、まだ熱でもあるんですか？　顔が赤いですよ？」

伊澄「へ、え！？　そんなことないですよ！？　むしろ元気が有り余ってるくらいで・・・」

ハヤテ「今回はこれで切りあげた方がよさそうですね・・・では次回！！」

伊澄「ーーーーーーーっっ！」

では物語はそろそろ原作へ、短編終わったら・・・祭りじゃ祭りじゃーい！！

第５９話短編～放課後語らいタイム～（前書き）

シリアス長編が終わり、１、２話くらい短編です。

第５９話短編～放課後語らいタイム～

ここは白皇学院、金持ちによる金持ちの為の超進学校。

進学校という事もあり、中にいる生徒達は身だしなみ、才色兼備に優れ、未来の政治家などもいる……しかし。

最近ではこの白皇学院のイメージが奇人変人しかいないのではと思ってきたハヤテである。

「そう思いませんか？」

「と言われてもなぁ・・・」

ハヤテの問いに、聞かれたナギも考える。

「お前も人のこと言えないではないか」

「何を言ってるんですか、僕は至って普通です！」

ダメだこりゃ、と思ったナギ。　一番自覚すべき人物がこれでは・・・

「取り敢えずもう帰ろう。　掃除も終わったのだろう？」

「そうですね」

現在は放課後ということもあり、ナギもハヤテもナギも帰る予定であった。　『予定』であったのだ。
その帰る廊下の途中。

「もし・・・」

突如、帰る途中の二人に声がかけられる。　振り返るとそこにいたのはハヤテの先輩、奈津美　唯子だった。

「あれ、唯子さんじゃないですか、どうしたんですか？」

「やぁ少年、君たちは仲良く下校の途中か？」

「まぁ、そう言う所ですよ」

唯子の問いにハヤテは笑顔で返す。　すると唯子は口元に手を当てながら少しばかり考えて聞いた。

「君たちは部活動には入っていないのだな？」

「え、ええ。　執事業をやっている間は部活なんてやっている暇はありませんから・・・」

ハヤテが苦笑いしながら答える。　万能人間のハヤテも執事業で手一杯であり、部活動に身を当てる時間は確保できていないのだ。
テルも同じく。

それに対して唯子は残念そうな顔だ。

「もったいないな・・・青春とはこうして過ごしていく一秒一秒ごとに無くなっていくというのに・・・ナギくんは…聞くまでもないか」

「な、どうしてそこは聞かないのだ！？」

「いやぁ、そりゃあナギくんの運動神経の良し悪しは把握しているのでな？　まぁ剣道部具が重すぎて動けないということぐらいお見通しさ」

「ぐ・・・」

ナギは事実を言い当てられて何も言い返せないようだ。

「君たち暇だろ？　少し付き合え」

「「はい？」」

突然なんも前振りもない唯子の言葉に同時に聞き返すハヤテとナギ。

「放課後というのはもっと有効に使うべきだ。　君が卒業する時、その平らな胸に押し当てて思い出してみろ、あの放課後は楽しかった。　これは僕の心の中で永遠に生き続けるメモリー！となる・・・」

「平らってなんだ平らって！！」

ナギが気になるワードに怒鳴る。フフ・・と笑いながら両手を広げて語る唯子。　それに違和感を感じたハヤテが思い切って真相を聞く。

「して、その真意は？」

「ぶっちゃけた話、私のただの暇つぶしだ」

「ほんとにぶっちゃけましたね・・・」

きっぱりと答える唯子にハヤテが呆れ顔で呟いた。

「と、言っても仕事もありますし・・・」

「別に大丈夫だろう？　いいではないか仕事くらい少し遅れても・・・」

「いやそれでもですね・・・」

「ほんとお願いしますよ旦那。　ほんの一時間、いや三十分だけでいいから」

「あからさまに勧誘してますよねソレ・・・キャッチの人とかが使いそうな台詞ですよ」

笑いながらキャッチ感覚で誘う唯子にハヤテが冷静に突っ込んでいる。

「・・・分かりましたよ。　三十分だけですよ？」

「フフ・・・感謝しよう。　取り敢えずこちらに来たまえ」

「なんか主である私の存在が無視されているが私も暇だし、まぁいっか」

ふてくされ顔でナギが唯子の後を付いていく。

二人が案内されたのは誰もいない小さな一室だった。　スライドドアを動かし、中に入るとそこには見知った顔が。

「よお」

「あれ、テルさん？　テルさんも来てたんですか？」

「おう、なんか放課後って暇だからうろついていたら・・・お前らも？」

「僕らは唯子さんに連れてこられました」

「まぁ取り敢えずみんな座ってくれ！」

パンパン、と唯子が手を叩き合図するとハヤテたちは席に座る。全員が座った所でハヤテが聞いた。

「ところで・・・一体何が始まるんです？」

それを聞くと、唯子が不気味な笑みを浮かべていた。

「放課後というのは主に語らいの場だ。　簡単に言えば、これから色々なことに対して語ってもらう」

第５９話～放課後語らいタイム～

「取り敢えず帰ってもいいですか？」

「こらこら、何故そうなる」

ハヤテの率直な感想に対し唯子がジト目で答える。

「だって何をするかと思えば語り合いって・・・なんでそうなったんですか？」

「君たちは学生という名の本分をまるで理解していない。　学生とはよく遊び、よく怠け、よく楽しむものだろう？」

「それ今自分で作ったんですよね！？」

唯子の勝手な学生の本分にハヤテが鋭く突っ込む。　実際そうだったらどんなに楽しいことだろうか。

すると今度はテルが聞く。

「アレ？　学校ってそういう場所じゃなかったのか？」

「テルさん、百科事典にも載ってることですよ・・・」

ハヤテもテルに対してはもはや呆れ顔である。どんだけ学校でだらけたいのか・・・

「そもそも君は学生の放課後がいかに貴重か、まるで分かっていない」

唯子が腰に手を当てて続ける。

「さっきも言ったが、会話をするということは人間とのコミュニケーション、社会で生きていくためには必要不可欠なのだよ。　課長と話すのも同期の社員ともプライベートで会話をするのは何事からもこういう駄弁から始まるとな」

「いや、さっきと全く違うこと言ってますから！　なんでサラリーマン基準で話すんですか！？」

最早ツッコミの作業に囚われがちのハヤテ、ここに居ては自分の立場が大変だ。　もしこの集団の中に居たら今日はずっと『ツッコミ』の作業に追われる立場になる。

だが・・・

「まぁいいんじゃないかな？」

「お嬢様ァァァァ！？」

ナギの居残り宣言にハヤテは思わずシャウト。　その理由をナギは説明する。

「暇だからだ」

「わずか五文字で済まさないで下さいよ！」

「流石執事くん、ささいなツッコミも忘れないな」

その光景を見ていた唯子がボソッと呟いた。　しかしこれを聞いて主であるナギが帰らないということを明言したのを良いことにハヤテに再度聞く。

「どうだハヤテくん、主であるナギくんが帰らないと言っている以上、一人で帰ることはできまい？」

事実を覆すことはできない、もしハヤテが一人帰ってしまうと残りのテルでも信用ができない。　コロッと連れ去られてしまうこともあるのだ。

仕方ないといった感じでハヤテはため息をついた。

「わかりました・・・ところで、語るといっても何を語るんですか？」

「ふむ。　基本話が発展するものであればなんでもいいのだが君たちは何かあるか？」

唯子が教卓の所から一同に聞く。　だがみんなは無いような表情でうーんと唸り続けていた。

「よし、だったら今回は話題を決めた内容のカードを選んで語るとしよう」

「もしもボックスみたいな感じですかー？」

泉が間延びした感じで聞く。　唯子はそれに頷くとあらかじめ用意していたのか教卓の中から大きな正方形の箱を取り出した。

「明らかに準備してましたよね・・・」

「ま、ご都合主義の世界だからな」

それを言っちゃお終いよ。　とテルの言葉に心の中で呟いたハヤテだった。

巨大な箱には一か所だけ手が入るような穴が開いている。　要はこの中に手を突っ込んで話題の書かれたカードをひいてソレを語るというのだろう。

「むぅ・・・何やらめんどくさそうだな。　ハヤテ、ＰＳＰやってもいいか？」

「ダメですよ。　残るといったからには参加しないと」

「構わんぞ」

ハヤテの言葉に割って入るように唯子が言う。　どうして、と思うハヤテだったが後の唯子がニヤリとした笑みを見せて続ける。

「こういった語りの場では聞き手を引き込むような内容を聞かせてやればいいのさ。ゲームの作業ができなくなってしまうほどの話をな・・・」

（（（（一体何をする気だ・・・ッッ？））））

もはや邪悪なものしか感じられないその笑みに唯子とナギ以外の人間が心の中で呟く。

ナギもやれるならやってみろといった表情で一度笑うと懐からＰＳ

Pを取り出してスイッチを付ける。

「では始めようか・・・ハヤテくん、君がこの箱から選ぶんだ」

「蛇とか入ってませんよね？」

「そこまで疑うか、安心しろ私もそこまで悪魔じゃない」

その言葉に若干違和感を覚えつつも、ハヤテは箱に手を入れるという決断をした。

「わ、分かりました・・・では」

恐る恐る手を突っ込んでいくハヤテ。　唯子の言った通りで中にあるのは紙だけのようだ。

（アレ・・・これなんか他のカードとかと違って少し厚い・・・ノートみたいな？）

他のカードと違い、明らかな異質を感じるハヤテだったがもうこの際どうにでもなれといった感じでその物体を取り出す。

「ほっ！」

ハヤテが思った通り、取り出されたのは一冊のノートだった。

しかし、ハヤテにはどこかで見たことがあったノートだ。

「ふむ。　では今回の内容は・・・」

唯子がハヤテからソレを受け取るとニヤリと笑みを浮かべながらノートに書かれている題名を読み上げる。

「世紀末魔法少女マジカルデストロイ」

ガタッ！

と、その名前を聞いた瞬間、ナギが勢いよくイスから飛び上がる。

「ええ～っとだな、今回はこの・・・なんだ？　漫画について語ることにする！」

「ちょっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

「なにかなナギくん？」

叫ぶナギに腕を組みながら唯子は笑顔を浮かべている。　ナギの顔は真っ赤だ。

「ななななな何故お前がソレを持っているのだァァァァ！？」

指とか取り敢えず体全体が震え、明らかな動揺を見せるナギ。　何を隠そう、その漫画はナギが書いている漫画のタイトルだったからだ。

「さぁて、どうしてだったかなぁ？」

ニヤニヤと曖昧な返答をする唯子。　ハヤテもこれには動揺せざるを得ない。

「いつ侵入したんですか！？」

「はっはっはっは！　侵入なんてしてないよ～」

高らかに笑いながらハヤテの問いに答える唯子。　ハヤテは思う、絶対にごまかそうとしている、と。

「え、えげつねぇ・・・」

「フッフッフ・・・褒めるな、照れるではないかテル君」

「褒めてねーよ」

髪をさらっとかき上げて笑みを浮かべる唯子にテルが即答。
唯子はそのノートをナギに見せつけながら言う。

「大丈夫だ。　この談義が終わってもこの内容を学院全体に公表するわけでもない」

だがその言葉の裏にあるのは従わなければ公表するという軽い脅しである。　なんともエグイ。

「む、むぅ・・・」

しかしまだ怒りが収まらないのか、ナギの顔は怒り顔のままである。
それを見て唯子はナギの肩をガシッと掴んだ。

「ならばこう考えよう。　これは君が将来の人気漫画家になるための大切な談義だ。　君はこの談義を通して我々の意見や助言を受け

ることでより一層磨きのかかった漫画を作ることができるかもしれない・・・」

その言葉に怒り顔だったナギも落ち着きを取り戻して唯子の言葉に耳を傾ける。

「その磨きのかかった漫画を見て、読者は夢や希望を貰うのだよ。君の作り上げた漫画にな、そしてこの漫画が世界へと発信されていき・・・」

その説得、否、洗脳を受けていくナギはだんだんとその瞳を星形にしていく。そして唯子は最後に親指をビシィッとたててこう言った。

「君の漫画は世界を救う！」

「先生ェェェェェ！　宜しくお願いしますッス！！」

その時のナギの瞳にはきらきらと光る星が見えたそうな。

それを見てかナギの気づかない所で唯子はニタァ～と悪魔のような笑みを浮かべる。

（（ホントこの人やる事えげつねぇぇぇぇ！！！））

まさに洗脳ともいえるその行為に一同が唯子の恐ろしさを改めて実感した。

「では席に着きたまえナギくん。　君の偉大な栄光のロードへの第一歩だ」

「ハイ！　唯子先生ェ！」

大きく声を上げて返事をするナギ。　そしてノートを広げてその内容を語りだす。

「では始めよう・・・」

と語ろうとしたその時だった。

ガラッと、ドアが開け放たれこの室内に入ってくる人物がいた。

その人物は辺りを見渡して、鼻をフンッと鳴らす。

「何をしているのだ？」

それは白皇の問題児こと、王華　千里だった。

「先ほど、栄光のロードを俺の許可なく歩もうとしている人間がいると小耳に挟んだのだが・・・どこのどいつだ？」

「・・・チッ」

その姿を見た瞬間、唯子が開いていたノートをパタンと閉じた。

「諸君、この談義はこれで解散だ」

「「「えええええええええッッ！？」」」

突然の解散宣言に叫びあがる一同。　しかし唯子は不機嫌そうな顔で続ける。

「だってなぁ、明らかに邪魔物がいるのではなぁ・・・」
最早唯子にとって千里は『物』らしい。　その発言を聞いて、黙っていられる千里ではない。
「貴様・・・それは俺のことを言っているのか？」
「おや？　そう言う辺り、分かっているようじゃないか？」
くすくすと千里をあざ笑うかのような言い方である。
「おいハヤテ、こいつら少し黙らせろ」
「ど、どうやって？」
突然のテルの無理難題にハヤテが答える。
「お前の口八丁なら何とかなんだろ。　俺こいつらホント苦手」
「口八丁って、ちょっと傷つきます・・・」
「お前にしか出来ねぇんだよ」
それを聞いて、ハヤテはふぅと一つため息をついた。
「分かりましたよ・・・」
そう呟くハヤテ。　すぐさまその作業にかかる。　目の前の野獣たちは既に一触即発状態だった。

「それまでにしましょうよ。　なんだったら唯子さん、千里さんも混ぜてみましょうよ？」

「は？」

ハヤテの言葉に、凍てつくような唯子の短い返事。　だがここで引いてはダメだ。　意を決して交渉を続ける。

「僕らせっかく楽しみにしてたんですよ。　もうこの際、そういう楽しみはみんなで分け合うべきです」

「ほぅ、楽しいと？」

その言葉に反応したのは以外にも千里だった。　そしてドカッとイスに勝手に座り込む。

「その楽しいという物を俺にも見せて貰おうか！」

なんと言うことか、こんな単調な説得で片方が納得してしまうとは。

「さぁ俺を楽しませろ！」

自分が王様だと思っている千里はまるで自分だけに披露されるカーニバルを楽しみにするかのような物言いである。

「唯子さんもどうでしょう？」

「・・・・・はぁ」

ここまで押してきた甲斐があったのか、唯子がその冷徹な表情を緩めるかのようなため息をつく。

「わかった・・・」

（ヨッシャアアアアアア！！）

心の中でガッツポーズをしたハヤテである。

「それでは改めて、始めるとしよう・・・」

若干テンションが落ち気味の唯子は閉じていたノートを再び開き、その内容を読み始めた。

第５９話短編～放課後語らいタイム～（後書き）

そうです。１０巻の内容をアレンジしてみました。
次回は……カオスの嵐の予感ですよ。

それでは質問コーナーです！

質問・全員に質問です。今回テル君が一番格好良かったシーンは？

ハヤテ「やっぱり最後の一太刀でしょうか？」

ナギ「甘いなハヤテ、もっと良い所があったではないか！」

ハヤテ「え！　どこですかお嬢様？」

ナギ「ドリル持って戦ってた時が一番良かった！！」

ハヤテ「それ敵ィィィィィ！！」

ヒナギク「私は近くにあったドラム缶が……」

テル「もはや人じゃねェェェ！！」

咲夜「伊澄さんはどうだったんや？」

伊澄「そ、それは……」

伊澄「…格好良かったです……」

咲夜「いやどこが？」

伊澄「……」

咲夜「あかん、伊澄さんが壊れた……」

唯子「赤い伊澄くんか……可愛い！」

ハヤテ「そういえば唯子さんは？」

唯子「私はまったく見てないからな。　君たちが得体の知れない連中とすったもんだしてる間、私はラーメンを食べてた」

ハヤテ「暇ですね……」

それでは、また次回！

第６０話短編その２～こんなの絶対おかしいよ～（前書き）

どうも。カオスな短編の続きです！　どうぞ！

第６０話短編その２～こんなの絶対おかしいよ～

―あっしの名前はブリトニー。　見ての通りごく普通の立派なお花屋さんだ。

―今日もお花の香りに誘われて日本海に来ちまった。

―荒々しい波の雄叫びを聞いていると故郷の魔法王国、東中野三丁目の事を思い出す。

―おっと、うっかり秘密をしゃべっちまったがべらんめい。お気付きかと思うがこの通りあっしの正体は……

―見ての通りの魔法少女さ！！

～世紀末伝説～
　マジカル☆デストロイ

「……」

その内容を全て見た唯子はノートを開いたまま体を硬直させていた。そしてノートをパタンと閉じて平然と一言。

「よし、次の議題だが・・・」

「うぉぉぉおい！！」

あまりの理不尽さを感じたのか、ナギが唯子に突っ込んだ。

「いや、そんな突っ込まれても・・・なぁ」

「・・・まぁこんな不条理ギャグ漫画もありかと・・・」

「どこか不条理ギャグ漫画だ！！」

唯子とハヤテの辛味の評価にナギが納得いかないといった顔で怒鳴った。　テルも何度も見直して物凄い険しい顔で

「いやぁある意味ギャグ漫画だよ。　ギャグ漫〇日和といい勝負できそうじゃんか」

とハヤテ達と同じ評価。

「お前らにはこの漫画の壮大感が伝わらないというのか！？」

「いや、確かに伝わるよ。　何が伝わってるかっていうと、どうあがいても絶望なのにソレに立ち向かうっていう『カットビング』精神的なものが・・・」

突如、お約束言わんばかりのナギのメガトンパンチがテルの顔面に炸裂した。

「よいか！？　この日本海の荒々しさの中に今から始まろうとする戦いの猛々しさが表現されているではないかッッ！！」

「俺は漫画という物を読んだことが無い故、正しい評価が出来ないが・・・」

「アンタ、漫画読んだことないのか？」

テルのその質問にはフンッと鼻を鳴らして答える。　あまり聞くなということだろう。

「ハヤテくん・・・」

「はい？」

隙を見計らってか、唯子はハヤテを小声で呼びつける。

「コレはある意味、一種の才能を感じるのだが・・・」

「はい、ある意味一種の才能です。　スイマセン」

総評が当たり前だが、ナギの漫画のセンスは常人の思考の斜め上を行くというものだ。

展開が展開だけに、なかなか付いていけないというのが現状。

まぁ珍しいことにこの漫画を理解できる人物がいるのだが、それもマジでごく少数。

「ホントにすいません・・・難しいですよね。　これで語るのは」

「ふむ、しかし台詞のセンスは少なからずとも感じるな・・・」

ハヤテが謝罪の言葉を述べている間に、驚いたことに唯子はナギの漫画を再び読み直していた。

「彼女は飲み込みが速いはずだ。　場合によっては才能の開花もあり得る・・・俗に言う、頭のイメージが技術と釣り合っていないというパターンか・・・」

その言葉にハヤテもまさかの表情。　面と向かって真面目に評価をしてもらい、ナギに少なからずの才能欠片があると言われたのは初めてだった。

「でもコレが良くなるというのも結構大変なのでは？」

「確かにそうかもしれん。だが、少なくとも彼女のその漫画家になりたいという想いは本気だ」

珍しく唯子の顔が一転して真面目なものになる。

「夢でもあるのだろう？　いいじゃないか、叶えば叶えばでそれは幸せなことだ。　だったらその夢は本人が納得するまで誰かが支え続けてやらなければならない」

「はぁ・・・」

その言葉にハヤテはそう頷くしかなかった。　唯子のその表情からはまた何か別の感情が見え隠れしているが、それが何なのか分からない。

唯子は表情を一転させて笑顔に戻る。　そしてこういった。

「そうだな・・・我々でナギくんの漫画の改造計画をしよう」
唯子の発言に一同は耳を疑う。　こんな・・・混沌と言っても過言ではないものを改造する気か、と。
「待て待て、これ漫画じゃない、どう見ても黒魔術だぞ。　どうやって白魔術にするんだよ」
「バカは放っておき、これから始めるぞ」
「おーい、無視か」
テルをいつもの凛とした表情でスルーし、見事に話を進める唯子。
そこで、疑問に思ったナギが口を開いた。
「だがそれで私になんの得があるというのだ？」
ナギがうーんと頭を捻って唸る。　本人は自身の漫画のセンスをかなり・・・いや、世界を一度滅ぼしてもう一度再生させるぐらいの力がある神様くらいに自負している。
不必要でなくてもあっても、ナギはそう言った自信から他人の意見は聞くだけ無駄だと判断しているのだろう。
唯子はその小さな疑問も見逃さぬように笑顔で答えた。
「ナギくん、他人の意見というのも自身の向上の為の第一歩なのだよ」
ふふふ・・・と小さく笑みを浮かべながら続ける。

「バ〇マンを見ろ。　何度も何度も失敗を重ねてきた主人公たちは諦めずに人気作家になったのは、画力、ストーリーだけではない、読者からの声も耳に入れていたからだ」

「マジか」

「マジだ」

それだけじゃないと思います。

「だから任せてみないか？　君の漫画が将来に羽ばたけるように私たちがアシストしよう」

そう提案する唯子にナギは再び瞳が星形に変化する。

「頼んまッス唯子先輩ィィ！！」

ソレを見ていたハヤテは心の中でなんとも人の心自在に動かすことができる人だろうかと思っていた。

凛としていて物凄く変で・・・実際変なんだけど、人の夢を本気でバカにしないで応援してくれる。

ハヤテの浮かべた奈津美　唯子はそういう優しい先輩だ。

「フッ・・・チョロイもんだぜ」

「え？」

ナギに見えない所でわずかに笑みを浮かべていた唯子をハヤテは見た。
思わず間抜けな声を上げてしまったが唯子はすぐさま表情を笑顔に戻す。

「さぁさぁ、楽しい講座の始まりだな。　はっはっはっ！」

（やっぱ違うかも・・・）

せっかくいいイメージ出来上がっていたのに台無しだよ。　と思ってしまったハヤテであった。

「まず、タイトルを変えよう」

「いきなり確信を突いてきましたね」

第一の問題点であるタイトルを唯子は指摘する。

「だってデストロイって・・・なんだ？　世紀末でも始まるのか？」

「いや、一応世紀末って書いてますし・・・」

ハヤテのツッコミに怯むことなく唯子は続けていく。

「普通ここはデストロイじゃなくて主人公の名前にするのがセオリーじゃないのか？」

「ああ、魔法少女リ○カルな○は的な？」

「そうだな。　あと魔法少女ま○か☆マ○カとか、カードキャプターさ○らとか、時代を遡ると原点はアッコちゃんとかミンキーモモとかになるな」

「例を挙げていたらキリがないですよ。　その手の魔法少女モノは・・・」

ハヤテの介入もあってか、例を口にしていたテルと唯子は一時的にストップ。

ここでテルが話題を変えた。

「ところで、ナギはどこに持ち込む予定なんだ？　この黒・・・マンガ本」

「おい今黒魔術書って言いかけたろ」

眉間にしわを寄せてテルに迫るナギ。　だがハヤテの話術介入により、その質問に渋々答える。

「別に・・・どこでもいいんだが・・・」

「やっぱサ○デーか？」

と唯子の言葉にナギが納得したように頷く。

「そうなるかな・・・ジ○ンプとか新人の層が厚いし・・・」

「心にもないこと言わないでください」

ナギの言ったことを信じるか信じないかは貴方次第です。　あきらめずにトライしましょう。

「いや、ココはチャンピオンで」

「なんでそうなるんですか！？」

テルの発言にハヤテが聞く。

「ふふ、舐めて貰っちゃこまるぜ。　確かにチャンピオンがクローズやバキなどの影響で格闘ジャンルの色が強いというのは知っている。　だがその異質に惹かれる読者は居るはずだ」

「一体誰得なんでしょうね」

ナギとかに聞かれないようにボソリと呟くハヤテ。

「ナギだったらできる。　確証はないけどそんな気がする。担当と打ち合わせした内容とは全く違う内容を本誌に載せた板垣さん（チャンピオンで連載中、範馬刃牙の作者）ぐらいの伝説を残せる気がする！」

「僕もビックリしました。　本誌で最後のページの煽り文句に『先生ェ！　打ち合わせと違うじゃないですかー！』って書かれてたアレですね？　分かります」

「どうでもいいが、貴様らなんの話をしているのだ？」

突如声を出したのは机に偉そうに腕を組みながら座っている千里だ。
それを見て一同は「なんだ居たのか」という表情。

「なんだいたのか」

「唯子さん、地の文で説明してることをまた言うのはどうかと」

しかし唯子さんは怯まない。　その表情はさっきのように少し喧嘩腰にはなっているがひどいものではない。

だから千里もそれを分かったのか鼻を鳴らすだけで終わった。

「貴様らは漫画のタイトルの内容を考えていたのだろう？　なぜチャンピオンやら刃牙やらの話になってるのだ？」

「む、屈辱的だが正論だな」

「お、俺としていたことがメガテンだったぜ・・・ッッ！！」

「テルさん、それを言うなら盲点です・・・」

悪魔で正論を言われてもボケるテルに、ハヤテが憐れみを込めてため息をつきながらツッコム。

改めて本題に戻る一同。
せっかくなので、ナギを除いた中から自身の漫画のタイトルを考えることになった。

「よし・・・では私から行こう」

唯子が教卓の上に画用紙を取り出した。　黒く太いマッキーペンで何やら書いている。

「できたぞ。　ちゃんと冒頭の部分とキャッチフレーズも考えてきた」

マッキーペンの蓋を閉めた唯子が自身の完成度の高さに納得しながら笑みを浮かべる。
そして先ほどの画用紙を取り出して教卓に立てた。

○

作・奈津美　唯子

その少女の世界はとても平和だった。　大好きな家族がいて、友人がいて、時には泣き、笑う。　そんなごく普通の日常を生きる。
それが少女、ブリトニーだった。

そんな日常の中で、彼女は運命の出会いを果たす。

○

ハヤテ「あれ？　なんか普通に始まりましたよ？」

テル「出だしは面白そうだな・・・」

ナギ「早く・・・続きをッッ」

○

動物を助けた。　白く、小さな生き物。

「君はいったい・・・」

「ふぅ、助けてくれてありがとう。　早速だけど、君にお願いがあるんだ」

この出会いは偶然なのか、必然なのか、彼女はまだ知らない。

それは運命を変えてしまうような出会いーーー。

それは、新たなる魔法少女の物語ーーー。

「僕と契約して、魔法少女になってよ！」

タイトル～魔法少女ブリトニー～

Ｃｏｍｉｎｇ　Ｓｏｏｎ・・・

○

「とまぁ、こんな感じだ」

「ちょっと待ったァァァァ！！」

「なかなかの出来だろう執事くん」

「これ某有名な魔法少女のアニメのパクリじゃないですかぁぁぁぁ！！」

納得顔の唯子とは裏腹にその漫画の内容に対してそ即座に突っ込みをいれるハヤテ。

「しかもＣｏｍｉｎｇ　Ｓｏｏｎって、こんなのホントにやっちゃたらこの小説どうなるか知りませんよ！？　永久に来ないでほしいです！！」

だがその隣では拳を震わせているナギの姿があった。

「感動しました唯子先生ェ！」

「マジですかお嬢様！？」

「ああ。　ついでに言うと、さっきの漫画に出てきた白い生き物とやらをこの右ストレートでぶっ飛ばしてやりたい気分だ」

「奇遇だなナギ、俺も同意見だ。　しかし、アンタすげぇなオイ、よくこんなストーリ思いついたな・・・漫画家になってもいいんじゃないか？」

テルの言葉にフッと笑いながら唯子は返した。

「なぁに、才能だよ才能。　ちょっと頭を使えばできるさこんなの」

「すんごい得意げに言ってますけどただのパクリですからね？　頭

も何も使ってませんからね？」

ハヤテが冷静に突っ込んでいく。　もしかしたらギャグでワザとこういう内容を作ってるのかもしれないけど、その発想はとてもナギと良いコンビが作れるのではないか。

「では次は俺だな」

「なんだ。　お前も作ったのか」

唯子が聞く人物は千里だ。　千里は唯子をにらみながらも画用紙を取り出してペンを用意する。

「この作品はこの王様と俺が作った」

いつの間にか千里の横にいたテルがペンを構えていた。　そのことに一同は驚く。

「ほう、では合作という奴か」

「なんだか見る前からカオスの予感が・・・」

そう期待とまた違う考えのハヤテ。　そういっている間にも二人はペンを書き、作り上げていく。

（千里さんがこういった遊びに付き合うなんて・・・）

言っては悪いがこの集まりも結構遊びにすぎない、だがその遊びにあの傍若無人、俺様野郎の千里がこういった遊びに参加するのは見ていてとても不思議な感覚だった。

そして出来上がったのか、二人がタイトルコールを行う。　書かれた画用紙が教卓の上に現れた。

○

作・王華　千里、善立　テル

タイトル～魔法少女５Ｄ，ｓ～

ハヤテ「タイトルが既に核爆弾！！」

唯子「構わん、続けたまえ」

ナギ「さぁ見せろォ！」

ハヤテ「なんだこのテンション・・・」

○

時代は近未来、日本の東京は近未来社会における技術発達のおかげで科学の結晶とも言えるネオ・東京へと名前を変えた。

しかし、そのネオ・東京の片隅で取り残された地域があった。　海に囲まれた島、サテライトである。

そのサテライトは近代未来とはかけ離れているぐらいに劣っていた。

そう言うのもサテライトが多くの犯罪者の更生の場所となっているからである。

「フゥ、キョウモガンバッタナ」

男女関係なく、経歴を持つ者はここで労働することを強制される。
いつからか東京の一部だったその島は海にまで放置され、スネに傷を持つ者たちの吹き溜まりと化した。

その格差社会が支配する中、サテライトから物語は始まる。

「ブリトニー！　タスケテクレヨ！！」

「私の仲間を返してもらおうかしら？」

彼女の敵は、科学の結晶ネオ東京、その巨大な闇。

「サテライトはもう不要だ。　これから一掃作戦を行う」

少女は一枚のカードに導かれる。　そこから始まる絆の物語。

「この私、ブリトニーが！　未来をこのカードで切り開く！」

絆と絆の紡いだ伝説の物語が始まる。

「キングは一人、この私！　さぁ、私とデュエルだァァァァァ！！！」

新感覚魔法少女デシュエル！　カードゲームがもっと熱くなる！

～魔法少女王ブリトニー５Ｄ．ｓ～
第一章　星を継ぐ者

○

「「どうだ？」」

「アウトォォォォォォォォ！！！」

千里とテルのどや顔に当然と言っては当然というハヤテの叫び。

「なんで魔法少女なのにカードゲームになってるんですか！？　ブリトニーめちゃくちゃ千里さんじゃないですか！？　なんでモブキャラの台詞がカタコトなんですか！？　タイトルも最初と最後で違うじゃないですか！？　どこの機動戦士映画のタイトルだァァァァ！！」

長々しい突っ込みにハヤテは息を荒くつく。
だがその隣では・・・

「やるな二人とも・・・」

「まさか、このバカ王子にこんな才能があったとは・・・」

自身の技術を上回られいたのかとても悔しそうにしていた。

「超展開に続く超展開、魔法少女なのにカードゲーム・・・コレはやられたな！！」

「素晴らしい・・・とまではいかないが、私も一本取られたというところだな」

「あなたたちはどうしてそういう思考に至るんですか！？　どう見てもパクリですよ！　こんなの書いたら色んな所から苦情来ちゃいますよ！」

「一章ってことは第二章もあるのか？」

とナギ、それに千里が答える。

「当然だ。　第二章は恋人たち、最終章は星の鼓動は愛だ」

「そんな濃くて長い話なんですかコレ！？　戦争でも始まるんですか！？」

もう突っ込みの立ち位置が確定しつつあるハヤテ。　だがこの長いカオスの連鎖、ここで断ち切らなければならない、将来のナギの夢とあればこのカオスの空間を破壊できるものを自分で書くことを決めた。

「では次は僕のを・・・」

ハヤテが言いかけた時、唯子が気づいたかのように時計を見た。

「あ、時間だな」

「へ？」

その言葉に目を点にするハヤテ。　唯子はパンパンと手を叩いてみ

んなに告げた。

「よし、粗方終わって時間もよろしくなったので今日はここまでだ。解散！」

「「はーい」」

ナギとテルが小学生のような返事だ。　ハヤテは時計を見る。　なんとその時刻は６時を回っていた。

「また今度、ナギくんの漫画の話でもしよう！それでは、さらばだー」

手際よく荷物をまとめて素早くその室内を立ち去る唯子。　千里も鼻をフンッと鳴らしてその場を立ち去って行った。

「よし、私たちも帰るか疲れたし」

「そうだな」

「・・・・・」

ナギとテルが頷いたところでハヤテは考えた。　なんだこの終わり方は・・・と。

消化不良のまま文化祭が終わったかのようなもどかしさである。

そして誰もいなくなった。

○

まぁそんなホラー的な終わり方にするのはいかない。

「なんだかんだ時間が潰せたな・・・」

「ほんとに、まったくだな」

今はその帰り途中、三人は夕日の道を歩く。　と、そこへ・・・

「やぁ皆の衆」

後ろから声を掛けられる。　今日の謎の会談に巻き込んだ張本人、唯子だ。

そのまま一緒に下校することに。

何気ない会話をしていく中で唯子が口を開いた。

「君は学校での生活は満足しているか？」

「どうしたんですか急に？」

突拍子もなくそんなことを言い出した唯子にハヤテが聞く。

「答えろ」

「へ・・・いや、まぁ楽しいですけど」

と答えるハヤテ。　なんだかんだ規格外なこの学校生活やドタバタに巻き込まれるのも少なからず悪くはないと感じていた。

「そうか・・・」

ハヤテの反応を見て、少しばかり考え込む唯子。　そして凛とした表情で言う。

「私も満足している」

唯子はそのまま続けた。

「学校生活は何も部活だけをするものだけじゃないだろう。　こうして誰かと放課後を潰すというのも一つの学園生活と呼べるのではないか」

その言葉にテルは眉をピクリと動かす。

「私も部活ができなくなった時はどうしようかと悩んだが、こんな感じで送れるならば問題はないな」

唯子は頷いている。　彼女は過去に剣道部に所属していたことがあった。　現在は怪我のために行っていないが・・・

「また今度、君たちを呼ぶかもしれん、その時は有無を言わさず付き合ってもらうぞ」

分かれ道、そこで唯子は別れた。　テルたちは黙ってその背中が見えなくなるまで見送った。

そして見えなくなったところでハヤテが口を開く。

「学校生活ってそういうモノなんですかね・・・」

「さぁな、私は分からん。　分かっているのは部活をやるにしてもあの剣道着を私がまた着るということは無いということだ」

きっぱりと宣言するナギ。　ナギも最初は剣道部に入ろうとしていたが今はすっかりだ。　全く運動という物に関心を持たない。

「でも本人は納得してるようですし良いのでは？」

「ホントにそう思うか？」

その言葉にテルが口を開く。

「俺も学校楽しいのか分かっちゃいないが、こういうのは自分がどんな時でも手放したくないほど熱くなれるものをやっているときが楽しいし充実してるって言えるんじゃねぇか？」

「まあ確かにそうですけど」

「俺にはアイツが満足してるようには見えない・・・」

「だが先輩は怪我で止めたんだろ？　それに、続けたいなら普通戻るだろ」

「普通じゃないだろ、怪我の原因が目の前に居るのにか？」

テルの言葉通り、唯子の怪我は練習試合の中でヒナギクが負わせてしまったものだ。　唯子はもう気にしないで欲しいと思っているが、ヒナギクは自責の念がまだ残っている。

「やりにくいだろうな。　戻れば指導とかでも充分剣道部に貢献できるのによ、もしかしたらアイツは俺たちが思っている以上に不器用なのかもな・・・」

彼女はまだ迷っているように思える。　そうテルは考えていた。まだ割り切れずにいて、でも無理やり自分を納得させようと遊んだり、首を突っ込んだり、何か探しているのではないか・・・と。

「難しいですね・・・」

「そうだな難しい、難しいが・・・これは本人で解決するしかないだろ」

夕日が眩しく三人を照らす。　いつか彼女が解決して、竹刀を握れる日を心待ちにしよう。　そう思った三人だった。

第６０話短編その２～こんなの絶対おかしいよ～（後書き）

やっぱりグダグダになってしまった。　だんだんと落ちていくクォリティ、最終的に最後のアレですよ。
まぁマイナス思考もそろそろやめておきましょう。　いくら悔やんでも仕方がありません。

今回は少なからずとも、唯子という人物について触れてみたつもりです。　超人的で何事も簡単にこなす彼女の転機。　やめてしまった剣道の話やいまだに吹っ切れない所を描いていましたが、皆さんにはどう見えたでしょうか。

木原くん曰く、人を見かけで判断するなという奴です。　あんな完璧そうな人でも、不器用。　アレ？　生徒会長もたしか・・・
私もそうです。　私の場合、顔自体が不器用だと言われました。

そんな感じで、人それぞれの悩みがあるんです。
しかし、木原君曰く、人はコンプレックスをバネにして生きている・・・らしいです。

実は次回も短編なんです。　１話完結なんですが、主役はなんと・・・奴らです。

第６１話短編その３～たまにはサイドチェンジもいいじゃないか～（前書き）

間が空いてしまいました……

出来てはいたんですが投稿できずに数日…待っていた人には申し訳ないです。　ではどうぞ！

第６１話短編その３～たまにはサイドチェンジもいいじゃないか～

世界は未だに謎と神秘で満ち溢れている。

理解不能な物質で作られた石。

暗黒の宇宙の世界。

深海の更にその深い場所に存在する生物。

某有名な島にある建造物。

オーパーツ。ＵＦＯ。

勿論これだけではない。　世の中を探せば、それは数え切れない。

世の中の謎は探せば探す程、無量大数に満ち溢れているといっても過言ではない。

さて、世界規模で考えるのも大切ですが私達の周りにも謎はいっぱい。

例えば、アナタの身近な人物……とか。

第６１話～たまにはサイドチェンジもいいじゃないか～

２月も終わりを見せ始めた今日この頃、ビルの屋上にて大の字で眠っている男がいた。

青のジーンズに黒のジャケットを着て、帽子を顔にかぶせている。

彼の名前は木原　竜児。　つい先日にナギを誘拐した一味の一人である。

どこの組織に所属しているか不明。　目的がはっきりしていないというアンノウンな男だ。

左手の手袋は鋼鉄の義手である。

「ごぉ・・・・・」

太陽が真上に上がっている時間帯。　彼はこの町に来てから、このビルの屋上を拠点としていた。

また、自身のお気に入りの場所ということもある。　ここから吹く風や町全体を見渡す景色は夜になるとネオンが光ってきれいだからだ。

と言っても、夜の話を昼にしても仕方がないが。

そんな彼、竜児は特にすることもなくお昼を過ごしていたのだったのだが・・・

（ん・・・誰かが俺を見てる？）

眠りから覚醒した木原は帽子に覆われた暗い視界から謎の視線を感じた。

―――誰かに見られている・・・・そんな危険な感覚に。

（しかも・・・気配が真上にあると来たもんだ）

そんな危険な状況下で、彼は悪魔で冷静に状況を分析する。

（三千院家の回し者か？　ここがバレるようなことをした覚えはないんだけどな・・・）

さまざまな可能性からその問題を考察する木原。　その時である。

顔を覆っていた帽子に小さな圧力を感じた。

恐らく帽子に手を掛けているのだろう。

（やるか・・・）

相手に気付かれないように木原は右手の拳を握る。　帽子を取り、自身の顔を確認される前に、その拳を叩き込む・・・

「ん？」

木原は突きだした右手をピタリと止めた。

「・・・・」

「お前かよ黒羽」

木原の眼前に居たのは黒いローブを着た、黒い長髪の少女。　名を黒羽という。

「つか、お前こういうことをすることになんも抵抗がないのな・・・」

木原は改めて気づく、黒羽は木原の顔を覗き込むようにしていた。
　しかも結構顔が近い。

健全な男子ならドキッとしてしまうものだが。

「・・・？」

何が？　という表情。　そういうことに疎いのか、または興味がないのか。

「まぁいいや、んで？　何かあった？」

体を起こして背伸びをしながら黒羽に聞く。

「・・・そろそろ任務に戻らないの？」

「ああ、それか・・・」

やっぱりか、という木原の表情。　せっかく寝て疲れが取れたのに疲れがぶり返すような気分だ。

この少女、黒羽はなぜか『石』というものに固執している。
それもただの『石』ではない。　ある特定の人物が持っている石だ。

「石もいいが、前に怪我した右腕はどうなったのよ？」
頭を掻きながら黒羽に聞く。　そう、先日、彼女は怪我を負った。
ただの怪我ではない、戦闘による傷、一人の執事にやられたものだ。
彼女、黒羽はそん所そこらの女の子と違い、変わった能力が使える。

「もう、大丈夫」

そういって右腕を動かした黒羽の腕に変化が起こる。　腕からすぅーと影が伸びるように黒い剣が生えてきたのだ。

コレが彼女の能力である。
通称、黒曜。
その実態は身近にいる木原でもまったく把握できていない。　体を自由自在に武器に変化することができることくらいだ。
右腕を翳せば槍が飛び出し、空を見上げれば翼を生やして空を駆け、邪魔なものがあれば腕自体をドリルに変化させてあたりのものを根こそぎ削る・・・などなど。
とにかく、仲間である木原もその素性は知れない。

「取り敢えずもう大丈夫そうだけどな、無理はしなくていいんだぞ？　あの後、ロクに右腕動かせなかったじゃねぇか」

そう、あの三千院家襲撃のときに負った怪我はそうとう重く、黒羽

は片腕生活を余儀なくされていた。

しかし、生活に支障はない。　片腕でも生活はできており、彼女は両利きという器用な人間だ。

というよりも、本人が苦痛に顔をゆがめるということがないから分からない。

「・・・・・」

無表情、これが彼女の特徴だ。　笑うこともなければ怒ることも、泣くことも木原は見たことがない。

怪我を負った時でさえ、彼女は何事もなかったかのような顔だった。

まるで神経が通っていないかのような。

まず人間なのかという疑問が浮かんでくる。

さて説明はさておき、このまま無言でいられるのもこっちの身が持たない。

木原は分かったというジェスチャーで両手を上げた。

「分かった。　近いうちにしかけるさ、その計画も俺が考えておく」

「・・・わかった」

と静かに頷いたのを皮切りに木原の腹から空腹の音が聞こえた。

「・・・腹減ったな」

「・・・・・・」

空腹の音に木原はげんなり。　そう、最近ロクな食事をしていないのだ。

「俺たちは資金は一応あるんだがな・・・」

財布の中身を確かめる木原、その財布はかなりの資金が用意されている。　もちろん、黒羽が持っていたものだが。

「ここ最近カップ麺だけで過ごしてるからな・・・インスタントもきつすぎる、料理作れねーからな・・・」

ふぅ、とため息をついて黒羽を一度見た。　いや、まさか。

「・・・作る？」

「ええーーー！？」

黒羽のその一言に木原は驚きの声を上げた。　まさか、こいつが作るのか、手料理を？

「俺初耳なんだけど・・・」

「聞かれなかったから・・・」

無表情に、そう答える。　お前はどこのキ〇ウベェだ。

「何作れるんだよ？」

そう聞かれた黒羽は少しばかり考えて一言。

「言われればなんでも・・・」

マジかよ・・・というのが率直な感想だった。　一応木原も一つ覚えの料理もあるがレパートリーのことを考えると明らかに少ない。

「まさか目の前に料理人がいたとは・・・」

とすれば、と木原に考えが浮かんだ。　今日は黒羽に料理を頼んでみてもいいのではないか？

しかし一つの疑問。

（とてつもなくまずかったらどうしよう・・・）

いや、しかし、黒羽の手料理・・・個人的に興味がある。　毒が盛られるとしても一度だけ味わってみるのもいいだろう。

（大丈夫、死にはしない。　胃袋になら多少自身はある）

そう自分に言いつけるように木原は暗示をかける。　何故か掌に『人』と書いているが。

「それじゃ、カレーにするか」

「了解」

と一言告げると。　彼女は翼を広げた。　とても黒く、この昼ごろにはあまりにも似合わないような翼を。

「材料を買ってくる」

ばさばさ。と羽を羽ばたかせていく。　去り際に何かが落ちてくる。

1枚の黒い羽、まるで鳥の羽のような手触りだった。

「今気づいた、アイツの羽って鳥の羽なんだな」

と独り言のように呟いてみたがあくまで独り言。　そして更に彼は素晴らしい考えが浮かんだ。

「アイツを追ってみるか・・・」

尾行、それが彼の思いついたことである。　正直言えば、彼女の買い物をする姿や、ビニール袋を片手に道路を歩くという姿がどうしても想像できないというのが理由だ。

（下手したらこの前の連中に出くわすかもしれないからな・・・）

そう言った危険性も考えて、彼は屋上を飛び出した。

○

「取り敢えずアイツ発見・・・と」

近くの物陰に隠れた木原は道を歩いていく黒羽を見つけた。　飛んでるのを見つけれなかったらどうしようかと思っていたが案外早く見つかって安堵する。

「行く先は・・・・やはりスーパーか」

黒羽は軽い足取りでスーパーの中へと入っていく。

「よし、これより木原、スニーキングミッションを開始する・・・」

と真面目な顔で言われても、やっていることは一人の少女を陰ながら付け回すストーカー行為そのままである。

「・・・・」

まずは黒羽、無表情のまま見据える先には野菜。　籠を片手に下げてニンジン、ジャガイモ、玉ねぎを入れていく。

（貴重な映像だ。　あの黒羽が、普通に買い物をしている。　ニンジン、ジャガイモ、玉ねぎの野菜を、なんも抵抗なく入れてやがるッッ）

普段の戦闘することしかイメージがなかった木原にとってこれほど貴重なものはない。

続いて足を運んだのは肉売り場。　黒羽が何やら二つのパックを取り、見比べている。

何度かパックを戻してはそのパックを確認してまた戻す。　それの繰り返し。

（意外に品を定める性格なのか・・・？）

聞いたことがある。　肉などの商品は新鮮なものほど肉汁が染み出ないという。まさかそれを行っているとは。

そして木原は更に度肝を抜かれる事態を目撃する。

それは突然の事だった。　耳に響くようなベルの音。　景気の良い声が響く。

「安いで安いで！　国産の牛肉が1パックなんとこの値段！　タイムサービスだよォォ！！」

それはスーパーなどでよく見られる安売りの現場、そして同時に主婦たちの戦いの時間である。

「ちょっとアナタ！　一人1パックだってのに3パックももってんじゃないわよ！！」

「言いがかりは止してくださいよ奥さん、これはレジの方で待機させている息子に持たせる分なの、勘違いも止してくださいよ」

「ふざけんじゃないわよ！　その子供はアンタの本当の子供なの！？　あたし知ってるんだから！　アンタ自分の旦那に黙って色んな男に手ェ出してるの知ってるんだから！この雌ブタァァァ！！」

などと、悪魔で作者の解釈である。　戦いの場と言っても、こんな

ドロドロとした展開がスーパーで見られるわけではありませんので
あしからず。

「・・・・・」

と、そんな込み合う主婦同士の闘いの戦場に黒羽は臆することなく
足を踏み入れていく。　木原は思わず目を見開いた。

「ま、まさか・・・あの激戦区に足を踏み入れるつもりか？」

あまつさえ、欲望と野望が入り混じる場所だ。　この時はどんな温
厚な主婦も鬼の仮面を手にし、今日の食材の安さ求めて一騎当千の
修羅と化す。

自殺行為だ。　と木原が危険を察するが、それを覆すかのような光
景が目の中に入ってきた。

「ば、バカな！　あの込み合う主婦の人込みを、躱しているだとッ
ッ！！」

黒羽は、１か所の肉売り場に集まっている人込みを躱していく。
さながら水が流れるかのように、誰にもぶつかることもなく。

「に、兄さん！　アンタ、あの子の知り合いかい！？」

「アンタ誰！？」

「しがないスーパーの店長さ。　それよりもあの子、ただ者じゃな
いね！」

突然木原に話しかけてきた男性は歴戦の武士のような目つきで黒羽を見る。

「あの主婦の戦場に臆することなく足を踏み入れ、なおかつ自身が他人にぶつからないように、肉の場所に最短で最も被害のないルートを見分ける、あの洞察力ッッ！」

プルプルと震える拳はまるで歓喜しているようだった。

「彼女こそ、真のスーパー主婦だッッ！」

「なんじゃそりゃ！？」

「かつて、スーパー安売り大戦という安売り時の主婦たちの闘いがあった・・・そう、血で血を洗うかのような恐ろしい戦いよ」

「なんだその某ロボットゲームみたいな大戦」

「だがそんな混沌と化した時代に現れたのが一人の主婦だ。　安売り時に取り合うも何も争いをすることもなく、誰にも被害を加えることのないその善意にあふれる行動から主婦の鏡と呼ばれ、その主婦は伝説となったのさ・・・」

とどのつまり、男性は黒羽がその再来だと思っているのだろう。

「いい嫁さんになるぜ、あの子」

「マジか」

と呆気にとられる木原。　確かにこれで料理の腕も確かだったら黒羽はまさしく最強の嫁となるだろう。

しかし、あの無表情でなんも感情を見せることのない空間に居る旦那さんに激しく同情をくれてやりたい木原だった。

その後は鮮やかな手際で肉を買い、息を乱すことなくその戦場から去って行った。　その後はルーを入れてレジに向かう。

「俺、実はコ○マロよりバー○ンド派なんだけどよ・・・」

と木原が遠目で確認した商品を見て残念そうにしたのは秘密の話だ。

○

さてその数分後、タイムサービスも終了しスーパーの中に再び静けさが戻ってくる。　それは主婦戦争の終了を意味する。

勝者はテンションを抑えきれず、今日の夜食に思いをはせながらスーパーを後にする。

そして負けたものは、テンションダダ下がりの状態で敗北の証（タイムサービスとは違う別の肉）を手に握るしかないのだ。

「うぅ・・・タイムサービスのお肉、１個も取れなかったよぉ・・・」

目に涙を浮かべながらスーパーから出てきたのは、普通の女子高生こと西沢　歩である。

そう、何を隠そう彼女は今回の戦場の敗北者。　押し寄せる主婦の波に太刀打ちできず、別のコーナーの牛肉を手に取ることしかできなかった哀れな敗者だ。

「お母さんもなんであんな場所に私を送るかな・・・『急に電話でタイムサービスの予感がするから』なんて、それも逃したら今月のお小遣いなしだなんて・・・」

それは女の勘ならぬ、主婦の勘だろう。

ずっしりと買わされたそのビニール袋には野菜や肉が入っている。

「チクショー！　今月どうすりゃいいんだぁー！！」

ブン、ドコッ。　と振り回したビニール袋が何かに当たる。　その言い表せぬ感覚に歩はまさか・・・と振り返った。

「・・・・・」

そう、歩が怒りのままに振るったそのビニール袋は強面の男の顔面に直撃していた。

「あ、アンちゃぁぁぁあん！！」

「親分んんんん！！」

その男の後ろにいた子分とも呼べる男二人がビニール袋の攻撃を受けた男に声を上げる。

「にゃあああああ！！　スイマセンスイマセン！！」

歩はビニール袋をその場に落とし、ジャンピング土下座。　お約束なのだが、こんな程度で許される男たちではない。

「オウオウオウ！　お嬢ちゃん！　うちのアンちゃんに手を出すたぁどういうことか分かってんのかァ！？」

「見事なまでに骨折しちゃってるよ？　どうすんのコレ？　ほら、顔もこんなに醜くなっちゃって・・・」

「いや、顔はもとからじゃ・・・」

「おっと、聞き捨てならねぇなお嬢ちゃん。　取り敢えずこの場をどうやって納めるかぐらい、分かってるよな？」

男の声が低く狂気を帯びたものへと変化する。　これはヤバい。毎度の事ながら思う歩だが、これまでの経験から少なからずとも打開策は浮かんでいた。

「と、取り敢えずスーパーの手前ですよ？　通行人も見てますし・・・」

「ほぅそうか、そうか」

その納得したかのような表情に歩はしめたと感じた。　こういった人物たちなら、まず人目につくようなこの場所は危険なはず、そのうちに逃げる。

（チャンス！！）

と男たちが辺りを見渡している間に、歩は逃げようとしていた・・しかし。

「へ？」

と、歩は自身の腕が一人の男に掴まれていた。　あの男だ。最初に歩の攻撃をもらった兄貴だ。

「そうかそうか、お嬢ちゃん、この別の場所だったらいいんだな？」

薄気味悪い笑みを浮かべる男はぐいっとその手を引っ張る。

（なんてことだァァァ！　逃げれなきゃ意味ないじゃん私！！）

「さぁさぁ、誰もいない所に案内してあげよう」

「は、離してください！！」

と男の引っ張る力が強くなる。このままでは、この小説の存在が危うい。

その時だった。

「・・・・・」

スーパーの扉が開かれ、現れたのは黒羽である。　しかもその歩と男たちの目の前に現れた。

「なんだ？　お前」

男の一人が睨むようにして黒羽を見る。　黒羽はそれに動じることなく一言。

「どいて」

「あん？」

そういって聞き返した男。　黒羽が指差すのはその先の信号。　今は赤だが、いずれは青になる。　渡りたいのだろう。

「このアマァ！」

どん。と一人の男が黒羽を突き飛ばす。　その拍子に、持っていた袋が地面に落ちた。

「わっ！」

突き飛ばされた拍子に歩と衝突したため、歩は男の拘束から逃れる。

「テメーら・・・」

「ひえええええ！！」

突き飛ばした男が怒りの形相でにらむ。　黒羽は動じていないが、歩は動揺していた。

（うおぉぉぉ！！　何やってンるんだアイツはぁぁぁぁ！！！）

そう心の中で叫んでいるのは今は物陰に隠れて見守る木原だ。　スーパーから出てきた瞬間、その光景が目に入り、直感的に隠れていたのだ。

（助けないとやばいな・・・）

勿論、木原の『助ける』といった対象は黒羽ではない。　あの黒羽に絡んでいる男たちだ。
このままではこの小説では書き表せれないほどの惨殺ショーが行われてしまう。

3人がミンチになるのなんて物の数秒だ。　しかし、自分が出てきた所で事態をややこしくするだけだ。　黒羽に任せてみよう。

「いいぜぇ・・・お前もその女と一緒に遊んでやるよ」

と、男たちがそれぞれ懐から取り出したのはナイフ。　それを見た木原は絶望した。

（バカヤロォォォォ！！　それは一番やっちゃいけねェェェェ！！）

あの超がつくほどの戦闘少女に、攻撃の意志を見せてはいけない。
　さすれば、黒羽は自分を攻撃するという認識から防衛本能により攻撃を開始してしまう。

それは恐らく、男たちの惨殺による結末なのは頭でも簡単に浮かんだことだ。

「・・・・・」

しかし、黒羽は武器を構えても能力を発動するどころか、何もしかけるようなそぶりは見せない。
一瞬だけ後ろに居る歩を見た。

「え・・・？」

と驚いた表情になる歩。　そう、彼女の能力は一般の大衆には極秘。
知られてはいけない。

だが、それ以前に黒羽は能力を使ってまでこの場を収める必要がない。　ゆえに、歩を助ける理由がない。

（黒羽・・・お前、見捨てるのか、その子・・・）

嫌な予感が過る。　もともと、黒羽には人間らしい感情を今まで見たことがなかった。　仕事以外にはあまりにも無関心。　そして周りには自分しか見えていない。

助けを求める少女の声も平気で無視してしまうのか。　そして次の瞬間・・・

「こっちにきやがれ！！」

ナイフを持った男が一歩前に踏み込んだ時だった。

黒羽が近くにあったバケツを拾い上げ、ガポッと歩に被せたのだ。

そしてその刹那。

バキィンッ！

「へ？」

と金属がへし折られたかのような音が3回響く。

男たちは手のナイフを見つめる。　折られていたのだ。　根元から金属のナイフがポッキリと。

「な、なんだコイツぅ！！」

「なにしやがったんだ？」

「ナイフが折れやがった！？」

と、何が起きたのか把握できていない男たち。　しかし、隠れていた木原は理解した。

黒羽の手から、長さ5センチほどの黒い刃が出てきていることを。

「な、なになに！？　一体何が起きてるのかな！？」

無論、バケツをかぶっている歩は周りで何が起きているのか分かるはずがない。　ただただ慌てるのみ。

「コノヤロォ！」

とナイフを捨てた男一人が黒羽に殴りかかる。　しかしその腕は先に黒羽に掴まれた。

そして一瞬で。

バキィッ！

「ぐわぁぁぁぁ！！」

まるで腕が木の枝のごとき甲高い音を立ててへし折れた。

「アンちゃん！」

「テメェ！　覚えてろよ！」

という安い捨て台詞を吐いて去っていった。

「・・・・」

そして黒羽は何事もなかったかのようにその地面に落ちたビニール袋を手に取り、颯爽と信号を渡っていく。

「え！？　ちょ、何がどうなってるの！？　アレ！？　バケツ抜けない！　どうしようコレ！？」

歩はそのバケツが抜けるまで１０分ほどかかったという。

その一連の光景を見ていた木原は安堵していた。

良かった。　アイツにもちゃんと人間の心がある、と。

そう思っていた。

○

「え？　人助けをしたんじゃない！？」

「・・・そう」

「え？　どういうこと？　なぜ？　ホワーイ！？」

その夜、いつものビルの屋上にて夜食の準備をしている黒羽。　コトコトと鍋が音を立て、香ばしいカレーの匂いが漂う。

「食材」

その一言。　確かにあのときは押されて地面に落としてたが・・・まさかそれに怒ったのか？

「違う」

と質問した木原をバッサリと2文字で否定。

「潰されてた、どいてほしかった」

「・・・・・」

余りにも少ないキーワードだったが、少し考えれば真実に辿り着く。
つまり、とどのつまりはこうだ。

あの男が踏み込んだ瞬間、その足は見事にビニール袋を踏んでいた。
黒羽はその足をどかせようとしたが目の前にある刃物が邪魔だったので仕方なく能力で撃退した・・・と。

「そう」

余りの完璧なる回答に、自分が怖くなってしまう木原だった。

「じゃあ一緒に女の子を助けたのは・・・」

「偶然、客観的に見たらそう見えただけ」

と、黒羽から紙皿に乗ったカレーを渡される。　ガスコンロなどを使って作った出来立てのカレーだ。

「そうかよ・・・残念だ」

「・・・？」

そのカレーを受け取った木原がそう呟くと、黒羽は首をかしげる。

そんなことに目をくれず、カレーを口に運んだ。

「・・・チクショウ、旨いじゃねぇーか」

もっと言葉で表そうとしても、その単語しか浮かんでこない。　美味すぎる、絶妙なほどの甘味と辛味がエクストリーム・・・どういうことだ。

どんどん口に運んでいく木原だが、その一方でビルからの夜景を眺

める黒羽の姿が目に入った。

「お前は食べないのか？」

「いい」

と一言で返す。

「これ俺だけじゃ食べきれねぇぞ」

「・・・・・」

その問いに黒羽は答えない。　木原は食べるのを止めて続ける。

「残さないで食べるというのは作ったものに対しての礼儀だ。　一つ残さず食べつくす、食べる人も作った人もだ。　そう俺は教えられたんだがな」

「・・・・」

納得したか定かではないが、黒羽は視線を夜景からカレーの鍋に移した。　そして紙皿を取り出し、カレーを盛り、スプーンを使って口に運んだ。

「どうよ、自分で作った味は？」

そう聞いてみる木原だが、黒羽はその問いに対してこう返した。

「あなたは美味しいと思った？」

と聞き返す。　どういうことだと思った木原だが、素直に首を縦に振る。

「ならそれでいい」

「待て、全く答えになってない」

ますます訳が分からなくなる木原。　美味しいととってもいいのだろうか。

「・・・・・」

その意味不明なQ&Aは深く言及することなく終わった。

その中、またしても思ってしまう。
例えその行為が助けたとはお前が思っていなくても、他人は助けてもらったことに変わりはないんだ・・・と。

そして頭上に浮かぶ月を見ながら願う。

頼む、神様王様仏様、こいつにもう少しだけ人間らしい感情を・・・と。

第６１話短編その３～たまにはサイドチェンジもいいじゃないか～（後書き）

今回は主役が敵キャラという変わったサイド。　というのもこの二人、本編に出ても読者の方々があまりキャラを把握出来てないと思い今回この話をやりました。話の進み具合ではちょくちょくまたやるつもりです。

肉を見ていたのは品定めです。彼女は黒曜の力で物質の状態を分析していたという設定で……

黒羽さんは基本は無表情なんです。　だから木原くんは意思表示がなかなか無い彼女に苦労させられます。

しかし、彼女は料理の腕は確かなのです。それはテルくんが味見したら自殺するんじゃないかというぐらい。まさしく嫁候補。

なかなか歩とか使う機会がない……ので、ヒナ祭りにも出したいと思っています。

では次回からヒナ祭り祭り編……開始ッッ！！

第６２話~ｉｎ　ｍｙ　ｄｒｅａｍ~（前書き）

ああ…漸く投稿出来ました。

今回から始まりますヒナ祭り祭り編！

第６２話~ｉｎ　ｍｙ　ｄｒｅａｍ~

「お誕生日おめでとうございます・・・ヒナギクさん」

「へ？　ハヤテくん？」

ちょっと読者の皆さんの思考を当ててみよう。　ずばり、読者のみなさんは次に・・「なんだこの展開は・・」と言う。

「ヒナギクさんの１６歳の誕生日、どんなプレゼントがいいかずっと考えていました・・・」

ヒナギクの目の前に現れたのは様々な種類の花束を手に持ったハヤテだ。

「そりゃどうも・・・」

と素っ気なく返すが、反面顔を少しだけ赤くなる。　嬉しさは隠せない。

「そして考えた結果・・・」

がしっ。　とハヤテの両手がヒナギクの両肩に優しくかかった。
そしていつになく真剣な表情、かつ笑顔を浮かべるハヤテはそっと顔を近づけ・・・

「僕からのプレゼントは・・・」

「え？」

距離はだんだんと近づくにつれて、その心音は高ぶりを隠せないでいた。　しかしその心の隅で彼女は思う。

この突発的な展開、そしてデジャヴュ。

そして決定的な瞬間に彼女は悟った。　これは・・・夢なのだと。

「なんて頭の悪い夢を見てるんだ私は……」

ベッドの上で目を覚ましたヒナギクは溜め息をつきながらその日の朝を迎えた。

―最近、私には気になる男の子がいる。

毎晩毎晩私の夢の中に現れて、私はその子の事が気になっている。

そのせいで仕事もうわの空。

もしかしてこれは・・・この気持ちは・・・・

第６２話～ｉｎ　ｍｙ　ｄｒｅａｍ～

「だーーっ！！　また負けたーーーーっ！！」とある一室、ナギの悔しそうな声が響く。　ここは前回の話にでてきた会議室。

「さて、みんな集まったようだな」

教卓の上でバンと唯子が手を教卓に叩きつけて注意を引く。

「スイマセン唯子さん、僕たちはなんで呼ばれたのか分からないんですが・・・」

「そうそう、いきなり『放課後に集まってほしい、来なければ君の帰り道は恐怖で満ち溢れることになる』なんて言うから帰ろうにも帰れねぇじゃねーか」

そんな脅され方をされたのか、と恐怖するハヤテ。　そう、テルもハヤテもナギもこの会議室に呼ばれたのだが、今日は変わった顔ぶれもある。

いつもの3馬鹿、もとい、生徒会3人組の美希や理沙、泉もいた。

「せんぱーい、私達ってなんで呼ばれたんですかー？」

泉が手を上げて言う。お前ら生徒会の仕事はどうした。　そんな突っ込みのタイミングを無視して、唯子が答える。

「ふむ、君たちをここに呼んだのは重要なことを伝えるためだ。君たち、3月3日は何の日か知っているかな？」

「3月・・・」

「3日・・・？」

「必中、ひらめき、不屈、熱血、努力、幸運・・・これで負けるはずがない・・・」

ハヤテとテルはお互いに顔を見合わせて唸る。　ナギに至っては最近買ったＰＳＰのゲームを熱心にプレイしており、聞く耳をも持たない。

だが、3人組だけは思い出したかのように声を上げていた。

「あーっ！」

「ヒナちゃんのーっ！」

「誕生日だーっ！」

美希、泉、理沙と順に声を上げる。　相変わらずコンビネーションは抜群である。

そうだったのか・・・と改めて驚くハヤテとテルである。

「そこでだ。　彼女の為に、プレゼントを用意してやろうと思う。日ごろの感謝を込めてだ・・・特に生徒会の3人組はな」

笑顔を途端に変えて、凛とした表情で3人組を見る。

「君たちは毎度の事ながら仕事をサボっているだろう。　特に泉君」

「へ？」

「君は学級の報告書を毎回サボっているせいで、ヒナギク君の負担を増加させているそうだな？」

「そ、そうなのか泉！」

「この薄情者ーーーっっ！！」

「えええええ！？　なんで私だけーーっ！？」

泉は突然、裏切られたかのような状態になる。

「そこの二人もだサボりの常習犯。　ほとんどのヒナギク君のストレスの原因は君たちと雪路によるものだ」

きっぱりと言い切る唯子。　確かに、今回の呼び出しの間にも話の中心であるヒナギクは3人の仕事を驚異的な速さで消化しているのだ。

「用意すると言っても、何を用意すればいいのかが問題だな・・・」

「そうですね。　いったい何を用意すればいいんでしょう？」

「ガアアアアア！！　なぜ勝てん！　このＭＡＰ難しすぎるだろ！！」

ドゴッ！

「ギャアアアアア！！」

テルとハヤテが頭を悩ませる中で隣のナギはＰＳＰに自身の怒りを何故かテルにぶつける。

「私も悩んでいてな・・・だからこうしてヒナギク君の誕生日のプレゼントを皆で考えようと思ったのだ」

唯子も悩んでいたのだろう。　ヒナギクのプレゼント、簡単そうで難しそうだ。

○

その話題の中心にいるヒナギク。　仕事を終わらせてふぅ～と息をつきながら教室までの道のりを歩いていた。

「はぁ・・・どうしてこうあの子たちは手伝ってくれないのかしら・・」

勿論、そのあの子たちというのは生徒会の３人組だ。　こちらは人には言えないような悩みを抱えて仕事がなかなか捗っていないというのに。

「この際あの子たちにははっきりと言った方がいいのかもね・・・」

と怒りを押さえながら、早速説教するための内容を考えていると。

「うーん、しかし難しいですね・・・」

「そうだな～難しい」

と聞きなれた声が聞こえてきた。

（あれ、今のハヤテくんと唯子さんの声じゃ・・・）

と、通りかかった一室から聞こえた声にヒナギクは足を止めた。そして、ドアに近寄り少しの隙間から室内を見渡す。

（な、なんであの子たちが一緒に？）

中に泉や美希、理沙の姿を見てヒナギクは疑問を思っていた。　さらにテルやナギなども一緒にいるため、状況がさらに分からなくなる。

「ま～ヒナギクさんがプレゼントされて喜ぶものですよね～」

（え・・・まさか、誕生日の？）

ハヤテの一言にヒナギクは考える。　3月3日、そうだ確かその日は自分の誕生日。

「かわいいぬいぐるみとか良いと思ったんですけど」

（えー？　えー？　ぬいぐるみってーちょっとうれしいかも・・・）

そのぬいぐるみを想像して、期待に胸を膨らませるヒナギク。　だ

がそんな気持ちも次のハヤテの一言で一瞬で崩れ去る。

「ほら、ヒナギクさんって子供っぽいところあるじゃないですかー」

「あーあるね」

ピキン。　と背後のガラスにひびが入るイメージだ。

「バラとかどう？　そういうのだったら喜ぶかも」

「いやいや、案外うっかりさんだからトゲで怪我しちゃうかもだぞ」

「なら私は彼女に白百合の花を贈ろうではないか・・」

フフフ・・・と笑みを浮かべながら唯子が答える。

「メリケンサック」

「テルさん、後でどうなっても知りませんよ？」

「木刀」

「お嬢様・・・」

とテルとナギの危険な発言にハヤテは冷や汗。　するとそれに賛同するかのように美希がつぶやいた。

「たしかに、あの声でボクシンググローブなんてつけてたら完璧な大〇　涼子だからな・・・」

「黒いセーラー服着させて髪をいじればいけるかも」

「ちょっと、みなさん！　真剣に考えてくださいよ！　本人が居たらどうするんですか？」

とハヤテが慌てて真剣に考えるように言うが、その本人が既に扉の向こうにいるという事実。

「まぁ、なんだかんだで見た目は女の子、でも中身は実質男の子みたいなもんだし・・・」

「誰が実質中身は男の子ですって？」

と、その発言に耐えきれなかったヒナギクが中に入ってきたことにより、一同は慌てて騒ぎ出す。

「うわ、ヒナ！」

「ち、違う！　今のはカルガモのヒナの話で・・・！！」

「嘘言いなさい嘘をッッ」

ブォン！　とその手に竹刀を構える。　それを見た唯子が叫んだ。

「いかん！　みんな、今日は撤収だ！！」

「「「了解！！」」」

「え、ちょ！？　なに！？」

わーわーと子供のような声を上げながら一同は一目散に逃げていく。
唯子は窓から飛び降り、その他は反対側の扉から逃げて行った。
「まったくもう・・・仕事をさぼって何してるかと思えば・・」
ふぅとため息をついてしまうが満更でもなかった。　秘密にしながら自分に対してこういうことを考えてくれることがなによりも嬉しかった。
だがその裏で、やはり去り際にハヤテの方に目が行ってしまう。
何かを気にしているのだ。
何かを・・・・。

○

そして次の日・・・の放課後。
（またしても現れたわね・・・）
朝の出来事を改めて思い出すヒナギク。　流石に何日間か続くと自分は変なんじゃないかと思ってくる。
一人考えながら学校の道をトボトボと歩く。
（夢にまでみるのはどうかと思うが・・・気にしているのは確かだ）
（そして気になる点があるとするなら・・・あの一点・・・だと思う）

―――親が子供に借金を押し付けて逃亡。

前に、友人の美希から聞いたことがある。　ハヤテのその素性を。

そしてその情報からヒナギクは一つの過去を思い出していた。

『ねぇお姉ちゃん・・・お父さんとお母さんはどこ？』

その問いに当時小さかったころの自分は確か姉に聞いたはずだ。

だが姉は答えてくれず、自分はひどく不安に駆られていたということは覚えている。

（気になっている事にわけがあるなら・・・）

そうして考えていくうちにどんどん考えが偏っていく。　しかしそんな時だった。

「あれ？　ヒナギクさんじゃないですか？」

「あ・・・」

振り返らずとも、分かる。　声からして確実にハヤテだった。　だからなのだろう。

ヒナギクは振り返ると同時に、ファイティングポーズを構えていた。

「へ？」

と驚くのはハヤテ達である。　ナギやテル、唯子もそこにいたが、どうした？という表情だ。

急に自分が何をしているのか分からなくなったヒナギクは苦悩の末に一言。

「わ、私の背後をとるとは・・・やるじゃない」

「どこのゴルゴですか・・・それは」

ハヤテが冷静に突っ込んでくると、ヒナギクは構えを解いた。

「それにしてもあなたたちにしては帰りが遅いじゃない」

「ええ、お嬢様と唯子さんが自室で僕とワタル君とテルさんに勉強を教えていたんですよ」

「フッ・・・テストか」

とその単語に反応したのはテルだ。

それを気にすることなく、ヒナギクは続ける。

「え、勉強って・・・試験の？」

「はい、まさかあんなに難しいなんて思いもしませんでした・・・ハハ」

なんということだ。　確かに期末試験が近いのは分かっている。

そんな忙しい時期に昨日はプレゼントの話をしていたのか。

「だったら私のプレゼントの話なんてしてないで帰って勉強・・・

しなさいよ。　無くったって別に大丈夫なのよ？」

嬉しさ反面、本人の大事な試験の期間を費やしてまで考えることではないと思ったか、すこし突っぱねる感じで答えるヒナギク。　ハヤテはへらへら笑いながら返す。

「いや、でもホント白皇の問題がこんなに難しいとは思わなくて・・・難しいってしったのも最近ですし・・・」

「あそこまでできないとは正直驚いたぞ」

「右に同じく。　特にこっちに関しては・・・」

ナギの言葉に続くように唯子がテルに視線を向ける。　テルは燃え尽きた真っ白な灰のような状態だった。

「フゥ・・・テストか」

とその言葉にはまるで生気が感じられない。

「またもう特訓する羽目になるかしら・・・ってハヤテくん、そんなんでテスト大丈夫なの？　マズいんじゃないの？」

白皇の試験は難しい、問題文が英語だったり、そのレベルはもはや鬼。　テルや、ハヤテにとっては危ないものだろう。

「えー。　ほんとですねぇ～、全然大丈夫じゃなくて・・・どーしましょー？」

「・・・・・」

分かっている。　分かってはいたのだ。彼がこういう性格なことくらいは。
しかし、危機感というものがまったく感じられない。

「いや、どーしましょって・・・

（なんで私は毎晩、この人の夢を見るのかしら・・・

その時だ。ヒナギクの中で沸々と怒りが込み上げてきたのは。

（夢でうなされ、気を取られ・・・頭を悩ませているといのにこの人は・・・ッッ）

「「「〜〜〜ッッッ！？」」」

その場にいたハヤテ達はヒナギクの体から醸し出される怒りのオーラに身の危険を感じていた。

（もう少し・・・シャキッとしなさいよシャキッと！！）

今なら、霊感ゼロの人たちでも分かるかもしれないその怒りのオーラに一同は身を震わせた。

（お、お嬢さま！　なんですかあの後ろにあるオーラは！？　サイヤ人とかが出すオーラによく似てるんですけど！？）

（いやハヤテ、どう見てもディストーションフィールドじゃないのかアレ？）

（いや、待てよナギ。　あれは螺旋エネルギーだ・・・ヒナギクは螺旋の民だったんだよ！）

（二人とも、そこはＡＴフィールドって言った方が読者には分かりやすいのではないのでしょうか？）

（そんな事より執事くん、君はヒナギクくんに何かした記憶はあるのか？）

（した覚えはないですがしたのかも知れません！したような気がします！　いや！きっとしたに違いありません！）

（なんと！そんなことが……ッ）

「とにかく！　私のプレゼント選んで落第したら許さないわよ、分かった？」

「は、はい……」

物凄い剣幕で怒鳴り散らすと、ヒナギクはその場を去っていった。

「……お嬢様」

「なんだハヤテ？」

「これは僕の勘なんですが、このままではマズい気がするんですよ」

「まぁそうだな……」

「ちょっと僕…謝ってきてもいいですか？」

「「「いや、別にいいけど……何を？」」」

真剣な表情で聞くハヤテに一同が同じ言葉を発した。

「わ…分かりません……分かりませんが…」

しばしの沈黙の後、ハヤテは拳を握りしめる。

「男として何を謝るかは……！！　土下座してから考えます！！」

まるでこれから爆弾を抱えて敵地を駆けるかのような勇ましい姿。

しかし、物凄いカッコ悪いことを言っている。

「まぁ…傷はどれぐらいの物か分からんが、謝るのは大切だ。もっとも、取り返しのつかないことなら意味はないが……」

「……アンタ、スゲェ勘違いしてるだろ？」

ぶつぶつと違う方向の展開を考えていた唯子にテルが突っ込んだ。

○

（やっぱりこれは私の思い過ごしよ！　私がハヤテ君の事が気になっているなんて事、あるわけないわ）

軽い足並みで道を歩くヒナギク。

しかし、そんな考えとは裏腹に一つの気掛かり。

『お父さんとお母さんは？』

（いや、気になっていることがあるとすれば一つだけ――）

「ヒナギクさん！！」

突如背後からの声に振り返ると、そこにはハヤテがいた。

「綾崎君？」

「あ…と…えっと……その…」

なにやらハヤテは言葉が詰まっている様子。

なら、先ほどの疑問をハヤテにぶつける。

「ねぇ綾崎君…一つだけ聞いていい？」

「へ？　なんですか？」

といきなりの質問され、ハヤテは首を傾げる。

「あなたの…ご両親の事なんだけど……」

ハヤテの両親、ハヤテに莫大な借金を押し付けたその親の事。

「ご両親が借金を押し付けて居なくなった時……どう思った？」

「へ？　いや…どうって……酷い親だな～って…」

割と考える事はなく、きっぱり言った。

「子供捨てるなんて人として最低だし……こんなろくでなし、他にいないっていうか……」

確かに、その境遇は他人から当事者からの目からでもそういった見解に至る。

「ま、人間失格ですよぬ。　人間……」

「理由が！！」

だが、非はあるのは明らかでも、ヒナギクはその見解に納得できていなかった。

「理由があったんじゃないかって…思わなかった？」

「理由……ですか？」

「そうよ！　あんなに優しかったのに突然いなくなるなんて…！何か仕方ない理由が…！理由が…！」

何時もより口調が強くなっている自分がいる。　認めたくないのだ。あの日の出来事を……

「はは……そんなのないですよ。　あったとしても…逃げた事には変わりないですし……」

ハヤテがそう答えるのは当然だろう。　ハヤテの両親も彼には酷い事をしたのだ。

「そうね……」

言葉は納得したように返したが、内心は出来ない。

「ごめんなさい…変な事聞いて…」

ヒナギクは、目の前の少年にどんな答えを期待したのだろう。

聞いた所で…仕方ないのに……

そんな寂しげな表情の彼女を見たハヤテはさらなる危険を感じていた。

何かを言わなければ、もう何もかもが終わってしまう予感が少年にはした。

だから！

「ヒナギクさん！！」

「へ？　な…何？」

呼び止めた時とは、また違う気迫を持って迫るハヤテにヒナギクはたじろいだ。

「え！？　あのッ…そのッ…でッ！！　ですから…ッ！！」

「ですから？」

ハヤテはいざ思いを口にしようとするが、なかなか言葉がでない。

だが言わなくてはならないのだ。　何かを……。

（僕が言うべき事！僕がここで言うべき事！！土下座ではなく、今！！ヒナギクさんに言わなくてはいけない事！！それは――！！）

意を決したハヤテはその真剣な瞳でヒナギクを見つめ、言った。

「クジラとイルカの違いは……大きさだけなんですよ」

「……」

しばしの沈黙。

「だから何？」

言うべき事はトリビアではなかった。

「え！？　いやだからその！！　励まそうと思ったんですけど……！！」

「励ます手段が豆知識なんだ」

「はうう！　そんな人が殺せる冷たい視線を浴びせないでください！」

自分の言葉が凄い恥ずかしくなったか、ハヤテは顔を赤らめるのを必死に両手で隠す。

（気になるわけはなんだろ……）

「ま、プレゼントは楽しみにしてるわ」

今、この場で明確にするのが馬鹿らしくなる。

何故か彼を見ているとだ。

そんなことさえ、どうでもいい気がしてきた。

「じゃ、今日はこれでねハヤテ君」

「え、あ……はい…」

急に振り返ったかと思うとヒナギクの表情晴れやかだ。

そして何事もなかったように笑顔で去っていく。

「んで、結局何だったんだハヤテ？」

「テルさん、コレ多分死亡フラグです……」

「マジか」

「僕、何かしたんですかね？」

「それは多分……」

「多分？」

「次回にならなきゃ分からない！」

という訳で次回に続くッッ！！

第６２話~ｉｎ　ｍｙ　ｄｒｅａｍ~（後書き）

１ヶ月は投稿してなかった気がします。

なかなか忙しい時期でして、書きためる事しか出来ずにいました。

そんなこんなで始まったヒナ祭り祭り編。　ハヤテのごとくで名高いエピソードですが、私なりの解釈で進めてオリジナルの要素を入れたいと思います。

だから居るはずないキャラが出てたり、アレなんか違うみたいな感じに出来ればと思ってます。

質問の返答はまた次回の後書きという事でお願いします。

皆さんの感想、意見をば。

第６３話～壊すときは盛大にいこう～（前書き）

お待たせしました。　ひな祭り編、続きです！！

第６３話～壊すときは盛大にいこう～

―鷺ノ宮家、物置。
「なんやコレ？」
物置にて伊澄の手伝いをしていた咲夜はある物をみつけた。
咲夜が見つけたものはヒナ人形、だが奇妙な事にそのヒナ人形はおヒナ様が２つあるのだ。
「明日がヒナ祭りやからヒナ人形飾るのは分かるけど……」
「不良品じゃねーの？」
その場にはテルも居た。　無論、強制手伝い出歩き。　報酬は無し。
「むやみに触ってはいけませんよ２人とも」
伊澄が奥の方で注意をしながら続ける。
「それは呪いのヒナ人形…下手に触って封印が解けたら大変なことになるわ」

伊澄が言うにはそのヒナ人形は危険である代物だということ。

「ふーん……」

しかし咲夜は既に手に持ち、ヒナ人形を弄っている。　話を聞いていたのか……

「呪いのヒナ人形？　コレがかい？　笑おうにも笑えねぇな……」

びしっ　びしっ。

「ちょ、何やってんテル？」

テルはあろうことかヒナ人形にデコピンをかましていた。

そして次の瞬間。

ベキッ！

「……」

快音と共にへし折れた……首が。

「「……」」

テルと咲夜はお互いを見合わせる。

そして伊澄が一言。

「特にありえないけど、首をもいではダメよ。首をもぐと封印が解けて……」

くるっと振り返った伊澄は目を光らせて言い放った。

「この辺で一番、運のない人に……恐るべき呪いがかかるから！！」

そして言い放った直後、伊澄は硬直した。　言っていた側から、ヒナ人形の首がもげている姿を目にして……。

「「「……」」」

それを見たテルは咲夜からヒナ人形を取り上げてた。

「……」

そして無言のままヒナ人形を地面に置き……

「悪霊退散んんんっ！！！」

地面に置いたヒナ人形向かってプロレス式エルボーが炸裂した。

バキャッ！

「なにしとんじゃあああ！！！」

咲夜が叫びながら突っ込む。　テルが体を退かすと、そこには原型を留めなくしたヒナ人形の欠片が残されていた。

「あ？　見て分かんないのかよ、除霊だよ除霊」

「除霊どころか逆に霊をキレさせるような事してどうすんねん！？　オーバーキルにも程があるやろ！！」

「あわわわわ……」

しかし、咲夜が振り返ると伊澄が恐るべき表情で震えていた。

「どうしたんや伊澄さん？」

「全身を壊してしまったのですね……」

「なんかあるんか？」

震えながら言う伊澄に咲夜が恐る恐る聞いた。

「全身を壊すと……」

「「壊すと？」」

その震える口から絞り出した言葉は……

「体の欠片が残らないくらいに爆発するという恐ろしい呪いにかかってしまいます……」

「……え？」

その言葉を聞いた瞬間、彼は硬直した。

その時間約１分間。

「エエエエエエエエエッッッ！！？」

そして目をカッと見開き叫んだ。

第６３話～壊すときは盛大にいこう～

「どうしてこんな事に……」

鷺ノ宮家の手伝いを終え、帰宅途中のテル。

「まぁまぁテル、元気出しぃや？　まだ死ぬって決まった訳やないんやで？」

「そうですよ。　余り悲観的にならずに行きましょう」

その重い足を引きずるように歩くテルの後ろを咲夜と伊澄が歩く。

「んなこと言われてもよぉ……ってか、なんでお前ら付いて来てんの？」

「テル様の呪いの不幸も捨て置きないですがテルさま以外にも不幸な人物がいるんですよ」

「誰だそりゃ？」

「分からんのか自分？　アイツしか居らんやろ」

と咲夜が言った矢先、テルが足を止める。　三千院家に着いたのだ。

「まさか……」

とテルが思い浮かんだ人物の名を口にしようとしたときだった。

「ぬあああ！！　な！！　なんですかこれは――――！！！」

聞き慣れた叫びが耳に入った。

三人が中に入ると、そこには信じられないかのような光景がそこにあった。

その場に居たのはハヤテとマリア。

いたって普通の組み合わせ、だが今回はハヤテが異常だった。

「お、お前……自らメイド服を…」

「違いますよ違いますよ！　断じて違いますからテルさん！」

よほど気が動転しているのか、涙目になっているハヤテだった。

そう、目の前にいるハヤテは着ていたのだ。　メイド服を……それも完璧に着こなしていて……。

「手遅れでしたね……」

「そのようやな……」

「え、お前ら…どういうことだってばよ？」
2人だけ事情を知っている事にテルは戸惑いながら聞いた。

――――

「ヒナ人形の呪い？」
「そうなんです。　誰かが壊したせいで迷惑を掛けてしまい、申し訳ありません」
チラッ。
「ホントすまんな～誰かが壊したせいでなぁ～」
チラッ。
「お前ら、そんな視線を向けるなよ。　俺もつい出来心でだな」
「そうかそうか、出来心で星になってしまうんならそりゃしゃあないわな～」
テルの言葉にケラケラ笑いながら言う咲夜。

「え…咲夜さん、何です？」

しかしその言葉に疑問を持ったハヤテが聞いて来た。

「実はやな……」

――――――

「そんな……嘘でしょう？　テルさんが爆弾になってしまったなんて……」

「嘘だと俺も信じたいが、伊澄が言うにはそういう事らしい……」

頭を掻きながらテルは呑気に答える。

「よくそんな呑気にしてられますね。　一応僕の呪いより酷い物なのに……」

「もう割り切るしかねーよ。　俺一度憧れてたんだよねー人間爆弾」

「いや、割り切るにしても無茶じゃ……」

「ほら、何だっけ？　どっかの漫画の爆弾使いも『芸術は爆発だ！』とか言って前向きに自爆したじゃん。　アレぐらいの気構えでいなきゃな」

「それはまた斬新ですね」

「テル様の呪いもですが、ハヤテ様の呪いも恐ろしいですよ？」

と伊澄が割って入ってくる。　その言葉を聞いたハヤテは反応する。

「どういう事……ですか伊澄さん？」

「その呪いを3月3日のヒナ祭りまでに解かないと……」

重い雰囲気を醸し出す伊澄にハヤテは思わず喉を鳴らす。

伊澄の口が開かれた。

「一生女装が好きな男の子になってしまうんです！」

「……」

伊澄の口から出た呪いの内容に、一同はうーんと首を捻った。

「微妙な呪いですね……」

「だな」

テルも目を細めて頷く。

伊澄から聞いた話によると遡る事、時代は江戸時代になる。　そこにはどうやら変わった……有り得ないくらいの変人がいたそうだ。その人物はお雛様を作る腕の良い職人だったが、事あろうかその職人は女装が好きだった。

『はーッ！　何故女の子に生まれなかったんだ俺はッッ』

そしてある日間違ってお内裏さまに十二ひとえを着せてしまう。

それが超キモイと仕えていた城内で話題沸騰、運悪くその職人の横領事件もバレてしまい職人は……斬首。

しかし今わの際でも職人は……

「ああ…ッ　一度でいいから女の着物を着たかった……ッッ」

その強い想いが呪いとなり、以来運の悪い物を女装させる呪いがかかったのです。

「キモイな……」

「それに横領ってあまり同情できませんね……でもなんでよりによってメイド服なんですか？」

話を聞き終えたテルとハヤテ。　結局は自業自得みたいなものだ。

「それはおそらく……」

伊澄がハヤテの問いに袖で口元を隠しながら言った。

「その職人の……趣味です」

その大昔にメイド服があったのかといったツッコミは無しだ。

「まぁ……ビックリするほど似合うとるんやから……無理せんでもエエんちゃう？」

「いいわけないじゃないですか！こんなな…！」

突然の咲夜の一言に伊澄とマリアは改めてメイド服のハヤテを見つめる。

確かに、そんじょそこらの女が着るよりも遥かに着こなしている。
だが女装が好きではないハヤテにとって良いものではない。
「でも意外と好評やで？」
「まぁ♪」
「よし、今の内に写真に収めてその手の奴らに売りつけるか……」
「マリアさんもテルさんも恐ろしい事考えないで下さい！！」
「それと自分、ウチのささやかな疑問を聞いてもらってもええか？」
「な、なんですか？」
咲夜の怪しい視線にハヤテは嫌な予感がした。
「自分…スカートの下はどうなってるん？」
嫌な予感的中。　その瞬間、ハヤテの背筋が凍りついた。
「な…何がいいたいんですか？」
「いや……だからほら」
わきゃわきゃと危ない笑みを浮かべ両手を怪しく動かしながら咲夜はその距離を詰めていく。

「な…ちょっとでエエから」

「わー！！わー！！　何やってんですか――――！！」

咲夜はあろうことか、ハヤテのスカートの部分に手を掛けてきたのだ。

いかん、このままではこの小説的にも危ない。　そう思ったのか。

「親父かお前は……」

グイッと咲夜の体が引っ張られる。　テルが先の曲がった鉄パイプを咲夜の襟首に引っ掛けていた。

「う…うう……」

「オイオイ、ギリギリだったっつーの。　泣くなよ」

「だってそんな事…されたら……僕は…俺は…私は……」

「ゴメンゴメン、ウチが悪かった」

「余りの恐怖に自分の一人称が混乱してますね……」

息を荒くしながら涙目のハヤテに、少しやりすぎた感があった咲夜は笑いながら謝る。　マリアはその光景を眺めていた。

「え～、ゴホン。　それで呪いの解き方ですが……」

顔を少しだけ赤くした伊澄がわざと咳をする。

「呪いは3月3日のヒナ祭りが終わるまでにと言いましたが、具体的にどうすればいいかというと……」

「というと？」

「ヒナ段のおヒナ様…つまりこの辺で一番高い場所の主を…倒す事です」

○

（たとえば…たとえばの話だ）

場所は変わり、ここは白皇学院。　時計塔がそびえ立つその近辺を桂　ヒナギクは歩いていた。

（そんな事は百歩、いや二百歩、いやいやもっともっとず～っと譲って……有り得ない事だが、たとえ話の一つとして……）

このヒナギク、現在絶賛不調である。

（私が・・・ハヤテ君のことをす、好きだとしよう・・・）

その瞬間、体温の上昇とともに顔をの周辺がなにやら熱くなるのを感じてしまう。　自分でも何を言ってるのだろうと気恥ずかしい仮定。

（だから悪魔で仮定の話として！！　万が一、億が一、そういうことだとしても！）

最近出会った真っ直ぐな気持ちの少女のことを考えるとその気持ちを全力で日てしなければならない。

ヒナギクはその少女を応援すると決めたのだから。

（だから・・これはもう・・・）

「ずいぶんと悩んでいるようだね」

と背後から懐かしい声。　ヒナギクが振り返るとそこには黒い神父の服を着た男・・リィンが立っていた。

「あなたは・・・あの時の神父さん？」

「いかにも、俺の名前はロック〇ン・ス〇ラトス、成層圏の彼方まで狙い撃つ男さ・・・」

「へ？あなたってそんな名前だったの？」

「冗談、これはこの世界ではない私の名前だよ・・・まぁ冗談はさておき、あのダンジョンにいた人ぐらいにしか私の姿は見えない。
悩みがあるなら神父らしく相談に乗るが？」

「そんな・・・相談だなんて・・」

フッと笑うとリィンはヒナギクにその聞くがヒナギクは戸惑う、自分でも何で悩んでいるか分からないのだ。　いや、ホントは分かっている。

「それでも・・・」

「え・・・？」

その内を察したかリィンが続ける。

「それでも何を悩んでいるか分からないときは、目を閉じて考えてみるといい。　自分の心に素直になれば、なすべきことは見えてくるはずさ・・・」

（・・・・）

珍しく冷静に悟るリィンの姿はやはりその本職である神父であった。
その言葉の通りにヒナギクは瞳を閉じて自分の心に言い聞かせる。

（自分の心に・・・素直になれば・・・）

ーーー

「ええ。　テル様の呪いももとは同じヒナ人形からです。　だからどちらかが先に解除すれば同じくして呪いも解かれるかと」

テルの呪いも、ハヤテと同じように解除すれば簡単に爆発はしなくなるらしい。　しかもハヤテかテル、どちらかが条件を満たせば呪いは二人とも強制解除。　割と簡単だ。

「そうか・・・ならこの呪い、ハヤテに任せてもいいな。　俺はなにもしねぇ」

「さらりと仕事をハヤテに丸投げしよったな自分・・・」

不安の色も消えたテルの小言を咲夜はぼそりと呟く。　よほど面倒くさいのだろう。

「では事情の方は私の方から手紙でお伝えしましょう」

「せやな」

伊澄の提案に咲夜がうんうんと唸る、だが。

「いや、それは俺がやろう」

意外な事にその手紙を書く作業を受け持つと提案したのはテルだった。

これには一同もビックリだ。

「な、なんやテル。
別に手紙書いたからって特別手当てなんて出るわけやないんやで？」
「そうですよ。一銭にもならないんですよ？」
「まぁ何という事でしょう。明日は雪なんですかね？」
「お前ら……俺を守銭奴とか思ってんじゃねーか？」
テルは怒りの気持ちを抑えながら続ける。
「コイツの事だ。文をとったしても内容とトラブル付きでややこしい事になるに違いない……」
「たしかに……」
「む、むぅ……」
咲夜が同意するなか、伊澄は少し膨れていた。
「ややこしいのは嫌いだからな。下手して俺、爆☆殺なんてことになったら大変だ。だから頼むわ伊澄」
「わ、分かりました……その代わり、ちゃんと書いて下さいよ？」
と両手を合わせて頼むテルに伊澄は渋々と同意した。
「フフ・・・」

「どうしたんですか咲夜さん？」

ハヤテが横をちら見すると伊澄とテルの光景を見て笑っている咲夜が目に入った。

「ん？　あの二人見てると面白くてなぁ～」

面白がって見ている咲夜にハヤテはふーんと言った顔で見ていた。

○

「まぁでもこの姿で会うのは恥ずかしいですけど・・・他の生徒に見られるのもアレなので夜にでも生徒会室に来てもらって・・・」

「ですがハヤテくん・・・」

とマリアがハヤテの話に割って入ってくる。

「明日の夜には白皇学院五つの伝統行事の一つ、「ヒナ祭り祭り」があるので夜も人がいっぱいですよ？」

「・・・・え？」

そのマリアの一言にハヤテは固まった。

「え？　そんなに人が・・・？」

「はい、結構。　前日も設営の人が一日中いっぱいです」
あくま冷静に答えているマリアであるが、ハヤテにとってはもはや絶望に近い。
「ヒナ段の上で倒さないと呪いは・・・？」
テルが伊澄に視線を移しながら聞くと伊澄は冷静に一言。
「解けません」
もう、どうあがいても絶望。　そう簡単に物事がうまく運べる訳がない。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「ヤイサホォォォーーーーー！！」
今回で何度目のサイドチェンジになるんだというツッコミは遠慮していただきたい。　ここはとある高層ビルの上。　一人の男が屋上の貯水タンクの上で遠くに向かって雄たけびを上げていた。
「ヤイサホォォォォ！！」
その男の名前、木原　竜児という。　以前ナギを誘拐した少年である。
「・・・・・」
その男の後ろで立っているのは黒い長髪の黒衣に身を包んだ少女。

名を黒羽という。
彼女もまたナギ誘拐した木原に協力をしていた人物だ。
「ヤイサ・・・ホォォォッッ！？」
視線を感じたか後ろを振り返ると木原は驚いたかのように叫んだ。
どうやら今まで黒羽が後ろにいたのが気付かなかったようだ。
「・・・・」
「お、おおう！　黒羽さん！　もう戻ってきてたんスか！？　い、一体いつからそこに！？」
「・・・最初から」
と空色の瞳で木原を見つめながら黒羽は静かに答える。　音もなく背後に迫る・・・まるで忍者のようだ。　いや、もしくは竜児がただのバカなのか。
「ふぅ・・・こいつは恥ずかしいところを見せちまったぜ」
と額の汗を拭いながら木原は呟く。
「・・・・」
その木原を黒羽はじーっと見つめる。
「いや、その・・・なんだ？　暇だったから、一人だったからその・・・叫んでみたかっただけなんだからな？　別にさびしかったわけじゃ・・・ん？」

とセリフを中断するかのように、木原の言葉が途切れる。　黒羽が何かを差し出してきた。　白い肌の色の手に摘まれ差し出されたのは一枚の紙。

それを取り、木原は読み上げる。

「なになに・・・白皇学院伝統行事、ヒナ祭り祭り？」

再び視線を黒羽に向けると黒羽は小さな声で

「仕事」

と言った。

「行くの？」

「そう・・・」

と、黒羽は首を縦に振る。それを見てか、木原は後頭部に手をやりやれやれと言った表情になった。

こうして・・・誰も知らないヒナ祭りがやってくる。

第６３話～壊すときは盛大にいこう～（後書き）

クッ！　やってしまったッッ　やってしまったッッ原作ブレイク！！
やっぱり普通じゃつまらないッッ！　何か違う風にしたい！
という訳でテル君には爆弾になってもらいました。
テル「ざけんじゃねぇぇぇぇ！！！」
ドゴッ！！
バロックス「ぎゃあああああ！！」
テル「まったく・・・お前は俺に恨みでもあんのかコラ」
バロックス「クックック・・・しかしもう遅い、既に賽は投げられたのだよテル君」
テル「ふん。　まぁ、ハヤテがどうにかしてくれるんだろ？　毎度の事ながら」
バロックス「フゥ・・いつまでもそんなことを言ってられるかな？」
テル「どういうことだ？」
バロックス「それは次回になれば分かるのさジョニー」
テル「俺はジョニーじゃねェ！！」

という訳で次回に続きます！！

第６４話～トラウマの対処の仕方は難しい～（前書き）

ヒナ祭り編続けていきますよォ！　なんかいろいろネタ使いすぎてフリーダムになりそうな予感だぜ！！

第６４話～トラウマの対処の仕方は難しい～

テルのちょっとした事からハヤテとテルはそれぞれ女装してしまう、人間爆弾になってしまうという恐ろしい呪いにかかってしまった！

その呪いは！　３月３日のヒナ祭りが終わるまでに、ヒナ段の一番上の主を倒さなければならない！

だがヒナ段の上、つまりその主とは、あの生徒会長、桂　ヒナギクだった！

ハヤテは思っていた！　ヒナギクなら事情を説明すれば分かってくれる！　分かってくれるハズだと・・・・だが！！

「わかったわ」

「わかったかね」

「ええ、どうして……今までこんな簡単な想いに気付かなかったのかしら……」

神父、リィンに言われた通り心のままに瞑想を終えたヒナギク。

「人は……自分の素直な気持ちを認めるのがなかなか難しい」

悟るリィンの神父としての本領を見事に発揮している。

「しかし、それが恋心という……」

「決着がついてないからよ」

このままリィンの納得する形で解決かと思ったが。

「……決着？」

二文字なのは合っていたが、聞こえた単語はリィンの思っていた単語とは程遠い単語。

「そう！　あのマラソン大会での１対１での勝負……あのうやむやに終わった勝負の決着……」

まるで喉のつまりがなくなったようにヒナギクはスッキリした表情だ。

「斬新な結論だな」

リィンも最早何も言うまいとその一言だった。

「そっかそっか。おかしいと思ったのよね。勝ち逃げされたみたいになってるから、悶々としてたのね。　うんうん♪」

「あ…あの……」

意気揚々と納得しているヒナギクに声をかける人物がいた。

「ん？　あなた……鷺ノ宮さん？」

振り返るとそこには白い封筒を持った伊澄がいた。

伊澄は少しオロオロしながらその封筒を差し出す。

「なに？　手紙？」

「はい。　上手く説明できないので要点を文章にしました」

「へえ、どれどれ……」

その封から白い紙を取り出すとヒナギクはその文を読み上げた。

○

～実は頼みがあります。　勝負してほしいんです。

できれば2人の方がいいと思います。場所は時計塔最上階です。

ま、勝つのは僕ですけどね。

武器は持参でお願いします。その方が平等ですからね……ま、勝つのは僕ですけどね。

胸の大きさが戦力の決定的差ではないという言葉がありますけど……ま、勝つのは僕ですけどね。

夜九時、楽しみにしてますよ。

最後に一応言っておきますけど、勝つのは僕ですけどね～

○

「……」

「あの…えっと……詳しくは現地で……」

暫くしてヒナギクは黙ったままその手紙の内容を見つめていた。

そして手紙をふわりと投げ出すと……

「ダッシャアアアア！！！」

その手に正宗を出現させ、手紙を細切れにした。

「果たし状かァァァァァ！！！」

「え？　あれ？」

伊澄は慌てふためくがソレ以前にヒナギクの表情。

額には怒りマークが浮かび、正宗を振り回しながら荒々しい息を吐いている。

「ふ、ふふ……さすが三千院家の執事。　既にこちらの心はお見通しだったとは……やはりできるわね」

「え？　それはどういうことですか？」

伊澄は原因を探るが唯一の手掛かりの手紙もヒナギクが細切れにしてしまったため真実を知る術はない。

「でも勝つのはこの私ィ！　お互い正々堂々と戦おうじゃないの！」

そして正宗を高く突き上げて叫んだ。

「あは、あはは・・・首洗って待ってなさいよォォォォ！！！」

笑いながらそう叫ぶ姿に、伊澄は悪霊よりも恐怖したという。

「全く……本心に気付くのも伝えるのもなかなか難しいな。　それよりもアニメイト行こう、初音　ミクのねんどろいどを買わなくては！！」

リィンは目を輝かせてその場を去る。　神父としての職務を見事に放棄した。

―そして次の日。

時は3月3日、ヒナ祭り祭り……当日ッ！

○

「う～ん・・・確かにこれはかなりの規模ですね～」

見晴らしのいい丘の上で、ハヤテが白皇学院の現在の様子を見ていた。

祭りの熱気もあってか、普段はあまり動かない生徒も感化されて走り回っている。　ぼんぼりが光り、屋台が並んで祭りの雰囲気が出ている。

「この人込みの中を誰にも見られないで潜入するのは至難の業ですよね・・・」

「せやけどなんやねん、その恰好は・・・」

険しい表情になっているハヤテをよそに咲夜が注目したのはハヤテの服装。　何故か白いコートを羽織るという姿。　一般に見つかったら異質の目で見られること限りなし。

「アレ？　ところで伊澄は？　俺はあいつが来るからって祭りに来たんだけど・・・」

どうやら伊澄でつられてきたワタルはこの場で伊澄がいないことに

ご立腹の様子だ。
不意に、ワタルの肩を咲夜が叩く。
「残念やったなワタル・・・伊澄さんは1コマも一緒に出ることなく迷子や・・」
「記録更新だなオイ」
「しかしこのヒナ祭り祭りってなんなんですか？　前のマラソン大会に比べて随分と楽しそうですが・・・」
「そりゃあ五大行事が全部命をかけるようなヤバい行事なわけないだろ」
ハヤテの疑問にワタルが答える。
「バレンタイン逆さ、男が女を誘って一緒に踊って思い出を作る祭りなんだとさ」
「なるほど。　やっぱ夏は盆踊りっちゅうわけやな」
「いや、今は3月ですけど・・・」
「ブツブツブツブツブツ・・・」
まぁ季節ネタはさておき、ハヤテ達の後ろで膝を抱え込んで負のオーラを醸し出している男が一人。
「どうしたんですかねテルさん・・・朝からずっとあんな感じなんですけど・・・」

テルには聞こえないようにハヤテは咲夜に聞く。

「ウチもようわからん。　昨日のテンションとは全く逆やないか」

「ギャアアアアアア！！！」

いきなり立ち上がったテルはものすごい形相でハヤテに掴みかかってきた。

「ハヤテェ・・・お前、絶対に作戦は成功させろよォォォ！！」

「え？　ま、まぁもちろん善処はしますけど・・」

「善処どころじゃねぇ！　命を持って全うしろぉぉぉぉ！！」

その表情はまるで死刑を待つだけの罪人が浮かべる絶望の表情のようだ。

ハヤテ達はまるで訳が分からない。　昨日まで人間爆弾になることさえ夢に見ていたと豪語していたテルがいったいどうしたことか。
いまさら自身が人間爆弾になることを恐れている理由はなんなのか。

「チクショウ・・・俺は見ちまったんだよ・・・」

「見たって・・何を？」

その理由は、昨日の夜に遡る・・・・

ヒナ祭り祭りを前日に控えたテルは鼻歌なんて歌いながらナギの部屋に紅茶を届けに行っていた。

本来ならハヤテがその役を担うのだが、そのハヤテは今はメイド姿、テルたちがナギの部屋に行けと言ってもハヤテはナギのようにテコでも動かんと言った感じだったのだ。

「という訳でお邪魔しまーす」

「ようやく来たか、遅かったじゃないかバカテル」

「バカは余計なんだよバカは・・・それと夜中に紅茶なんて飲むもんじゃねーぞ」

カチャッ。　と紅茶を置き、キャスターの上にあるポットからカップに紅茶を注いでいく。

「珍しく執事の仕事をしているな」

「一応執事なもんでな・・・ん？」

紅茶を注ぎ終えたテルが気づいたのはナギの机の上。　これも金持ち使用の豪華な作りなのだがその机の上にはデスクトップ型のパソコンが置かれていた。

「なんだよ。　お前パソコン持ってたのかよ」

「当たり前だとも、この世は常に情報との戦いだ。　私の暇を見事潰してくれる・・・じゃなかった。　その情報社会を制するために

必要なものだパソコンは」

「本音が少し聞こえたぞ」

「ふん、息抜きにニコニコ動画やヒマワリ動画や東方をやっていて何が悪い」

「遊んでしかねーじゃねーか」

「むぅ」

とテルに突っ込まれたナギは眉を吊り上げてデスクトップパソコンに電源を入れる。

「ふん。　ならば貴様に目に物を見せてやろう」

「お？　なんだ？　その手のものなら大歓迎だが、あいにくその手のものをお前が毎晩に見ているとなれば、それをハヤテに報告しないといけねェな」

「その手のものってなんだその手のものって！！」

怒鳴るナギは手早く自身のウィンドウを起動させ、ニコニコ動画サイトに入っていった。

「貴様に昨日見ていた鬱動画をみせてやろう」

「ほぅ、この超ポジティブ形態の俺にそんな生クリームのように甘い鬱動画が通じるかな？」

「まずは見てから言え」

ナギはマイリストからその動画を取り出し、カチッとクリック。

「アレ？　これって昔のロボットアニメ？」

テルがよく見ると、画面に映し出されたのは昔の、ロボットアニメだった。

なぜこんなものが鬱なのか、と疑問に思ってしまう。

「ああ。　昔にしてはかなりの鬱使用になっている・・・この作品の見どころは人々が敵に捕らえられて体を爆弾に改造させられてしまうのだ」

「・・・・」

爆弾。　その単語を聞いた瞬間、テルの体が固まる。

「その爆弾に改造させられてしまった人々はいつどの時間帯で爆発するかも分からない。　そう思った人々の中には主人公たちの仲間もいるのだ。　んで、その仲間は主人公たちの為に爆弾になってしまった人たちと一緒に主人公たちから離れていくんだよ」

これがその時のシーンだ。　と言わんばかりにまたしてもナギはクリック。　わざわざ大画面で見せてきた。

人間爆弾に改造させられてしまった人たちと、主人公の仲間が離れていくシーン。

「どうせ・・・父ちゃんも母ちゃんもいなくなっちまったんだ・・・俺だってもうすぐ、母ちゃんの所へ・・・」

と下を向きながら歩いていた主人公の仲間は急に立ち止まった。

「お、俺・・・いやだ」

「父ちゃんも母ちゃんもいない所で死ぬなんて・・・一人で死ぬなんて・・・い、嫌だ！」

死を目の前にした少年はその恐怖に耐えきれなくなったか、ほかの人々の方とは別の方向に走り出した。

「な、人間爆弾の子を人様のところにやるでない！　誰か止めないか！！」

一人の男の声に応じて、四人の男が走り出した少年を捕まえる。動けない少年はその場で叫んだ。

「い、いやだぁぁぁぁ！！　母ちゃん死にたくないよ！！　父ちゃん！　助けてくれよ！」

何度も大人たちの拘束から逃れようとするが、大人の力には敵わず、ただただ泣き叫ぶ。

「父ちゃん、母ちゃん！！　何でも言うこと聞くからよぉ・・・助けてくれよーーーー！！」

その時だった。　彼の、人間爆弾となった少年とそのほかの人たち

の体が輝きだした。　そして次の瞬間・・・

ドゴォォォオ！！

彼らはまばゆい光と共に爆発した。

「・・・・」

それを見ていたテルは目を見開いて体中から滝のような汗を流していた。

「フフフ・・・これが朝の時間帯から流れていたんだぞ？　子供たちが普通に見れる時間帯からだ」

腕を組んでいたナギは勝ち誇った表情を浮かべる。

「だがまだこんなのは序の口だ。　黒冨野の歴史を貴様に脳髄に刻ませてやる。　次は伝説巨神の方をだな・・・ってアレ？」

ナギがテルの方を向いた時には、既にテルはナギの部屋から居なくなっていた。

「ほぅ、逃げ出したか・・・ま、いっか」

とカチッとパソコンをいじり始める。

「うるさいのが居なくなって良かった。　流石に私も鬱気分を払しょくするためにポジティブな動画を見てから寝るか・・」

と言いつつ、彼女は夜更かしなんてしてしまい寝不足になってしまうのは目に見えた結末である。

○

「そんなことがあったとはな・・・」

「なんだってそんな状況下でザ○ボット見るんですか!?」

「知るかよそんなもん！　誰だって生きたいんだよ！　爆裂四散なんて嫌なんだよ！　もうあの動画見てから人生黒色だよ！　どうにかしろコンチクショーー!!」

咲夜とハヤテの一言一言にテルは地震の恐怖を叫ぶ。　この感覚はアレだ。　寝る前に怖い動画を見てしまうと怖いシーンが脳裏に焼き付いて夜眠れなくなるというあの現象だ。

「ヤベェよオイ・・・爆発ってどんな感じなの？　もう凄いグロイの？　なんかこう・・・もう色々と吹き飛んじゃう系？」

「あかんな・・・ハヤテ、もうコイツダメだわ。　色んな意味で・・・」

「そうですね・・・まだ時間じゃないのに地面に大の字に寝転がっているのを見る限り・・・かなりの精神状態かと・・・」

「芸術は爆発だ！　畜生が！　リア充なんて爆発しちまえよ!!」

もはやテルは自身の人生に限りを付けたかのように、てかヤケクソ状態で地面に寝転がって空に向かって訳の分からんことを叫んでい

る。　ほんとにヤヴぁいようだ。

「とにかく、善は急げです！　早く僕はヒナギクさんに会いに・・・」

「あれれ？　何をしてるのかなハヤ太くん？」

ハヤテは声の主のいる方向に振り向く。　するとそこには委員長レッドこと、瀬川　泉の姿があった。

「せ、瀬川さん！？」

突然の泉の出現に慌てるハヤテ。　それもそのはず。　ハヤテの女装の事情はごく一部の人間しかわかっていない。　そのため、瀬川などの一般の人間からこの姿を晒してしまうのはただならぬ誤解を招くのである。

「あれ？　そのコートどうしたの？　なんかのコスプレ？」

基本好奇心旺盛な泉はすぐさま普段のハヤテと違う服装に気づいて聞いてくる。　なんとか隠そうとしていたハヤテだったが・・・

「な！！　なんでもないですよ！！　別に隠し事とかあるわけじゃないんで！！」

「はへ？　隠し事・・・？」

うっかり、ハヤテは喋ってしまった。　そんなことを言われたら人間気になって気になってしまいしょうがない。

「ダメだよハヤ太くん・・こんな真夏にコートなんか着ちゃ・・・」

「いやぁ・・・だから作中では三月ですって・・」

じりじりとその距離を縮めてくる泉。　なぜだろうか、彼女の耳からは某アニメのような動物の耳が生えているように見える。

「その下どうなってるの見せてーーーー！！」

「わーーー！！　ダメですーーー！！」

時を待つことが出来なくなったか、泉はハヤテに跳びかかってくる。
　ハヤテは即座にその場をダッシュで去ろうとするが泉はそれを追いかけていった。

「行ってもうたな・・・」

「んで、あの下ってどうなってるんだ？」

事情を知らないワタルは何も分からないままである。

「そういやテルの姿が見当たらんで？」

「なんかスゲェへこんでたからな・・・帰ったんじゃねーか？」

辺りを見渡す咲夜だがテルの姿が無いことに気付く。　ワタルは帰ったかというが、人けのないところでひっそりとしているのではないかと咲夜は感じた。

（うーん・・・これは気にかけてやったほうがええんやろか・・・）

一応バカな執事だがこれまでの事もある、心配はしていた咲夜だったが。　基本彼女は楽観的な性格である。

「ま、えっか。　それよりワタル、ウチらも祭りに行こ♪」

「は？　お前、俺は伊澄と・・・」

「多分伊澄さんは迷子で出てこんとちゃうか？　大丈夫やって、祭りの中で伊澄さんとバッタリ会った時にはウチは手を引かせてもらうからな」

「ば、お前！　別に・・・」

「ほらほら、さっさと行くで行くで♪」

グイグイとワタルの手を引っ張っていく咲夜と、それに渋々従いながら連れて行かれるワタル。

色んな所でそれぞれのお祭りが始まるのだった。

第６４話～トラウマの対処の仕方は難しい～（後書き）

」

ハヤテ「今まで何やってたんですか・・・」

バロックス「土下座しても最早収まらないレベルかも知れないぜイエア」

テル「なにそのイェアってやつ、流行ってんの？　俺も真似していい？」

質問１・ハヤテに質問です。　テルとナギの料理はどちらの方がまだましですか？

ナギ「実際」

テル「どうなんだよ？」

ハヤテ「え、ええと・・・テルさんのは食べると痙攣起こしてしまうし、お嬢さまの料理は材料で薬品が入ってますし・・・」

マリア「きわどいラインですわね・・・」

ナギ・テル

「「ならばこの場で食べて貰おうか」」

ドン！

ハヤテ「なんですかコレ？」

ナギ「焼きそば」

テル「焼うどん」

ハヤテ「お嬢さま！？　焼きそばは緑色じゃありませんし、ゼラチンで固める必要はありませんよ！？　テルさんも焼うどんなのに麺の色が銀色です！！」

ナギ・テル
「「取り敢えず食え！！」」

ハヤテ「ぎゃあああああああ！！！」

マリア「結果、どっちも無理。　マシとか以前に食べられないです」

質問2・ワタルとナギに質問です。　デジモンアドベンチャーで一番好きなキャラ、紋章はなんですか？

バロックス「な、懐かしすぎるッッ　小学校を思い出すよ！！」

ワタル「俺は八神　太一とアグモンだな。　紋章も勇気の紋章。メタルグレイモンに進化する時が燃えた」

ナギ「私はミミかもしれん。　パルモンも好きだったな・・でも好きな紋章は愛情だ」

バロックス「ミミを選んだ理由は？」

ナギ「なんだかんだミミがデジモンワールドを通して一番成長したように見えたのだが・・・そのせいかもな」

バロックス「最終回は見事にあの二人に持ってかれたようなもんだからな」

ワタル「ミミの帽子が跳んでからのオープニングの入りは神だった・・・」

バロックス・ワタル
「「デジモンって最高だな」」

質問ありがとうございました！！　遅れてしまい申し訳ありません！！

また次回もよろしくお願いします！！

第６５話～またどこかで祭りが始まる～（前書き）

さて、まだまだ長いヒナ祭り祭り編。　今回は色んなキャラが登場ッ！懐かしのキャラもいろいろやってきています。　みんなは覚えていますか？

第６５話～またどこかで祭りが始まる～

「はぁ～　今日が俺の命日になるのか・・・・」

人間爆弾こと、善立　テルは歩いていた。　光輝く祭りのその道を。辺りは屋台、周りを明るく照らすための雪洞がいくつも吊るされてある。　そしていつの間にか陽気な雰囲気に釣られて人々は集まってくる。

それが祭りだ。

「まぁ、今日死ぬことになるんだからな・・・目いっぱい色々と遊んでみるのも悪くないかもな」

もう自分が死ぬことが確定しているかのように、現在のテルはマイナス思考気味だ。　それで最後にすることが祭りで遊ぶこととは、なかなか殊勝である。

「アレ？　お前、テルじゃねーか」

「ん？」

と道を歩いている中、テルを呼び止める男がいた。　振り返るとそこにいたのは二人組の男。　声を掛けてきた男は老人だ。　浴衣を着ていて下駄を履いている。

「なんと。　ここで会ったが何話振りだろうか・・・」

もう一人は白人の男だ。　身長はそれなりに高く、同じく浴衣を着ている。

「辰屋のジジイにバルトじゃねーか。　久しぶりだな」

久しぶりに見た辰屋の顔を見てテルは自然と手を振る。

「なんでぇなんでぇ、祭りだってのにシケた面してんじゃねーか」

「シケた？　俺が？」

「おうよ。　お前はこの祭りの雰囲気の中、一人だけ溶け込めていねぇ。　言っちゃわりぃがよ、今日は死ねるみてぇなそんな顔をしてやがる」

「そうだ。以前のお前ならこんな事に屈することは無かったはずだ。俺より先にクビになんかならなかったはずだ！！」

「いや、まずお前と俺じゃああの店に居た時期が全く違ェんだけど」

「まぁ聞けよ」

話すバルトを黙らせて辰屋は話を続ける。辰屋は読み取ったのだろう。　テルのその雰囲気から不安の色を。

「・・・・」

「何も聞く気はねぇが・・・人生の先輩として俺から一つ教えておいてやる」

そう言った辰屋は険しい顔をして一言。

「死ぬ日にいい日なんて・・・死ぬまでねェぜ・・・」

辰屋はそのまま続けた。

「死ぬなんて簡単に受け入れていいもんじゃねぇ・・・そう簡単に物事を諦めるな。　男なら、お前ならこういう時でも踏ん張って見せろよ」

その言葉にテルは聞き入ってしまった。　久しぶりに話をして説教なのかと思ったが、今の自分の状況を理解はしていなくても善立テルの本来のあり方を聞かされた。

「へっ・・・俺には熱血成分なんてないから熱くなったりはしねぇけどよ。　今のはなかなか効いたぜジジイ」

「へっ、伊達にお前より長生きしてねェンだよ」

「ふむ。　日本人とは改めて不思議なものだ。　言葉一つで悲しみ、燃え上がることができる・・・それより辰屋殿、せっかくの休暇なのだ。　楽しまなければ」

「ま、そうだな。　じゃあなクソガキ、また店に来いよ。　あと溜まったツケ払え」

「取り敢えずツケといて、お前の麺あたりにな」

「お前またそうやって逃げ出す気かオイ」

辰屋もいままで温厚な表情を保っていたがそろそろ限界のようだ。
眉間にしわを寄せ、微笑みながら怒りマークが複数出現している。

「それよりテル殿・・・」

その雰囲気を物ともしないように入ってきたのはバルトだ。　何やら手を動かしてこちらに来いと言ってるようである。

「なんだよ」

そう言うと少しばかり戸惑うバルト。　そして意を決したように小声で聞く。

「あ、ああ・・・そのだな。　ソニアさん・・・いや、元隊長は元気でやっておられるか？」

「あ？　あの暴君シスター？　知らねェよ。　あの船の事件の後一回だけ会ったけどな、それっきりだ」

「そう、そうか・・・」

テルの言葉を聞いた後は少しばかりバルトは残念そうな顔をしていた。　一旦、ふぅとため息をつく。

「なら、いいのだ。　では行こう、辰屋殿」

そう言ったバルトに頷いた辰屋は二人で下駄を鳴らしながら屋台を回るために歩いていく。

「大人も大変だね～～」

そんなことを考えながらテルも首を鳴らしたところでまた歩き出す。

「さてさて、今日はとことん楽しんじゃうよ～　祭りの暴君とは俺のことだからね」

独り言だがさっきまでのようなネガティブな思考は無く、純粋に今は祭りを楽しむかのような表情だ。

財布を取り出してテルはその道を走り出したのだった。

○

テルのいる場所とは変わって、祭りの光景を歩きながら眺める男がいた。

その表情はひどく冷めたものであまり興味を持っているようではない。

「祭りか・・・まったくもってくだらんな」

彼こそ白皇学院の王様キャラ、王華　千里である。

「このような催しは、俺様の為に用意されるべきではないのか」

千里がつぶやくのは不満、王たる自分がこのような場であがめられることなく、全員が興じる今日の祭りにひどく不満を持っていた。

何とも身勝手な男である。

「当たり前だ。　自分の器も理解していないのか陶片僕」

その背後から聞こえた罵声に、千里はくるりと振り返る。　そこにいたのは二人の女子だ。　一人は千里が最も知っていて最も嫌いな女性。

「奈津美ッッ」

言葉には怒気がこもっており、相手を威嚇するように千里は唯子を睨んでいたが唯子はフフ・・・と小さく笑う。

「まったく・・・静かに祭りを楽しんでいるかと思えばただ一人で寂しく歩いていたのか・・・」

侮蔑するような視線を千里に送る唯子。　そう、何を隠そう千里、その自分勝手な性格が災いしてか友達が少ない。

「寂しいとは思っておらん。　王とは群れず、孤独なるものだ」

「ならばこの前の放課後に、私の雑談の場に居たのはなんだ？　気まぐれか？」

その言葉に千里は一瞬だけの間を開ける。　いつだったか、唯子が行っている雑談の場に一度だけ千里は居た。　普段群れを作ることのない彼がなぜあの時あの場にいたのか。

千里はあまり困った顔をすることなく答える。

「・・・決まっているだろう。　気まぐれだ」

「ふーん・・・まぁどうでもいいが」
腕を組みながら考える唯子だが、あまり深く考えることないように組んだ腕を解く。
「暇だったら私と一緒に回ってみようか？」
「な、なにッッ！？」
突然の唯子の提案に千里は驚く。　普通のお誘いならまだ理解はできる。　だがその誘ってくる相手に問題があるのだ。
「フフ・・・こんな美人と一緒に祭りを回れるのだぞ？　嬉しいとは思わないのかボッチくん」
「くぅ・・・」
せせら笑う唯子の言葉には明らかにバカにするような感情がこもっていた。
「それとも何か？　美人な唯子さんと一緒になるのは純情なこのぼくちゃんは、唯子さんの隣を歩くには道頓堀のヘドロのように醜く哀れな存在のため一緒に回ることはできません・・・とか？」
「き、貴様ァァァァァ！！」
「今だッッ！」
痺れを切らした千里が大きく口を開けた瞬間。　唯子が機を図ったかのように右ポッケから何やら小さなパックを取り出す。　そして

千里の口の中に向けて中身を射出。

「む、むぅ・・・ッッ！！」

パックから飛び出た赤黄色の物体を飲み込んだ千里は次第に広がるその味に表情を強張らせていく。

千里が飲み込んだ物体。　それはタバスコと辛子だった。

「ぐあああああああああああああ！！」

「あ～はっはっはっはっ！！　逃げろ逃げろ書記くん！」

高らかに笑い声をあげると、唯子は一緒にいたもう一人の女子生徒と共に千里のいる場所から逃げ出した。

そして振り向きながらあっかんべーの状態で唯子は言った。

「ばーか。　誰がお前なんかと祭りなんて回るか木偶の棒、私には祭りのすべての屋台を回りきるという重大な使命を担っているのだ」

「う、ウォオオオオオオ！！」

顔を真っ赤にしながら千里も叫ぶ。　辺りの生徒含めた一般人が注目するが千里は人目を気にせず唯子を追いかけ走り出す。

「許すか・・・許すものかァァーーー！！！」

こちらもまた別の意味での祭りが勃発した。

○

「まったく祭りですか・・・くだらない」

別の場所でも、千里のように祭りにあまり興味を示していない男がいた。　身長はそれなりに高く、髪はライトパープルで片手にコーヒーを持ちながら校舎の窓から祭りを眺めている。

「いいじゃないですか虎鉄くん。　僕は好きですよ？　そういえばそちらの主は？」

笑顔を絶やさない細めの男、野乃原　楓が虎鉄という男に言う。

「お嬢ならその辺を走り回っているんじゃないですか？　ウチはそっちほど過保護じゃないんで」

嫌味を込めてそう言う虎鉄に野乃原は軽く笑ってあしらう。　あと、虎鉄が敬語を使っているのを見て、上下関係は野乃原が上のようだ。

「だいたい男が女を誘う祭りってなんですか。　そんな不純異性交遊を後押しする祭りなんて・・・さ・・誘う勇気もない漢(おとこ)達は一体どんな夢を見れば・・・ッッ！！」

（不純異性交遊関係ないですね・・・）

と心の中で突っ込んでみる野乃原。　声に出さないのは彼がこの手の話題に敏感だからだ。

「じゃ、私は坊ちゃんが降られて慰めなきゃいけないのでこれで・・

・」

「あ・・・東宮の坊ちゃんは告白できるのか・・・すごいな」

それに比べて自分は・・・と比べてしまう虎鉄だ。　東宮も頑張っているのだが報われない。　哀れな男である。

一人になった虎鉄はふぅとため息をついた。

「ああ・・・私にもあんな勇気があれば・・・」

自分はあり得ないくらい臆病だ。　しかし言いたいときは言う。

それだけの覚悟はある。　だがその機会すら自分には巡ってこない。

虎鉄は強く願いながらその思いを口にした。

「どこかに転がっていないのか運命ッッ！！」

「キャ！！」

両手を大きく広げた瞬間、虎鉄の背中に軽い衝撃が走る。　相手は虎鉄の体格に負けて軽く床に転んだようだ。

「あ！！　スイマセンーーー」

「いたた・・・」

ズキュゥゥゥウンンン！！

それは一瞬の事だった。　彼にとってはそれを認識するまでにさほ

ど時間は掛からない。　その姿を見た瞬間、体の心臓が跳ねたのだ。

彼はこう思う。

（運命が・・・来たぜぬるりと――）

だがお気づきかと思うだろう。　虎鉄がぶつかった相手はメイド服を着こなしている綾崎　ハヤテであるということに。

「おおおおおおお名前はなんですか御嬢さんッッ！！」

「え！？　な、名前ですか！？」

言葉を発するのが早いか虎鉄はすぐさまハヤテの手を取り、地面から立たせる。

しかし、最初に聞いた言葉が大丈夫ではなく名前を訪ねていたことにハヤテも戸惑った。

「な・・・名前は綾崎ハ・・・！！」

ハヤテは思わず自身の本名を口走ってしまう所だった。　慌ててその一文字で止める。

なんせここは校舎の中、相手は一般の生徒？　相手は完璧に自分を女の子と勘違いしている。

それでハヤテの名前がバレてしまうと後々、いや、ハヤテが生きていくこの先、非常に面倒なことになるのは目に見えている。

「綾崎ハ？　ハ？　なんですか！？」

「だからその、あ・・・あっと・・・・！！　あ・・あ・・・」
ハヤテは自分の脳内のギアを急速に回転させた。　この場で最も効果的で窮地を乗り切るための手段を。
そして一言。
「綾崎　ハーマイオニーです」
「なんか魔法使いみたいな名前ですね」
その場で浮かんだ偽名にまんまと騙される虎鉄。　取り敢えずは乗り切ったという所だろうか。
しかし、彼とこの虎鉄という男の果てしない闘い？　ここから始まるのだった。

一方そのころで。
「はいはーいちょっと止まってくださいよキミ」
白皇学院校門前。　一般人の人々が出入りしているこの校門で呼び止められている少年がいた。
「なんですか。　なんすかなんなんですかぁ？」
呼び止められた少年、木原　竜児はもはやこんなことは慣れたかのような口ぶりだ。
「キミちょっと怪しいよ？　ちょっとここではそういった人は入れ

ないんだよね」

「えーっと・・・まず何を見て判断したのか知らねぇけどさぁ。ちょっと失礼じゃないの？」

木原のその言葉に校門で警備している男は一言。

「いや、あんたちょっと危ない顔しちゃってるじゃん。　中に入ったらなんかドンパチやらかすんでしょなんかさ」

「オイコラ、顔の事を言うな。　人を見かけで判断するんじゃねェ」

毎度の事ながら言われてきている言葉だが、怒りが溜まることには全く耐性が付きそうにない。少しだけ怒気がこもった言い方になった。

「だいたい、俺はちゃんと連れがいるんだよ」

「ほぉ、その連れさんはどこにいるんだ？」

「どこって・・・・アレ？」

さっきまで隣にいた黒羽の姿がない。　急いで辺りを見渡す木原。

しかし周りは人人人、入る人出る人で埋め尽くされている。

（仕事を優先させて中に入ったって考えた方がいいのか？）

うーんと考える。　今回の仕事の内容、ターゲットはこの祭りの中に居るのだ。しかし、黒羽もすぐ中に入って爆発とか火事が起きていない所を見ると、まだドンパチはやらかしていないようである。

そのことに少なからずとも安堵した木原であった。

（取り敢えずは、俺も早く中に入って黒羽を探さないとな・・・）

まずそのためにはこの門番さんをどかさなきゃならないが、腕づくでやるのは簡単だがなんせ人が多いことに迂闊に派手なことはできない。

（どこかに別の道があればな・・・・おお！！）

木原が考えた結果、ある考えが木原の脳裏に浮かんだ。　すぐさまその校門からダッシュで逃げ出した。

全速力で走る木原がやって来たのは壁。　そう、白皇学院を囲っている壁である。

「はっは～　最初からこうすりゃあ良かったんだよ」

自分の考え出した策に酔いしれているのか、笑う姿は不気味だ。ただでさえ怖い顔にさらに拍車がかかっている。

登る・・・といっても、この壁はアスレチックのように凸凹している訳ではない。　それに問題なのはその高さ、どう考えても普通に３０～から４０メートルぐらいまではあるだろう。

「うん、筋トレにもなって素晴らしい」

だが、彼は登るのだ。　まるで手が壁に吸いつくように、お前の手

はドラ〇もんのペタリハンドにでもなってんのかと突っ込んでみたくなるみたいに。

「よっと」

スッと音もなく登り切り、音もなく着地。　最早潜入任務において彼の右に出るものはいないだろう。

「さて・・・黒羽はどこにいったのか」

侵入した場所が林の中だったこともあり、辺りは暗い。　だが遠くを見ると屋台の光が見えてくる。

（まだ行動を起こしたりはしないでくれよ黒羽・・・）

その賑やかな光の場所へ木原は走るのだった。

次回、さらに祭りが加速するッゥ！！

第６５話～またどこかで祭りが始まる～（後書き）

なんとか投稿できました。　この祭り、もはや別の意味でやヴぁい。　呪い以上に危険な奴らが来ている・・・
次回辺りからどんどん黒羽さんたちも話に絡んできます。

では次回！

第６６話～あの日の射的で落とせなかった商品の名前を僕たちはまだ知らない～

射的って商品の下にテープ張ってたりするんですかね？　なんで落ちないんだろう？

第６６話～あの日の射的で落とせなかった商品の名前を僕たちはまだ知らない～

白皇学院ヒナ祭り祭りの会場にて、色んな人々が集まる今夜。
ラーメン屋の店主にメイド執事、人間爆弾執事とほんと厄介な事態に見舞われている中で普通に祭りをエンジョイしてる奴らがいた。

パコッ。

「お！！　当たった！！　当たったでおっちゃん！！」

普通に祭りをエンジョイしているのはワタルと店を回っていた咲夜だった。　咲夜は今、自身が打ち込んだ射的の球が人形を撃ち落としたことにはしゃいでいる。

「はは　上手じゃねーかお嬢ちゃん」

「やっぱり？　ウチ何やらせても天才やねん。　こう見えても前世はスナイパーで成層圏の彼方から狙い撃ってたんや」

その話を聞き、どこの武力介入組織だと心の中で突っ込んだワタル。

「んじゃ可愛いお嬢ちゃんにサービスだ」

「うわーありがとーおっちゃん♪」

麦わら帽子のおっちゃんから落とした景品とは別に、もう一つの人形を手渡しされる咲夜。
それにも満面の笑みを浮かべている。

（なんか・・・スゲェ楽しんでんな）

自分とのテンションを比べても明らかに咲夜が上だ。　あんなにはしゃいでいる咲夜をワタルはここ最近見たことがない。

「へへ～　見てみワタル。　おまけしてもろたで♪　ウチが可愛いから♪　ウチが可愛いからおまけやで」

「そこを強調すんな。　ところで借金執事×2は探さなくていいのかよ」

「ん～」

ワタルが言っているのはメイド服を着たハヤテと人間爆弾になってしまったテルの事だ。

咲夜は両手を後ろに組みながら答えた。

「巻田と国枝に探してもろてるけど、ウチ、この学校の事よー分からんし」

「まぁそうだけどよ・・・」

ワタルもその点では納得している。　咲夜はもともと白皇学院の生徒ではない。

咲夜はもともと白皇学院の生徒になるはずだった。　本来なら、今ここで白皇制服を身にまとい白皇学院の生徒として祭りに参加しているはずである。

ではなぜ咲夜は白皇にいないのか。　その原因は一人の少年にあった。

「でもエエ学校やなぁ白皇ちゅうのは。　おおらかで・・・」

「あ？」

歩きながら立ち並ぶ出店を見渡す咲夜。　何を思ったか一度立ち止まる。

「こんなエエ学校って知っとったらナギらと通うんも・・・悪くなかったかもしれんなぁ・・・」

「・・・・」

その表情を見てワタルは少しばかりか申し訳ない気持ちになる。

そうだ。　本来なら咲夜は白皇の生徒になるはずだった。

しかし、一人の少年の我儘の為に。

一人のバカな少年の恋心の為に。

その特待の席を譲ってしまっている。

取り敢えずこんな低いテンションのまま回られても仕方ないとワタルは財布を取り出した。

「咲夜、綿菓子食いたくねーか綿菓子。　おごってやるよ」

「ホンマか？　欲しい欲しい！」

一応幼馴染で年長の咲夜なのだが、この時見せる咲夜の嬉しがる様子は子供だ。

「あと、あっちで金魚すくいしたくねーか金魚すくい。　おごってやるよ」

「なんや？　なんや？　自分、今日はずいぶん太っ腹やな～！」

「いつも世話になってるからな。　あとここれくらい楽勝だ。　俺はこう見えても店長だぞ？」

しかし、その経営の実態は危うく、今回の財布の中身も伊澄と共に回るために用意したなけなしの金なのだ。

ま、そんなふうに・・・少年少女がお祭りを満喫している頃・・・借金執事（女装の方）は。

「いやしかし・・・御嬢さんにケガがなくてよかった」

「あ・・・はぁ、そうですか？」

見事に女の子だと勘違いされていた。

白皇学院の自販機売場、ハヤテは校舎内でぶつかった虎鉄という男と共にいた。

別に大丈夫だといったのにも関わらず、虎鉄が「飲み物をおごらせてください」と言うので仕方なくと言った所だ。

（いかん・・・まさかこの姿を人に見られるとは・・・まぁ幸い女の子だと思われているのでいいけど・・・男とばれたら）

もしばれたら、彼はこう名付けられることになるだろう。　女装して夜な夜な学校に来る変態と・・・

（だめだ！！　そんな勘違いを許すわけにはいかない！！　少年漫画の主人公として！！　三千院家の執事として！！　ここは無難に乗り切らなくては！！）

身も凍るようなその結末を回避するべく、ハヤテは決意する。　一刻も早くこの場を去らなければならないと。

「じゃあちょっと忙しいんで・・・」

「あッッ！！　待ってくださいッッ！！」

「・・・・何か？」

少しばかり興奮気味に引き留めてくる虎鉄にハヤテは振り返って聞く。　そして虎鉄の口から一言。

「ですから・・・その・・・私と一緒に踊ってくれませんか？」

（絶対嫌です）

顔を赤くした虎鉄を一蹴する台詞をハヤテは心の中で呟いた。　虎

鉄が言うのは向こうでは祭りとばかりに男女が楽しく踊っている。
　それに混じりたいというのだろう。
確かにこの誘い、正式に男女なら受け入れられるだろう。　正式な男と女ならばだ！！
そして何より、この虎鉄という男。　なんか別の意味で危険な感じがする。
ハヤテは心の言葉を口にしないよう。　慎ましく丁寧に返した。
「もう行かなくてはならないんで、踊るなら他の人とどうぞ」
「ああ！！　そんな冷たくあしらわなくても！！　だがそれがいい！！　それがいいったらそれがいい！！」
「どっちなんですか・・・それに別に繰り返して言わなくても・・」
ハヤテがこの男から逃げるか考えていた時、虎鉄はハヤテの肩をガシッと掴んだ。　無理やり虎鉄とハヤテは正面を向く。
「突然なんですけど・・・私はあなたのことがスキなんです！！」
「・・・・・へ？」
何を言われたか分からなかった。　情熱的に告げられたのは愛の告白。
「ちょ！！何を言ってんですか！！　冗談はよしてくださいよ！！」

「冗談でこんな子という訳ないでしょう！！」

いや、あるかもしれない。　たとえば、学校で行っていた罰ゲームで強引に誰でもいい女子に告白させるというトラウマのゲーム。

虎鉄は距離を更に詰めて続けた。

「本気なんですよ私は！！」

「そ・・そんな・・・困ります。　そ・・・そんな事急に言われても・・・」

おい、ハヤテ。　どうして顔が紅潮している。　とナギがその場に居たらとび蹴りが飛んできそうだ。

「僕は・・・・」

と思わず情熱的な虎鉄の視線から逃れるべく、ハヤテが目をそらした時だった。

「わくわく・・・」

「・・・・」

ハヤテの視線の先に居たのはなんて泉。　ハヤテを追いかけて追いかけて、ようやく追いついたのか。

「瀬川さん！！」

「ん？　あれ？　お嬢？」
隣にいた虎鉄もそう呟く。
「あははは～　ごめーん邪魔してー」
まるで展開を楽しむかのような笑顔。　そして笑顔のまま続ける。
「ま、私の事は気にせず・・・続きをッッ」
「では・・・」
「では、じゃなくて！！」
グイッと掴んでいた両手でハヤテの体を引き寄せる。
当然ハヤテは拒否した。
しかしここで泉が一言。
「いや～まさかハヤ太くんにそんな趣味があったとはね～」
「ち！！　違うんですよこれはッッ！！」
顔を真っ赤にしながらハヤテが答えるがここで虎鉄がある疑問に気づく。
「ん？　ハヤ太くん？」
その謎のワードに気付いた虎鉄は泉に聞いた。

「なんですかお嬢。　そのハヤ太くんって・・・この人にはハーマイオニーさんという女の子で・・・」

「男の子だよ♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

即答された虎鉄は処理落ちを起こしたパソコンのように遅れて一言。

その事実を肯定するかのように泉が続ける。

「だからハヤ太くんは男の子なんだって。　綾崎　ハヤテくん。

私のクラスメートで三千院　ナギちゃんの執事さん♪」

「はは・・何言ってんですかお嬢・・・え？　男の子？　こんなに可愛いのに？」

「だったら自分で確かめてみればいいじゃない」

笑顔でそう答えた泉。　虎鉄は自身の手をハヤテの胸に押し当てた。

「ッッッ！！　な、なにをするんですか！！」

例え自分が男だと分かっていてもこの行為は抵抗がある。　ハヤテは虎鉄の腕を払い距離をとった。

「だいたい勝手に勘違いしたのはそっちなんですから！！　僕は・・・！！」

「裏切ったな・・・」

「え？」

ハヤテの弁明をかき消させるほどの低い声がハヤテの耳に聞こえた。

「お前もまた・・・今までの女みたいに・・・私を裏切ったな・・・」

ゾンビのように暗い雰囲気をまとった虎鉄は何やら訳の分からないことを呟いている。

「うちの虎鉄君は全然モテないんだよ♪　超強いけど思い込み激しいし、切れるとヤクザだし、鉄道オタクで時刻表ばかり読んでるから」

「は？」

それを見た泉がいつもの事のように、見慣れた光景のようにハヤテに説明する。　ハヤテは少しばかり分からないでいたがもしそうならこの男は面倒くさい男だ。　色んな意味で。

「お前みたいな奴がいるからなぁ・・・戦争が無くならないんだぁー！！」

「知りませんよそんなの！！」

虎鉄は背中から隠していた竹刀を取り出し、いきなりハヤテに斬りかかる。　ハヤテはすんでの所でかわすとその場を去ろうと走り出した。

「貴様は歪んでいる！！」

「どっちがですかーーー！？」

叫ぶハヤテに虎鉄は竹刀を構えたまま追いかける。　い７つどこでもハヤテの不幸は厄介だ。

○

「・・・・・」

人が混む道の中、ただ一人だけ異質の雰囲気を出している少女がいた。　周りは生徒なら制服、一般客なら私服、または浴衣。

黒いローブ。　それを着こなしていた少女は見事にその集団から抜け出ていて目立っていた。

黒羽。　名前をそう言う。　以前、夜の神社にて伊澄を襲い、救出に来たテルでさえもその少女は退けた。　彼女は木原と共に行動し、同じ目的の上で組んでいる。　仕事仲間と言った方がいいだろう。

「・・・・・」

黒い長髪をなびかせ、黒羽は何かを探すかのように辺りを見渡す。

そう、彼女の狙いはただ一人の人物、ハヤテだ。

「お嬢ちゃん、どうだい？　綿あめなんて買っていかない？」

と言う店員の声にも耳を傾けることなく無視して歩いていく。　無表情でだ。

彼女は自身の任務以外に全く興味を持たない。　テルの一撃を受けた時も、痛がる様子もなく、無表情を貫き通した。　木原からつけられたあだ名はミス・ポーカーフェイス。　もとい鉄仮面。

彼女の特筆すべき所はその強靭な身体能力以外に、伊澄とはまた違った異能の使い手という所だ。

彼女の能力、「黒曜」。

体を自由自在に変化せることができる。　翼を広げれば空を飛べるし、邪魔なものは腕を剣にして切断。

それ以外にもロボットアニメのようなドリルまで出現させて攻撃可能。

戦闘に関しては万能である。　冷酷な彼女は、その力を他人に振るうことをいとわない。　それが彼女、黒羽だ。

「あれ？　あれあれあれ？　もしかして？」

と、黒羽の背後から少女の声が聞こえた。　その声に黒羽が振り返る。

「あー！　やっぱりそうだ！　あの時の！」

この高校の生徒ではないだろう、と彼女の姿を見ればすぐわかる。

黒羽が振り返ったのはその声の主に聞き覚えがあったからだ。

「あ、名前言ってなかったよね？　私の名前は西沢　歩！」

「・・・・・」

そう笑顔で声を掛ける歩に無表情を貫き通す黒羽。　それを見てか、少しばかり歩は戸惑ってしまう。

「あれ？　覚えてないかな？　あの、スーパーで助けてくれた時の子だよね？」

歩は以前、スーパーの前で怖いお兄さんたちに絡まれているところを黒羽に助けてもらっている。　だが、黒羽は歩を助けたという認識はなく、ただ自分の任務に弊害をもたらすだろうと思いお兄さんを追い払ったのだ。

「別に・・・助けてはいない」

低く、冷え切った声で言う黒羽。　大抵の人間ならば、この台詞を聞いた後にはくるっとUターンして逃げ出してしまうだろう。　大抵の人間＝普通の人ならば。

「じゃ・・・」

「ＭＡＴＴＥ！！」

とまた視線を前方に移して進もうとする黒羽の肩が掴まれる。

「こう見えても私は受けた恩は必ず返す人間なの。　取り敢えず私の気が済むまでお礼をさせて欲しいの！」

「・・・・？」

そう聞く黒羽に歩は笑顔で言い放った。

「私と一緒に出店を回る！」

「・・・・」

それはちゃんとお礼になっているのだろうか。　ほとんど歩が楽しむものではないだろうか。

黒羽はそんな笑顔を向ける少女を見て考える。　ここで時間を食う訳にはいかない・・・と。

断る。それだけを言おうとした時だった。

「お、いたいた。　おーい黒羽！」

遠くから響く声に黒羽が反応する。　彼女が反応するときは自分が知っている人間の声に反応するらしい。

「探したぞ。　走りに走り回ってわそこの出店にて物を食い漁り・・・っと、別に遊んでいたわけじゃないんだがな」

しかし、木原の両手にはいかにも先ほどのたこ焼きの箱と水風船がある。　どう見ても遊んでいたとしか考えられない。

「ん？」

と、木原が黒羽の隣にいた歩に視線を合わせる。

「あれ？　何この子、知り合い？」

どうやら木原はあの時スーパーでその場にいたのにも関わらず、歩の事を忘れてしまったらしい。

「・・・・」

と、黙っているようだったので木原も少しばかり考える。

（別にターゲットに関係があるってわけじゃなさそうだな・・・どう見ても普通だし）

やはりッその一言に尽きるッ！　歩の姿を見て、木原は彼女が全く無関係だということを・・・確信ッ！

（このまま黒羽を連れて作戦やるのもいいけど、俺もうちょっと遊びたいし・・・）

任務に忠実で他人を傷つけることをためらわない黒羽と違い、木原はこまめで優しい。　しかし、人相が災いして他人からは怖い目で見られることがある。　それが災いして先ほども検問に引っかかったくらいだ。

（そうだ！）

ここで木原ッ　閃くッ！　勝手な言い分、自分勝手な正義ッ！　彼は閃いたッ　道を切り開く一手ッ！

「ああ、なるほどね。　お前も祭りを楽しみたいという訳か」

「・・・？」

「そうだよな。　いつもいつも仕事ばっかりじゃあ疲れるもんなウン」

「どういうつもり・・・」

腕を組みながら続ける木原に黒羽も疑問に思ったか、その真意を聞く。

木原は手招きで呼び寄せ小さな声で黒羽に耳打ちする。

「ここは名門白皇学院。　お偉いさん方のガキどもが通っている場所だ。　俺たちがここから派手に動けばただじゃすまない。　中には政治家ぐるみの奴もいるはずだ」

つまり、その手の連中から狙われると今後の活動に支障をきたす・・・と木原は言いたいわけだ。

「そこで、お前はできるだけ一般市民に成りすましてここを探る、そんでターゲットを見つけたら人気のないところまで移動、そこからはお前の好きにすればいい・・・だがな」

と木原は静かに一言。

「無関係な人間を巻き込むんじゃねぇぞ・・・」

「あわわわ・・・」

とその台詞を言っていた時の木原の表情を見た歩が脅えだす。　歩から見て、今の木原の顔は怖いお兄さんに匹敵する・・・もしくはそれ以上の迫力だったからだ。

それを聞いた黒羽が返した答えは。

「状況を確認、今回はあなたの作戦に同意」

（けっこうマジだったんだがな・・・）

本気で蹴落としにかかった木原だったが黒羽は動揺するどころか、顔色一つ変えずに返した。

木原としては黒羽が暴走しない方がいい。　無関係な人間を巻き込むのは彼の主義ではない。　黒羽が自分の作戦を承諾してくれたことに感謝しよう。

「という訳でだそこの二フラムで消えそうなキャラよ。　こいつをヨロシクな」

「え！？　ちょっと何がどうなってるのか分からないんだけど！？」

歩はグッと親指を立ててその場を去っていく木原を追いかけようとするが木原は風のように走り去っていった。

「・・・・・」

「・・・・・」

再び二人になったところで沈黙。　そして、その沈黙を破ったのは歩だ。

「あのさ・・・お店、回る？」

先ほどのやり取りを気にしながらも歩は意決して黒羽に再度聞く。
　これで断られたらそれは歩も落ち込んでしまうと心に残りそうだが・・・

「・・・・」

黒羽は何も言わずだが、首を静かに縦に振った。　つまり、ＯＫだということだ。

「よーし！じゃあ取り敢えずあの店から回ろうかー！」

心の中でガッツポーズを決めながら歩は黒羽の手を握り、向かう店を指差しながら意気揚々と駆け出した。

第６６話～あの日の射的で落とせなかった商品の名前を僕たちはまだ知らない～

さぁ６月も終わりになってきたころに最新話更新。　祭りが色々な場所で始まる中、アイツらも動き出しました・・・って黒羽さん、何やってるんすか。

しかし、普通って怖い。　ほんとコワイ！　どんな状況でもどんな相手でも普通に会話できる・・・それが彼女、西沢　歩のスキル・・・なのかもしれません。

そろそろヒナギクの方も行きたいと思います。　もちろん、黒羽さんたちもいきますよ！

では次回！

第67話～虫〇ナーズで虫は死なないらしいよ。　知ってた？～（前書き）

久しぶりの投稿となりました。　待っていたかもしれない皆さん！　ヒナ祭り編もだいぶ進んできました。　どうぞご覧ください！

第６７話～虫〇ナーズで虫は死なないらしいよ。　知ってた？～

「ほう・・・なかなか賑やかではないか」

「ですね～」

祭りの道中をナギとマリアが歩いていた。　ナギも一応白皇学院の生徒である。　義務ではないが一応参加したのだ。

「一応ってなんだ一応って・・・」

「仕方ないじゃないですか、最近ちゃんと学校に行っている描写もなくなっているせいでそう捉えている方も多いんですから」

ナギの不満の声にマリアが根も葉もないことを言う。　まぁ結構休んでいたりするのでそうとらえられても仕方がないのだが。

「それよりもさっきからなんだこいつら、私たちをじろじろと。なんか珍しいものでもあるのか？」

「さぁ・・・？」

二人は分かっていないようである。　ナギとマリアが感じていたのは視線。　それもかなりの人数だ。

理由は簡単である。　ナギたちの周りには黒服の強面なＳＰが５～６人付いているのだ。

護衛とはいえこの人があふれる中人目を引くのは仕方がないことである。

「それより、マリアも白皇通ってたんだろ？　祭りなんて見慣れたものなんじゃないのか？」

「まぁでもお祭りは何度来ても楽しいものですし」

ふーんと言った表情でナギがある店を指差した。

「じゃああの店はどう楽しいのだ？」

「あれはお面屋さんといってお面を買って楽しむんですよ？」

「・・・・」

ナギはその複数あるお面の中から一つだけ手に取り自身の顔に装着。そしてお面を取り、一言。

「マリア・・・これあんまり楽しくない」

「ま・・・まぁそれは人それぞれですし・・・」

ふーっと息を吐くナギにマリアは苦笑いだ。　それにしても全国のお面屋さん、子供にこんなことを言われては涙目である。

しかしナギの問答無用の滅多切りは始まったばかりだ。

「あっちの金魚すくいはどうですか？　あの破れやすい紙ですくうのはコツがあって・・・」

「買えばいいではないか。　なぜわざわざ紙ですくわにゃならんのだ？」

全国の金魚すくい屋、ぶった切られる。

「じゃあ、綿菓子は？」

「砂糖だろアレ？」

全国の綿菓子やの叫びが聞こえる・・・気がする。

「射的・・・」

「あんなおもちゃの銃で落とせてもポッキー辺りが限度だろ。　どうせなら本物の銃で商品はＰＳ３な」

「商品手に入れたいのか壊したいのか、取り合えず日本のお祭りを端から否定しないの」

ナギのお祭り批判に淡々と突っ込みながら誰かがナギの頭に手を置いた。

「ヒ！　ヒナギク！！」

振り返るとそこにはヒナギクがいた。

「まったく・・・少しは純粋に楽しみなさい。　純粋に・・・」

制服姿のヒナギクは腰に手を当てながらため息をつく。

「お前はどうなんだ。　純粋に楽しんでいるのか祭りというものを・・・」

「生徒会長は見回りもしなきゃならないし、あまり気が抜けないのよ」

ナギの問いに平然と答えるヒナギク。　どうやら生徒会役員は今回の祭りの運営、警備もかねて行っているらしい。

三人娘は見事にサボっているが。

「でも珍しいわね。　あなたがこんな人の集まる場所にわざわざ来るなんて」

「なんだ、人を引きこもりみたいに」

「え？　違ったんですか？」

とナギに対してマリアはツッコんだ。

「今日はお前の誕生会をここでやるって聞いたから、わざわざ来てやったのだ！！」

「へ？」

ナギの咄嗟の一言にヒナギクは首をかしげる。　初めて聞く内容だったみたいに。

「あの・・・それ初耳なんだけど・・・」

「ん？　でも唯子さんと生徒会の他の人が・・・ええい！　もうめんどくさい！　お前のプレゼントは今私が渡してやる！！」

考えるのも嫌になったかナギはポケットからなにやら小さな箱をヒナギクに渡した。

「ん？なにこれ？　随分と高そうな時計だけど・・・」

ヒナギクが箱の中を開けると中には時計が入っていた。

（うーむ。　一応ブルガリなんだが・・・そういうのはあまり知らないんだな・・）

どうやらヒナギクは今時のブランド物にはあまり知識はないらしい。そんな事は些細なこととして、ナギは話を進める。

「安物だが・・・気に入らないっていうなら別に受け取らなくてもいいけど・・・」

「え？　いや、そうじゃないわよ！！」

慌てて手を振るヒナギクはニコリと笑って返した。

「ありがとう・・・大事にする」

その笑顔のお礼を見たナギは

「ふん。　どうせすぐに壊すに決まっている」

と鼻で笑いながら呟いた。

「な！！そんなことはないわよ！！」

「分かった分かった。　早くみんなが待ってる時計塔に行ってやれ」

怒るヒナギクをあしらい、ナギはヒナギクを時計塔に行くように促した。

「分かったわよ・・・ナギもちゃんと学校来なさいよ」

そう言ってヒナギクはその場を去って行った。　そして、ヒナギクの姿が見えなくなったところでさきほどのヒナギクに答えるように一言。

「だが断る」

「こらこら」

「ところでマリア。　ハヤテはどうしたのだ？」

「ハヤテくんですか？」

ナギがマリアに今は虎鉄に追われてるであろうハヤテの事を聞く。うーんと考えるマリアだが二人ともハヤテが今どういう状況に居るかまったくわからないので

「さぁ？　伊澄さんと一緒に迷子になっているんじゃないんですか？」

そう答えざるを得なかった。

「まったく・・・しょうがない奴だなハヤテは・・・」

「ハヤテ？」

ナギの呟いた一言に、どこから反応する声があった。

その声に気付いたか、ナギが立ち止まる。

「お前・・・綾崎ハヤテの知り合いか？」

「ん？　まぁハヤテは私の執事だからな・・・」

その瞬間、木の上から黒い影が飛び降りてくる。　物凄いスピードでＳＰの間を抜けるとナギを抱えこんだ。

「ならば来い！！」

「ぬわ！！」

口調からして男だろう。　その男はナギを抱え込むとその一声と共に大きくジャンプした。

「綾崎ハヤテに伝えろ！　執事だったら主を迎えに来いと！　そこで貴様の正体を衆目に晒してくれるわーーーー！！」

「ナギーーーー！！」

マリアが離れていくナギに叫ぶ。　突如現れた男、虎鉄はそう捨て台詞を置いてナギをさらっていったのだ。

「オイオイ、一体何が起こったんだ？」

その一部始終を目撃していた木原はホットドッグを食べていた。
完全に任務放棄状態である。

「あの御嬢さんは攫われグセでもあんのかよ？　しかし世も末だな、ロリコンで誘拐とかよ」

そう一言の後、木原は食べていたホットドッグを一気に口の中に放り込んで飲み込んだ。

「ちょっと追ってみるか」

ほんの興味本位で彼は虎鉄の後を素早く追い始めた。

○

一方その頃ヒナギクは・・・

「お誕生日おめでとうございまーす！！」

「え・・・ちょっとこれは・・・」

白皇の校舎の扉を開けたヒナギクは、カラフルなクラッカーの音で迎えられた。　見渡すところには白皇の生徒、生徒、生徒。　テーブルの上には豪華な料理がずらりと並び、一人の女子高校生を祝うにはやたらと豪華な会場のつくりになっている。

「どうしたヒナ？　今日はヒナの誕生会なんだぞ」

これは一体何が起きているのかと戸惑っているヒナギクに、美希が寄ってきた。

「誕生会って・・・なぜこんな派手に？」

「忘れたのか？」

「え？」

真顔で聞くヒナギクに理沙が答える。

「この前一緒に買い物したとき、誕生会はどうするか聞いたじゃないか。　そしたら・・・」

――――誕生日会？　そうね・・・あまり派手なのは苦手だから・・・家族と静かに食事とかかしら

「・・・と言っていたので、可能な限り派手にしてみました」

「どこまで天邪鬼なの・・・」

と呟くヒナギクだがこうやってみんなから祝福されるのも存外悪くないと感じている。

「まあいいじゃない。　こっちの方が楽しいし」

「あ、お姉ちゃん」

右手に肉を持ち、左手に一升瓶をもった雪路が駆け寄ってくる。

「そうだ。　ヒナ、ちょっと待って・・・はぁひ、ふれへんほ」

「お姉ちゃん、物を食べながら喋らないでよ・・・これって？」

肉を口に含みながら雪路がヒナギクに小さな箱を手渡す。　そして雪路は口の中の肉を飲み込んでこう言った。

「お誕生日、おめでとうヒナ」

「あ、ありがとうお姉ちゃん。　お姉ちゃんからプレゼントなんて、な、何かな・・・コレ？」

ヒナギクは期待に胸を寄せてその箱の中を開けてみることにした。

するとそこには・・・

「・・・・・」

箱の中身を見てヒナギクは固まった。　中には数十枚の紙が入っている。　雪路は親指を立てた。

「肩たたき券よ！　大丈夫。　私肩たたきには自信があるの！」

一瞬でも期待してしまった自分が恥ずかしい。　と思ったヒナギクであった。

「しかしいきなりこんなパーティして大丈夫なの？」

「大丈夫だ。　問題ない・・・政治家の娘だからな」
美希は憮然と返す。　政治家の家は何かと毎日が大変なのだろう。
「まぁ・・・問題なのは・・・」
と、ここで美希が立ち止まる。
「東宮の坊ちゃんみたいに・・・一方的な好意ならいつものことで良かったんだけど・・・万が一、二人きりでパーティとかになったら・・・」
「・・・？」
発している美希の言葉の意味を読み取れないでいるヒナギク。　やがて美希が話題を変えた。
「そういえばハヤ太くんからのプレゼントは？」
「え？　いや、そんなのは全然・・・」
と答えるヒナギクだが、ここであることを思い出す。　あの手紙だ。
（そういえば・・・誕生日の日に素敵なプレゼントをくれるって言ってくれたわね・・・いつだったか）
そして更に渡された内容の意味をヒナギクなりに詮索してみる。

（ん？　だったらこの手紙・・・もしかして遠まわしに二人きりになりたいという手紙なのかしら？）

つまり、あの文面をヒナギクはこう捉えてたのだ。

実は頼みがあります。　勝負してほしいんです→恋愛的な意味で

できれば2人の方がいいと思います。場所は時計塔最上階です→さりげなく二人の空間づくり

ま、勝つのは僕ですけどね→自分が告白して勝つという自信

武器は持参でお願いします。その方が平等ですからね……ま、勝つのは僕ですけどね→いざとなったら力ずく

胸の大きさが戦力の決定的差ではないという言葉がありますけど……ま、勝つのは僕ですけどね→ここで念押しして自分が勝つということをアピール

夜九時、楽しみにしてますよ。

最後に一応言っておきますけど、勝つのは僕ですけどね→最終的に自分が勝ち、ヒナギクがハヤテのものになるという絶対勝利宣言

（え？　や・・・そんな・・え？　え？　そ・・・そうだったらどうしよう・・・そ、そんなの・・・）

自然と顔が紅くなり、自身の体温が上昇していることに気付いていた。

はい、どう考えても行き過ぎた妄想です。　ありがとうございました。

そんな妄想に動揺しているヒナギクの背後に忍びよる影。

「ヒィナギククゥゥゥゥウンン！」

「ニャアーーーー！！」

突如、ヒナギクの背後に思いっきり抱き着く人物がいた。　いったいだれか？　答えは少しだけ考えればおのずと簡単である。

「ゆ、唯子さん？」

「はっは～　誕生日おめでとうヒナギクくん」

スッと離れた唯子はビシィとポーズを決める。　その立ち方はまるでジ〇ジョのようだ。

「いやぁ出店も全部回りきったことだし、君の誕生日をこうして祝いにきてみたのだ。　そしたらどうか？　こんなパーティーが開かれているではないか」

笑いながら唯子はお面を被りながら手に持っていた水風船で遊ぶ。

腕には救ったであろう金魚の袋、綿あめの袋、その他もろもろ。

「見事にお祭りを満喫していますね唯子さん・・・」

「当たり前だ。　こんなに楽しいこと、私が見逃すわけないだろう・・・と」

何かを思い出したか、唯子がひょいとヒナギクに箱を手渡した。

「フフ・・・可愛い後輩へのプレゼントだ。　ありがたく受け取ってくれ」

「あ、ありがとうございます」

礼を言いながら受け取ったヒナギクはさっそく箱の中を確かめ始める。　雪路と違ってこの人のプレゼントは期待してみてもいいかもしれない。

なんせわざわざラッピングまで施されているのだ。　自然とヒナギクに笑みと期待感がよみがえる。

「これは・・・」

と箱を開けた瞬間、目に入ってきたソレを見てヒナギクは目を一回、二回・・・と瞬きした。

中に入っていたのは白くて丸み帯びた形二つの物体・・・そう、アレだ。

「・・・唯子さん、まさかこれって・・・」

箱をワナワナ震わせたヒナギクの反応を楽しむかのように唯子は言い放った。

「そうッ！　豊胸パアァァァァァアッッ――――」

「わあああああああああああ！！」

手遅れかもしれないが、言い切る前にとヒナギクが唯子の口を塞いだ。

「なんでこんなものをプレゼントするんですかよりによって！！」

「ん？　なんだ？　無いものがなくて困っているのではないかと思ってな・・・」

この笑いかた、明らかにワザとである。　ヒナギクは顔を赤らめていた。

「べ、別に困ってなんかいません！」

「そうなのか？　私は困っているぞ？　動くときに特にな。　むしろ邪魔だと感じている」

とヒナギクより主張の強い胸を見せつけるように胸を張る唯子。

「むむむ・・・・」

「おっと。　そんな顔をしないでくれたまえ。　これでは私が悪者みたいじゃないか」

「十分悪者です！！」

とヒナギクが目を怒らせたとき、扉が再びドンッ！　と開いた。

「奈津美ィィィ！！　どこだぁぁぁ！！！！」

目を真っ赤にさせた千里が突如乱入してきたのである。

千里は堂々と叫びながら入ってくるとそのままステージに上り詰めて叫んだ。

「奈津美ィィィ！　貴様から受けた屈辱の数々！　ここで晴らさせてくれるぞ！　大人しく出てこい！」

拳を握りしめながら千里は叫ぶ。　どうやら相当ひどい目にあったようだ。

「フン・・・そう言われてわざわざ出てくるアホが居ると思うかバカめ・・・さらばだヒナギクくん」

と唯子が颯爽とその場を後にしようとしたその時だった。

「千里くーん！　ここに唯子さんがいるわよー！」

「なっ！」

大きく手を上げたヒナギクはその場で千里に場所を伝えた。　それを見た唯子は驚くばかりである。

「さっきの仕返しですよ唯子先輩」

「そんな、君はそんなことをする人間じゃなかった筈だ！」

「自業自得ですよ！」

「オイ貴様ァ！　もう逃げる事は出来んぞ！　大人しくここに来い！」

とわざわざマイクを使って叫ぶ千里に、唯子は仕方ないといった表情でステージへと上がる。

そして二人が対峙した。

会場の生徒たちもその成り行きを静かに見守っている。

最初に言葉を発したのは唯子だ。

「・・・・私、なにかしたか？」

「いまさらとぼけても無駄だぞ！　この俺の目を見ろ！」

と千里が怒りの形相で自身の真っ赤になった目を指差す。　唯子はうーんと考えながら

「結膜炎？」

と答えた。

「違うッ！　貴様に辛子とさまざまな香辛料のエキスを直接目にか

けられたからだァァァ！」

「なるほど。　だからあんなに目が赤いのね」

と遠めだがソレを聞いたヒナギクはポンッと手を叩いて納得していた。

「ほかにもあるだろうが！　激辛のリンゴ飴を食わせたり、挙句の果てには納豆まで投げつけてくるとは！」

「まぁ・・・そんなこともあったな～」

まるで思い出話のような唯子の口調に千里が更にキレた。

「この俺様にこれほどの無礼！　愚行！　反逆にもほどがある！　この場を借りて土下座しろ！」

ざわ・・・ざわ・・・と会場がざわめきだす。　このままでは千里が暴れだすのも時間の問題だ。　何故なら、あの唯子がそう簡単にことに応じる訳がないからである。

そうなれば後はリアルファイト、その結末は誰もが予想できた。

「わかった」

ざわ・・・ざわ・・その一言に一同がさらにざわついた。

しかし、唯子は手を差し出して制止するように一言。

「ただし条件がある」

口調を完全に切り替えた唯子は憮然と言い放った。

「お前、歌え」

「な・・・ッッ」

千里はその提案に激しく動揺した。

「乙葉家の英才教育には確実に歌の教育もあるはずだ。　ましてや貴様は世界に名を轟かせるキングなのだろう？　それで私を感動させてみろ。　無論ここの生徒たちもだ」

「貴様・・・本気で言っているのか？」

「本気も何も・・・それが出来たら土下座でもなんでもしてやろう。何だったらアツアツの鉄板に座って土下座する『焼土下座』でもいい」

と自信ありげに、というかその自身はどこから生まれてくるのかと疑いたくなるくらいの表情だ。

「ヌゥ・・・」

堂々と出された提案に動揺を隠せない千里。　その様子を見てか、唯子が再度聞いた。

「どうした？　まさか今更になって歌うのが怖くなったというのではあるまいな王様？」

「ッッ！！　いいだろう！！」

普通ならあり得ない提案だろう。　明らかに負は唯子にあるのだ。
　このような提案は明らかに通らない。　むしろあり得ない。
だが、唯子は彼のキングというそのプライドを利用した。　そうすることによりこの提案を通すことに成功したのである。

「ようは・・・」

「底なしのアホだったって訳だ」

唯子の話術的な効果もあるかもしれないが何より、千里という男はかなりのアホなのである。

ステージではマイクを手に持った千里が生徒に向けて叫んだ。

「貴様らに聞かせてやる！　大地と銀河を突き動かすこの俺の歌を・・・俺の歌を聞けェェェェ！！」

○

「ひゃっほーい！　こんなにおいしいモグッ　食べ物が食べられるなんて・・・幸せなんじゃないかな！」

場所は変わり外にいる人たちに変更。　道端で物凄い幸せそうな顔で出店の食べ物を片っ端から食べているのは西沢　歩だ。

「・・・・・」

一方でその後ろにて沈黙を守り続ける少女が居ることを忘れてはならない。　黒羽だ。

「黒羽ちゃん黒羽ちゃん！　さっきから黙ってばかりだけどコレ食べない！？」

と笑顔で差し出したのはリンゴ飴。　細い棒の先には見事な赤いリンゴがその輝きを放っている。

「・・・どうも」

静かながら礼を忘れない黒羽。　歩と違ってそのテンションは真逆だが、歩はまったくそんなことを気にしない。　それぐらいに超ハイテンションなのである。

「祭りってのは楽しむのだよ黒羽ちゃん！　身も心も江戸の風情に任せてこの体が燃え尽きるまで楽しむの！」

と言いながら歩は笑いながら仮面ライダーのお面を黒羽に被せる。
　黒羽も嫌がるという仕草を見せる訳でもなく、されるがままにお面を被った。

よく見ると、黒羽には歩と行動する前よりも所持品の数が若干増えていた。　リンゴ飴、金魚すくいの金魚、綿あめの袋、景品、そしてお面。

「それにしても黒羽ちゃん、射的と金魚すくい凄かったね！　なんで一度に六匹も金魚とれたの？　お店の人あまりにビックリして顎

外れてたよ？」

「・・・全て計算した」

と一言。　木原ならそっか。と一言で決着がつく。だが・・・

「へぇ～計算したの！？　頭いいよ黒羽ちゃん！　私なんて数学苦手だからそういうの出来ないよ！」

と物凄い興味深く聞いてくる。

「あ、そうだ。　ヒナさんにプレゼント渡してこないと・・・ちょっと待っててね黒羽ちゃん！」

歩は慌てて思い出したかのように周りをキョロキョロしながら走り出す。　途中、道を訪ねてたりとしながら校舎の方に向かっていった。

「・・・・・」

黒羽は歩の姿が見えなくなると、被っていたお面を側面へと移動させた。

トサッ。

と軽い音とともに黒羽の手から何かが落ちる。　落ちたのは金魚の入った袋、そして綿あめの袋やリンゴ飴。

否。　黒羽は落としたのではない。　手放したのだ。　自身の任務の妨げになると思ったのだろう。

作戦をともにしていた歩という少女はもういない。　ならば、自分の判断で作戦を行う。　そう考えた黒羽だった。

ピチャピチャ。　と袋の中の金魚が抜けていく水に慌てて袋の中で跳ねる。

「・・・・」

そんな金魚に目をくれながらも冷ややかな瞳を向けたのはものの数秒。　何事もなかったかのように歩きだした。

その時である。

「待てよ」

黒羽は不意に振り返った。　その声が黒羽が知っていた人物だったからである。

「・・・いくらジミーがくれたものだからってお前、食べ物とか粗末にしちゃいけねぇよ」

振り返るとそこには少年がいた。　少年は地面に落ちていた金魚の袋を含めた祭り一式の品を拾い上げる。

「また会ったな・・・」

「・・・・・」

リンゴ飴を勝手に口にふくんだ男、それは善立　テルであった。

第67話～虫〇ナーズで虫は死なないらしいよ。　知ってた？～（後書き）

ついに対峙してしまいました。　この組み合わせ、再びッッ。　次回はついにバトルが始まるか！？

皆さん、お楽しみください！

では！

第６８話～喧嘩は祭りの華（仮）～（前書き）

今回はいろいろとあったため短めの内容です。　タイトルの真の意味は物語が進めば分かると思います。

第６８話～喧嘩は祭りの華（仮）～

様々なイベントが行われている白皇学院ヒナ祭り祭り。
男女が燃え盛るようなテンションで祭りを盛り上げる中、二人の人物がついに対峙した。
黒衣の少女と黒羽と三千院家の執事、善立　テル。
この二人の再開はこの祭りをどう変えるか。
血の舞い散る凶事へと変わってしまうのか・・・

第６８話～喧嘩は祭りの花（仮）～

「久しぶりだなオイ・・・こんなところで劇的な再会しちゃうなんて、これって運命なのか・・・？」

「・・・・・」

ニタァと浮かべた笑いに黒羽は視線をテルから外すことなく対峙を止めない。

「なんて言うと思ったかよ」

だが、テルはふざけた笑いを止めていつもより少し険しめの表情へと戻る。

「お前が居るってことは、当然仲間のアイツもいるんだよな？　」

「・・・・」

「返答は無し・・・か。　だが大抵の狙いは分かるぜ、どうせまたハヤテだろう」

まるで分かっていたかのようにテルは会話を進めた。

「もしかてお前もハヤテのコレか？」

真剣な顔でテルは自身の小指を立てる。　黒羽は首を傾げながら呟いた。

「貴方のその小指は一体何を表しているのかしら」

どうやら黒羽にはこの手の話題は通用しないようだ。　テルは少しだけホッとしたようである。もし本当にこいつがハヤテの追いかけならテルはハヤテを締める必要がるのだ。

「流石にまだ敵にフラグを立ててはいないか・・・」

「私は綾崎　ハヤテを探している。　前回同様、私の邪魔をするというのなら――」

黒羽の右腕が妖しく黒く光るとその袖の先から黒い刃が伸びてきた。

（オイオイ！　こんな場所でおっぱじめようってのかよッッ！！）

咄嗟にテルは黒羽の戦闘行為に対して身構える。　まだ人が大勢い

る中、こんなところで戦闘なんてあったらこの会場はパニックになるのは目に見えていた。

（やむを得ないか・・・）

とテルが武器をポケットに手を突っ込もうとしたその瞬間である。

「おー！　テル、こんなところでなにしてるんや？」

突如聞きなれた関西弁が耳に飛び込んできたかと思へば、お面やら金魚やらの祭りグッズを大量に抱えた・・・ワタルと、何も持っていない咲夜だった。

「はぁ、はぁ・・咲夜、もう十分楽しんだろ・・俺にばっかり荷物を持たすな！」

ヘロヘロになりながらもワタルはその大量の祭りグッズを持ちながら咲夜に不満を言う。

ワタルの顔は全く見えなかった。　その両手にはワタルの顔が隠れるのに余裕なほどの大きな箱があったのである。

「ふふ・・・ワタル、夜のお祭りはこれからなんやで？　そんなことで息を荒くしているんか？　だらしないな～」

（あ～、ワタルってばなんて不幸な・・・）

ここまで来ると咲夜にこき使われるワタルを見ていると同情をしたくなる場面だ。

「ん・・・？　アレ、もしかしてこの人・・・」

急に咲夜の表情が変わる。　さっきまでのギャグモードが嘘だったかのように顔を微妙に歪ませた。

――その瞬間。

「――ッッ！！」

咲夜の顔を見るや、黒羽は即座に刃を構えてゆっくりと咲夜へと歩み寄ろうとする。

咲夜も恐怖で顔を変えてすぐさま刃を避けようとするが、その刃は途中で阻まれた。

そのテルの左手によって。

「オイオイ・・・問答無用だな、前に見た人間は情報を漏らされるのが怖いから口封じか？」

ポタ・・・。

とテルの素手で押さえられている黒い刃を伝って赤い液体が地面へと零れ落ちる。

「テル・・・アンタ」

「そこまでだ咲夜・・・これ以上はこの領域に踏み込むには、それ相応の覚悟がいるぜ？」

「あ？　咲夜？　おいなんで足止めてんだよ。　何か起きてんのかよ？」

咲夜のすぐ後ろでは状況を把握できていないワタルがいた。

「ここは俺に任せてくれ。　大丈夫だ、私にいい考えがある」

「どこのサイバ〇ロン戦士の司令官やお前は！」

「心配すんなって、別に伊澄も呼ばなくていいからお前らは黙ってこの祭りを楽しんで来いよ。　二人とも意外に似合ってるんだぜ？」

「こ、こらぁ！茶化してる場合か！？」

状況が状況だけに咲夜はいつもと雰囲気が違う。　だが、テルはその時でもいつもと変わらないその姿は不安を払ってくれていた。。

ましてやこの男の事だ。なにかしら策があるのだろう。　どこか抜けていてもしっかり約束を果たすと信じていると咲夜は悟った。

「もうウチは知らんで！？　爆発でもなんでもしてまえばええんや！！」

「ハッ！　その設定忘れてた！！　オイコラ！なんで思い出させるんだよ！　こっちは漸く忘れかけてたところなのによぉ！」

そんなことを叫びながら咲夜に訴えるが咲夜は顔を少しだけ赤くしながらワタルを引き連れてその場を去って行った。

二人の姿が見えなくなってから、意外にも黒羽が呟いた。

「・・・なぜ」

「あん？」

「・・・なぜわざわざ二人を逃がすようなことを。　あの少女の力を借りて、私と戦うことも出来る筈」

戦術的思考において、彼女黒羽の能力はその手の類のものでなければ対抗するすべはない。　だが、その伊澄とのつながりがある咲夜を逃して、しかも増援を要求しないその行動に、黒羽は理解ができなかった。

「・・・老若男女、日ごろの疲れも忘れて楽しんでいる華やかな舞台に刃は・・・無粋っていうんだよ」

その台詞と共にテルは黒羽を睨み付ける。　そうすると黒羽は握られたその刃を腕の奥へと仕舞った。

「どうせなら誰も居なくなった時間帯にやろうぜ・・・一般人を巻き込むなんて真似は、俺がさせねぇ」

――別に無関係な奴を巻き込む必要はないだろ！！

「・・・同じこと言う」

「あ？」

「彼も、あなたと同じことを言った」

黒羽が思い出したのは、以前木原に言われた言葉だ。　無関係な人間を巻き込むことを極端に嫌う木原。　木原とテルは似た言葉を発していた。

「それは珍しいな。　俺と同意見の奴なんて、同じ匂いがしやがる・・・俺と同じくて、偏差値が低いのかもな」

フッと小さく笑うとテルはポケットから1枚のハンカチを取り出し、その傷ついた左手に巻きつけた。

ギュッと縛って止血。

「だがどうしてもお前が我慢できず勝負がしたいというのなら・・・一つだけ手がある」

「・・・何？」

「それはだな・・・」

○

一方その頃・・・。

「まずったな・・・まさか崖から落ちるなんて・・」

頭を摩りながら体を起こすのは、まぎれもなくハヤテだった。

少し前に、彼は虎鉄という変態に追われていた。　しつこく警察に通報してしまいたかったが相手も変態なら現在の自分も変態のよう

に女装をしているため通報返しを食らう場合があったためだ。
そして運よく彼を巻くことができたのは、たまたま崖の下に転落したからだろう。　ラッキーだ。
「これでどうにかあの人も巻くことができたし良か・・・・うわああああああああ！！」
言葉を言い切り安堵するのもつかの間、彼は自分の姿を見て驚いた。
何故だろうか、一体なんの力が働いて彼はこんな姿になってしまったというのか・・・。
先ほどのメイド服姿にウサギの耳とふりふりのミニスカートに変わっておりさらに恥ずかしい仕様になっている。
（どうしよう・・・・服を隠すマントもなくしちゃったし・・・・こんな・・ミニスカなんて・・・・）
顔を恥ずかしさで赤くするハヤテ。　災難に災難が重なった結果、超ど級の災難がやって来た。
「一体どうすれば・・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・・」
ハヤテが悩んでいた時、近くで荒い息が聞こえてきた。　その聞こえる方に視線を向けると・・・・
浮いた小さな人形がそこに居た。

ドゴッ！

「ぐはっ！」

と人形の頭部をすかさず殴るハヤテ。　殴られた人形はよろよろと浮かび上がった。

「ななななんなんですかあなたは一体！？」

「この時代の奴はパンチを食らわしてから人に名前を聞くのか？」

「え？」

その人形からはオッサンじみた声が感じるのを聞いたハヤテは落ち着いて人形の言葉を聞く。

「そう、いかにも！　お前に散々女装をさせているヒナ人形の呪い、人形師のぜぺっとじゃ！！」

ガシッ！

「むぐっ！？」

そう言い切ったのを皮切りにぜぺっとの顔がハヤテの手に掴まれる。

「そうですか・・・あなたを絞め殺せばこのバカな呪いも解けると・・・」

ミシミシ・・・と人形に加わる握力が強くなる。

「ぬぉおおお待て待てーーーー！！」

「誰が待つか！　ヒィイイイイイトォォォ！　エーーーーーーーーン・・・」

ハヤテが某ガ〇ダムの真似でぜぺっとを握りつぶそうとした瞬間であった。

ピロロロロロ！！

突如ハヤテの携帯が鳴る。　それを聞いたぜぺっとは慌てた様子でハヤテに尋ねた。

「ほれ！！　電話じゃ。　電話が鳴っておるぞ！！」

と苦し紛れにぜぺっとは言う。　ハヤテも出ないわけにはいかないのでぜぺっと片手に携帯電話を開いた。

（マリアさんからだ・・・）

「はいもしもし・・・」

この電話でハヤテはナギが誘拐されたことを知る。

第６８話～喧嘩は祭りの華（仮）～（後書き）

短ッ！　と感じた人もいたかと思いましたが次から色々始めるなら
ここらで区切った方がいいと思ったので・・・さてテル君が黒羽に
持ちかけた提案とは・・・さぁ次回からオリジナルが増えてきます。

では次回！

第６９話～叩いて被ってジャンケンポン！～（前書き）

もはやタイトルでネタバレの感じ。　そしてその内容も・・・。

第６９話～叩いて被ってジャンケンポン！～

けんか・・・それは男に限らず、女でも、人外でも行われる争い。
ケンカ・・・道中歩く男たちのストリートファイト。
喧嘩・・・昔の人はよく言いました。　喧嘩は祭りの華だと。

「さぁ張った張った！」
「今日もこの祭りでスゲェー喧嘩が始まるって！？」
「しかも組み合わせはなんと男と女！？」
「不公平じゃねェのかい！？」
「ところがどっこい！　その女がべらんめぇにつぇのよ！！」
「なんでも女と対戦した奴が一発でＫＯにされちまったんだとさ！」
「ホントかい！？　コイツは祭りらしくなってきたじゃねェか！！」

白皇学院の敷地内では、一組の男女を囲んで人だかりができていた。
何やら、ワイワイ騒いでいる。
「む？　辰也殿、なにやら辺りがざわついているようであるが・・・」

「そうだなバルト・・・江戸に喧嘩は祭りの華とはよく言ったもんだ。　見物してこうじゃねェか」

もとい、出店を回っていたバルトと辰也。　喧嘩の噂を聞きつけた二人もその人だかりの中に加わっていた。

「どれどれ・・・どこのどいつだ・・」

と辰也が身を乗り出してその中心の人物を見て、彼は口をあんぐりと開けた。
何故ならそこにはテルが黒羽と向かい合っていたからである。

「さぁてと・・・そろそろ始めようじゃねェか」

「・・・・」

テルが静かに動かない黒羽にとニヤリと笑いながら言い放った。

「俺たちの喧嘩・・・叩いて被ってジャンケンポンを！！」

第６９話～叩いて被ってジャンケンポン～

『叩いて被ってジャンケンポン！』とは？
用意するもの・ピコピコハンマー、ヘルメット。

？ジャンケン
←

勝った方がハンマーを持って殴りかかり→ヘルメットで防がれたらセーフで再びジャンケン
←
ヒットすれば勝ち

と、祭りには全く持って関係ない遊びである。

「喧嘩、関係ねぇーじゃん！！」

と遠くで辰也の突っ込みが冴える。

「お、なんだジジィ、今回は見物人かよ。　ま、見ててくれよ俺たちの意地と誇りを賭けた闘いをな」

「スンゲーキメ顔使ってるとこ悪いけどやってることはただの遊びだからな！？」

「むぅ・・・これが日本のＫＥＮＫＡというものか・・・興味深い・・・」

バルトはバルトでコレが日本文化だと勘違いしていた。

この全く持っておふざけとしか言いようがない遊びに、テルは一つの光明を見出していた。

（奴は根っからの戦闘好きだ・・・当然、勝利に対する使命も、その覚悟も半端じゃない・・・）

普通に戦えば血の流れるのは防げない。　だが、このピコピコハンマーはプラスティックであり血はおろか、殺せても精々ゴキブリ程度だろう。

いや、ゴキブリだって殺せないかもしれない。

とにかく、自身の安全も考慮したクリーンな喧嘩をテルは望んでいた。

「私がこれをする必要があるの？」

黒羽が無表情でテルに聞く。　テルは冷静に返した。

「お前が俺とヤリ合うには絶好の場だ。　それにお前は・・・俺が邪魔で仕方ない。　そうだろ？」

「・・・・」

「来いよバイオレンス女、意地もプライドも捨ててかかって来い」

まるでコ〇ンドーの某少佐の台詞を吐くテル。　黒羽は用意されたハンマーとヘルメットを見つめ、一言。

「わかった」

戦闘受諾。　その言葉を聞いた瞬間、周りから歓喜の声が響き渡った。

すると目の前に審判らしき男が現れ、マイクを持ってしゃべりだした。

「では、ルールは簡単。　一発勝負ではなく、誰もが楽しめる三本先取です」

手際良く説明を終えると審判はマイクを握っている手の小指を絶たせながら高らかに叫んだ。

「それでは始めましょう！　叩いてェ！　被ってェ！　ジャンケン・・・」

テルと黒羽が右手を構えた。　そして・・・

「ポン！」

出された手はチョキとパーだ。

黒羽がチョキでテルがパーである。

「おっとセーフ！」

とすかさずテルはヘルメットに手を伸ばし、完璧ともいえる速さでヘルメットを被った。

「なんと！　テル殿のあの身のこなし、まるで水が流れるごとくッ！」

「お前はなにのんきに解説なんてしてんだよ！外人だから日本の文化に疎いはずだろうが！！」

意気揚々と解説をするバルトに対して辰也が素早くツッコむ。

（さぁこの超絶鉄壁にお前は勝てるかな・・・ってアレ？）

ヘルメットの下で笑っていたテルが顔を上げると、そこには信じられない光景があった。

「・・・・」

黒羽がピコピコハンマーを上へと振りかざしていたのだった。

「オイちょっと待て！　よく見ろこれを！　セーフだセーフ！　攻撃しても意味ねぇーから！」

とテルはヘルメットを指差しながら黒羽に伝えるがその黒羽のピコピコハンマーを握る手がギリッ！　と力強く握られるのを見るとどうやら問答無用らしい。

そいて次の瞬間。

ドゴッ！

まさかのピコッという弾んだ音ではなく、大衆の耳に聞こえたのは豪快な破砕音。　ピコピコハンマーはへし折れながら、テルのヘルメットを粉々に砕いていた。

そして当のテルは見事に首だけ地面に突っ込んでいるという実に奇怪な光景だった。

「ウオオオオオオオオオ！！　やりやがった！！」

「ま、まさかの相手粉砕！」

「アイツ気絶してるぞ！」

「こいつはスゲェ！　最高の祭りだぜ！　ヒュー！」

「ＦＨＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！」

その場で見ていた観客たちも総立ち。　お祭り気分で楽しんでいた彼らは事の重大性を知らないため、この光景を見て驚きを隠せない。

「オォオイ！　こんなのルール全然関係ねぇじゃん！　つーかあのお嬢ちゃん何者だよォォォ！！」

「むぅ・・・これで祭りの女王が今宵誕生したという訳ですな・・・・くわばらくわばら・・」

「お前はさっきからふざけてんじゃねぇぇぇ！！」

その場は新しく生まれた伝説を前に驚愕の渦に包まれていた。　辰也とバルトが変な漫才をしながら、テルは一撃で埋まったまま。

「・・・・」

その輪の中から黒羽はひっそりと抜け出していた。　特に何も変わった様子はないといった涼しい様子で。

○

一方その頃、誘拐されたナギお嬢様はというと・・・

「だーかーら・・・何度言わせれば気が済むのだァァァ！」

ここ、人気のない物置にナギは居た。　そのナギは何やらふてぶてしい顔でなにやら怒鳴っている。

「私がコーヒーと言ったらカフェラテを持ってくるのだ！　お前はブラックが飲めない主人に衆目の前でたっぷり砂糖とミルクの入れるという屈辱を主人に与えるのか！！」

「で、でも・・・！」

「でもじゃない！　今までどんな教育を受けてきたのだ！？　貴様それでも執事なのか！？」

戸惑いながらも呟いたその言葉でさえ、ナギによってさえぎられる。

変態こと、虎鉄はこの状況にとてもイライラしていた。

「いいか！？　主がグミを所望したら何も言わずにまず果〇グミグレープ味、そして楽しさいっぱいもぎゅもぎゅフルーツ、お口直しにはシゲ〇ックスをポケットに忍ばせておくのが基本だ！」

「ば、ばか！　そこまで気が回れるかよ！　しかもお前、人質とい

う手前、そんなにダメだしされる覚えはない！！」
と怒りを爆発させ、ナギに自身の立場を自覚させようとする虎鉄。
しかしナギは腕を組みながら言い放った。
「ハヤテなら完璧にできるし、私は自分を誘拐したすべての誘拐犯にダメ出しをしている」
（なんて嫌な人質なんだ・・・）
（アレ・・・？　なんかデジャヴを感じる・・・）
同時に天井にて張り付いていた木原も前回のナギと自分との扱いに似たのを思い出していた。
キリッと言い切るナギに虎鉄は一言も言い返すことができなかった。
それを見てかナギが聞いてくる。
「・・・ところでお前、なんでハヤテ呼び出そうと思ったのだ？」
「・・・お前に言われても分からんだろうが、持てない私が精一杯の勇気を出してアイツに告白したんだ・・・」
と虎鉄は少し声のトーンを落としながら続ける。
「一目ぼれだったんだ・・・本当に・・・可愛い女の子だと思って・・・でもアイツは・・・私の気持ちを・・本当の気持ちを裏切ったんだ！！」

「ふむ・・・」

「だからこそ私はあいつを捕まえてギッタンギタに・・・」

「あーもういい、だいたい分かった・・・まったく、随分と薄っぺらい愛だな・・」

途中で台詞をさえぎったナギの発言は虎鉄の怒りをさらに上昇させる。

「な、なにぃ!?」

「だってそうだろ？　所詮それは形だけが好きだ問うことだけ・・・心はどこにもないではないか」

ナギは怯まない。　そして決定的なことを虎鉄に言い放つ。

「もし今度ハヤテがなんかの原因だ真の女になってみろ！　そうなったらお前は掌返してまたハヤテの前で愛をささやくのか!?」

（あれ・・・三千院　ナギって年齢いくつだっけ・・・？）

天井に張り付いている木原唖然としたままその光景を眺めることしかできない。

「いいかよく聞けこの愚か者メガ！　だから貴様はモ　テ　な　いの　だッッ!!!」

ズキュウウウウウウゥゥゥウン!!

（たしかに・・・そうだッ）

虎鉄の中で・・・何かが弾けた。

（俺は愛という言葉を・・全く理解していなかった・・・海よりも深く、空よりも広く澄み渡るこの言葉・・・それが愛・・ッッ）

「ありがとう・・・目が覚めたよ」

「へ？」

ナギも突然の虎鉄の豹変ぶりに驚く。　先ほどのような荒んだ瞳はどこへやら。　今はまるで星屑をちりばめたような気持ち悪いぐらいの輝きを放っている。

バタンッ！

「お嬢さま！！」

と、扉が開け放たれ、外からハヤテが入ってきた。

「ふん、ハヤテ。　来るなと言っても来るとは・・・しょうがない奴め・・」

フフ・・・とナギは軽く笑った。　そしてハヤテは虎鉄と向き合う。

「虎鉄さん！　おじゅ様に何かしたら・・・そのときは絶対に――！！」

「待っていたぞ綾崎！！」

「へ？」

突然の虎鉄の豹変ぶりにはさすがのハヤテも驚いていた。

「たしかにその通りだ・・・男と分かった途端逆上して、本当に愚かな男だ・・・だが今分かった！　Ａ型の私には、センチメンタリズムを感じられずにはいられない」

いきなりバッと両手を広げて、虎鉄はさらに続ける。

「初めて見た時から感じていた・・・やはりお前と私は、運命の赤い糸で結ばれていたようだ！」

「ちょ、ちょっとどうしたんですかあの人？」

「わからん・・・分かっているというのは、アイツがどうしようもなく残念な人間になってしまったということだけだ」

「ｚｚｚｚ・・・」

困惑しつつあるハヤテに呆れ顔のナギ。　天井はもう眠りたくてしょうがない男、木原が待機していた。　花提灯たれながら・・・

「だからこそ言わせてくれ・・・この胸の異常な高鳴り・・・まさしく、『愛』だ！」

「あ、愛！？」

物凄い台詞を平然と言った虎鉄は一気にハヤテに歩み寄り、手をガシッと握る。

「同性婚が認められているオランダに移住して・・・結婚してくれ綾崎ィィィイ！！」

ブチンッ！

「ばぁかかお前はァァァァァ！！」

「ぐはぁぁぁっ！！」

ドゴッゥ！

と、キックボクサーも認めざるを得ない見事なミドルキックが虎鉄の腹部に炸裂した。

「ハヤテはなぁ！　身も心も全て私のものなのだ！！　お前なんかに髪の毛一本だってやるものかバカたれぇぇぇ！！！」

（り、理不尽だ・・・私を説得したのって・・・あなたじゃありませんでしたっけ？）

薄れゆく意識の中、そんなことを思っていると天井から何か落ちてきた。

ドゴッ！

「げべらッ！！」

「うわ！　天井から人が！」

天井から落ちてきた物体は倒れ行く虎鉄の腹部にとどめと言わんばかりに激突した。

土ぼこりを上がるがそれが晴れていくとそれは木原だった。

「む、誰かと思ったらロリコンではないか？」

「ん・・・？　なんだよ父ちゃん・・まだ5時だぜ、もうク熊肉は飽きたぜよ・・・」

「なんで昔の人の言葉が入ってるんでしょうか？」

「しかもあの高さから落ちて起きる気が無いとは・・・取り敢えず、コイツは放っておき、帰るぞハヤテ！　とても不愉快だからな！」

とナギは頭を掻きながら不機嫌そうにその場を後にしようとする。

「え？　でもお嬢様、僕はまだ・・・・この人形師がかけたヒナ人形の呪いが・・・」

そう、ハヤテは昔の人形師のぜぺっとにより女装させられるという呪いを受けている。　その条件もまだ満たしていない中、帰るわけにはいかない。

「だったら・・・」

がしっ。

「へ？」

と目を丸くするぜぺっと。　ナギがその手でぜぺっとを鷲掴みしたのだ。

「お前もわたしのハヤテになにかちょっかい出す気か・・・・オイ」

ギリギリ・・・

「あ、ちょ！ヤベ！　スイマセン！　スイマセン！　特に何もないです！　しません！　そんなことしません！」

「だったらさっさと・・・ここからいなくなれぇーーーー！！」

とZガ○ダムのパイロットを沸騰させるように叫ぶナギは握りしめたぜぺっとを遠い空へと投げる。

そうするとぜぺっとは啜り泣きをしながらしゅぽん、と何処かへ消えてそれと同時に

ボフン！

「うわ！」

先ほどまでのウサギヘアーもミニスカのメイド服も消え、いつもの執事服をハヤテは身にまとっていた。

つまり、納得はいかないが呪いは解除されたのだ。

「さてハヤテ・・・そろそろ帰るか」

「は、はい・・・お嬢さま」

と主に促されてハヤテも屋敷へと足を向ける。　呪いもなくなり、これで自由の身だ。　わざわざ時計塔に向かうという条件もなくなった。

（これでテルさんも爆発せずにすんだし・・・ま、いっか）

と心の中で納得して、彼は主の後を追う。もう祭りも終わりを迎えそうだ。このまま帰っても何ら問題はない。

しかし、彼は一つだけ・・・とんでもない事を忘れていた。

そして次回の話は今から数時間前に遡る。

第69話～叩いて被ってジャンケンポン！～（後書き）

はい、どーみてもとある漫画のパロディになってしまいました。
まさかのテル君の一撃ノックアウト。　クリーンな試合を展開しようとしたのが仇となりました。黒羽さんには常識は通用しないようですね皆さん、気を付けましょう。

そして虎鉄さんとこ、見事にオリジナルが台詞が変わってたりします。原作ファンの皆さん、ごめんなさい。

結構ジャンケンや、虎鉄のところも長くやろうとしていましたがいい加減話進めないと終わらないと思い、アップテンポ作戦に移行しました。

それでもちゃんと大事なところはまとめるので終わりまで頑張ります。
そして次回は超展開に次ぐ超展開。　ヒナ祭り編ももう少しです！

質問や感想を受け付けております！では！！

第７０話～喧嘩は祭りの華（真）～（前書き）

最初は時間を遡って始めようと思います。　そして最後は・・・

第７０話～喧嘩は祭りの華（真）～

時間はハヤテの呪いが解呪される一時間前になる。

「……ふぅ」

生徒会長桂　ヒナギクはグッタリした表情で椅子に座っていた。

「いやぁ見事な歌いっぷりだったなヒナギクくん」

ぐったりと疲れているヒナギクにクスクスと唯子が笑みを浮かべていた。

「なんで私まで歌わされるハメになってしまったんですか・・・」

「しょうがないだろ、あのバカ千里は見事に三十曲も歌い続けた結果ノドを潰してしまったんだ。　しらけた場を盛り上がらせる必要があったのだよ」

「それで私が何曲も歌わされるハメになったんですね」

ヒナギクは紙コップに入っているジュースをちびりと飲む。

「いいじゃないとても可愛かったわよ♪」

「おや・・・ヒナギクくんの母上様じゃないですか」

唯子が反応したのはエプロンを身にまとったふつくしい女性だ。

「あら唯子ちゃ～ん！　唯子ちゃんも来てたの？」

「ええ、そうですよ。　可愛い後輩なもんですから」

ヒナママの表情はとても穏やかだ。　それは唯子も同じである。どうやら二人は面識があるようだ。

「ところで唯子ちゃん♪　新しいフリフリのドレスがあるんだけど着てみない？」

「謹んで遠慮させていただけますか？」

「もう、連れないわね。　こうなったらヒナちゃん！」

「私も右に同じ」

と唯子に続いてヒナギクも却下した。　二人に拒否されたヒナママはぷぅ～と膨れていた。

「海外から帰ってこれなかったパパの悔しい顔が目に浮かぶわ」

「絶対に内緒だからね」

とヒナギクは釘を打つようにそう言った。　あまり知られたくないのだろう。

（まぁ、ヒナギクくんのコスプレ・オン・ザ・ステージは私が完璧に撮影済みだがな・・・）

ヒナギクの見えない所でうししと笑う唯子。　これを他の人間（ヒナギクファン）に売

りつけるという外道技があるが必要なものは大切に保管しようと考えていたりする。

「そういえば今日はヒナギクくんの誕生日だっていうのに王子様のハヤテくんはどこにいるのやら・・・」

「あらやっぱりそう言うことなのかしらヒナちゃん？」

唯子のその一言にいち早く反応したのヒナママは瞳を光らせてヒナギクに迫る。　ヒナギクは慌てて手を振ってそれを否定した。

「もう！　唯子さん、誤解招くようなこと言わないでください！」

（あ、そうだ・・・あの果たし状）

突然とコナンのようなＳＥがヒナギクの脳内を掛けたのを機にヒナギクはハヤテに渡されたあの手紙を思い出した。

内容は酷く挑発的、しかしその文面にはなにかしら別の意味があるのではないかとヒナギクは考えているのだ。

（あれはやはり果たし状・・・？　もしかして二人きりになりたいだけの口実・・？）

「あまり悩むのではないぞヒナギクくん」

と考察してるヒナギクの耳に声が聞こえた。　唯子の声だ。

「昔の人は言っていた。　女は知力や腕力より、だいじにしなければならない者があると・・・」

腕を組みながら唯子はその偉人の言葉をヒナギクに伝えた。

「『女は行動力』・・・だ」

と最後に親指をビシッと立てる唯子はどこか誇らしげにヒナギクに微笑みかけた。

ヒナギクは少し考えた後、何かわかったような表情で

「唯子さん、ありがとうございます。　お義母さん、今日はもう先に帰っていて・・・」

「え？　なにか用事でもあるのヒナちゃん？」

疑問をヒナギクに投げかけるとヒナギクは振り向いてキリッとした表情でつぶやいた。

「私は・・・決着をつけなくてはいけないから」

その瞳はまるで川中島の合戦を前にした上杉謙信、武田信玄の『今日で決着をつけてやる』という雰囲気みたいだった。

もはや武士を前に何も言うことは無い。　唯子とヒナママはヒナギクを見送った。

「いやぁお義母さん、それにしても以前お会いした時よりも若々しくなられましたな・・・」

「そうなのよ～　美容院ってすごいわね！　これからも行こうかしら！」

二人はどうやらとても気の合う二人らしい。

○

「・・・・・・」

グッ。

「・・・モガッ」

ググッ。

『おい早く起きなよべらんめぇ・・・いつまで埋まってるつもりだ』

一方で地中に埋められたままのテルは土の中で誰かの声を聴いた。

「ぷはーーーっ！！！」

ボソッ！　と地中から勢いよく顔をだしたゾンビ・・・ではなくテルだ。

「ぺっ！　ぺっ！・・・くそぅ、あの野郎手加減なしかよ・・・ってアッーーーー！」

口の中の土を掃出しながら辺りを見渡した。　テルはあたりを見渡して絶句する。

「祭りもう終わってんじゃん！　何この真っ暗な夜！？　俺あのま

まずっと放置されてたの！？　誰も助けてくれなかったのかよ！？
放置プレイもいいところじゃねェかァァァァ！！」

そう。　彼が地に深く眠りについたあと、何事もなかったかのように祭りは再開されたのだ。　土の中に埋まったテルよりもどうやら周りの人たちは驚異のスルースキルを発動させてあたかもそこに誰も居なかったかのようにふるまい続けた。

「なんというシュール・・・そしてイジメ、ヨクナイ」

『べらんめぇ・・・もともとお前が負けたのが悪いのさ』

「そんなこと言ってもお前、あの女絶対人間じゃないって。　プラスティックのハンマーで人一人埋めるか普通・・・ん？」

と違和感なく入り込んできたその声にテルは気づいた。　そしてその声の出所である真下を見ると・・・。

黒い塊がそこにはあった。

「「ん？」」

お互いが視線を合わせて同じ声を出す。

『べらんめぇ・・・お前がこの俺に呪いをかけさせた愚かもンだな？　俺はお前に呪いをかけた・・・』

「ボム兵？」

とテルが呟く。　その黒い塊にはかわいらしい某配管工の出るファ

ミコンゲームの中に登場する爆発物に酷似していた。
その証拠に足もあるし、後ろには起動用のネジがある。
「べらんめぇ・・・俺の名前をそんなのと一緒にされちゃあ困るぜ・・・」
「いや、どう見てもボム兵だろ？　ス○パー○リオに出てくるあのボム兵だろ？」
「いや、お前どこまでマ○オにこだわるんだよ！？　確かにこんなりだけどボム兵なんて名前じゃねぇから！！」
「じゃあなんて言うんだよ」
とテルが聞いた瞬間、ボム兵はきりっとした雰囲気を醸し出しながら渋い口調で言った。
「慕夢（ぼむ）　平田（へいた）・・・」
「名前もそれっぽいじゃねーか！！　もうボムって読むからな！？　すべての読者さんたちもお前の事はボムって認識したからな！！」
とテルが思いっきり突っ込んだところで「チッ」とボムは舌打ちをした。
「てめぇ・・・自分がどんな状況に置かれたか分かってねぇようだなぁ・・・べらんめぇ・・・」
「どういうことだ・・・？」

と突然と態度を変えたボムが小さい体でテルに向かって言った。

「この俺が現れたってことは・・・お前が爆発する時間がもう少ししかねぇってことなんだよ！！」

「なん・・・だと・・？」

某ジ○ンプ漫画のようなリアクションのテル。

「まさか・・・ハヤテも？」

「残念だがそいつは関係なしだ。　もともと呪いは二つで一つじゃあ無かったワケよ・・・俺とあのぜぺっとは、別々の呪いであのひな人形に憑いていたんだからなぁ！！」

「なん・・だと・・？」

またしてもこのリアクション。　それだけにテルは意表を突かれてそれしか言えない。

「ぜぺっとの野郎はもう逝っちまったか・・・数百年間奴の趣味について語られたが・・全く持って理解できんかったなぁべらんめぇ・・・」

（ということはハヤテの呪いは解けたのか・・・野郎だけ先に解決しやがって・・・）

心のどこかで憤怒の炎を燃やすテル。　当然その矛先はこの場に居

るボムへと向かっていた。

「んで？　このボムはどうすればなくなるのかな？　ネジ巻いて動かせばいいのかな？　それともスマブラみたいにどこかにブン投げればいいのかな？」

ガシッとボムを掴んだテルは握りつぶすかのような勢いだ。　だがボムは平然としていた。

「残念だったな小僧・・・俺はお前に憑いている身だ。　たとえお前が世界の果てまで投げ捨てようと俺はお前のもとに戻ってくるってぇワケよ・・べらんめぇ」

「チッ・・・どうすれば離れてくれるのかねぇボム兵」

「フフ・・・動じないんだな・・簡単なことだ。　俺の願いを叶えてくれればいい。　とても簡単な願いだ・・」

「・・・いいじゃねぇか。　その願い叶えてやるよ。　だが俺は魔法少女にしろといってもできねぇからな？」

「誰が魔法少女になるかべらんめぇ！！」

とボムがツッコむと話を戻して、ボムが願いを口にした。

「俺の願いは妬ましきクソカップルを・・・爆殺させてくれ・・・そうすればお前の願いは解除・・」

ドゴッ！

とテルはボムが台詞を言い切る前にその足でボムを思いっきり踏みつけた。
ボムは見事に地に埋まる。
「なぁにしやがるこのべらんめぇ・・・俺の言ったことは分からなかったか？」
「まったく分からん。　なんでそんな悪魔の手引きをわざわざ俺がしなきゃならんのだ」
「だって仕方ないじゃん！　俺生前彼女誰も居なかったんだよォ！　アイツらァ・・・仲をいいことに人の目の前でイチャイチャイチャと・・・リア充爆発しやがれってんだァァァァ！！」
なんとも・・・なんともくだらないことだろうか。　まさか生前に彼女ができなかったという無念からこの呪いは生まれたとは流石にテルでも呆れてしまう。
「ダメだこいつ・・早く・・なんとかしないと・・・」
もうこのままコイツを伊澄の所へ持って行ってしまえば解決してしまうのではないかとテルは考えていた。　しかし・・・。
「だがその願いも今日中に果たせなければお前は爆死する！！」
「ハァ！？」
まさかの真実。　ぜぺっととは一緒の呪いじゃないくせに今日中に願いを果たせなければテルは爆死すると言い出してきた。

「さぁどうするぅぅぅ・・・タイムリミットはもう一時間もないぞぉぉ・・・」

渋く低い声が唸る。　ここから伊澄の所へ行って、果たして間に合うものだろうか？

その時だった。

「あれ？　テルさんじゃないですか？」

後ろから聞きなれた声。　そこには呪いを解かれ、執事服姿になったハヤテの姿があった。

「どうしてこんなところに居るんですか？　屋敷の方に帰ってるものだと・・・」

とハヤテがテルに尋ねるが、テルは目をぎらつかせてハヤテの顔面を鷲掴みした。

「あの・・・テルさん、なんか・・すっごく痛いんですけど？」

「なぁなぁ、お前俺に不幸の霊とか憑かせた？　なんでお前が俺より先に呪い解呪されてんの？　だいたいなんでこの時間帯でお前がここに居るワケ？」

「それは・・・説明しますんで、取り敢えず離してください・・・」

ギリギリと軋む音を立てながらハヤテがそう懇願するのでテルはアイアンクローを解除して話を聞くことに。

んで・・・・・。

「ヒナギクとの約束をすっぽかしてた？」

「はい、もう何もかも普通に終わるものだと思ってベッドに入った瞬間・・・まるで僕のＳ〇ＥＤが砕けるように思い出しちゃいました・・・」

頭に手をやるハヤテ。　とても簡単に笑いながら言っているがそんな軽い気持ちでいいのだろうか。

「それよりそのボム兵はなんです？」

ハヤテがテルの肩に乗っているボムに気付いたのか、指をさして聞いてきた。

「あ～。　俺に憑いている悪霊だ・・・」

ここからはテルからもしっかり説明しなければならない。　そしてすべてが説明し終わった時、ハヤテは理解したかのように頷いた。

「なるほど・・・その霊の願いである『リア充を爆発させる』を実現させなければテルさんは爆発すると・・・そういうことですね？」

「その通りだ。　理解が早くて俺はとても助かる」

とここでボム兵が割って入ってきた。

「どうでもいいけどよぉ小僧、タイムリミットはぁ・・もう迫っているんだぜェ？　もたもたしてていいのかよぉ？」

テルは時計に目をやる。　日付が変わるまであと三十分。　どうにかして解呪する方法を考えなくては・・・。

「やはりここは伊澄さんでは・・・」

とハヤテが一つ提案を出す。

「俺もそう思っていた。　取り敢えずアイツにはメールを送っておく・・・ってお前はいいのか用事」

「ああ、そうですね。　あまり待たせるとヒナギクさん怒っちゃいますから・・・」

（いや、もう死亡フラグビンビンだからなハヤテ）

敢えて口には出さず、心の中で突っ込んだテルだった。

その会話を聞いてか、ボムが口調を明るめながら聞いた。

「もしもし君は・・・これから女の子に会いに行ったりするのかな？」

「？　ええ、そうですが・・・」

とキョトンとした表情で答えるハヤテ。　それを聞いたボムの頭の中では・・・

（年頃の男女がぁ、夜の校舎で会う約束ぅ・・・高校生、あま～い青春・つまりぃ）

その思考に至った時、ボムの瞳はカッと見開かれ猛々しい大声が叫ばれた。

「よおおおぅぅぅしぃぃぃ！！！　おめぇリア充だぁぁぁなぁぁぁ！？」

「はい？」

ものの見事に頭にクエスチョンマークを浮かべるハヤテだが、ボムは喋るのを止めない。

「隠すんじゃねェよべらんめぇ・・・高校生の男女が夜の校舎ですることと言ったらぁ・・・愛の告白ぅ、そしてそのあとは若さに任せてにゃんにゃ～ん・・・って相場が決まってんだろうがァァァ！！」

「何を勘違いしてるか知りませんが僕は別にヒナギクさんとはそういう仲では・・・」

「とにかくだぁ！　貴様は今すぐ爆破する必要があるって・・・アレェ！？」

勢いよくハヤテに飛びかかろうとするがテルの手によってそれは失敗に終わる。

「今度余計なことをしたら口を縫い合わすぞコラ」

「口なんてねぇんだよべらんめぇ！！」

と返した後、けらけらとバカにするように笑うボム。

「じゃあ僕もうヒナギクさんのところに行きます。　呪いの方はテルさん、頑張ってください」

「完全に他人事だなオイ・・・分かったいけ――」

――ゾクリ。

テルが言葉を言いかけたその時だった。

あの背筋を凍らせるかのような嫌な、記憶に嫌でも刻まれた寒気がしたのは。

「・・・・」

林の奥からコツコツと現れたその黒衣の少女は軽い足取りで彼らの前に姿を現した。

「あなたは・・・ッッ！！」

ハヤテは思い出した。　あのナギの誘拐事件。　伊澄の術とは違った能力を持つ少女・・・黒羽だ。

「今度こそは本命ってワケかい・・・」

テルの目つきがすぐさま戦闘態勢になる。　キリッと目つきは鋭くなり、自然とポケットに手が入った。

「ハヤテ・・・ここは俺に任せてくれねぇか？」

とテル。　ハヤテは驚いて言葉に詰まってしまうがテルは続けた。

「アイツ、お前狙いなんだとよ。　お前の追っかけなんだとよ」

「そんな無茶な・・・伊澄さんがいるならともかく、一人でだなんて」

それを聞くとテルはケッと笑った。

「バーカ。　俺がこいつに遅れなんて取るかってんだ」

「・・・・分かりました。　でも無茶はしないでください」

とテルに告げた後、ハヤテは後者に向かって走り出した。

それを逃がすまいと黒羽が右腕を刃に変え、物凄いダッシュを利かせてハヤテに詰め寄った。　距離を一気に縮めて一太刀――。

ガキィンッッ！

だがそれを阻んだのは金属音。

「お前の相手はこの俺だ・・・」

黒羽の刃を受け止めたのは細長い黒い鉄の棒。　それが黒羽の一太刀を受け止めていた。

「そう言えばじゃんけん大会では世話になったなぁ・・・アレの続きと行こうぜ。　俺はなぁ、この世で勝ち逃げされることが大嫌いなんだ」

ニヤリと笑うと、一度パイプで刃を弾いて一度距離をとった。テルの背後には白皇学院の校舎。その前にたたずむ彼は最後の砦だ。

今回は以前のように霊刀があるわけではない、加えて伊澄の援護なし。　ハヤテもいないという孤立無援の状態だ。

「さーて、本気の喧嘩としゃれ込もうぜ・・・」

店は閉まり誰も居なくなった静かな学校で、もう一つの祭りがまた幕を上げる。

第７０話～喧嘩は祭りの華（真）～（後書き）

どうも、今回はギャグからの一気にバトル展開。　つかハヤテ、手伝えよ。
まぁ原作の方も進めなければならないのでテル君にはここで死にもの狂いで戦ってもらいます。　さて、黒羽さんとの戦いは常に常識外れ、このヒナ祭り編でも読者のななめ上を行くような戦いを見せつけてくれます。　それに対してテルがどう対応するかも見どころです。

今回、変なボム兵が現れましたが見た目は最早あのボム兵。　そしてその声は若本ヴォイスで再生すればイメージ湧くかと・・・ハイ、もうドラゴンボールのセルとか音速丸みたいな感じです。

第７１話～混迷困窮のフェスティバル～（前書き）

やぁみんな、元気だったかい？　風邪なんて引いていなかったかい？　８０００円ボったくられなかったかい？　今日からまた執筆を再開するよ。　お兄さんはまた頑張っちゃうよ、え？　なんでこんな前書きが可笑しいのかって？　それはキミ、久しぶりでテンションが上がってるからだろう？

第７１話～混迷困窮のフェスティバル～

「うわぁ・・・もう１１時半だけどヒナギクさん大丈夫かな？」

時計塔の最上階、生徒会室を前にしてハヤテは一抹の不安を感じていた。　完璧主義者のヒナギクのことだ。　呼び出しておいて遅刻という宮本武蔵と佐々木小次郎の巌流島の戦いを再現している訳ではないが。

取り合えずお怒りと言うレベルを簡単に超えているだろう。

（もしかしたら扉を開けて一気に一突き・・・とか）

しかし、時間をロスしている暇はない。　意を決してハヤテは扉を開けた。

「・・・ヒナギクさん？」

樫の扉を開くとハヤテの目に飛び込んできたのはソファに横になって寝ているヒナギクの姿だった。

「あ、えっと・・・ヒナギクさん・・？」

「ん？」

その声に気付いたのか、ヒナギクの瞳が開かれた。

「あ、綾崎くん・・・」

――賑やかな祭りも終わり。　静まり返った夜・・・

――二人っきり？の誕生日会が静かに始まる・・・。

ドォォォォォォォンッッ！

「なんか外がうるさいわね・・・」

「そうですね・・・」

この世界で誰よりも青春している時計塔の二人を余所に、こちらの夜の祭りはさらに過激さを増していく。

「ちくしょう、またそれかよ！」

舌打ちしながらもテルは足を動かして黒羽の狙いを定めにくくする。
　黒羽は動いているテルに対して黒い槍を一斉掃射。

『おぅいぃ・・・あのお嬢ちゃん、なかなか別嬪さんじゃねェかぁ？さてはテメェの女かァ？』

「この世界のどこに恋人に槍をぶっ放す彼女がいる？」
ニヤリと笑っているかのようにボムが尋ねるがテルは冷静に返答。
物凄い勢いで襲いかかる槍は勢いよく地面に突き刺さっていく。
以前テルを串刺しにするほどの威力だ。　当たればすなわち一発ＫＯだ。
「守りから転じて・・・ッッ」
躱しきったのを確認するとテルは即座に黒羽の懐に飛び込んだ。
そして愛刀・撃鉄くんＭＲＫ２を振りかざした。
「同じパターンはッッ！！」
ガキィンッ！
と響いたのは金属音。　黒羽に放った一撃は見事に左肩から飛び出た黒い物体に阻まれてしまったのだ。
（クソッ・・・またかよ！！）
一撃が通らなかったことに苛立ちを募らせるテル。　そしてその直後だった。
ドゴッ！
「かはっ・・・！！」
腹部に強烈な激痛。　見れば足。　黒羽は左手の刃でテルの武器を

弾くと、そのまま体を反転させ強烈なミドルキックを炸裂させたのだ。

その威力は絶大で男であるテルを4、5メートルは軽く吹っ飛ばす。

「げほっげほっ・・・やってくれるじゃないの」

猛烈な腹部の痛みにせき込みながらテルは相手を睨み付けた。　あの変幻自在の攻撃と防御。

（相手も間違いなく闘い慣れしてる・・・まる生まれてからその役割であることを命じられたかのように・・・）

まるで戦闘マシーン。　それがピッタリかのような力だ。　こちらは前回のような霊刀では無い分、有効打は見つからない。

「・・・なぜあなたは彼を守るの？」

「あ？」

突如として黒羽が口を開いた。

「彼は・・・あなたとは関係はない。　また以前のように邪魔をするなら無駄に傷つくだけ」

「決まってんだろうが」

黒羽が紡いだその言葉をテルは答える。

「アイツはダチ公だからだ」

「ダチ・・・？」

「ダチってのはかけがえないもんなんだよ。　くさい台詞かもしれねぇが・・・命の次に大切なものであり、時には命より大切なものだ」

「・・・・」

『ようはぁコイツがれっきとしたアレよ、ホモなのよ』

ブンッと鉄パイプを振るってテルは構えた。それと同時にボムにも危害が及びあらぬ方向へと飛んでいく。　そんなことも気に留めずテルはポケットに手を突っ込んで何かを探り出した。

「お前にはあんまゆかりのある言葉じゃないようだな・・・だったら見せてやるよ」

そこから取り出したのは1枚の札。　梵語がしっかりと刻まれたそれを鉄パイプに巻きつけていく。

「今日は命の次に大切な日だ。　その覚悟、よく見てろや」

ニヤリと笑みを浮かべたそれを皮切りにテルは駆け出した。　黒羽は同じくけん制のため、黒い槍を発射する。
それをテルは同じく躱していく。　ここまでは先ほどと同じだ。

「オラァッ！」

そして遠心力を利用した一撃が放たれる。　縦のけさ切りが迫る中、

黒羽は冷静に左手の刃を翳して受け止めようとする・・・だが。

ガキッ！

「さっきとは違うぜェ！」

鈍い金属音とともに黒羽の刃は弾かれていた。　先ほどは簡単に防ぐことができたテルの攻撃が今度は通っていた。

テルが作り出したこの状況、これは先ほどテルが黒羽に作り出された状況だ。

武器を弾かれてノーガード状態。　これを見逃すテルではない。

「ボディーがら空きだぜェ！」

見つけた餌に飛びつくようなハイエナの笑み。　それに同等のものを感じた。

脇腹へと放たれる一撃。　重く、確実に当たったとされる鈍い音と共に黒羽は後ろへと吹き飛んだ。

「チッ・・・まるで効果なしかよ」

舌打ちをし、その状況を見る。　確かに当たった。　だがその感触は明らかにクリティカルにはほど遠かった。

「・・・・」

黒羽は冷たくテルを見据えたままだ。　先ほど自身の体を護るよう

に展開された黒い盾は確実にテルの一撃を防いでいた。

「さっきよりも効いただろ？　コレが俺の秘策よ」

スッと見せつけるのは鉄パイプに張り付けた1枚の札。　実はコレ、伊澄がいつも使っている札と同じもの。

テルの鉄パイプに張ることにより一時的だが武器を強化できるのだ。

以前使っていた真剣の威力の比ではないが、それなりに霊とかもぶん殴れるようになる。

まぁ例えるなら木の棒からキーブレードになってハートレスを倒せるようになったというぐらいか。

「へっへっへ・・・もう簡単にやられたりはしないぜぇ、前にも言ったが慰謝料は取ってくれるなよ？　給料が少ねェンだ」

すかさずテルは再度攻撃を仕掛ける。　真上から頭に向かってパイプを振り落としにかかると、黒羽は一気に飛び退き距離を取った。

だがその行動を読んでいたかのようにテルはさらに踏み込んで黒羽を追撃。

鉄パイプを横に構えてニヤリと笑った後に、強力な一閃が黒羽に迫る。

「・・・・・！」

右腕と左腕から刃を伸ばした黒羽はその両腕をクロスさせてテルの一撃を防ごうとした。　そして・・・。

バキィンッッ！

金属の砕ける音が響く。　折れたのはなんと黒羽の刃だった。

少しの間宙を舞った後、地面に力なく突き刺さる。　黒羽は防ぐことは叶ったものの勢いを殺しきれずに後ろへと吹き飛んだ。

そして翼を広げて空中で受け身を取り、着地する。　両腕からはダメージの為か、機械がショートしたかのような電気がバチバチと走っていた。

「ケッ・・・外したか　だが次はそうはいかないぜ」

「・・・・」

悪役顔のテルだ。　見事なまでにその笑みはヒール役だ。　しかし、状況が状況なだけにテルの勢いはまさに破竹の勢いそのものだ。

黒羽は両腕を確かめると傷を確認してそれほどの被害が無いことを知ったのか、両手を降ろした。

「ん？　なんだ？　降伏するなら手をまず上げろって・・・」

テルが言葉を切らしたのは目の前の黒羽の体に変化があったからだ。
　そして先ほどの笑みが消える。

「戦術を切り替える」

そう呟いた黒羽が両腕を前に突き出すとその腕はその変化を遂げた。

「な、ななななぁ！　お前、銃だとォォォ！？」

テルはその形状を見て驚愕する。　黒羽の腕は真っ黒な銃身の長いライフルのような姿へと変化していた。

「・・・攻撃開始」

「なッッ」

向けられたその銃口から火花が飛出し、テルの頬をかすめる。　堪らずテルは標的にされないよう走り出した。

「逃がさない」

と続けざまに第2、第3と狙いながら放つ。　機械のようなその動きはまるで未来から来た某サイボーグ戦士。

「チクショウ！　卑怯だぞ！　飛び道具なんてよ！」

反撃したいのは山々だが銃弾が飛び交う中で突っ込みに行くのは流石に自殺行為か。

「ん。　そうだ」

何か一つ策を思いついたか、テルは近くの木の裏へと隠れた。

「・・・・」

銃撃を一時停止させ、黒羽は様子を見る。　一向に動く気配はない。

その銃撃が止んだのを図っていたか、空高くへと何かが飛び上がる。
黒羽は即座にその物体に連射。
「かかったな！！」
と、黒羽に向かってテルが向かってくる。　ならば上は何かと確認すれば、なんとそれはテルの執事服だった。
「・・・・」
穴あきにされた執事服が落ちると同時に黒羽は銃を前方へと構える。しかしテルは止まるどころかその勢いを殺さず突っ込んだ。
「うぉぉぉお！！　死なば諸共ォォォォォ！」
ズダンッ！　と放たれた銃弾はテルが間一髪首を動かすだけで躱す。
もうテルは鉄パイプを振り上げていた。
続いて第２の銃がテルに向けられる。　この時の二人の距離は５メートルもない。
黒羽がトリガーに指を掛けた。
「ハァッ！」
バキッ！
と金属音。　トリガーが引かれる前にテルの鉄パイプが黒羽の銃に

当てていたのだ。　銃の位置はズラされ、引いたと同時に飛び出た銃弾はすぐ近くの地面へと当たる。

「剣が銃より弱いなんて誰が決めたァ？」

絶対的優劣を決めている、どの時代だってそうだった。
銃＞剣の図式。
これは遠距離の型の攻撃が主体の銃に比べて近距離の剣が圧倒的不利なためだ。

しかし、銃はその遠距離の攻撃を可能とする代わりに近距離にめっぽう弱いのだ。
銃が強さを誇るのは相手を近づけさせないという前提がある。

余程の柔軟な思考の持ち主でなければこの状況を打破することは難しい。
だが相手はあの黒羽だ。

「・・・・」

カチャ。

と弾かれると同時にその勢いを利用して回転していた黒羽は再び銃を構える。　今度の銃はライフルのような長い銃身ではない。　小さな拳銃だ。

ここは勝負の分かれ目、引くか引かずに突き進むか。

――その賭けに勝ったものがこの闘いを制する・・・ハズ。

パァンッ！　と拳銃の乾いた音が響く。

「ッッッ！！」

その音が響いた瞬間、テルの左肩に衝撃が駆け抜けた。　黒羽の撃った弾は軌道を外れテルの片腕に直撃したのである。

だがこんなことで怯んでいるテルではない。

「オオオオオオオオオオ！！」

まるで痛みを感じないかのようにその体を更に前へ、前へと進める。歩みを止めることなく構えたその鉄パイプを深く握りしめながら。

バキッ！

そして渾身の一撃が・・・決まった。

その一撃は見事に黒羽を吹き飛ばし、その体を地面へと叩きつけた。
展開していた片腕の盾も破壊して貫通。

「・・・ふぅ、勝負ありだろ」

左肩を押さえながらテルはそう呟いた。

『おめぇさん・・・それってある意味フラグだぜぇ』

「あ？　何言ってやがる？」

突然のボムの忠告に顔をしかめるテル。　だがそれを確証づけるようにボムは向こう側を見た。

「なん・・・だと？」

「・・・・・・」

確かなその一撃を与えても黒羽はまだその無表情を貫いて立っていた。　これにはもはやホラーに近いものがある。

パシッ、パシッ・・・

どうやら前回の武器を破壊した時のように両腕から回路がショートした機械のように火花が走っている。無傷ではない。

――叩くなら今。

そんな言葉が彼の脳裏をよぎる。　確信はないが相手は顔には出してはいないが弱っている。　無表情では隠しきれないほどのダメージを負いすぎたのだ。

その証拠があの傷ついた両腕だ。

――相手はハヤテやナギの敵だ。

テルを急かすようにその言葉が脳裏をよぎる。　これほどの好機を見逃すわけにはいかない・・・だが。

「もう勝負は付いたろう？　さっさとここから引け」

なんとテルの口から出たのは黒羽を見逃すという言葉だった。

「・・・どうして？」

これには黒羽も疑問を投げる。　誰がどう見てもこの状況はテルが有利だ。　その状況で黒羽を見逃すことはあり得ない。

テルは忌々しげに吐き捨てた。

「ンナことはどうでもいいんだよ。　お互いにできるこたぁねぇ・・・引き分けでいいだろ」

傷の方もテルも左肩を撃たれている。　やるせなさそうに鉄パイプをしまった。

「・・・・」

「いいからとっとと帰れ。　早く俺の前から消えてくれ、俺も早く帰りたいん――」

ガチャ。

「ん？」

聞きなれたその音にテルも思わず見直す。　黒羽は性懲りもなく銃をテルに向けて構えていた。

『べらんめぇ・・・小僧、オメェさん油断したぜぇ・・・』

パァン！

ボムのその言葉を皮切りに銃が火花を吹く。　テルも下唇を噛んでその来るべき激痛に備えた。
だがその激痛はいつまで経ってもやってこない。
目を閉じていたテルが開くとその光景を確認した。
「・・・・」
「・・・・・え？」
どうやら黒羽の銃は不具合を起こしていた。　銃声こそなったものの、銃弾は発射されなかったらしい。
――だが、問題はそこではない。　そこではないのだ。
拳銃から何かが飛び出している。　なんか小さなモノ。
ぐったりと飛び出しているのは何やら人形のようなものだ。
「何が飛び出してくると思ったら人形かよ！」
『ってかそこは花とか国旗が飛び出てくるのがベターじゃねェかべらんめぇ・・・』
テルとボムがそれぞれ思ったことを呟いていると、その銃口から飛び出ていた人形はポロっと地面へと落ちた。
その人形の姿は物凄い黒羽に酷似していた。　いや、もはやねんど

ロイドくらいの大きさの黒羽と言ったあげた方が分かりやすい。
あの長い黒髪もその黒衣のローブもすべてソックリだ。

「どうするよソレ？　ヤフオクにでも売りつけるか？」

『そうだなぁ、意外な値段で売れるかもなぁべらんめぇ・・・』

などと談義していた時だった。

――ピクッ。

なんとその人形の指が動いた。

「え？」

前のめりに倒れていたその人形は起き上がり、体に付いた土を払うとテルたちの方を向いた。
そして右腕を上げて・・・

「やー！」

「・・・・・・」

『・・・・・・』

テルとボムはしばらくその光景を凝視して沈黙したのち。

『「キェェェェェアァァァァァシャァベッタァァァァァァ！！！」』

あり得ないくらいに大声で叫んだ。

第７１話～混迷困窮のフェスティバル～（後書き）

ふう・・・久しぶりに投稿できました。　リアルの用事がだいぶ落ち着いてきたんで執筆の方も無事再開できました。　待っていた方も別に待っていた人も居なかったと思いますがこれからも頑張っていきたいと思います。

しかし、今回の最後に出てきた奴に皆さんもちょっと驚いたかと思いますが、これはちゃんと私の計画通りでございますので取り乱さないでください。

後２．３話くらいでヒナ祭り編も終わると思います。　どうぞ楽しみにしていてください！

第７２話～執事と生徒会長と小さな人形～（前書き）

なんだかとんでもない展開になってきたひな祭り編です！　ではどうぞ！

第７２話～執事と生徒会長と小さな人形～

――――時計塔最上階にて。

「あ、綾崎くん・・・・？」

「あー、えっと・・・まず、こんばんわですヒナギクさん」

寝ぼけた眼を擦りながらそう呟くヒナギクに対してハヤテは苦笑いで返した。　その表情を見てか、ヒナギクは少しばかりひび割れた時計を見る。

「・・・十一時半？」

少なくともその時計が故障している可能性を覗けば、嘘を言っていないというのも分かった。　しかし、その現在の状況を理解したヒナギクは右手に正宗を召喚した。

「へ？」

呆気にとられるハヤテが驚くのも無理はない。　ヒナギクはハヤテに向けて正宗を振りおろしていた。寸でのところでハヤテは正宗を白羽どりする。

「９時に来るんじゃなかったのかしら・・・綾崎くん？」

「スイマセンスイマセン！！」

物凄い剣幕でハヤテを睨むヒナギクはまだ正宗をハヤテに押し付け

ていた。　まるでこのまま両断してかねない勢いである。

「まぁ要するに宮本武蔵気分ってことね・・・わざと遅れて相手を油断させるっていう・・・」

「違いますって！　その・・・なんていうか」

「なに？　納得いく理由があるなら聞くけど？」

「その・・・素で忘れてたというか・・・」

――――ブチィン。

「ダッシャアアアアアア！！」

「のわあああああああああ！？」

方向と共にハヤテはヒナギクによって後方へと吹き飛ばされてしまった。

「いたた・・・ヒナギクさん！　どうしたんですか？」

「武器をとれ」

「ハイ？」

「勝負がしてほしいんだっけ？　早くを武器とりなさいよ」

ギロリ、と向けられた瞳は明らかな殺意を放っていた。　もうこの表現に飽き飽きしてるかもしれんが、あの眼はザクのモノアイだ。

（一体これはどうなっているんだ？　ちゃんとヒナギクさんがあの手紙を見たか確認しないと・・・！！）

「ひ、ヒナギクさん！　あの手紙は見ましたか！？」

＊ハヤテは手紙の内容を知りません。

「て・・・手紙？」

――胸の大きさが戦力の決定的な差で無いという言葉がありますけど・・・勝つのはぼくですけどね

＊ハヤテは手紙はテルが書いたため、ひどい内容となっております。

「ええ・・・覚えているわよぉ」

「だったら・・・」

「だから勝負つけたいんでしょ？　白黒つけたいんでしょ？　メチャメチャにしてやるわよ。　という訳で早く武器をとれ」

「だからなんでそうなるんですか！？」

「誰のせいだと思ってるのよーーーーー！！」

逆切れしながらヒナギクは正宗を構えてハヤテに走り出した。

○

「えええええええッッ！！？　ど、どういうことォォォォオ！！？」

黒羽とテルの戦いの最中、そのあり得ない光景にテルは絶叫していた。

「やー」

黒羽の銃口から飛び出た人形が突如動き、声まで出したのである。

大きさは８センチから１０センチくらいか。　ねんどロイドのような大きい瞳と普段の黒羽とは全く想像ができないような天然顔が特徴だ。

『これもまたぁ、ＳＯＮＹの技術ゥ・・・』

「しかしなんでまたねんどロイドチックな顔だよオイ。　これもまたフィグマの策略だろ」

見た目はどう見てもあの某人形会社の作りが一緒なのである。　これではあの某球団のマスコットキャラの立ち位置が危ない。

「やー！」

「なんだ？　もしかしてアレしか喋れないのか？」

「やー！」

『コレもお嬢ちゃんの攻撃と思ってもいいのかねェ・・・』

ボムも推測するかのように黒羽を見つめる。　この小さな人形も黒羽の攻撃の手段と考えたのだ。　一方等身大の本物の黒羽はと言うと。

「・・・・」

この奇想天外な状況にも眉ひとつ動かさないでいた。

「どうやら違うようだな。コレだけはアイツも予想外だったわけだ・・・」

『やー』

とひょこひょこと歩いてきた小っちゃい黒羽はボムの目の前までやってきていた。

『あん？　なんでぇ嬢ちゃん・・・』

笑顔の黒羽（人形）に対して挑発するように窺うボム。

『言っとくけどなぁ、この作品のマスコットキャラはもうこの俺様に決定したんだよォ！　この座はテメェが末代かかってもぉ、ぜえ

っていに渡さねぇえええって・・・・あるぅぇ！？』

ボム兵が舌を巻きながらしゃべっている間に、黒羽（人形）に持ち上げられていた。

『やー！』

『オイ！　テメェ、離しやがれこの野郎ッ　ああっくそぅ！　足が短くて身動きができねェ！』

短い脚をバタバタと動かしながら抵抗するが全く効果なし。　人形の方は笑いながらボムを持ち上げたまま走り回っている。

「えーっと、コレはもう突っ込むっていうレベルじゃねェな」

『んなこと言っとらんで早く助けろぉい！』

「はいはい」

とボムが助けをコールしたため仕方なくボムを取り上げた。　ひょいと取り上げられた人形は頭に？マークを浮かべて辺りを見回す。

『・・・？』

「ったく。　ここは遊び場じゃねぇんだ、これ以上ここに居られるとト○・ストーリの関係者に訴えれれちまう――」

とテルがしゃがみこんで人形を指差した瞬間。

「よ」

ガブッ。

人形は口を開けてテルの指に噛みついてきた。

「ぎゃあああああああああああ！？」

『ガウゥ！　ガゥウウ！！』

「いでででででで！　やべーよコイツ！　マジ痛ェマジ痛ェ！
指取れるって！　指取れるからやめてお願い！！」

指をブンブンと揺らしながら人形を離そうとするが一向に離れない。
ならば力づくでともう片方の腕を使うが、大きさに似合わず物凄い力のため引き離せない。

『おい小僧！　前を見ろイ！』

「うおぅ！」

ボムの声に気付いて前を向いたとき、黒羽が片腕を剣に変えて襲ってきたのだ。　辛うじてそれを横に跳ねて躱す。

『また来るぜェ・・・』

ボムが言うとおりに、黒羽はそこからツーステップを踏んでさらに追撃、テルは片方の腕で鉄パイプを構えようとしたが。

『やー！』

ガブリ。

「ぬぉおおおおお！　コイツ鼻まで噛みやがった！！　離れねぇーーー！！」

その間にも黒羽が問答無用で距離を詰めてくる。　またしてもテルは何も出来ずにその攻撃を躱すしかなかった。

「この野郎め！」

と、ようやく噛みつきが終わったのを見計らってテルは人形をぽいっと投げ捨てた。その人形は黒羽の掌にスポッと収まった。

「チクショウ・・・散々だぜ！　おいボム、俺の鼻大丈夫？　取れてない？」

『ああ、大丈夫だ。　むしろそこら辺噛みつかれたせいで美形になったんじゃね？』

「え？　ウソ！？　どのへん？」

と緊張感がないのはいつものことだが、テルは改めて黒羽の方を見た。　人形の方は掌で腰に手を当てて笑っている。

『やー！』

「なんでドヤ顔なんだよ。　可愛い顔してエグイことしてくれるじゃないの」

テルも鉄パイプを構える。　今度は本気のようだ。

『やー！』

ソレを見てか、黒羽の人形もどこからともなくあるものを取り出した。

「な、洗濯バサミ？」

『野郎・・・どっから出しやがった』

などと突っ込んでいる二人。　人形はニヤニヤと笑いながら洗濯ばさみをバチンバチンと鳴らしている。スプリングが強く、なかなかの締め付け具合がありそうだ。

『やー！』

「・・・なんて言ってんのアレ？」

『任せろ。　同じマスコット同士、言語は違えど心は通じる。　翻訳してやるぜ』

ボムが人形の言葉の翻訳にかかった。

『やー！』

『なになに・・・「この姿で私の居場所をかく乱して奴を驚かしてやるぜ」』

「く・・・あの小さいサイズは見つけるのが厄介だからな」

『やー！』

『「ついでにこの洗濯バサミでお前の股間を挟んでやってもいいんだぜ」』

「な・・・なんだと？」

なんと小っちゃい黒羽（もう後半はチビハネでいいや）は事もあろうに男の急所を容赦なくギロチンするという計画を立てていた。

「こいつ・・・なんて恐ろしい奴だッッ」

股間をひそかに抑えるテル。　もはやチビハネは小さな死刑執行人だ。

恐怖の所業をテルは防ぐことができるのか！？

「取り敢えずカバディだ！」

『なんでそうなる！？　この小さなちびっこもやるわけが・・・・』

『やー！』

『やるのかよカバディ！　もう何が何だか分からねェ！』

テルの提案に元気よく手を突き上げたチビハネにボムが突っ込んだ。

「・・・・・」

もうシリアスな雰囲気がぶち壊されているこの状況で黒羽はじーっ

とその光景を眺めていた。

○

場所は変わり、鷺ノ宮宅。　和式の豪華な日本庭園ではきれいな満月を見上げるリィンと伊澄の姿があった。

「しかし、祭りももう終わってしまったのか。　祭りにしかない限定品とか欲しかったのだが・・・」

「もう、また今度の祭りに行けばよいのでは？　しかし・・・呪いが解けてしまうのがハヤテ様だけと言うのは誤算でした」

「あぁ、まぁ呪いが掛かっている少年執事の方はそんな危険に巻き込まれることは無いだろうからな」

「ええ。　まさか今日中に爆発と言うのはありえませんし・・・」

いやはや、そのまさかの可能性を見逃していた伊澄であった。　そしてリィンがふと気づく。

「そう言えば、決闘のときどうして武器持参なんてことをかいたのか・・・」

「それは・・・その、武器勝負なら相手の武器を落としてそれで決着がつきますし・・・そ、それに・・・」

そういう伊澄は次の言葉を発するのに少しだけモジモジしながら説明した。

「それに・・・素手だとほら・・肉体的接触があるというか・・・」

「なるほど・・・君は意外と・・・」

「い、意外とってなんですか意外って！　成仏させますよ！」

と、顔を赤らめて伊澄はお札をブンブンとふるう。　それに反応してリィンの体が少しばかりか薄くなった。　すぐさま伊澄が冗談と札をしまう。

「すまん、冗談にしてもやりすぎだと思う」

「スイマセン」

謝る伊澄。　そして、話題を変えるようにリィンが伊澄に尋ねてきた。

「そういえば、時計塔で二人が無駄な争いをしているようだが本気で戦うと勝つのは一体どっちなのか？」

今行われているもう一つの戦い、テルと黒羽の事なんてこれっぽちも考えることもなく、ハヤテとヒナギクの話題になった。

普通に考えてみれば片方は完全無欠の剣道娘、片や、車に轢かれてもロボットに攻撃されても全然だ異常な執事。

武があるのはハヤテだろう。　しかし、伊澄の見解は違った。

「武器での戦いになれば、恐らくハヤテ様が負けます」

「ほぅ、それは彼が女性相手に本気を出せないということだろうか？」

「まぁそれもありますが、生徒会長さんには木刀・正宗を渡していますので・・・」

木刀正宗、それは所有者の潜在能力を最大限に引き上げる鷺ノ宮家の宝具。　どのくらい能力が上がるかと言うと・・・

「００ガンダムがピンチの時にトランザムを発動した時くらいの上昇っぷりです」

「ふむ。　なるほどな、分からん」

取り敢えずめちゃくちゃ強くなるんです。

「なので、木刀正宗を持っている生徒会長さんにはハヤテ様の動きがすべて見えます」

○

「そこに直れェェェェェエ！！」

ブンッとヒナギクが正宗を振るうたびにハヤテを吹き飛ばすほどの剣圧が発生する。　周りの物もいくらか吹き飛んだ。　割れ物がないのが奇跡だ。

「まったく！　あなたのお嬢様はしっかりと覚えていてくれたのに！　ホントにうっかり者の執事さんねェ！！」

「のわあああああ！！」

怒りのままに横へ正宗を薙ぐ。　風が巻き起こり、ハヤテもそれに巻き上げられた。　後方へとバランスを崩しながら着地する。

（どうしよう・・・物凄い怖さだ・・・この怖さは原作を超えている！一体どうすれば・・・ッッ）

まさに絶対絶命。　今は辛うじて躱すことができているが、いずれは捕まってしまう。そうなってしまえば痛いという痛覚的なものでは済まされない。　それほどの地獄が待っている気がすると感じた。

その時だった。

『そんなときは必殺技だ・・・フ○ースを継し者よ』

（え・・・誰ですか？）

まるで脳内に話しかけるような、男の声がハヤテには聞こえた。

『ほら、俺はここだぜ？』

と声のする方へと目を向けると・・・居た。

良い体つきの青いつなぎの男の姿がそこにはあった。

「・・・・・いや、だから誰ですか？」

『フッ・・・俺はあれだよ、漫画で言う心理描写の天使と悪魔の葛藤みたいな、まぁ必殺技の化身みたいな？　俺ははってん場の化身だけど』

「いや、はってんばってなんですか？　突っ込んだら負けってやつですか？」

『まぁ、そんなことはどうでもいいんだよ』

「無視かよ」

つなぎのいい男はハヤテに構わずどんどん話を進めていく。

『いまこそお前は使うべきだ・・・いい男のみが使うことを許される秘儀のテクニックを・・・』

「いや、何勝手に名前つけてんだよ。　僕の必殺技蹴りだけど」

『合言葉はウッホ、いい男』

「いや、それ自分が言いたかっただけじゃん！」

『胸の大きさが戦力の決定的な差であるということを教えてやりなよ・・・それよりもお前、男だってわかればなかなかいい男だな・・・どうだ今度時間があったら一緒に――――』

――――ボギャ！

いい男が台詞を言い終わる前にヒナギクの死の一閃が男に炸裂した。

『アッーーーーー！！』

男は謎の奇声を上げながらはるか彼方へ飛んで行った。

「うわー！　どこへ行くんですか謎の人ォォォ！！」

「勝負の最中、何ごちゃごちゃと話をしているのかしら・・・？」

正宗を払うと、ヒナギクはその距離を縮めてくる。

「だいたい誕生日の約束をしたのは綾崎くんの方じゃない！！」

（アレ？　なんだろうこの感じ・・・？）

ふと正宗を握っている手にいつもより力が入るのが感じた。　しかし、同時に体の奥でもやもやとしていたものがうずいてくる。

「ここ数日、私がどんな気持ちでいたのかも知らないで！！」

（あれ？）

「すみませんすみません！　ですが、ホントに色々とあって・・・！！」

「色々とあったからって・・・なんで・・・私との約束は・・・！！」

（ちょっと・・・何を口走っているの私？）

何故だろうか。　その疼きを静めるかのごとく、自分の口からは思っていたことがどんどんと湯水のように溢れてくる。

「そりゃ女の子らしくもないし、可愛くもないのかもしれないけれど・・・！！」

（感情のコントロールが・・・効かない！！）

ため込んでいたすべてが吐き出されていくように、それを止める術は自身であるヒナギクも知らなかった。

「ただ謝っていれば済むと思ってる！！」

気づけば正宗を振り上げ、ハヤテの脳天目がけて振り下ろしていた。

「すみません！ホントすみません・・・・って、アレ？」

と痛恨の一撃がやってこないのに気付いたハヤテはヒナギクを見ると、ヒナギクは泣いていた。

そして一瞬だけぐずるとハヤテの胸にヒナギクが倒れこむように顔を押し当てる。

「一年で・・・一年で一番大事な日なんだから・・・それくらい・・・覚えておきなさいよバカァ・・・」

―――カラン。

と力をなくした手から正宗が落ちる。　そのまま姿を消してしまった。　ひたすらハヤテの胸の中でなくヒナギクに対してハヤテは。

「すみません・・・ほんとにすみません・・・」

ただ謝ることしかできなかった。

○

一方その頃・・・。

「カバディカバディカバディ」

『やーやーやー』

なんと時計塔の雰囲気をぶち壊すかのようにマジでカバディを繰り広げていた。

『もうお前らマジでカバディ繰り広げるな』

「カバディカバディカバディ・・・・」

『やーやーやーやー』

『ダメだこりゃ、このちびっこ・・・もしかしてアホの子か？』

「・・・・」

黒羽と共にその光景を見つめるボムはもうどうにでもなれという感じでため息をついた。

第７２話～執事と生徒会長と小さな人形～（後書き）

どうやらあの人形さんはあんな感じの性格でした。　破天荒？　もしくは純粋無垢？スイマセン、自分で考えておいてどんな感じなのか分かりません。

色んな意味で展開に裏切られた人たちもいるかもしれません。

そして急ですが・・・次回でひな祭り編、ラストです。

第７３話～意外と近くにそれはある～（前書き）

どうも。　ヒナ祭り編、最後です！

第７３話～意外と近くにそれはある～

前回のアナコン！前回のお話で起こった３つの出来事ッ！

一つ、黒羽から小さな人形が生まれる！

二つ、テルは闘いをそっちのけで人形とカバディを始める！

三つ、ハヤテとヒナギクの争いは意外な結果に。　泣き崩れるヒナギクにハヤテは・・・・。

第７３話～意外と近くにそれはある～

「はい。紅茶が入りましたよヒナギクさん」

静まり返った生徒会室、ソファに座ったヒナギクの前のテーブルに紅茶の入ったティーカップが置かれる。

「・・・・・」

「あ。　お腹とか空いてます？　材料も軽くあるみたいですし何か作りますよ？」

無言のままのヒナギクに対して、ハヤテはにこやかに作業を進めていく。　ヒナギク本人にその言葉に返答する余裕がないとは知らず

に。

そんなヒナギクはハヤテに見えない所で顔を赤くしていた。

（ふ・・・不覚だわ！一生の不覚ッッ）

ヒナギクが心の中で思うのはつい先ほどの喧騒の中で、敵のハヤテの目の前で泣き崩れたのだ。

（あんな事、私としたことが・・・・あんなことを――――！！）

常に勝ち続けて上に立ってきたヒナギクが戦いの中で泣き崩れて戦意喪失・・・それ相応の屈辱だろう。

「いやぁ、怒られておいて言うのも何なんですけど・・・ヒナギクさんにもああいう、乙女チックな一面があったんですね～」

（いっそ私を殺して・・・・）

テーブルに突っ伏して拳を震わせるヒナギク。　ライフがゼロの状態でさらにダイレクトアタックを食らった気分だ。

（だ、ダメよ！　このままでは負けっぱなしだわ！　何に負けてしまうのか分からないけど、とにかくこのまま負けてはいけないのよ！）

もはやここまで来ると負けず嫌いも通り越してしまっている気がする。

「で！？　プレゼントは！？プレゼント！？素敵なプレゼントとやらをくれるんでしょ！？」

と口調を強めながら飛び出た言葉はもはや逆切れ気味だ。

「へ？」

ハヤテは質問もそうだが、ヒナギクがなぜ切れているのか分からなかった。

ヒナギクはさらに勢いをつけてナギから渡されたプレゼントを見せた。

「ちなみにあなたのお嬢さまは・・・この・・・！！」

「・・・・この？」

「・・・・えっと、なんだっけ・・ブ、ブル・・・」

と時計の名前を言おうとしたが、それらの知識に疎いことが災いしたかそこで言葉が詰まってしまった。

「なんか読めないけど可愛い時計をプレゼントしてくれたわ！！果たしてこれに勝つことができるのかしら綾崎くん！？」

一体何の勝負なのか、その意味が分からないままのハヤテであった。

「まぁどんなルールなのか分かりませんけど・・・」

そしてハヤテがポケットを探り出す。

「むっ！　くる気ね！！」

とヒナギクが何故か戦闘体制をとる。　はてはて、一体何が飛び出てくるのか期待しているのか。　きっとナイフ、ワルサー、ロケランとかが飛び出てくると予想しているのか。

「はい♪　どうぞ」

「え・・？」

と差し出されたのは重火器とかでもない、小さなかわいらしい袋だった。

「これ・・・は？」

「クッキーですよ。　手作りです。　ケーキは他の人がもっと豪華なものを用意すると思ったので。あえて裏を狙った感じで・・・って、あのぅヒナギクさん？」

「へ？あ・・・なに？」

ハヤテが説明を中断したのはもらった後のヒナギクの反応だった。
　クッキーを見て、何故か少しだけさびしそうな雰囲気が見て取れたからだ。

頬をかきながらハヤテが聞く。

「ルールはよくわかりませんが、これはもしかして負けでしょうか・

・・・？」

「い・・・いや、そんなことないわありがとう。　ありがとう！！」と慌てて返事するヒナギク。　そしてすぐに視線をクッキーへと戻した。

「ただ・・・ちょっと思い出しただけで・・・」

その表情からはあまり思い出したくないことを思い出したかのような表情。　ハヤテは気まずくなったか話題を振った。

「ちなみに僕の家はバカみたいにビンボーだったから・・・ケーキの代わりにクッキーのひとかけらという絶望感漂う誕生日もありました」

ヒナギクの脳内では暗い部屋でろうそく一本の光でクッキーを前にしてしくしく泣いているハヤテの姿が浮かんだ。

「これはなかなか悲惨な絵面ね」

とヒナギクがそれを聞いて、またしても表情を曇らせた。　視線はやはりあのクッキー。

「でも・・・わたしもあったわ」

「え？」

「ケーキの代わりにクッキーひとかけら。　プレゼントはちっちゃなヘアピン一つなんて誕生日が・・・」

その話を聞いて、ハヤテは思ってしまった。　白皇の生徒はみなお金持ちの生徒だ。　ハヤテはいつしかヒナギクの家に行ったときも一般人が住むには立派な家だったのでその部類ではないかと思っていたからだ。

「い・・・意外ですね。　あんなお金持ちなのに・・・」

「ええ。　だって・・・あの親は」

（私・・・どうしてこんな話を・・・）

別に今はさっきの喧騒のような感情の高ぶりがあるわけではない。　なのにこの話をしてしまうのは一体なぜだろうか。　その謎をヒナギクは分からなかった。

そしてヒナギクから放たれた一言。

「私の・・・本当の親ではないから…」

「・・・・・・え？」

ハヤテはその言葉を聞いた瞬間、何を言っているのか分からなかった。　しかし、やがてその意味を理解する。　それだけにヒナギクが言った言葉がある意味信じられなかった。

「私の本当の両親はね、私の六歳の誕生日前に、８千万の借金を子供に押し付けて居なくなってしまったの」

またしても、ここで話し出してしまう自分がいる。　どうしてか、

思い出したくはない記憶なのに。

「まぁお姉ちゃんがあの性格で借金はどうにかしたんだけど。　そのあと引き取ってくれたのが今の桂家の人たち。　私のお義父さんはお姉ちゃんの小学校の先生。　今、先生はやっていないけど・・・ずっとお姉ちゃんの事きにしてくれていてね・・・」

――――何か・・・理由が理由があるんじゃないかって思わなかった？

（あ・・・それであの時）

あの放課後のとき。ハヤテはヒナギクが自身に聞いてきた質問の意味がようやく分かった。

「一緒に連れて行ってもらえなかったのは・・・何か仕方ない理由が・・・」

その時に幼かったヒナギクを連れて行かなかったのは、もしかしたら巻き込みたくなかったのかもしれない。　ヒナギクは感が続けていた。　数年間、自分の親が置いていったのには理由があったのではないかと。

「・・・あの、ヒナギクさんは今のお母さんの事・・・」

この意外なヒナギクの真実に、ハヤテは質問を投げかける。　ヒナギクはすぐ反応した。

「好きよ！大好き！　大好き・・・だけど・・・」

声の力強さからしても、表情から伝わる必死さは本当の思いだ。

しかし、すぐに言葉に詰まってしまう。

「・・・本当のお母さんのことも・・・大好きだったから・・・」

自分を置いていった親の想い出は忘れがたい。　しかし、今自分を支えてくれている義理の母もまたかけがえのない存在だ。　どっちが好きかと聞かれたとき、選ぶことはヒナギクにはできないだろう。

（私も・・・一体どうしてこんなに話し出してしまっているんだろう。　どうあがいたって時間が戻る若じゃないのに・・・解決するわけがないのに・・バカだ）

一人でヒナギクはここまで秘密を喋った自分を責めていた。

「・・・世の中にはいろんな人がいるんですね、ヒナギクさん」

「え？」

ヒナギクも突如のヒナギクの言葉に戸惑う。　ハヤテはそのまま続ける。

「僕は自分の親がどんな理由があったとしても一生許せないことには変わりません。　でも自分の事も分からず、自分の親が何処に居るのか、その親がどんな人だったのか、分からない人だっています」

「・・・それって」

「でも・・・」

とヒナギクの言葉をハヤテが止めた。

「僕もヒナギクさんも、自分の親に対する想いは異なるかもしれませんが、覚えているんですよ。　それは忘れてはいけないと思います。　過ごした時間、そこから生まれた思いは尚更・・・」

「・・・・・」

と、ここでハヤテがゆっくりとカーテンを開き窓を大きく開いた。
同時に夜風が中へと入ってくる。

「あの・・・ちょっとこっちに来てもらえます？」

「へ？」

そっとその先へと誘うように優しくハヤテはヒナギクの手を取る。

「え！？　ちょっと！！ダメよ！！　テラスは！　私・・・！！」

この人は自分の高所恐怖症を知らないのか。　当然のようにヒナギクは抵抗した。

「はは。　大丈夫ですから」

何が。　と言いたくなるがヒナギクは目をつぶりながらも少しづつテラスの方へと歩んでいく。

「ダメよ！！　知ってるでしょ！？　私が高いところ苦手なこと！

！」

「僕がしっかりつかんでいますから。　目を開けてみてください」

そんなに怖がる自分の姿が見たいのかと、怒りを抱くヒナギクだったが。　勇気を出して、そのハヤテの言葉を信じてゆっくりと瞳を開いた。

「・・・・すごい」

そこに広がる景色。　都会を照らす東京のネオン。　それだけでもこれほどもない絶景だというのに、空には宝石をちりばめたような星が輝く。

それは目に映る景色がプラネタリウムのようだった。

「この風景は初めて会ったとき、ヒナギクさんが僕に見せてくれたものです」

勿論覚えている。　あの時は弁当を巡っていろいろと大変だった。

「理由はあったかもしれませんし、無かったのかもしれません」

空を見上げるハヤテは少し視線を上へと移した。空には数えきれないほどの星。

「人から見ればずいぶん不幸に見えるかもしれませんし、心に深い傷もあるのかもしれません」

（どうしてだろう・・・私、高いところに居るのに、全然怖くない・

・なんでだろう）

彼が支えてくれているからか？　話を聞いてくれたからか？

「でも・・・今いる場所は（ここ）は・・・それほど悪くはないでしょう？」

「・・・・」

（あ・・・今、ようやく分かった・・・）

どうしてこんな簡単なことに気付かなかったのか。

（私・・・この人の事がスキなんだ）

親の事を話をしたのは単なる気まぐれとかではない。

ただ単に怖いところが克服されたからではない。

全ては自分の隣にいるだけで安心する人がいるから。

好きな人がいるから。

（スキになると・・・居なくなってしまう気がする。　そんな思いが何処か怖くて・・・）

その見えもしない恐怖から自分は目をそらしていたことに気付いた。

「私・・・バカだな・・・」

「へ？」

「この景色と同じ。　側にあったのに・・・怖くて見れなかったなんて・・・」

自分が求めていた素晴らしい景色は。　こんなに近くに。その手を伸ばせばすぐにでも手に入る距離にあったのだ。

「今も・・・怖いですか？」

とハヤテも落ち着いた物腰で、優しい口調で聞く。　ヒナギクは少しだけ下を向いてハヤテを見ると微笑を浮かべながら答えた。

「怖いわ。　でも・・・悪くない気分よ」

夜の風と共に・・・ヒナ祭り編も終わりを告げ・・・・・・・・・・ない。

○

一方、ハヤテ達がテラスへと顔を出したその下ではもう一つの祭りがおこなわれていた。　ごく小規模だが。

「よっしゃ勝ったァァーーー！！！」

『やーーーーーー！！』

とここで主人公、テル、大きく両手を突き上げてジャンプ。　チビハネは頭を抱えながら地面を叫びながら転がっていた。

「ついに・・・俺は・・・勝ったんだ」

荒い息を吐きながら、テルはその熱い戦いを振り返る。　なんでこいつらカバディしてんの？　と思った方々は前回を読んでね。

『ようやく終わったか・・・』

「おうボム。　ああそうだ。俺は勝ったんだ、あの長い戦いから、俺がこの戦いで得たものは大きい。　これから先の人生で大いに役立つことだろう・・・」

と小さな棒ファミコンゲームの爆弾の形をした物体、ボムにテルは親指を立てる。　それを見てか、ボムはため息を小さくついた。

『おーい小僧、オメェさんがカバディやっている間にタイムリミットはもう迫ってきてるぜぇい』

「・・・・え？」

『いや、え？じゃねぇよ。　冗談でもないし嘘でもない』

「いや、ちょっと待てよ。　え？　それって俺の命があと数分くらいの灯ってことか？」

『正確にはあと2分だ』

「いやあああああああああああああああああああ！！」

頭を抱えてテルは空へと向けて叫んだ。　いや、明らかに自業自得だろ。

「なんてこったッッ　俺はどうしようもない、救いようのない男だッッ！　簡単な・・・簡単なレースだったのにッッ！！」

チクショウが！！　と思いっきり地面を叩きつける。　しかしその過程はあまりにも馬鹿らしい。

『悔ぅしいぃだろうぅぅぅ・・・お前は俺の為の花火となるんだよぅ・・・』

フッフッフ・・・という笑いがテルをイラつかせた。　だがここで熱くなっても仕方ない。　もてる限りの知力を生かしてこの危機を脱することに努めた。

「さて、ここで読者に問題だ。　この絶望的な状況でどうやって呪いを解くか？」

最後のくらい自分でやれと言いたくなるが、ここで皆さんに三つの選択肢。　ぜひこの中から当てていただきたい。

答え？ハンサムなテル君は突如解呪の方法を咄嗟に思いつく。

答え？伊澄が来てくれて助けてくれる。

答え？解呪できない。　現実は非情である。

「俺がマルをつけたいのは？だが期待はできねェ。　あの伊澄が、俺がこんな状態になっているなんて気づいている訳がないからだ。
　まず白皇たどり着けない。」

ちなみに？はもはや説明しなくていいのではないか。　上の奴らもいまからこっちに来るのに間に合う訳がない。

つまり・・・・

「答え――――？、現実は非情である・・・あばよみんな」

『やー』

『ん？なんだァまだいたのかこのクソガキィ。　マスコットの座はぜってぇい渡さねぇって・・・ん、あるぅえ？』

キィキィ・・・。

とボムの背中で何か金属が鳴る音。　一定のリズムで発生するその音はボムの背中のネジだった。

チビハネがまるで珍しいものを見たような笑顔でボムのネジを回していく。

「こ、このクソガキィィィィ！！　俺のネジになにしやがる！！
ちょ、マジでやめて！　それやられたらオイラ・・・・・」

『やー！』

――――カチッ。

ついにネジは回るのを止め、何かの合図のように歯車がかみ合った音がした。

「・・・・？」

数秒経たつと、ボムの体に変化が起き始めた。　小さな黒い体がプルプルと震え、下の部分からは煙が噴き出してきた。

「お、オイ！　いったい何が起きてんだ！？」

『このクソガキィ！　俺の唯一の解呪方法を何故知ってやがったァァァ！！』

テルが声を言う前にボムの体はゆっくりと上昇していく。　まるでロケットがゆっくりと上がっているようだ。

『やー！』

下を向いたボムは手を振りながら笑顔ではしゃいでいるチビハネを見ていた。

『やー！　じゃねぇんだよ！　テメェ末代ま呪ってやーーーうおおおおおおおおお！』

ボムが怒鳴る前に吹き出ていた煙の量がさらに多くなり、物凄い勢いでボムは上昇していった。

テルが下からボムを眺めていくとだいたい時計塔の上を越えたあたりで。

『ぶるあああああああああああああああ！！！』

ボムの叫び声が響きわたる。　そして次の瞬間。

どっぱーん。

夜空に満点の光の花が咲いた。

しかも一度ではなく、数十回ほど弾けて多種多様な広がり方と美しい色合いだ。

「そういえばアイツ花火師だったんだっけ・・・・無茶しやがって」

美しく咲き誇る花火を見ながらフッと小さくテルは笑った。　彼はこれで成仏されたらしい。

そして時計塔の上を見ると光に照らされてハヤテとヒナギクの姿が

見えた。　二人とも突然の花火をみて楽しそうに見入っているようだ。

「あー、そういえばアイツのプレゼント買ってなかったわ。　ま、これでいいだろ」

「・・・・・」

と皆さんここで思い出していただきたい。
背後霊とも呼ぶべき存在がいるということを。テルとチビハネがカバディを始めてからずっと無口を貫き通してきた黒羽だ。

「んだよ。　またやろうってのか」

とテルがやるせなさそうに言うと、黒羽は花火を見ながらワイワイと騒いでいるチビハネを両手ですくい上げた。

「今日はここまで」

『やー！』

とチビハネがテルに向けて指をさす。　黒羽はゆっくりと踵を返すとそのまま姿を消していった。
取り敢えず今日は帰ってくれたということなのだろうか。

「ん～。　全然ワケわかんねぇんだがいいのか？・・・っと」

とテルの足がふらつく。　そのまま地面へと座り込んでしまった。

「はぁ～疲れた。　尋常じゃねェなこの札」

テルはため息をつきながら鉄パイプに張られていた札を一枚はがしていく。　実はこの札、都合よく貼った物体を強力な武器に変えるだけではない。

当然その武器を扱う人もものすごい霊圧にあてられるのだ。しかしその反動はすさまじく、テルでもこれだけ疲弊してしまう。　霊感もなく、特に特別な力もないテルが黒羽に対抗するにはもはやこれしかなかったらしい。

簡単に言えばドーピングを使っていると言うことだ。　副作用は体にかかる負担。

ちなみに一枚にかかる負担はだいたい一般人がフルマラソンをしたくらいの疲れ位で済むと伊澄は言っている。

「ま、なんとかなるって・・・さて帰りますか」

と少しばかり重い足取りながらもテルは帰路についたのだった。

○

――――翌日。

「で？　結局ヒナギクにプレゼントは渡したのか？」

「はは、でもクッキーですよ？」

ナギと昨日の話をしながらハヤテ達は登校していた。　そのハヤテの隣には寝ぼけ顔のテルがいる。

「はぁ～こっちはまだ昨日の疲れが残ってるっていうのによぉ、翌日授業ってもう死ねって言ってるもんじゃねェか」

大きく欠伸をするテルは夜中に帰ったのはいいが体の傷や改造鉄パイプの疲労がまだ残っているようだ。

「いやぁでも何事もなくて良かったですよ。　それにしても昨日凄い花火があがったんですよ、物凄い綺麗で・・・一体誰がやったんでしょうね？」

「さぁな」

空を見上げて散っていったボムの姿を浮かべる。　よく雲を見ると、その雲は偶然ボムの形をしていた。

「アイツ・・・無茶しやがって」

「え？」

「いや、なんでもない」

「おっはよっ！！」

と感慨にふけっているテルをよそにハヤテは後ろの女子に背中を叩

かれていた。　笑顔のヒナギクであった。

「ヒ、ヒナギクさん・・・」

「相変わらず朝からさえない顔しているわね～」

「ほっとけ」

とテルがダルそうに返した。

「朝からそんな景気のない顔していたら、いいことないわよハヤテくん・・・じゃ、またね！」

「アイツ俺は無視かよ」

「ああそう言えば・・・」

と一応不幸枠のテルが少しだけ表情を曇らせていた時ピタリとヒナギクが止まった。

「テル君・・・あの手紙の事なんだけど・・・」

「手紙・・・？」

ハッ！　テルは思い出す。　ヒナギクに送ってしまったあの恐ろしい内容の手紙を。

思い出した瞬間、テルの体からは尋常じゃないほどの汗が流れてきた。

「いやぁもうほんと大変だったんですよ。　ちょっと乱闘沙汰になってその誤解を解くのにビックリしました」

ハヤテがあははと笑いながら言うが、対してテルはとんでもない状況に陥っていた。

「お前・・・まさか全部・・・」

「はい、喋ったらスッキリしたように機嫌がよくなりました」

こ、コイツ・・・やりやがった。

「手紙の事を思い出したらなんかすごいイラついてしてきちゃったダメだな私」

「いや、イラついてるとかの次元じゃねェよそれ！　なんで笑顔なんだよ！　その笑顔逆にコエーよ！　それになんでいつの間に正宗だしてるの？　何に使うのソレ？　芝刈りにでも使うんだろ？なぁ会長！！」

「だからここで・・・その場に直れェェェッッ！！！！」

「ギャアアア

「峰打ちで済ませるから止まって！」

「止まれるかァァァ！！突きばっかしてきてるのに峰打ちとか関係あるのかよォォ！！」

そんな死にもの狂いの逃走劇をナギとハヤテは何も見なかったというようにその場をそそくさに去っていく。

今日も白皇学院は平和です。

――――後日。

「何してるのヒナ。　テラス付近で体を震わせて・・・・」

「美希・・・いや、治ったんじゃないのかと思って・・・・」

結局、いまだに高いところは苦手である。

ヒナ祭り編・・・・・完ッ！！！

第７３話～意外と近くにそれはある～（後書き）

――――後日談。

木原「おお、ようやく帰って来たのかよ黒羽」

黒羽「・・・・」

木原「残念なことにターゲットは見事逃したという訳だ。　ま、気にするなって。　ちなみに俺は頑張って探していたぞ。　決して眠ったりはしていなかったからな」

黒羽「そう」

木原「なんだよ。　その取り敢えずみたいなコメントは・・・ん？」

チビハネ『やー！』

木原「うおっ！　何ぞこれ！　うわちっさ！　小さい黒羽だ！　小っちゃい黒羽だ！」

黒羽「・・・・」

木原「オイオイどうすんのコレ。　言っとくけどな、ウチはペットは飼えないって――――」

チビハネ『ガウゥッ』

木原「アッ――――！　コイツ耳噛みやがったァ――――！」

黒羽「また次回」

木原「珍しく締めやがった！　でもそれどころじゃない！おいコラ離せェェェェ！！」

○

終わってしまいましたヒナ祭り編・・・。　やっぱり最終的に駆け足状態になってしまいましたかなと思います。　結局、あのハヤテとヒナギクの所はそのままやっちまいました。そのせいで少し残念になってしまった方々もいるかもしれません。　アレないとこれからの話作れないのです。

結局のところ、黒羽さんたちの目的は分からずじまい。　でもあと少しで分かると思います。　今回の戦闘とかお話で質問があったら感想の方にどうぞ。

ちなみにあのチビハネ、これからも普通に出ます。　ハイ、小さいものだからこそできることがあるということを見せてやりますよ。

取り敢えずこの話が終わったら全然かけなかったギャグの短編を少しやりたいと思います。　まぁ内容も原作の方を少し変えたりと・・・それにここから唯子さんとかバカ王子とか某ロシア人が他のサブキャラがストーリーに加わったりとさらに内容が濃くなって来たり・・・処理できるのかオレ。

とまぁ色々と不安要素もあったりしますが、頑張っていきたいと思います。

それでは次回のお話も、お楽しみにィ！

ボム『ネクストエピソードヒッィィィィントゥ！！』

キーワード：お見合い

第７４話～男も女も色々とあるんです～（前書き）

どうもバロックスです。　さぁ短編の連続・・・という予定をちゃんと実行していこうと思います。

バロックス「ここからはいろんな人たちが出てくるよ。　オリキャラ陣も頑張ってアピールしなきゃね」

木原「なぁ、結局なところはアンタの技量がモノを言うわけだ。ここでしっかり俺たちの出番を増やしてアピールするのはアンタなんだから・・・つーか言っていい？」

木原「お前、俺より黒羽を押してない？」

バロックス「なんで？」

木原「祭り編の時、黒羽だけに戦闘やらせて俺は寝落ちしてたなんて・・・どういうこと？」

黒羽「・・・・」

バロックス「だってお前が戦闘すると必ずバ〇描写になるから」

木原「知るかそんなもん！」

チビハネ「やー！」

バロックス「ダイジョブダイジョブ。　ちゃんと出番とか取ってる

からさ・・・・多分」

木原「多分ってなんだよ！　曖昧すぎるんじゃねぇか！？」

チビハネ「やー！」

バロックス「んじゃ、馬鹿ども放っておいて・・・」

黒羽「開始」

木原「うわ！　急にしゃべったと思ったら開幕取られた！」

第７４話～男も女も色々とあるんです～

時間は朝の８時。　三千院家で物語は始まる。

「お見合いすると・・・絶対に結婚するのかな！？」

「・・・・どうしたんだ一体？」

ワタルがナギに慌てた表情で問いかける。　ソファにて向かい合っている二人は片方は焦り、片方は目を細めていた。

「いや・・・その・・・」

そう呟くワタルはとても思いつめた表情である。そして一言言い放った。

「サキが明日お見合いするって・・・」

第７４話～男も女も色々とあるんです～

時は遡り２日前。　これはワタルが知らない出来事。

一軒の飲み屋で起きた話だった。

「「「かんぱーい！！」」」

と日ごろの疲れ、ストレスを忘れさせるような意気揚々とした声と共にグラスがカチンと音を立てた。

「で？　どーなのよサキ？」

「そーそーどーなのよ最近さぁ・・・」

と二人の女性に詰め寄られる人物。　まぎれもなくサキだ。　おそらく3人は同級生か女友達かそのどれかだろうか。

そして話は戻り、質問されたサキは目を細めながらビールをテーブルに置く。

「どうなのって・・・秋子さんに静子さん、それはこっちの台詞ですよ。　お二人とも就職はどうしたんですか？」

「な、ニートが犯罪者とでもいう気！？」

「私たちは自分探しの旅をしているの！！」

と見事的を射ぬかれたように二人はサキに反論した。　どうやら二人は職が無いらしい。

「そんないつも親に言われているようなことなんてどうでもいいのよ！！」

「女が集まって『最近どーよ？』って言ったらさぁ・・・」

静子が意味ありげにニヤニヤしながら言った。
「男の話に決まってるでしょ？」
「は？」
「どうなの、彼氏。　いるの？いなの？」
疑問を浮かべたサキ。　いわゆる一つのガールズトークである。
まさしくそう言った類のお話。
「何をそんな・・・彼氏なんていりません。　だいたい仕事が忙しくてそれどころでは・・・」
「ずいぶん生活くさいセリフねェ・・・」
と二人は少しばかり興ざめしたかのような視線を送る。
「まったく・・・そんなんじゃイイ男に相手にされないわよサキ。
アンタ十分眼鏡でメイドっていう属性があるんだからいい線イケるって」
「静子さん、属性とかは関係ないですよ。　それにご心配なく。
イイ男には十分相手にされてるはずですから」
「「ほぅ・・・」」
ビールを片手に放った先の一言。　それに食らいつかない大人の女ではない。
気づけば二人とも物珍しいものを見つけた猫のような目になってい

た。

「え！？　なになに！？　その発言！！　やっぱ彼氏いるの！？」

「詳しく聞かせてー！　言わなきゃアンタには吐くまで付き合ってやるわよ！！」

「い！！　いや、それはその・・・！！」

これにはしまったとしか言いようがないサキであった。　その後、何とか理由やらを並べてその話題を切り抜けることには成功したものの・・・・

（しまった・・・こんな遅くなるとは・・・この時間では中野坂上に帰る電車が・・・）

店を出て帰ろうとした時には既に終電を迎えていた。　とても間に合いそうにない。　もはや日をもまたいでいるという状態だった。

（仕方ありません。若に心配化かけないように電話して・・・今日は実家に泊まりましょう・・）

とポケットから携帯を取り出して、ワタルへと電話をかける。　そしてそのことをワタルへと伝えた先だったが。

『あっそ。帰ってこないんだ』

と、何とも温かみもない返事であった。

（・・・・・）

「あの・・・なんか嬉しそうですね」

『別に？　夜遊びしても怒られねーとか思ってねーよ？』

ワタルの言葉からは少なからずとも心配と言う感情はあまり感じられなかった。　今日中に帰ってこないサキをいいことに、電話の向こうで笑っているワタルの姿が容易に浮かぶ。

まぁ男なんてそんなもんですよ。

「まぁとにかく心配かけてすみません」

『は！？　心配なんてしてねーよ？』

と帰ってきた返事はなんとも冷たい。

あまりにも露骨・・・というか、もう少し言い方というものが無いのだろうか。

「いや、でも・・・女の人がお酒を飲んで・・・あ・・・朝帰りというのは・・・」

『ん？　ああ・・・そうだな・・・』

少しでも心配させてやろうという気にさせるために先が言った一言はワタルを少しだけ考えさせた。　やったと思ったサキであったが。

『今日は静かに寝れそうだよ。　じゃ！！』

ブツッ！！ツーツー・・・・。

（・・・・）

鳴り響いている電話の電子音がむなしく感じた。

これはいつもの憎まれ口と言う奴だろうか。　店の中ではよく聞いていた憎まれ口だが、電話と言うのはとても怖い。　相手の表情を見ながら行っている普段の会話と違って相手の表情を見ないで、相手の声だけで話を進めるというのはまた違ったイメージを生まれさせる。

「なんともだらしねぇ・・・」

「ほんとです。　なんだかサキさんが可哀相になってきました。こんな我儘な店主をもって・・・」

「お前ら・・・どっから湧いた」

場面は三千院家のナギの部屋になるが、いつの間にか部屋にはナギのほかにテルとハヤテが現れていた。

「だってお前、サキさんに朝帰りするって言われたときにその台詞はねェよ」

とテル。

「そうですね。　ただでさえ日ごろのストレスとかもあって疲れているのに・・・気遣いがなってませんよ」

とハヤテ。　それに対してワタルはむぐぅと唸るだけだった。

「ただ理由がその電話だけだとは限らねェな・・・」

とテルが考える。　その電話の内容がいかにひどいものだったか分かっていてもどうしていきなりお見合いと言う形になるのか、とてもお見合いに絡むような要素は見当たらない。

「なぁワタル・・・」

テルがワタルの肩を掴んだ。

「別の理由とかないのか？　俺にはほかにもお前がやらかしたとしか考えられねェンだけど・・・」

と言うテルにワタルはうーんと考える。すると思い出したかのように、あっ！と声を出した。

「実はこの前・・・・」

ワタルが語りだした内容はこうだ。

―――その翌日。

朝の電車を使って、サキは無事に実家からビデオ屋へと帰ってくる

ことができた。　店のドアから店内へと入るとワタルがＤＶＤの品出しを行っていた。

と、こちらに気づいたか、ワタルが作業を止めてこちらを見る。

「お？　なんだ。　もう戻って来たのかよ。　もう少しゆっくりしてればいいのに・・・」

そう言うや否や再び作業を開始するワタル。　サキは呆れたという表情で会話を続けた。

「いえ・・・和歌に心配かけるのも何なので・・・早目に戻ってきました」

「だから別に心配してねーって・・・」

昨日の会話を覚えているようにワタルはサキの言葉に答える。　これに少しムッとしたか、サキもここでウソを交えてみた。

「ちなみに一緒に飲んだ人の中には男の人も居て・・・」←ウソ

「知らねーよ、そんなの」

まるで興味なし。

「あと実家の母からお見合いを進められました！」

ここでサキは実家に戻った時に話の中で持ち出されたお見合いの話を出した。　これならワタルも少しは驚いてくれるだろうと思っていたのだが。

「は！！　そりゃよかったな！！」

プチッ。

サキの中で何かが切れた。　すぐさまポケットの中から携帯を取り出して短縮でダイヤルをかける。

「あ、お母さんですか？お見合いの話、最速で進めてください。ええ全力で」

「ん？」

とワタルが気づいた時には既に電話は切られていた。　話は既にまとまっていたようでポケットに携帯をもどすサキ。

「え？　おい・・・サキ？」

何故か話が凄い方向へと飛躍していることに気付いたワタルだが、もう遅い。　ここにきてワタルは初めて動揺した。

「一体どういう・・・」

とワタルが声を掛けようとした時に振り返った先は表情を少しだけ強張らせていた。

「と言うことで明日の金曜日明日の日曜日お見合いすることになりました！！　なのでお暇を貰います！！いいですね！！」

結局、ワタルはこの状態のサキに何も言い返すことができずサキは

準備やらなんやらでそそくさに帰っていった。

○

「「ソレだろうがァァァァァァァ！！！」」

「ぐふぅ！！」

理由が分かった途端、ナギとテルは仮面ライダーのようなとび蹴りをワタルへとお見舞いした。

「仮にも身内でもあるサキさんに対してお見合いの内容すらも全く興味なしと言う愚か丸出しの行為・・・・」

とどめとばかりにテルがワタルの顔を鷲掴み。　キリキリと音が鳴っていくのが分かる。

「ようぅし、お前はこれからサキさんの目の前で焼土下座だ」

「テルさん、鉄板の用意はできました！」

「ちょ、待て！　俺は真剣にサキの事を相談してんだよ！！」

「まぁ、サキさんがお見合いするというのは意外な話だが・・・結婚する意志があるからお見合いするんだろ？」

「・・・・」

ナギの一言に黙り込むワタル。　確かに、お見合いと言うのは結婚を前提に行われるものだ。　サキもそういうこと考えたってなんら可笑しくない年齢である。

「ずいぶんと自分勝手な不満が顔に出ているな・・・」

「べ、別に俺は・・・」

ワタルの表情を読み取ったかのようにナギが放った一言はワタルの考えを浮き彫りにした。

「ワタルよォ、お前はサキさんにどうしていて欲しんだよ。　悩んでるばかりじゃ男は示しがつかねぇぜ？」

「お、俺は・・・サキに・・・」

テルの言葉にも黙り込んでしまったワタル。　ナギもふむ。と考えて何か思いついたか、窓越しに見える外の風景を見つめながら言った。

「ま、そんな心理状態では試験勉強にならんから……しようがない。手伝ってやるか」

「え？　もしかして邪魔するなんて気じゃないでしょうね？」

とハヤテ。　ナギはふっと笑った。

「まさか。　そんな底辺じみたことはせんよ。　ただ相手は確認したっていいではないか」

「なるほど。　それがサキさんに見合う男なのかどうなのか・・・
それを知ってからでも遅くはないか」
テルも納得したかのように鷲掴みしていた手を離した。
「ていうか今ってテスト期間中だったんだ」
「おいバカテル、学校居られなくなっても知らないぞ」
○
「そんなわけでやってきました。　サキさんとそのお見合い相手が
居るとされているそのお見合い会場です！」
「フフフ・・・見事なペースだ。　小説ならではの高速移動だ！」
「コラコラ、根も葉もないこと言うんじゃない」
ハヤテとナギ、そしてテルが茂み隠れながらお見合いの場所となっ
たホテルの周辺を探索。　当然ワタルも付いてきました。
「ここがお見合い会場か・・・日本庭園じゃないのか」
「いつの時代の話だ。　近年では地域社会が崩壊しつつあるからな、
お見合いもわざわざ豪華な場所でやらなくても近くのファミレスと
かでやることも多いぞ」
ホントです。　ちなみに普通はホテルとか料亭である。

「知るかバカ！そんな事よりサキだ！」

ナギの解説なんて必要ないといったようにワタルは物凄い目でサキを探す。

真剣なのがよくわかる。

「へっ、なんだかんだ自分の女が他人に渡っちまうところなんて黙ってられねェよな」

とテル。　ワタルは顔を照れ隠しなのか、顔を下へと向けた。

「なっ！　お前、そういうのじゃねーよ！」

「ヘイヘイ、ツンデレ乙。　最悪サキさんを魔道に落としそうな輩だった場合、結婚式をブレイクしてもいいんだな？」

「ああ、許可する」

「みなさん、何しに来たんです？」

ハヤテが苦笑いを浮かべながら突っ込んだ。

「だって結婚って人生変わるようなもんだろ？　当然、旦那さんのおかげで性格一変しちまうかもしれないだろ？」

双眼鏡を構えているテルがそう呟くとワタルの中であるイメージが生まれた。

（もし結婚なんてしてサキの性格が変わったら・・・？）

～イメージ1～

旦那「おーいサキ、帰ったぞー！」

サキ「キャー！　ダーリンお帰りー！」

旦那「はは、サキは今日も可愛いなぁ」

サキ「もう！　ダーリンったら！」

ワタル「・・・おいサキ」

サキ「あ、若。　いたんですか？　スイマセン、ごはんは出前か台所にあるカップめんで！」

ワタル「ちょ、お前どこ行くんだよ！」

旦那「僕はこれからサキと一緒にお出かけさ！」

サキ「ちょっと遅くなるかもしれませんから」

旦那「ああ、もしかしたら朝とかに帰って来るかもね！」

サキ「ダーリンったら・・・もぅ！」

旦那「ＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨ！　さぁ行こうか！　僕たちの愛のミッドナイトだよ！」

ワタル「さ、サキィィィィィ！！」

サキ「大丈夫です。　朝帰りなんてなんも問題ないんですよね？」
ワタル「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」
と、本来生真面目で面倒見のいいサキがワタルを放置するという性格に。

――――――――――――――――

「――――ル・・ワタル！」

「ハッ！？」

妄想を浮かべていたワタルはナギの言葉で現実へと戻ってきた。
「どうしたんだ一体、１０年後からタイムリープしてきたみたいに呆けて」
「お嬢さま、今何年か知ってます？」
ハヤテがナギに突っ込むと同時に、ワタルがその場で立ち上がった。
なんだなんだと一同がワタルを見る。
「俺に非があるというのは分かった。　このお見合いもアイツがもし望んでいるなら・・・俺は」
拳を握りしめるワタル。　それを見てか隣であんぱんを食しながら

呟いた。

「ま、本人の意思もしっかりと尊重しなきゃな。　お、どうやら出てきたぜ・・・二人で散歩してるみてぇだ」

「相手は誰ですか？」

とハヤテが聞く。　テルも双眼鏡のピントを調節して更なる解析に臨んだ。

「えーっと待てよ・・・なんか細いな・・それでいて長身で・・・ん？」

ここでテルが何かに気付いたか、双眼鏡から顔を外した。

「どうした。　出来立てのカレーを床にぶちまけた顔をして・・・貸してみろ」

とナギに言われるとテルは何も言わず双眼鏡を渡した。　そしてナギも見るや、双眼鏡をハヤテに手渡した。

「どうしたんですか？」

ハヤテも続いて双眼鏡を覗き込む。　そして二人同様に黙り込んでしまった。

「なんだよ？　急に黙り込んで・・・おら貸せ」

半分強引に奪い双眼鏡を奪うとその中を覗き込んだ。

「・・・え？　ちょっと待って、アイツって・・・」

○

ワタル達の場所ではサキ達の声は聞こえないため、ここでサキ達の視点で行う。

「えーっと・・・今日は宜しくお願いします・・・えーっと」

私服のサキは目の前のその男に緊張しながらもあいさつした。

目の前の男は少しばかり細めの体格で、頭は珍しいことに白かった。しかも肌も白い。　つまり白人だ。

「あ、どうも。サキさん・・・今日は宜しくお願いします。　あと名前はバルトなんで・・・」

「あ、スイマセン！　まさか外人さんとお見合いすることになるなんて思いもしませんでしたから！」

「いえいえ、こちらこそ。　私も今回が初のお見合いと言うことになります・・・」

「じゃ、取り敢えず歩きますか・・・」

見事にお見合いと言う雰囲気に相応しい光景だ。　バルトとサキはぎくしゃくしながらも歩き出した。

これを見て観察団（ワタル達）は・・・。

「「「「「お前かよォォォォォォォォォォォォッッ！！！」」」」」

さてさて、このお見合い・・・一体どうなるか。

第７４話～男も女も色々とあるんです～（後書き）

ヒナギク「なんかとんでもないことになっちゃたわね・・・結婚かぁ」

雪路「アレ？　ヒナったらもう先のこと考えちゃってんの？」

ヒナギク「お、お姉ちゃん！？　ど、どうしてここに？」

雪路「ここは後書きの世界よ。　どんな諸事情もすっ飛ばしてここにくることはできるわ・・・」

ヒナギク「ってほんとは出番取られちゃっただけなんじゃないの？」

雪路「ちょ、痛いところ突かないでよ・・・それよりヒナってさっきの」

ヒナギク「お姉ちゃん、もう帰って仕事に戻ったほうがいいわよ？　どうせ仕事放り出してコッチに来たんでしょ？」

雪路「ヒナ・・・ッ！　なんて洞察力なのッ！？」

ヒナギク「たいていのことは分かるわよ」

雪路「まぁいいじゃない。　この小説で姉妹共演なんてなかなか無いわよ？」

ヒナギク「まぁそうだけど・・・」

雪路「この話が終わったら帰るわよいいでしょ？」

ヒナギク「まぁそれで戻ってちゃんと仕事すればね」

雪路「ヨッシャ！　じゃあ続き見なきゃいけないわね、では次回！」

そんな訳で続きます。　短編は大抵1～2話完結です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9255k/

ハヤテのごとく！ ～another combat butler～

2011年9月24日06時53分発行